

# 美沢川流域の遺跡群XIV

——新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書——

美 沢 3 遺 跡

美 々 3 遺 跡

美 々 8 遺 跡

平成 2 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

# 美沢川流域の遺跡群XIV

—— 新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

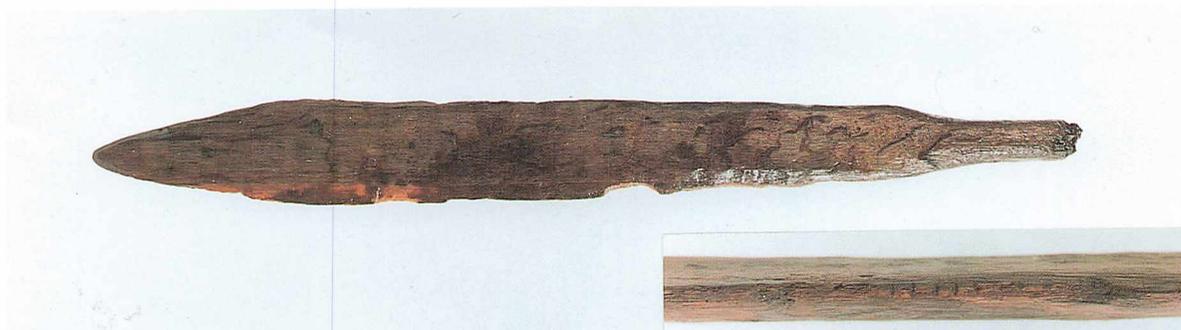
美 沢 3 遺 跡

美 々 3 遺 跡

美 々 8 遺 跡

平成 2 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



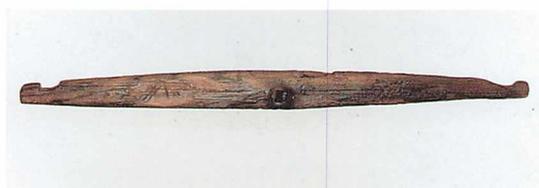
1 ヘラ (右下刻目部分拡大) 16



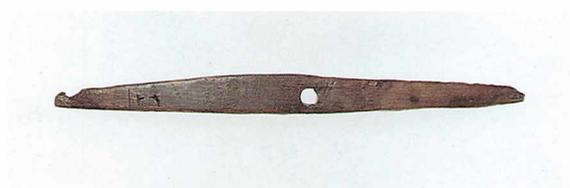
2 アイヌ文様彫刻 1



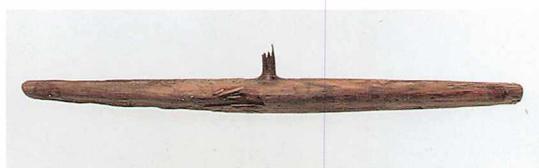
3 花矢状 (下彫刻部拡大) 3



4 權受部 (タカマ) 上から 8



7 權受部 (タカマ) 上から 7



5 同上 横から



8 同上 横から



6 同上 彫刻部拡大



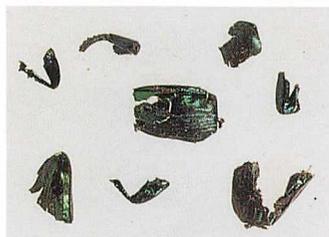
9 同上 彫刻部拡大



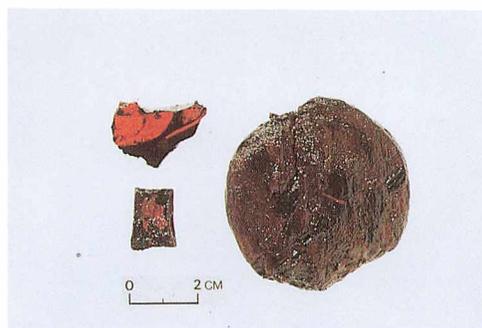
1 串状木製品出土状況 44



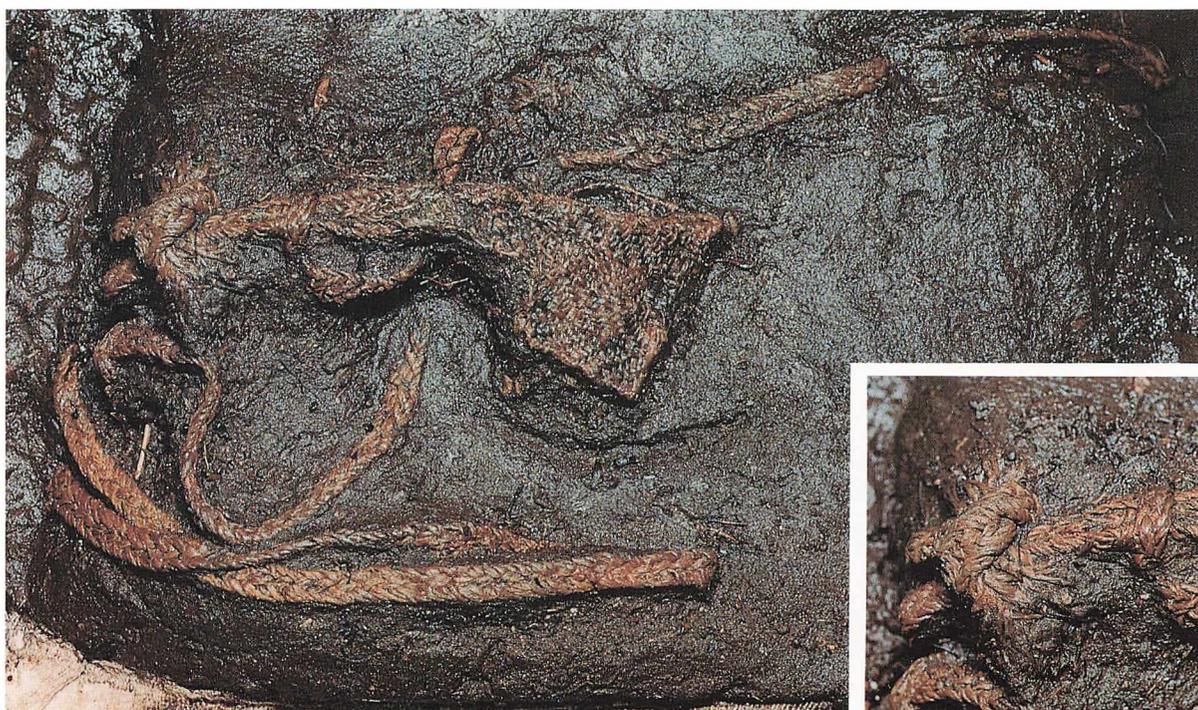
2 木葉出土状況



3 昆虫遺体



4 漆器 17・18・19



5 背負紐（タラ） 181

結束部拡大

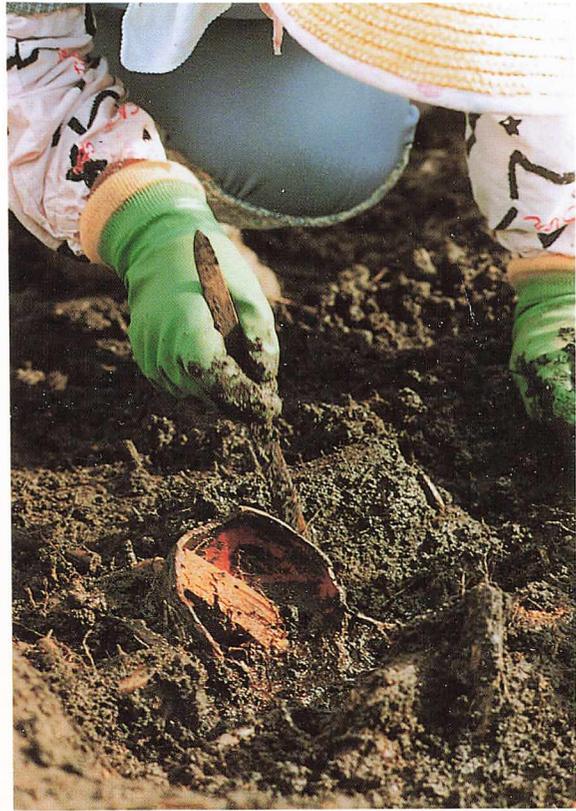
平成元年度 美々8遺跡低湿地部（試掘）の調査



1 調査風景



2 調査状況



3 漆塗椀出土状況

平成2年度 美々8遺跡低湿地部（試掘）の調査



1 遺物出土状況



2 彫刻のある榑軸受部 (タカマ)



3 彫刻のある飾板



4 ヒキリウス



5 榑 (左) と板綴舟側板 (右)



6 マレブ台と各種のヤス

平成2年度 美々8遺跡低湿地部 (試掘) の調査

## 例 言

1. 本書は、平成2年度に実施した新千歳空港建設用地内の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告である。
2. 調査は、財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施し、本書は調査を担当した調査部調査第2課が作成した。美沢3遺跡は田才雅彦、美々3遺跡は和泉田毅、美々8遺跡は田口尚が担当し、全体の編集は大沼忠春が担当した。また各遺構の事実記載については調査担当者がそれぞれ分担執筆した。なお、整理にあたっては、美沢3遺跡の土器は大沼忠春、石器は田才雅彦、美々3遺跡の土器は大沼忠春、工藤研治、中田裕香、石器は工藤研治（剥片石器）、鈴木信（礫石器）、美々8遺跡の土器、石器、木製品等は田口尚が担当した。石材鑑定は調査第3課の花岡正光が行った。遺構・遺物の写真撮影は伊藤正之が担当し、美々8遺跡の木製品等の写真撮影は菊地慈人が行った。
3. 放射性炭素による年代測定は、京都産業大学山田治氏、日本大学小元久仁夫氏に依頼した。
4. 樹種鑑定は、農林水産省森林総合研究所平川泰彦氏に依頼した。
5. 室内整理後の出土遺物、諸記録類は、北海道教育委員会が保管する。
6. 調査にあたっては、つぎの人びと、諸機関のご協力をいただいた。

文化庁、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター、福島県埋蔵文化財センター、北海道開拓記念館野村崇、平川善祥、小林幸雄、出利葉浩司、山田悟郎、矢野牧夫、右代啓視、三野紀夫、手塚薫、千歳市教育委員会大谷敏三、田村俊之、高橋理、豊田宏良、苫小牧市埋蔵文化財センター佐藤一夫、工藤肇、宮夫靖夫、渡辺俊一、兵藤千秋、恵庭市教育委員会上屋真一、松谷純一、札幌市教育委員会加藤邦雄、上野秀一、羽賀憲二、江別市教育委員会高橋正勝、直井孝一、園部真幸、稲垣和幸、石狩町教育委員会石橋孝夫、工藤義衛、小樽市教育委員会大島秀俊、余市町教育委員会宮宏明、函館市教育委員会田原良信、上ノ国町教育委員会松崎水穂、乙部町教育委員会森宏樹、江差町教育委員会藤島一己、松前町教育委員会久保泰、七飯町教育委員会石本省三、知内町教育委員会高橋豊彦、木古内町教育委員会鈴木正吾、今金町教育委員会寺崎康史、八雲町教育委員会三浦孝一、柴田信一、南茅部町教育委員会阿部千春、森町教育委員会藤田登、戸井町教育委員会古屋敷則雄、門別町教育委員会川内谷修、旭川市教育委員会斉藤傑、瀬川拓郎、富良野市教育委員会杉浦重信、斜黒町教育委員会金盛典夫、標津町教育委員会梶田光明、羅臼町教育委員会湧坂周一、小樽市立博物館石神敏、土屋周三、市立函館博物館千代肇、函館市北方民族資料館長谷部一弘、釧路市立博物館沢四郎、西幸隆、松田猛、石川朗、帯広市百年記念館北沢実、札幌医科大学百々幸雄、大島直行、札幌学院大学鶴丸俊明、北海道教育大学釧路分校高嶋幸男、北海道大学山本博、浦野慎一、北海道文化財研究所小柳リラコ、青森県埋蔵文化財センター三宅徹也、三浦圭介、成田滋彦、遠藤正夫、八戸市教育委員会工藤竹久、八戸市博物館大野享、岩手県立博物館赤沼英男、名久井文明、熊谷常正、佐藤嘉宏、東北大学須藤隆、東北福祉大学芹沢長介、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団中束耕志、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団新屋雅明、埼玉県行田市博物館塚田良道、(財)東京都埋蔵文化財センター上條朝宏、早稲田大学金子浩昌、国立歴史民俗博物館西本豊弘、筑波大学山田昌久、神奈川大学短期大学部網野善彦、滋賀県文化財保護協会大橋信弥、吉田秀則、滋賀県埋蔵文化財センター中川正人、元興寺文化財研究所伊藤健司、増澤文武、北野信彦、(財)大阪府埋蔵文化財協会光石鳴巳、同志社大学森浩一、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所岩本正二、福島政文、松山市埋蔵文化財センター西尾幸則、田城武志、横山英介、木村哲郎（順不同、敬称略）

## 記号等の説明

1. 遺構の表記は以下に示す記号を用い、原則として発掘調査順に番号を付した。  
H：住居跡および類似遺構 P：土壌（土壌墓を含む） F：焼土 T：Tピット S  
：集石 HP：住居跡に伴う小ピット HF：住居跡に伴う石組み炉、土器囲い炉および地床  
炉 SP：小ピット TP：美々8遺跡低湿地部のテストピット
2. 遺構図は、発掘区基線の北（西偏 $7^{\circ}22'38''$ ）を上にして示した。図版は原則として下記の縮尺である。例外については、その都度スケール・方位を示す。  
1/40：住居跡、土壌、Tピット、焼土 1/10：遺物出土状況図 1/4：土器実測図 1/3：  
土器拓影図 1/2：剥片石器、土製品、石製品 なお木製品の实測図は基本的に1/3、1/6であ  
るが、その他のものについてはスケールを付している。
3. レベルは標高（単位m）で示す。
4. 遺物分布図および遺構実測図の炭化物、焼土、各種の遺物とその出土状況については、その都度  
表示している。
5. 遺構の規模は、確認面での長軸長/床（壙底）面での長軸長×確認面での短軸長/床（壙底）面  
での短軸長×確認面からの最大深（単位m）の順で記した。なお一部破壊されているもの、不明のも  
のは、現在長を（ ）で示した。
6. 石器、石製品の大きさについては最大長、最大幅、最大厚の順で記す。
7. 遺構出土の遺物は、伴出遺物、混入遺物とも合わせて各遺構の項の中に記す。
8. 美々8遺跡出土の樹種名はすべて属名で記してある。
9. 砂岩質砥石の粒径区分についてはWentworth式で記す。
10. 土層名は、下記の略号も併用している。  
樽前 a 降下軽石層：Ta - a 層（a） 樽前 b 降下軽石層：Ta - b 層（b）  
有珠山 b<sub>1</sub> 火山灰：Us - b<sub>1</sub> 層 第Ⅰ黒色土層：Ⅰ黒層（Ⅰ黒またはⅠB）  
苫小牧火山灰：TM 樽前 c<sub>1</sub> 降下軽石層：Ta - c<sub>1</sub> 層（c<sub>1</sub>）  
樽前 c<sub>2</sub> 降下岩片層：Ta - c<sub>2</sub> 層（c<sub>2</sub>） 第Ⅱ黒色土層：Ⅱ黒層（Ⅱ黒またはⅡB）  
樽前 d<sub>1</sub> 降下岩片層：Ta - d<sub>1</sub> 層（d<sub>1</sub>） 樽前 d<sub>2</sub> 降下スコリア層：Ta - d<sub>2</sub> 層（d<sub>2</sub>）  
第Ⅲ黒色土層：Ⅲ黒層（Ⅲ黒またはⅢB） 恵庭 a ローム層：En - a ローム層（En - L）  
恵庭 a 降下軽石層：En - a 層（En - P） 支笏軽石流堆積物：Spft 層  
※火山灰の土層名・略号は、曾屋・佐藤（1980）、北海道火山灰命名委員会（1982）、横山ほか（1973）  
を引用し、（ ）内はそれをさらに簡略化したものである。
11. 土層の混在状態は、上記の略号を用いて下記のように表わす。  
A + B：A と B はほぼ同量にまじる。 A > B：A に B が少量まじる。  
A ≧ B：A に B が微量まじる。
12. 表においては、以下のような略号を用いているところがある。  
ノダⅡ～ノダuppⅡ式土器、煉瓦台～煉瓦台式土器、北筒～北筒式土器  
鐵片～石鐵片、槍片～石槍片、F～フレイク、RF～Rフレイク、UF～Uフレイク、F.C.～  
フレイク・チップ、斧未～石斧未製品、斧F～石斧フレイク、皿片～石皿片、たた～たたき石、  
た片～たたき石片、砥片～砥石片、台片～台石片、すり～すり石、凹片～くぼみ石片、

# 目 次

口絵	
例言	
(記号等の説明)	
I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査の経緯	1
4 調査結果の概要	4
5 遺物の記載について	7
II 美沢3遺跡第II黒色土層の調査	9
1 調査の概要	9
2 縄文時代早期の遺物包含層の調査	12
(1)土器	12
(2)石器等	18
3 縄文時代後期の遺構	33
4 縄文時代後・晩期の遺物包含層の調査	36
(1)土器	36
(2)石器	38
5 まとめ	40
III 美々3遺跡第II黒色土層の調査	43
1 調査の概要	43
2 縄文時代中期の遺構と遺物	47
(1)住居跡	47
(2)土壌	127
(3)焼土	136
(4)フレイク・チップ集中・集石・Tピット状遺構	143
3 縄文時代後期の遺構と遺物	149
(1)住居跡	149
(2)土壌	164
4 縄文時代晩期の遺構と遺物	166
(1)住居跡	166
(2)土壌	173
(3)焼土	182
(4)動物の足跡	188
5 時期不明の遺構と遺物	189
(1)土壌	189
(2)小ピット群	189

6	包含層出土の遺物	190
	(1)土器	190
	(2)石器等	232
7	まとめ	251
IV	美々3遺跡第I黒色土層の調査	256
1	調査の概要	256
2	遺構および遺構出土の遺物	257
	(1)土壌	257
	(2)一括遺物の出土状況	260
3	包含層出土の遺物	261
	(1)土器	261
	(2)石器	261
4	まとめ	264
V	美々8遺跡低湿地の調査(試掘)	266
1	調査の概要	266
	(1)調査要項	266
	(2)調査の経緯	269
	(3)調査の概要	270
	(4)調査の方法	271
2	土層の状態	275
3	出土遺物の概要	276
	(1)土器	276
	(2)石器・石製品等	276
	(3)金属製品	277
	(4)木製品・繊維製品等	282
	(5)自然遺物	285
	(6)木製遺物の樹種同定	308
	(7)遺物の保存処理	312
4	まとめ	315

## 挿 図 目 次

図Ⅰ－1 遺跡の位置 …………… 2	図Ⅲ－13 H－19 出土の土器(1) …………… 60
図Ⅰ－2 標準土層模式図 …………… 3	図Ⅲ－14 H－19 出土の土器(2) …………… 61
図Ⅰ－3 美沢川流域の遺跡群の位置と 発掘区の呼称 …………… 5	図Ⅲ－15 H－19 出土の石器(1) …………… 62
図Ⅰ－4 美沢川流域遺跡群の分布 …………… 6	図Ⅲ－16 H－19 出土の石器(2) …………… 63
図Ⅱ－1 Ⅱ黒層全体遺構位置図 …………… 10、11	図Ⅲ－17 H－5 実測図 …………… 65
図Ⅱ－2 Ⅱ黒層出土の土器分布 …………… 14	図Ⅲ－18 H－5 出土の土器 …………… 66
図Ⅱ－3 Ⅱ黒層出土の土器(1) …………… 15	図Ⅲ－19 H－5 出土の石器 …………… 67
図Ⅱ－4 Ⅱ黒層出土の土器(2) …………… 16	図Ⅲ－20 H－6 実測図 …………… 70
図Ⅱ－5 Ⅱ黒層出土の土器(3) …………… 17	図Ⅲ－21 H－6 出土の石器 …………… 71
図Ⅱ－6 Ⅱ黒層出土の石器類分布 …………… 18	図Ⅲ－22 H－6 出土の土器 …………… 72
図Ⅱ－7 Ⅱ黒層出土の石器(1) …………… 22	図Ⅲ－23 H－9 実測図 …………… 73
図Ⅱ－8 Ⅱ黒層出土の石器(2) …………… 23	図Ⅲ－24 H－9 出土の土器と石器 …… 73
図Ⅱ－9 Ⅱ黒層出土の石器(3) …………… 24	図Ⅲ－25 H－10 実測図 …………… 74
図Ⅱ－10 Ⅱ黒層出土の石器(4) …………… 25	図Ⅲ－26 H－10 出土の土器 …………… 75
図Ⅱ－11 Ⅱ黒層出土の石器(5) …………… 29	図Ⅲ－27 H－10 出土の石器 …………… 76
図Ⅱ－12 Ⅱ黒層出土の石器(6) …………… 32	図Ⅲ－28 H－11 出土の石器 …………… 77
図Ⅱ－13 T－22(1) …………… 33	図Ⅲ－29 H－11 実測図 …………… 78
図Ⅱ－14 T－22(2) …………… 34	図Ⅲ－30 H－11 出土の土器 …………… 79
図Ⅱ－15 T－23 …………… 35	図Ⅲ－31 H－12 実測図 …………… 80
図Ⅱ－16 Ⅱ黒層出土の土器分布 …………… 37	図Ⅲ－32 H－12 出土の土器 …………… 81
図Ⅱ－17 Ⅱ黒層出土の土器 …………… 37	図Ⅲ－33 H－13 実測図 …………… 82
図Ⅱ－18 Ⅱ黒層出土の石器、土製品分布 …………… 38	図Ⅲ－34 H－13 出土の土器(1) …………… 84
図Ⅱ－19 Ⅱ黒層出土の石器、土製品 …… 39	図Ⅲ－35 H－13 出土の土器(2) …………… 85
図Ⅲ－1 Ⅱ黒層の発掘調査地区 …………… 43	図Ⅲ－36 H－13 出土の石器(1) …………… 85
図Ⅲ－2 Ⅱ黒層の遺構位置図 …………… 44、45	図Ⅲ－37 H－13 出土の石器(2) …………… 86
図Ⅲ－3 縄文時代中期の遺構位置図 …… 46	図Ⅲ－38 H－22 実測図 …………… 88
図Ⅲ－4 H－3 実測図 …………… 48	図Ⅲ－39 H－22 出土の土器と石器 …… 88
図Ⅲ－5 H－3 出土の土器 …………… 49	図Ⅲ－40 H－14 実測図 …………… 89
図Ⅲ－6 H－3 出土の石器 …………… 49	図Ⅲ－41 H－14 出土の土器 …………… 90
図Ⅲ－7 H－4 実測図 …………… 51、52	図Ⅲ－42 H－14 出土の石器 …………… 91
図Ⅲ－8 H－4 遺物の出土状況図 …… 53	図Ⅲ－43 H－15 実測図 …………… 92
図Ⅲ－9 H－4 出土の土器 …………… 54	図Ⅲ－44 H－15 出土の土器 …………… 93
図Ⅲ－10 H－4 出土の石器 …………… 55	図Ⅲ－45 H－15 出土の石器 …………… 93
図Ⅲ－11 H－19 実測図 …………… 57、58	図Ⅲ－46 H－16 実測図 …………… 94
図Ⅲ－12 H－19の遺物出土状況図 …… 59	図Ⅲ－47 H－16 出土の土器 …………… 95
	図Ⅲ－48 H－16 出土の石器 …………… 95
	図Ⅲ－49 H－17 実測図 …………… 96

図Ⅲ-50	H-17	出土の土器	97	図Ⅲ-90	H-44	実測図	124
図Ⅲ-51	H-17	出土の石器	98	図Ⅲ-91	H-44	出土の土器	125
図Ⅲ-52	H-18	実測図	99	図Ⅲ-92	H-46	実測図	126
図Ⅲ-53	H-18	出土の土器	101	図Ⅲ-93	H-46	出土の土器	126
図Ⅲ-54	H-18	出土の石器	101	図Ⅲ-94		土壌(中期)実測図(1)	128
図Ⅲ-55	H-21	実測図	102	図Ⅲ-95		土壌(中期)実測図(2)	129
図Ⅲ-56	H-21	出土の土器	102	図Ⅲ-96		土壌(中期)実測図(3)	130
図Ⅲ-57	H-21	出土の石器	103	図Ⅲ-97		土壌(中期)実測図(4)	131
図Ⅲ-58	H-23	実測図	103	図Ⅲ-98		土壌(中期)出土の土器(1)	133
図Ⅲ-59	H-23	出土の土器	104	図Ⅲ-99		土壌(中期)出土の土器(2)	134
図Ⅲ-60	H-23	出土の石器	104	図Ⅲ-100		土壌(中期)出土の石器(1)	135
図Ⅲ-61	H-24	実測図	105	図Ⅲ-101		土壌(中期)出土の石器(2)	137
図Ⅲ-62	H-24	出土の土器	106	図Ⅲ-102		土壌(中期)出土の石器(3)	138
図Ⅲ-63	H-24	出土の石器	106	図Ⅲ-103		焼土(中期)実測図(1)	139
図Ⅲ-64	H-25	実測図	107	図Ⅲ-104		焼土(中期)実測図(2)	140
図Ⅲ-65	H-25	出土の土器	107	図Ⅲ-105		焼土(中期)出土の土器	141
図Ⅲ-66	H-25	出土の石器	108	図Ⅲ-106		焼土(中期)出土の石器	141
図Ⅲ-67	H-26	実測図	109	図Ⅲ-107		フレイク・チップ集中出土 の土器	144
図Ⅲ-68	H-26	出土の土器	109	図Ⅲ-108		黒曜石フレイクの 重量分布(1)	145
図Ⅲ-69	H-26	出土の石器	109	図Ⅲ-109		黒曜石フレイクの 重量分布(2)	146
図Ⅲ-70	H-27	実測図	110	図Ⅲ-110	S-1	実測図	148
図Ⅲ-71	H-27	出土の土器と石器	111	図Ⅲ-111	T-1	実測図	148
図Ⅲ-72	H-28	実測図	111	図Ⅲ-112		縄文時代後期の住居跡と 土壌位置図	149
図Ⅲ-73	H-28	出土の土器と石器	112	図Ⅲ-113	H-35	実測図	150
図Ⅲ-74	H-29	実測図	112	図Ⅲ-114	H-35	出土の土器	152
図Ⅲ-75	H-29	出土の土器	113	図Ⅲ-115	H-35	出土の石器	152
図Ⅲ-76	H-29	出土の石器	114	図Ⅲ-116	H-38	実測図	153
図Ⅲ-77	H-30	実測図	114	図Ⅲ-117	H-38	出土の土器	153
図Ⅲ-78	H-30	出土の土器	115	図Ⅲ-118	H-39	実測図	155、156
図Ⅲ-79	H-30	出土の石器	116	図Ⅲ-119	H-39	出土の土器	157
図Ⅲ-80	H-31	実測図	117	図Ⅲ-120	H-39	出土の石器	158
図Ⅲ-81	H-31	出土の土器と石器	118	図Ⅲ-121	H-40	実測図	159、160
図Ⅲ-82	H-32	実測図	119	図Ⅲ-122	H-40	出土の石器	161
図Ⅲ-83	H-32	出土の土器と石器	119	図Ⅲ-123	H-40	出土の土器	162
図Ⅲ-84	H-33	実測図	120	図Ⅲ-124	H-41・43	実測図	163
図Ⅲ-85	H-34	実測図	121	図Ⅲ-125	H-43	出土の土器	164
図Ⅲ-86	H-36	実測図	122				
図Ⅲ-87	H-36	出土の土器と石器	122				
図Ⅲ-88	H-37	実測図	123				
図Ⅲ-89	H-42	実測図	123				

図Ⅲ-126	P-23	実測図	164	図Ⅲ-156	包含層出土の土器：Ⅲ群 b-3類(8)	202
図Ⅲ-127	P-38	実測図	165	図Ⅲ-157	包含層出土の土器：Ⅲ群 b-3類(9)	204
図Ⅲ-128	P-122	実測図	165	図Ⅲ-158	包含層出土の土器：Ⅲ群 b-3類(10)	206
図Ⅲ-129		縄文時代晩期の遺構位置図	166	図Ⅲ-159	包含層出土の土器：Ⅲ群 b-3類(11)	207
図Ⅲ-130	H-7	実測図	167	図Ⅲ-160	包含層出土の土器：Ⅲ群 b-3類(12)	209
図Ⅲ-131	H-8	実測図	168	図Ⅲ-161	包含層出土の土器：Ⅲ群 b-3類(13)	210
図Ⅲ-132	H-20	実測図	169	図Ⅲ-162	包含層出土の土器：Ⅲ群 b-3類(14)	211
図Ⅲ-133	H-20	出土の土器	170	図Ⅲ-163	包含層出土の土器：Ⅲ群 b-3類(15)	212
図Ⅲ-134	H-45	実測図	171、172	図Ⅲ-164	包含層出土の土器：Ⅲ群 b-3類(16)	214
図Ⅲ-135	H-45	出土の石器	173	図Ⅲ-165	包含層出土の土器：Ⅲ群 b-3類(17)	215
図Ⅲ-136		土壌(晩期)実測図(1)	177	図Ⅲ-166	包含層出土の土器：Ⅳ群 a類	215
図Ⅲ-137		土壌(晩期)実測図(2)	178	図Ⅲ-167	包含層出土の土器：Ⅳ群 a類、b類、C類	217
図Ⅲ-138		土壌(晩期)出土の土器(1)	179	図Ⅲ-168	包含層出土の土器：Ⅴ群 b類(1)	224
図Ⅲ-139		土壌(晩期)出土の土器(2)	180	図Ⅲ-169	包含層出土の土器：Ⅴ群 b類(2)	225
図Ⅲ-140		土壌(晩期)出土の石器	181	図Ⅲ-170	包含層出土の土器：Ⅴ群 b類(3)	226
図Ⅲ-141		焼土(晩期)実測図	183	図Ⅲ-171	包含層出土の土器：Ⅴ群 b類(4)	227
図Ⅲ-142		焼土(晩期)出土の土器	185	図Ⅲ-172	包含層出土の土器：Ⅴ群 b類(5)	228
図Ⅲ-143		焼土(晩期)出土の石器	186	図Ⅲ-173	包含層出土の土器：Ⅴ群 b類(6)	229
図Ⅲ-144		動物の足跡(A)	187	図Ⅲ-174	包含層出土の土器：Ⅴ群 b類(7)	230
図Ⅲ-145		動物の足跡(B)	187	図Ⅲ-175	包含層出土の石器(1)	235
図Ⅲ-146	SP-6	出土の土器と P-75出土の石器	187	図Ⅲ-176	包含層出土の石器(2)	236
図Ⅲ-147		時期不明の遺構位置図	188			
図Ⅲ-148		包含層出土の土器：Ⅱ群 a-1類、Ⅱ群 a-2類、Ⅲ群 a類、Ⅲ群 b-1類	190			
図Ⅲ-149		包含層出土の土器：Ⅲ群 b-3類(1)	191			
図Ⅲ-150		包含層出土の土器：Ⅲ群 b-3類(2)	192			
図Ⅲ-151		包含層出土の土器：Ⅲ群 b-3類(3)	193			
図Ⅲ-152		包含層出土の土器：Ⅲ群 b-3類(4)	196			
図Ⅲ-153		包含層出土の土器：Ⅲ群 b-3類(5)	199			
図Ⅲ-154		包含層出土の土器：Ⅲ群 b-3類(6)	200			
図Ⅲ-155		包含層出土の土器：Ⅲ群 b-3類(7)	201			

表Ⅲ-46	土壙（晩期）一覧	173
表Ⅲ-47	焼土群（晩期）一覧	182
表Ⅲ-48	焼土（晩期）一覧	186
表Ⅲ-49	時期不明の土壙一覧	188
表Ⅲ-50	包含層の出土遺物一覧	241
表Ⅲ-51	遺構の出土遺物一覧	241
表Ⅲ-52	遺構別出土遺物一覧	241
表Ⅲ-53	遺構の掲載土器一覧	246
表Ⅲ-54	遺構の掲載石器一覧	247
表Ⅲ-55	包含層の掲載土器一覧	248
表Ⅲ-56	包含層の掲載石器一覧	249
表Ⅲ-57	遺構一覧	250
表Ⅳ-1	遺構一覧	263
表Ⅳ-2	遺構別出土遺物一覧	263
表Ⅳ-3	遺構の出土遺物一覧	263
表Ⅳ-4	包含層の出土遺物一覧	263
表Ⅳ-5	遺構の掲載土器一覧	264
表Ⅳ-6	包含層の掲載土器一覧	264
表Ⅳ-7	遺構の掲載石器一覧	264
表Ⅳ-8	包含層の掲載石器一覧	264
表Ⅴ-1	美々8遺跡調査の推移 （表土～Ⅰ黒層）	266
表Ⅴ-2	試掘調査出土遺物一覧	269
表Ⅴ-3	掲載土器・石器・金属器一覧	277
表Ⅴ-4	出土木製品等一覧	283
表Ⅴ-5	掲載木製品一覧(1)	304
表Ⅴ-6	掲載木製品一覧(2)	305
表Ⅴ-7	掲載木製品一覧(3)	306
表Ⅴ-8	掲載木製品・繊維製品・樹皮一覧 ・自然遺物	307
表Ⅴ-9	加工木 TP 別樹種一覧 （試掘調査出土）	309
表Ⅴ-10	加工部欠損材及び自然木樹種一覧 （試掘調査出土）	310
表Ⅴ-11	同定樹種一覧（試掘調査出土）	310
表Ⅴ-12	同定樹種名一覧（試掘調査出土）	311

## 写真図版

### 美沢3遺跡第Ⅱ黒色土層の調査

図版Ⅱ-1	A地区の調査	321
図版Ⅱ-2	T-22の調査	322
図版Ⅱ-3	T-23とB地区の調査	323
図版Ⅱ-4	B地区の調査	324
図版Ⅱ-5	包含層出土の土器(1)	325
図版Ⅱ-6	包含層出土の土器(2)	326
図版Ⅱ-7	包含層出土の土器(3)	327
図版Ⅱ-8	包含層出土の土器(4)	328
図版Ⅱ-9	包含層出土の石器(1)、石製品(1)	329
図版Ⅱ-10	包含層出土の石器(2)、石製品(2)	330
図版Ⅱ-11	包含層出土の土器(3)	331
図版Ⅱ-12	包含層出土の土器(4)	332
図版Ⅱ-13	包含層出土の土器(5)	333
図版Ⅱ-14	包含層出土の石器(6)、土製品	334

### 美々3遺跡第Ⅱ黒色土層の調査

図版Ⅲ-1・2	調査風景	335、336
図版Ⅲ-3	H-3の調査と出土遺物	337
図版Ⅲ-4~10	H-4・19の調査と出土遺物	338~344
図版Ⅲ-11~13	H-5の調査と出土遺物	345~347
図版Ⅲ-13~15	H-6の調査と出土遺物	347~349
図版Ⅲ-16	H-9の調査と出土遺物	350
図版Ⅲ-17	H-10の調査と出土遺物	351
図版Ⅲ-18~19	H-11の調査と出土遺物	352~353
図版Ⅲ-20	H-12の調査と出土遺物	354
図版Ⅲ-21~25	H-13・22の調査と出土遺物	355~359
図版Ⅲ-26~27	H-14の調査と出土遺物	360、361
図版Ⅲ-28	H-15の調査と出土遺物	362
図版Ⅲ-29	H-16の調査と出土遺物	363
図版Ⅲ-30・31	H-17の調査と出土遺物	364、365
図版Ⅲ-32~34	H-18の調査と出土遺物	366~368
図版Ⅲ-34・35	H-21の調査と出土遺物	368、369
図版Ⅲ-35・36	H-23の調査と出土遺物	369、370
図版Ⅲ-37	H-24の調査と出土遺物	371
図版Ⅲ-38	H-25の調査と出土遺物	372
図版Ⅲ-39	H-26の調査と出土遺物	373
図版Ⅲ-40	H-27・28の調査と出土遺物	374
図版Ⅲ-41~43	H-29・30の調査と出土遺物	375~377
図版Ⅲ-44	H-31の調査と出土遺物	378

図版Ⅲ-45	H-32の調査と出土遺物	379
図版Ⅲ-46	H-33・34・36・37の調査とH-36の出土遺物	380
図版Ⅲ-47	H-42の調査	381
図版Ⅲ-47~48	H-44の調査と出土遺物	381、382
図版Ⅲ-49~54	土壌(中期)の調査と出土遺物	383~388
図版Ⅲ-55	焼土・フレイク・チップ集中・集石・Tピット状遺構の調査	389
図版Ⅲ-56	焼土(中期)の出土遺物	390
図版Ⅲ-57	フレイク・チップ集中出土の土器	391
図版Ⅲ-58	H-35の調査と出土遺物	392
図版Ⅲ-59	H-38の調査と出土遺物	393
図版Ⅲ-60~66	H-39・40の調査と出土遺物	394~400
図版Ⅲ-67	H-41・43の調査とH-43の出土遺物	401
図版Ⅲ-68	P-23・38・122の調査とP-23の出土遺物	402
図版Ⅲ-69	H-7・8の調査	403
図版Ⅲ-70	H-20の調査と出土遺物	404
図版Ⅲ-71~74	土壌(晩期)の調査	405~408
図版Ⅲ-75~78	土壌(晩期)の出土遺物	409~412
図版Ⅲ-79~81	焼土(晩期)の調査と出土遺物	413~415
図版Ⅲ-81	動物の足跡とSP-6の調査・SP-6出土の土器	415
図版Ⅲ-82~85	包含層出土の土器(復元土器)	416~419
図版Ⅲ-86~90	包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類土器)	420~424
図版Ⅲ-91	包含層出土の土器(Ⅳ群a類、b類、c類、Ⅴ群b類土器)	425
図版Ⅲ-92	包含層出土の土器(Ⅴ群b類)	426
図版Ⅲ-93~94	包含層出土の石器(剥片石器)	427~428
図版Ⅲ-95~98	包含層出土の石器(礫石器)	429~432
<b>美々3遺跡第I黒色土層の調査</b>		
図版Ⅳ-1	調査風景	433
図版Ⅳ-2	土壌の調査	434
図版Ⅳ-3	P-10・67の調査とP-67の出土土器	435
図版Ⅳ-4~5	包含調査(一括遺物出土状況)と出土土器	436、437
図版Ⅳ-5	包含層出土の土器と石器	437
<b>美々8遺跡低湿地の調査</b>		
図版Ⅴ-1	低湿地試掘調査状況	438
図版Ⅴ-2	低湿地埋立状況と重機による調査状況	439
図版Ⅴ-3	遺物採取、選別、取上げ状況	440
図版Ⅴ-4	自然遺物、土器・金属器・石器	441
図版Ⅴ-5	礫各種	442
図版Ⅴ-6~19	木製品	443~456
図版Ⅴ-20	繊維製品	457
図版Ⅴ-21~32	木製品樹種 顕微鏡写真	458~469

# I 調査の概要

この調査は、北海道開発局札幌開発建設部が建設を進めている新千歳空港の用地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の緊急発掘調査である。

## 1 調査要項

事業名 新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査

事業委託者 北海道開発局札幌開発建設部

事業受託者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

調査遺跡・所在地・面積

遺跡名	道教委登録番号	所在地	面積	備考
美沢3遺跡	J-02-81	苫小牧市美沢164番地ほか	7,150㎡	
美々3遺跡	A-03-98	千歳市美々988-25ほか	9,225㎡	内950㎡はI黒層のみの調査
美々8遺跡	A-03-94	千歳市美々1,292-133ほか	215㎡	
計			16,590㎡	

調査期間 平成2年5月7日～平成3年3月27日

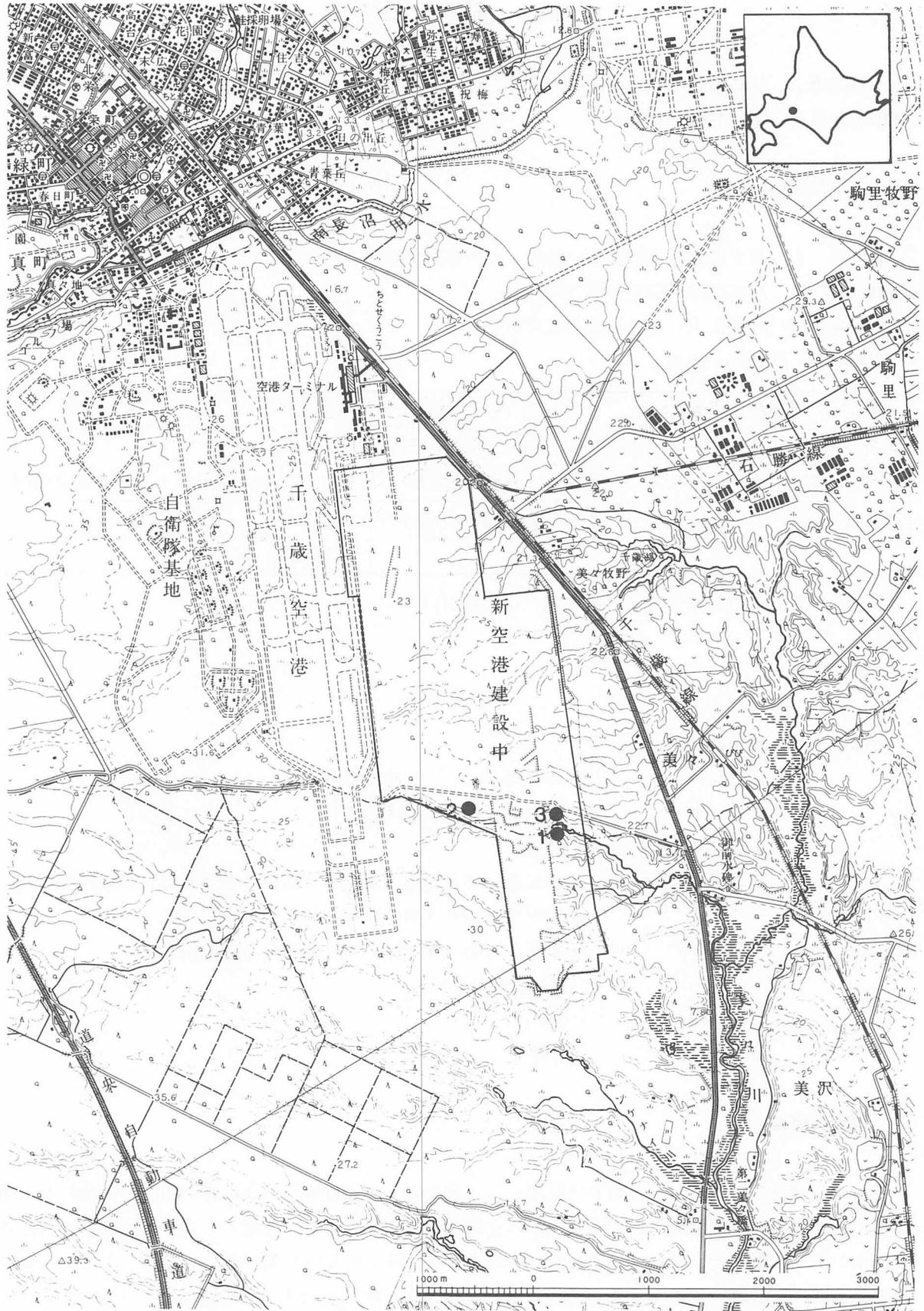
## 2 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター

理事長	寺山敏保	専務理事	永田春夫
常務理事	竹田輝雄	業務部長	伊藤庄吉
調査部長	中村福彦		
調査第2課長	大沼忠春（美沢3遺跡、美々3遺跡、美々8遺跡発掘担当者）		
主任	和泉田毅（美々3遺跡発掘担当者）		
	田才雅彦（美沢3遺跡、美々8遺跡発掘担当者）		
	工藤研治、田口尚		
文化財保護主事	中田裕香		
嘱託調査員	鈴木信		

## 3 調査の経緯

新千歳空港建設にともなう埋蔵文化財調査は、昭和49・50年度に千歳市教育委員会が実施した分布調査に端を発し、発掘調査は昭和51年度から北海道教育委員会によって始められ、昭和54年9月からは当センターが引継ぎ、毎年継続で実施されてきた。従って今年度は第15年次となる。この間に調査された遺跡は、次頁の表に示す通り計16遺跡、延べ24万㎡余にのぼり、旧石器時代から近代までの全ての時代に及ぶ遺物が出土し、種々の遺構が検出されている。更に、今年度の調査でその一部が明らかになった。アイヌ期の貴重な木製生活資料を大量に遺存している美々8遺跡低湿地部などを含めた



図I-1 遺跡の位置 1. 美沢3遺跡 2. 美々遺跡 3. 美々8遺跡  
(この地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「千歳」を利用したものである。)

表 I-1 新千歳空港用地内の埋蔵文化財包蔵地調査の推移

遺跡名	51年	52年	53年	54年	55年	56年	57年	58年	59年	60年	61年	62年	63年	元年	2年	計
美々2遺跡									10906	5000						10,906
美々3遺跡											4565			6000	9225	15,290
美々4遺跡	1160		240		7150			6475	6180	5899						27,104
美々5遺跡	300		6628	752	8450				6544							22,674
美々6遺跡			5000		3450											8,450
美々7遺跡			5000		2400											7,400
美々8遺跡						11900	3875			1828		11112		4182	215	33,067
美々9遺跡								5000								5,000
美沢1遺跡	790	7840	11300		2340											22,270
美沢2遺跡		10560														10,560
美沢3遺跡	1750				3480								17464	5478	7150	34,382
美沢4遺跡				23760												23,760
美沢5遺跡				6800							660					7,460
美沢10遺跡											4027					4,027
美沢11遺跡											1570	5710				7,280
美沢13遺跡												2185				2,185
計	4000	18400	28168	31312	27270	11900	3875	11475	23630	7727	10822	19007	17464	14720	12045	246,315

注：美々2遺跡の60年度調査分、美沢3遺跡の元年度調査分のうち940㎡、美々3遺跡の今年度調査分のうち4500㎡はⅡ黒層のみの調査で、それぞれ前年度のⅠ黒層調査時に面積が計上されているので、面積集計からは除外してある。

また、美々8遺跡の今年度調査分のうち45㎡は、昨年度調査分の下位（水つき部分）の調査であるため、同様に面積集計からは除外してある。

3万㎡ほどが調査予定地として残されている。

発掘調査の結果、人類は少なくとも2万年ほど前から美沢川周辺の森林地帯に展開していたことが判明している。美沢川の流域は、太平洋から美々川を遡って直接舟で到達できる地点であるとともに、千歳川から石狩川を経て、日本海と太平洋とを結ぶ交通の要衝として古くから開けていた地域である。以来、樽前山を始めとする度重なる火山の噴火に見舞われながらも、人々は嘗々とこの地に生活し、丸木舟を駆使して広く交流を続けてきた。その歴史は江戸時代あるいは明治開拓期にまで引き継がれ、やがて交通路としての河川は道路に、舟が車にとって変わられた。しかし、人々の交通・交流におけるこの地域の重要度は増加しこそすれ、いささかも失われることはなかった。

道路が空に、車が航空機に置き変わりつつある今日、この地に北海道の中核空港が存在し、更に拡充整備が求められているのは、こうした歴史の流れの中ではむしろ当然とも思える。と同時に、時代エゴに陥ることなく、この地の歴史的なあり方を振り返り、人々の交流と発展の道程を確認するの也是我々に与えられた責務であろう。

美沢川周辺の地形は、右図に示したように主として支笏軽石流堆積物（Spfl）からなり、その上に火山性堆積物と森林土壌が交互に積みあがっている。旧石器時代の遺物が確認されたのは暗褐色火山灰下のローム質土である。更に恵庭aローム層（En-a）からも有舌尖頭器などが出土している。Ⅲ黒層は、縄文時代早期の包含層であり、その上に樽前d<sub>2</sub>降下スコリア層（Ta-d<sub>2</sub>）と樽前d<sub>1</sub>降下岩片層（Ta-d<sub>1</sub>）が堆積している。Ⅱ黒層は縄文時代早期から晩期の包含層で、その上に樽前c<sub>2</sub>降下岩片層（Ta-c<sub>2</sub>）と樽前c<sub>1</sub>降下軽石層（Ta-c<sub>1</sub>）がある。Ⅰ黒層は縄文時代晩期から江戸時代の包含層で、その間に苦小牧火山灰（TM）と有珠b<sub>1</sub>火山灰（Us-b<sub>1</sub>）が部分的にみられる。Ⅰ黒層の上は樽前b降下軽石層（Ta-b）で、その降灰年代は1667（寛文7）年である。

なお、樽前a降下軽石層（Ta-a、1739年降灰）と樽前b降下軽石層の間にみられる腐植土について、従来褐色腐植土として扱ってきたが、今年度の美々8遺跡低湿地部の調査で包含層として確認できたので今後0黒層と称していくこととする。

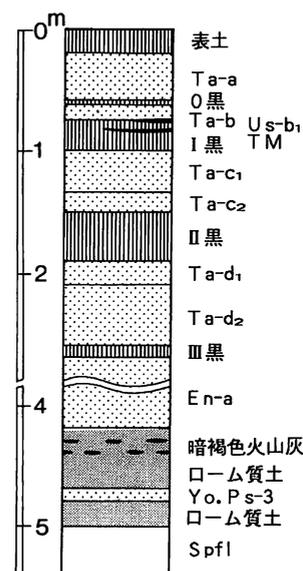


図 I-2 標準土層模式図

#### 4 調査結果の概要

美沢3遺跡は昨年度の調査地区に続く台地上部の調査を行った。調査地区はb・c・d-71・72地区と、f・g-71・72地区の2か所である。ともに第Ⅱ黒色土層が対象で、f・g地区では石刃鏃が出土し、また縄文時代早期のⅠ群b-3類(中茶路式)土器とそれに伴うとみなされる石器類の分布の広がっていることが知られた。また後期末頃とみなされる土製品が出土している。b・c・d地区では美沢川に面する斜面寄りの部分にⅠ群b-4類(東釧路Ⅳ式)の土器の分布が広く認められ、Ⅰ群b-3類土器も少量出土した。南側斜面に後期の遺物が出土し、調査区の東端と西端近くで晩期の遺物が少量出土している。昨年度調査した土壌群と関連するものとみなされる。

美々3遺跡は、昨年度の調査地区に続く台地上部から斜面下部に及ぶ地区の調査であり、第Ⅱ黒色土層と第Ⅰ黒色土層とが対象であった。第Ⅱ黒色土層の調査では、台地上に、台地の縁からやや離れた位置にⅡ黒層の高まりがあり、そこから台地縁にかけて広い窪みが形成されていた。この窪みの部分はⅡ黒層が薄くなっていて、上部に晩期の土器片が焼土を伴って分布していた。後期中葉とみられる墓壇も端の方が検出されている。その窪地の周囲にはⅢ群b-3類(北筒式)の時期の住居跡や包含層が広がっていて、先に美々4遺跡が発掘されたマウンドと似た状態であった。Ⅲ群b-3類土器の時期か、その少し後の時期に大規模な土の移動が行なわれていたようである。住居跡は昨年出土した卵形プランのものが追加されている。斜面下部ではⅣ群a類土器の時期の住居跡と、Ⅴ群b類土器の古い段階の土器が層位的に出土している。またⅣ群a類土器の時期の遺構の重複関係や、炉跡、床面、覆土の遺物のあり方から、Ⅳ群a類土器の変遷も把握される。第Ⅰ黒色土層の調査ではⅤ群c類土器の時期の土壌墓、焼土が調査された。

美々8遺跡は、昨年度の斜面の調査によって道跡や建物跡が検出され、水没地区へ広がっていることが推定されたことから、北海道教育委員会の手で水没地区を埋め立ててB調査が実施されていた。本報告書ではB調査によって出土した資料の報告をしている。本年度の調査は、そのB調査結果によって調査対象地に組み入れられた水没地区を主に調査した。調査の結果、元文4年(1739年)7月のTa-a層の降灰により美沢川の水位の上昇したことが明らかとなり、それ以前の川岸部分と考えられる斜面からは、昨年度の調査に続く杭跡が多量に検出された。この杭跡は、さらに水没地区に続き、そこでは立ったままの杭が残存していた他、おびただしく重なり合って、木質遺物が検出された。この木質遺物の検出層は、寛文7年(1667年)8月のTa-b層の降灰以後が主となるものであった。出土遺物には、生活用具として、漆器碗、箱、箸、串類、篋、杓子、マキリの柄、煙管の雁首、鉄鍋、火打石、ヒキり板、木槌、杭(削り痕のある木片)、建材、縛り目のある木皮(紐状のもの)、縄など、狩猟・漁撈用具として、弓、マレック台木、ヤス、板綴船材、櫂、櫂の把手、車櫂の回転軸(タカマ)を受ける台(モチ、タカマチ)(彫刻入り)、飾板(彫刻入り)など、その他ガラス玉、緒締(根付)、銅製品、鉄製品、洪武通寶などがある。これらの木質遺物の堆積層下に擦文土器、土師器の丸底杯などの台地上部の第Ⅰ黒色土層に相当する遺物包含層があり、Ta-c層に埋め込まれた状態で恵山式壺形土器が出土している。包含層の状態は川の方へ向って厚みを増し、木質遺物も大形のものが多くなる傾向が認められた。

道央地方は江戸時代のはじめ頃にはシコツと呼ばれた地域で、万治元年(1658年)もしくは万治三年(1660年)に志古津に弁天社が建立された記録がある。この弁天社は通説では千歳とされているが、千歳の弁天社は文化二年に新規に建立されたもので苫小牧市弁天地区の弁天社が万治年間に建立された志古津弁天社と考えられる。17世紀のシコツの範囲は登別からエリモ岬までの大平洋岸と、江別あ

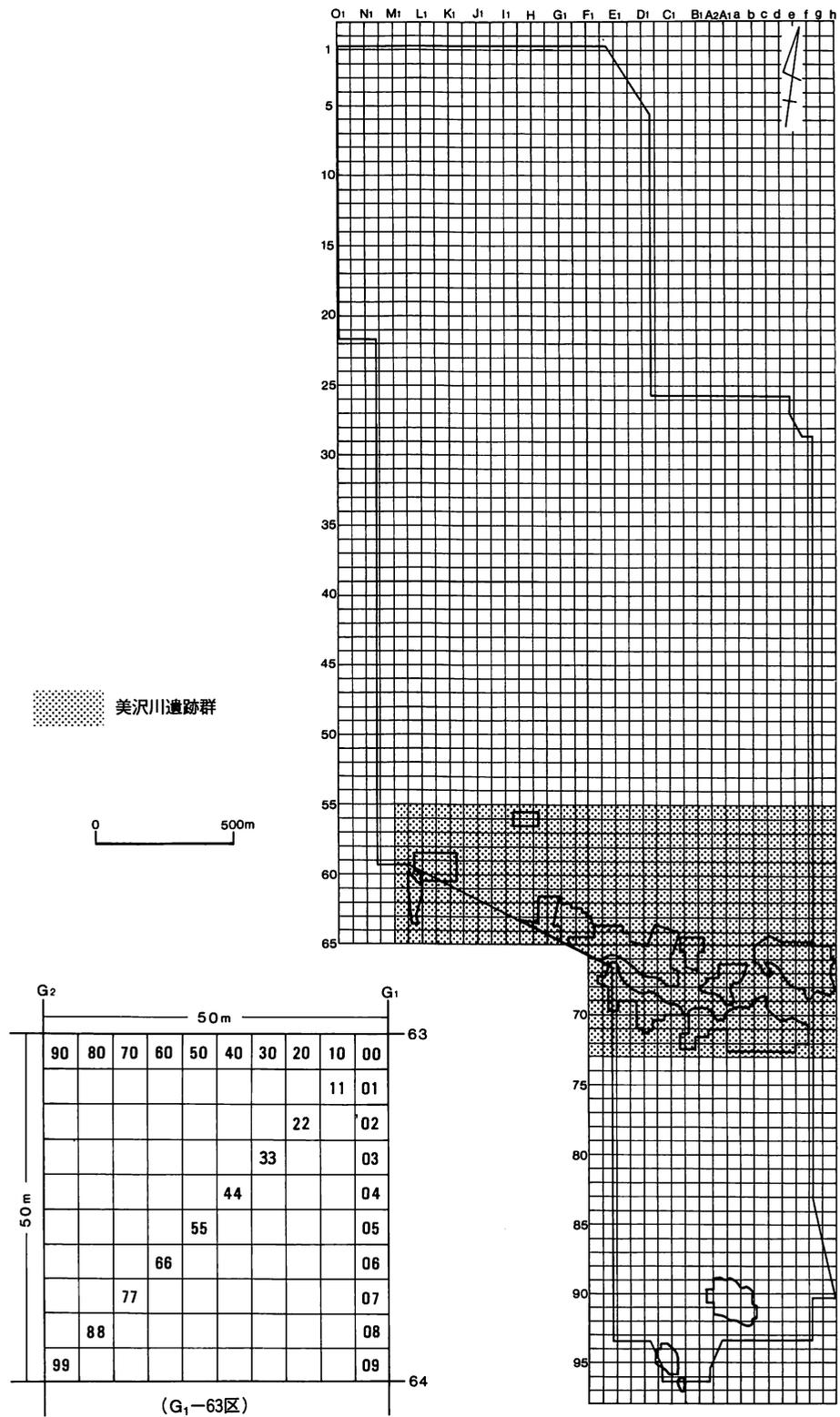


図 I - 3 美沢川流域の遺跡群の位置と発掘区の呼称

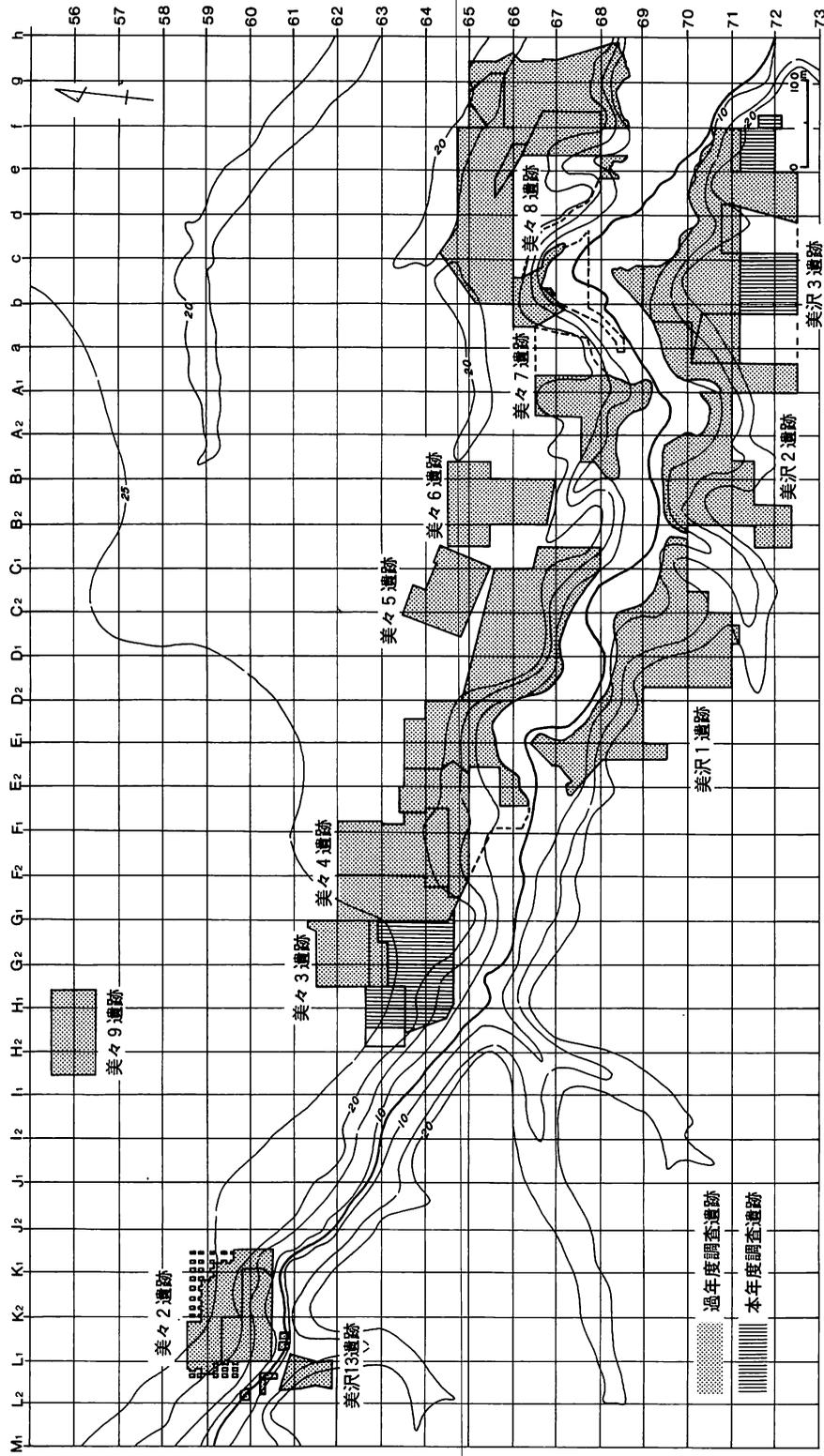


図 I-4 美沢川流域遺跡群の分布

るいは石狩河口あたりまでをも含んでいたらしい。火山灰の降灰で移動したものが、18世紀のはじめ頃には松前藩？直轄のロウサンが中心地となっていたようで、19世紀には千歳川会所が中心となる。美々8遺跡の斜面の道の上はルオサンと呼ばれていた記録がある。なお、シコツとは、東遊雑記に記された伝承からみると、本来シコツ湖を指すらしい。

## 5 遺物の記載について

土器については昭和51年以来時期毎の区分を行ってきた。その間若干の変更をみているが、本年度の調査結果と、近年の調査結果を考え合わせ、以下の区分によって表示することとした。石器については器種別の大分類にとどめている。

### (1) 土器

I群 縄文時代早期に属するものを本群とする。本群は大きく二つに分類される。

- a類 貝殻腹縁圧痕文、条痕文のある土器群。今回の発掘調査では出土していない。
- b類 縄文、捺糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文などの施される土器群、これらには東釧路Ⅱ式、同Ⅲ式、コッタロ式、中茶路式、東釧路Ⅳ式に相当するものがある。
  - b-1類：東釧路Ⅱ・Ⅲ式に相当するもの。g-71区から出土した。
  - b-2類：コッタロ式に相当するもの。今回の発掘調査では出土していない。
  - b-3類：中茶路式に相当するもの。c-71、f・g-71、72区から出土した。
  - b-4類：東釧路Ⅳ式に相当するもの。b・c・d-71区から出土した。

Ⅱ群 縄文時代前期に属するものを本群とする。本群は大きく二つに分類される。

- a類 縄文の施された円底、尖底を特色とする土器群。さらに二者に分類される。
  - a-1類：縄文土器に相当するものと、結束のない羽状縄文の施された円底を特色とする土器を本類とする。G<sub>1</sub>-63区から出土した。
  - a-2類：春日町式、中野式など、縄文の施された尖底を特色とする土器を本類とする。G<sub>2</sub>-64区から出土した。
- b類 円筒土器下層式、植苗式に相当する土器群。今回の発掘調査では出土していない。

Ⅲ群 縄文時代中期に属する土器を本群とする。さらに二者に分類される。

- a類 円筒土器上層式に相当するもの。H<sub>1</sub>・G<sub>1</sub>・G<sub>2</sub>-63区から出土した。
- b類 天神山式・柏木川式、北筒式等に相当するもの。さらに三者に分類される。
  - b-1類：天神山式等に相当するもの。G<sub>1</sub>-63、64区から出土した。
  - b-2類：柏木川式等に相当するもの。G<sub>2</sub>-64区から昨年度出土資料と同一個体の小片が出土している。
  - b-3類：北筒式(トコロ6類)等に相当するもの、G<sub>1</sub>-63、64、G<sub>2</sub>-63区から主に出土した。

Ⅳ群 縄文時代後期に属する土器を本群とする。さらに三者に分類される。

- a類 余市式・入江式に相当するもの。G<sub>1</sub>・G<sub>2</sub>-63、G<sub>2</sub>-64区から出土した。
- b類 船泊上層式・手稲式・鮎澗式・エリモB式に相当するもの。G<sub>1</sub>-63、G<sub>2</sub>-64、F<sub>2</sub>-64区から出土した。
- c類 堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当するもの。G<sub>2</sub>・F<sub>2</sub>-64区から主に出土した。

V群 縄文時代晩期に属するものを本群とする。さらに三者に分類される。

- a類 大洞B式・上ノ国式に相当するもの。今回の調査では出土していない。

## I 調査の概要

b類 大洞 C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>式に相当するもの。G<sub>1</sub>-63、G<sub>1</sub>・G<sub>2</sub>-64区から主に出土した。

c類 大洞 A・A'式に相当するもの。G<sub>2</sub>-64区から主に出土した。

Ⅵ群 続縄文時代に属する土器を本群とする。c-67区より出土した。

Ⅶ群 擦文時代に属する土器を本群とする。c-67区より出土した。

### (2) 石器

出土した石器には剥片石器に石刃、石刃鎌、石鎌、石槍またはナイフ、石錐、つまみ付ナイフ、スクレイパー類、異形石器があり、礫石器には石斧、たたき石、すり石、くぼみ石、石錘、砥石、石皿、台石などがある。この他に石核(コア)、剥片、石屑(フレイク、チップ)、擦切痕のある礫・自然礫などがある。使用痕、加工痕のある剥片はそれぞれRフレイク、Uフレイクに一括している。石製品には玉類、瑛状耳飾、ミニチュア石斧などがある。

なお表に示した石材の略号は次のとおりである。

Aga. : メノウ。Aga - Sh. : メノウ質頁岩。And. : 安山岩。Che. : チャート。Gni. : 片麻岩。Gr - Mud. : 緑色泥岩。Gr - Sch. : 緑色片岩。Mud. : 泥岩。Obs. : 黒曜石。Per. : カンラン岩。Pro. : プロピライト。Qua. : 珪岩。Qua - Sh. : 珪質頁岩。Rhy. : 流紋岩。Sa. : 砂岩。Sch. : 片岩。Ser. : 蛇紋岩。Sh. : 頁岩。Tu. : 凝灰岩。Ba. : 玄武岩。

### (3) 土製品

土製品には沈線文の施された垂飾状の破片がある。

### (4) 陶磁器

近世の磁器が出土している。

### (5) 金属製品

近世～現代の鉋、鉄鍋破片、葉莢が美々8遺跡のB調査によって出土している。本年度の調査によって出土した資料には概要の項に記したものがある。

### (6) 木製品・繊維製品

彫刻のある飾板、花矢状のもの、車權の回転軸を受ける台、同じく回転軸のついた台、漆器の椀の破片、曲物の把手、箸状、串状のもの、杭、建築部材とみなされるもの、タラのほぼ原形をとどめているものなどが美々8遺跡のB調査によって出土している。本年度の調査によって出土した資料には概要の項に記したものがある。

### (7) その他

近世の砥石、火打石破片、礫、棒状礫、カワシンジュ貝、クルミ、スモモなどの自然遺物も出土している。

## Ⅱ 美沢3遺跡第Ⅱ 黒色土層の調査

### 1 調査の概要

美沢3遺跡は、新千歳空港建設用地内に所在する美沢川流域の遺跡群の中では、対岸の美々8遺跡とともにもっとも下流に位置し、面積規模は約4万㎡を占める。

本遺跡にかかる発掘調査は、昭和51・55・63年度及び平成元年度に実施されており、28,172㎡についてその内容が明らかになっている。その成果を概括すると、本遺跡は縄文時代早期から晩期にかけて営まれたもので、美沢川の蛇行地点右岸に向けて突出する標高7m前後の低位段丘面にその主体があり、後背する斜面から台地平坦面にその範囲が及んでいる。

確認されている遺構は、縄文時代早期中茶路式土器の時期から晩期にかけてで、住居跡は縄文時代早期の東釧路Ⅳ式、中期前葉、後期前葉から中葉のもの計22基がある。これらはいずれも標高6～11mの低位面にあり、早期中茶路式期の土壌もほぼこの位置に集中する。これに対し晩期の土壌群は台地西向き斜面に分布しており、後期までの遺構の立地とは一線を画している。

Tピットは、北流する小沢を取り巻くように23基が確認されており、このうち10基が杭穴のないもの、13基が1～2本の杭穴をもつものである。

今年度の調査地区は、b-71区を中心とする部分4,550㎡（以下、A地区とする）と、e-71区を主体とする2,600㎡（以下、B地区とする）とに分かれている。

A地区は、標高22.76m（Ta-d<sub>1</sub>層上面）地点を頂点とする台地上部の平坦面が主体で、c-71区では北東向きの斜面となり、b-72区では南東方向に走る沢跡となっている。調査に着手したのは、a～c-71区の北側平坦面からである。この部分では縄文時代早期の中茶路式土器、東釧路Ⅳ式土器の分布が目立つ。中茶路式は22.5mのコンター南側に分布の中心があり、東釧路Ⅳ式は同コンター北側に多い。また、縄文時代後期の手稲式・鯰澗式・御殿山式土器片がわずかに出土している。遺構は、Tピット2基を確認した。T-22は平坦面から沢跡に下る部分にあり、T-23は平坦面から北東向斜面に掛かる地点にある。

a～c-72区では、遺構は検出されておらず、遺物も少ない。土器片は、東釧路Ⅳ式がまばらにみられるが、中茶路式は1点のみである。後期の土器では、手稲式の注口土器片のまとまりが沢跡のもっとも低い部分にみられたほかは、鯰澗式・御殿山式が各1点出土しているだけである。晩期の幣舞式は南西端に13点出土しており、平成元年度調査区の土壌群との関連、及び未調査区への広がりが見られる。

なお、特殊な遺物としては、玦状耳飾り1点がある。

B区は、標高22.36m（Ta-d<sub>1</sub>層上面）地点を頂点とする台地上部の平坦面から調査を始め、調査区の主体を占める北東向きの斜面、及びb-72区の南東向き斜面へと進めた。

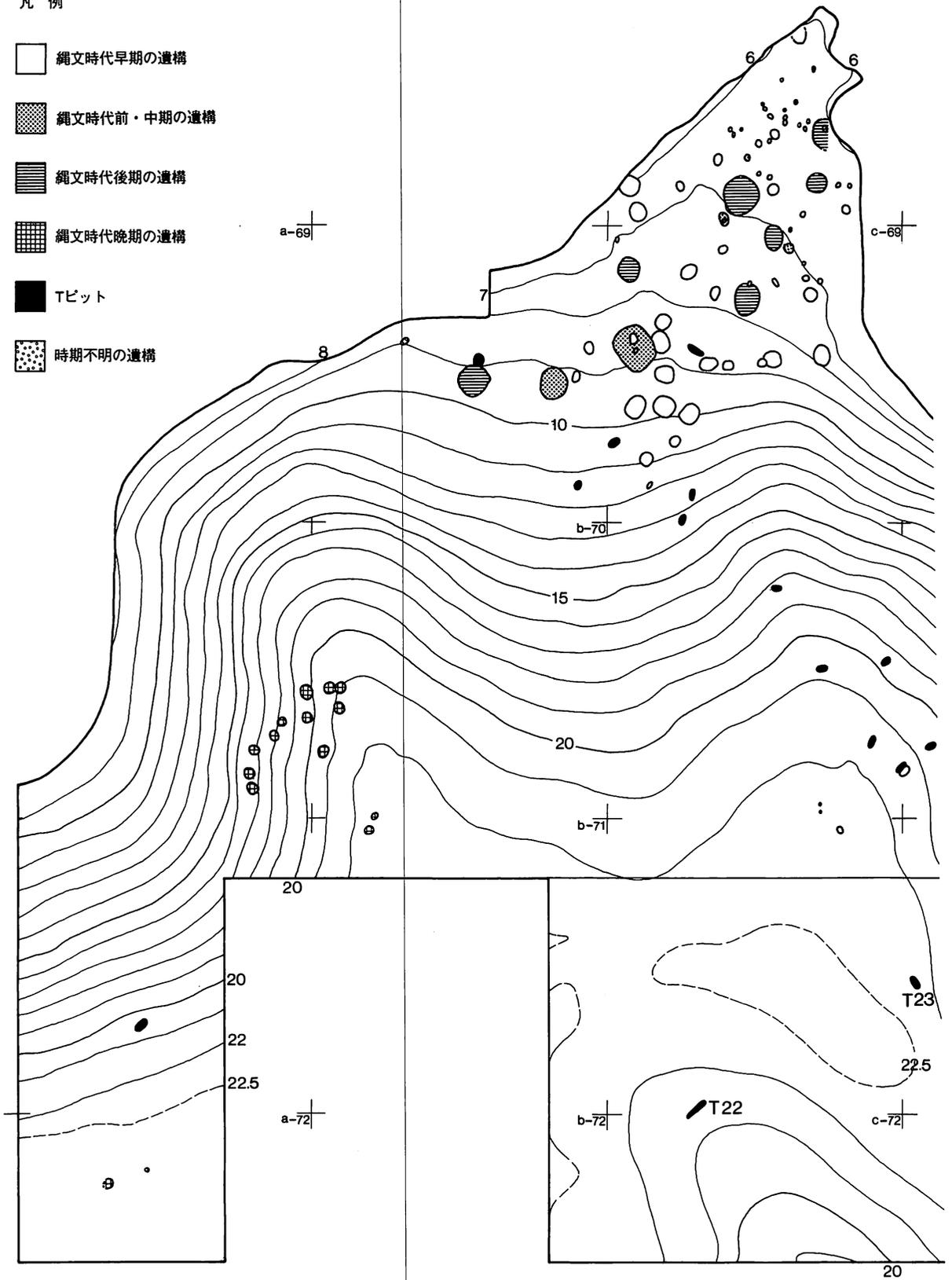
本地区からは遺構は検出されていない。出土土器片は、中茶路式土器期のみであり、A地区とはかなり異なった様相を呈している。遺物の出土状況をみると、南東向き斜面がもっとも多く、次いで北東向き斜面の低い部分にあり、平坦面には比較的少ない。

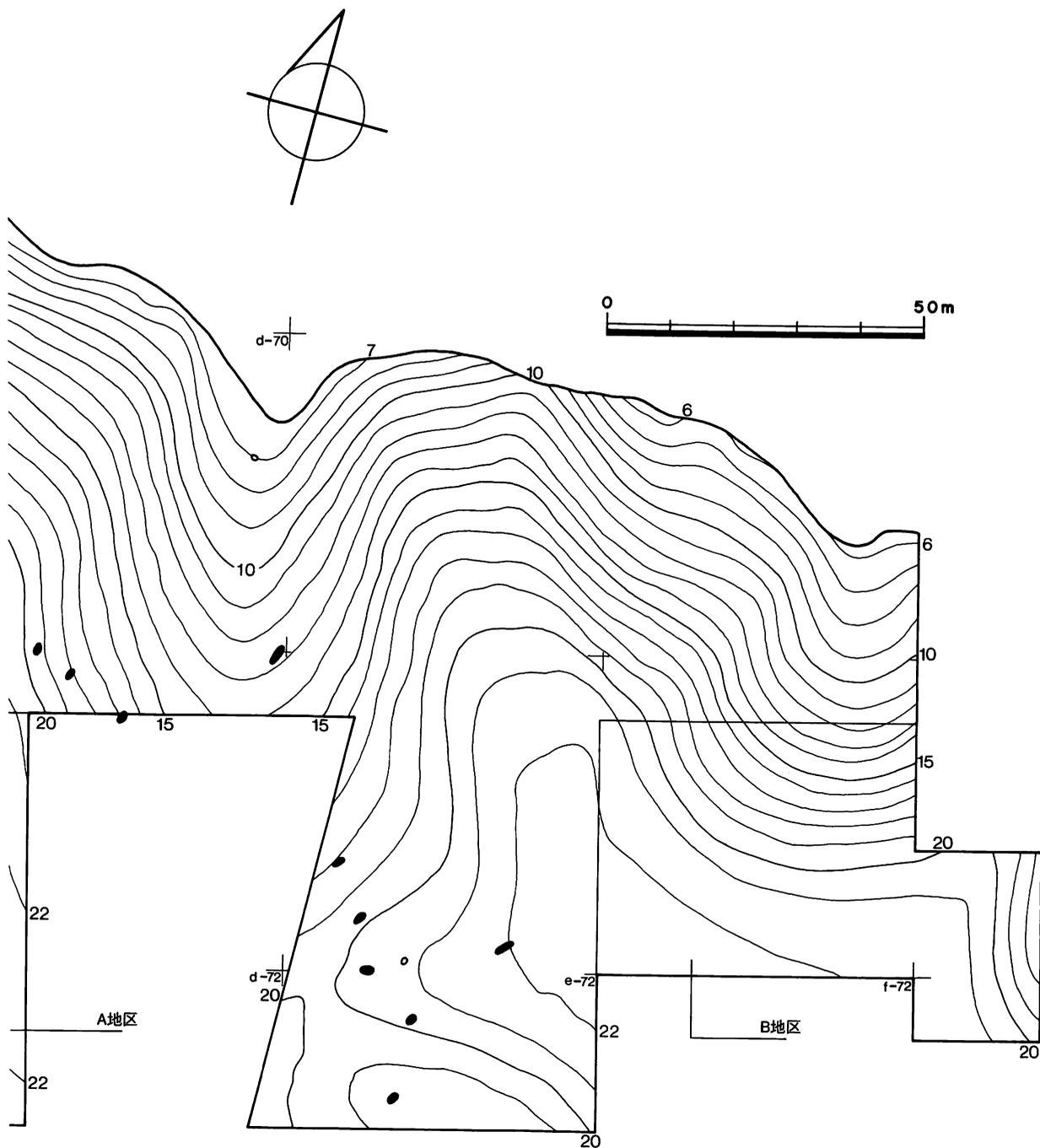
特殊な遺物としては、ベニガラで彩色された土製垂飾と、石刃鎌各1点がある。（田才）

II 美沢3遺跡第II黒色土層の調査

凡例

-  縄文時代早期の遺構
-  縄文時代前・中期の遺構
-  縄文時代後期の遺構
-  縄文時代晩期の遺構
-  Tピット
-  時期不明の遺構





図Ⅱ-1 II黒層全体遺構位置図（等高線はTa-d<sub>2</sub>上面）

## 2 縄文時代早期の遺物包含層の調査

### (1) 土器 (図II-2~5、図版II-5~8)

#### I群b-1類 (8)

器面、口唇、内面に縄文が施され、口縁に沿って刺突文が施されている。内面にはわずかに突瘤が認められる。口唇の幅は広く、内側に張り出している。縄文はRLの原体により、浅く施されている。色調は赤褐色を呈する部分が多い。刺突文は断面円形の棒状工具で斜め上方から刺突を加えている。

#### I群b-3類 (1~6・9~34)

本類土器はA地区と、B地区とに出土している。両地区から出土した資料はほぼ共通する内容を示しているが、B地区のもの(1~6・9~30)から順次掲載してゆく。

9は無文のもので、口縁部が薄くなり、わずかに外反している。10・11は同一個体に属するもので、器面に横走る細かい擦痕が認められる。トクサによる擦痕に似ている。口唇の断面は尖り気味で、口縁にそって1条の粘土紐を貼付して、細い隆起線をめぐらし、口唇から隆起線にかけて縄の圧痕を並列している。体部には東釧路IV式にみられるような撚糸文風の縄文の施された部分がある(11)。12は全体が薄手のつくりで、細い糸状の縄を巻きつけた絡条体による圧痕が認められる。絡条体の軸の断面は丸味をおびるが、幅の広い部分と狭い部分があり、断面が凸レンズ状をなすものかと想われる。文様は大きい鋸歯状の区画に細い絡状体圧痕文を横位にうめる構成である。器形は口縁に隆起部を形成するものとみられる。1・6・13~26・28は器面に広く短縄文を施すもので、底部付近には縄文や、綾絡文を施すもの(1・6・22)もある。器形は口縁が波状となるもの(17)や、二つの山形の隆起部を形成するもの(18)もある。隆起線文は、器面を横環して施される例が多いけれども、口縁部から体部にかけて、縦位、斜位、波状の隆起線で文様を構成するものがある。16は短縄文と同一の原体による縄線文を隆起線の区画内に入れている。横位に施される隆起線は2・4では間隔が広く、隆起の度合も著しい。短縄文は2段の原体の小部文を並列しているもので、押し引き文のようになっているものもある(20)。また、圧痕の浅いもの(19)や、部分的に回転施文されたもの(23)もみられる。2・4・27・29・30は縄文の施されたもので、5・31~34はさらに1段の縄の結節部分を回転施文した綾絡文の加えられたものである。ただし、5は口縁を欠失しているが体部に隆起線はなく、32~35は同一個体に属するものであるが、隆起線は口縁部から体部付近に限られるようである。

35~48はA地区より出土したものである。35~37は同一個体に属するもので、底部の外形が隅円長方形を呈するものである。器面に細いけれども明瞭な隆起線をめぐらし、その間に短縄文と絡条体圧痕文を配している。短縄文帯の間は無文帯となっている。底部からの立上りは直立気味である。38は短縄文帯を施した後に絡条体圧痕文を加えたものである。38の絡条体圧痕文は、36・37の絡条体圧痕文と同様、絡条体の軸が角形を呈するものであることがわかる。その点で12の絡条体とは異なっている。39は38に比べて、やや器壁の厚いものであるが、出土位置が近く、短縄文の原体や、圧痕の深さが似ているので、38と同一個体に属するものかもしれない。39では縦の隆起線で区画を設けた後、横位の隆起線を施し、その隆起線の間を短縄文が埋めている。40はやはり39と似た縦・横・波状の隆起線の区画内を短縄文で埋めたものであるが、短縄文の圧痕は浅く、整然としている。41は、口縁部に曲線状の隆起線が文様を構成し、その間を短縄文で埋め、口唇直下の隆起線の部分にまで縄文を施したものである。42はやや厚手のもので、隆起線は太い。RLとLRの原体により縄文が施されている。43は出土位置と器壁の厚さ、縄文の条の細さが42とほぼ同様であり、あるいは同一個体に属するものかと想われるが、42のLR原体による縄文は条が一条おきに深くなっているようでもあり、やや異なっている。44は比較的薄手の口縁部であるが、隆起線は太い。口唇に沿う隆起線と、その下

の隆起線の上側に細いヘラ状の工具による押し文状の圧痕が認められる。隆起線をなでつけたヘラ状工具の痕跡は15・45～47にも認められる。45・46は同一個体に属するもので、口唇が角形を呈する部分がある。47は口縁と口唇、口縁の内面にも縄文が施されている。48はRLの原体による斜行縄文を地として、綾絡文が施されている。ところどころ隆起線にそって爪形状の点列が認められるけれども、ところにより、それに重ねて隆起線の認められる部分があり、隆起線を形成する粘土紐を貼付する位置を示す、いわば文様の下描きの痕跡かと思われる。

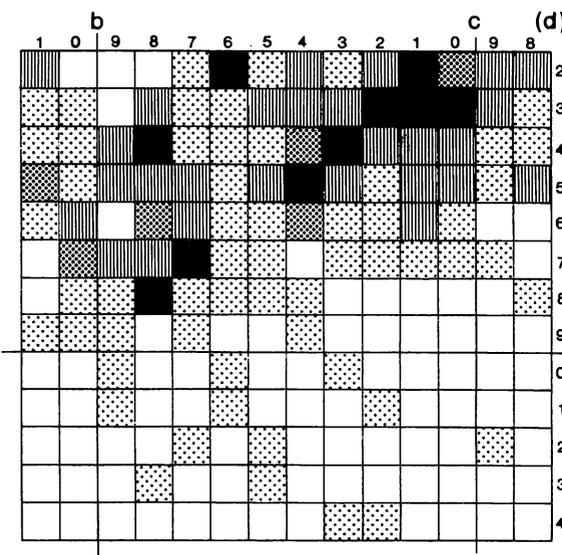
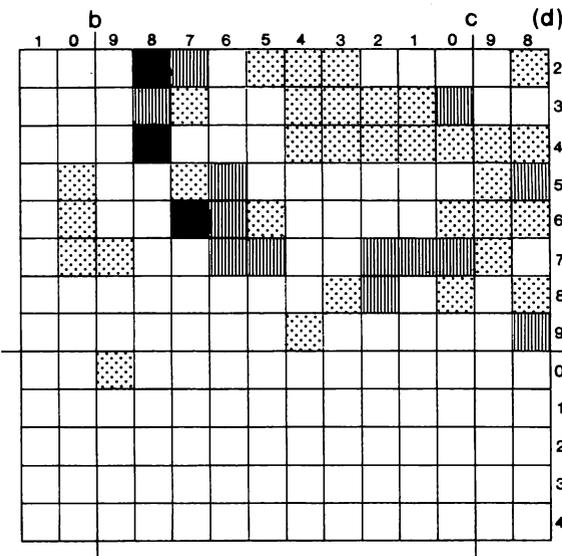
#### I群b-4類(7・49～76)

本類土器はA地区から出土している。出土地区にいくつかのまとまりがあり、資料の特色を異にしている。49・50は同一個体で、口唇上から口縁部にかけて短縄文が施されている。短縄文帯の下縁は、微かに隆起線を形成して1群b-3類のなごりを示している。器面に自縄自巻の原体による羽状の撚糸文風の縄文が施されている。50の口縁の右側の短縄文は、この原体(自縄自巻LR)の端部の圧痕とみられる。49と50の口縁の左側の圧痕は1段Rの原体による。51～61はA地区の中央部に広く散点的に出土したものである。51は、口縁部に短縄文が3段施文され、器面に撚糸文風の縄文が施されている。52にも同様の縄文が認められる。53には羽状縄文、54には斜行縄文が施されている。55はニシンタイプの魚骨回転文の施されたものである。56は器面に撚糸文風の縄文と綾絡文の施されたもので、口縁部に、短縄文が施されている。原体は自縄自巻LLと自縄自巻RRとみなされる。57・60・61は、撚糸文風の羽状縄文の施されたものである。58・59は同一個体に属するもので、器面に綾絡文と撚糸文風の縄文が施されている。口縁部にはさらに、短縄文もしくは縄端圧痕文が加えられている。縄文は自縄自巻LRと自縄自巻RLである。7・62～76は、A地区の東端からまとまって出土したものである。7は丸底風の尖底をなすもので、右下がり、左下がりの撚糸文帯により整然とした文様の施されているものである。各々の帯の上下は磨消され、縄端圧痕がめぐらされている。撚糸文の条はRである。縄端圧痕と同一原体ではなくLの原体によるとみなされる。胎土にセシイを多く含む。62は口縁部にループをなす縄端の圧痕がめぐらされ、器面に斜行縄文の認められるものである。63は口縁部に3条2段RLの縄線文をめぐらし、その下に1段Rの縄の圧痕が認められる。64は口縁に1段Rの縄線文が施されている。65・66は同一個体で、口縁の山形隆起部に縦位に太い突起があり、口縁に沿って2条、突起部に3条の縄線文が施されている。この縄線は1段Rの縄を2段にゆるく撚ったものである。67は口縁に3条の縄線文をめぐらし、その下に短縄文を並列させている。その下は斜行縄文が施されている。68は67と同一のものともみなされるが、斜行縄文は途中から、撚糸文風になり、原体が部分的に自縄自巻となっているものとみられる。縄端を含む原体による短縄文帯があり、その下には1段Lと1段Rの縄が深く押捺され、縦位の羽状の文様を構成するようである。これらの1段L、同Rの縄の圧痕の間に所々浅い縄の圧痕が認められ、それがそれぞれの1段と同一の原体によるものとみなされることから、これらの一見撚糸文風の圧痕が、自縄自巻の原体で施されたものであろうと考えられる。下半部の圧痕は、このような原体の一部を押捺した短縄文である。69は口縁の内面側に縄端圧痕文をめぐらし、表面には口縁部に縄線と縄端の圧痕を並列する文様帯が形成されている。体部には右下がり、左下がりの撚糸文が縦位の羽状文を形成している。原体はRである。縄端の圧痕はRLの原体を折り曲げて押捺しているようである。70は口縁部に2条の縄線文をめぐらしその間に短縄文を並列しているもので、器面には2条並列する撚糸文が、縦位の羽状を構成するように施文されている。71は、胎土、器面調整、施文などから、76と同一個体に属するものである。比較的薄手で大型の土器である。口縁部にやや幅広く、2段Rの原体による縄線文と短縄文と配置し、文様帯を形成している。体部には2条並列する撚糸文が認められる。72は口縁部に2段短縄文、器面には撚糸文が認められる。なお口唇には、縄による刻み目がある。74は短縄文と

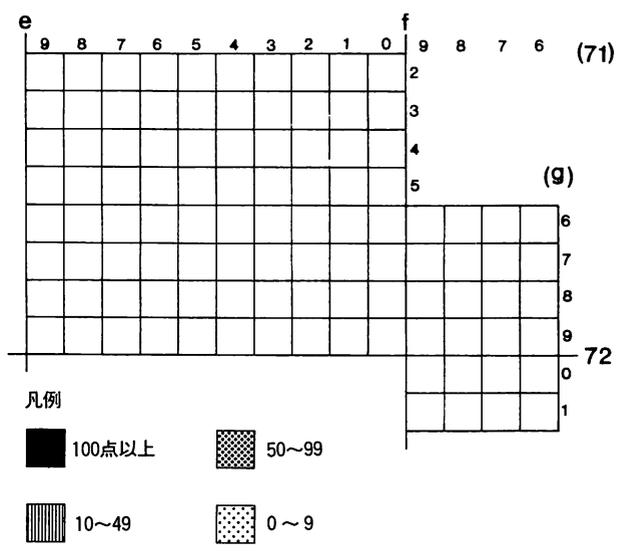
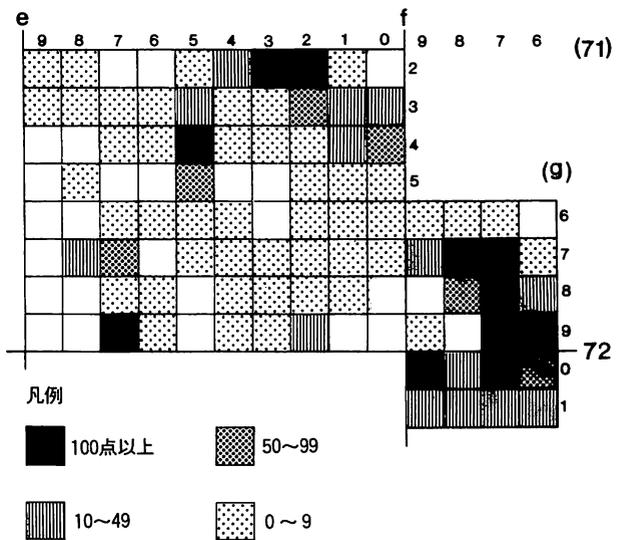
縄線文によって口縁部文様帯の形成されているもの、75は鋸歯状に縄線文が施されているもので、74と施文原体が共通するので同一個体に属するとみられる。なお74の口唇には縄による刻み目がある。73は、短縄文と縄端圧痕による文様が施されているものである。(大沼)

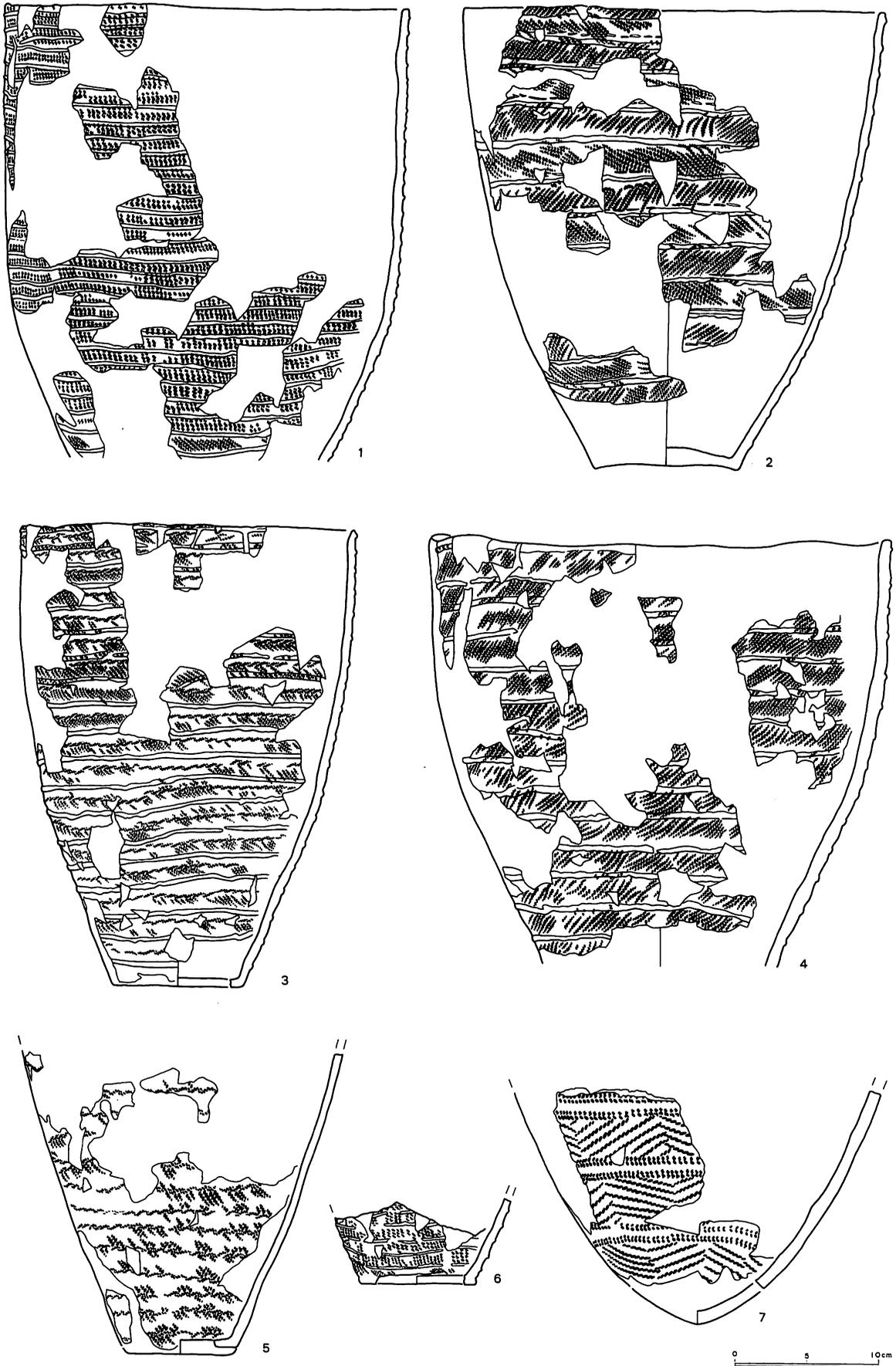
表II-1 包含層掲載土器一覧(I群b-1~4類)

隣	発掘区	隣	発掘区	隣	発掘区	隣	発掘区	隣	発掘区	隣	発掘区	隣	発掘区
1	g-71-77	5	g-71-79	13	f-71-43	24	g-71-87	36	c-71-84	46	c-71-82	56	c-71-46
	78		f-71-17	14	g-71-79	25	g-71-79	37	c-71-84	47	c-71-27	57	c-71-13
	87		18	15	g-71-77	26	g-71-79	38	c-71-75	48	c-71-76	58	c-71-03
2	f-71-43	6	g-72-60	16	f-71-53	27	f-71-49	39	c-71-65	49	c-71-34	59	c-71-45
	54		c-71-03	17	g-71-78	28	g-71-77		75	50	c-71-34		46
	55		13	18	f-71-32	29	f-71-87	40	c-71-52	51	c-71-84	60	b-71-06
	56		79	20	g-71-76	31	f-71-22	41	c-71-53	53	c-71-86	62	c-71-44
3	g-72-80												
	81	9	g-71-79	21	f-71-32	32	f-71-13	42	c-71-57	54	c-71-77	63	c-71-13
	91	10	g-72-60	22	f-71-78	33	g-71-97	43	c-71-65	55	c-71-85	64	c-71-15
4	f-71-79	11	g-72-60	23	g-71-79	34	g-71-97	44	c-71-03	56	c-71-34	65	c-71-23
5	g-71-69	12	f-71-85	24	f-71-47	35	c-71-84	45	c-71-82		45	66	c-71-23
													76
													c-71-55
													c-71-03
													12
													c-71-03
													c-71-04
													d-71-93
													c-71-14
													c-71-23
													c-71-13
													c-71-02
													d-71-92
													c-71-13



図II-2 II黒層出土の土器分布 (上:中茶路式 下:東釧路IV式 他にI群b-1類土器3点がg・71・79区で出土している。)

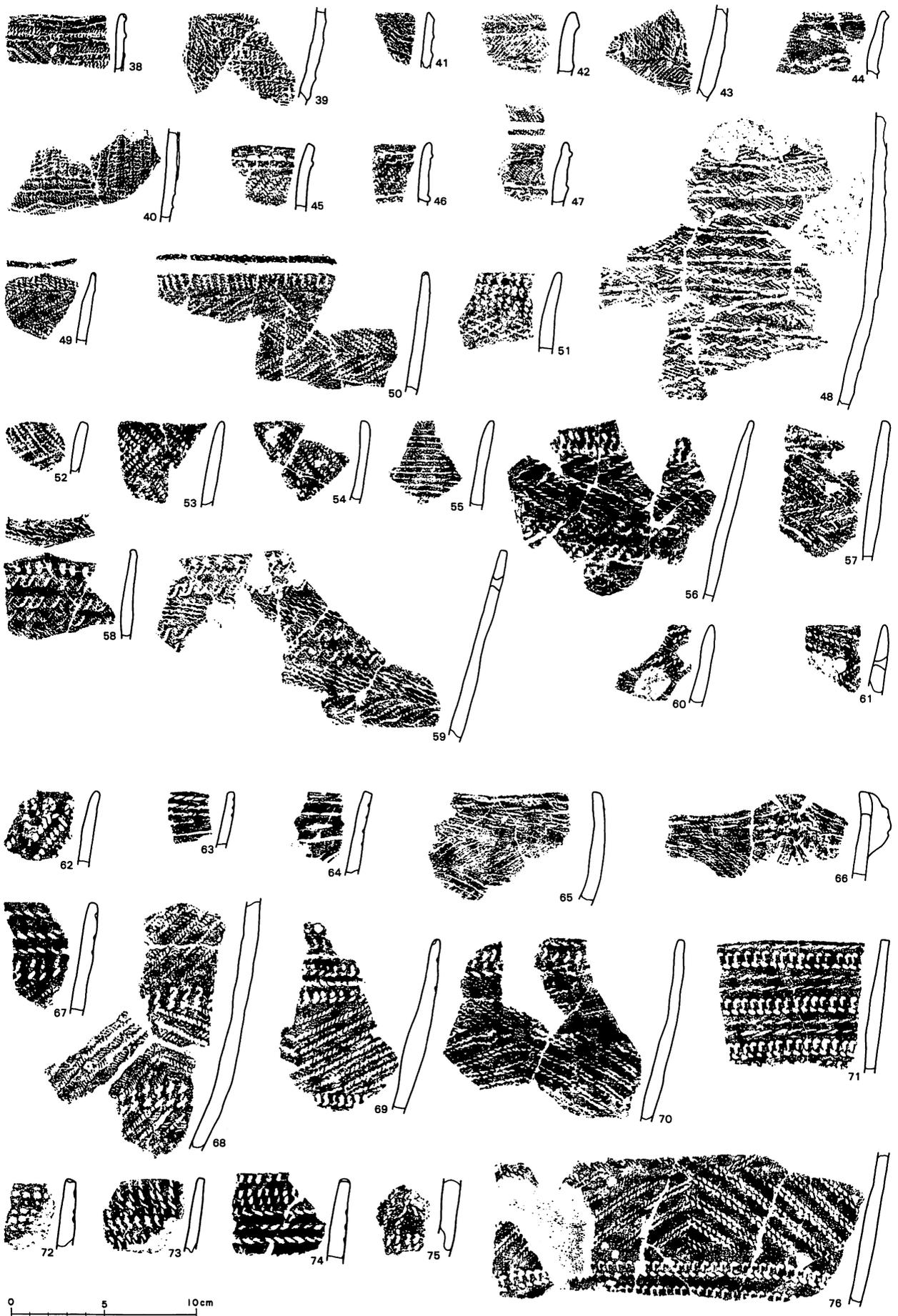




図Ⅱ-3 II黒層出土の土器(1)



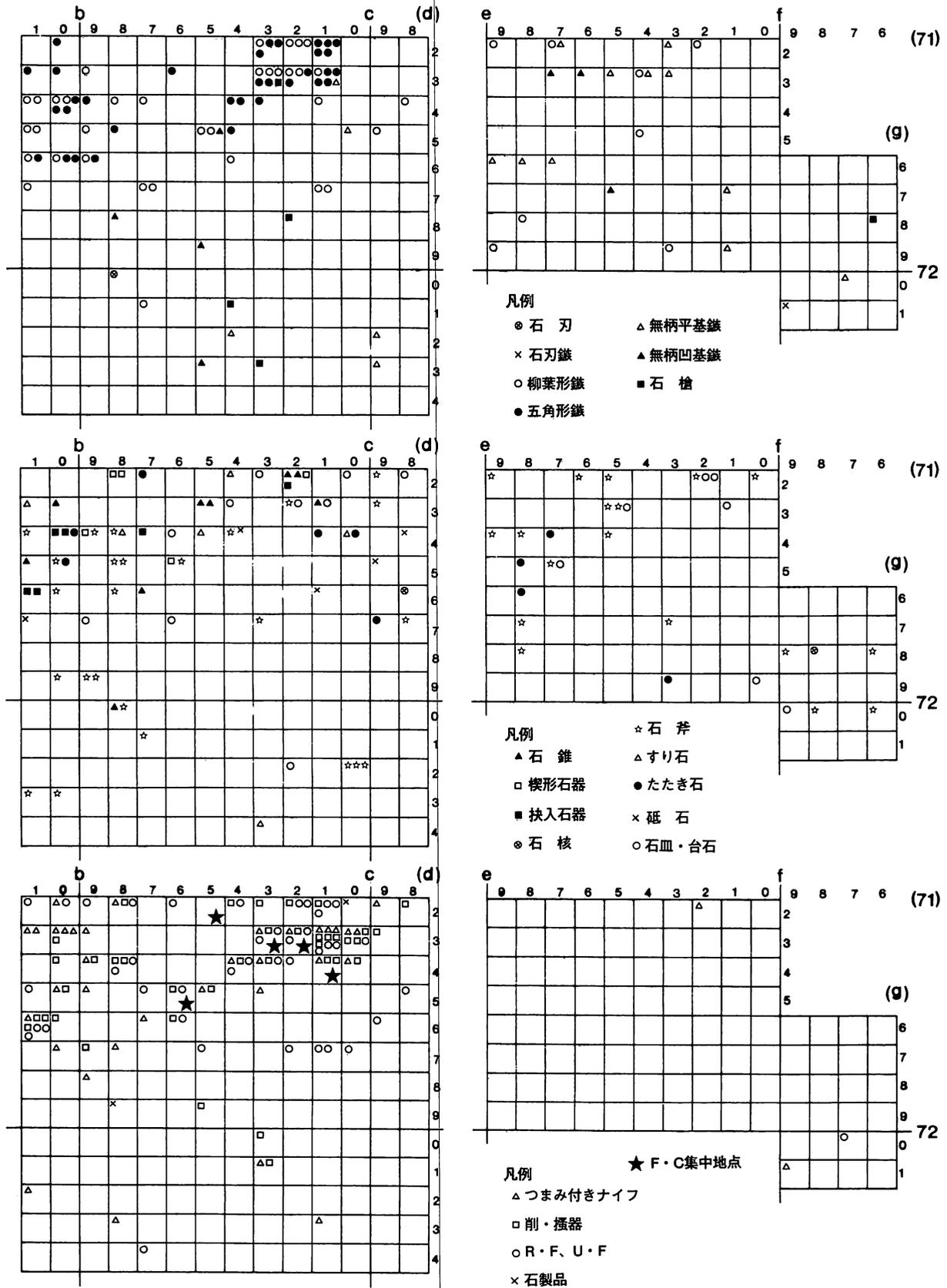
図II-4 II黒層出土の土器(2)



図Ⅱ-5 Ⅱ黒層出土の土器(3)

(2) 石器等 (図II-6~12、図版II-9~12)

石器は剥片等を含めて総数3,177点が出土している。このうち明らかに早期の石器とは考えられないもの41点を除いた3,136点 (うち石器370点) についてここで触れる。



図II-6 II黒層出土の石器類分布

石器の器種別分布は前図に示したとおりで、c-71-13区周辺とb-71-04区周辺の2カ所を中心に、A地区の北側に集中しており、A地区南側及びB地区は全体にまばらである。

以下、器種毎に述べる。

### 石刃

二稜の黒曜石製石刃である。一側縁に刃こぼれ状の剝離がみられる。

### 石刃鏃(1)

二稜の石刃を素材とし、腹面の素材基部側に刃部加工を施している。先端部及び一側縁の一部を欠く。石刃鏃は、昭和63年度の調査でも、f-70区から3点が出土しているが、出土状態は散点的で、伴出遺物も不明である。今回の石刃鏃出土地点も、g-72-81区のはずれであり、周辺からは中茶路式土器片が出土しているのみである。

### 石鏃(2~39)

総出土点数は144点で、形態別には柳葉形が43点、五角形が34点、無柄凹基が16点、無柄平基が7点ある。なお、17点が未製品、27点が形態不明の破損品である。

2~13は柳葉形に分類した石鏃で、木葉形あるいは菱形に近いものも含んでいる。A地区のc-71-22区及びb-71-04区に分布の中心があり、B地区にも散点的にみられる。2は木葉形に近い形態であるが、肉厚で剝離が浅く、先端部もねじれている。五角形鏃の習作の可能性もある。3はほぼ菱形を呈するものである。7は、先端部が欠損したものを反転再加工している。12は典型的な柳葉形鏃で、基部は凹基である。

14~28は五角形を呈するもので、平基と凹基がある。なお、最大幅が先端側にあるものが多く、次いで中央部にあり、明らかに基部側に寄っているものはみられない。分布の中心は柳葉形と同様、c-71-12区及びb-71-04区にあるが、分布範囲はA地区に限られ、B地区からは1点も出土していない。このことから、この形態の石鏃は東釧路Ⅳ式土器に伴うものと言えよう。

29~39は無柄鏃で、29~37は平基、38・39は凹基である。分布はA・B地区とも全体にまばらであるが、無柄鏃と柳葉形・五角形鏃との間には時期差が想定される。

### 石槍(40~42)

4点が出土している。うち3点はA地区南側斜面、1点はB地区東斜面からの出土である。40は珪岩製で、一見有舌尖頭器的であるが、柄の端部が丸く膨らんでおり、前期に属する可能性もある。

### 石錐(43~49)

A地区北側を中心に9点出土してお、B地区からの出土はない。形態別には、基部幅広のものが6点、棒状のものが3点ある。唯一のメノウ製である48は、先端がかなりつぶれており、相当使い込まれた様子が窺えるが、黒曜石製のものには、殆どつぶれはみられない。

### 楔形石器(50・51)

5点の出土でいずれもA地区北側である。石材は全て黒曜石で、側縁或いは基部に原石面を残すものが3点ある。四方に明瞭な使用痕が残されているものは51のみであるが、一側縁、先端を欠いているものも、四方が使用された結果と考えられる。

### 抉入石器(52~56)

楔形石器同様A地区北側からのみの出土で、石材は全て黒曜石である。52は先端に二つの刃部をもつもので、53~56は両側縁の一つずつの刃部をもつものである。いずれも刃部のつぶれは顕著ではない。なお、6点のうち4点が摩耗している。

表II-2 石刃一覽

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備 考
1	c-72-80	21.0	12.7	3.0	1.0	黒曜石		273	二稜、基部欠損、一側縁背面加工、一側縁刃こぼれ状

表II-3 石刃鎌一覽

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備 考
1	g-72-81	30.0	10.5	2.3	1.0	黒曜石	1	314	二稜の石刃使用、先端・基部欠損

表II-4 石鎌(柳葉形)一覽

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備 考
1	b-71-04	14.9	9.0	3.6	0.8	黒曜石		117	先端欠損、凸状部あり
2	04	12.6	6.0	1.5	0.2	黒曜石		115	基部欠損、両面に主利鎌面を残す、反っている
3	06	6.7	8.0	1.4	0.2	黒曜石		204	先端欠損、焼けている
4	14	8.5	8.1	2.0	0.3	黒曜石		66	先端・基部欠損
5	14	24.4	12.3	4.5	1.1	黒曜石	2	67	両面に主利鎌面を残し肉厚、背面に凸状部
6	15	13.0	6.2	2.0	0.4	黒曜石		59	先端欠損、一面に主利鎌面を残す
7	15	28.0	14.0	3.1	1.1	黒曜石	3	120	菱形、一面に主利鎌面を残す
8	16	21.0	7.1	1.8	0.3	黒曜石	4	81	平基
9	17	20.0	11.5	3.0	0.7	黒曜石		247	先端・基部欠損
10	c-71-13	19.7	9.4	3.5	0.8	黒曜石		16	先端欠損、一面に主利鎌面を残す、肉厚
11	14	19.5	9.2	2.2	0.5	黒曜石	5	44	一面に原石面を残す
12	17	34.0	11.3	4.0	1.5	黒曜石		222	平基、先端わずかに欠損
13	17	13.8	9.2	2.0	0.2	黒曜石		223	平基、先端欠損
14	22	19.1	7.3	1.8	0.2	黒曜石	6	142	先端欠損
15	22	13.4	9.2	2.0	0.3	黒曜石		143	先端欠損、一面に原石面を残す
16	22	18.2	9.3	1.7	0.3	黒曜石		145	基部欠損
17	23	21.5	8.4	3.0	0.6	黒曜石	7	154	両面に主利鎌面を残す、先端欠損後反転再製か
18	23	20.0	9.3	2.6	0.6	黒曜石	8	159	先端欠損
19	32	13.5	8.4	2.1	0.2	黒曜石		5	先端欠損
20	33	16.8	10.4	2.2	0.3	黒曜石		29	先端欠損、一側縁欠損、焼けている
21	33	8.3	9.6	2.4	0.4	黒曜石		30	習作か、先端欠損、両面に主利鎌面を残す、基部欠損一側縁未調整、反っている
22	33	17.8	12.0	2.5	0.5	黒曜石		46	先端欠損・基部欠損、焼けている
23	46	20.4	6.4	2.0	0.4	黒曜石		205	平基、先端わずかに欠損
24	55	31.6	8.7	2.6	0.8	黒曜石		198	平基、先端欠損
25	55	13.6	6.6	2.0	0.2	黒曜石		199	基部欠損
26	74	16.9	6.0	2.3	0.5	黒曜石		52	平基、先端欠損(流紋岩球籠部分で折れ)
27	77	16.2	6.0	1.8	0.2	黒曜石		240	基部欠損
28	77	19.3	6.4	2.0	0.2	黒曜石		241	平基、一側縁欠損
29	84	14.6	6.7	2.1	0.2	黒曜石		168	基部・先端わずかに欠損
30	93	14.7	6.0	2.4	0.3	黒曜石		61	先端欠損、一面に主利鎌面を残す
31	95	19.9	7.0	3.0	0.4	黒曜石	9	126	先端わずかに欠損、肉厚
32	96	10.5	6.0	1.3	0.2	黒曜石		68	基部欠損
33	c-72-71	10.0	8.6	1.9	0.2	黒曜石		271	先端欠損・基部欠損
34	d-71-84	22.0	12.1	3.3	1.0	黒曜石		171	先端欠損
35	95	36.4	10.8	2.7	1.2	黒曜石	10	194	平基
36	f-71-22	22.3	9.4	2.2	0.4	黒曜石		276	基部欠損
37	39	12.2	10.2	1.9	0.3	黒曜石		284	凹基、先端欠損
38	43	14.3	11.8	2.8	0.6	黒曜石		301	先端欠損・基部欠損、一面に主利鎌面を残す
39	45	19.0	12.0	1.8	0.5	黒曜石		306	先端欠損・基部欠損
40	72	25.5	8.3	1.9	0.4	黒曜石	11	278	平基・先端わずかに欠損
41	88	40.4	14.5	5.3	3.0	黒曜石		312	一側縁欠損、肉厚
42	92	36.0	9.8	2.2	0.7	黒曜石	12	287	凹基
43	99	22.4	10.5	3.0	0.8	黒曜石	13	285	平基、先端欠損、一面に主利鎌面を残す

表II-5 石鏃(五角形)一覽

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	b-71-02	17.4	6.5	1.5	0.2	黒曜石	14	96	若干凹基気味、柳葉形に近い
2	03	29.0	14.5	4.4	1.9	メノウ	15	102	平基、一面に主刺跡面を残す、肉厚
3	04	13.8	8.2	2.0	0.3	黒曜石		114	凹基、先端側欠損、一面に凸状部を残す
4	04	9.0	7.2	1.8	0.2	黒曜石		116	基部、先端わずかに欠損
5	04	12.4	6.6	2.0	0.2	黒曜石	16	118	平基
6	06	15.6	7.6	1.6	0.2	黒曜石	17	129	平基、先端わずかに欠損、一面に主刺跡面を残す
7	06	14.6	6.5	1.5	0.2	黒曜石		203	若干凹基気味、磨けている
8	13	7.8	6.0	1.7	0.2	黒曜石		105	若干凹基気味
9	16	10.0	6.0	1.7	0.1	黒曜石		78	平基、先端欠損
10	c-71-12	14.3	7.1	1.5	0.1	黒曜石	18	2	若干凹基気味、一面に主刺跡面を残す、有柄に近い
11	12	8.0	13.7	2.2	0.3	黒曜石		60	平基、先端側欠損、両面に主刺跡面を残す
12	12	9.3	10.0	1.5	0.2	黒曜石		251	先端側、基部わずかに欠損
13	12	10.8	9.7	1.4	0.2	黒曜石		252	先端側、基部わずかに欠損
14	12	12.4	8.8	1.4	0.2	黒曜石		253	基部、先端わずかに欠損
15	13	14.6	10.5	2.6	0.3	黒曜石	19	20	平基、先端側が短い、一面に凸状部を残す
16	13	14.5	18.1	3.9	1.7	黒曜石		40	凹基、先端側欠損
17	13	14.2	12.0	1.5	0.3	黒曜石		254	先端、基部欠損
18	13	11.8	8.4	2.0	0.2	黒曜石		255	若干凹基気味、先端から側縁欠損
19	23	15.8	8.3	1.5	0.2	黒曜石	20	153	凹基、先端側が短い、一面に凸状部を残す
20	23	36.4	21.2	2.8	2.3	黒曜石	21	157	若干凹基気味、先端側が短い、一面に主刺跡面を残す
21	32	15.4	6.7	1.4	0.2	黒曜石	22	9	若干凹基気味、側縁わずかに欠損
22	32	13.0	12.6	2.0	0.4	黒曜石		256	先端側、基部わずかに欠損
23	32	17.3	10.0	2.4	0.3	黒曜石		257	凹基、先端わずかに欠損、一面に主刺跡面を残す、反っている
24	33	14.3	5.0	1.3	0.1	黒曜石	23	26	凹基、先端わずかに欠損
25	33	8.6	6.7	1.0	0.1	黒曜石		258	凹基、先端側欠損
26	34	20.3	7.7	2.1	0.2	黒曜石	24	64	凹基、基部から側縁欠損、柳葉形に近い
27	44	8.1	7.0	1.7	0.1	黒曜石	25	134	凹基、基部わずかに欠損
28	44	13.6	7.6	2.0	0.1	黒曜石		259	凹基、先端、基部わずかに欠損
29	45	14.0	9.8	2.4	0.4	黒曜石	26	122	凸基、一面に主刺跡面を残す、全体に刺跡が浅い、習作か
30	63	17.2	7.0	1.5	0.2	黒曜石	27	131	若干凸基気味、基部わずかに欠損、一面に原石面を残す
31	85	14.9	6.9	1.2	0.1	黒曜石	28	184	凹基、先端、基部わずかに欠損
32	94	16.0	11.0	2.0	0.4	黒曜石		54	若干凸基気味、先端欠損
33	96	9.0	7.2	1.5	0.2	黒曜石		69	先端、基部欠損
34	表採	14.9	9.0	2.2	0.2	黒曜石		213	凹基、先端わずかに欠損

表II-6 石鏃(無柄平基)一覽

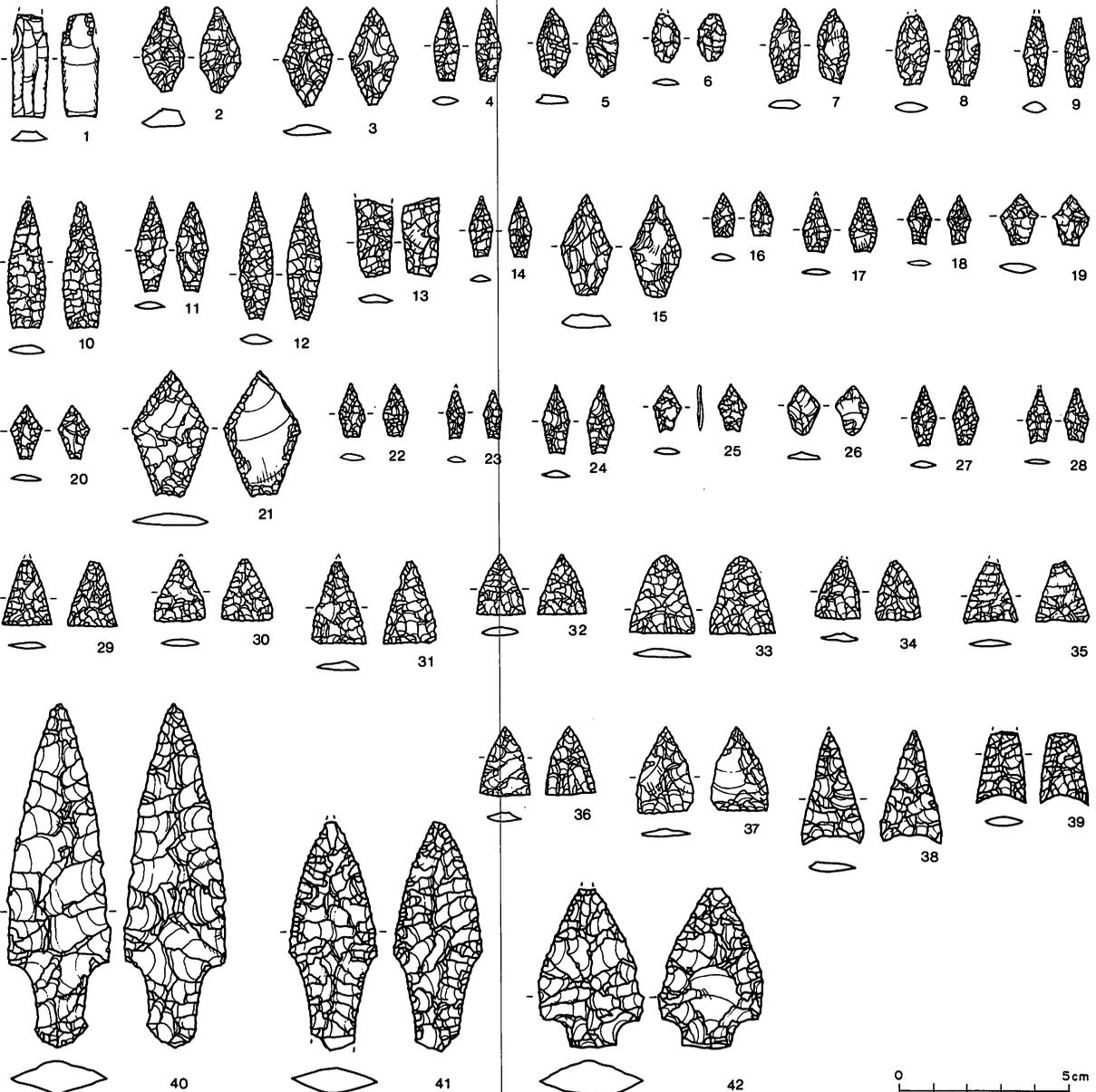
No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	c-71-05	12.4	12.9	2.0	0.4	黒曜石		62	先端欠損
2	23	18.6	13.1	2.0	0.4	黒曜石	29	215	先端わずかに欠損、一面に主刺跡面を残す
3	c-72-42	17.8	14.7	2.3	0.5	黒曜石	30	217	先端わずかに欠損
4	d-72-92	23.7	15.0	2.3	0.9	黒曜石	31	219	側縁、先端わずかに欠損、若干凹基気味
5	93	19.3	14.5	2.3	0.5	黒曜石		218	先端欠損
6	f-71-17	21.5	14.0	2.5	0.8	黒曜石		297	先端欠損
7	19	18.6	14.6	2.1	0.6	黒曜石		283	先端から側縁欠損、一面に主刺跡面を残す
8	32	17.4	13.9	1.9	0.4	黒曜石	32	277	一面に主刺跡面を残す若干残す
9	33	16.7	11.4	2.2	0.5	黒曜石		303	先端から側縁欠損
10	43	15.0	12.0	2.0	0.4	黒曜石		300	先端側欠損、一面に主刺跡面を残す
11	53	22.7	19.0	2.5	1.0	黒曜石	33	304	
12	72	17.8	13.0	1.9	0.4	黒曜石	34	279	先端わずかに欠損
13	76	16.2	11.3	1.7	0.4	黒曜石		321	先端側欠損
14	86	17.6	15.5	2.0	0.5	黒曜石	35	309	先端欠損、若干凹基気味
15	96	20.5	14.4	2.4	0.7	黒曜石	36	308	一面に主刺跡面を残す
16	g-72-70	24.7	16.7	2.9	1.0	黒曜石	37	292	両面に主刺跡面を残す、未製品か

表II-7 石鎌(無柄凹基)一覽

No.	グリッド	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚(㎜)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	c-71-55	33.6	14.9	2.8	1.3	黒曜石	38	123	先端わずかに欠損
2	59	12.8	14.0	2.4	0.3	黒曜石		244	一側欠損
3	88	17.2	13.7	2.8	0.5	黒曜石		248	先端及び一側先端わずかに欠損
4	c-72-53	28.4	16.0	2.8	1.1	黒曜石		89	一面に原石面を残す
5	f-71-57	11.5	14.0	1.6	0.3	黒曜石		294	先端欠損
6	63	30.3	13.5	2.8	0.9	メノウ	39	305	先端欠損
7	73	16.3	12.5	2.4	0.4	黒曜石		307	先端一側欠損

表II-8 石槍一覽

No.	グリッド	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚(㎜)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	c-71-28	100.5	29.9	8.9	19.8	珪石	40	230	有柄凸基、基部縮小
2	c-72-33	66.0	24.8	7.3	10.4	黒曜石	41	220	有柄凸基、基部及び先端わずかに欠損
3	41	55.0	25.0	7.5	7.0	黒曜石		235	有柄凸基、一側欠損再生
4	g-71-68	46.7	30.0	9.9	11.6	黒曜石	42	295	有柄凸基、基部・先端わずかに欠損、一面に原石面を残す



図II-7 II黒層出土の石器(1)

表II-9 石錐一覧

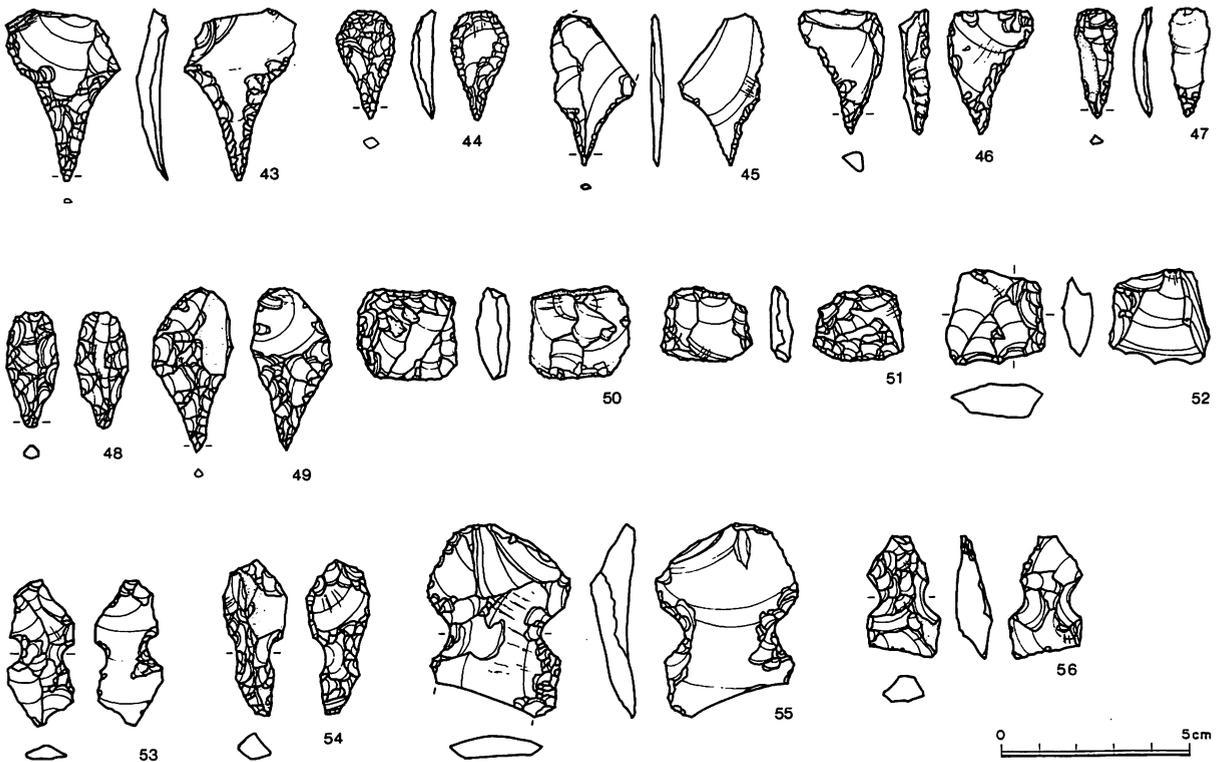
No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	b-71-03	44.3	24.3	5.8	4.6	黒曜石	43	101	基部幅広、反っている、背面に原石面を残す
2	15	26.0	14.7	6.0	2.0	黒曜石	44	130	基部幅広、反っている、背面に原石面を残す
3	c-71-13	39.9	20.8	2.4	1.9	黒曜石	45	17	基部幅広
4	22	31.7	23.8	6.9	3.7	黒曜石	46	140	基部幅広、摩耗
5	22	28.3	10.9	3.2	1.0	黒曜石	47	141	反っている、背面に原石面を残す
6	53	30.0	13.2	6.0	2.6	メノウ	48	34	基部幅広、先端つぶれ
7	53	42.4	20.0	8.6	5.8	黒曜石	49	36	基部幅広、背面に原石面を残す
8	76	34.5	17.0	8.2	3.6	黒曜石		260	背面に原石面を残す、先端つぶれ
9	c-72-80	47.0	19.5	9.0	5.4	黒曜石		272	基部・背面に原石面を残す、先端欠損

表II-10 楔形石器一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	c-71-22	22.4	25.6	8.3	5.8	黒曜石	50	209	両端つぶれ、基部に原石面を残す
2	65	25.0	28.0	6.5	4.7	黒曜石		181	両端つぶれ、一側欠損
3	82	20.9	21.0	9.3	6.0	黒曜石		108	基部・一側縁つぶれ、先端欠損、両側縁に原石面を残す
4	82	17.7	21.6	5.0	2.6	黒曜石	51	109	四方つぶれ
5	94	21.2	16.2	6.0	3.2	黒曜石		267	両端つぶれ、一側縁欠損、一側縁に原石面を残す、若干摩耗

表II-11 抉入石器一覧

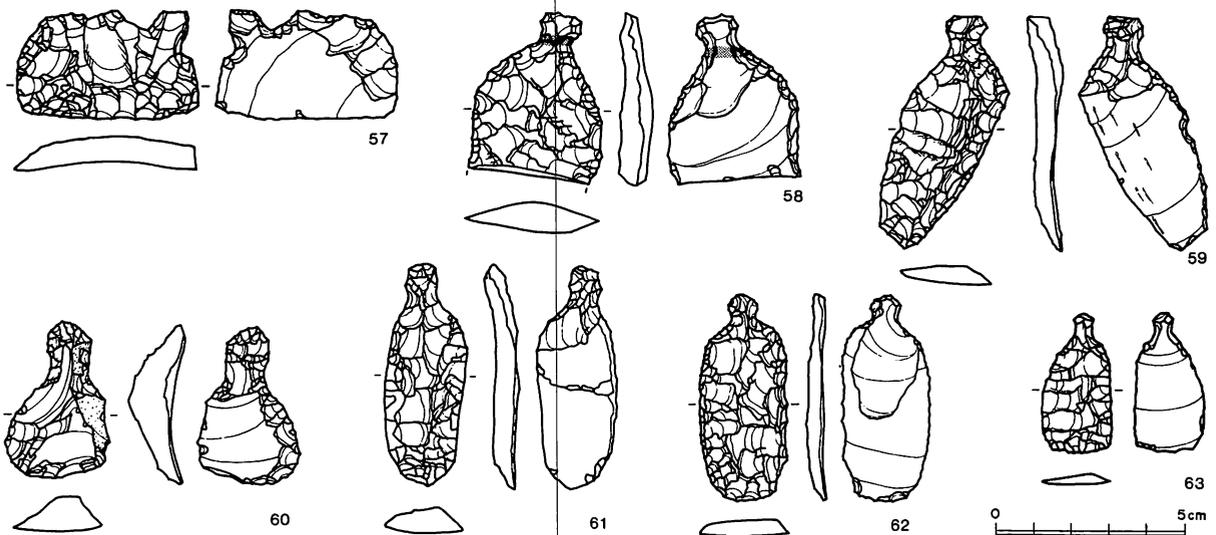
No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	b-71-04	25.6	25.9	7.8	5.2	黒曜石	52	111	先端に二つの刃部、一側縁欠損
2	04	38.7	16.4	5.5	2.8	黒曜石	53	113	両側縁に各一つの刃部、摩耗
3	16	40.8	16.6	11.3	5.8	黒曜石	54	74	両側縁に各一つの刃部、摩耗
4	16	24.2	26.8	6.5	4.5	黒曜石		77	先端・基部に各一つの刃部、摩耗顕著
5	c-71-22	63.0	27.3	9.6	13.8	黒曜石	55	210	両側縁に各一つの刃部、先端欠損、摩耗
6	74	33.8	18.9	8.0	4.6	黒曜石	56	51	両側縁に各一つの刃部



図II-8 II黒層出土の石器(2)

表II-12 つまみ付ナイフ一覽

No.	グリッド	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	b-71-02	38.6	33.0	6.2	8.2	メノウ		95	縦長、先端欠損、一側縁背面・一側縁前面加工
2	03	34.1	21.9	5.0	4.6	メノウ		100	縦長、先端欠損、両側縁背面加工
3	03	82.9	35.0	6.3	20.4	珪質頁岩		104	縦長、一側縁背面・一側縁前面加工
4	03	28.7	48.0	5.5	11.1	珪質頁岩	57	106	横長(縦長の折れたものの再生)、先端背面、基部側・一側縁前面加工
5	05	43.2	34.3	8.3	12.1	珪質頁岩	58	128	縦長、先端欠損、一側縁背面・一側縁前面加工、頂部に紐跡あり
6	07	26.5	23.5	4.0	3.2	珪質頁岩		238	縦長、先端切り出し状、両側縁背面加工
7	13	64.0	23.8	4.8	9.6	珪質頁岩	59	57	縦長、一側縁背面・一側縁前面加工
8	13	26.2	24.0	4.4	3.2	珪質頁岩		58	縦長、先端欠損、一側縁背面・一側縁前面加工
9	16	41.5	26.4	9.9	8.0	黒曜石	60	76	縦長、一側縁前面加工、一側縁無加工で原石面を残す、全体に粗粒、摩耗
10	b-72-12	58.6	20.0	6.5	8.2	珪質頁岩	61	99	縦長、両側縁背面加工、極度に摩耗
11	c-71-03	24.1	25.5	4.3	3.0	珪質頁岩		172	縦長、先端欠損、一側縁背面・一側縁前面加工
12	03	54.3	20.5	5.0	7.3	流紋岩		175	縦長、先端欠損、一側縁背面・一側縁前面加工
13	04	54.9	23.0	4.6	6.8	珪質頁岩	62	189	縦長、両側縁背面加工
14	13	36.5	18.4	2.3	2.4	珪質頁岩	63	18	縦長、一側縁背面・一側縁前面加工
15	13	50.5	20.9	4.5	5.7	珪質頁岩	64	21	縦長、両側縁背面加工
16	13	37.9	23.4	5.0	4.4	黒曜石	65	23	縦長、両側縁背面加工、先端つぶれ、両側縁刃こぼれ状、若干摩耗
17	14	83.3	23.8	7.1	18.6	黒曜石	66	45	縦長、先端切り出し状、両側縁背面加工、両側縁つぶれ、摩耗
18	23	39.6	31.1	6.1	7.6	黒曜石	67	158	縦長、両側縁背面加工、先端・両側縁つぶれ、摩耗
19	33	46.2	20.0	7.8	6.3	珪質頁岩		28	縦長、一側縁背面・一側縁前面加工
20	34	23.1	49.5	3.9	5.8	黒曜石		48	横長、つまみ部・先端欠損、基部側・両側縁背面加工
21	35	61.6	28.0	5.4	11.8	珪質頁岩		121	縦長、一側縁背面・一側縁前面加工
22	44	49.9	22.0	5.5	6.4	メノウ	68	133	縦長、一側縁背面・一側縁前面加工
23	55	80.7	45.0	6.7	26.4	珪質頁岩		200	縦長、先端欠損、一側縁背面・一側縁前面加工
24	76	65.8	26.8	5.8	11.0	珪質頁岩		70	縦長、両側縁背面加工
25	82	42.0	14.0	5.0	3.6	メノウ	69	110	縦長、先端切り出し状、一側縁背面・一側縁前面加工
26	87	26.2	19.0	4.1	2.0	黒曜石		269	縦長、つまみ部・先端欠損、一側縁前面加工、未製成製品か
27	93	82.9	25.9	6.0	18.5	珪質頁岩	70	37	縦長、先端切り出し状、両側縁背面加工
28	94	70.2	34.4	5.0	13.2	珪質頁岩		53	縦長、先端切り出し状、一側縁背面・一側縁前面加工
29	95	26.3	14.6	4.8	1.8	メノウ	71	125	細くて鋭利
30	98	47.7	19.0	6.5	6.3	珪質頁岩		84	縦長、一側縁背面・一側縁前面加工、摩耗
31	c-72-13	78.0	30.0	6.5	16.8	黒曜石		221	縦長、先端欠損、一側縁前面加工、摩耗
32	31	51.5	35.1	6.0	13.4	珪質頁岩		232	縦長、つまみ部・先端欠損、一側縁背面・一側縁前面加工
33	83	36.0	52.5	4.0	9.7	黒曜石		274	横長、つまみ部・一側縁欠損、一側縁切り出し状、基部側・先端背面・一部前面加工
34	d-71-92	32.8	19.3	4.2	2.5	メノウ		169	縦長、一側縁背面・一側縁前面加工
35	f-71-22	56.2	27.0	5.5	11.7	珪質頁岩	72	275	縦長、先端欠損、一側縁背面・一側縁前面加工
36	g-72-91	59.0	18.6	10.4	12.0	メノウ	73	286	縦長、先端切り出し状、一側縁背面・一側縁前面加工、肉厚、先端側が反っている



図II-9 II黒層出土の石器(3)



図II-10 II黒層出土の石器(4)

表II-13 削・搔器一覧

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	b-71-03	27.0	22.4	4.6	3.8	珪質頁岩		103	基部側欠損、一側縁背面・一側縁前面加工、つまみ付きナイフ先端側か
2	04	27.2	6.5	8.4	3.8	黒曜石		112	エンドスクレイパー、背面に原石面を残す
3	05	38.9	20.0	5.4	4.5	黒曜石	74	127	楕円形、全周前面加工、背面に原石面を残す
4	06	33.0	36.7	6.0	10.2	珪質頁岩		202	基部側・一側縁欠損、先端・一側縁背面加工
5	16	25.4	13.0	7.0	2.6	黒曜石		75	楕円形、全周背面加工、基部・先端・一側縁つぶれ、楔形石器に転用か
6	16	52.4	26.8	9.4	16.7	珪質頁岩	75	79	基部・先端欠損、両側縁前面加工
7	16	48.4	37.2	5.8	13.8	珪質頁岩		216	基部側欠損、一側縁背面・一側縁前面加工
8	c-71-03	60.0	44.4	11.2	41.4	珪質頁岩	76	173	エンド・サイドスクレイパー、先端から一側縁に原石面を残す
9	03	33.8	36.0	8.9	13.8	珪質頁岩		174	一側縁から先端の一部に背面加工
10	03	31.7	39.0	8.3	10.2	黒曜石		176	一側縁から先端背面加工、一側縁から先端腹面加工
11	04	32.6	23.0	5.5	3.0	黒曜石		196	先端欠損、一側縁背面加工、背面に原石面を残す
12	12	32.0	31.4	10.0	10.4	黒曜石	77	3	ラウンドスクレイパー
13	13	35.8	40.0	17.8	29.5	黒曜石	78	15	エンド・サイドスクレイパー、腹面摩耗
14	13	29.6	28.0	5.9	6.2	黒曜石	79	19	ラウンドスクレイパー
15	13	28.0	24.4	4.8	3.8	珪質頁岩	80	72	ラウンドスクレイパー
16	13	44.6	26.0	6.8	10.6	黒曜石	81	85	先端切り出し状、一側縁背面加工、若干摩耗
17	14	29.2	30.6	11.3	10.5	黒曜石		42	ラウンドスクレイパー、背面に原石面を残す
18	14	28.1	20.6	6.3	4.3	黒曜石	82	43	ラウンドスクレイパー
19	22	50.3	33.6	15.6	27.3	メノウ	83	146	一側縁背面加工
20	23	25.7	18.9	6.0	2.8	黒曜石		162	先端・基部・一側縁背面加工、硬皮片使用
21	32	41.5	24.0	10.2	13.0	黒曜石	84	4	エンド・サイドスクレイパー
22	33	26.2	34.2	5.0	4.6	珪質頁岩		249	先端・基部側欠損、先端切り出し状、両側縁前面加工
23	34	45.6	20.0	5.9	7.3	黒曜石		214	基部側欠損、先端切り出し状、両側縁背面加工
24	42	38.7	18.6	4.8	4.1	黒曜石		91	基部欠損、つまみ付きナイフ片か、先端・両側縁背面加工、先端つぶれ
25	44	22.2	32.0	5.4	5.5	珪質頁岩		206	中央部片、両側縁背面加工
26	55	29.6	20.9	7.7	6.7	黒曜石		201	先端部片、背面加工、ラウンドスクレイパーか
27	59	42.0	38.3	17.2	31.8	黒曜石		245	ラウンドスクレイパー、先端に原石面を残し基部側に刃部加工、腹面に調整加工あり
28	65	27.6	19.8	5.3	3.8	メノウ		179	中央部片、一側縁背面・一側縁前面加工、つまみ付きナイフ片か
29	66	60.0	35.0	7.4	20.4	珪質頁岩		192	先端切り出し状、先端から一側縁背面加工
30	82	42.8	24.5	5.3	7.6	珪質頁岩		250	先端・一側縁背面・一側縁前面加工、つまみ付きナイフ片か
31	84	52.2	28.3	6.5	12.3	珪質頁岩		164	基部側欠損、一側縁背面・一側縁前面加工、つまみ付きナイフ片か
32	94	27.4	18.6	5.0	2.5	黒曜石		266	先端切り出し状、先端から両側縁前面加工
33	97	35.6	26.4	3.8	4.0	黒曜石		246	基部・先端欠損、一側縁切り出し状、一側縁背面・先端・一側縁前面加工
34	c-72-30	20.5	14.2	3.7	1.5	珪質頁岩	85	87	爪形、先端背面・基部・両側縁前面加工
35	31	19.0	14.0	3.0	1.2	珪質頁岩		233	爪形、一側縁背面・先端・基部・一側縁前面加工
36	d-71-82	43.5	37.2	14.3	23.4	石質不明		148	ラウンドスクレイパー
37	93	31.0	21.2	6.6	5.1	メノウ		86	爪形、先端背面・基部・両側縁前面加工
38	表採	54.7	31.1	9.8	22.5	珪質頁岩		87	爪形、基部・一側縁背面加工、一側縁前面・一部背面加工

つまみ付きナイフ (57~73)

36点あり、うち34点がA地区からの出土である。集中する地点は、柳葉形・五角形鏃同様c-71-13区及びb-71-03区である。石材は珪質頁岩が主体で、メノウ・黒曜石が次ぐ。57は、破損した縦長のつまみ付きナイフの側縁部に、つまみ部を再加工し横長としたもので、本来的に横長の形態をとるものは、遺物No. 48・274の2点のみである。つまみ部から先端にかけてが直線的なものは、先端が平坦もしくは丸みを帯びており、つまみ部から先端にかけてが斜めのものは、先端を切り出し状に作出していくようである。58の頸部には紐跡と思われる茶褐色の付着物(図中にスクリーン tone で表示)が廻っている。60は原石面を残す肉厚の剝片を素材としたもので、腹面の一側縁に丁寧な加工を施しているが、背面の加工は粗雑である。61は刃部の全周が極度に摩耗して滑らかになっており、腹面も同様に摩耗しており、すり跡が目立つ。これは、後天的な摩耗ではなく、意図的に用いられた結果によるものと考えられる。

表II-14 R・F一覽

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	b-71-02	29.1	31.5	6.4	9.2	メノウ		97	基部側欠損、一側縁背面加工
2	12	29.6	18.5	7.2	3.3	黒曜石		39	先端部片、背面加工
3	15	33.9	22.8	8.3	7.8	黒曜石		119	基部・両側縁背面加工、摩耗
4	16	33.0	26.9	9.3	8.5	黒曜石		73	一側縁背面加工、焼けている
5	16	26.2	23.4	10.5	6.2	黒曜石	88	88	基部から一側縁背面、先端から両側縁背面加工、背面に原石面を残す
6	16	15.0	10.1	5.3	0.7	黒曜石		80	先端部片、背面加工
7	c-71-03	32.4	23.5	5.2	4.2	珪質頁岩		177	側縁部片、両面加工
8	07	40.4	26.0	7.0	6.6	黒曜石		226	先端切り出し状、両側縁背面加工
9	12	30.0	41.4	13.5	10.8	黒曜石	89	12	基部・先端背面・一側縁刃こぼれ状、先端・背面両側縁に原石面を残す
10	12	26.6	10.7	3.4	1.3	黒曜石		10	先端から側縁部片、背面加工
11	13	19.8	27.8	4.9	3.8	珪質頁岩		41	中央部片、両側縁背面加工
12	13	20.8	14.7	3.2	1.0	黒曜石		14	楕長、一側縁欠損、先端・基部背面加工、若干摩耗
13	13	29.2	12.8	4.0	1.8	黒曜石		22	破片、両面加工、一面に原石面を残す、焼けている
14	17	44.0	40.3	8.9	16.0	メノウ		224	先端・一側縁欠損、一側縁背面加工
15	17	44.5	39.8	11.1	23.3	メノウ		225	先端欠損、一側縁背面加工、背面に原石面を残す
16	22	19.3	8.6	2.4	0.5	黒曜石		144	基部片、両面加工、背面に原石面を残す
17	22	43.4	23.6	8.3	7.6	黒曜石		322	先端・一側縁背面加工、一側縁に原石面を残す、若干摩耗
18	23	19.0	14.7	4.0	0.9	黒曜石		156	基部片、両面加工、背面に原石面を残す
19	23	12.2	13.9	3.0	0.8	珪質頁岩		323	先端部片、背面加工
20	24	31.7	16.3	5.0	2.6	黒曜石		186	基部片、背面加工、基部に原石面を残す
21	33	25.5	31.8	10.7	11.8	珪質頁岩		27	基部片、両面加工、基部に原石面を残す
22	33	29.4	16.0	9.3	3.7	黒曜石		24	先端から一側縁欠損、先端から一側縁背面加工、背面に原石面を残す
23	34	40.0	22.9	5.8	5.4	黒曜石		65	先端欠損、両側縁背面加工、若干摩耗
24	42	21.2	24.6	5.5	3.5	黒曜石		90	先端部片、背面加工、若干摩耗
25	44	37.7	14.3	9.7	4.7	黒曜石		137	側縁部片、両面加工
26	57	46.7	20.5	12.7	9.0	黒曜石		237	破片、一側縁背面加工、つぶれ、焼けている
27	65	22.3	15.4	2.7	1.2	黒曜石		180	先端欠損、基部から両側縁背面加工、背面に原石面を残す
28	66	27.7	12.5	4.6	1.3	黒曜石		191	側縁部片、背面・一部両面加工
29	75	29.1	19.8	6.9	2.3	黒曜石		124	側縁部片、背面加工
30	82	26.2	16.0	6.7	3.2	黒曜石		261	先端欠損、一側縁背面加工
31	84	29.6	23.0	11.3	6.4	黒曜石		166	先端背面加工、基部・側縁・一側縁に原石面を残す、摩耗
32	84	30.0	18.4	5.5	3.0	黒曜石		264	側縁部片、側面加工、背面に原石面を残す
33	92	17.4	23.7	4.2	1.6	黒曜石		7	先端部片、切り出し状、一側縁背面・一側縁側面加工、若干摩耗
34	c-72-74	63.6	27.0	5.5	11.6	珪質頁岩		98	一側縁背面加工、若干摩耗
35	d-71-85	22.6	27.4	9.7	6.2	黒曜石		265	楕長、一側縁刃こぼれ状、一側縁・背面に原石面を残す、摩耗した利片を使用
36	96	42.4	37.4	10.5	13.9	メノウ		212	先端欠損、一側縁・基部背面・一部側面加工
37	g-72-70	43.8	15.0	3.8	2.9	黒曜石		290	一側縁背面加工、一側縁刃こぼれ状

表II-15 U・F一覽

No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	c-71-12	22.0	18.0	6.4	2.6	黒曜石		11	一側縁刃こぼれ状、基部・背面に原石面を残す、摩耗
2	23	23.8	16.2	3.9	1.6	黒曜石		155	先端から一側縁刃こぼれ状、若干摩耗
3	27	22.8	20.0	4.0	1.9	黒曜石		229	先端・両側縁刃こぼれ状、背面に原石面を残す
4	44	34.4	19.4	3.0	1.6	黒曜石		136	一側縁刃こぼれ状、焼けている
5	62	24.5	11.7	3.6	1.3	黒曜石		94	先端欠損、一側縁刃こぼれ状

表II-16 石核一覽

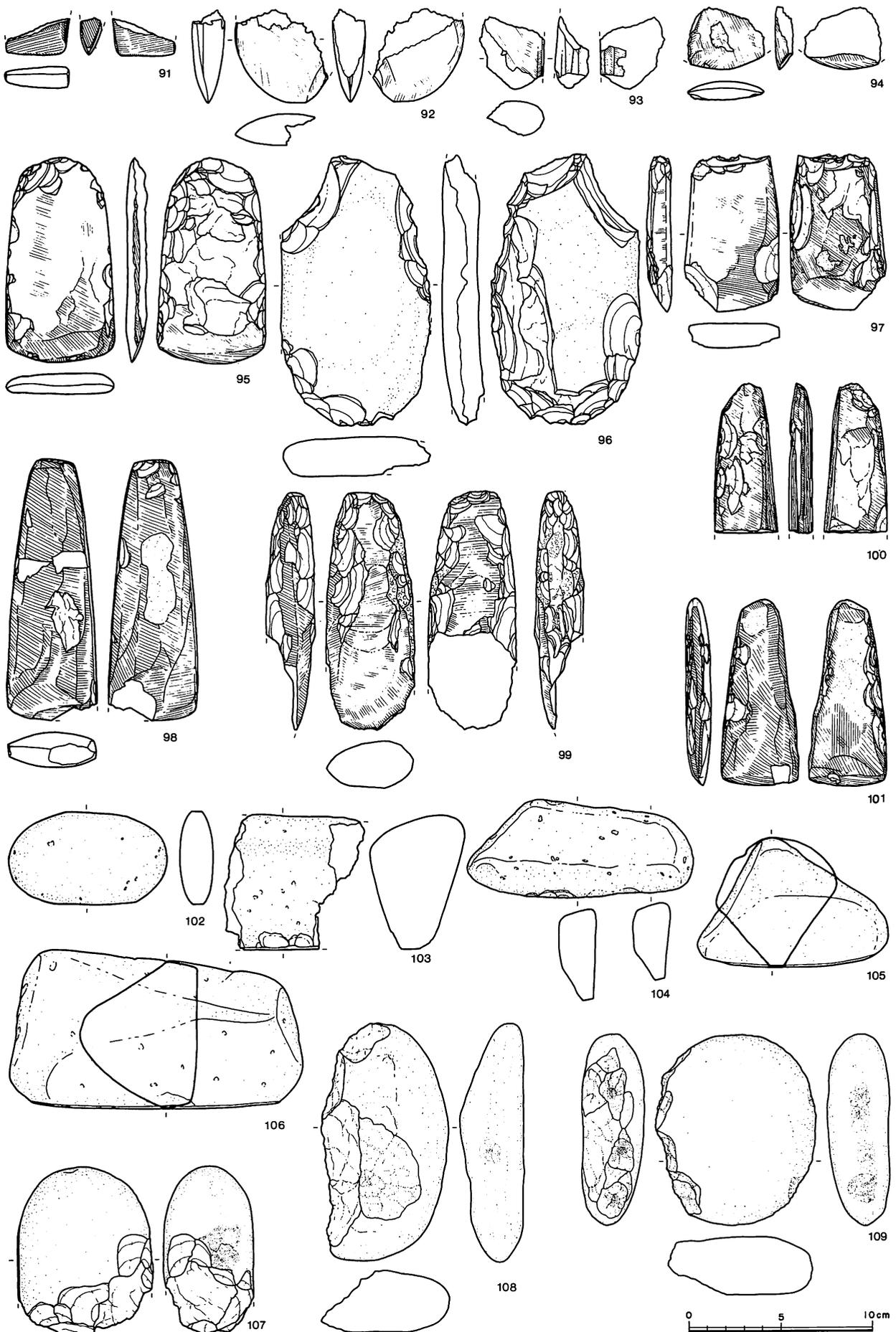
No.	グリッド	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	d-71-86	32.6	23.6	12.1	9.7	黒曜石		193	一面に原石面を残す
2	g-71-88	25.8	23.0	8.8	4.5	黒曜石	90	315	二面に原石面を残す

表II-17 石斧一覽

No.	グリッド	長さ(m)	高さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備	考
1	b-71-05	18.4	33.0	11.7	8.0	8.0	泥岩	91	3	刃部片、両刃、磨き	
2	06	51.4	44.5	17.8	43.2	43.2	蛇紋岩?	92	42	刃部片、両刃、磨製、片減りしている	
3	09	26.0	19.0	7.7	3.6	3.6	泥岩		65	刃部片、両刃、磨き	
4	14	42.4	31.7	17.0	22.1	22.1	蛇紋岩?	93	4	側部片、磨き	
5	b-72-03	28.5	23.0	1.8	2.0	2.0	泥岩		72	背部片、磨き	
6	13	21.8	23.8	13.0	6.6	6.6	泥岩		69	刃部片、両刃、磨き	
7	c-71-23	41.9	33.0	8.8	16.4	16.4	泥岩	94	17	刃部片、両刃、磨き	
8	37	63.4	50.0	22.8	119.2	119.2	泥岩		53	両刃、基部欠損、敲打調整後磨き	
9	44	16.7	10.5	3.1	0.6	0.6	珪岩		13	背部片、磨き	
10	65	110.5	58.5	10.0	102.0	102.0	泥岩	95	40	両刃、敲打調整後一面・刃部磨き	
11	84	37.3	21.2	8.9	8.3	8.3	泥岩		108	基部片、磨き	
12	85	145.6	79.9	20.6	380.0	380.0	泥岩	96	28	敲打調整	
13	85	10.6	19.6	2.0	0.6	0.6	泥岩		61	背部片、磨き	
14	86	14.5	9.4	1.1	0.3	0.3	泥岩		32	背部片、磨き	
15	94	60.3	50.0	13.0	30.2	30.2	泥岩?		60	背部片?、無調整	
16	99	62.1	62.2	16.2	105.4	105.4	片岩		67	刃部片、両刃、磨き	
17	99	82.6	51.4	13.0	103.9	103.9	泥岩	97	68	基部欠損、片刃、擦り切り、磨き	
18	c-72-02	21.5	20.4	8.9	5.1	5.1	泥岩		45	背部片、磨き	
19	02	20.3	24.4	12.4	4.2	4.2	片岩		109	背部片、磨き	
20	02	22.9	16.8	3.6	2.3	2.3	片岩		110	背部片、磨き	
21	71	141.4	48.1	19.3	209.0	209.0	泥岩	98	57	両刃、磨製	
22	80	28.6	24.0	4.3	4.1	4.1	千枚岩		70	背部片、磨き	
23	d-71-87	7.3	13.1	2.4	0.4	0.4	泥岩		51	背部片、磨き	
24	92	9.6	13.0	1.5	0.3	0.3	砂岩		23	基部片、磨き	
25	93	13.5	15.0	3.0	0.6	0.6	片岩		26	背部片、磨き	
26	f-71-02	18.7	11.4	2.0	0.6	0.6	泥岩		74	背部片、磨き	
27	22	48.5	39.4	21.9	38.8	38.8	泥岩?		76	基部片、磨き	
28	37	33.0	50.0	10.7	25.7	25.7	泥岩		85	刃部片、両刃、磨き	
29	52	38.6	32.3	11.6	13.4	13.4	泥岩		78	基部片、磨き	
30	53	64.8	49.3	18.4	104.2	104.2	泥岩		80	刃部片、両刃、敲打調整後磨き	
31	53	12.4	20.5	6.0	2.4	2.4	泥岩		94	基部片、磨き	
32	54	128.0	47.4	27.5	208.0	208.0	泥岩	99	98	刃部欠損、敲打調整後磨き	
33	62	57.4	41.7	17.5	84.2	84.2	泥岩		79	刃部片、両刃、磨き	
34	75	28.5	33.2	10.8	17.0	17.0	泥岩		89	基部片、磨き	
35	84	29.3	36.3	18.7	20.3	20.3	泥岩		102	刃部片、両刃、磨き	
36	87	11.0	20.0	2.9	1.0	1.0	蛇紋岩		100	背部片、磨き	
37	88	31.8	33.4	6.6	8.2	8.2	泥岩		97	背部片、磨き	
38	92	66.0	32.4	13.3	41.4	41.4	泥岩		83	基部から側部片、磨き	
39	94	41.7	54.0	21.2	66.9	66.9	砂岩		95	刃部片、両刃、磨き	
40	g-71-68	80.0	23.0	12.5	56.0	56.0	泥岩	100	87	刃部欠損、擦り切り、敲打調整後磨き	
41	98	21.0	24.3	3.0	1.4	1.4	泥岩		101	刃部片、両刃、磨き	
42	g-72-60	100.0	42.0	12.7	86.4	86.4	泥岩	101	86	片刃、敲打調整後磨き	
43	60	8.0	25.0	4.0	0.9	0.9	泥岩		111	背部片、磨き	
44	80	11.5	18.4	3.3	0.8	0.8	片岩		112	刃部片、磨き	

表II-18 すり石一覽

No.	グリッド	長さ(m)	高さ(m)	幅(m)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備	考
1	b-71-13	85.5	49.9	18.0	126.0	安山岩	102	113	扁平楕円形使用、上下縁無調整で使用	
2	c-71-04	67.2	74.3	47.0	333.7	安山岩	103	39	断面三角形、下縁敲打調整後使用、上縁無調整で使用、両端欠損	
3	42	181	84.5	38.0	887	砂岩		62	扁平長楕円形使用、下縁敲打調整後使用	
4	54	121.6	52.0	22.5	201.0	安山岩	104	114	断面三角形、下縁敲打調整後使用	
5	84	102.2	72.5	53.0	402.0	砂岩	105	20	断面三角形、下縁無調整で使用	
6	c-72-34	157.3	83.8	63.8	1279	安山岩	106	7	断面三角形、上下縁無調整で使用	



図Ⅱ-11 Ⅱ黒層出土の石器(5)

表II-19 たたき石一覧

No.	グリッド	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備 考
1	b-71-04	182.0	46.2	21.6	353.0	砂岩		2	扁平楕円形使用。一面・両側縁に浅い凹打痕
2	05	131.9	68.0	38.2	479.4	砂岩	107	41	楕円形使用。一面に大きな凹打痕。一側縁に利痕
3	c-71-04	104.0	85.0	35.0	472.0	安山岩	108	38	扁平円形使用。一側縁に凹打痕。一側縁に利痕
4	14	90.8	72.6	51.4	465.0	砂岩	109	6	一側縁に凹打痕。他側縁すり石として使用。一側縁に利痕
5	72	102.8	79.0	26.5	276.0	砂岩	110	1	扁平楕円形使用。両面・一端・両側縁に凹打痕
6	d-71-97	71.4	63.5	21.2	158.3	流紋岩		49	扁平円形使用。一側縁に凹打痕
7	f-71-39	101.2	69.2	33.8	287.0	片麻岩		81	一側縁から両側縁に利痕
8	74	148.2	90.4	60.1	950	安山岩		105	一面・一側縁に凹打痕
9	85	72.3	64.0	56.3	370.0	砂岩	111	103	サイコロ形に分割した形使用。両面・一側縁に凹打痕
10	86	80.6	64.0	20.8	193.1	片麻岩		96	一側縁に凹打痕

表II-20 砥石一覧

No.	グリッド	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備 考
1	b-71-17	20.6	44.2	46.6	50.0	砂岩	112	106	破片。一面使用。石皿片か
2	44	32.6	43.0	15.6	36.8	砂岩	113	12	破片。二面使用
3	c-71-16	51.0	28.4	10.0	13.8	片麻岩		115	破片。一面使用。石皿片か
4	d-71-84	119.4	70.8	34.2	273.4	砂岩		31	一面使用
5	95	28.1	41.5	19.8	23.7	砂岩	114	37	破片。一面使用

表II-21 石皿・台石一覧

No.	グリッド	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備 考
1	c-71-02	75.4	56.0	30.9	148.6	凝灰岩		15	破片。一面みがき
2	13				4372	凝灰岩		5	一面みがき
3	23	101.4	96.2	41.7	701	凝灰岩	115	16	破片。一面みがき
4	32	134.7	96.6	41.1	742	安山岩	116	107	破片。一面すりくぼみ。一面みがき
5	43	83.4	63.8	38.8	259.0	凝灰岩		11	破片。一面みがき
6	64	(80)	(60)	(20)	(62)	砂岩		64	破片。一面みがき。接合不能
7	67	80.7	73.8	59.4	590	安山岩		56	破片。一面すりくぼみ。一面みがき
8	97	196.2	172.4	54.8	2444	砂岩		59	一面みがき
9	c-72-22	134.8	62.4	25.5	333.4	凝灰岩		46	破片。一面すりくぼみ
10	d-71-82	97.2	89.0	39.7	558	凝灰岩		14	破片。一面みがき
11	f-71-09	116.0	79.6	60.6	648	安山岩		116	破片。一面みがき
12	13	62.0	49.3	21.0	86.6	安山岩		91	破片。一面みがき
13	22	132.0	68.0	56.7	443.0	砂岩		75	破片。一面凹打痕か
14	22	126.5	97.8	54.0	958	砂岩		77	一面凹打痕か
15	53	53.0	49.4	26.4	126.2	安山岩		93	破片。一面みがき
16	75	92.5	63.0	19.2	115.3	安山岩		90	破片。一面みがき
17	g-72-90	70.5	80.6	84.8	615	安山岩	117	99	破片。一面すりくぼみ・凹打痕

削・搔器 (74~87)

38点あり全てA地区からの出土である。なお、このうち5点はつまみ付きナイフの欠損品の可能性がある。出土地点は、c-71-13区周辺及びb-71-16区を中心とするA地区北側が大半を占め、B地区からの出土はない。石質は黒曜石、珪質頁岩が主体である。74は原石面を残す剥片を素材としたもので、楕円形を呈し、腹面にも加工がみられる。75は先端を欠いているが、両面加工のナイフで、図の挟りの部分より上が柄になろう。76・78・84は先端から一側縁に刃部をもつ搔器で、78の腹面にはすり跡がみられる。77・79・80・82はラウンドスクレイパーである。80・82は腹面の基部側にも加工がみられるが、これは次に示す爪形に通ずる要素と思われる。85~87は爪形の形態を呈するもので、腹面の基部側に調整剝離を施している点の特徴である。また、3点が珪質頁岩、1点がメノウと、黒曜石以外の石材が選択されているようである。

**R・F、U・F (88・89)**

R・F (器種の特定できない破損品を含む)は36点、U・Fは5点ある。A地区南側とB地区からは、R・F各1点が出土しているのみで、他は全てA地区北側からの出土である。

**石核 (90)**

A・B地区からそれぞれ1点が出土しているが、いずれも遺物の希薄な地点からの出土であり、剥片の集中地点とも離れている。

**石斧 (91~101)**

44点の大半が破片である。出土地点はA・B地区ともまばらであるが、他の石器類ほどA地区北側に集中する傾向はみられない。石材が泥岩が主で、片岩がそれに次ぐ。製作技法は、敲打剥離のもの(96)、敲打剥離と、刃部を主とした磨きによるもの(95)、敲打剥離後全面に丁寧な磨きが施されるもの(57・87)があり、擦り切りは97と100にみられる。

**すり石 (102~106)**

A地区北側から5点、南の沢内から1点が出土している。102は偏平楕円礫の両側縁をそのまま使用しているもので、103~106は早期に特徴的な、断面三角形を呈する礫を素材としているものである。103・104・106は下縁を敲打調整した後すり面としているが、105は無調整で使用している。また103・106は、上縁も無調整のまま使用されている。

**たたき石 (107~111)**

A地区北側から6点が、B地区から4点が出土している。石質、形状、使用面ともまちまちであるが、所謂「トチむき石状」に使い込まれているものはない。

**砥石 (112~114)**

A地区北側から5点出土しており、4点は砂石、1点は片麻石を素材としている。

**石皿・台石 (115~117)**

17点が出土しているが、分布はまばらで、すり石・たたき石とセットで出土しているものはない。石材は砂岩・安山岩・凝灰岩の三種である。遺物No. 5は、破片が散乱したような状態で出土したもの、また、遺物No. 59は破片が三段に積み重なったような状態で出土したものをそれぞれ復元し、写真図版に示した。

**剥片集中地点**

A地区北側で、5カ所の剥片集中地点を確認した。いずれも石核は出土していない。

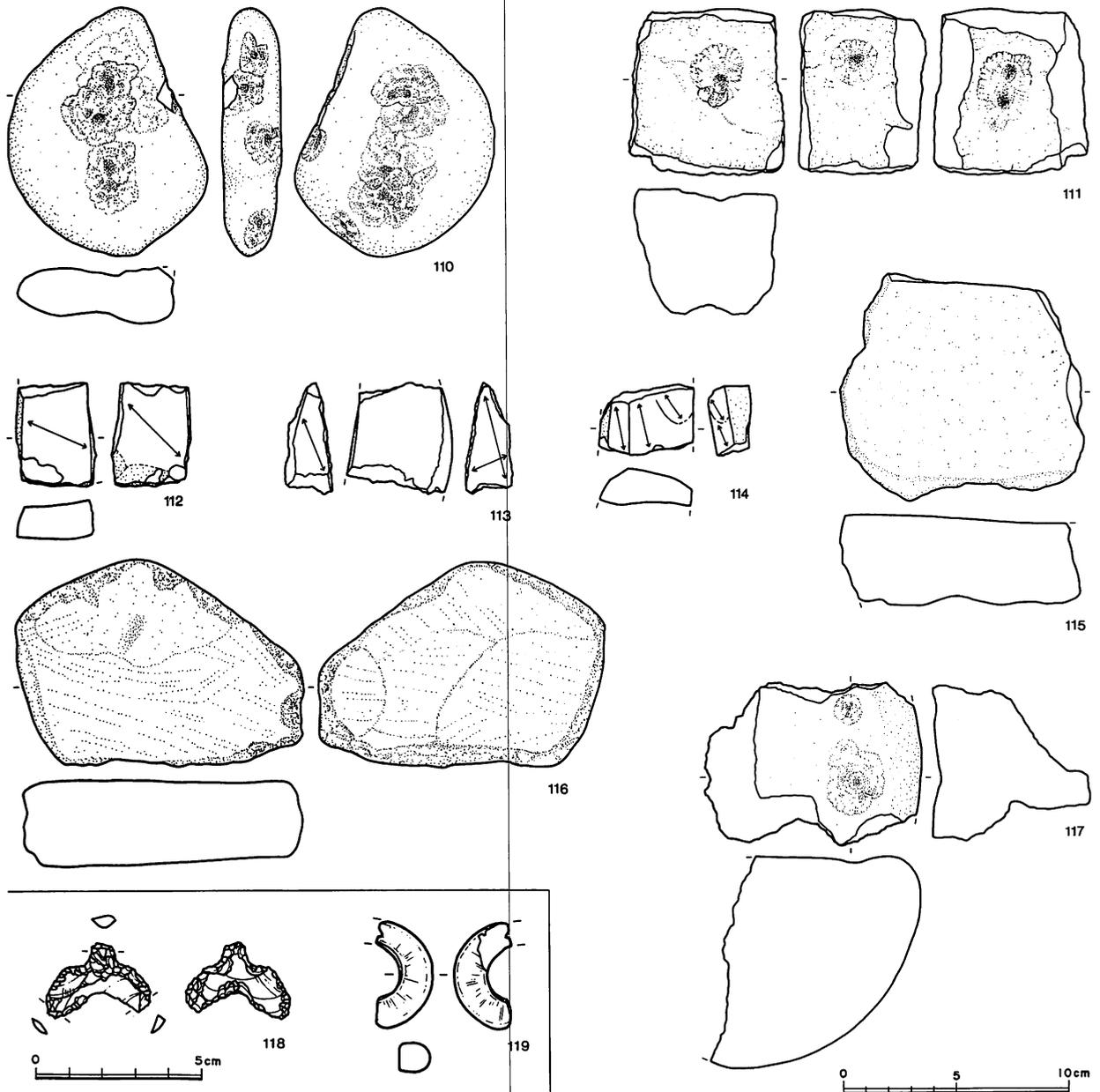
c-71-14区では403点・110.0gの剥片が出土している。このうち2点は焼けた黒曜石の剥片で、残り401点が同一母岩と思われる珪質頁岩の剥片である。これらも、表面の白濁した様子から焼けているものと考えられる。

同23区では325点・79.0gの剥片が出土しており、うち2点が頁岩、322点が黒曜石である。黒曜石は二つの母岩があり、両方共に殆どが焼けている。なお、集中内より遺物No. 323のR・Fが、周辺からは8(遺物No. 159)の柳葉形石鏃、遺物No. 160・161の石鏃未製破損品及び、94(遺物No. 17)の石斧が出土している。

同33区では70点・17.2gの黒曜石剥片が出土している。母岩は二及至三つで、何れもほぼ半数が焼けている。なお、集中内に遺物No. 258の五角形鏃が含まれていた。

同52区では53点・36.7gの黒曜石剥片がある。母岩は二つで、共に殆どが焼けている。

同65区では187点・89.1gの黒曜石剥片が出土している。母岩は二つであるが、一つの母岩に属する剥片数点が焼けているのみである。なお、この集中地点からは剥片に混ざって遺物No. 180のR・Fと遺物No. 181の楔形石器が出土している。



図II-12 II黒層出土の石器(6)

(3) 石製品 (図II-12)

118は双葉状の形態を呈する黒曜石製のものである。腹面の上端部に主剝離面のバルブが残っており、三叉状石製品の欠損品ではなく、当初からこの形態であったことがわかる。背面左右と下部にある三カ所の挟りのうち、右側の挟り部分はかなりつぶれている。したがって、これが挟入石器として実用的に用いられた可能性も考えられる。

119は、カンラン岩製の珠状耳飾りである。出土地点は遺物の集中域とはかなり離れたc-71-89区で、このグリッドからは他に手稻式土器片1点が出土しているのみである。

表II-22 石製品一覧

No.	グリッド	長さ(■)	幅(■)	厚さ(■)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	c-71-02	14.5	30.6	4.2	1.9	黒曜石	118	149	双葉状
2	89	31.0	9.6	8.6	5.7	カンラン岩	119	66	珠状耳飾り、半分欠損

## 3 縄文時代後期の遺構

今回の調査区内で確認し得た遺構は、A地区のTピット2基のみである。Tピットは、過去の調査で23基が確認されている。このうち昭和51・55年度に調査した2基を除いた21基について一連番号が付されているので、今回確認したものはT-22、T-23とした。

なお、昨年度までの23基のうち、杭穴がみられるものは13例、杭穴のないものが10例である。

## T-22 (図II-13・14)

位置 c-71-69・79

規模 4.20×0.62/4.00×0.17/1.42

特徴 確認位置はA地区の中央付近で、東南に下る小沢の奥に当たる。確認面はTa-d<sub>1</sub>層上面で、標高は21.5m。長軸方向はコンターと平行である。

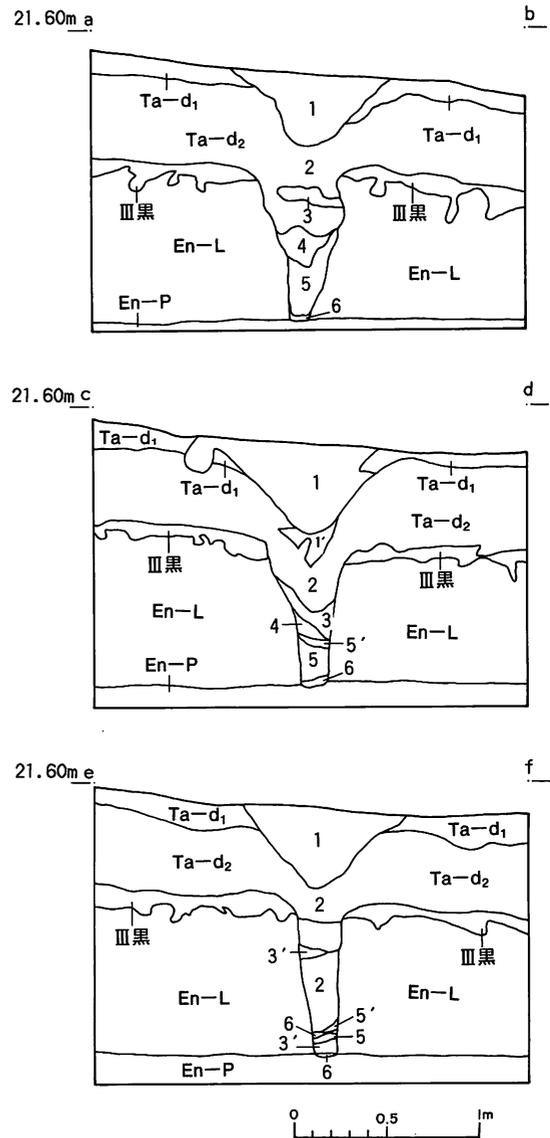
確認面の段階で4m以上の長さを有することが分かっていたので、掘開に当たっては3つのブロックに分けて、周囲を含めて掘り下げる方法を取り、土層断面も短軸方向に3面とった。竈底面は若干西南側に傾いているが、En-L層を掘り抜き、En-P層に掛かった時点で掘開を終えているようである。竈底面には杭穴はみられない。なお、竈底面の西南側3分の1の地点に段と軸のずれがみられるが、覆土の堆積状況を見ると時期をおいた二つのピットの切り合いではなく、西南側部分が先に掘られ、東北側部分に拡張されていったものと思われる。また、東北側に皿状の浅いピットがみられるが、これは後述する土層断面の相違を考え合わせると、更に拡張がなされた痕跡とも思われる。

土層断面をみると、3面とも最下層に粘性の強い黒色土がある。これはII黒層の崩落したもので、本Tピットが落とし穴として機能していた時期を示すものである。a-b・c-dでは、この黒色土が一枚であるが、e-fでは二枚みられる。従って、掘開時には残念ながら明確に確認し得なかったが、この東北側部分のみが再度掘り直されて使用された可能性がある。

なお、本ピットの掘り下げ土と思われるTa-d<sub>1</sub>・Ta-d<sub>2</sub>・En-L層の土が、沢の5~10mほど下流側のII黒層中に広がっている。

## T-23 (図II-15)

位置 d-71-95 規模 2.09×1.03/2.06×0.25/1.40

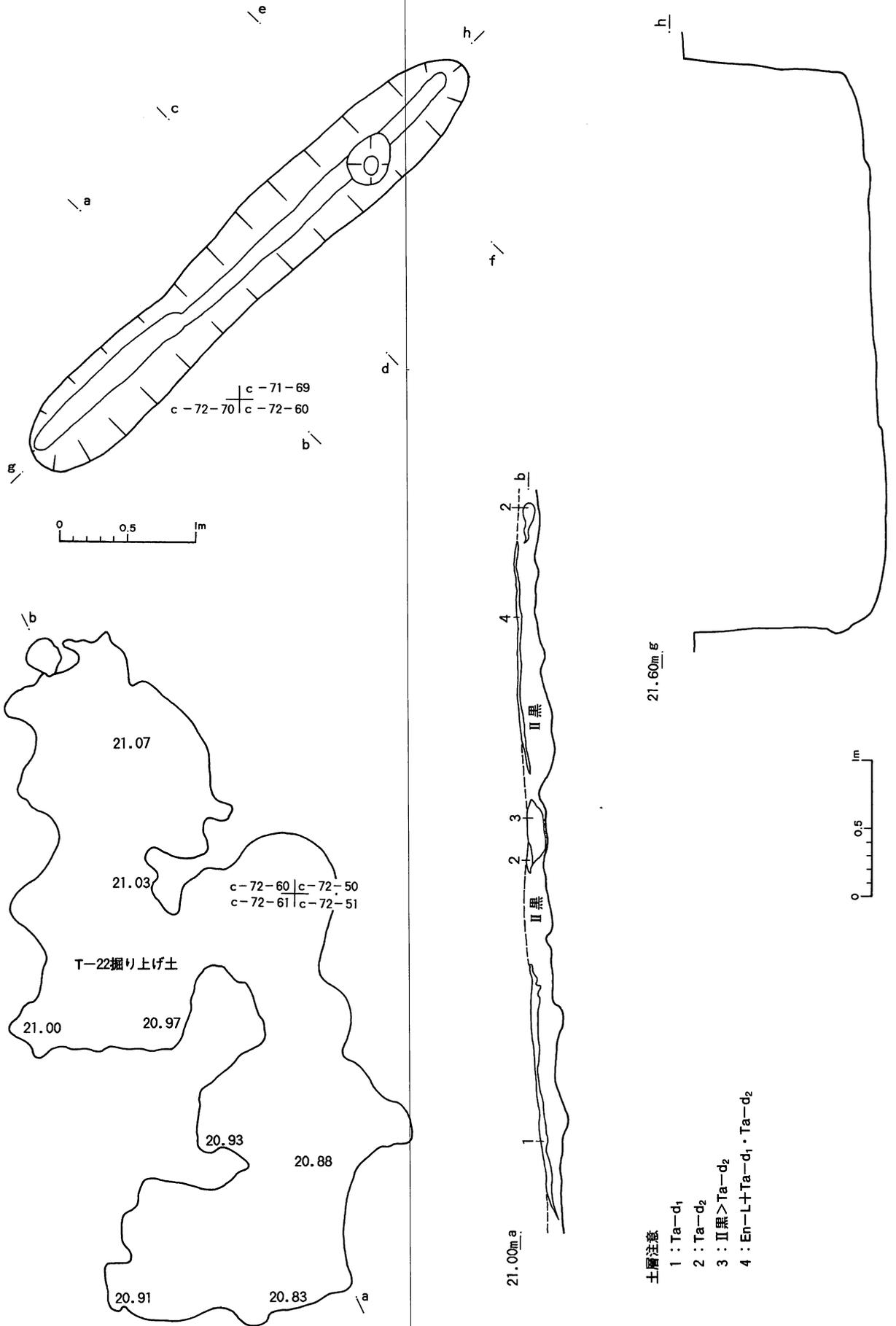


## 土層注記

- 1 : 黒色土 (II黒+Ta-d<sub>1</sub>)
- 1' : 黒褐色土 (II黒=Ta-d<sub>1</sub>・Ta-d<sub>2</sub>)
- 2 : 赤褐色土 (Ta-d<sub>2</sub>+II黒・Ta-d<sub>1</sub>)
- 3 : 暗赤褐色土 (Ta-d<sub>2</sub>>II黒・III黒)
- 3' : 暗赤褐色土 (Ta-d<sub>2</sub>>II黒)
- 4 : 暗赤褐色土 (Ta-d<sub>2</sub>>II黒・III黒・En-L)
- 5 : 灰褐色土 (En-L)
- 5' : 灰褐色土 (En-L>Ta-d<sub>2</sub>・III黒)
- 6 : 黒色土 (II黒、粘性強い)

図II-13 T-22(1)

II 美沢3遺跡第II黒色土層の調査



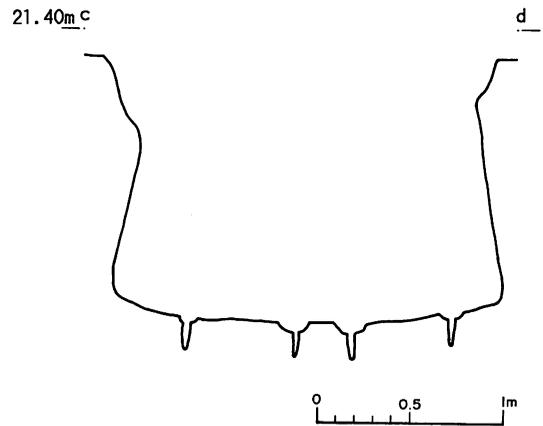
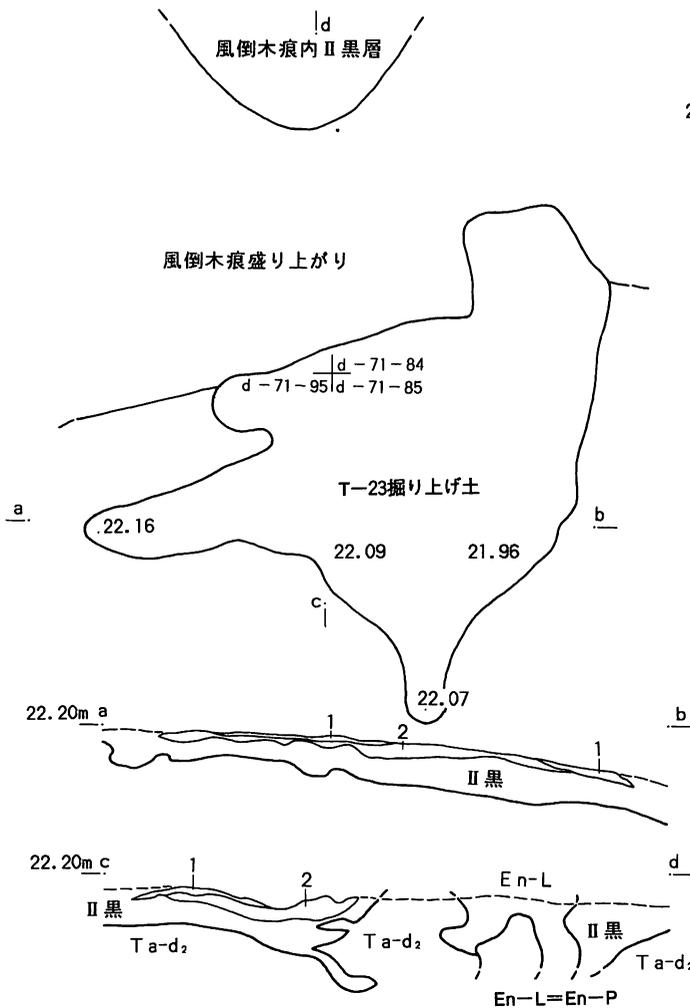
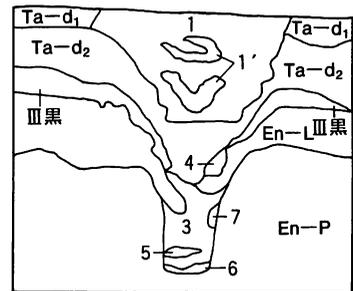
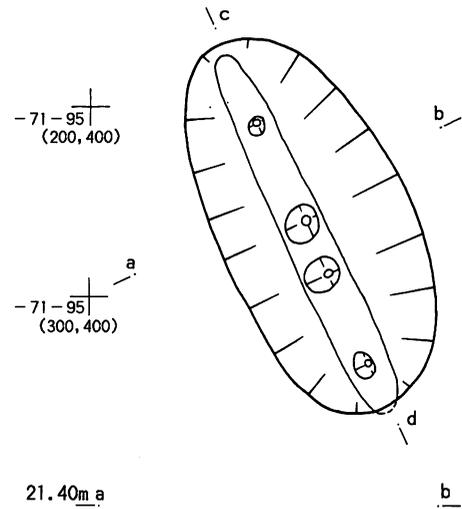
図II-14 T-22(2)

**特徴** 確認位置は A 地区の東北部、平坦面から傾斜面へ切り替わる部分に当たる。確認面は Ta-d<sub>1</sub> 層上面で、標高は 21.3m。長軸方向はコンターと平行である。

墳底面はほぼ平坦で、長軸方向の断面をみると両端部がフラスコ状に広がっているが、これは構築当初からこうした形態をとっていたものである。掘開は T-22 とは異なり、En-P 層を 70cm ほど掘り込んでいるが、確認面からの深さはほぼ同様である。

墳底面には 4 つの杭穴が認められた。杭はいずれも打ち込みで、その周位を掘り込んで En-L を根固めに詰めている。覆土中には立杭の痕跡は確認できなかったため、杭先が開口部にまで及んでいたか否かは不明である。

土層断面では、やはり最下層に粘性の強い黒色土がある。掘り下げ土は、本ピットから 3m ほど離れた、北側斜面下方の風倒土痕跡に広がっていた。(田才)



土層注記

- 1 : 黒色土 (II黒+Ta-d<sub>1</sub>)
- 1' : 黒褐色土 (II黒=Ta-d<sub>1</sub>・Ta-d<sub>2</sub>)
- 2 : 赤褐色土 (Ta-d<sub>2</sub>+II黒・Ta-d<sub>1</sub>)
- 3 : 暗赤褐色土 (Ta-d<sub>2</sub>>II黒・III黒)
- 4 : 暗赤褐色土 (Ta-d<sub>2</sub>>II黒・III黒・En-L)
- 5 : 灰褐色土 (En-L)
- 6 : 黒色土 (II黒、粘性強い)
- 7 : 灰黄褐色土 (En-P)

土層注記

- 1 : En-L=En-P
- 2 : Ta-d<sub>2</sub>

図II-15 T-23

#### 4 縄文時代後・晩期の遺物包含層の調査

##### (1) 土器 (図II-16~17、図版II-13)

##### IV群b類 (1~7)

1は、ほぼ体部の器形と文様構成を知りうるまでに復元されたものである。注口付で、底部は揚底となる。球形に近い体部に、磨消縄文がある。上下に「オタマジヤクシ」様の文様を配した構成となっている。その間に大きめの瘤が3か所に貼付されていたものとみられる。2は磨消縄文の縄文部分の破片である。3・4は同一個体とみなされ、頸部にくびれをもつ深鉢形土器である。頸部に無文帯がある。5・6は、体部にふくらみをもつ深鉢形土器で、縄文地に横走る沈線をめぐらし、その間に小弧線を加えている。縄文帯の上下線に刻み列を付す。7は、波状縁の鉢形土器の口縁部で、口縁に沿って刻み列をめぐらせている。

##### IV群c類 (8~9)

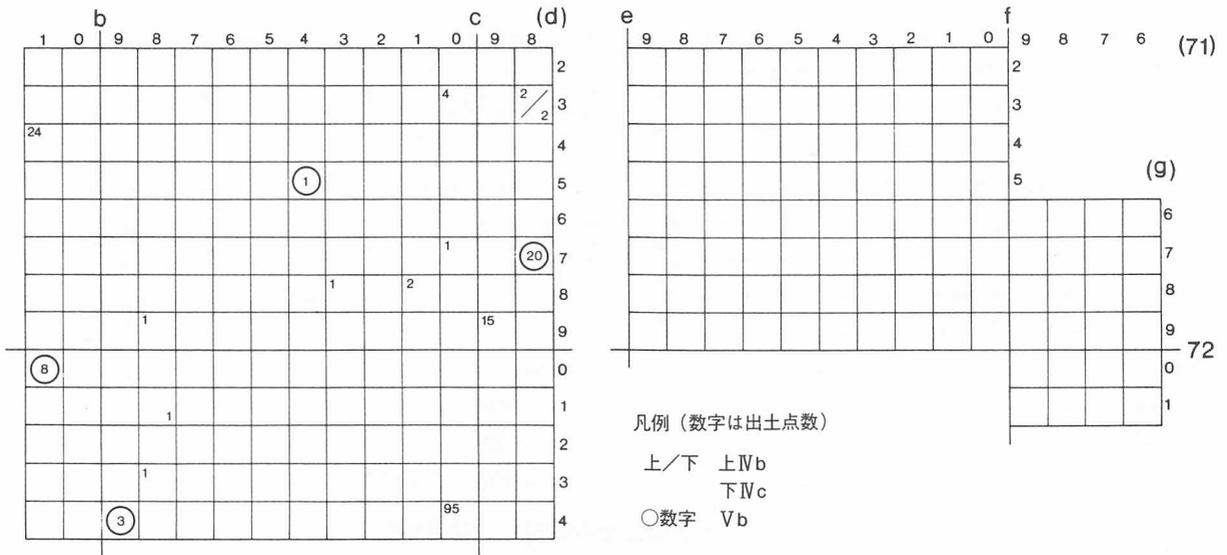
8は鉢形土器の口縁部で、器面には浅く、羽状縄文が施されている。口唇及び内面には磨き調整がなされていて、IV群b類の末頃のものともみられる。器面に凹凸があり、比較的薄手である。9は薄手の深鉢形土器の口縁部で、口縁にそって突瘤がめぐらされている。器面の縄文は条の細いRLの原体によるものである。

##### V群b類 (10~16)

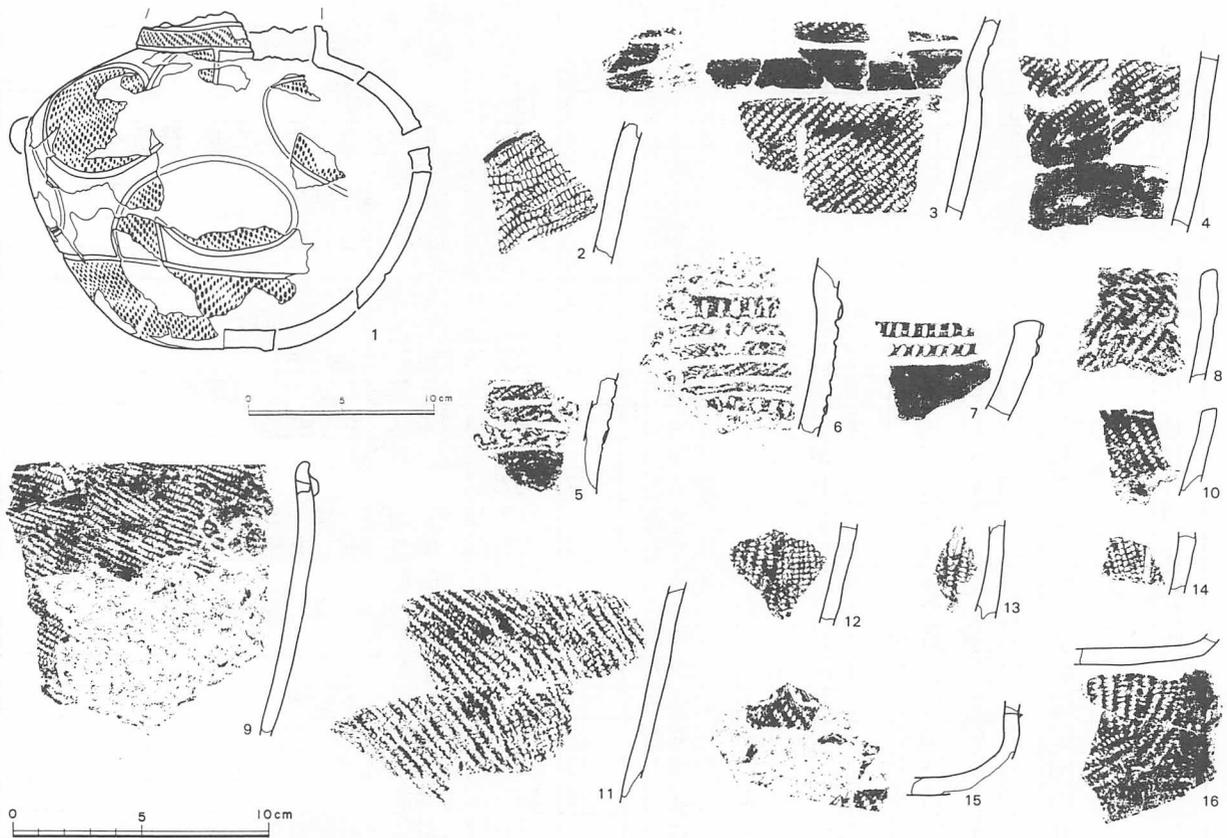
10は口縁の断面が切り出し形を呈し、口縁に沿って、縄によるとみられる浅い刻みがつけられている。縄文の状態からみて、15と同一個体に属すとみなされる。器形は注口もしくは片口付の方形浅鉢かと想定される。11~14は鉢形土器の体部の破片である。13・14は同一個体とみなされるが、幅広く浅い沈線が認められる。16は円底状をなす底部である。(大沼)

表II-23 包含層掲載土器一覧 (IV群~V群)

図番	発掘区												
1	c-72-04	3	b-71-14	5	c-71-18	7	c-71-83	9	d-71-87	11	d-71-87	13	c-72-94
2	c-71-03	4	b-71-14	6	c-71-18	8	c-72-82	10	b-72-11	12	c-72-94	14	c-72-94
												15	b-72-11
												16	c-72-11



図II-16 II黒層出土の土器分布

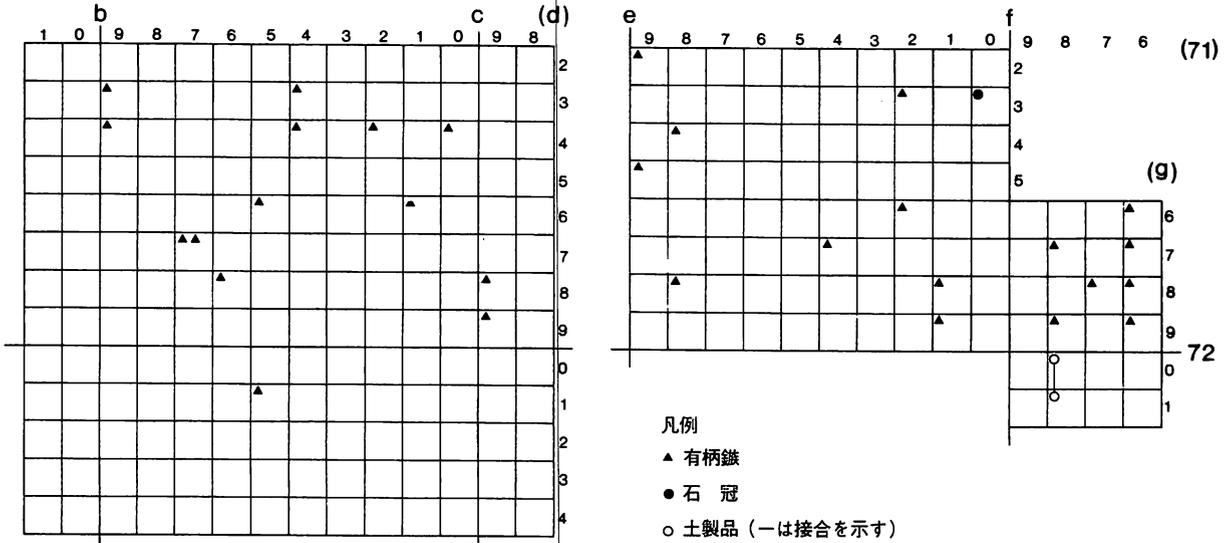


図II-17 II黒層出土の土器

(2) 石器 (図II-18・19、図版II-14)

出土した石器等のうち明らかに早期の石器とは考えられないもの31点 (有柄鏃30点、石冠1点) についてここで触れる。

石器の器種別分布は下図に示したとおりで、全体にまばらである。



図II-18 II黒層出土の石器、土製品分布

表II-24 石鏃 (有柄) 一覧

No.	グリッド	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備考
1	c-71-04	16.4	12.6	3.5	0.7	黒曜石		195	凸基、先端・柄部欠損
2	16	30.0	13.7	3.6	1.4	珪質頁岩	1	63	平基、先端わずかに欠損
3	24	21.0	15.1	4.6	1.2	黒曜石		188	平基、基部欠損、一方の基部は原石面をそのまま利用
4	43	37.0	17.2	4.0	1.8	黒曜石	2	132	平基、一面に主利縁面を残す
5	44	35.3	15.4	5.7	1.8	黒曜石	3	138	平基、先端わずかに欠損
6	56	35.5	15.0	3.6	1.7	黒曜石	4	71	凸基、側面わずかに欠損、一面に主利縁面を残す、菱形に近い
7	68	18.3	13.6	3.0	0.5	黒曜石		270	凸基、先端側が短い
8	77	21.2	14.0	4.3	0.6	黒曜石		239	平基、側縁内溝、一面に凸状部を残す
9	77	17.4	11.9	2.0	0.5	黒曜石		242	凸基、先端欠損、焼けている、ねじれ
10	93	15.0	5.5	3.0	0.2	黒曜石	5	38	凸基、ねじれ
11	94	22.7	9.7	4.1	1.0	黒曜石	6	55	異形、先端及び両基端わずかに欠損
12	c-72-51	16.0	11.7	4.6	0.8	黒曜石		234	平基、先端・柄部欠損、一面に凸状部を残す
13	d-71-98	14.4	11.7	5.0	0.5	泥岩?		228	凸基、先端欠損、一面に凸状部を残す
14	99	13.6	8.0	3.6	0.6	黒曜石		231	凸基、柄部・先端わずかに欠損、一面に主利縁面を残す
15	f-71-18	27.1	20.0	5.0	2.0	黒曜石		318	凸基、先端側欠損、一面に主利縁面を残す
16	19	26.5	12.7	4.3	1.4	黒曜石		282	先端欠損、未製物品か
17	23	23.4	14.9	5.1	2.0	黒曜石	7	302	凸基
18	26	21.5	13.2	3.4	1.0	黒曜石		319	凸基、先端・柄部欠損、一面に凸状部を残す
19	47	21.2	11.3	3.0	0.6	黒曜石	8	293	凸基、側端欠損、両面に主利縁面を残す
20	84	14.8	10.0	4.1	0.4	黒曜石		317	凸基、先端欠損
21	88	28.3	17.3	4.6	1.6	黒曜石		313	凸基、先端わずかに欠損、一面に主利縁面を残す、側縁外溝
22	92	28.3	16.0	4.4	1.3	黒曜石	9	281	平基、側縁内溝
23	95	24.5	13.0	4.0	0.8	黒曜石	10	298	凸基、側縁内溝
24	g-71-66	13.0	11.0	2.4	0.4	黒曜石	11	310	凸基、先端わずかに欠損、側縁内溝
25	67	20.6	10.0	4.4	0.8	黒曜石	12	289	凸基、先端わずかに欠損、肉厚
26	68	13.3	14.9	2.5	0.4	黒曜石	13	296	凹基、先端・柄部欠損
27	69	30.5	15.8	4.5	1.3	黒曜石	14	288	凸基、側縁外溝
28	78	22.5	17.0	4.0	1.4	黒曜石		311	凹基、先端欠損、一面に主利縁面を残す
29	87	16.0	12.0	5.0	0.5	黒曜石	15	316	凸基、先端わずかに欠損、一面に凸状部を残す
30	89	13.2	13.6	2.3	0.4	黒曜石		320	凹基、先端・柄部欠損、一面に主利縁面を残す

表Ⅱ-25 石冠一覽

No.	グリッド	長(㎜)	幅(㎜)	厚(㎜)	重量(g)	石質	図番	遺物No	備 考
1	f-71-03	125.4	102.5	58.0	1019	凝灰岩	1	2	一端欠損、一端わずかに欠損、使用面片減りしている

石鏃 (1~15)

総出土点数は40点で、分布はまばらである。形態的には平基・凹基・凸基いずれもあり、異形のもの1点もある。

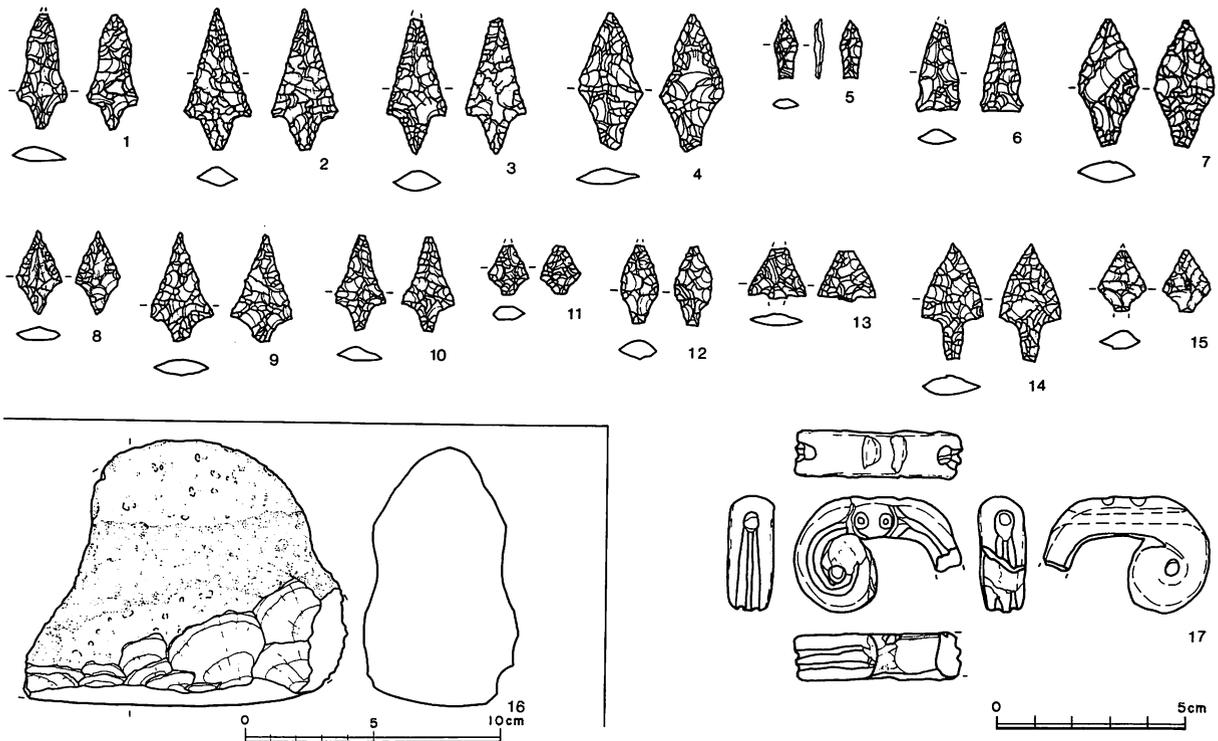
1は赤色を呈す珪質頁岩製で、側縁部が内湾する。2・3はほぼ同一の形態を示す平基のもので、側縁部は直線的である。8・15も側縁部が直線的で、14は側縁部が外湾気味である。これらは縄文時代中期のものと思われる。4・7・12は最大幅と基部との境が明瞭でなく、木葉形に近い形態を示すものである。5はねじれのみられるもので、平面形では五角形鏃に分類される可能性もあるが、基部が直線的で肉厚なことから早期の鏃ではないと判断した。6は三角鏃の両側縁に抉りを入れたような異形のもので、肉厚である。9~11・13は側縁部が内湾するもので、後期に属するものと思われる。

石冠 (16)

凝灰岩製で、使用面が片減りしている。

(3) 土製品 (図Ⅱ-19、図版Ⅱ-14)

B地区から垂飾と思われるもの1点が出土している。一端が欠けているが、双円状であったものと思われる。沈線の中にベニガラと思われる赤色顔料が付着しているが、本来は全面に塗られていたものであろう。(田才)



図Ⅱ-19 Ⅱ黒層出土の石器、土製品

表Ⅱ-26 土製品一覽

No.	グリッド	長(㎜)	幅(㎜)	厚(㎜)	重量(g)	図番	遺物No	備 考
1	g-72-80-81	30.0	42.6	11.5	11.5	17	382・383	鏃、一端欠損、赤色顔料付着

## 5 まとめ

### (1) 縄文時代早期の遺物

#### 土器

I群b-1類は1片のみであるけれども、他の同b-3類やb-4類とは特色を異にしている。このような円形の刺突文を施し、内面に突瘤を形成する土器は、この頃の時期のものとしては、青森県長七谷地貝塚の赤御堂式において2片注意されたことがある（青森県教育委員会 1979『長七谷地貝塚』p129）けれども、器形と縄文の施文に差があり、直ちに結び付ける訳にはゆかない。また赤御堂式に一般的な手法ではない。道南地方では、口唇と内面に縄文を施す土器は、松前町高野遺跡（久保泰 1984）のIV群土器があるけれども、器形と縄文の手法が異なり、また突瘤文は認められない。東釧路II式には刺突文を施すものが認められるけれども、その大きさが、これほど大きくはない。また口唇の形状も異なる。器形の面で、口唇の形から類似のものを考えると、テンネル式（小西雅徳 1983）や、暁式（北沢実編 1990）に近いかとみられる。また器面に太い棒状工具で刺突を加え、内面に突瘤を形成する手法もそれらの土器には一般的である。ほぼ、その頃の道央部の資料とみてよいものかと思われるが、テンネル式=暁式には絡条体圧痕文の施されるものはあるけれども、縄文の施されるものは存在しない。また、テンネル式の類は、胆振地方にも及んでいるので、それらよりはやや遅れるものかと思われる。東釧路II式と、テンネル式の類の間くらいに置かれるものかもしれない。東北地方の赤御堂式、表館遺跡（青森県教育委員会 1988）の層位的な出土例からすれば、表館VI・VII群頃のものと考えておきたい。ただし、これが、本遺跡で出土している石刃鏃と結びつくものかどうか、出土位置は斜めとなりのグリッドにあたるが、出土状態から確言することはできない。伴出する可能性のあるものとして今後の調査で注意をすることが必要である。

I群b-3類土器はA地区とB地区の二つに分けて述べてきたのであるが、この両者を比較すると、A地区のものには、B地区のものよりも隆起線が明瞭に形成されたものがあり、文様の構成においても、縦横の区画を構成するものがある。I群b-3類土器の前のI群b-2土器には貼付帯があり、その文様構成には縦横の区画を設けるものがある。また隆起線の上には刻み目が施されている。I群b-3類の土器では貼付により形成された隆起線上に縄文や、短縄文の施されるものがある。A地区のものには比較的多い。また、I群b-3類土器の後のI群b-4土器では隆起線は消失している。このことから、I群b-3類土器の時期に、隆起線の明瞭なものから不明瞭なものへの推移があるものと考えねばならない。この観点からすれば、A地区のものが比較的早く、B地区のものが新しくなるものようである。これを昨年度の資料に比較するとA地区のものはほぼb類、B地区のものはほぼc類に対応するかとみられるが、B地区出土のものうち、2・4はb類とみなしうるものであり、A地区のものでは、文様帯の一部に空白部を残す35~37は昨年度のa類にも認められ、その名残りとも解される。また、B地区のものの中には、6・10・11・19・32~34の主として東側から出土しているものに、口唇の断面が尖り隆起線の低いものや部分的なものなど、I群b-4類に通ずる施文のあるものが認められ、これは、昨年度のd類に近いものとみられる。

I群b-4類土器は、49・50のI群b-3類土器の名残りをとどめているものと、7・62~76のA地区東側からまとまって出土したもの、さらに52~62の、A地区に散在していたものとの三者に別れているようである。これらを昨年までの調査資料と比較するならば、49・50の類はa類、A地区東部の類はg類、52~61はb~d類に相当するとみなされるが、これらが一まとまりのものとするれば、綾絡文の構成からみて、c類の組成を示すものかと考えられる。（大沼）

## 石器

石器全体の出土分布をみると、土器の分布傾向とはほぼ重なっており、特にⅠ群b-4類土器の集中してみられた、c-71-13区周辺が最も多い。

土器の時期別分布をみると、Ⅰ群b-3類土器はA・B両地区から出土しているが、Ⅰ群b-4類土器はA地区に限定されている。こうした傾向は過去の調査でも認められており、Ⅰ群b-4類期の人々は、B地区の台地面をその主たる生活域とはしていなかったようである。

石器の器種別出土分布をみると、石鏃、石槍類はA・B両地区から出土している。このうち五角形鏃はA地区のみからの出土で、Ⅰ群b-4類期のものと限定できるが、他のタイプについてはⅠ群b-3類期のものとも考えられる。

石斧、たたき石、石皿、台石はA・B両地区から出土しており、Ⅰ群b-3類期に属するものと思われる。これに対し、つまみ付きナイフ等の剥片石器類は殆どがA地区からの出土であり、礫石器のうちすり石、砥石の工具類もA地区のみからの出土である。また、5カ所で確認された剥片集中地点の全てもA地区であり、B地区からは僅かにつまみ付きナイフ2点と、R・F1点が出土しているに過ぎない。

このことは、Ⅰ群b-3類期の人々がA・B地区の台地上で、たたき石や石皿といった限定された石器類を使用する生業活動を行っていたのに対し、Ⅰ群b-4類期の人々は、A地区で石器の生産を含む加工・生業活動を行っていたことを示しているものといえよう。

このように石器類の分布からみても、Ⅰ群b-3・4類期の人々は、ともに生活の主体を住居等の遺構が集中する北側低位面に置きながら、その後背地に当たる台地部の利用形態に大きな差異を示しているのである。(田才)

### (2) 縄文時代後期の遺構と遺物

遺構はTピット2基を確認した。T-22は南側に向かう沢跡の奥に位置し、コンターと平行するように掘られている。杭穴をもたないもので、こうした例は本遺跡の調査では10例が確認されている。全体の長さは4mを越すものであるが、壙底面及び土層断面から、一度乃至二度の拡張が行われたことが判明している。また、東北側は掘り直して使用された可能性もある。Tピットの再構築例としては、札幌市のT361遺跡(田村リラコ 1987)などがあり、その際に位置のずれがみられるものもある。本Tピットも再構築に際し、何らかの理由で順次東北側へ位置を変えていったものと思われる。

T-23は、平坦面から北流する沢跡斜面への落ち際、丁度T-1と相対する位置に配置されている。長さは2m余で、確認面での平面形は小判型を呈す。壙底面に4つの杭穴をもち、それぞれの杭穴の周囲は根固めされている。本遺跡の調査では杭穴をもつTピットは13例が確認されているが、いずれも杭穴の数は1乃至2本であり、根固めの例はない。(田才)

美沢3遺跡はこれまで4回(昭和51年、同55年、同63年、平成元年)調査されていて、縄文時代後期～晩期の遺構や遺物は毎回多少とも調査されてきている。特に後期の住居跡には余市式の時期のもの、手稻式から鮎澗・エリモB式の時期のもの(昭和51年H-1、H-2、H-3、H-18、H-21)とがあり、土器には、余市式、白坂3式、ウサクマイC式(船泊上層の類)、手稻式、鮎澗・エリモB式、御殿山式に相当するものがある。ここで鮎澗式とエリモB式の資料に対する文化的意味づけの問題について若干述べることにしたい。鮎澗式の設定は松下氏が名取氏と連名で行ったものがあり、突瘤文の有無が地域差を示すとみることから、突瘤文のない土器を鮎澗式とし、突瘤文のある土器を含むエリモB地点の土器と対置させたことが発端である。鮎澗式の設定はそれに対置される、いわばエリモB式の設定でもあったのである。この意味で美沢3遺跡の土器はエリモB式ととらえ

ることが可能である。これに対して鷹野氏は突瘤文が時期的に新しい要素として出現するとみて、鯨澗式を古く、エリモB式を新しく編年する、地域差を考慮しない型式設定を行ったが、森田氏は手稲式相当の時期にも突瘤文の施されたものがあることが知られていることでもあり、その考えの成立しないことを述べられている。この種の土器群は近年各地でも出土例が増加していて、特に忍路土場遺跡C地区では層位的な出土状態が知られた。手稲式・鯨澗式が、下からIV層～IIb層の各層及び面から出土していて、従来の手稲式、鯨澗・エリモB式などの区分を改めて検討する素材を提供している。Ⅲ～Ⅸの7期の時期区分案を参考とするならば、層位的には、IV層、IV層上面(3rd)、Ⅲd・Ⅲc層、Ⅲc層上面(2nd)、Ⅲb・Ⅲa層、IIb'・IIb層の6層群として把握されようである。現状では動かない層位を優先して、編年案は改めて検討することが望ましい。(大沼)

#### 引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1979『長七谷地貝塚』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書 57  
青森県教育委員会 1988『表館(1)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書 第120集  
北沢実編 1990『帯広・八千代A遺跡』  
久保泰 1984『松前町郷土資料館調査報告』1  
小西雅徳 1983「釧路町テネル第I地点出土の遺物」釧路市立博物館々報 283号  
田村リラコ 1987「Tピットについて」『札幌市文化財調査報告書 XXIX』  
北海道教育委員会 1977『美沢川流域の遺跡群I』  
北海道教育委員会 1981『美沢川流域の遺跡群IV』  
北海道埋蔵文化財文化財センター 1989『美沢川流域の遺跡群XII』  
北海道埋蔵文化財文化財センター 1990『美沢川流域の遺跡群XIII』  
森田知忠・遠藤香澄 1984「Tピット論」『北海道の研究I』

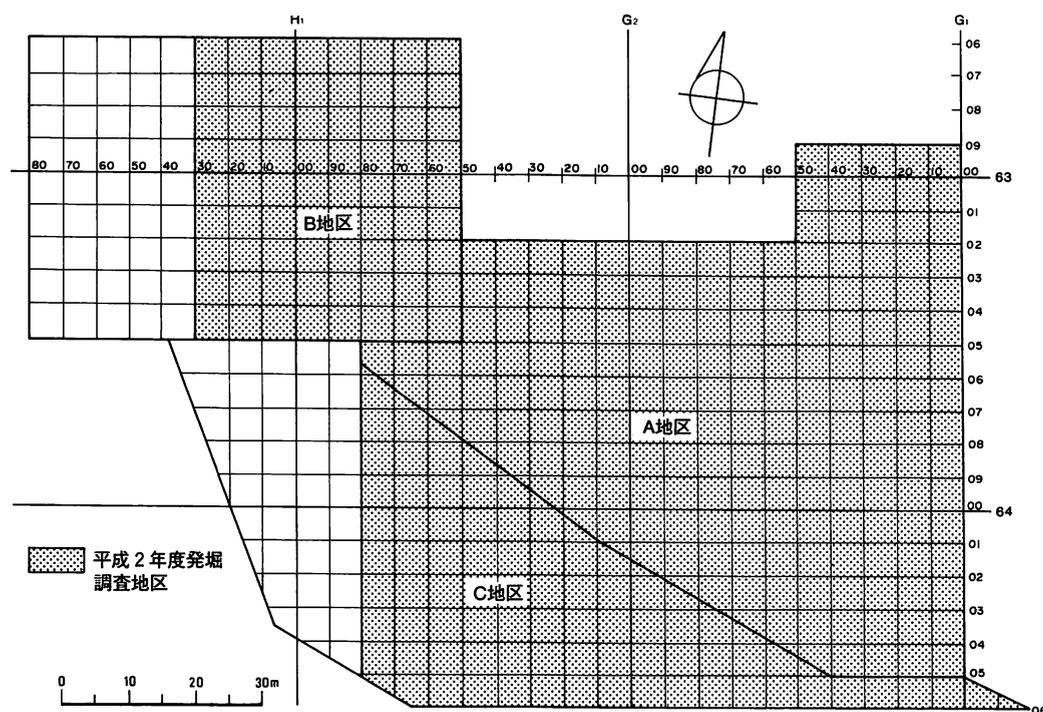
## Ⅲ 美々3遺跡第Ⅱ黒色土層の調査

### 1 調査の概要

美々3遺跡は美沢川左岸の台地および斜面上に位置する。本年度の調査区は平成元年度調査区の南側で、昭和60年度的美々4遺跡の西側に隣接する。調査面積は9,225 $\text{m}^2$ である。A、B地区は台地上と斜面肩口部分で、標高は24m～20.7mである。C地区は斜面部分で標高は23.4m～11.8mである(図Ⅲ-1)。本遺跡は縄文時代中期後葉～後期初頭、晩期中葉～後葉の遺跡であると想定されることから、各時期の生活面を把握することに留意しつつ調査を行った。調査は1回3cm～5cmずつ掘り下げ、その都度遺構検出作業を行い、遺物は掘り下げ回数毎に取り上げた。この結果、①ⅡB上面および1～2回は縄文時代晩期の包含層であり、②3回～Ta-d<sub>1</sub>層直上付近は縄文時代中期後葉を主体とする包含層で、生活面は2～3面確認された。また遺構の覆土上には③粘質で混りのない黒色土(純腐植黒色土)、④1mm～2mm大の黄色火山灰粒の混入する黒色土(黒土上層)⑤2mm～3mm大の黄橙色火山灰粒の混入する黒色土(黒土下層)の堆積があり、③はほぼ遺跡全体に認められた。

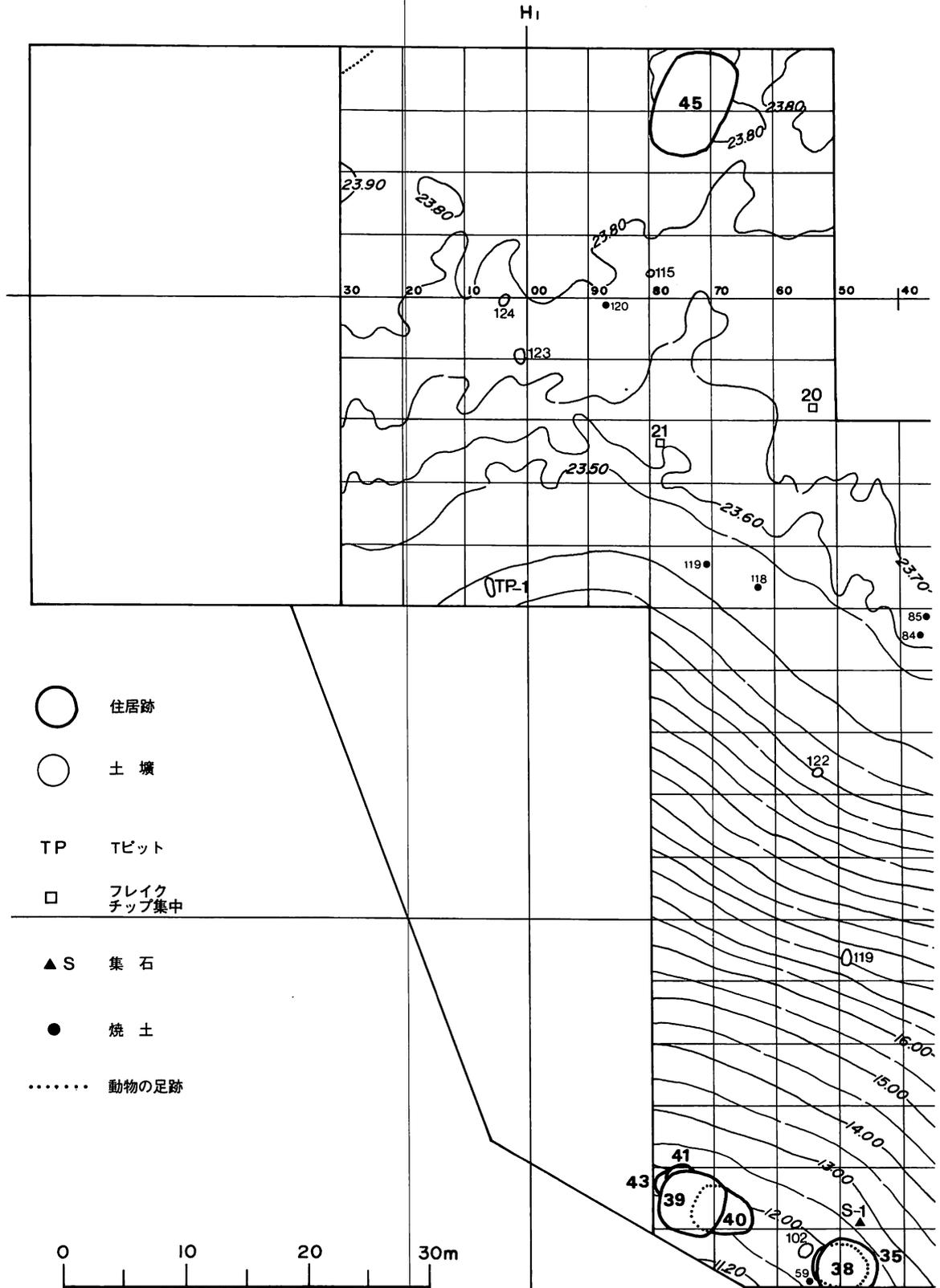
遺構は住居跡44軒(中期34軒、後期6軒、晩期4軒)、土壇88基(中期33基、後期3基、晩期23基、時期不明29基)、焼土121か所(中期85か所、晩期36か所)、Tピット状遺構1基(中期)、集石1か所(中期)、フレイク・チップ集中21か所(中期)、小ピット群1か所(時期不明)、動物の足跡2か所(晩期)が検出された。

遺物は土器、石器などが約30万点出土している。このうち土器は56,663点、石器は剥片石器232,826点、礫石器7,723点、礫など2,256である。土器は縄文時代中期後葉から後期初頭の煉瓦台式、ノダップⅡ式、北筒式、余市式土器と縄文時代晩期中葉から後葉の大洞C<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>、A式相当の土器が主体である。ほかに綱文式、円筒上層式、天神山式、柏木川式土器が少量出土し、微量ではあるが涌元式、入江式、手稻式、鮎澗式、堂林式、御殿山式土器が出土している。石器は石鏃、石槍、スク

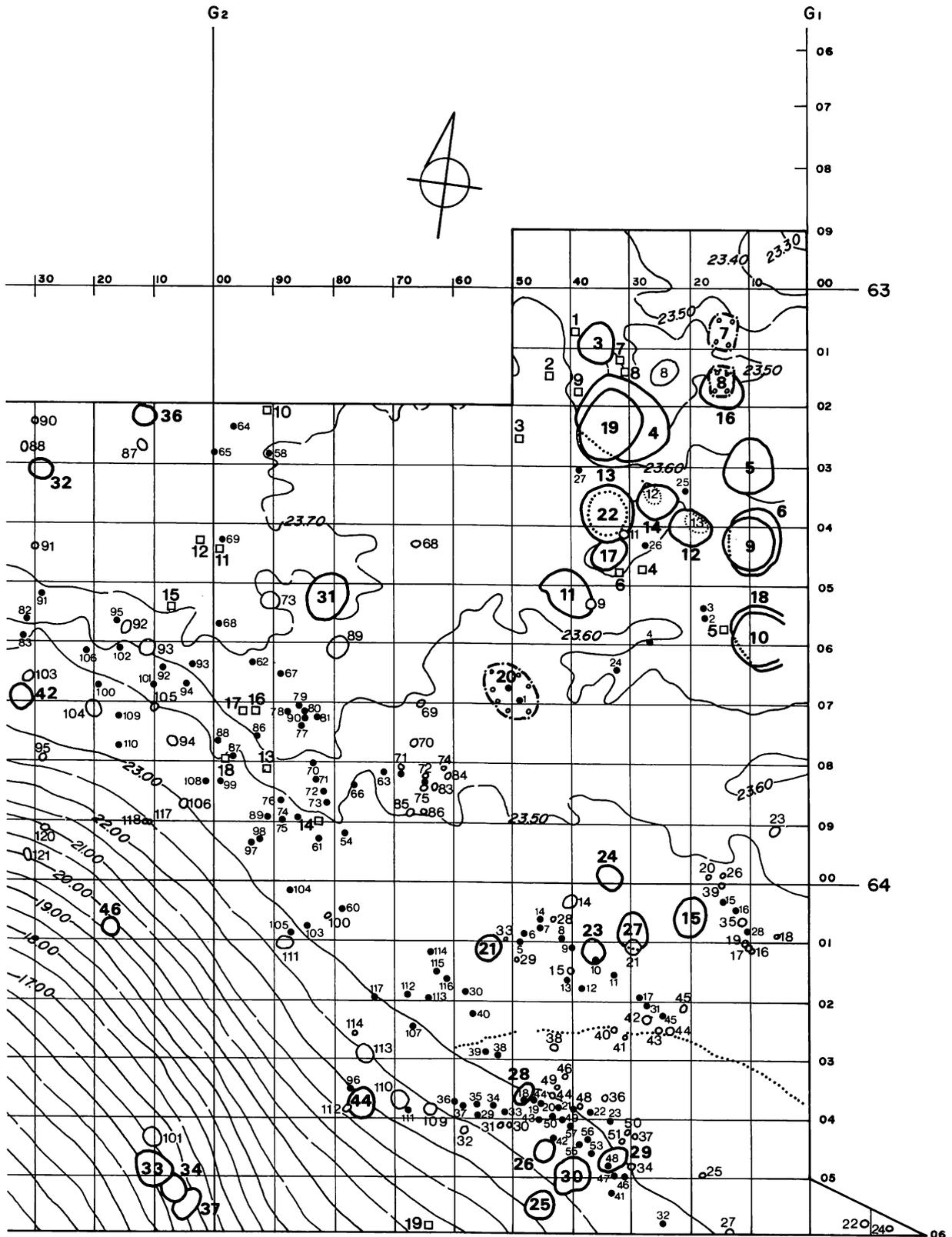


図Ⅲ-1 Ⅱ黒層の発掘調査地区

Ⅲ 美々3遺跡第Ⅱ黒色土層の調査



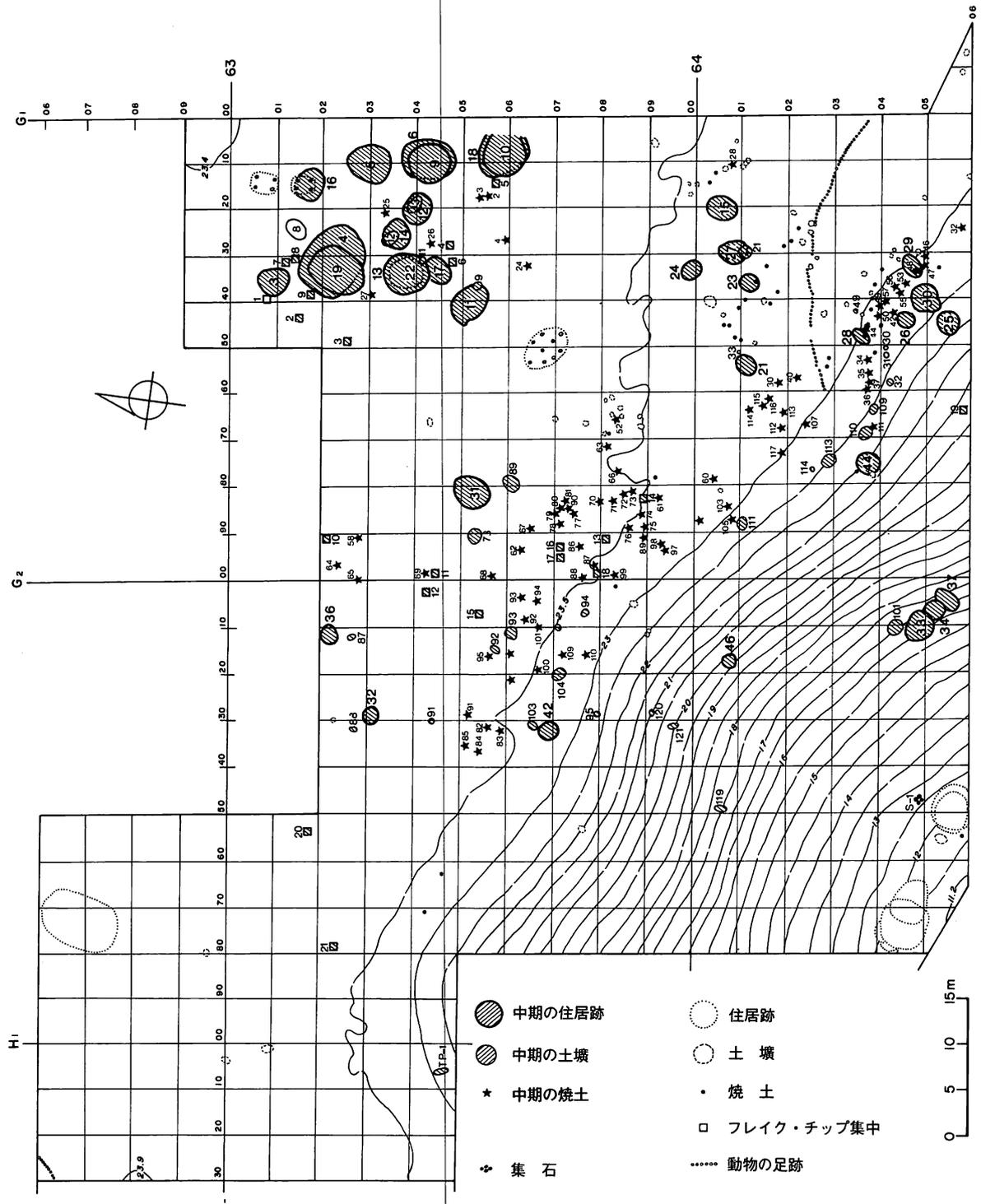
- 住居跡
- 土 壙
- TP Tピット
- フレイクチップ集中
- ▲ S 集 石
- 焼 土
- ..... 動物の足跡



図Ⅲ-2 II黒層の遺構位置図(等高線はTa-d<sub>2</sub>上面)

Ⅲ 美々3遺跡第Ⅱ黒色土層の調査

レイパー、石斧、砥石、たたき石、すり石、石皿、台石などが出土しているが、多くは北筒式土器期に伴うものである。ほかに旧石器期の細石刃核、早期の石鏃、つまみ付きナイフ、晩期の緑色泥岩製小型石斧、有溝砥石、中期の四面柱状砥石、カンラン岩製敲石などが出土している。また中期の片岩・緑色泥岩石斧および石斧未製品がややまとまりをもって出土しているのが注目される。総遺物点数の78%は黒曜石のフレイク・チップ、フレイク、石斧フレイクが占めている。(和泉田)



図Ⅲ-3 縄文時代中期の遺構位置図

## 2 縄文時代中期の遺構と遺物

(1)住居跡 検出された34軒の住居跡は、Ⅲ群 b-3 類土器を伴うもので、縄文時代中期後葉の時期である。これらには調査区の①北東部台地上（標高24m付近）で14軒、②南東部台地上とそれにつづく斜面肩口（標高23.5m～23m）で11軒、③中央部台地上とそれにつづく斜面肩口（標高24m～23m）で5軒、④斜面上（標高17m付近）で4軒という大きなまとまりが見られる。このうち①付近では切り合い、近接しながら密集している。また H-9、10、12は浅い凹地を利用したものと思われ、構造等も不明確であるが、住居跡として記載した。（和泉田）

H-3（図Ⅲ-4～6、図版Ⅲ-3・4）

位置：G<sub>1</sub>-63-30・31 標高23.5m付近の台地上に位置する。規模：3.21m/2.91m×2.39m/2.19m×0.4m 平面形：隅丸三角形 床面積：4.04m<sup>2</sup> 長軸方向：N-36°-W

確認・調査・土層：Ⅱ黒層上面でくぼみを確認する。遺構を想定し、土層観察用ベルトを設定し、調査を行なう。Ⅱ黒層純腐植黒色土を除去したところで、くぼ地の周囲に d<sub>1</sub>、d<sub>2</sub> を多量に混入する土の輪状の広がりを確認する。床面中央部で検出されたピットは、当初遺構と判断して調査をしたけれども、埋土に遺物が含まれず、同一方向に傾斜し、かつ片側に盛り上がった状態で堆積していたので、風倒木痕とした。覆土は若干の崩落土（8層）と、徐々に流入した土（3～10層）とⅡ黒層の流入土（2層）によって構成されている。掘り込み面はⅡ黒層を2回掘り下げた面である。

床面：平坦で、約14cm掘り込んでつくられている。壁：内湾しながら外上方向に立ち上がる。

付属ピット：柱穴状小ピットは壁面に14個検出できた。深さは平均12cmで、床面に対する角度は平均65°で、内傾している。竪穴中央に堆積する焼土層は、10層の上位に流れ込んだ状態で堆積していることから、H-3が放棄された後に形成されたものと思われる。

遺物出土状況：覆土中央部のくぼみに堆積している2層には、周辺（Ⅱ黒層2回目）に較べて黒曜石・緑色泥岩のフレイク・チップが多数包含されていた。覆土、床面の遺物出土平面分布はライン a-b より南側に偏っている。また5層上面には黒曜石チップが多数散在していた。土器3（2層）は同層の1点と接合。1（2層）と覆土出土の3点、G<sub>1</sub>-63-06（1点）、G<sub>1</sub>-64-25・35・54（各1点）出土の土器片と同一個体。5（7層）とG<sub>1</sub>-63-81（3点）出土の土器片が接合する。9（2層）と6層出土の1点がH-4の4層出土の1点、G<sub>1</sub>-63-15・41・43・61・62、G<sub>2</sub>-63-03・10・11・21・49・54・55（計13点）出土の土器片とが接合する。12（2層）とH-14覆土、H-1覆土2層、P-7覆土3層、G<sub>1</sub>-62-59、G<sub>1</sub>-63-70・81・82、G<sub>2</sub>-63-04・42（各1点）出土の土器片とが同一個体。7層出土の1点とH-5揚げ土出土の1点が接合。石器類では、石鋸4（2層）とH-14覆土出土の1点と接合する。このように複数の覆土に跨って同一個体が存在することは、覆土が比較的短い期間に堆積したことを示している。また最大65m離れたグリッドと遺構に接合関係が見られることは、広域的な接合関係を持っていることを示している。

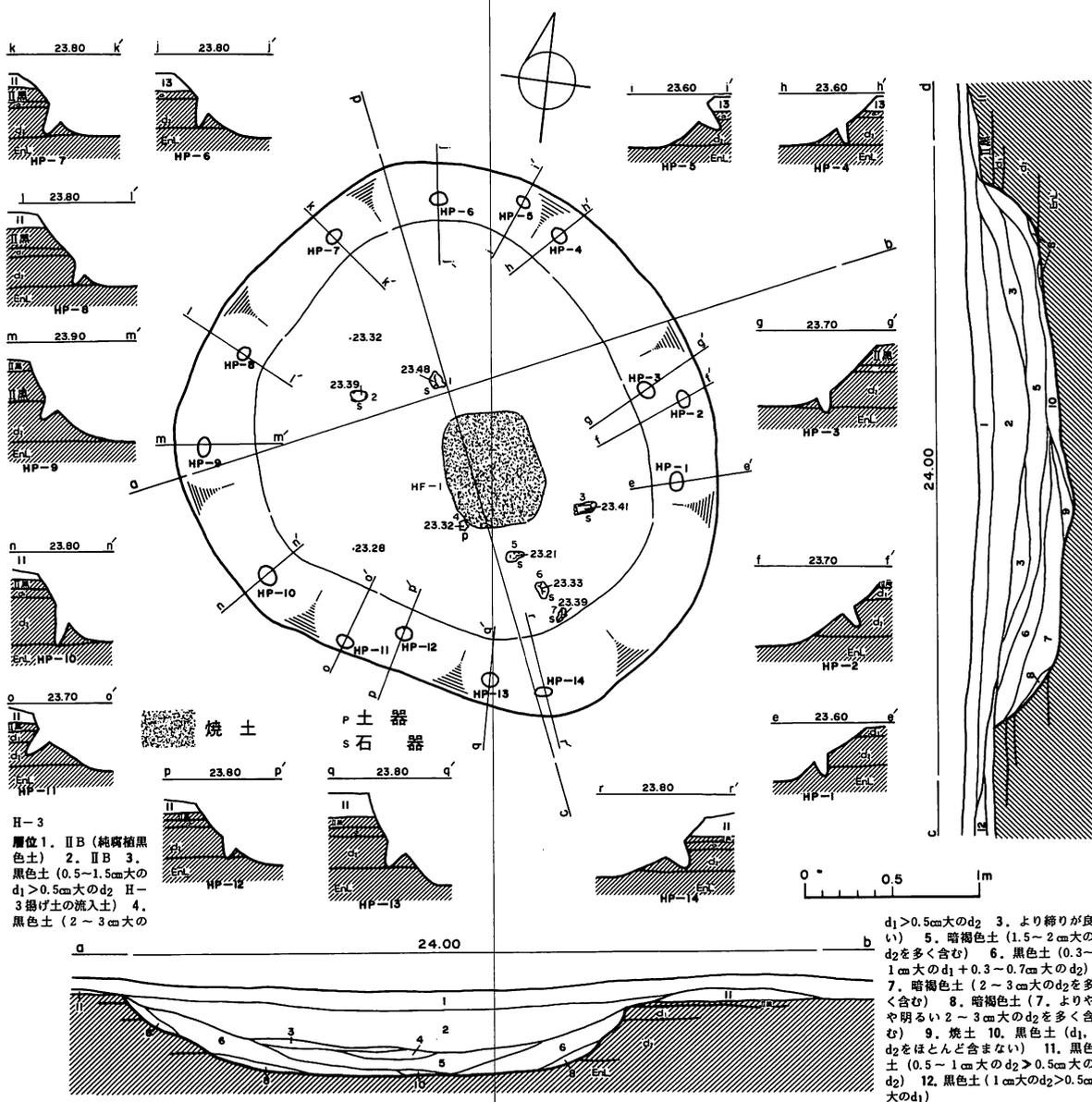
時期：覆土中からⅢ群 b-3 類土器が出土していることより、縄文時代中期後葉の遺構である。

H-3の揚げ土の上にH-4の揚げ土が載っていること、竪穴埋没後の堆積である2層と昨年度調査のH-1とH-14の覆土出土の遺物と接合すること、7層とH-5の揚げ土中出土の土器に接合例があることなどから、H-3はH-1・4・5・14より古い時期のものと思われる。（鈴木）

遺物：土器 1～14はⅢ群 b-3 類土器である。1は口縁に肥厚帯をもち、ヘラ状工具による押引き文を施している。突起の頂部には深い刺突文が加えられている。2は無節の縄文の施されたものである。3は小形でやや薄手のもので、口縁部に斜方向からの刺突の加えられているものがある。4は器面のあれているものであるが、口唇と口縁部に押引き文風の刺突文が施されている。5は整った結

表Ⅲ-1 H-3出土遺物一覧

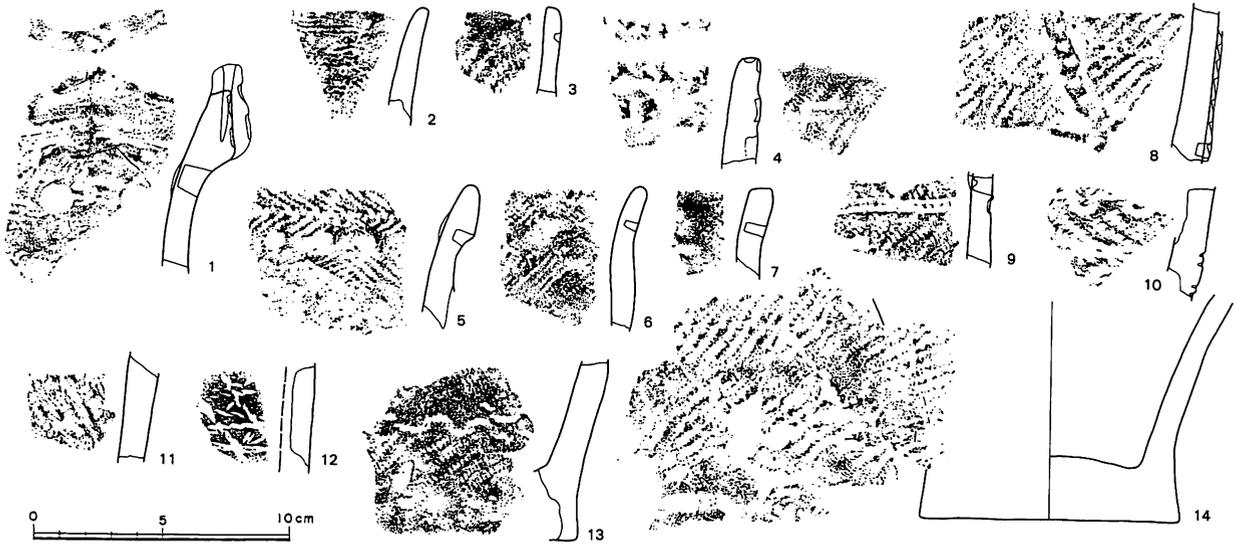
出土遺物	北筒	F	F.C.	小計	石	斧	石	磁	土	小計	礫	總計
覆土上面	8	11	13	24		1			1			33
5・7	36	54	44	98	5		1	2	8	2		144
6	5	4	1	5								10
床面											1	1
焼土		5	11	16							1	17
計	49	74	69	143	5	1	1	2	9	4		205



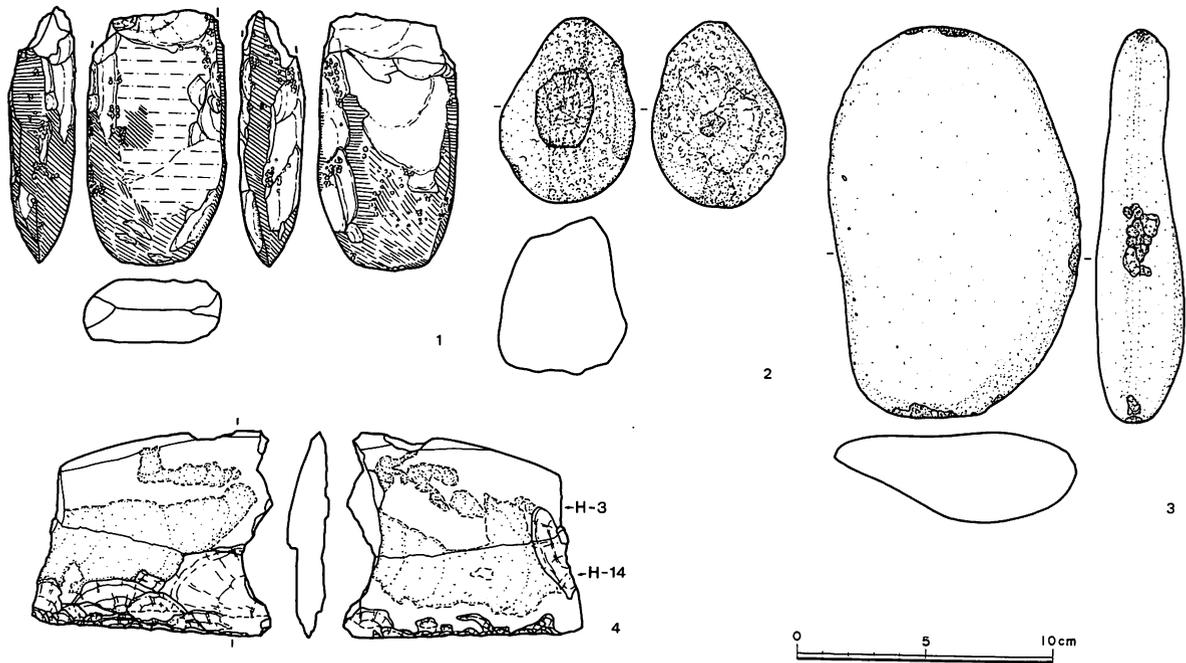
図Ⅲ-4 H-3 実測図

束第1種の羽状縄文の施されているものである。6は細かい斜行縄文の施されたもので円形文は小さい。7は無文のものである。8は内面が平滑に調整されているもので太い貼付帯が施されている。貼付帯の接点には刺突が加えられている。9は薄手のもので、器面には押し引き文が施されている。10は結束第2種の原体による縄文の施された器面に、細い半截竹管状工具による押し引き文の施されているものである。11は異条の縄文の施されたものである。12は細目状の撚糸文のあるものである。13・14は底部の角がやや外側へ張り出すもので、13には結束第2種、14には結束第1種の原体による縄文が施されている。14の胎土には礫が多く含まれている。

石器 1は緑色片岩製石斧、右側刃端部が欠失したためか再研磨を行う。そのために刃部が左側に片寄る。2はカンラン岩たたき石、やや扁平な楕円転礫の周縁を細かく敲打し礫面を潰し、周縁の一端を使用する。3は砂岩たたき石、扁平楕円転礫の長軸側両端と片側縁を使用する。4は凝灰岩製石



図Ⅲ-5 H-3 出土の土器



図Ⅲ-6 H-3 出土の石器

鋸、上縁は丁寧な研磨が施され下縁は両主面から剝離調整が施される。側面は片主面から浅くて大きなノッチが入る。

H-4 (図Ⅲ-7~10、図版Ⅲ-4~7・9)

位置：G<sub>1</sub>-63-21・22・31・32 標高23.5m付近の台地上に位置する。 規模：6.66m/5.42m  
×6.19m/4.9m×0.28m

平面形：長楕円形の端を切除した形 床面積：36.22m<sup>2</sup> 長軸方向：N-17°-W

確認・調査・土層：Ⅱ黒層上面でくぼ地を確認する。遺構を想定し、土層観察用ベルトを設定し、調査を行なう。Ⅱ黒層を2回掘り下げたところで、くぼ地の周囲に黒褐色土(H-19の3層)が輪状に広がっているのを確認したため、ベルトに沿ってサブトレンチを入れる。この結果、東側で二つの竪穴遺構の壁を検出したので、さらにくぼ地の南・北・西側で見られた黒褐色土の外側にある黒色土(H-19の4層)にもサブトレンチを延長したところ、各々三か所でH-4の壁を確認した。内側の竪穴遺構(H-19)の調査後に外側のH-4を調査した。掘り込み面はⅡ黒層を3回掘り下げた面である。覆土は主に揚げ土の流入土で構成されている。なお竪穴中央はH-19によって削平されている。

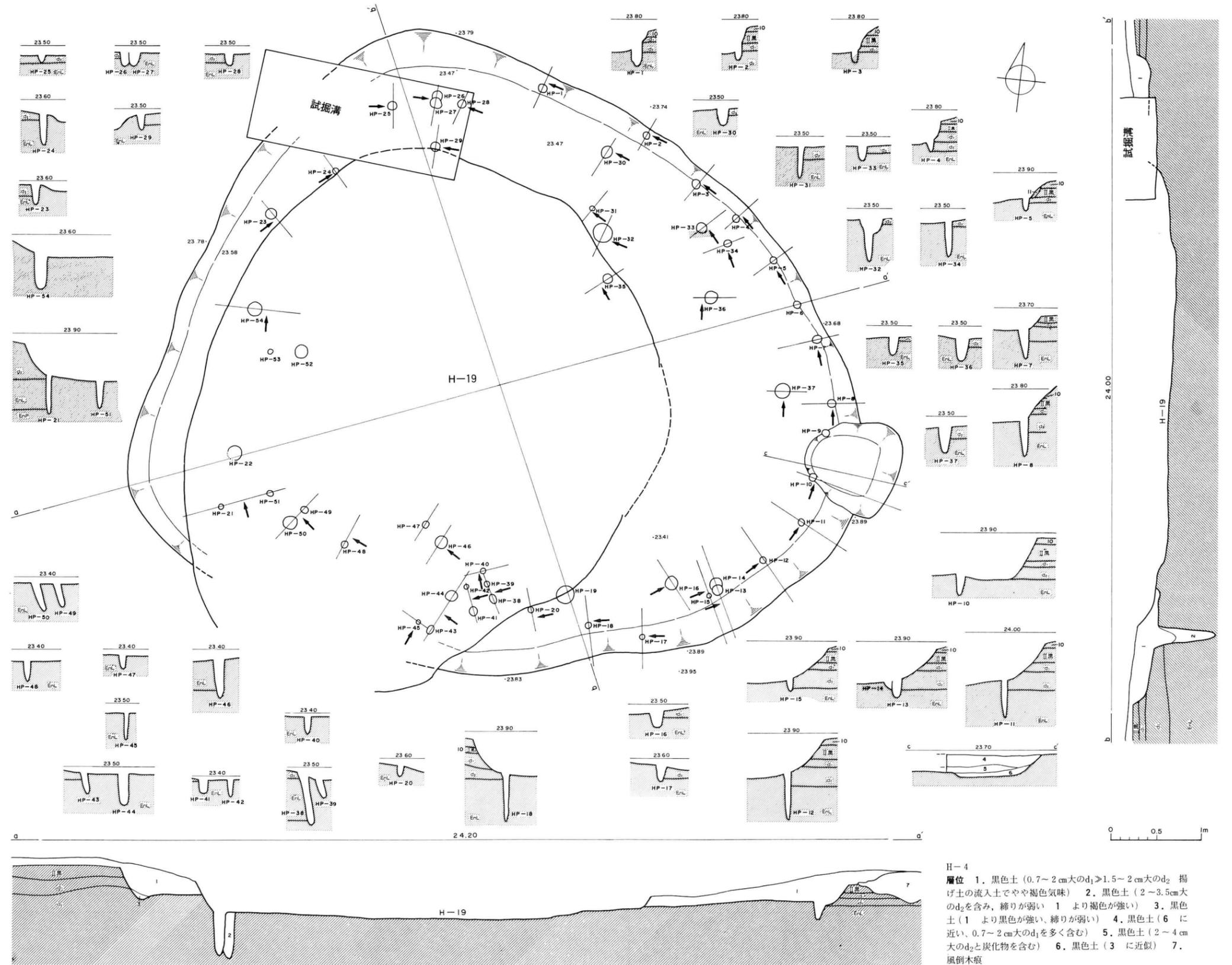
床面：平坦で、Ta-d<sub>2</sub>層を6cm~12cm掘り込んでつくられている。 壁：直線的に外上方向に立ち上がる。

付属ピット：柱穴状小ピットは床面と壁立ち上がり付近に53個検出できた。HP-1~8・11・12・15・18は径6cm~8cmで深さはHP-1~6が平均13cm、HP-7・8・11・12・15・18・21・45は平均31cmである。南西側のピットが深い。HP-16と37、19と36、46と32、22と24が竪穴長軸線を対称軸とする様に並んでいる。これらの径は12cm~18cm、深さはHP-16・32・36・37が平均22cm、HP-19・22・45・46が平均41cmである。南西側のピットが深い。前者の小径ピットは壁際の土止めを支える杭、後者の大径ピットはHP-54を加えて支柱穴と推定できる。HP-38・39・43・49・50は外向したり、先端が曲ったりしていることから木の根痕であろう。竪穴先端部には隅丸台形状の付属ピットが設けられており、1対の小ピットが付随している。この付属ピット内には炭化物を多く含む5層があり、住居廃棄後に火を焚いたものかと思われる。

遺物出土状況：7・8・9(図Ⅲ-8)が床面から出土し、他は全て覆土中から出土した。遺物の平面分布は先端部側の南半に偏り、特に付属ピット内に集中する。また付属ピットとその付近には擦り石5・6(図Ⅲ-8)が2個まとめられた状態で出土しており、H-19の付属ピットでも半割された石皿がまとめられた状態で出土しているのと類似する。4(黒土=H-19の2層)とG<sub>1</sub>-63-12・40・80・89(各1点)出土の土器片と接合する。1層上面出土の1点とG<sub>1</sub>-63-14・21・23・25・34(計12点)の出土の土器片とが同一個体。17(1層・7)と同層上面出土の1点、黒土(H-19の2層)出土の16点、Ⅱ黒層(H-19の1層)出土の7点、H-19の1層出土の1点、2層出土の1点とが同一個体。8(揚げ土)と3(H-16覆土)が接合し、かつG<sub>1</sub>-64-20(1点)出土の土器片と同一個体。8(1層)と3(H-16覆土)が接合。石器類では石斧未製品11(揚げ土)とH-12が接合する。広域的な接合関係を示す4の例以外は近隣のグリッド、遺構と密接な接合関係をもつ。

時期：覆土中にⅢ群b-3類土器が出土していることより、縄文時代中期後葉の遺構である。

H-4はH-19に切られていること、H-12覆土とH-4揚げ土出土の遺物が接合すること、H-16揚げ土とH-4揚げ土中出土の遺物が接合することから、H-4はH-19より古く、H-16と同時期の可能性を有し、H-12より新しいという新旧関係が推測される。(鈴木)



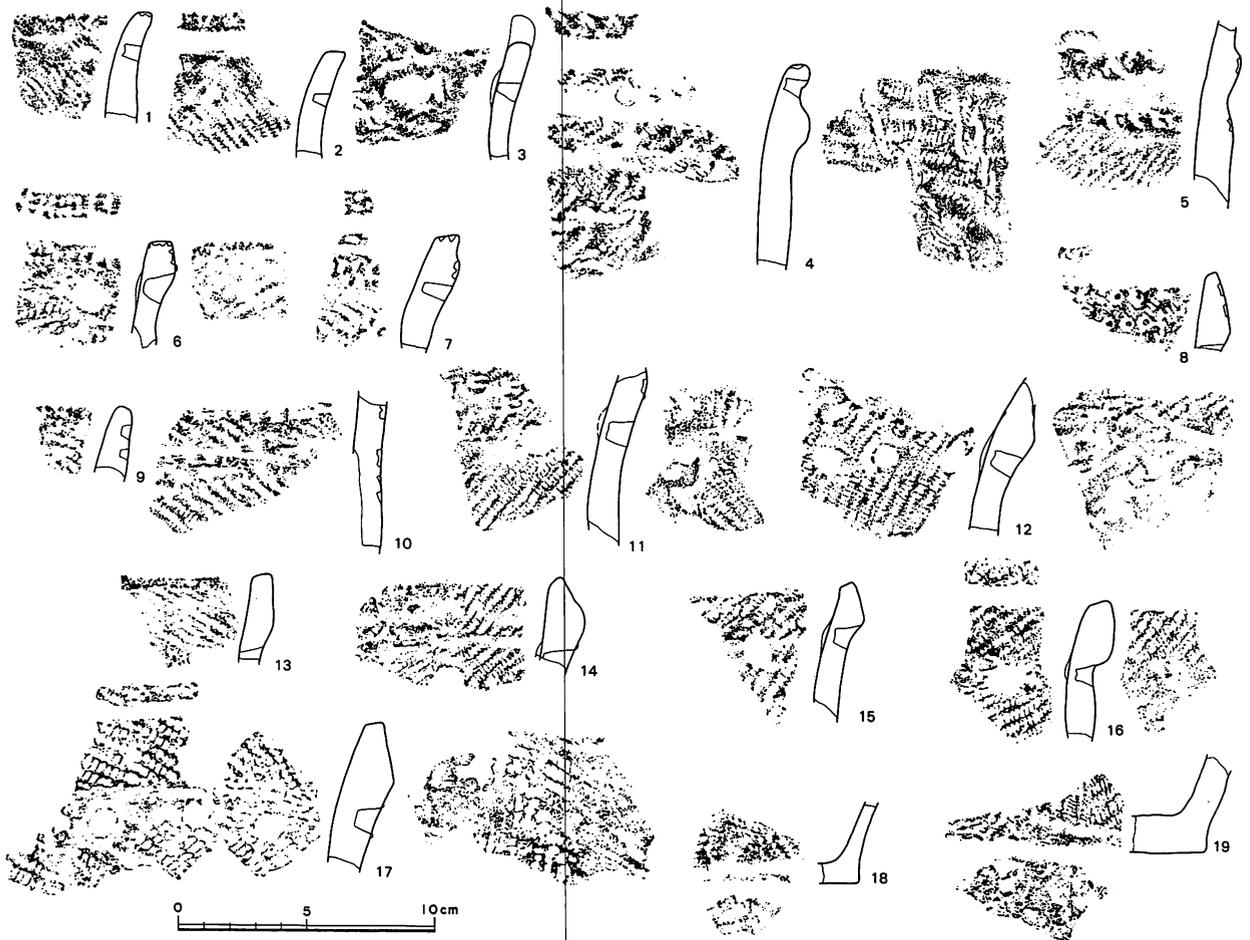
図III-7 H-4 実測図

土器の胎土とは著しく異っている。18は小形薄手の底部、19は粗い縄文の施されたもので、底部の角が外側へ張り出している。

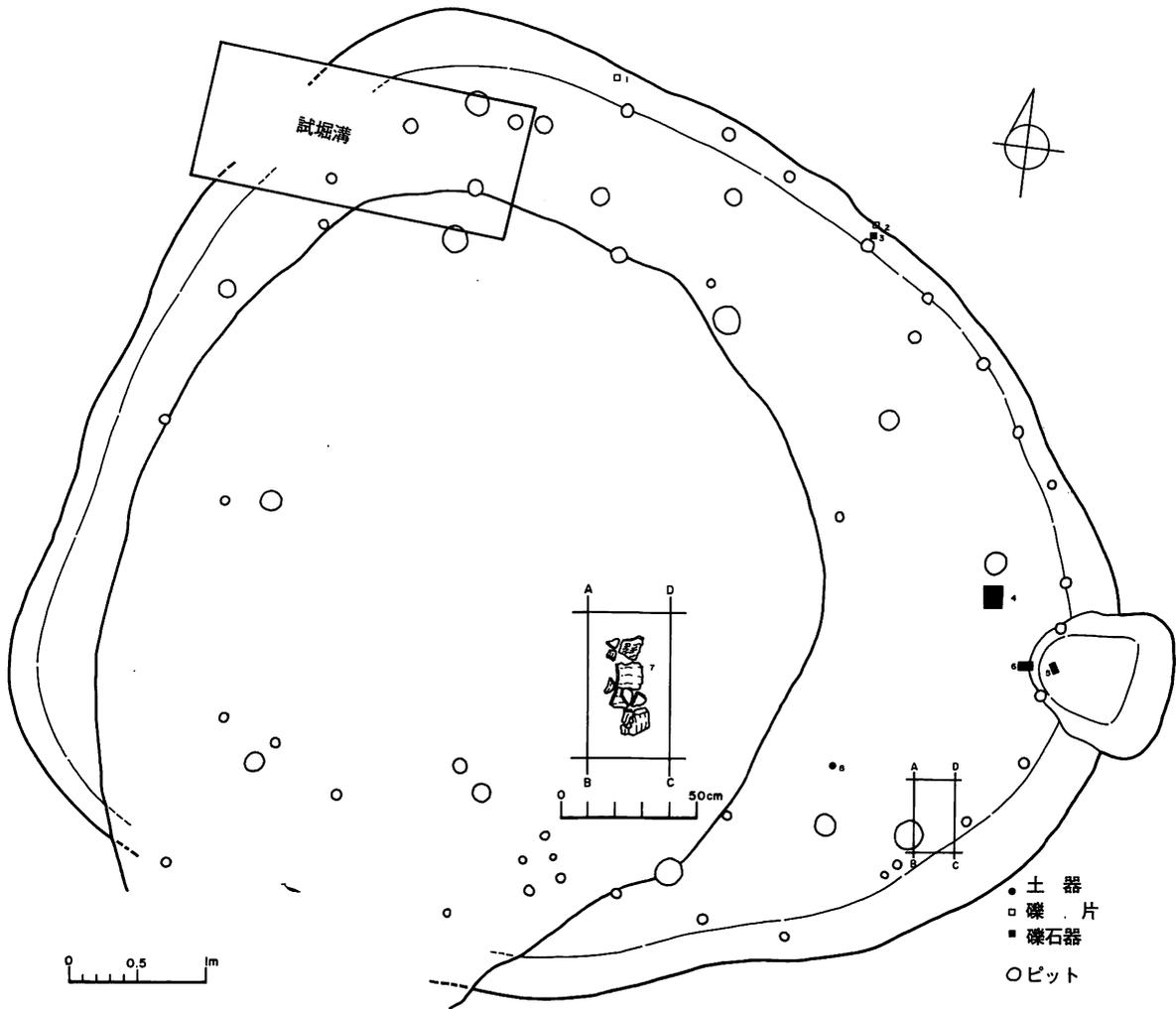
石器 1は有茎鏃。2～6は石槍またはナイフ。2は横長の剝片を素材とした五角形にちかいもので、先端部と両側縁に加工が施されている。表面には自然面が残る。2～6は基部と身の境界が明瞭なものである。5は最大幅が上位、他は中位にある。1～6はすべて黒曜石製である。7は緑色泥岩製石斧、片主面に礫面をのこす横長剝片の末端側と打面側に剝離調整を行い側縁とする。8は緑色泥岩製石斧、大型石斧刃部近くの側縁部によったところの破片を再生している。9は黒色片岩製石斧(丸のみ形)、平坦な片主面をもち、同面の刃部に直線の鑄が入る。基端は欠失する。10は緑色泥岩石斧未製品、極めて扁平な転礫の周縁に剝離調整を加えて側縁を作出する。11は緑色泥岩製石斧未製品、片主面の半分に敲打調整を行う。12は緑色片岩製石斧、丸棒状の断面をもった石斧の破損品で両端・片主面を欠く、側縁を敲击潰している。凸側主面にはストンリッターに転用した使用痕がある。13はカンラン岩たたき石楯円転礫を打割して扁平にし、その周縁面を使用する。14は砂岩くぼみ石、やや扁平な楯円転礫を使用する。風化が著しい。15は安山岩すり石、扁平な礫を素材とする。16は片麻岩すり石。すり面は光沢を帯びる。17は極細粒砂岩砥石、断面が長方形を呈する四面柱状のもの。色調は灰白色でよく固結している。

H-19 (図Ⅲ-11~16、図版Ⅲ-4~8・10)

位置: G<sub>1</sub>-63-21・22・31・32 標高23.5m付近の台地上に位置する。 規模: 6.32m/4.62m × 5.36m/4.32m × 0.28m 平面形: 長卵形 床面積: 20.74m<sup>2</sup> 長軸方向: N-21°-E



図Ⅲ-9 H-4 出土の石器



図Ⅲ-8 H-4の遺物出土状況図

表Ⅲ-2 H-4出土遺物一覧

出土遺物	北筒	石槍	F	RF	F.C.	小計	石斧	斧末	斧F	すり	砥石	台石	片	四片	小計	礫	礫片	総計
覆土上面	31		53		30	83	1		5		1		1	8	6	1	129	
1	66	1	122	1	107	231	4	2	1		1	1		9	3		309	
床面	3																3	
計	100	1	175	1	137	314	5	2	5	1	1	1	1	17	9		441	

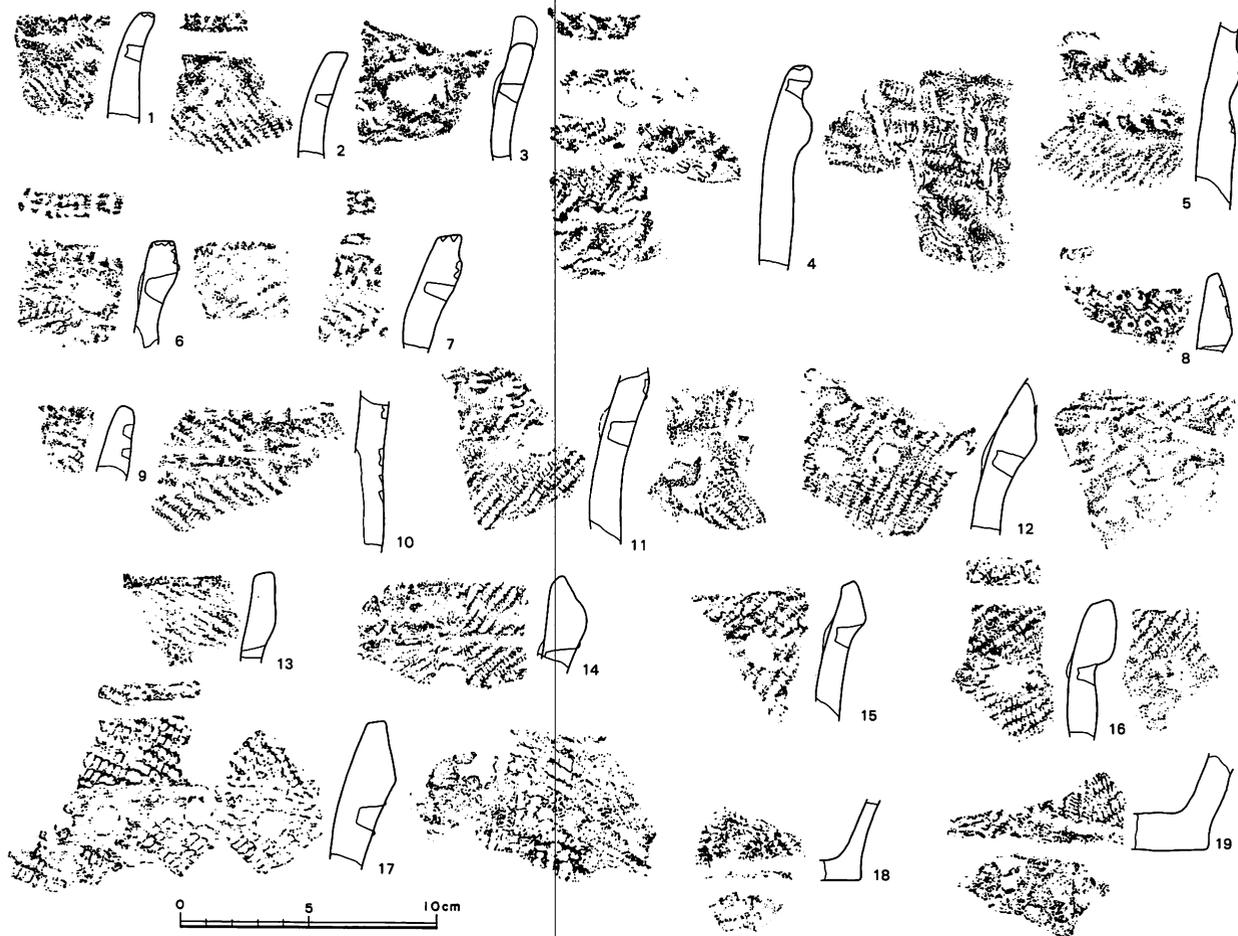
遺物：土器 1～19はⅢ群b-3類土器である。1・2は口縁に肥厚帯のないもので、1では口唇に半截竹管状工具による刺突が加えられている。2は口唇に縄文がある。3は口縁にわずかな肥厚帯がある。4は口縁の少し下に隆起帯のあるもので、器面に縄文を施し、結節の回転文を加え、口縁部をなで調整したのち、隆起帯と口縁に縄文を施している。口縁部に施された円形文は内面に突瘤を形成しない。口唇には刺突が加えられている。5は口唇がわずかに欠損しているが、口唇上に刺突がある。口縁部に隆起帯があり上下になで調整が加えられている。6～9は口縁部に肥厚帯があり、押し引き文もしくは刺突文の施されているものがある。8はH-16の3と接合する。10は体部に押し引き文の施されたものである。11・12は同一個体かとみられるが、11の内面には広く縄文が施されている。13～17は、口縁に肥厚帯をもち、縄文の施されているものがある。17は胎土に円礫を多量に含み他の

土器の胎土とは著しく異っている。18は小形薄手の底部、19は粗い縄文の施されたもので、底部の角が外側へ張り出している。

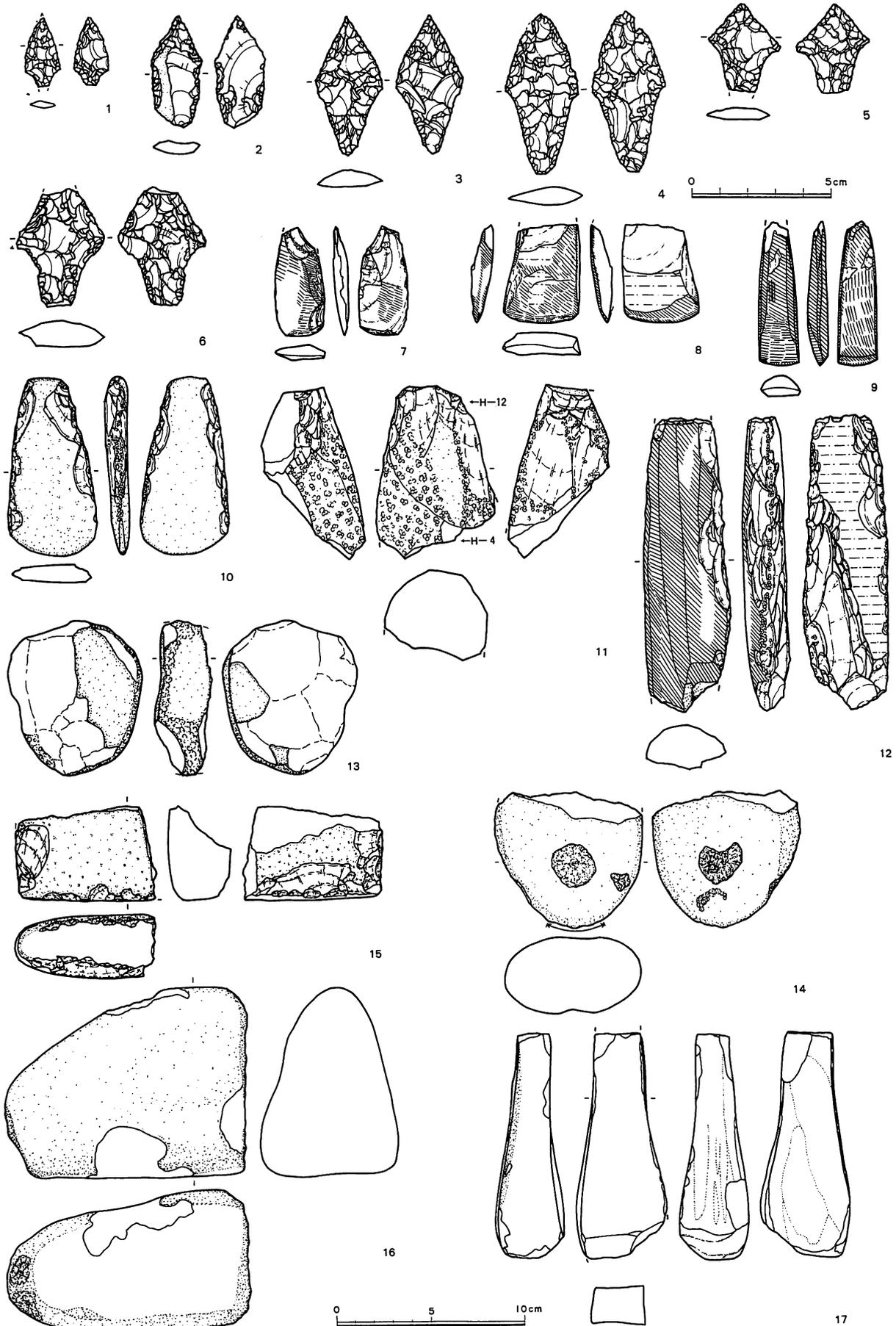
石器 1は有茎鏃。2～6は石槍またはナイフ。2は横長の剥片を素材とした五角形にちかいもので、先端部と両側縁に加工が施されている。表面には自然面が残る。2～6は茎部と身の境界が明瞭なものである。5は最大幅が上位、他は中位にある。1～6はすべて黒曜石製である。7は緑色泥岩製石斧、片主面に礫面をのこす横長剥片の末端側と打面側に剥離調整を行い側縁とする。8は緑色泥岩製石斧、大型石斧刃部近くの側縁部によったところの破片を再生している。9は黒色片岩製石斧(丸のみ形)、平坦な片主面をもち、同面の刃部に直線の鑄が入る。基端は欠失する。10は緑色泥岩石斧未製品、極めて扁平な転礫の周縁に剥離調整を加えて側縁を作出する。11は緑色泥岩製石斧未製品、片主面の半分に敲打調整を行う。12は緑色片岩製石斧、丸棒状の断面をもった石斧の破損品で両端・片主面を欠く、側縁を敲击潰している。凸側主面にはストンリタッチャーに転用した使用痕がある。13はカンラン岩たたき石楯円転礫を打割して扁平にし、その周縁面を使用する。14は砂岩くぼみ石、やや扁平な楕円転礫を使用する。風化が著しい。15は安山岩すり石、扁平な礫を素材とする。16は片麻岩すり石。すり面は光沢を帯びる。17は極細粒砂岩砥石、断面が長方形を呈する四面柱状のもの。色調は灰白色でよく固結している。

H-19 (図Ⅲ-11~16、図版Ⅲ-4~8・10)

位置：G<sub>1</sub>-63-21・22・31・32 標高23.5m付近の台地上に位置する。 規模：6.32m/4.62m × 5.36m/4.32m × 0.28m 平面形：長卵形 床面積：20.74m<sup>2</sup> 長軸方向：N-21°-E



図Ⅲ-9 H-4 出土の土器



図Ⅲ-10 H-4 出土の石器

**確認・調査・土層：**H-4で述べたように、二つの竪穴が重複していることが確認されたので、内側で検出した壁をもつH-19の調査を先行して行なった。覆土は床面全体をおおう層厚12cm前後の5層とその上に堆積する壁際の流れ込み土(3・4層)で構成される。掘り込み面はⅡ黒層を2回掘り下げた面である。

**床面：**平坦で、En-Lを約10cm掘り込んでつくられている。 **壁：**直線的に外上方向に立ち上がる。

**付属ピット：**柱穴状小ピットは床面と壁の立ち上がり付近に28個確認できた。HP-5・6・13は径の平均8cmで深さは平均8cmである。HP-14・17・19・20・22は径平均8cmで、深さは平均37cmである。HP-1と3、2と4、7と23、9と21は竪穴長軸線を対称軸とする様に並んでいる。これらの径は12cm~16cm、深さはHP-1・3が平均25cmで、他は平均46cmである。前者の小ピットは壁際の土止め用の杭、後者の小ピットは支柱穴である。なおHP-15も支柱穴であろうが対応する柱穴は検出できなかった。竪穴先端部には隅丸台形状の付属ピットが設けられており、2対の小ピットが付随している。この付属ピットは先端部側に1段のテラスとそれに続いて内湾した2段の壁をもっている。ピット内の土層の堆積は竪穴部とほぼ同様であるが、炭化物の薄い層(11層)が竪穴先端部床面からピット内に広がっており、その上面からは細かく割れた土器片が出土した。

**炉跡：**HF-1・3・4は地床炉である。HF-1では焼土面上に炭化物が堆積していた。HF-2は炭化物の集積、HF-5は炉石の抜き取り痕のある石組み炉跡である。これらの炉跡は、支柱穴に建替えなどによる柱穴の切り合いが見られないことから短期間に連続して使用されたか、同時期に複数使用されていたのか、二つの状況が考えられる。なおHF-1・2の炭化物の集積が見られることから、もっとも後まで使用されていた可能性が高い。

**遺物出土状況：**床面出土遺物はラインa-bより南側に多く出土している。とりわけ付属ピット付近ではⅢ群b-3類土器が42点出土しており、床面出土遺物全体の75%を占める。2(HF-4)と5層出土の4点が接合する。4(5層)とH-3覆土上面出土の土器片が同一個体。322(5層)とH-4揚げ土出土との1点が同一個体。3(5層)とH-4覆土1層出土の1点、G<sub>1</sub>-63-31(1点)出土の土器片とが接合する。11(2層)と16(H-17・1層)が接合する。29(床面遺物No.5)と1(H-22覆土)が同一個体。1(5層)と16(フレイク・チップ集中No.9)が同一個体。石器類では5(5層上面)とフレイク・チップ集中No.2出土の1点が接合する。15(2層)がG<sub>1</sub>-63-72(1点)出土のものと接合する。H-19の接合例は、最大15m離れて接合する。この1例を除けば近隣のグリット、遺構と接合する。

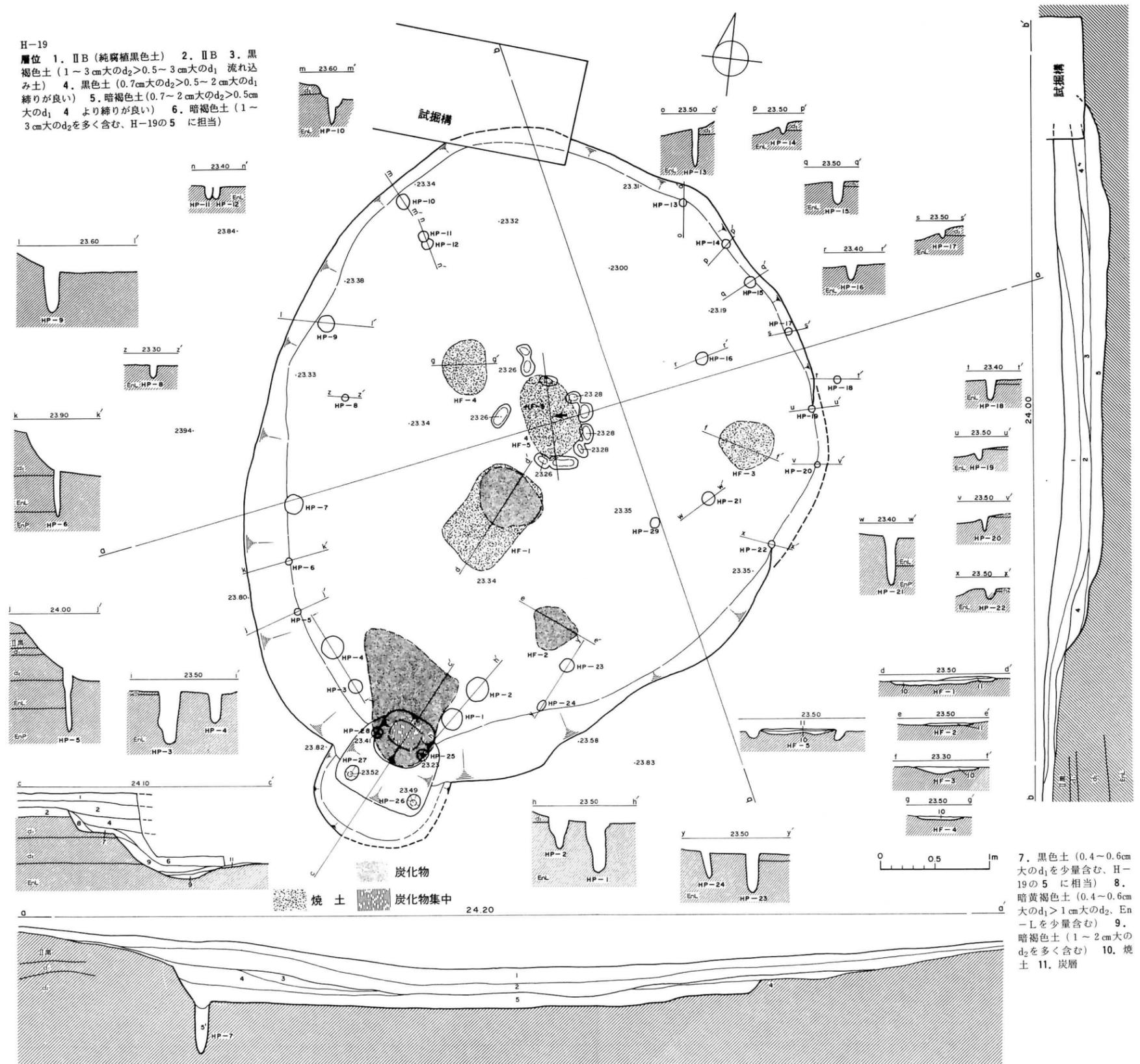
**時期：**床面からⅢ群b-3類土器が多数出土していることより、縄文時代中期後葉の遺構である。

H-19がH-4を切っていること、2層とH-17覆土1層出土の個体と接合すること、床面とH-22覆土出土の個体が同一個体であることから、H-4・22→H-17・19という新旧関係が成立する。(鈴木)

表Ⅲ-3 H-19出土遺物一覧

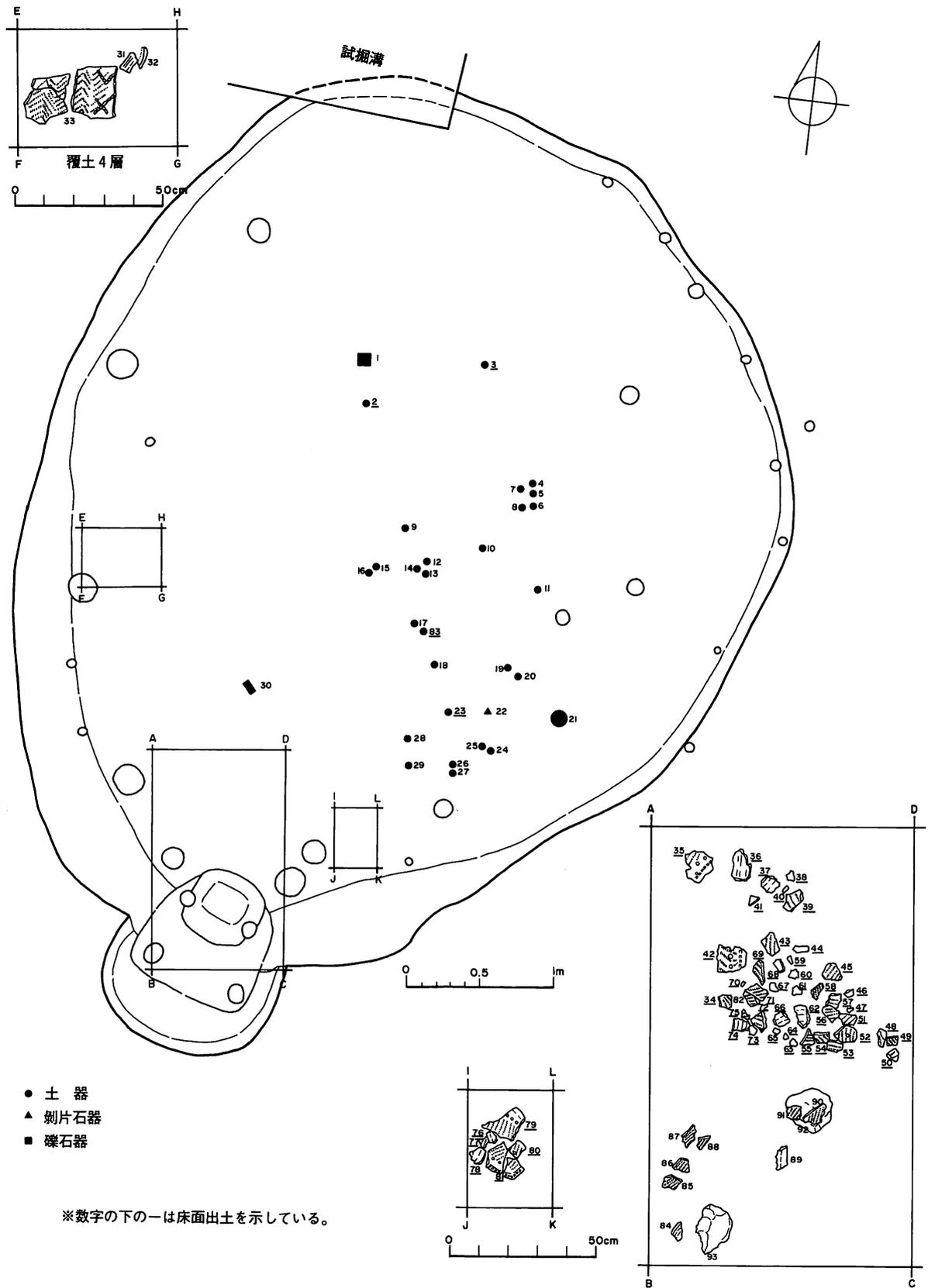
出土遺物	原瓦台	ノズル	北	南	小計	石	瓦	片	石	瓦	片	器	F	RF	UF	F.C.	小計	石	瓦	片	F	瓦	片	石	瓦	片	小計	石	瓦	片	小計		
覆土5	2	1	300	303	1	2	2	2	1	1	1	466		1	2	499	978	2	3	2	142	1	3	4	3					160	8	1449	
4			41	41								95				233	329				7									6	1	380	
入口			6	6								28				28	56													2	3	3	65
床面			125	125																												125	
HF 1			23	23								148				1179	1327				2									2	3	1	1356
2			1	1								87	1		1952	2040				1										1	3	2045	
4												3				218	221															221	
5												35				158	193													9	1	203	
HP 4												2					2															2	
11			1	1																												1	
計	2	1	497	500	1	2	2	2	2	1	1	864	2	2	4267	5146	2	4	3	151	2	4	4	3	2	172	15	14			5847		

H-19  
 層位 1. II B (純腐植黒色土) 2. II B 3. 黒褐色土 (1~3 cm大のd<sub>2</sub>>0.5~3 cm大のd<sub>1</sub> 流れ込み土) 4. 黒色土 (0.7 cm大のd<sub>2</sub>>0.5~2 cm大のd<sub>1</sub> 締りが良い) 5. 暗褐色土 (0.7~2 cm大のd<sub>2</sub>>0.5 cm大のd<sub>1</sub> 4より締りが良い) 6. 暗褐色土 (1~3 cm大のd<sub>2</sub>を多く含む、H-19の5に相当)



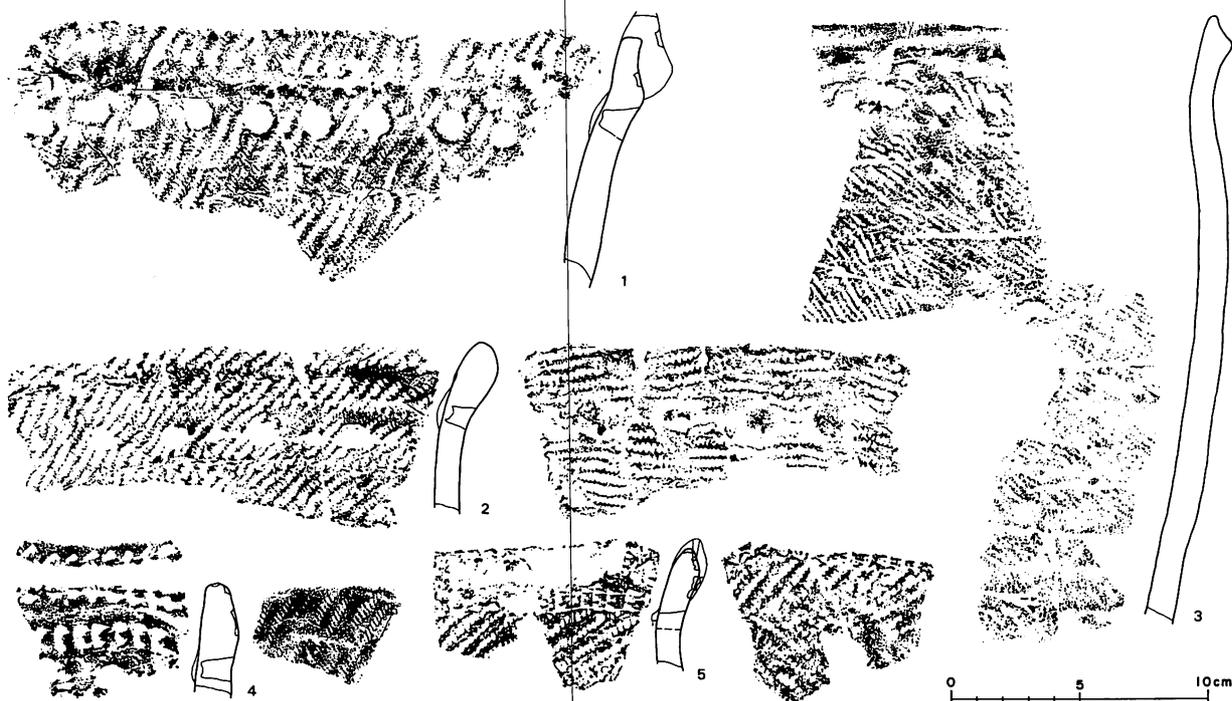
7. 黒色土 (0.4~0.6 cm大のd<sub>1</sub>を少量含む、H-19の5に相当) 8. 暗黄褐色土 (0.4~0.6 cm大のd<sub>1</sub>>1 cm大のd<sub>2</sub>、En-Lを少量含む) 9. 暗褐色土 (1~2 cm大のd<sub>2</sub>を多く含む) 10. 焼土 11. 炭層

図III-11 H-19 実測図



図Ⅲ-12 H-19の遺物出土状況

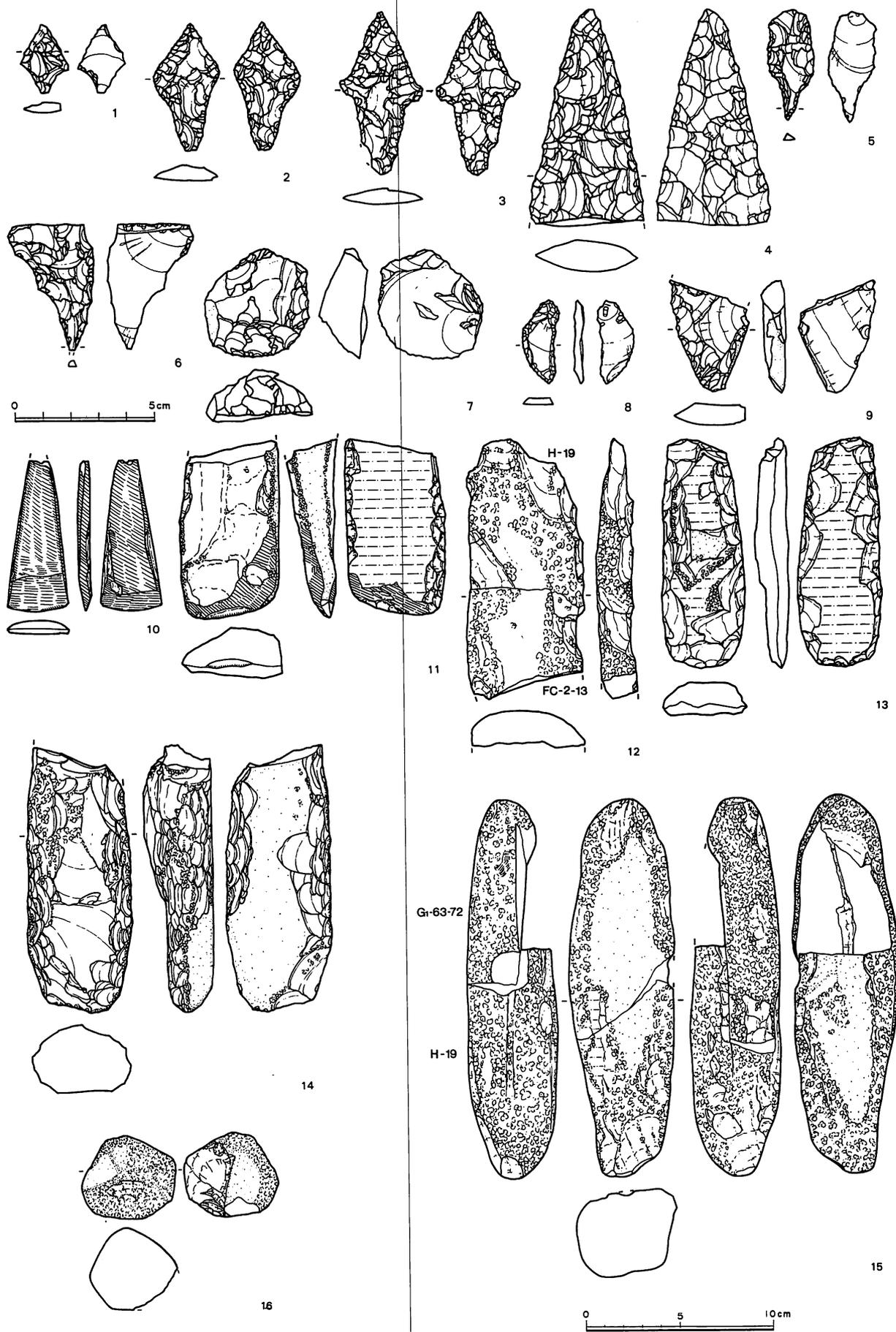
遺物：土器 1～34はⅢ群b-3類土器である。1は口縁の4か所に山形の小突起を設け、突起の頂部に薄いヘラ状工具による刺突を加えている。口縁の隆起带上縁に施された押し引き文風の刺突はかなり深く施されているが、突起頂部の刺突と同一工具によるとみられる。器面にはやや縦行気味の縄文が施されている。口唇にも部分的に縄文がみられる。器形は隆起部から上が器壁より薄い粘土帯を継ぎ上げて作られていて、隆起部の内面には、継ぎ目を指頭で調整したかのようにくびれがのこっている。2は口縁の肥厚するもので、口縁に沿って粘土帯を加えたものようである。器面から口唇にかけて斜行する縄文が施され、内面には横走る縄文が施されている。縄文の圧痕は深い。3は口縁が断面三角形に肥厚するもので、器体を形成する粘土帯の最上部を断面が三角形になるように調整したもののようである。隆起帯の上は無文である。器面には無節の細い縄文が浅く施されている。4は口縁部に肥厚帯のあるもので、口縁部と口唇部に押し引き文風の刺突を加えている。H-3の4と接合する。5は口縁の肥厚帯下縁にも押し引き文を施すもので、ヘラ状工具は先端が三叉になっている。内面には口縁部が横位、その下に縦位にLRの原体で縄文を施している。6～9は口縁の肥厚帯に押し引き文もしくは押し引き文風の刺突文を施すものである。なお8、10は口唇にも施文されている。11は口縁部が幅広く無文帯となっているもので、体部とは隆起帯で画されている。隆起帯上には縄線文が施されている。H-17にも同一個体に属するものがある。ノグップⅡ式もしくは煉瓦台式と関連するものとみなされる。12は口唇の少し下に低い隆起帯の形成されているもので、口唇に押し引き文を施し、隆帯の下縁に沿って口径の大きい円形文を施している。内面はなで調整されていて、突瘤は形成していない。器面の縄文は粗い斜行縄文である。13は口縁にわずかな肥厚部を設け、その上に短い縄の圧痕を横位に施している。円形文はその下に存在する。口唇と内面は平坦に調整されている。器面には結束のある斜行縄文が施されている。14は口唇に半截竹管状工具による刺突の加えられた口縁部破片で、無文である。15はやや薄手の無文のもので、口唇直下に円形文がめぐらされている。口唇は平坦になで調整されている。16～20は口縁部に肥厚帯をもち、縄文の認められるものである。17・



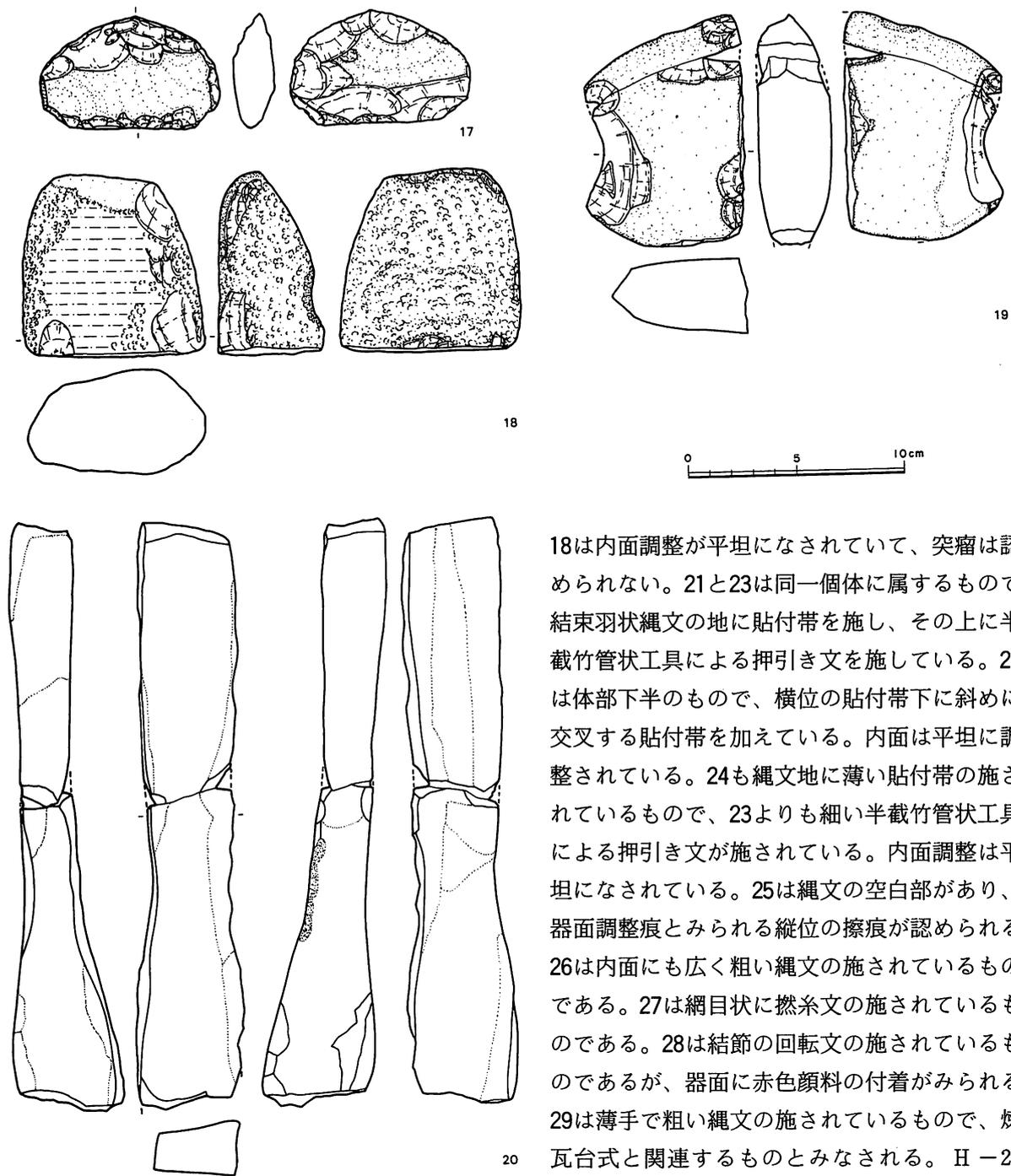
図Ⅲ-13 H-19 出土の土器(1)



図Ⅲ-14 H-19 出土の土器(2)



図III-15 H-19 出土の石器(1)



図Ⅲ-16 H-19 出土の石器(2)

18は内面調整が平坦になされていて、突瘤は認められない。21と23は同一個体に属するもので、結束羽状縄文の地に貼付帯を施し、その上半截竹管状工具による押し引き文を施している。22は体部下半のもので、横位の貼付帯下に斜めに交叉する貼付帯を加えている。内面は平坦に調整されている。24も縄文地に薄い貼付帯の施されているもので、23よりも細い半截竹管状工具による押し引き文が施されている。内面調整は平坦になされている。25は縄文の空白部があり、器面調整痕とみられる縦位の擦痕が認められる。26は内面にも広く粗い縄文の施されているものである。27は網目状に撚糸文の施されているものである。28は結節の回転文の施されているものであるが、器面に赤色顔料の付着がみられる。29は薄手で粗い縄文の施されているもので、煉瓦台式と関連するものとみなされる。H-22の1と同一個体に属する。30~34は底部で、32はヘラ状工具による押し引き文が施されている。

34には刺突文が加えられている。

石器 1は有茎鏃。2~4は石槍またはナイフ。2は身の左側縁が丸味を帯び、左右非対称である。3は茎部と身の境が明瞭に区別されている。2・3はいずれも最大幅は中位にある。4は大形品の破損したものである。5・6は石錐。5は基部にふくらみがある。6は厚みのある剥片を素材としたもので、機能部の側縁に刃つぶれが顕著である。7~8はスクレイパー類。7は下縁に急角度の刃部が作り出されている。自然面を多く残す。8・9は背面の周縁に加工が施されたものである。8は薄手。1~9はすべて黒曜石製である。10は黒色片岩製石斧、平らな側面と主面をもち、図右側の主面

には光沢がある。鋳は両主面にあって直線的、基端は欠失する。11は緑色泥岩製石斧、両主面は節理面、片側面は平らな礫面で刃部のみ研磨調整が入る。12~15は緑色泥岩石斧未製品、12は平坦側主面は節理面、大きな剝離の側縁調整が若干みられる。13は平坦側主面が節理面で側縁・刃部予定部分に剝離調整が入る。刃部側の厚みがたりない。14は厚みのある扁平転礫が素材で、側縁調整のある刃部に調整はない。基部予側が欠失する。15は断面隅丸の転礫が素材で、側面は敲打調整をうけるが刃部・基部の作り出しは認められない。H-19出土の破片はたたき石に転用され折面を使用する。16は緑色泥岩たたき石、垂角転礫を使用。17は砂岩製すり石、側面側から剝離調整を加えて厚みを減じる。18は緑色泥岩製北海道式石冠未製品(?)、敲打で作り出された溝が片主面にある。19は砂岩製石錘、扁平楕円礫の長軸端に両面から大きな抉りが入る。抉り部は若干磨耗する。20は極細粒砂岩砥石で、灰白色を呈し固結している。断面が方形を呈する四面柱状のもの。

**H-5 (図III-17~19、図版III-11~13)**

**位置:** G<sub>1</sub>-63-02・03・12・13 標高23.8m付近の台地上平坦地に位置する。 **規模:** 4.6m/4.4m×4.32m/4.0m×0.3m **平面形:** 卵形 **床面積:** 13.33m<sup>2</sup> **長軸方向:** N-S

**確認・調査・土層:** II黒層上面でG<sub>1</sub>-63-13付近が若干くぼんでいることから遺構を想定し、土層観察用ベルトを設定し、調査を行う。約5cmほど掘り下げたところで粘質の黒色土が円形状に見られ、その周辺にはd<sub>1</sub>を多量に混入する揚げ土が確認された。ベルトに沿って小トレンチを設定し、床面、壁の立ち上がりを確認する。3層、4層を除去し、d<sub>1</sub>+d<sub>2</sub>を主体とするやや硬めの混合土を順次掘り下げる。覆土はd<sub>1</sub>+d<sub>2</sub>>II Bで、全体に橙色を呈し、厚く堆積している。

**床面:** 全体に凹凸があり、南東側が低くなっている。d<sub>2</sub>を浅く掘り込んで構築されている。

**壁:** 立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

**炉跡:** 焼土などは検出されていない。床面南東側でややまとまって炭化物が出土している。

**付属ピット:** 柱穴状小ピットは18個検出されている。このうち壁際の9個、床面中央部北東寄りの1個は浅いが直立し、覆土は褐色土である。また壁面の8個は浅いピット状のもので、覆土は暗褐色でボソボソしている。

**遺物出土状況:** 出土遺物の大半は覆土中のものである。遺構外(北西側)の揚げ土中から黒曜石のフレイクおよびフレイク・チップが多量に出土している。

**時期:** 掘り込み面はII黒層上位である。床面からIII群b-3類土器が出土し、周辺からも同時期の土器が出土していることから、縄文時代中期後葉(北筒式期)のものと思われる。

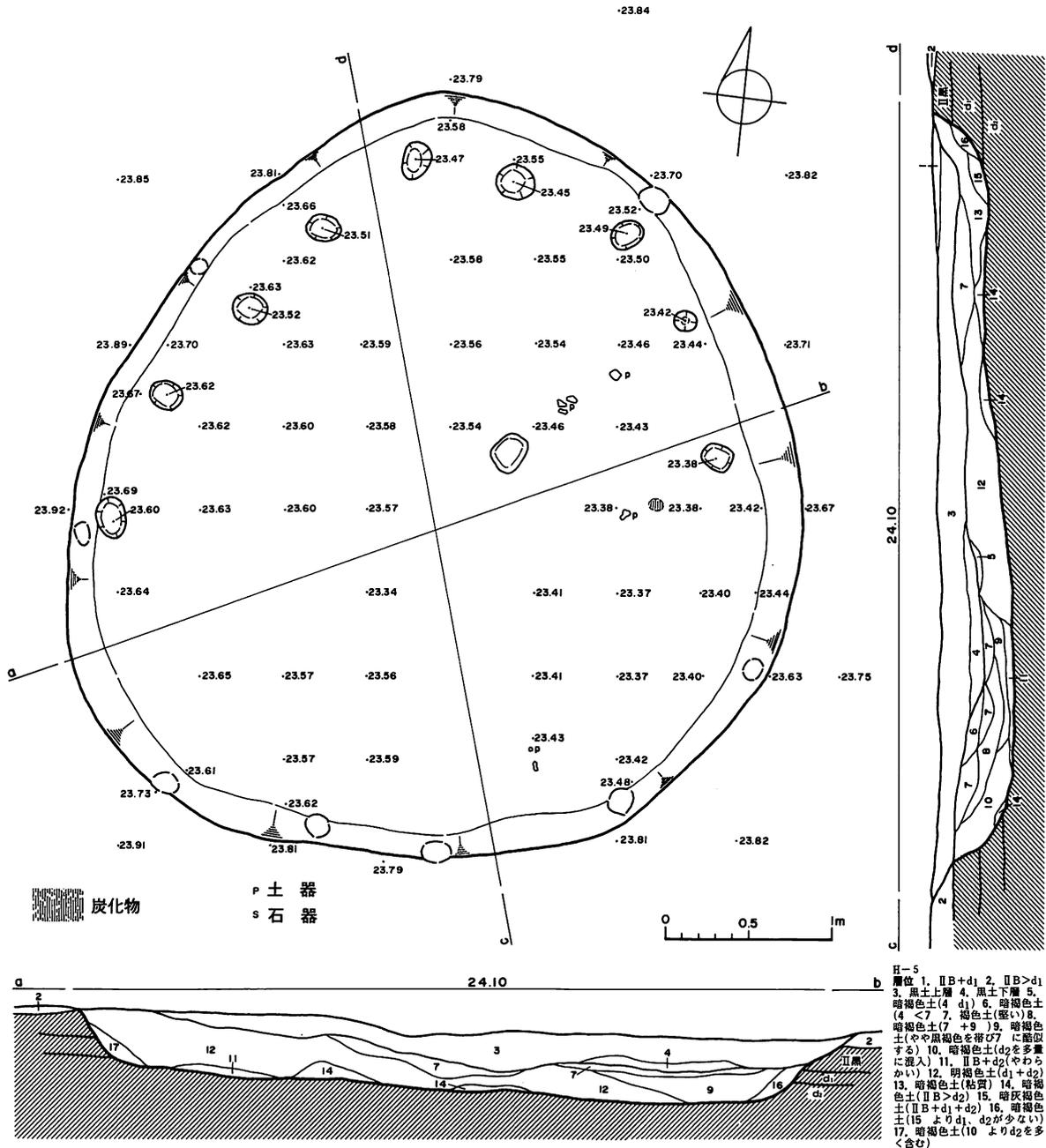
H-16の揚げ土の上にH-5の揚げ土がのっており、他方H-6がH-5の揚げ土を切っている。(和泉田)

**遺物:** 土器 1~39はIII群b-3類土器、40・41はIV群a類土器、42はV群b類土器である。1は口縁部に隆起帯のあるものでH-4の7と同一個体である。押し引き文風の刺突文を施すもので、工具は先端が二又になっている。2は口縁と口唇部にやや乱れた押し引き文を施すものである。3は口縁

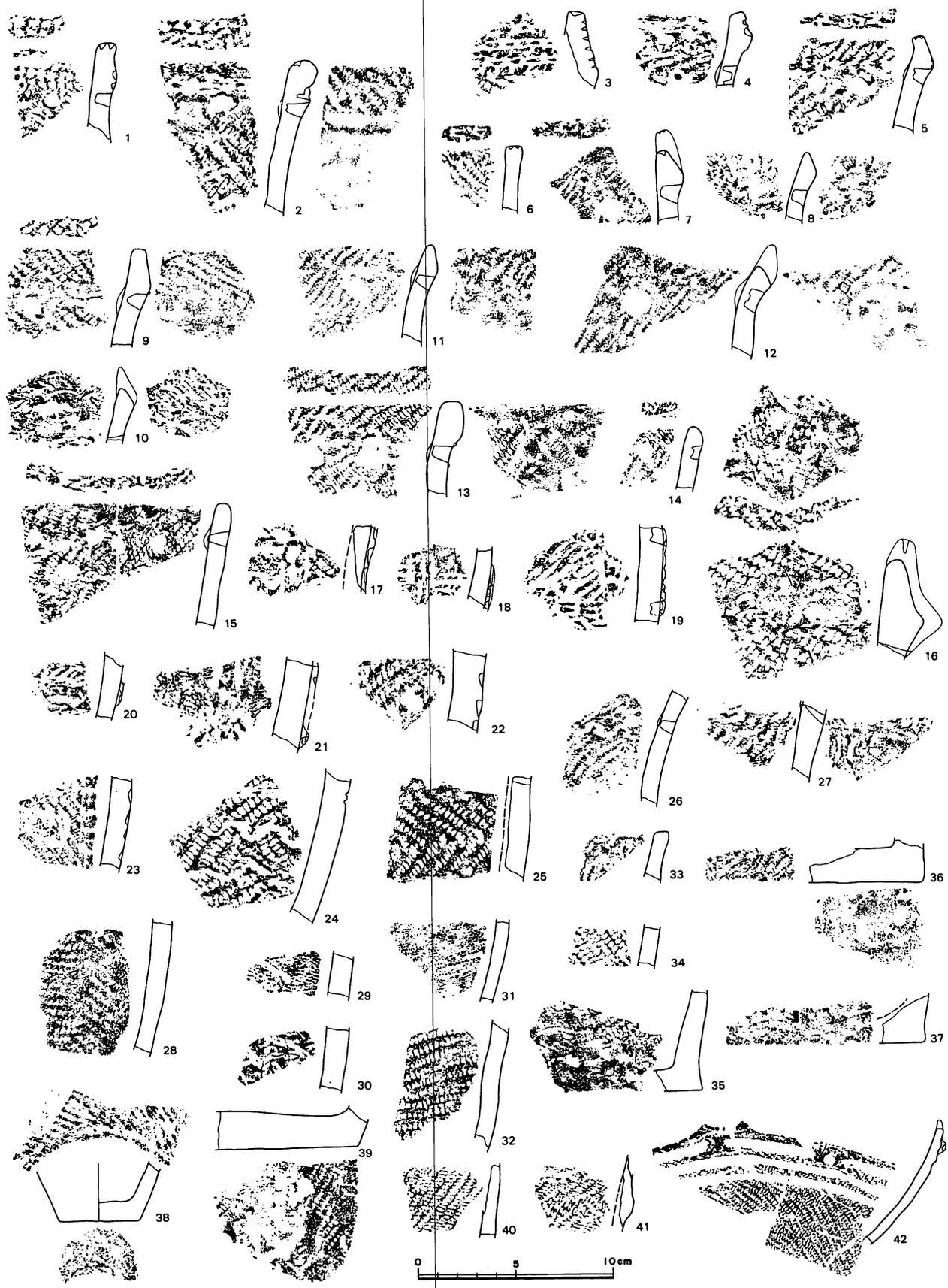
表III-4 H-5出土遺物一覧

出土遺物	Ⅱ	北	Ⅲa	Ⅲb	小計	掘器	F	RF	F.C.	小計	石斧	斧末	斧F	た片	石錘	台片	砥片	小計	礫	礫片	総計	
覆土上面		95			95		14	1		15	3	4					7		2	2	119	
覆土	1	158	1	3	163	1	61		68	130	2	9	1	1	1	25	39	2	2	4	336	
6~10		3			3		898		1169	2067											2070	
床面直上		1			1																	1
床面		7			7				2			2					4					11
計	1	264	1	3	269	1	1063	1	1239	2212	5	15	1	1	1	25	50	2	4	6	2537	

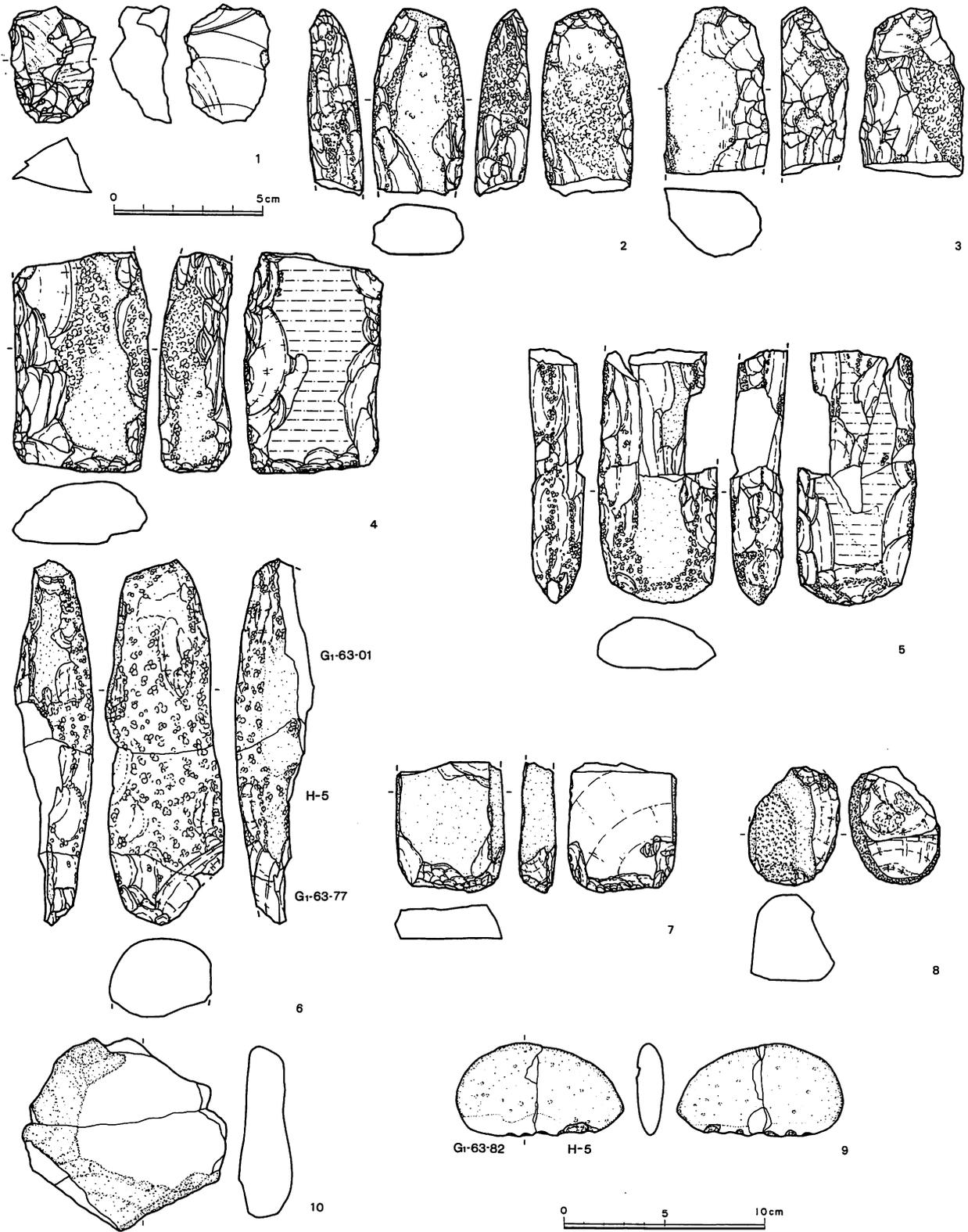
部に整った幅のせまい工具による押し引き文を3段に施すものである。4は口縁の隆起部に斜方向からの刺突を加えるものである。5は口縁の肥厚帯と口唇に、幅のせまい半截竹管状工具による押し引き文風の刺突を施すものである。6は口唇に斜方向からの刺突を加える比較的薄手のものである。7は口縁に山形隆起部のあるもので、器面には無節の縄文が施されている。8~16は縄文の施された口縁部である。8~12・16は口縁部の断面がほぼ三角形をなすように形成されている。いずれも口縁部の内面に縄文が施されている。13は口縁部の肥厚帯が角状に近いもので、内面は横位と縦位の施文により羽状の縄文が施されている。17~20は器面に貼付帯のあるもので、17は刺突文、18~21は押し引き文を貼付帯に施す。19はフレイク・チップ集中No. 4、H-18の9と同一個体に属する。22~24は器面に押し引き文の施されているものである。22・23はヘラ状工具、24は細い半截竹管状工具によるものである。24はH-3の10と接合する。25~28は縄文の施された体部、29は撚糸文、30は網目状の撚糸文、



図III-17 H-5 実測図



図Ⅲ-18 H-5 出土の土器



図Ⅲ-19 H-5 出土の石器

31は擦痕のある胴部破片である。32～34は内面の磨かれているものでノダップⅡ式などとの関連があるとみられるものである。35～39は底部で、34～36は角が張り出し、38・39は張り出しがない。40・41は器面に縦位施文、貼付帯に横位施文のあるもの、42は浅鉢形を呈するもので、口縁と器面の文様帯に小突起を付すものである。

石器 1はスクレイパー。厚みのある縦長剥片の打点側を刃部としている。刃部には刃つぶれが認められる。黒曜石製。2～7は緑色泥岩石斧未製品、2は片主面に転礫面をのこす。敲打調整を両側縁と片主面に施す。3は片主面に平らな転礫面をのこす。敲打調整はまばらで側縁の剥離調整がみえる。折面には転礫面から加撃したためにバルブがのこる。4は節理の発達した扁平な素材で、側縁調整が片側に顕著にみられる。5はやや厚みのある扁平な素材。側縁に剥離調整が入り、刃予定部分には若干の剥離調整が入る。6は円形に近い断面をもつ。片主面は敲打調整で側縁は礫面をのこす。刃予定部分に打点を残す大きな剥離面をもつことから刃部調整中に破損したのであろう。その後片側縁からの加撃によって破損部分(図のH-5・G<sub>1</sub>-63-77の部分)を折取っている。7は断面長方形の素材で、刃予定部分に剥離調整がある。8はカンラン岩たたき石で、楕円転礫の周縁を使用する。9は凝灰岩石鋸。刃部に若干の剥落がある。10は細粒砂岩砥石で、黄褐色を呈し固結は弱い。盤状の形態をもつ。2次的な加熱を受けて赤変している。

**H-6** (図Ⅲ-20～22、図版Ⅲ-13～15)

**位置:** G<sub>1</sub>-63-03・04・13・14 標高23.90m付近に位置する。 **規模:** 5.72m/4.85m×4.4m/3.66m×0.43m **平面形:** 長円形 **床面積:** 14.62m<sup>2</sup> **長軸方向:** N-6°-W

**確認・調査・土層:** H-9の床面下にd<sub>1</sub>とd<sub>2</sub>が混合する堅い土が厚く堆積し、その下に暗褐色土のやわらかな粘質土がある。この下面を床面とする。覆土はd<sub>1</sub>+d<sub>2</sub>の全体に赤っぽい土で層厚は15cmほどである。南側ではこの下に黒っぽい軟質の土が厚く堆積している。

**床面:** 床面は平坦で、d<sub>2</sub>中に構築されている。床面上には炭化物が散在している。

**壁:** 全体に急傾斜な立ち上がりである。

**炉跡:** 中央部やや南寄りに、15cm×20cmの赤色化した部分が見られる。地床炉であろう。

**付属ピット:** 柱穴状小ピットは67個検出されている。壁中に33個あり、すべて内傾している。覆土はd<sub>1</sub>+ⅡBで軟質である。HP-9、16、18、20、28は茶灰色土の堅い土で、切り合っている。床面にある8個は直立し、覆土は暗褐色土で非常に丁寧につくられている。支柱穴であろう。また壁際には径約2cm～3cm、深さ約10cmほどの杭状の小ピットが19個あり、直立する。覆土は黒褐色土である。南壁際には0.5m×0.65mの長円形の浅いくぼ地があり、先端ピットと思われる。

**遺物出土状況:** ほとんどが覆土中からの出土で、床面からは土器片が数点出土しているのみである。

**時期:** 掘り込み面はⅡ黒層上位である。床面からⅢ群b-3類土器が出土していることなどから縄文時代中期後葉(北筒式期)の時期と思われる。

H-6はH-5とH-18の揚げ土を切ってつくられている。またH-12の覆土中にH-6の揚げ土と思われる土が見られる。(和泉田)

**遺物:** 土器 1～29はⅢ群b-3類土器である。1～8は口縁に肥厚帯があり、押し引き文が施されているものである。1は口唇の断面形が尖るもので、ヘラ状工具により2段押し引き文が施されている。2は円形文が浅く施されていて、内面はなで調整され突瘤は形成されている。口縁に3段、幅のせまい押し引き文を施している。器面の縄文は結束のある異節の縄文である。3は棒状工具による押し引き文のあるもので、内面はなで調整され突瘤を形成していない。4・5は比較的深く施された押し引き文のあるものである。6・7はやや湾曲するヘラ状工具(6は中央がややもり上り、7はややくぼむ)に

表Ⅲ-5 H-6 出土遺物一覧

出土遺物	Ⅱb-1	ノダⅡ	北	管	Ⅱa	小	計	鱗片	鱗片	石器	F	RF	UF	コ7	F.C.	小計	石斧	斧末	斧F	砥石	鱗片	台片	小計	礫	鱗片	総計
覆土上面											11				28	39	1						1			40
覆土	1	1	176	1	179	2	3	4	271	1	2	3		98	384		2	28	1	6	8	45	4	11	623	
床面		1	6		7				9			1			10										1	18
計	1	2	182	1	186	2	3	4	291	1	2	4		126	433	1	2	28	1	6	8	46	4	12	681	

よる押し引き文、8は半截竹管状工具による押し引き文の施されたものである。9は口縁の隆起帯部の上下をなで調整しているものである。10・11は粗く縄文の施されたものである。12は結節の回転のあるもの、13・14はやや粗い縄文の施されたものである。15は結束羽状縄文を地として細い貼付帯の施されているものである。16は無節の縄文を地とする貼付帯上に半截竹管状工具による押し引き文を加え貼付帯の交点に刺突文を施している。H-18の9と同一個体に属する。17は器面に幅のせまい工具による押し引き文の施されているもので、地は結束羽状縄文である。18・19は無節の縄文のあるもので、19の口唇には刺突文が加えられている。20はやや薄手であるが、粗い縄文が内面にも認められる。21は厚手のもので斜行縄文が施されている。22はLRの原体による斜行縄文の施されているものであるが、LRの原体を構成する1段の縄の各々に糸状の撚紐を巻いているためか、2段原体の条に沿った形で撚糸文状の圧痕が幅広く形成されているものである。23・24は底部で、23はわずかなくびれがあり、24は外側への張り出しがある。25には張り出しがない。26～29はノダップⅡ式に関連するものとみられる。

石器 1は有茎鏃。2～4は石槍またはナイフ。2は細身で最大幅が下位にある。3・4は最大幅が中位にあるものである。5・6はスクレイパー類。5は縦長剥片の側縁に刃部が作り出されている。6は厚手の剥片を素材とし、両側縁に急角度の刃部が作り出されている。1～6はすべて黒曜石製である。7・8は緑色泥岩石斧未製品、7は扁平な断面をもち、主面は礫面と剥離面で構成される。側縁は剥離調整。8は未製品で表面が側縁調整による加撃で剥落したもの。9は細粒砂岩砥石で、黒褐色を呈する。粒子はよくそろい、固結は弱くボロボロしている。加熱によって赤褐色に変色したものである。

#### H-9 (図Ⅲ-23・24、図版Ⅲ-16)

位置：G<sub>1</sub>-63-03・04・13・14 標高が24m付近の平坦地に位置する。 規模：4.52m×4.36m×0.28m 平面形：楕円形 床面積：(15.81)m<sup>2</sup> 長軸方向：N-28°-W

確認・調査・土層：Ta-cを除去したところで、G<sub>1</sub>-63-14周辺が浅いくぼ地になっているのが確認される。土層観察用のベルトを設定し、Ⅱ黒層を3cm～5cmほど掘り下げた時点で円形状の黒色土(粘質)が検出される。またその周辺に揚げ土状の混合土が広がっているのが確認される。覆土1層、2層を掘り下げて、暗黒茶色の堅い土の上面で遺物がややかたまって出土する。同面を精査したところ、柱穴状の小ピットが検出され、住居跡として調査を行う。

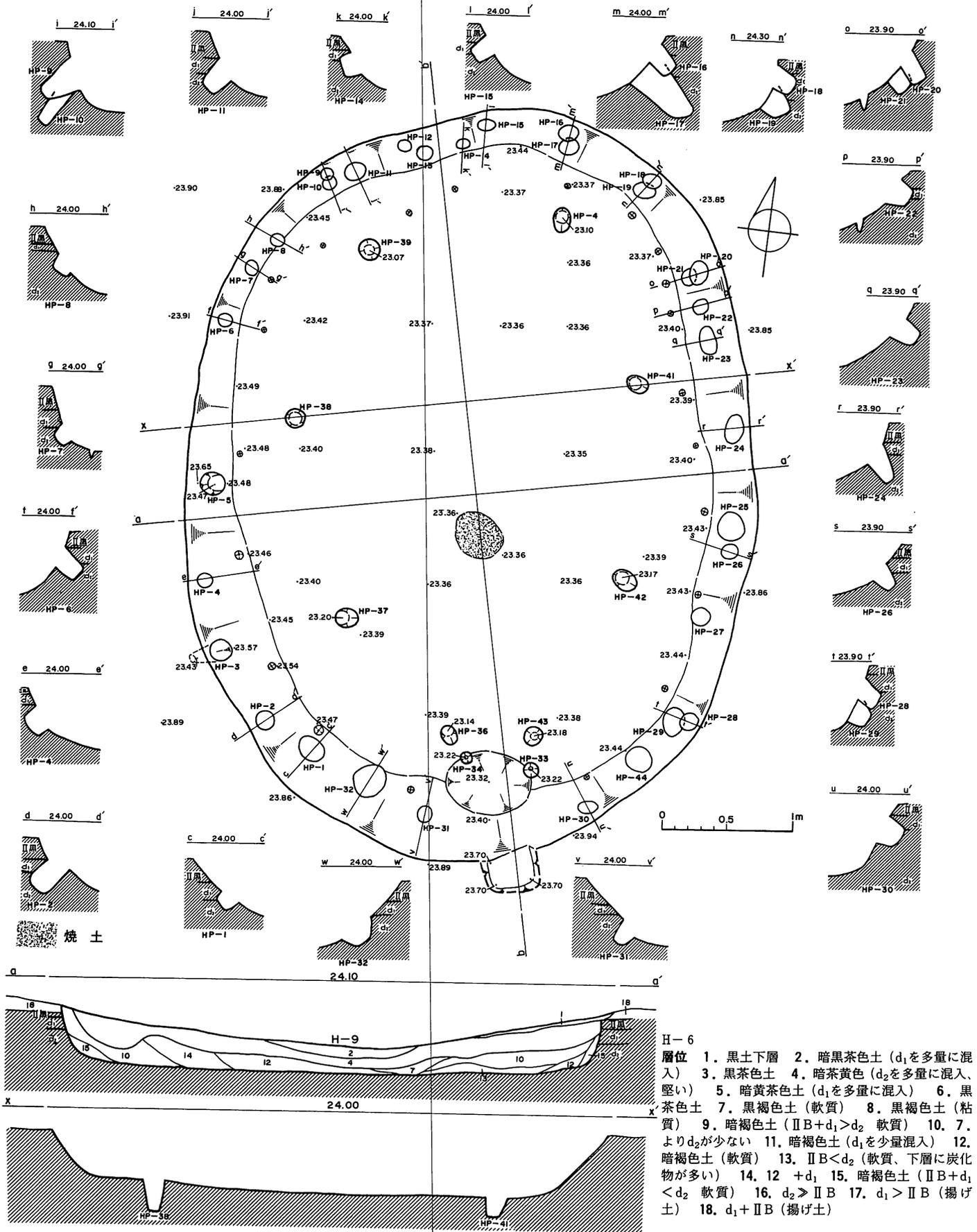
床面：断面は皿状で、堅い。H-6の覆土上面を床面としている。 炉跡：焼土は検出されていない。

付属ピット：ほぼ南北に並行する5個の柱穴状小ピットを検出する。小ピット間は南北約1.2m、東西約2.6mで、小ピットの覆土は黒土上層>d<sub>1</sub>で、すべて直立している。

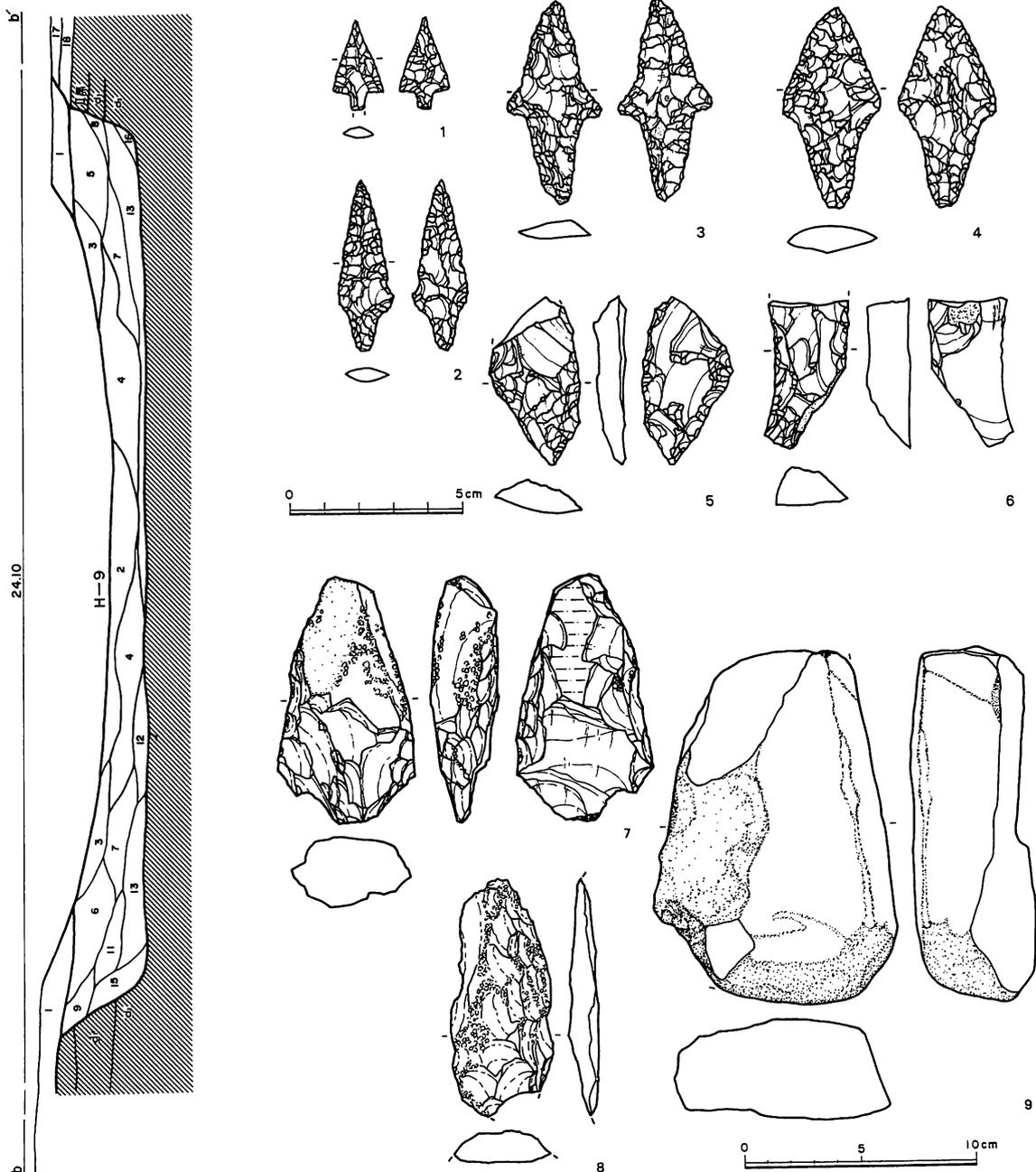
遺物出土状況：床面直上から土器片、石斧などが出土している。

時期：床面直上や周辺からⅢ群b-3類土器が出土していることから、縄文時代中期後葉(北筒式期)の時期と思われる。(和泉田)

Ⅲ 美々3遺跡第Ⅱ黒色土層の調査



図Ⅲ-20 H-6 実測図



図Ⅲ-21 H-6 出土の石器

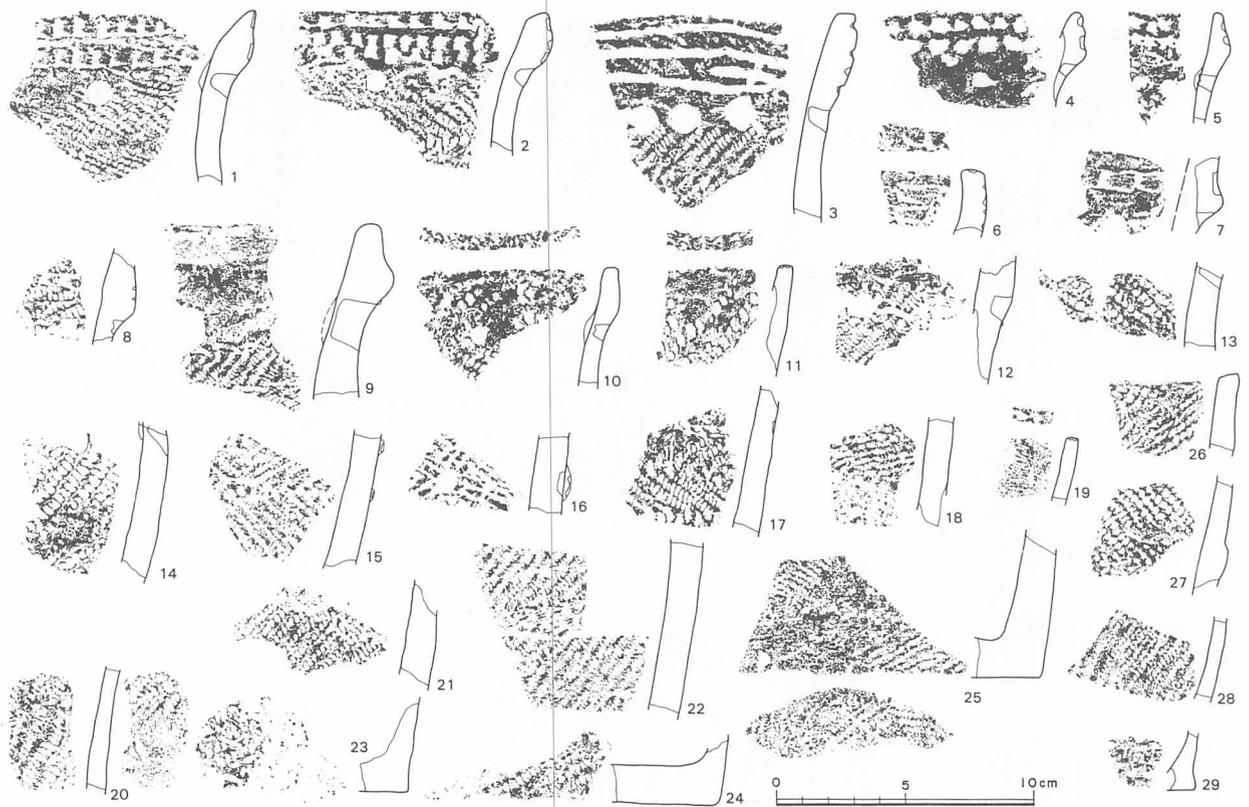
**遺物：土器** 1～4はⅢ群b-3類、5はⅣ群c類土器である。1～4は縄文の施された体部破片で、1は粗い斜行縄文の施された体部、2は結節の回転文、4は結束第1種の羽状縄文の施されたものである。5には0段多条のLRとRLの原体による縄文がみられる。

**石器** 1は緑色泥岩製石斧。扁平で側面は曲面である。刃部は欠失している。

**H-10** (図Ⅲ-25～27、図版Ⅲ-17)

**位置：** G<sub>1</sub>-63-05・06・15・16 標高24m付近の平坦地に位置する。 **規模：** 4.6m×5.2m×0.14m **平面形：** 略円形 **床面積：** (18.64) m<sup>2</sup>

**確認・調査・土層：** Ta-cを除去したところで、G<sub>1</sub>-63-16周辺に若干くぼ地が認められたため土層観察用のベルトを設定し、Ⅱ黒層を3cm～5cmほど掘り下げる。ほぼ円形状に黒色土(粘質)が



図Ⅲ-22 H-6 出土の土器

あり、その周辺に揚げ土状の混合土の広がり確認される。黒土上層を掘り下げたところでd<sub>2</sub>を多量に混入する黒褐色の堅い土が検出される。この上面には炭化物が散布し、遺物もまとまって出土する。精査したところ柱穴状小ピットが検出されたため住居跡として調査を行う。

**床面：**床面は堅く、断面は皿状である。H-18の覆土上面を床面としている。

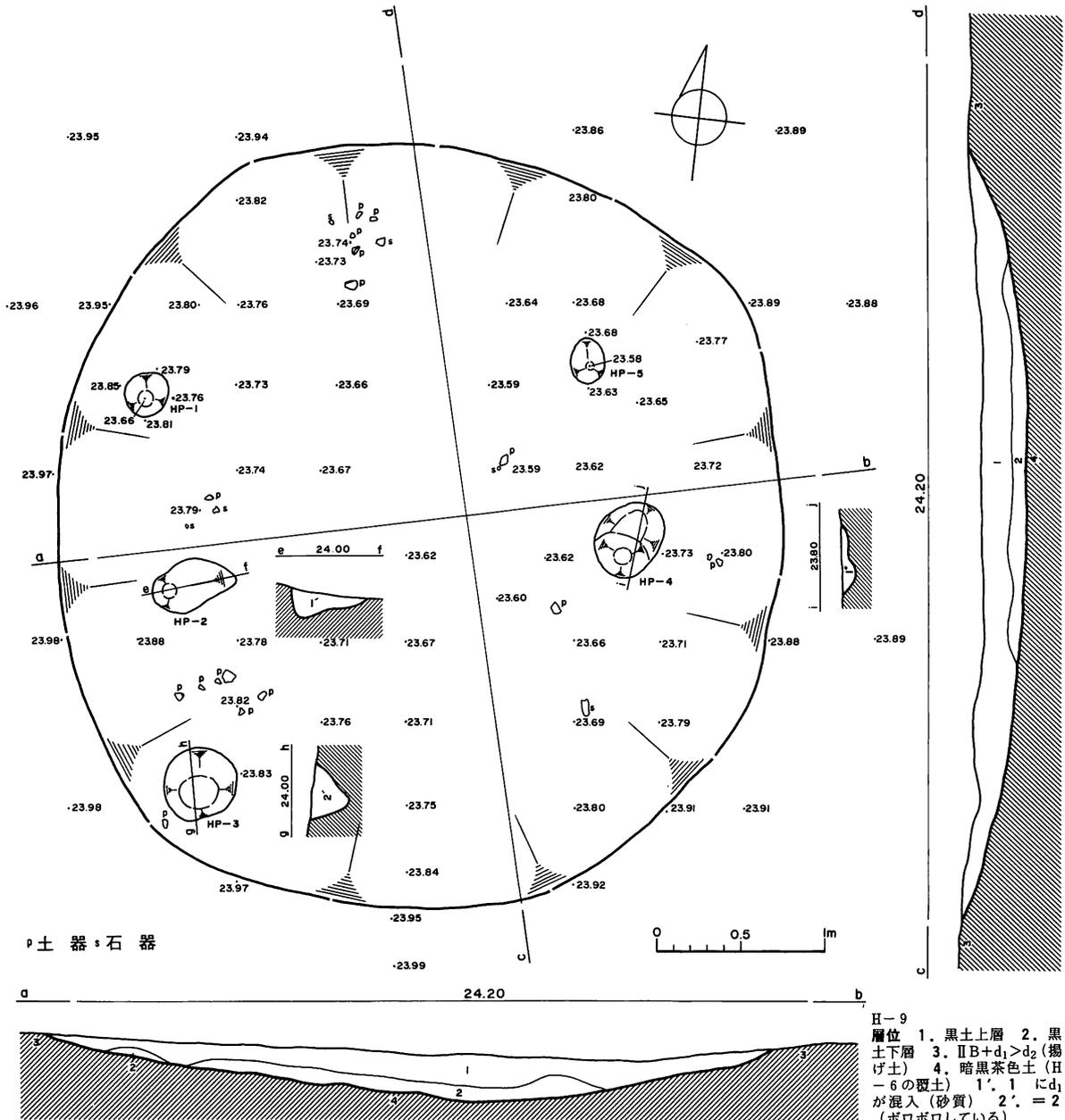
**炉跡：**焼土などは検出されていない。

**付属ピット：**柱穴状小ピットが4個検出されている。直立し、覆土はやわらかな黒色土である。

**遺物出土状況：**床面中央部北側でⅢ群b-3類の土器がかたまって出土している。また黒曜石のフレイクとフレイク・チップが多量に出土している。

**時期：**床面直上からⅢ群b-3類土器が出土していることから、縄文時代中期後葉（北筒式期）の時期と思われる。（和泉田）

**遺物：**土器 1はⅢ群a類、2・3はⅢ群b-1類、4~20はⅢ群b-3類、21はⅣ群a類土器である。1は内面が平坦に調整され、口縁には絡条体による刻み目がつけられている。口縁部には半截竹管状工具による斜方向からの刺突が加えられている。2・3は同一個体で、包含層出土の復元された資料から2は体部上半のもの、3は体部下半のものである。上部に単節斜行縄文を地として半截竹管状工具による文様を施し、下部には複節の縄文が施されているものである。4~8は口縁部に刺突文もしくは押し文の施されたものである。9は口縁の少し下に隆起帯をめぐらすもので、その上部は概してなで調整されていて無文である。内面は削り調整されている。胎土に円礫を多く含む。10は器面に縦位の沈線文のあるものである。11は器面の磨滅の著しいものである。12は口縁の肥厚帯の縄文の施されているもの、13は口唇が無文のものである。14は無文帯に円形文を施し、斜行縄文を施す



図III-23 H-9 実測図

表III-6 H-9 出土遺物一覧

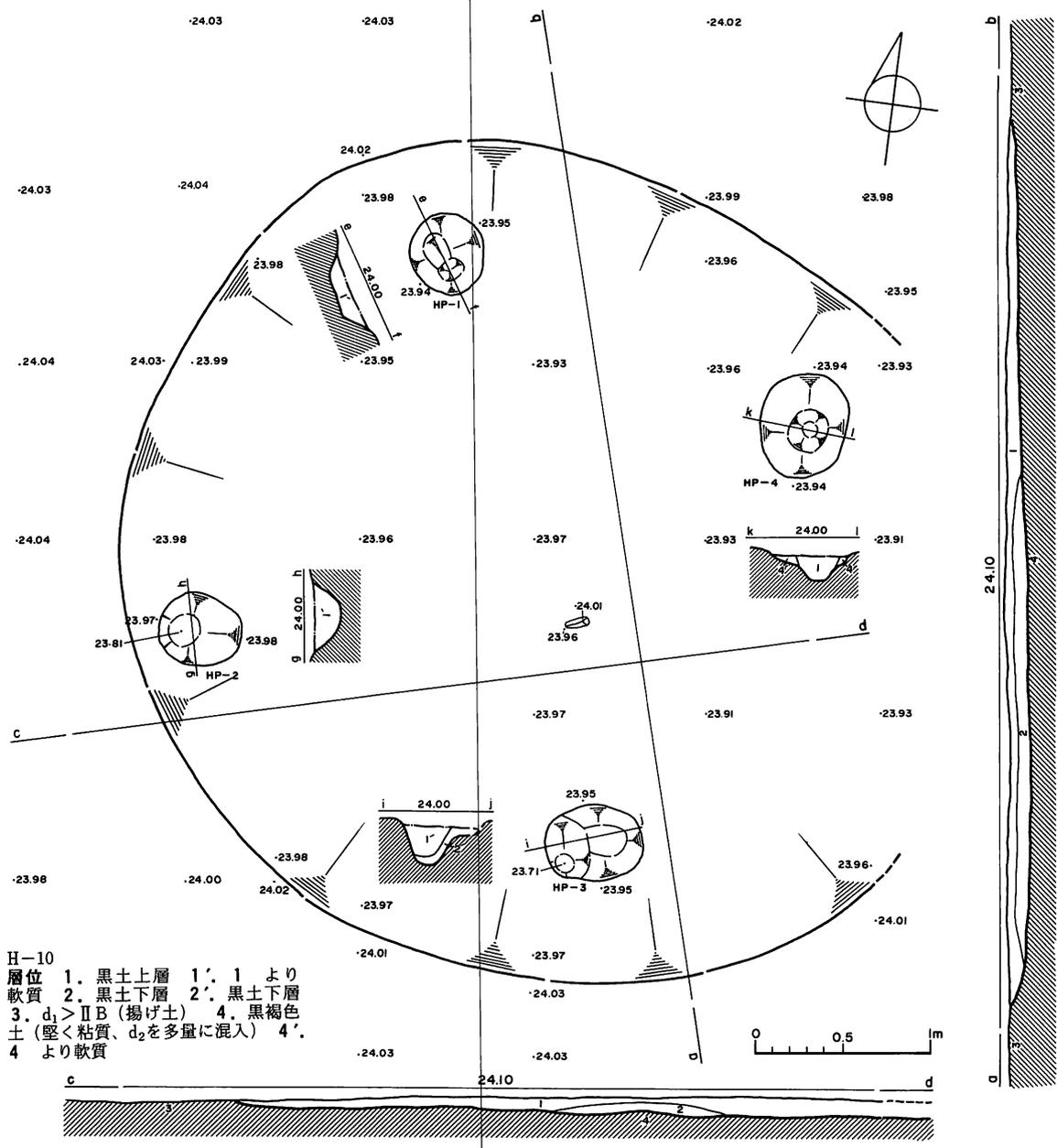
出土遺物	北	F	券F	総計
床面直上	4	1	1	6



図III-24 H-9 出土の土器と石器

ものである。円形文の間に浅い円形の刺突瘤がある。内面に突瘤を形成しない。15にも内面の突瘤は認められない。16は斜縄文と燃糸文風の文様のあるもので、H-6の22と同一個体に属する。17は複節の縄文がやや不規則に施されているものである。18は薄手で内面調整の丁寧になされたものである。横走気味の縄文が施されている。19は燃糸文の施されているものである。20は薄手の内面が磨かれた土器である。口縁に沿って肥厚帯がある。21は口縁に沿って貼付帯があり器面に縦位、貼付帯上に横位施文の縄文が施されている。

石器 1は石槍またはナイフ。最大幅が中位にあり、茎部と身の境は明瞭である。2は両面加工のスクレイパーで1・2ともに黒曜石製である。3は緑色泥岩製石斧。両主面は加熱によって剥落している。



図Ⅲ-25 H-10 実測図

表Ⅲ-7 H-10出土遺物一覧

出土遺物	Ⅱb-1	ノダⅡ	北 質	Ⅱa	小 計	掘器	F	RF	UF	F.C.	小計	斧	鏝	総計
覆土	8		10		18		15			18	33		1	52
床面直上		1	80		81	1	106	1	3	66	177	3		261
HP-1				1	1		7			1	8			9
計	8	1	90	1	100	1	128	1	3	85	218	3	1	322

H-11 (図Ⅲ-28~30、図版Ⅲ-18・19)

位置：G<sub>1</sub>-63-34、35、44、45 標高24mの台地上に位置する。 規模 43m/3.8m×3.3m/2.9m×0.4m

床面積：9.34㎡ 平面形：不整卵形 長軸方向：N-45°-W

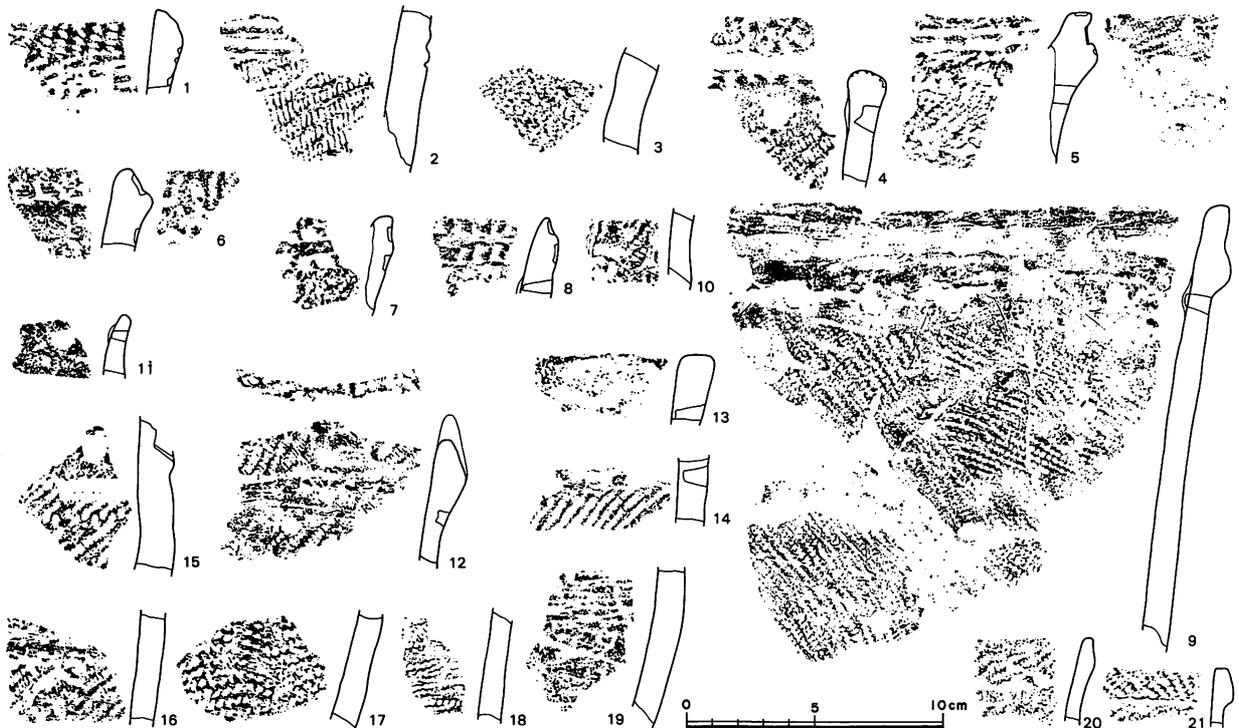
確認・調査・土層：Ⅱ黒層を5cm程掘り下げ、Ⅱ黒層上の柔らかい黒色土を取り去った時点でこの黒色土(1層)が3cm×4cm程の範囲で落ち込んでいるのが認められた。このため、遺構の存在を予想し、直行する2本のトレンチを掘ったところそれぞれのトレンチで壁と床面を確認することができた。掘り込み面はⅡ黒層上部である。トレンチの北側と東側の土層断面では壁の外側に遺構の掘り上げ土と考えられるd<sub>1</sub>を多量に含む褐色土(13・14層)が認められた。

床面：床面はd<sub>2</sub>を5cm~10cm掘り込んで作られていてほぼ平坦である。あまり固くない。

壁：壁は急傾斜で立ち上がる。

炉跡：焼土は確認されなかった。

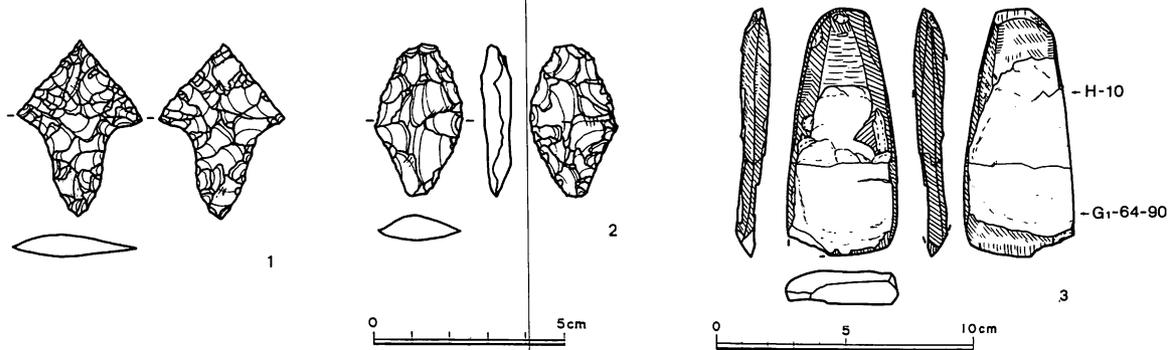
付属ピット：HP-1は北西の壁際で、東西トレンチの土層断面から確認された。HP-2は床面の中央付近で検出された浅い皿状のピットである。位置から判断して炉跡の可能性もあると考えたが、



図Ⅲ-26 H-10 出土の土器

焼土や炭化物は確認できなかった。柱穴状の小ピットは8個確認したがHP-6・7を除いていずれも浅い。

**遺物出土状況：**遺物は主に覆土3層以下から出土している。床面に近い覆土4層からⅢ群b-3類土器が出土した。床面から出土した遺物はブレイク・チップのみである。土器は小破片が多く、散らばった状態で出土している。



図Ⅲ-27 H-10 出土の石器

**時期：**出土した遺物から判断して縄文時代中期、Ⅲ群b-3類土器の時期と思われる。(工藤)

**遺物：**土器 1~13はⅢ群b-3類土器。14はⅣ群a類土器。15はⅤ群b類土器である。1は口縁部、口唇部、体部に押し文の施されているもので、口縁部に鋸歯状に施されるのは異例である。2は器面の磨滅しているものであるが、口縁部と口唇部に押し文がある。口縁の隆起部の頂部と、口縁部の隆起部とに刺突を加えている。3・4はともに口縁部の小片であるが、口縁に押し文があり、4の口唇には細い1段の縄の圧痕が認められる。5は薄手のもので、口縁部と口唇部に、押し文風の深い刺突が加えられている。6は口縁の断面がやや三角になるもので、器面と、口唇と、内面に複節の縄文が施されている。口縁部にはヘラ状工具による密な押し文が加えられている。7は口縁部に縄文を施すもので、胎土に円礫を含む。8は内面にも縄文の施されているものである。9は口縁部にヘラ状工具によるとみられる刺突文の痕跡がある。10は角の張り出す底部、11は捺糸文の施された底部である。12は口縁の少し下に薄い貼付帯のあるもので、口唇と内面は磨かれている。13は複節の縄文の施されているもので、内面の調整は平坦である。12・13はノダップⅡ式、煉瓦台式との関連があるとみなされる。14は器面に縦位、貼付帯上に縄文を施文したものである。15はほとんど縄文の痕跡の認められない小片である。

**石器** 1は側縁にふくらみをもつ木葉形の石鏃。2は石槍またはナイフ。3は厚みのある両面加工のあるスクレイパーで、右側縁の刃部には刃つぶれが認められる。4は黒色片岩製石斧片で、基部と

表Ⅲ-8 H-11出土遺物一覧

出土遺物	Ⅲb-1	北貨	Ⅱa	Ⅱb	小計	石鏃	石槍	槍片	石器	F	F.C.	小計	石斧	斧片	た	石	台片	小計	礫	片	総計
覆土										6	7	13				1		3		1	17
覆土上層	21	45	1	1	68	1	2		1	190	470	664		23				23		3	758
下層		15			15			1		118	321	440	1	16	1			18	3	2	478
3		55			55	1		2		1		4		5	2		2	9			68
4		8			8									1			1	2			10
床面										8	16	24									24
計	21	123	1	1	146	2	2	3	1	323	814	1145	1	47	3	1	3	55	3	6	1355

刃部が欠失している。側縁部分に剝離調整が施されているのは再生しようとしたためかと思われる。5は緑色製泥岩石斧片で、基部と刃部を欠失し、節理面で剝落したもの。6は緑色泥岩製石斧未製品で、刃部側の破片で主面の半分に敲打調整が入る。7は緑色泥岩たたき石で、扁平な円転礫の周縁を使用している。8は砂岩たたき石。やや扁平な楕円転礫の長軸端を使用し、加熱を受けて赤変している。9は凝灰岩石錘。扁平楕円転礫の長軸両端に片主面側からノッチを入れている。10は中粒砂岩砥石で粒子はそろっていない、やや固結している。色調は浅黄色である。断面形が長方形を呈する四面柱状である。

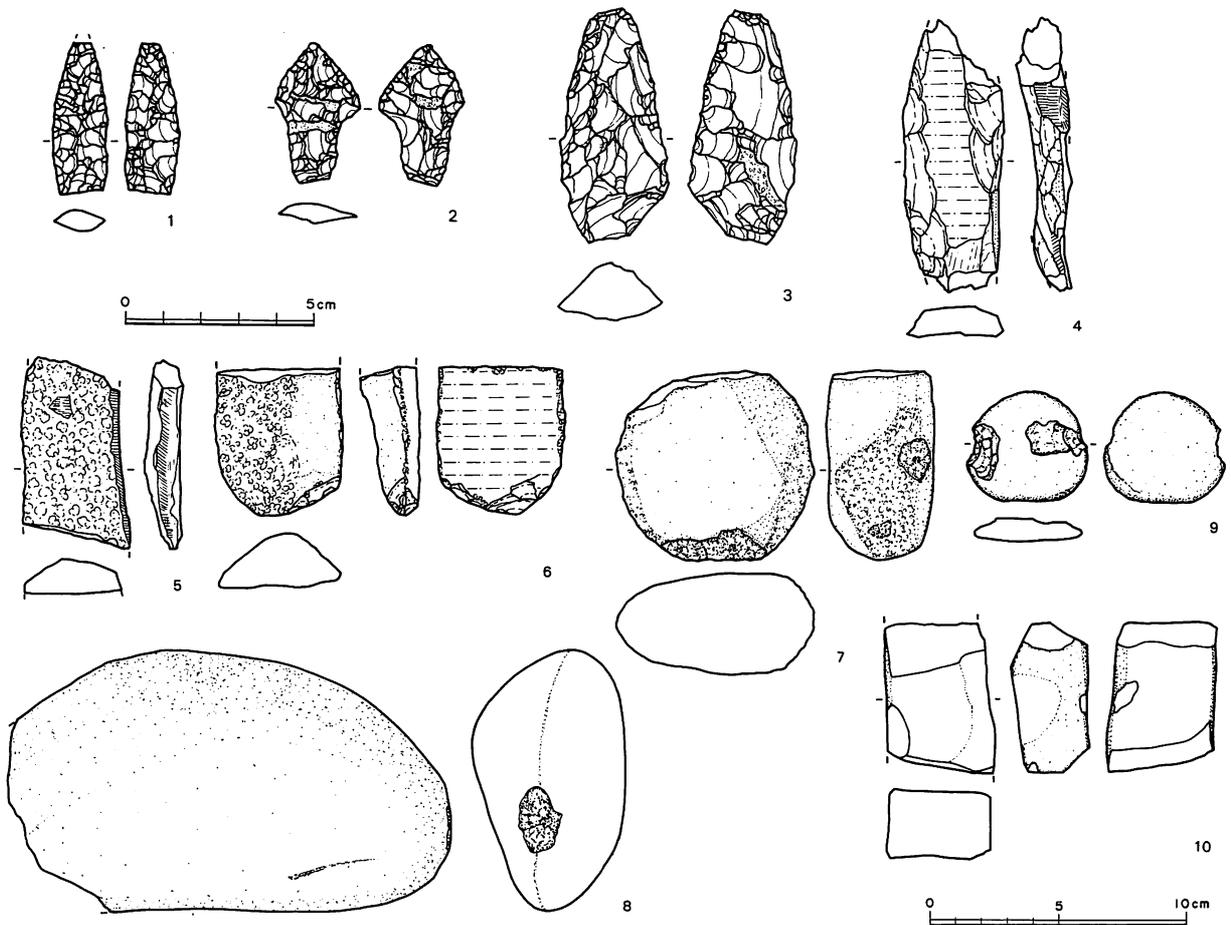
H-12 (図Ⅲ-31・32、図版Ⅲ-20)

位置：G<sub>1</sub>-63-13・23・14・24 標高23.9m付近の平坦地に位置する。 規模：3.6m×3.3m×0.24m 平面形：略円形 床面積：(8.94) m<sup>2</sup>

確認・調査・土層：Ta-cを除去したところで、G<sub>1</sub>-63-24周辺が若干くぼ地になっているのが確認される。土層観察用のベルトを設定し、Ⅱ黒層を掘り下げる。3cm~5cmほど掘り下げて、円形状の黒色土(粘質)を検出する。黒土上、下層を除去し、d<sub>2</sub>を多量に混入する堅い暗褐色土を掘り下げる。ⅡB+d<sub>1</sub>+d<sub>2</sub>の混合土の上面でフレイク・チップの集中を2か所検出し、遺物も出土していることからこの面を生活面とする住居跡として調査を行う。

床面：床面は凹凸があり、断面は皿状である。 炉跡：焼土などは検出されていない。

遺物出土状況：覆土および床面より多量の黒曜石のフレイク、フレイク・チップが出土している。

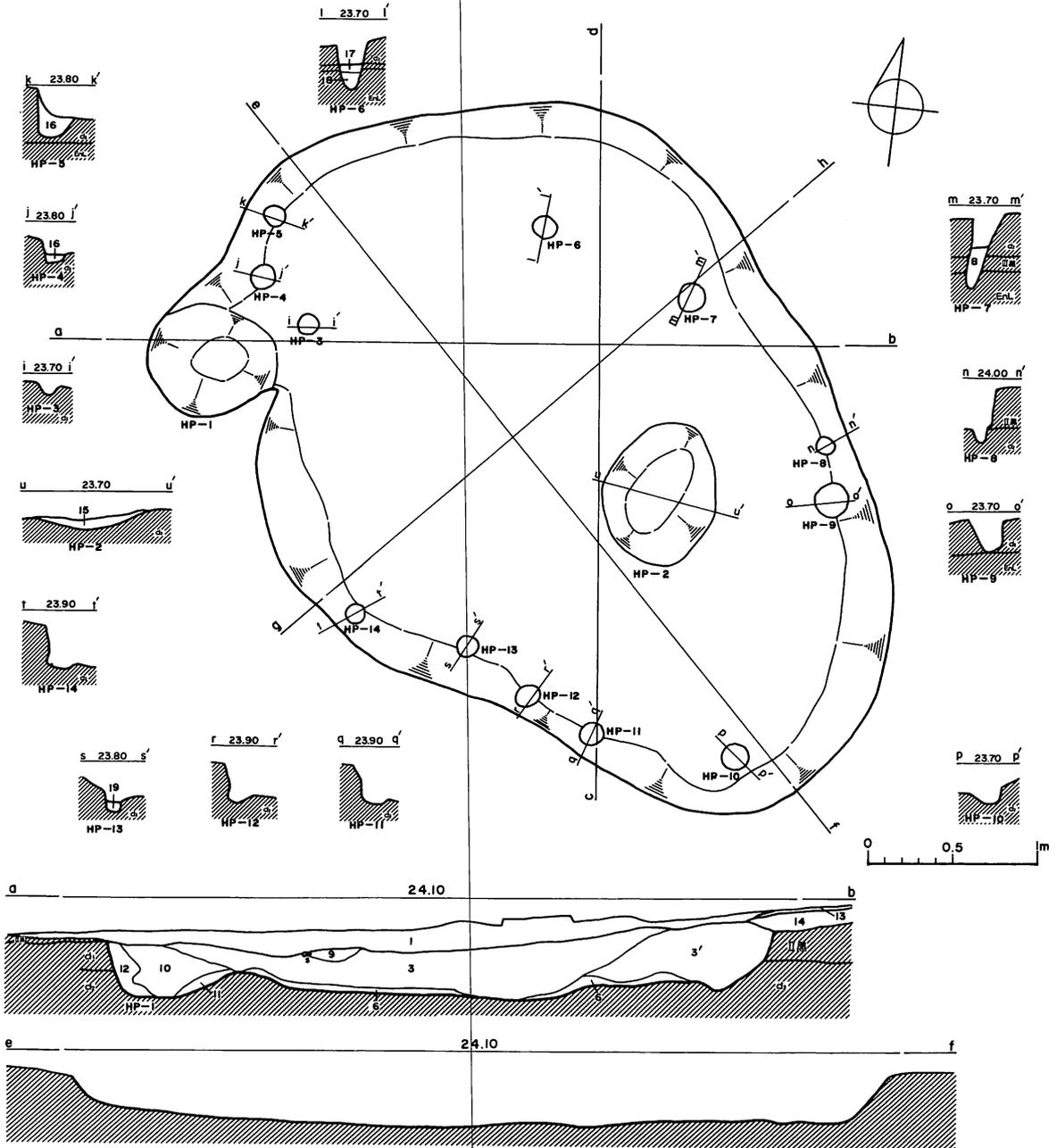


図Ⅲ-28 H-11 出土の石器

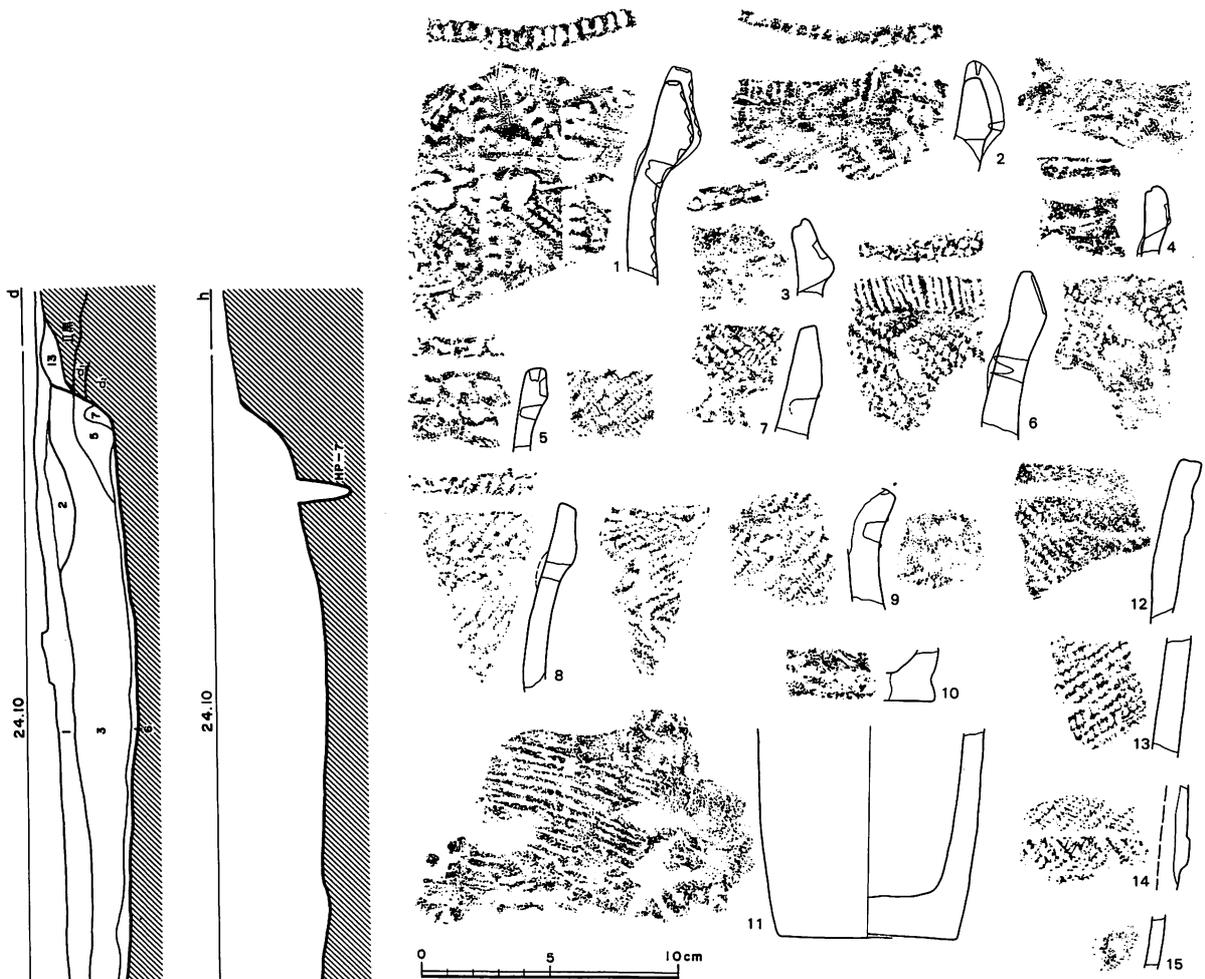
**時期：**掘り込み面はⅡ黒層上位にあり、床面、周辺からⅢ群b-3類土器が出土してくることから、縄文時代中期後葉（北筒式期）の時期であると思われる。

風倒木痕のくぼ地を利用したもので、あるいは石器製作の場かとも推測される。（和泉田）

**遺物：**土器 1～16はⅢ群b-3類土器である。1は口縁部の肥厚帯に鋸歯状に押し文を施すものである。H-11の1と同一個体に属する。2は結束羽状縄文の地に貼付帯のあるもので、H-13の資料と同一個体に属する。3は結束第2種の原体による縄文の施されるものである。4は無文で器



図Ⅲ-29 H-11 実測図



図Ⅲ-30 H-11 出土の土器

H-11  
層位 1. 黒色土 (II B. やわらかい) 2. 黄褐色土 (II B+d<sub>1</sub>) 3. 黒褐色土 (II B>d<sub>1</sub>>d<sub>2</sub> やわらかい) 4. 褐色土 (II B+d<sub>1</sub>) 5. 黒褐色土 (II B+d<sub>1</sub>>d<sub>2</sub>) 6. 褐色土 (II B+d<sub>2</sub> 堅い) 7. 黄褐色土 (ブロック状) 8. 黒色土 (II B>d<sub>1</sub>) 9. 暗褐色土 (II B>d<sub>2</sub>) 10. 暗褐色土 (II B+d<sub>1</sub>>d<sub>2</sub> 堅い) 11. 褐色土 (II B>d<sub>2</sub>) 12. 褐色土 (II B>d<sub>1</sub>) 13. 黒褐色土 (II B+d<sub>1</sub> 揚げ土) 14. 黄褐色土 (d<sub>1</sub>>II B 揚げ土) 15. 黒色土 (II B>d<sub>1</sub>+d<sub>2</sub>) 16. d<sub>2</sub>まじりの黒褐色土 17. 大粒のd<sub>2</sub>を含む褐色土 18. d<sub>2</sub>の小粒を少し含む黒褐色土 19. d<sub>2</sub>まじりの褐色土

面に凹凸のある薄手の土器である。5は口縁の断面形が三角形になる結束羽状縄文の施されるものである。6は体部に貼付帯を施し押引き文風の刺突文を施したものである。7は結束羽状縄文の施されたもの、8は内面に粗い縄文の施されているものである。9は胎土に雲母の含まれているものである。10は粗い斜行縄文の施されているものである。11は細かいRLの原体による斜行縄文の施された体部である。12は細かいLRの原体による斜行縄文の施されている底部で角が張り出す特色がある。13は小形の土器で、底部の角が張り出す。14は底部に縄文の施されているものである。15はRLの斜行縄文の施されているもので、斜横方向からの刺突がある。ノダップⅡ式などに関連するものとみなされる。

H-13 (図Ⅲ-33~37、図版Ⅲ-21~25)

位置: G<sub>1</sub>-63-33、43、44 規模: 5.2m/4.8m×4.8m/4.5m×0.43m

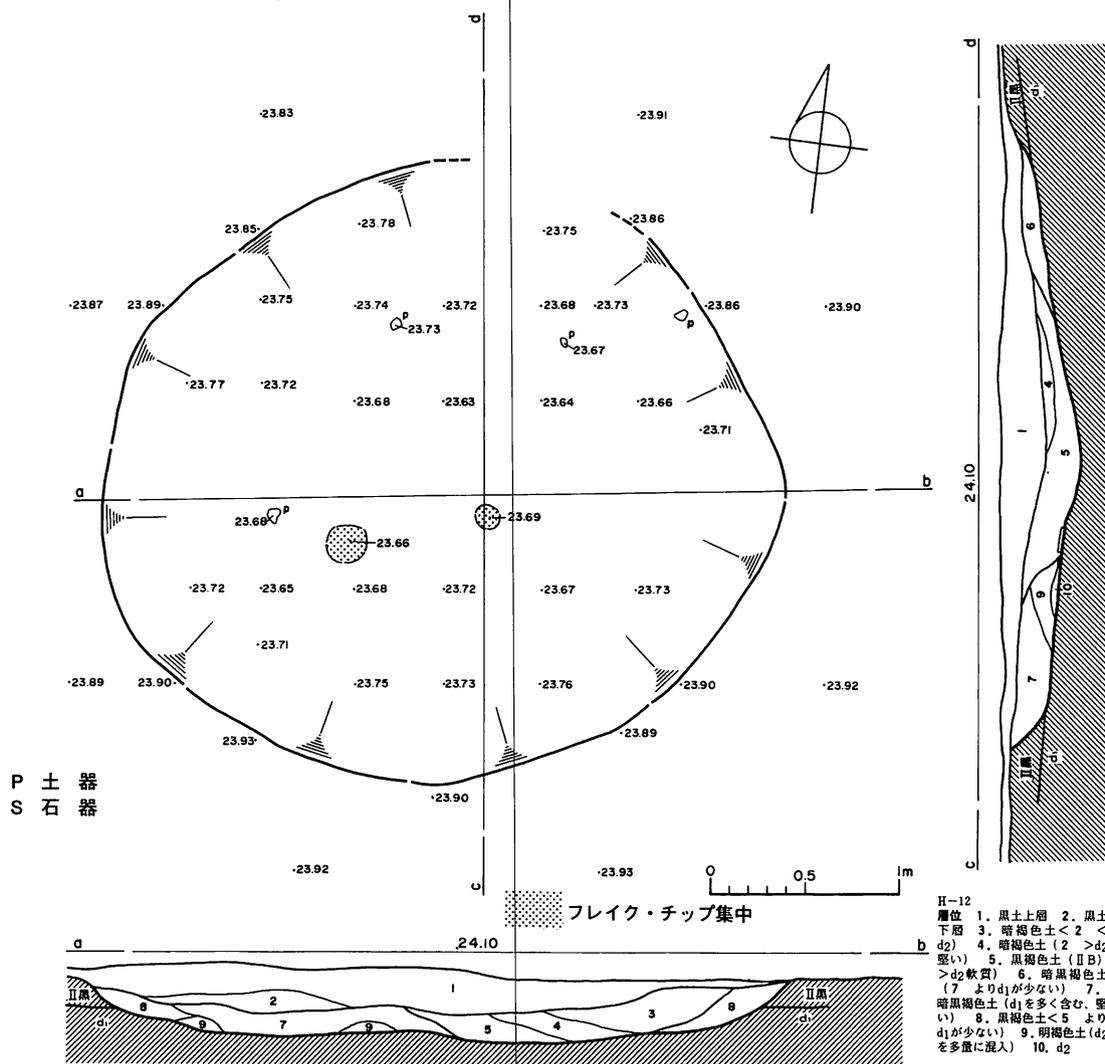
平面形: 卵形 床面積: 16.19m<sup>2</sup> 長軸方向: N-4°-W

確認・調査・土層: Ta-c 火山灰除去後、Ⅱ黒層上面で浅いくぼみが検出された。住居跡を予想して東西南北にトレンチを掘ったところ、南北トレンチで覆土から礫と土器で囲った炉跡が検出された。

表Ⅲ-9 H-12出土遺物一覧

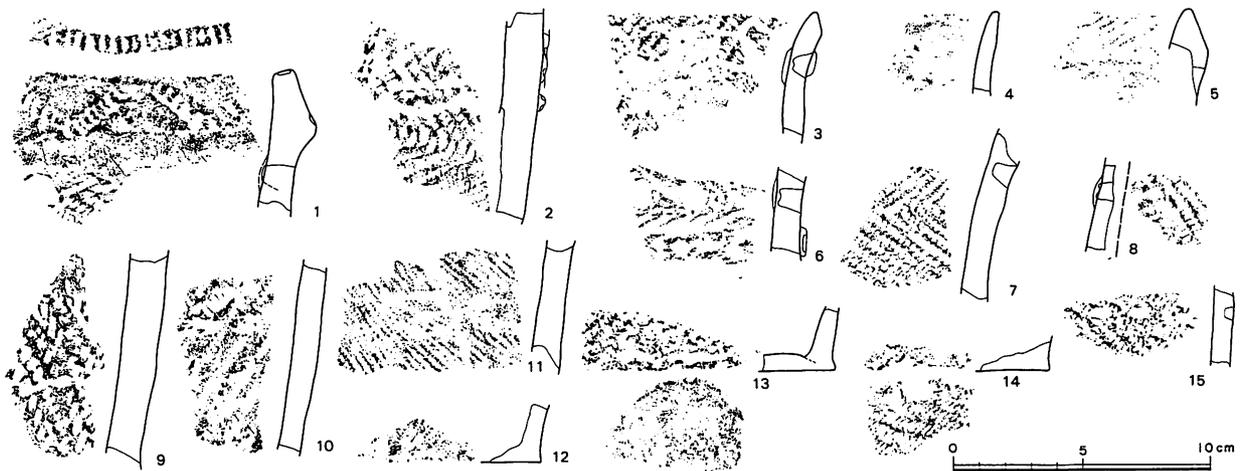
出土遺物	ノダⅡ	北管	小計	F	RF	コブ	F.C.	小計	石斧	石錐	斧	石	瓦片	小計	瓦片	小計	総計
覆土		57	57	94			173	267			4			4	2		330
覆土上層	2	79	81	143	1	1	401	546		1	11	1	1	14			641
床面		10	10	60			682	742	3					3			755
計	2	146	148	297	1	1	1256	1555	3	1	15	1	1	21	2		1726

壁際ではd<sub>2</sub>まで掘り込んでいるのを確認したので、炉跡の部分を残してトレンチ全体をd<sub>2</sub>まで掘り下げた。この結果、遺構の重複が確認され、炉跡の下位で2面の焼土が検出された。トレンチ調査の結果に基づき、先ず、礫と土器で囲った炉跡の面で床を想定して調査を進めた。炉跡よりやや上位で炭化材を検出したが、炉跡のレベルで明確な生活面をとらえることはできなかった。明らかな床を確認できたのは炉跡より5cmほど下位にある焼土の面であった。この面はd<sub>2</sub>まで掘り込まれている壁



図Ⅲ-31 H-12 実測図

際の床につながっている。これをH-13とした。トレンチ調査ではH-13床面の下位でもう1面の焼土が検出されており、より古い遺構に伴うことが確認されていたのでH-13の床面を精査したところひとまわり小さな黒褐色の落ち込みが検出された。これをH-22とした。また、南北トレンチの南端ではH-13が別の遺構(H-17)を切っていることが確認された。



図Ⅲ-32 H-12 出土の土器

覆土の上部には遺構の掘り上げ土と考えられる大粒の  $d_1$  を主体とする覆土2層が認められる。南北の土層断面図に示した10層も遺構の掘り上げ土と考えられる土層である。 $d_1$  のほかに  $d_2$  が多く混ざっている。10層は H-13 の掘り上げ土、2層は H-4 あるいは H-19 の掘り上げ土かと考えられる。

**床面：**床は  $d_2$  をわずかに掘り込み、ほぼ平坦である。

**壁：**壁は急に立ち上がる。

**炉跡：**床の中央で焼土が1か所検出された。また、床から5cmほど上位の覆土中で礫と土器で囲った炉跡が1か所検出されている。

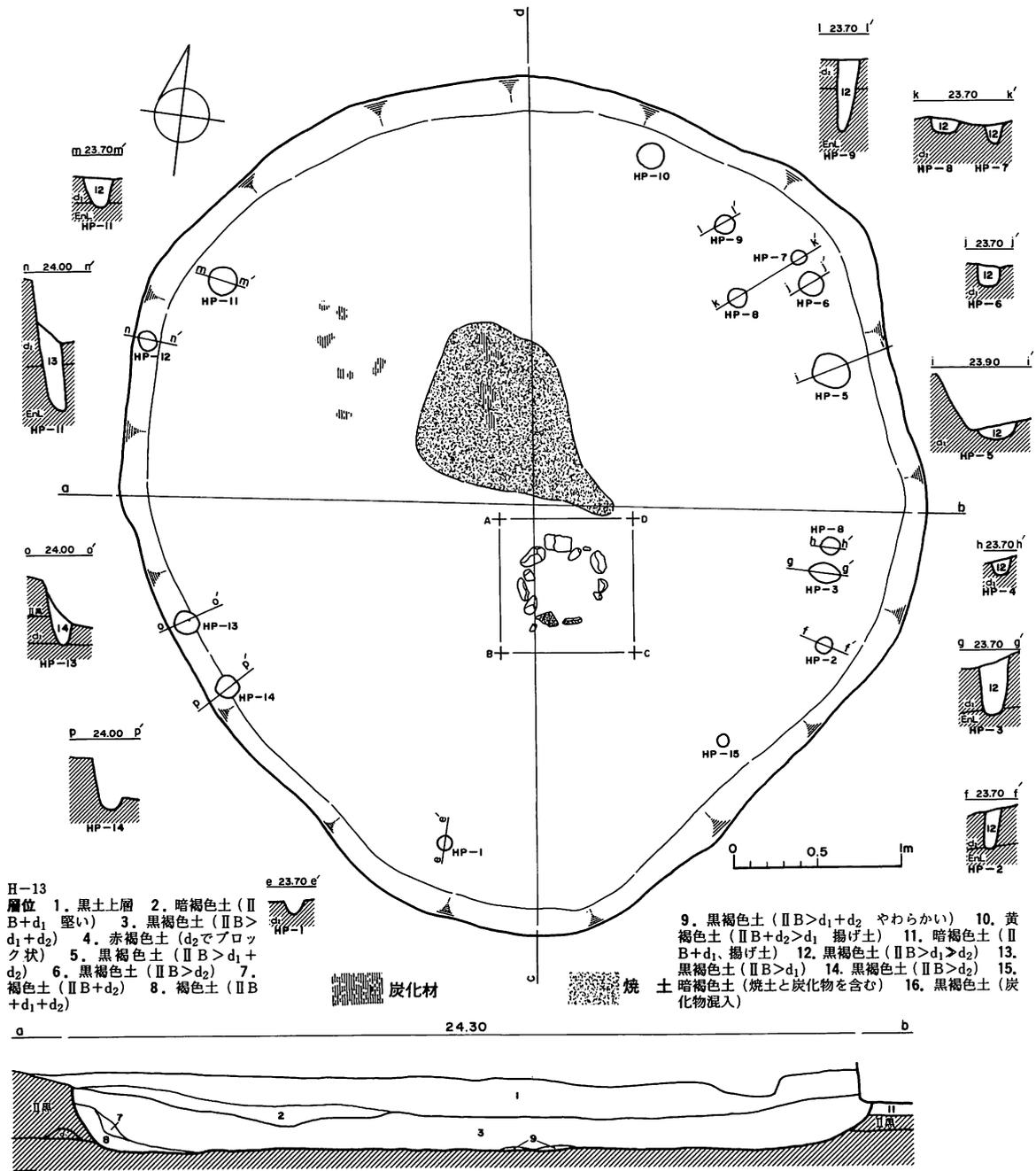
**付属ピット：**壁際で15個の柱穴状小ピットを検出した。

**遺物出土状況：**遺物は3層から出土したものが多く、覆土から出土した土器はⅢ群 b-3 類の北筒式土器が圧倒的に多いけれども、ノダップⅡ式に近縁のものが比較的多くみられる。炉につかわれていた土器(図Ⅲ-35-48・49)もこの種のものであることから、炉跡の面に関連するものがあるかと思われる。覆土からはこの他に煉瓦台式に近縁のものやⅣ類 a 類の余市式土器が出土した。煉瓦台式土器のなかには覆土2層上面で、底部破片(図Ⅲ-35-52)に小型の無文土器(図Ⅲ-35-53)が入れ子の状態になって出土したものがある。床面から出土した土器は北筒式だけであり、まとめて出土したものもある(図Ⅲ-34-10)。この土器は H-22 床面(図Ⅲ-39-10)、H-14 覆土(図Ⅲ-41-5)、及び周囲の遺物包含層出土土器と接合し、復元できた(図Ⅲ-140-4)。

**時期：**床面の出土遺物からⅢ群 b-3 類の北筒式土器の時期と判断される。

H-13 は H-22、H-17 を切って構築されている。H-13 覆土下部には炉跡があり、炉跡の面は H-13 より新しい。土層の堆積状態、遺物の接合関係から H-13 は H-14 より新しい。覆土上部には H-4 あるいは H-19 の掘り上げ土とみられる土が堆積していて H-13 はこれより古い。H-13 と H-22 の関係を見ると、双方の床面出土土器が接合すること、H-13 のなかに H-22 が入れ子になっていること、焼土の位置に重複する部分があることから両者は接近した時期のものと考えられ、H-22 を拡張して H-13 がつくられた可能性がある。H-13 の覆土で検出された炉跡については床面から5cmほどしか差がないので、H-13 が放棄されてあまり時を隔てずに竪穴が再利用されたと考えられる。検出された炭化材は炉跡に伴うとみなされる。(工藤)

遺物：土器 1～53はⅢ群b-3類土器、54・55はⅣ群a類土器である。1は口縁の外側に隆起帯を作り出しているもので、口縁部と口唇に細い半截竹管状工具による押し引き文を施すものである。2は口縁が断面三角形に肥厚するもので、赤色顔料の付着が認められる。口縁と口唇と器面に押し引き文を施すものである。円形文は断面が円錐形を呈する。3は薄手のもので、口唇と口縁に半截竹管状工具による刺突がある。4はやや厚手のもので、口唇に半截竹管状工具により刺突を加えている。5は口縁の断面形がほぼ三角形をなすもので、口唇に刺突がある。6は口縁に押し引き文の施されているものである。7は押し引き文風の刺突文の施されているものである。8は口縁部に2段に押し引き文風の刺突文を施している。9は口縁に沿って縄線文がある。10はH-22、H-14のもの及び包含層のものと接合する。口縁に5か所の小さな山形隆起部をもち、口縁の少し下に隆起帯がめぐる。器面と口唇



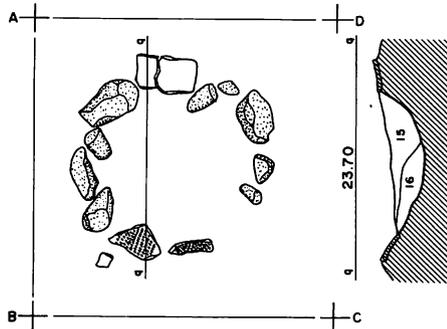
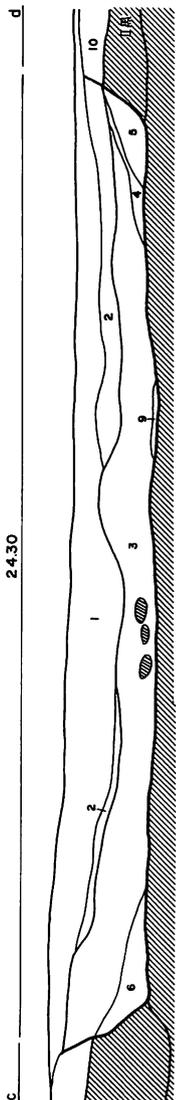
図Ⅲ-33 H-13 実測図

表Ⅲ-10 H-13出土遺物一覧

出土遺物	灰瓦台	ノズル	北管	Pa	小計	石鏃	石槍	槍片	石器	F	RF	UF	コブ	F.C.	小計	石斧	斧末	斧F	た	た片	台石	台片	小計	礫	礫片	総計
縄土2上	6		1		7																					7
縄土3	19	129	329	4	481	7		7	1	1499	17	1	4	3095	4631		1	105		1		1	108	5	9	5234
縄土3下			4		4																					4
縄土			17		17						1	1			2											19
床面直上	1		42		43		1			53				121	175			7		1			8			226
床面			29		29					8					8	1	1		1				3	1	1	42
灰勝		28	1		29					2					2		1	1	1		1		4		1	36
焼土														17	17										7	24
計	26	157	423	4	610	7	1	7	1	1562	18	2	4	3233	4835	1	3	113	2	2	1	1	123	6	18	5592

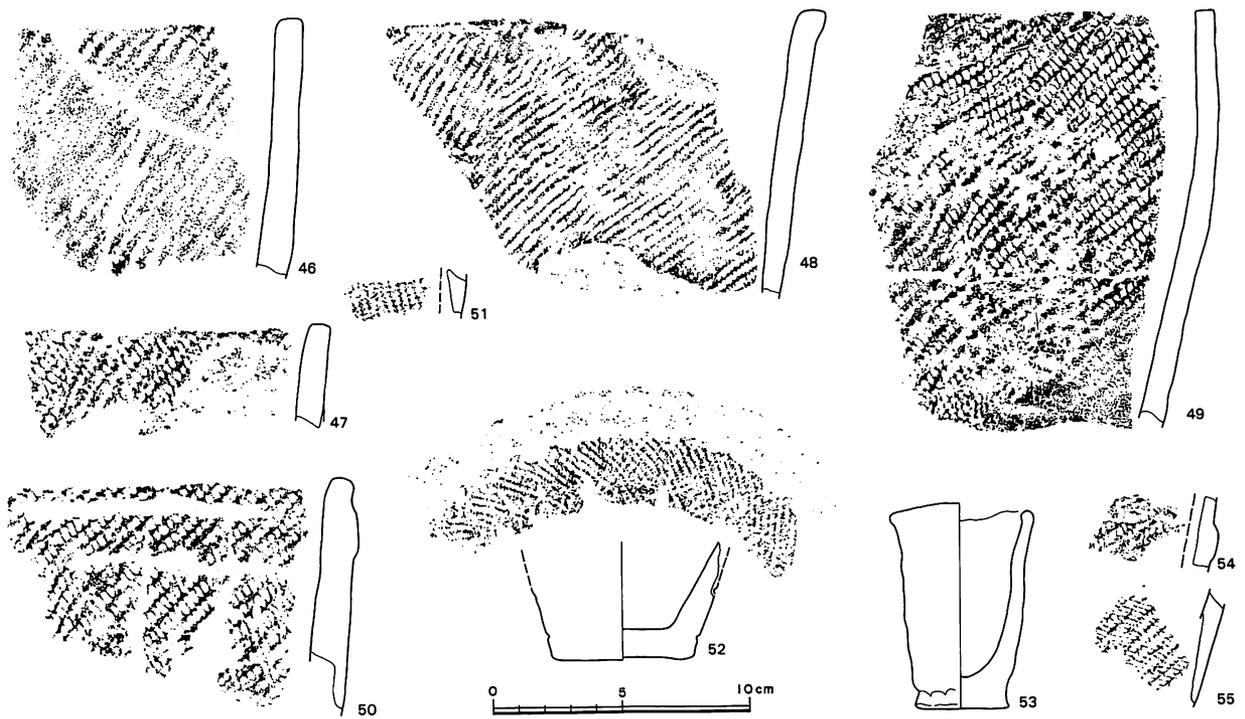
と、内面に縄文を施し、結束の回転文を加えている。胎土に礫を多く含む。11は器面に赤色を呈する部分があり、ベンガラを胎土に含むものとみられる。12~18・21は口縁に肥厚帯をもち縄文の施されたものである。19は口縁部をなで調整して無文節を設け、そこに円形文を配するものである。口唇には縄文がある。20は口縁部が無文帯となっているが口唇には縄文がない。22は粗い縄文の地に貼付帯を施すもので、押し文が加えられている。23は梯子状の貼付帯を施すもので、地は結束羽状縄文である。H-12の2と同一個体に属する。24~42は縄文の施された体部である。43は縄文帯の間に撚糸文風の文様の施されているものである。H-10の16と接合する。H-6の22と同一個体に属する。44・45は底部で、45の底面には沈線がある。46・47は同一個体とみなされるが、46は器面の磨滅が著しい。48は器面に無節の縄文を施し、口唇から内面にかけて磨かれている。胎土に繊維を含む。49は口唇の断面が角形を呈し、器面の縄文はやや乱れている。胎土に繊維を含まない。50は口縁の少し下に薄い隆起帯をめぐらせるもので、斜行縄文が施されている。胎土には繊維を含まない。内面には指頭による調整痕がある。51は細かい縄文の施されているものである。52は整った羽状縄文と縄線文の施されたもの、53は無文のミニチュア土器である。53の胎土には繊維を含む。54は貼付帯上に斜行縄文の施されているものである。55は縦位施文の縄文の施されているものである。

石器 1・2は有茎石鏃。3~7は石槍またはナイフ。3は最大幅が上位にあり、五角形に近い。4・5は最大幅が中位にあり、茎部と身の境が明瞭に区別されている。6は茎部と身の境が不明瞭なもので、主剝離面が大きく残っている。

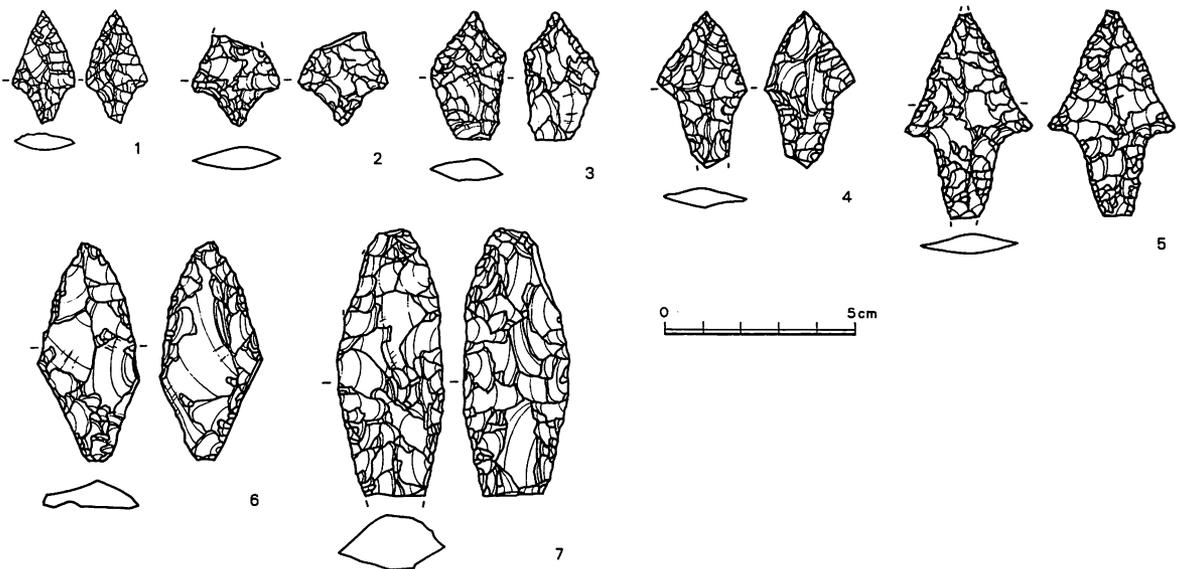




図III-34 H-13 出土の土器(1)

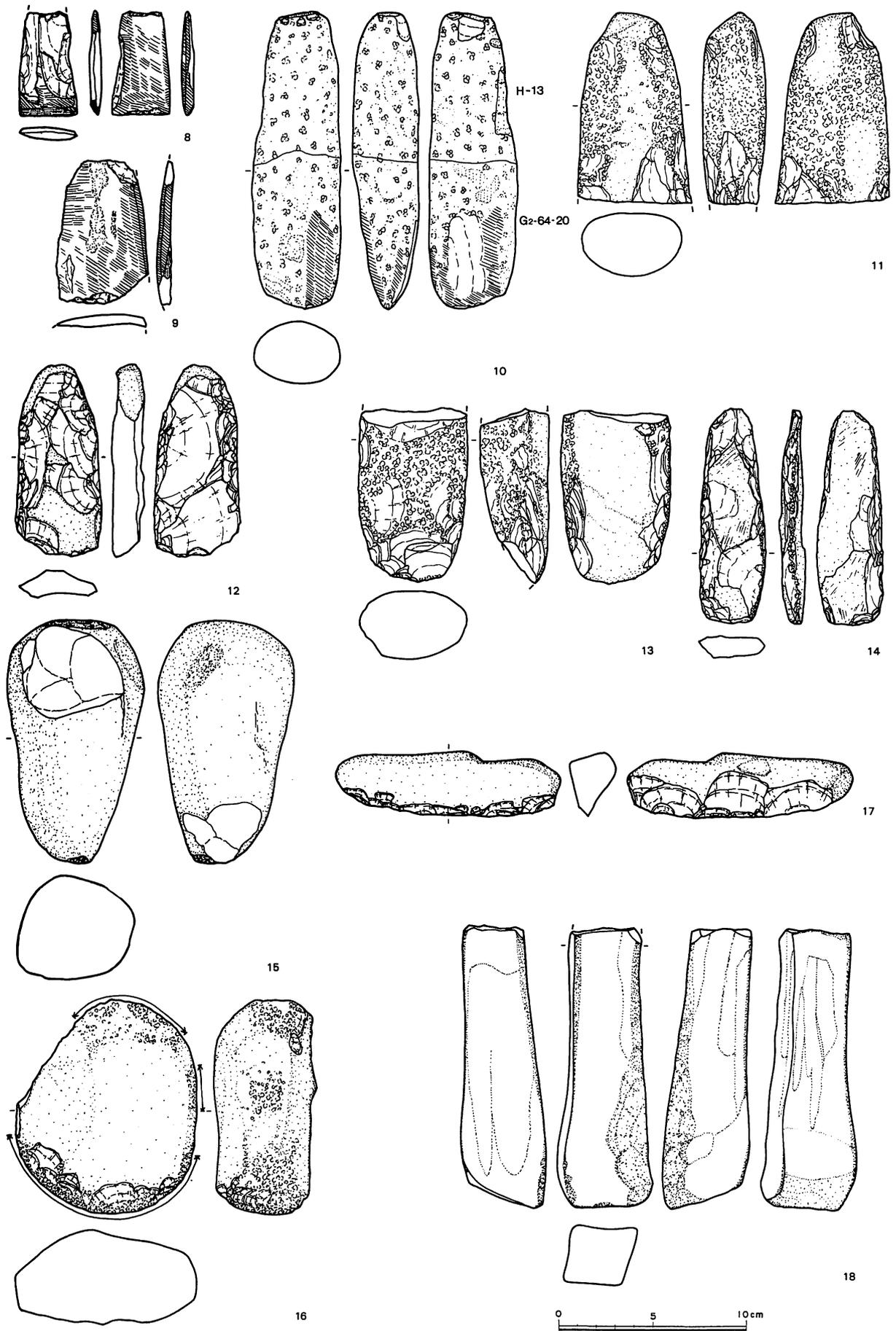


図Ⅲ-35 H-13 出土の土器(2)



図Ⅲ-36 H-13 出土の石器(1)

7は木葉形で厚みのあるものである。2はメノウ、7は珪質頁岩、他は黒曜石製である。8～10は黒色片岩製石斧。8は基端と刃縁のほとんどを欠く。直線と弧状の鑿をもつ。9は、大型の扁平な石斧の剝落した主面の一部である。10は円形に近い断面形、全面を敲打調整し、刃部付近は研磨調整で作出する。刃線は凸曲線を描く。11～13は緑色泥岩石斧未製品。11は扁平で棒状の素材に両側縁と片主面に敲打調整を加えたもの。12は側縁に剝離調整を加えている。片側縁の調整剝離が強すぎたためか刃予定部分を欠失してしまっている。13はやや扁平な断面をもつ。両側縁と片主面に敲打調整を施す。刃予定部分には敲打がみられない。14は薄い転礫を素材としている。両側縁には剝離調整が施される



図Ⅲ-37 H-13 出土の石器(2)

が、基部・刃部の予定部分は未調整。15は安山岩たたき石。平面形が長卵形の亜角転礫を使用する。使用端部はそれほど使い込まれておらず曲面をなしている。加熱のために一部が剥落する。16はカンラン岩たたき石。扁平楕円転礫の長軸両端をおもに使用する。17は流紋岩礫器、棒状の転礫の稜を両側から交互に剝離して刃部を作出する。18は極細粒砂岩砥石、粒子はよくそろいよく固結している。色調は浅黄色で加熱を受けて各所に亀裂が生じており、強く火を受けた部分では黒変している。

#### H-22 (図Ⅲ-38・39、図版Ⅲ-21・25)

**位置：** G<sub>1</sub>-63-33、34 標高24mの台地上に位置する。 **規模：** 3.9m/3.8m×3.4m/3.3m×0.08m **平面形：** 略卵形 **床面積：** 9.18m<sup>2</sup> **長軸方向：** N-4°-W

**確認・調査・土層：** H-13の調査過程で検出された。土層断面からH-13床面の下に別の遺構があることがわかり、H-13の床面を精査した段階でひとまわり小さな黒褐色土の落ち込みが確認された。

**床面：** 床面はほぼ平坦である。d<sub>2</sub>を掘り込んでつくられている。

**壁：** 大半がH-13によって切られているためわずかに立ち上がるのが認められる程度である。

**炉跡：** 床の中央部で焼土が1か所検出された。

**付属ピット：** 柱穴と考えられる小ピットは16個検出された。HP-16は焼土を切っているのでこの住居に伴うものではないと考えられる。

**遺物出土状況：** 出土遺物は多くない。床面からⅢ群b-3類ノダップⅡ式、北筒式土器が出土した。床面出土の北筒式土器(図Ⅲ-39-10)はH-13床面、H-14覆土及び周辺の遺物包含層出土土器と接合した(図Ⅲ-140-4)。

**時期：** 出土遺物から判断してⅢ群b-3類土器の時期と考えられる。(工藤)

**遺物：** 土器 1~10はⅢ群b-3類土器である。1は薄手で、口唇は丁寧に調整されている。口唇に沿って刺突がめぐらされている。2は粗い斜行縄文の施されたもので、内面が平滑に調整されている。1・2はノダップⅡ式とみなされる。3~6は浅く縄文のつけられているもの。7には結束羽状縄文、8~10は同一個体で結節の回転文が加えられている。なおこれらはH-13出土の資料と同一個体に属する。

石器 1は石槍またはナイフの破片で、黒曜石製である。

#### H-14 (図Ⅲ-40~42、図版Ⅲ-26・27)

**位置：** G<sub>1</sub>-63-23 標高23.7m付近の台地上に位置する。 **規模：** 3.25m/2.72m×2.94m/2.43m×0.33m **平面形：** 卵形 **床面積：** 5.56m<sup>2</sup> **長軸方向：** N-8°-W

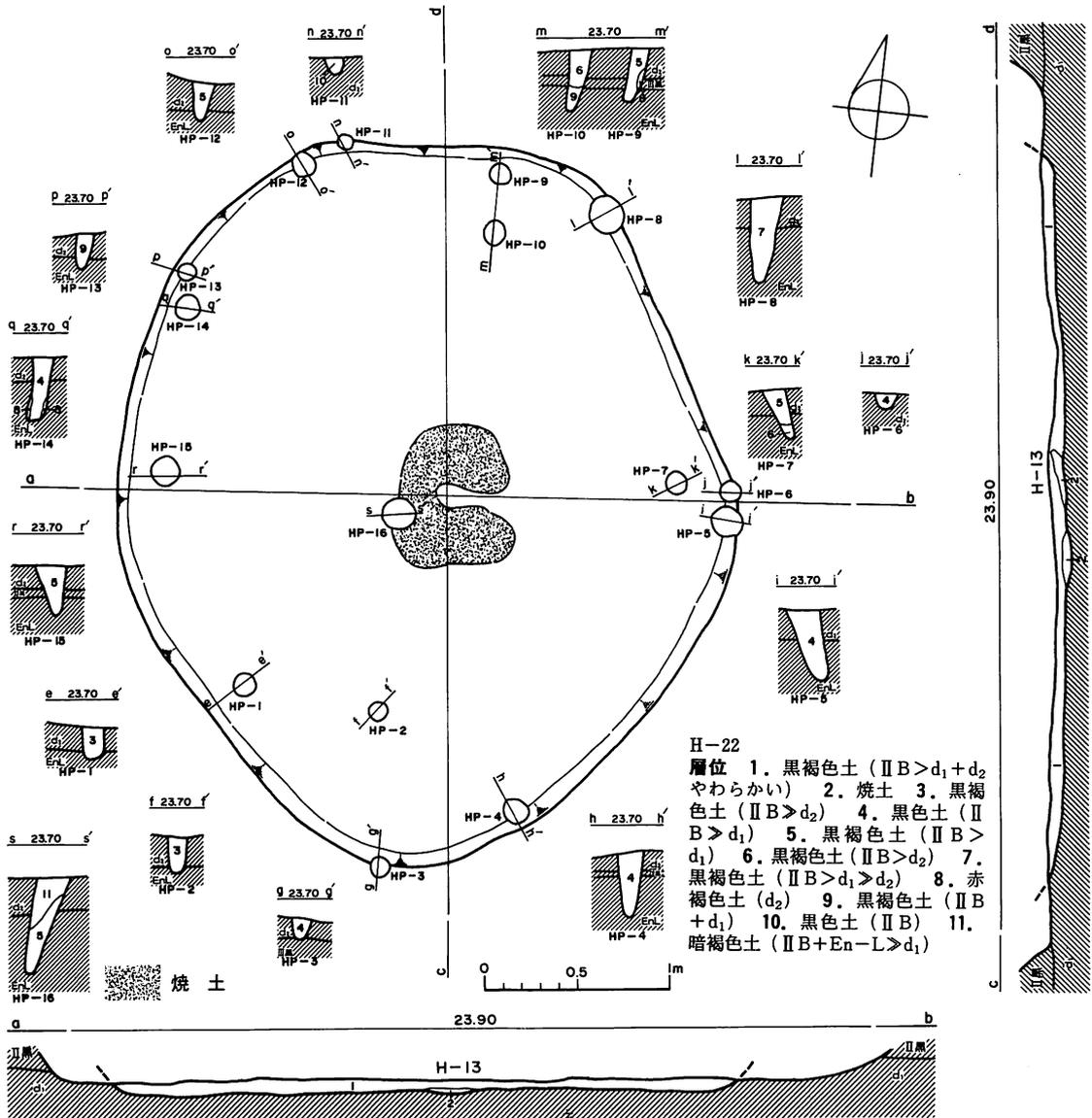
**確認・調査・土層：** Ⅱ黒層純腐植黒色土を掘り下げたところで、d<sub>1</sub>を多く含む4層とd<sub>2</sub>を多く含む5層の広がりを確認したので遺構と判断し、土層観察用のベルトを設定し調査を行なった。覆土は主にH-19の揚げ土(4層)とH-13の揚げ土(5層)によって構成される。掘り込み面はⅡ黒層を2回掘り下げた面である。

**床面：** 平坦で、d<sub>2</sub>を約3cm掘り込んでつくられている。 **壁：** 内湾しながら外上方向に立ち上がる。

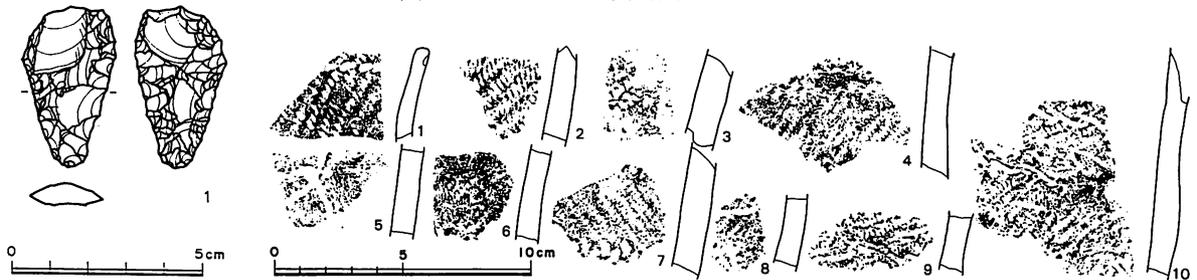
**付属ピット：** 柱穴状小ピットは壁の立ち上がり際に6個確認できた。深さは平均25cm前後で、ほぼ垂

表Ⅲ-11 H-22出土遺物一覧

出土遺物	ノダⅡ	北筒	小計	槍片	F	F.C.	小計	斧F	た	瓦片	小計	総計
覆土		2	2	1	65	165	231	3			3	236
床面直上		11	11		1	2	3		1		1	15
床面	1	3	4		6		6			2	2	12
計	1	16	17	1	72	167	240	3	1	2	6	263



図III-38 H-22 実測図



図III-39 H-22 出土の土器と石器

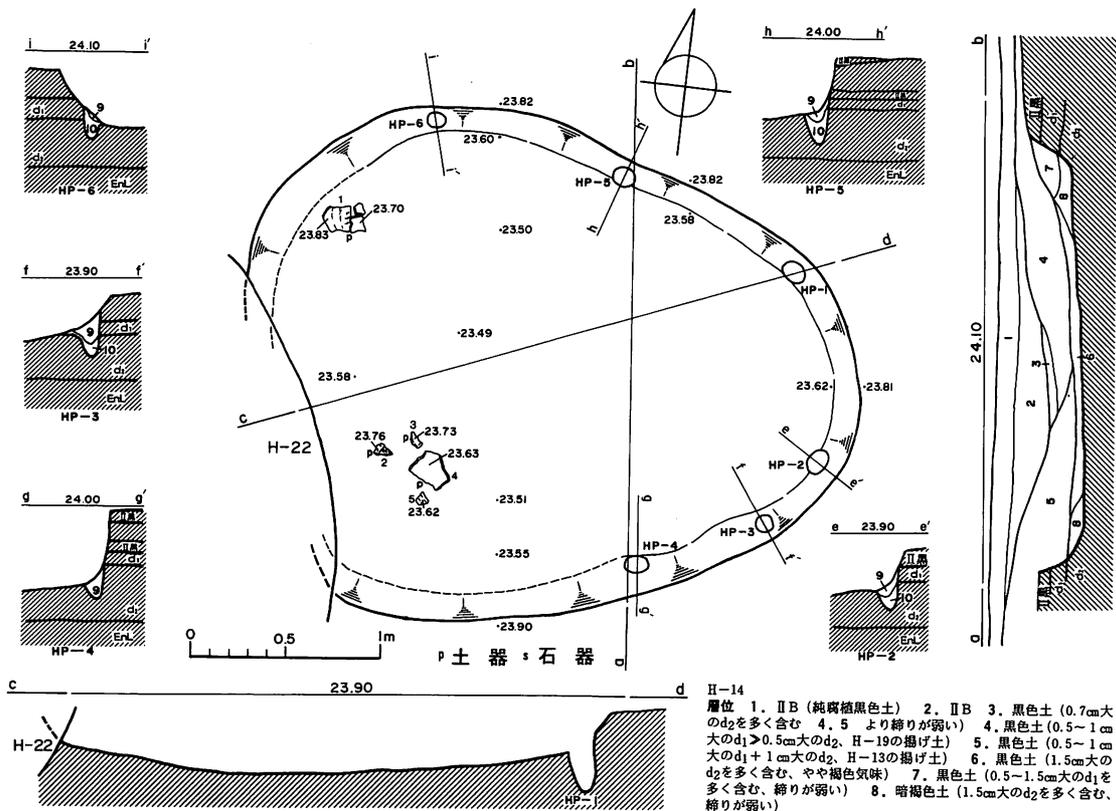
直に掘られている。

**遺物出土状況：**遺物は主に2、3層から出土している。床面からⅢ群b-3類土器が2点出土している。12（床面）と同床面出土の1点、2層出土の2点が同一個体。15（2層）と同層出土の1点、4層出土の1点が同一個体。石器類では1（5層）とG<sub>1</sub>-63-89出土のものとは接合する。5と10（H-13床面）と6（H-44床面直上）が同一個体。13（5層）と48（H-13炉跡）が同一個体。このように複数の覆土に跨って同一個体が存在することは、覆土が比較的短い期間に堆積したことを示している。また遺構間の接合例においては、近隣のグリット・遺構と接合する。一方で最大約55m離れた遺構やグリットとも散点的に接合する。

**時期：**5層にⅢ群b-3類土器が包含されていることより、縄文時代中期後葉の遺構である。

H-22はH-13に切られていること、H-13の床面出土遺物がH-14の5層と接合すること、H-44の床面直上出土の破片がH-14の3層にあることから、H-22→H-13→H-44→H-14の順に新しくなっていると考えられる。（鈴木）

**遺物：**土器 1～18はⅢ群b-3類土器、19はⅣ群a類土器である。1は口縁に肥厚帯があり、口唇上に押し文風の刺突文の施されているものである。2は口縁部にヘラ状工具による押し文がある。3・4も口縁部にヘラ状工具による刺突文、押し文の施されたもので、3の工具は細い。5は縄文に結節の回転文を加えるもので、H-13の10と接合している。6は粗い縄文の施されたもので、結束第2種の原体による。7は口縁に小さな山形隆起帯があり、肥厚帯下をなで調整し、円形文を配する。内面の突瘤はほとんど認められない。8・9は口縁が三角形に肥厚するもので、H-13の15と同一個体に属し、8はH-44の6と接合する。10は貼付帯のあるもので、地の縄文は比較的細かい。



図III-40 H-14 実測図

12は結束第1種の羽状縄文の施されているもので、空白部には横位と縦位の擦痕が認められ、器面調整の状況を知ることができる。胎土に礫と繊維を含む。13は無節の縄文の施されていたもので、口唇から内面にかけて磨かれている。H-13の48と同一個体に属する。14は斜行縄文の地に細い貼付帯があり、その上に刺突がある。包含層のものと接合し、縦位に貫通孔をもつ耳つき土器の体部であることが判明した。15は薄手の内面が平坦に調整されたものである。縄文は整っている。16は整った斜行縄文の施されたものである。17は浅く縄文の施された底部で、18は底部の周囲が削り調整されているものである。19は縦位施文の縄文の施されているもので、内面は磨かれている。13~15はノダツプⅡ式、16は煉瓦台式と関連するものとみられる。

表Ⅲ-12 H-14出土遺物一覧

出土遺物	ノダⅡ	北筒	Ⅱa	小計	楕片	F	RF	UF	F.C.	小計	石	鉄	斧	片	瓦片	小計	破片	総計
覆土	24	191	2	217	1	186	2	1	288	478	1	2	13	1	1	18	1	714
覆土4						5			18	23			2			2		25
5	3	11		14		11			27	38								52
計	27	202	2	231	1	202	2	1	333	539	1	2	15	1	1	20	1	791



図Ⅲ-41 H-14 出土の土器

石器 1は緑色泥岩製石斧で、断面が円形にちかい。両側縁と両主面のほとんどの部分が敲打調整されている。基部側の破片は、その折面を使用部位としてたたき石に転用されたものである。2・3は黒色片岩製石斧。2は丸のみ状に再成した。3は石斧の一部をより小形の石斧に再成しようとした未製品である。

H-15 (図Ⅲ-43~45、図版Ⅲ-28)

位置：G<sub>1</sub>-64-20・30 標高23.5m付近の台地上に位置する。 規模：3.18m/2.76m×2.64m/2.64m×0.36m 平面形：長楕円形 床面積：4.8m<sup>2</sup> 長軸方向：N-3°-W

確認・調査・土層：Ⅱ黒層純腐植黒色土層を掘り下げたところで、揚げ土(6層)の広がりを確認した。覆土は遺物を多く含んだ黒土(2層)が厚く堆積し、主要な覆土を構成する。掘り込みの面はⅡ黒層を2回掘り下げた面である。

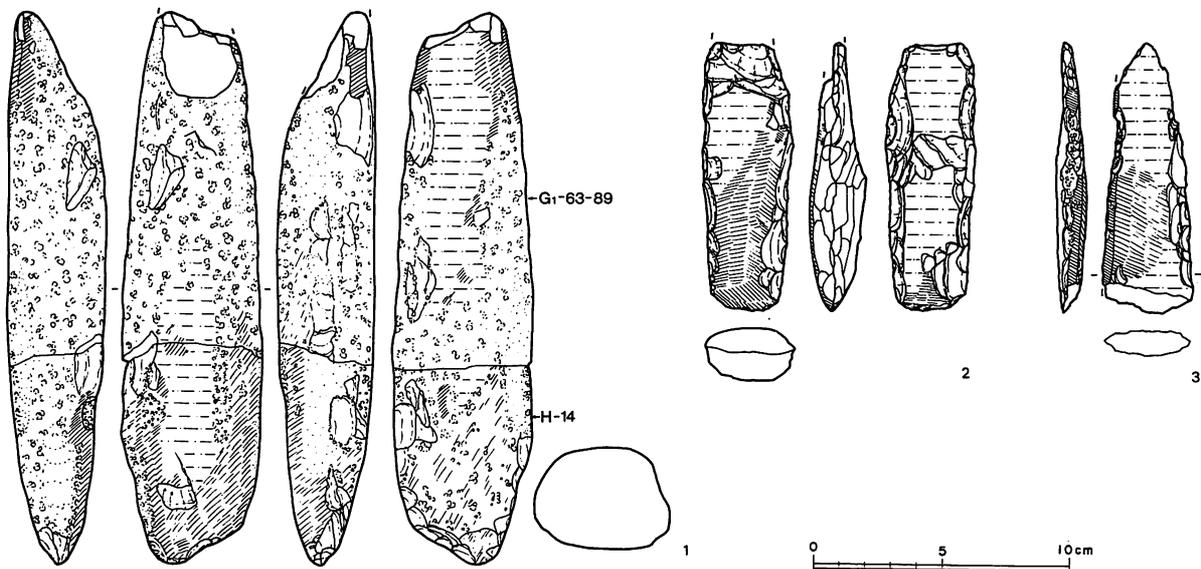
床面：中央部がくぼみ、En-L上面に床面がある。 壁：内湾しながら外上方向へ立ち上がる。

付属ピット：柱穴状小ピットは壁面に9個検出できた。その深さは平均18cmで、床面に対する角度は45°である。内側に傾いている。また縦穴北西に階段状の付属ピットが確認できた。

遺物出土状況：遺物は主に2・5層から出土している。床面出土遺物の分布は縦穴東北側に偏る。6(5層)と同層出土の5点、H-13の1層出土の1点、H-19の1層出土の1点、昨年度調査のP-7覆土出土の1点、昨年度調査のH-2覆土出土の22点、G<sub>1</sub>-63-12~16・41~44・10・22・48・53・85(計35点)出土の土器とが接合する。これら最大約61m離れたグリッド出土の土器片と接合する例であるが、その関係の分布状況は散点的と密集的中間の様相を呈している。また4(床面)と同床面出土の1点が接合、1層2点が接合するという各覆土層ごとに接合関係があることは、覆土が比較的短い期間で堆積したことを示している。

時期：床面からⅢ群b-3類土器が出土していることより、縄文時代中期後葉の遺構である。6が包含されている覆土からみた他の遺構との時期差は次のとおりである。H-15が床面付近、次にH-2が覆土中位、H-13・19が覆土の上のⅡ黒層中に包含していることからH-13・9→H-2→H-15の順に新しくなる可能性がある。(鈴木)

遺物：土器 1~7はⅢ群b-3類土器、8~10はⅤ群b類土器である。1は口縁の突起部を欠失



図Ⅲ-42 H-14 出土の石器

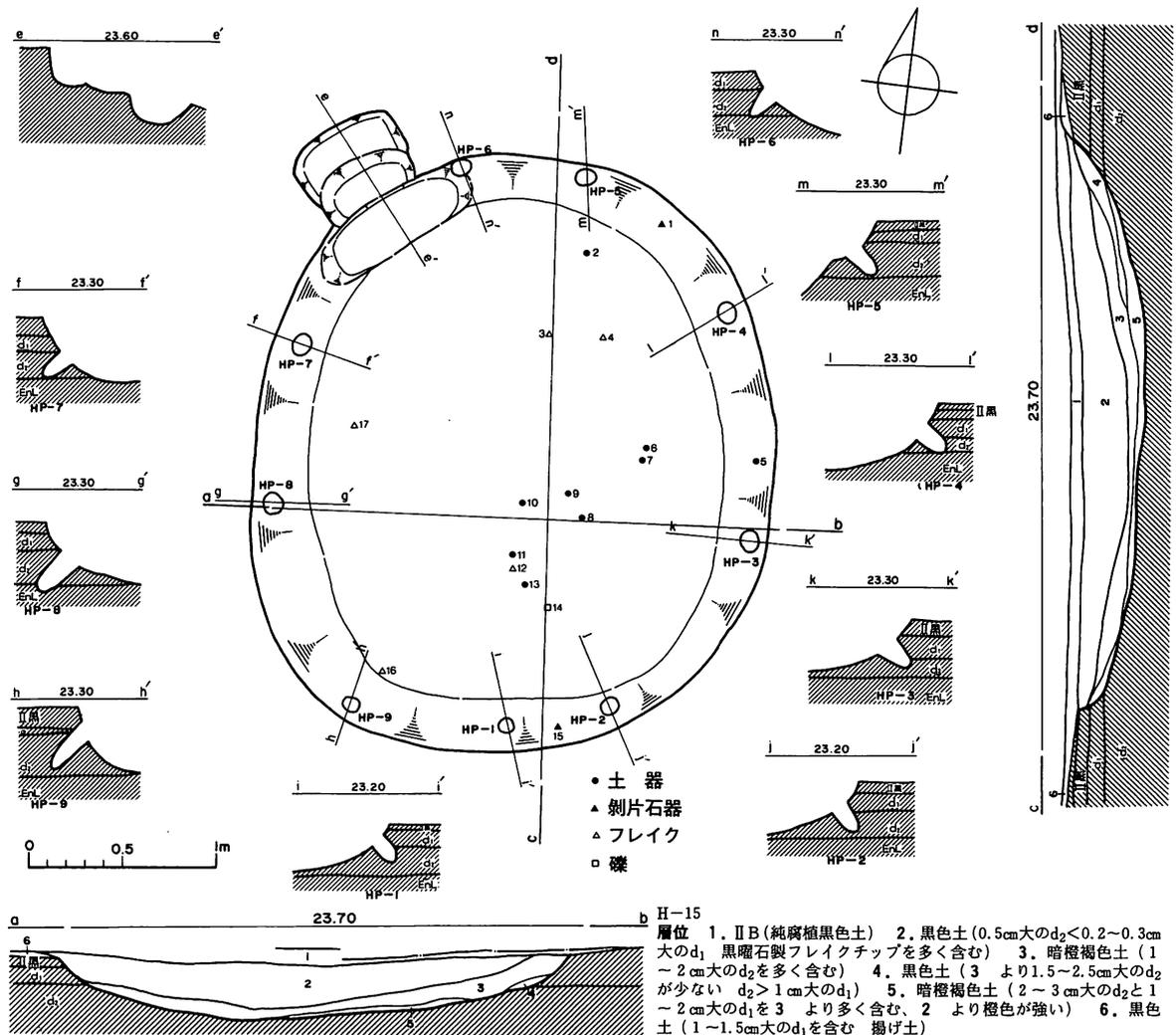
したもので、口唇に刺突文を施し、器面に結束第2種の原体による縄文が施されている。縄文施文後になで調整されたためか文様は不明瞭である。2はやや薄手の結束第1種の羽状縄文の施されたものである。3は細かい縄文に結節の回転文を加えたものである。胎土に繊維を含む。4は結束羽状縄文の施された体部破片、5は粗い縄文の施されたもの、6はやや細かい縄文の施されたものである。7は昨年出土したH-2の8と同一個体に属す。7~9は鉢形、浅鉢形の口縁部で、8は亀ヶ岡系、9・10は在地系の土器とみなされる。

石器 1は石槍またはナイフ。左右非対称である。2はつまみ付きナイフ。背面右側縁に急角度の刃部が作り出されている。珪質頁岩製である。3は緑色泥岩石斧未製品で、側縁調整中に剝落したものであろう。4はカンラン岩たたき石。扁平な垂角転礫の1側縁をたたき石として使用しているものである。

H-16 (図Ⅲ-46・48、図版Ⅲ-29)

位置：G<sub>1</sub>-63-11 標高23.8mの平坦地に位置する。 規模：3.53m/3.3m×3.03m/2.83m×0.24m 平面形：略卵形 床面積：7.64m<sup>2</sup> 長軸方向：N-83°-W

確認・調査・土層：G<sub>1</sub>-63-11の包含層調査中、Ⅱ黒層を約10cm掘り下げたところでドーナツ状にd<sub>1</sub>+d<sub>2</sub>の揚げ土が確認された。土層観察用のベルトを設定し、調査を行う。黒土上・下層を除去し、



図Ⅲ-43 H-15 実測図

Ⅱ B < d<sub>1</sub> の暗茶褐色土を約20cmほど掘り下げ、d<sub>2</sub> を検出し、床面とする。この上面には炭化物を多く含む軟質の黒褐色土が薄く認められる。

**床面**：平坦で、d<sub>2</sub> をわずかに掘り込んで構築されている。

**壁**：全体に急傾斜の立ち上がりで、壁高は22cm～24cmである。

**炉跡**：焼土などは検出されていない。床面中央部やや南西寄りに炭化物がまとまって検出された。

**付属ピット**：柱穴状小ピットは14個検出されている。このうち壁外のものは浅いもので、覆土はd<sub>1</sub> + d<sub>2</sub> である。床面上から2個、壁面で8個検出され、全て直立している。覆土はⅡ B > d<sub>1</sub> である。ただHP - 4、6の覆土は軟質の黒色土で、非常に深い。南東壁コーナーには段状のものが検出されている。

**遺物出土状況**：覆土上面でⅢ群b-3類の土器がかたまって出土している。床面直上から石斧フレイクが255点出土しているのが注目される。

**時期**：掘り込み面はⅡ黒層上位で、周辺からⅢ群b-3類土器が出土していることから、縄文時代中期後葉（北筒式期）の時期と思われる。

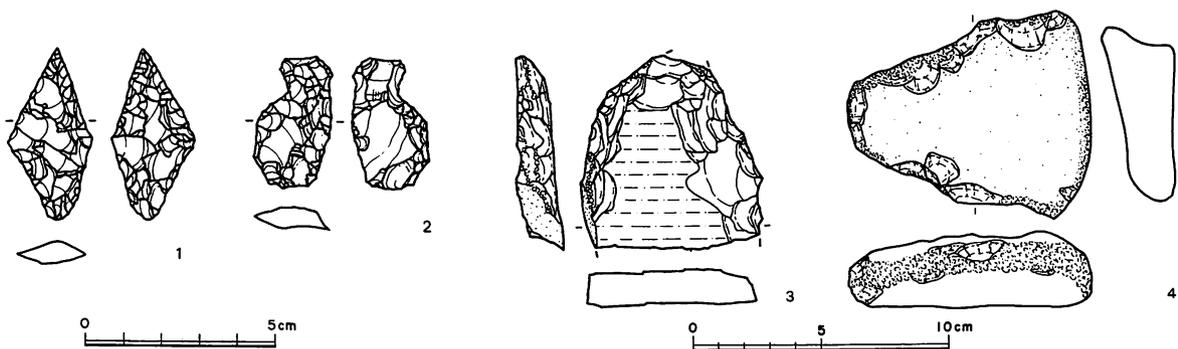
H-16の揚げ土の上にH-5の揚げ土がのっている。またH-4の揚げ土を切ってつくられてい

表Ⅲ-13 H-15出土遺物一覧

出土遺物	北筒	石輪	F	UF	小計	斧F	総計
覆土3上	1						1
3	7	1			1	1	9
5上	2						2
5	1						1
床面	8		7	2	9		17
計	19	1	7	2	10	1	30



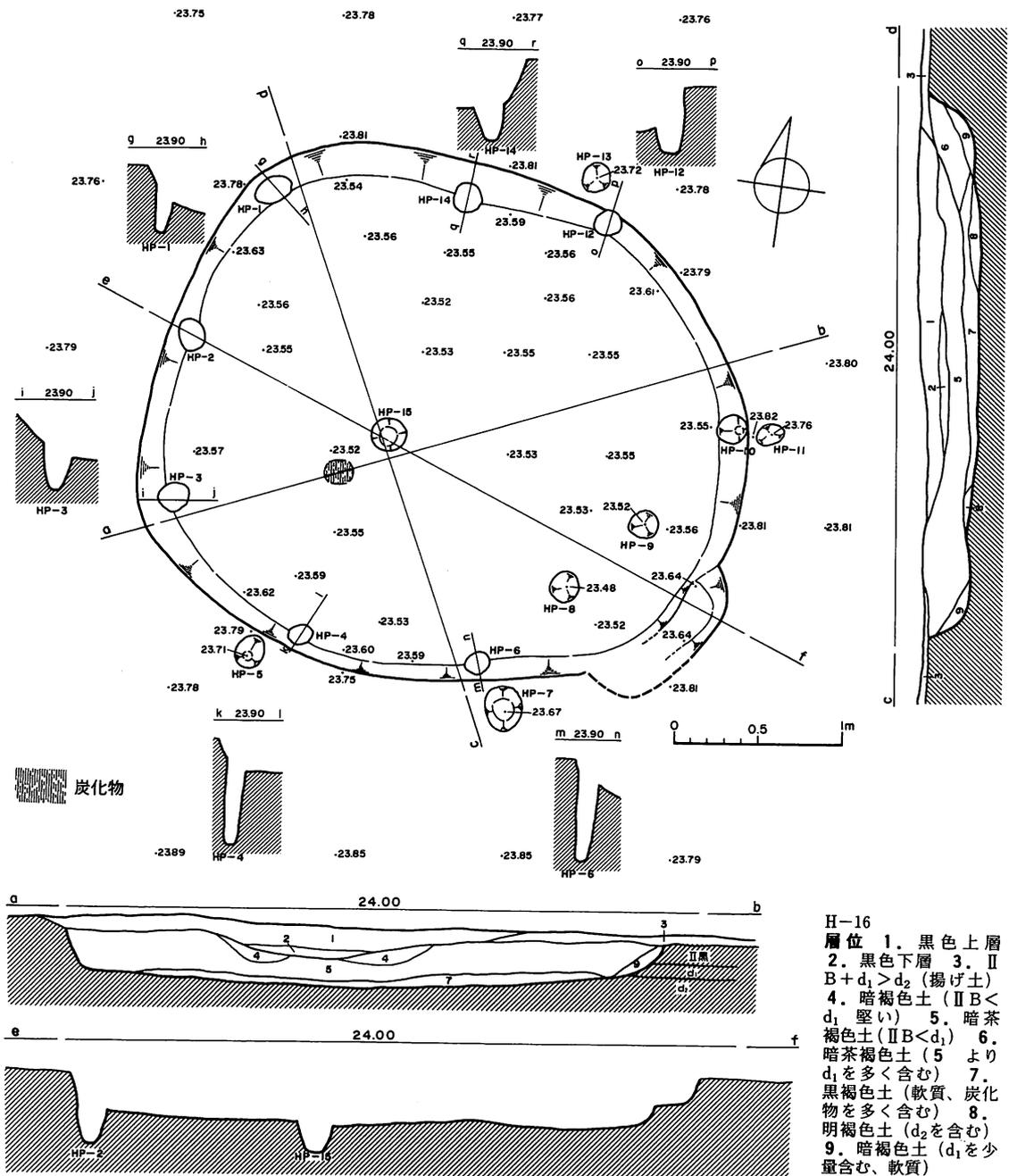
図Ⅲ-44 H-15 出土の土器



図Ⅲ-45 H-15 出土の石器

る。(和泉田)

遺物：土器 1は結束羽状縄文の施された薄手の土器で、口唇と口縁部に押し引き文風の刺突文を施している。2は口縁に幅のせまい肥厚帯を設けるもので、その下の無文部に円形文を施す。3は口縁部に棒状工具による浅い円形刺突文を施している。H-4のものと接合する。4は口縁の少し下に隆起帯をめぐらせ、その上になで調整を加え無文とするものようであるが、隆起帯は顕著でなく、口縁部が薄く調整されている印象を与える。器形には口縁がくの字形にくびれる特色がある。5は整った斜行縄文の施されたもので、口縁を欠失するが、口縁部の肥厚帯に円形文を施している。内面の突瘤は顕著ではない。6はヘラ状工具による押し引き文が沈線化した施文のあるものである。7は比較的細かい斜行縄文の施されたもので胎土に繊維を含むものである。8は粗い斜行縄文の施されたもので、



図Ⅲ-46 H-16 実測図

煉瓦台式風のものである。9は体部にふくらみをもつ薄手の土器で、比較的せまい口縁部の無文帯を画して縄線文が一条めぐらされている。ノダップⅡ式とみなされる。

石器 1は五角形鏃。2は石槍またはナイフ。最大幅はやや上位にある。3はスクレイパー。自然面を残す。1～3はすべて黒曜石製である。

H-17 (図Ⅲ-49～51、図版Ⅲ-30・31)

位置：G<sub>1</sub>-63-34 標高24mの台地上に位置する。 規模：3.8m×3.5m×0.45m

平面形：不整円形 床面積：5.65㎡

確認・調査・土層：H-13の南北トレンチ調査中にH-13に切られている落ち込みを確認した。住居跡を想定して南北トレンチを延長し、東西のトレンチを追加して調査を進めた。調査の結果、壁の立ち上がりを明確にとらえることができたのはごく一部であった。東西トレンチ土層断面図(図Ⅲ-49)の西側部分のように12層を覆土としてとらえれば、より西側に壁を想定できる部分もあるけれども、隣接するサブトレンチの堆積状態を考慮しても判断できなかった。断面形は皿状を呈するものと思われる。床面には凹凸があり、一部に段が認められる。遺構の重複も想定して調査したが確認できなかった。覆土には6層のようにd<sub>2</sub>を多量に含む土が厚く堆積しており、人為的に埋められた可能性がある。6層上面のくぼみには炭化物を含む灰(5層)がレンズ状に堆積しているのが認められた。

床面：凹凸があり、段差のある部分がある。

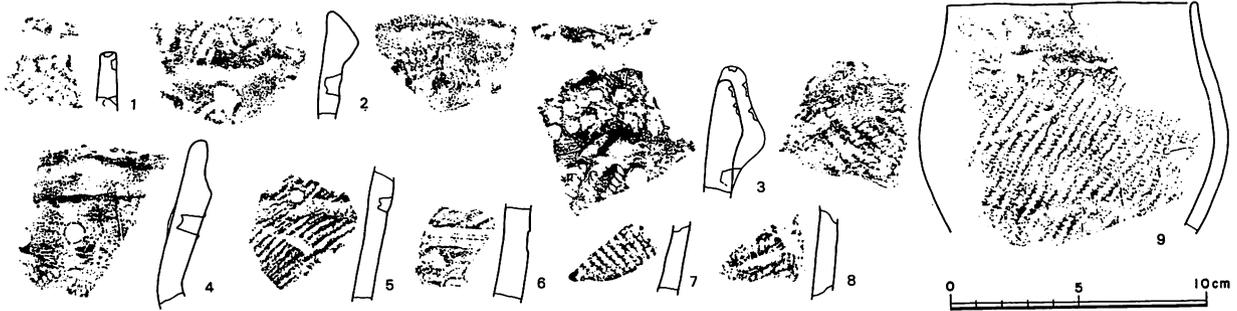
壁：全体に不明瞭である。確認できた部分では緩やかに立ち上がる。

炉跡：炉跡は検出されなかった。

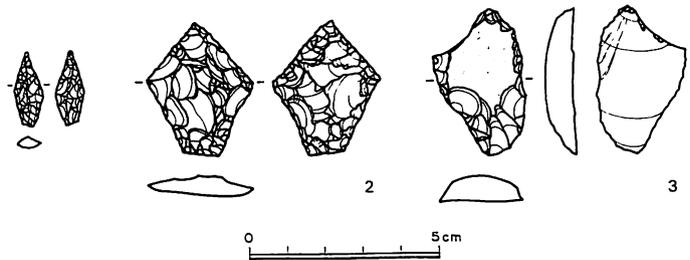
付属ピット：柱穴状小ピットを3個検出した。

表Ⅲ-14 H-16出土遺物一覧

出土遺物	ノダⅡ	北 筒	小 計	石 槍	槍 片	掘 器	F	UF	F.C.	小 計	斧 F	礫	総 計
覆土直上		16	16				39	1		40	1	1	58
覆土	1	28	29		1	1	40			42	50		121
床面直上		1	1	1					18	19	255	2	277
計	1	45	46	1	1	1	79	1	18	101	306	3	456



図Ⅲ-47 H-16 出土の土器



図Ⅲ-48 H-16 出土の石器

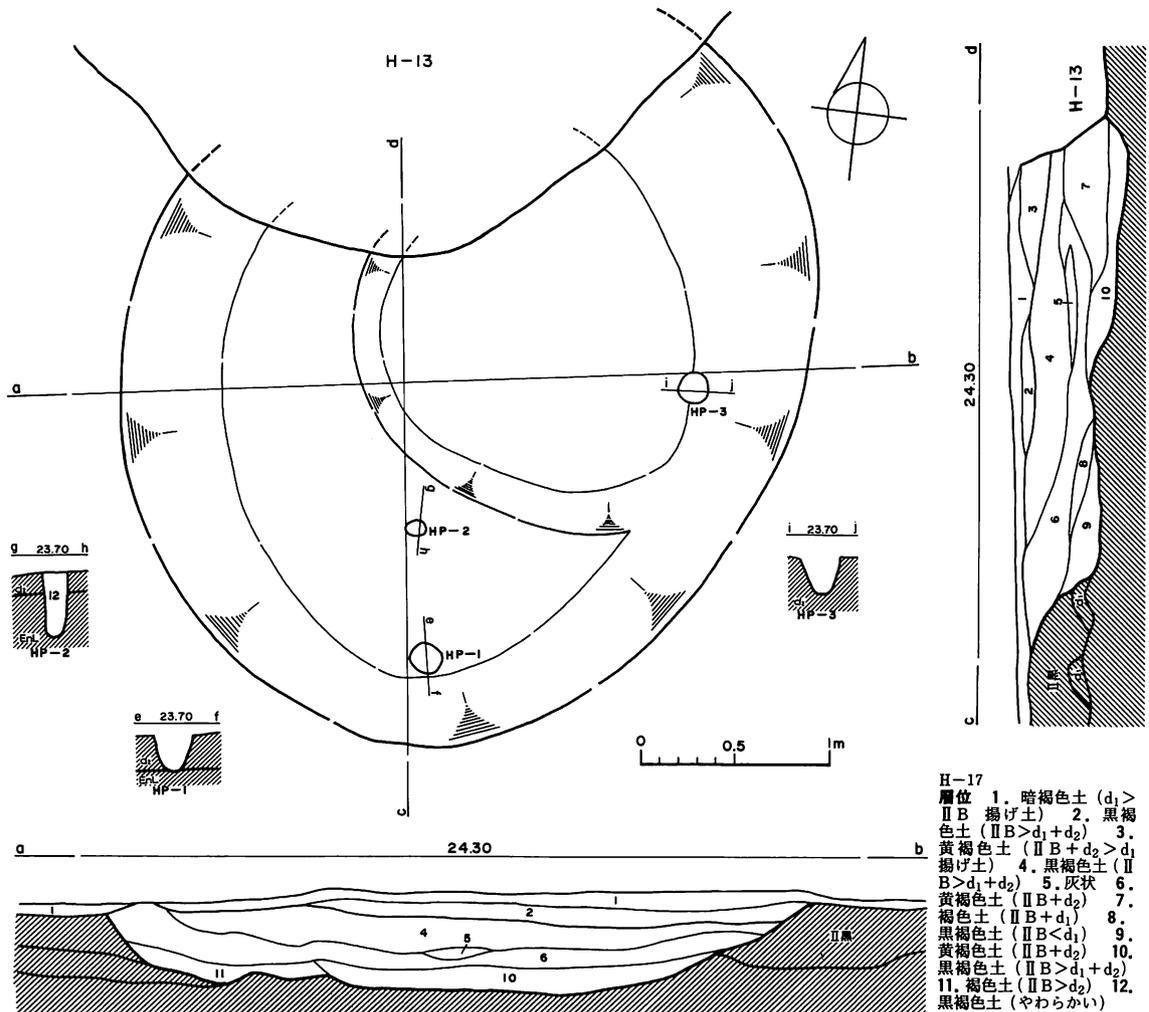
**遺物出土状況：**遺物の多くは覆土の上部から出土した。覆土の上部ではⅢ群b-3類の北筒式、ノダップⅡ式土器が出土し、覆土の下部からは北筒式土器だけが出土した。覆土10層ではフレイク・チップが20cm×20cmの範囲でまとまって出土した。

**時期：**出土遺物からⅢ群b-3類の北筒式土器の時期と考えられる。

本遺構は人為的に掘り込まれたものであることは間違いないと思われるが、土層の堆積状態、床や壁の状態から判断すると住居跡とする積極的根拠はない。

覆土の上部にはH-13の掘り上げ土と考えられる覆土1・3層が堆積している。覆土6層はH-13構築以前に堆積している。これを他の遺構の掘り上げ土かと考えたが、どの遺構のものか特定できなかった。(工藤)

**遺物：土器** 1~16はⅢ群b-3類土器である。1~8は縄文の施された口縁部で、1~3・5は口縁の断面が三角形となるもので、1には結節の回転文が施されている。3の口縁はなで調整されて無文である。4~7は口唇が角形を呈する。4は内外面とも赤色を呈する部分が多い。6は口縁に小突起のつけられていたもので突起の頂部から深い刺突がなされている。8は小形の薄手のもので、無節の縄文が施されている。9は斜行縄文を地として貼付帯の施されているものである。10にはやや太い貼付帯がみられる。この貼付帯の両側縁はなでつけられている。11は器面に斜行縄文を施し、結節



図Ⅲ-49 H-17 実測図

の回転文を加え、さらにヘラによる押し引き文を施している。昨年度包含層から出土した13と同一個体に属する。12は結束第2種の0段多条の縄文と、普通の縄文の併用されたものとみられる。13は無節の縄文の施されたもので、原体はRである。14・15は外側へ張り出すくせを持つ底部である。16は口縁のくびれる鉢形土器とみなされ、口縁部は無文である。体部との境に隆帯がめぐらされ、さらにそこから体部へ垂下する隆帯が認められる。隆帯上には縄線文が施されている。ノダップⅡ式に関連するものとみられる。H-19の11と同一個体に属する。

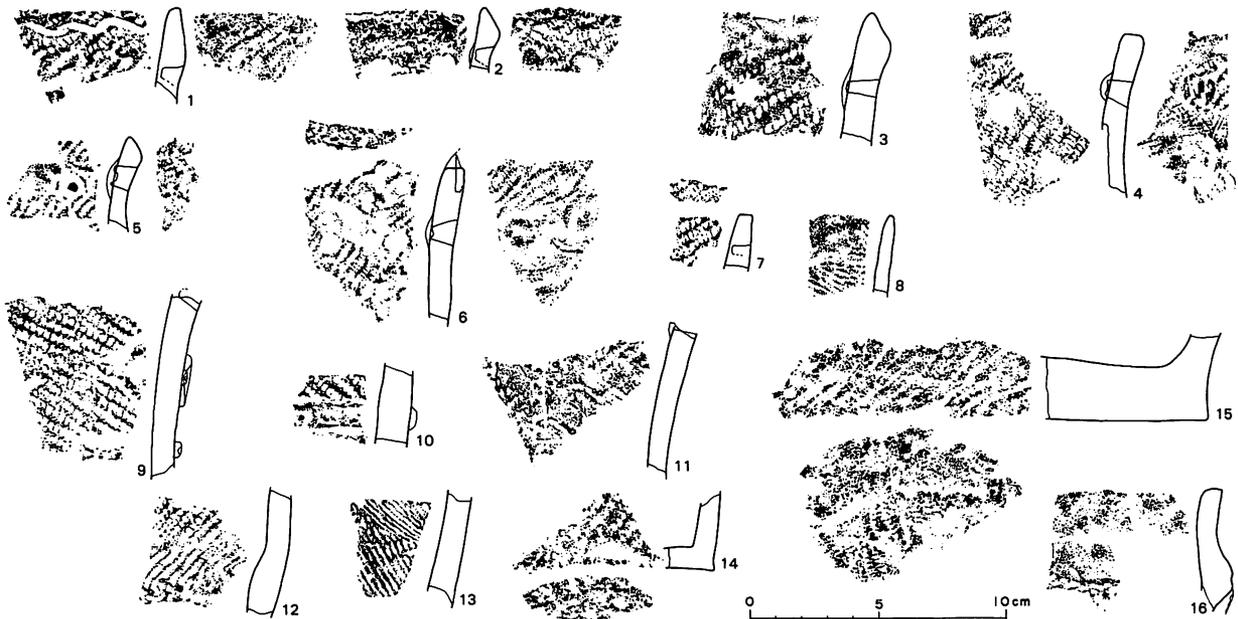
石器 1～3は石鏃。1は木葉形、2・3は有茎である。4～8は石槍またはナイフ。いずれも最大幅が中位にある。3は身の側縁がやや湾入している。6は茎部と身の境が明瞭に区別されており、身の側縁は丸味をもつ。7・8は茎部と身の境が不明瞭である。9～13はスクレイパー類。8は両側縁にえぐりがある。10は左側縁に急角度の刃部が作り出されている。刃部には刃つぶれが認められる。11～13は厚みのあるもので、周縁に加工が施されている。1～13は黒曜石製である。14は黒色片岩製石斧で、石斧の一部の再成石斧である。片主面に直線的な鑄が入る。15はカンラン岩たたき石でやや扁平けれども球形に近い転礫の周囲をつかっている。

表Ⅲ-15 H-17出土遺物一覧

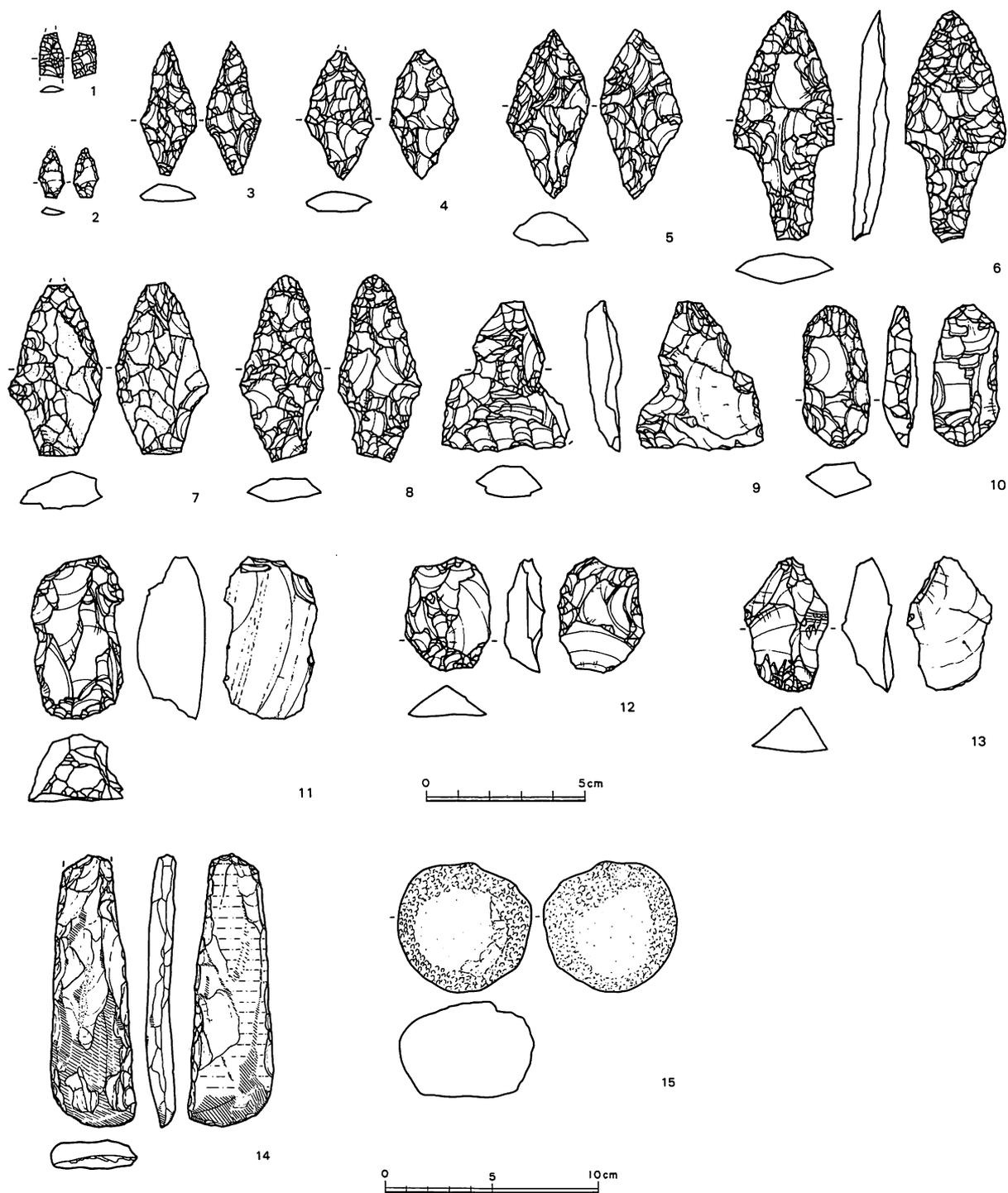
出土遺物	ノダⅡ	北	管	小計	石鏃	鏃片	石槍	器	F	RF	UF	コ	F.C.	小計	斧	片	片	小計	片	総計
種2・4	15	139	154		2	1	2	474	3	8			1300	1790	40		1	41	2	1987
6~8		24	24	2		2	2	329	1	4	2		2782	3124	40	2		42	4	3194
9~11		3	3	1		2	1	63		1			103	171	4		1	4		179
計	15	166	181	3	2	5	5	866	4	13	2		4185	5085	84	2	2	87	6	5360

H-18 (図Ⅲ-52~54、図版Ⅲ-32~34)

位置：G<sub>1</sub>-63-05・15・06・16 標高24m付近の平坦地に位置する。 規模：5.8m/5.35m×4.93m/4.35m×0.2m 平面形：略卵形 床面積：16.9m<sup>2</sup> 長軸方向：N-54°-W  
 確認・調査・土層：H-10の床面下に堅い粘質の黒褐色土が約5cmほど堆積し、この下には堅い暗



図Ⅲ-50 H-17 出土の土器



図Ⅲ-51 H-17 出土の石器

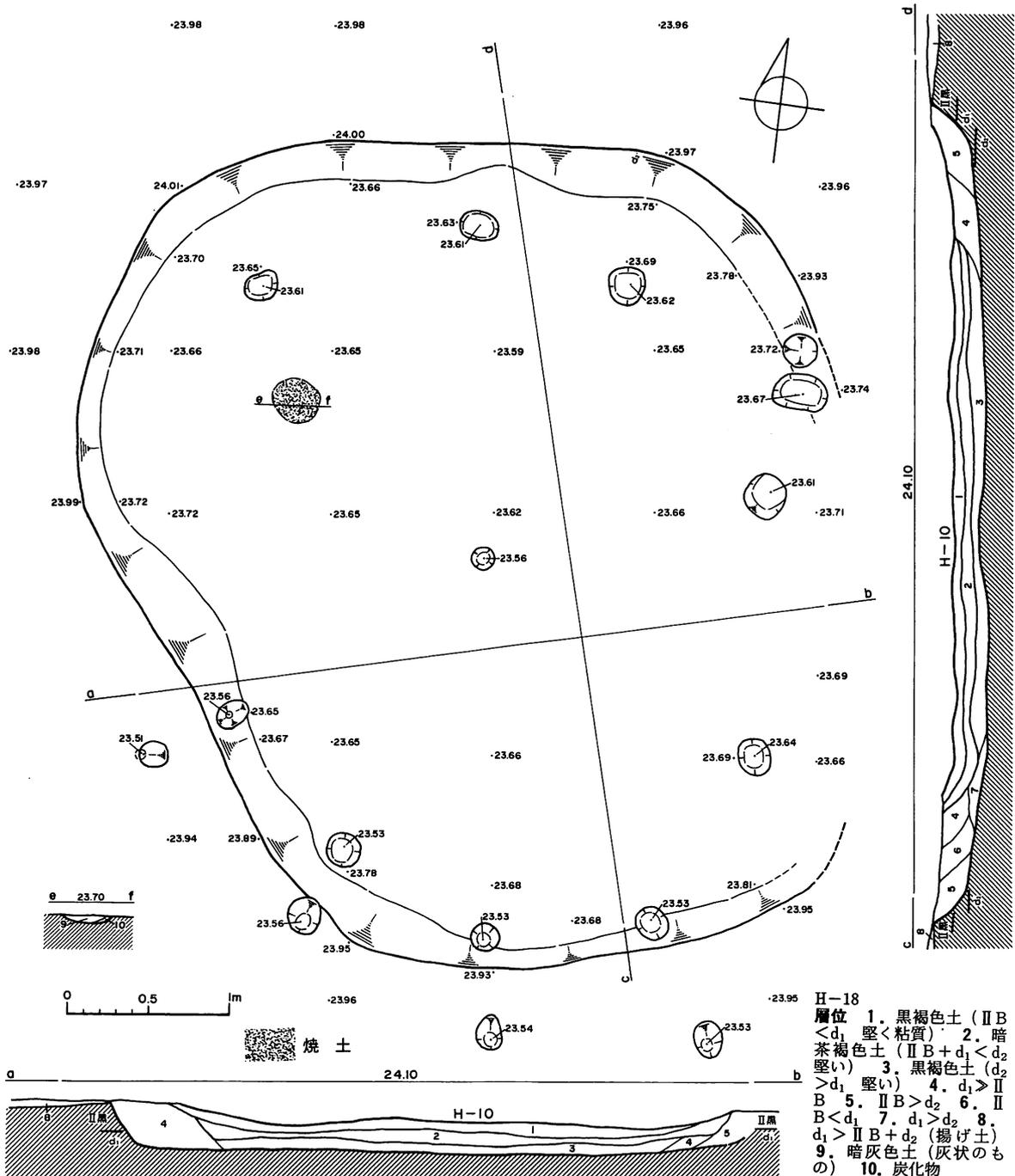
茶褐色が堆積している。暗茶褐色土は  $d_2$  上に堆積しており、これを排土しつつ床面、壁の検出を行う。暗茶褐色土上面には炭化物、黒曜石のフレイク・チップが多数散在し、一時期生活面として利用されていたものと思われる。

**床面：**かなり凹凸があり、 $d_2$  を浅く掘り込んで構築されている。

**壁：**全体にゆるやかな傾斜の立ち上がりである。

**炉跡：**床面北西側に  $0.25\text{m} \times 0.3\text{m}$  の範囲に火を受けて赤化した部分が検出されている。地床炉である。

**付属ピット：**柱穴状小ピットは17個検出されている。このうち壁外にある4個は浅く、やや内側に傾いている。他は直立している。



図Ⅲ-52 H-18 実測図

**遺物出土状況：**床面からはⅢ群b-3類の土器が多数出土している。黒曜石のフレイク、フレイク・チップも多く、注目される。

**時期：**掘り込み面はⅡ黒層上位で、床面などからはⅢ群b-3類土器が出土していることから、縄文時代中期後葉（北筒式期）の時期と思われる。

H-18の揚げ土がH-6に切られている。（和泉田）

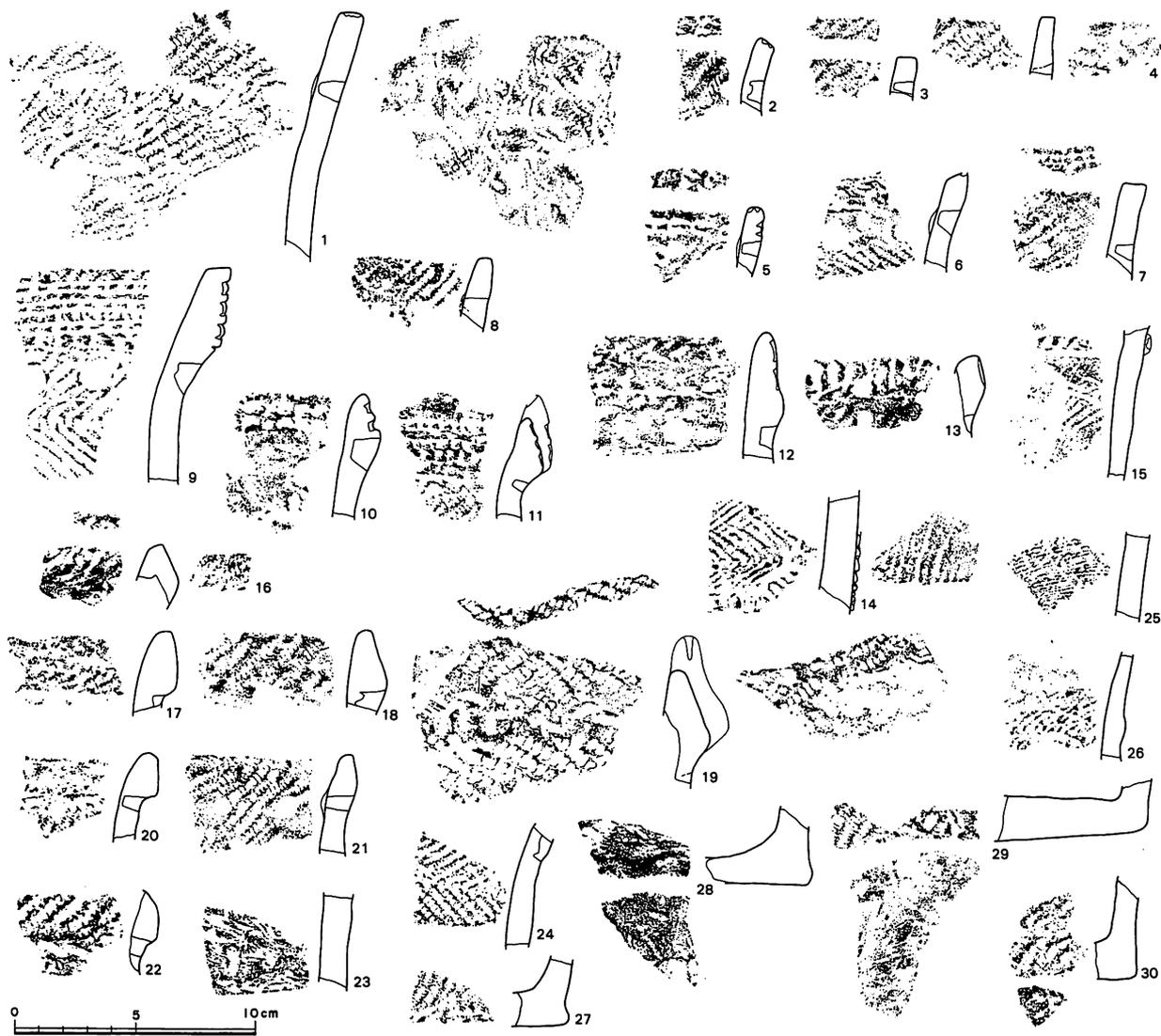
**遺物：**土器 1～32はⅢ群b-3類土器である。1～8は口縁に顕著な肥厚帯をもたないものである。器面の縄文は結束第2種の原体によるものかとみられる。内面には継位に施されている。2は口縁のやや強く外反するものである。3は角形で、縄文が深く施されている。4は比較的薄手のものである。5は口縁と口唇に半截竹管状工具による押引き文風の刺突文のあるものである。6は口縁に先端の平たいヘラ状工具による押引き文のあるもので器面の縄文は細かい。7は口唇に押引き文のあるものである。8は口唇の断面がやや丸味をもつように調整されているものである。9～15は口縁に肥厚帯があり、棒状もしくはヘラ状工具により施文されたものである。9は赤色顔料の付着するもので、口唇から内面にかけて、平坦に丁寧な調整がなされている。器面にはあらかじめ結束のある羽状縄文（無節）が施され、口縁部に4段に半截竹管状工具により押引き文が施されている。フレイク・チップ集中No. 2の7と同一個体に属する突起部の破片、H-5より貼付帯に刺突を伴う同一個体の破片

表Ⅲ-16 H-18出土遺物一覧

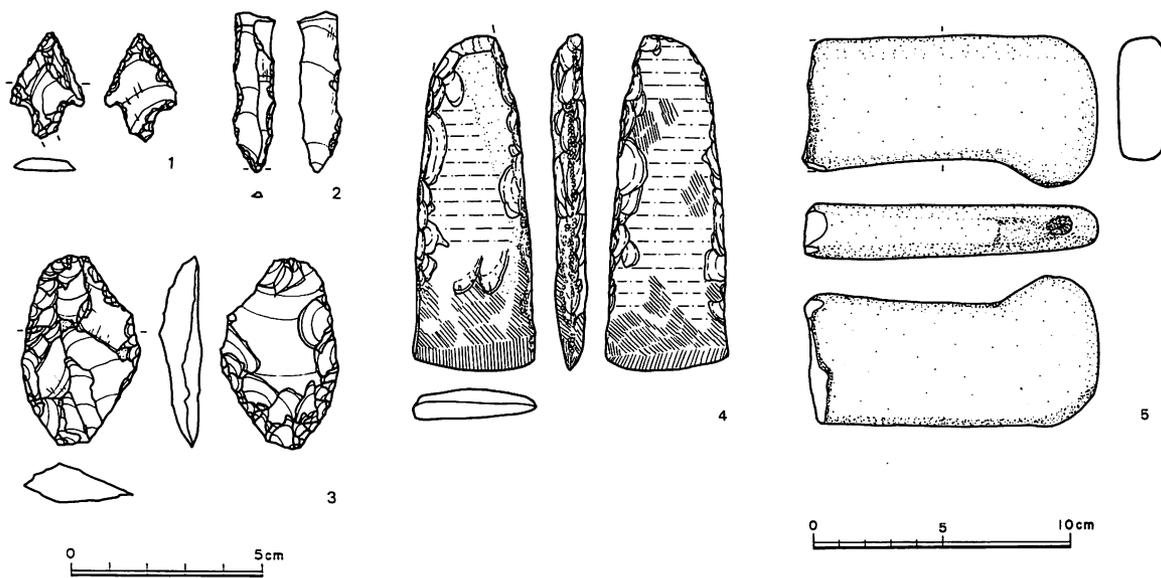
出土遺物	Ⅲb-1	ノダⅡ	北	背	小計	石錐	鱗片	石錐	棒器	F	RF	UF	F.C.	小計	石斧	斧	た	た	片	片	小計	礫	礫	総計
覆土上層	6	1	201	208	1	1	1	178	3	257	441	1	7	1	9	3	6	667						
覆土下層	1	1	56	58	1	1	70	1	31	104	1	1	2	164										
床面直上	1	46	47	7	9	16	2	66																
床面	84	84	85	86	4	259																		
揚土	1	1	5	5	6																			
計	8	2	388	398	1	2	1	1	345	3	383	566	1	12	1	1	1	12	3	8	1162			

が出土している。10・11は棒状工具による押引き文の施されたもので、10は圧痕が深く、11は浅い。12は先端に丸味のあるヘラ状工具により浅く押引き文風に刺突されているものである。13は先端がやや直線的なヘラ状工具により押引き文風の刺突が加えられているものである。14は結束羽状縄文の地に幅狭く薄い貼付帯のあるもので、貼付帯上には押引き文が施されている。包含層の破片と接合する。内面にも縄文が施されている。15は縄文地に浅い沈線を引き、それに沿って細い貼付帯を施し、その上に刺突を加えている。16～22は口縁に肥厚帯があり縄文の施されたものである。円形文は概して深く刺突されているが、17では浅い。23は無節の縄文、24は結束第1種の羽状縄文の認められるものである。25には撚糸文が施されている。26は口縁部が磨かれているもので、あらかじめ隆起帯を設け、縄文を施している。ノダⅡ式に相当するものとみられる。27～30は底部である。外側へ張り出す特色がある。29・30は同一個体である。

**石器** 1は有茎鏃。2は石錐で、幅のせまい縦長剝片を素材とし、打点側に機能部を作り出している。3はスクレイパーで、縦長剝片の周縁に加工が施されている。1～3はいずれも黒曜石製である。4は緑色片岩製石斧。両主面に礫面を残し、両側縁は剝離調整を残したままである。直線的な鑄がある反対の主面側の刃縁に顕著な条痕がみられる。5は砂岩たたき石で扁平棒状転礫を素材とする。一部やけている。



図Ⅲ-53 H-18 出土の土器



図Ⅲ-54 H-18 出土の石器

H-21 (図Ⅲ-55~57、図版Ⅲ-34・35)

位置：G<sub>1</sub>-64-50・51 標高23.5m付近の台地上に位置する。 規模：2.51m/1.93m×1.34m/0.87m×0.3m 平面形：長楕円形 床面積：3.56㎡ 長軸方向：N-56°-E

確認・調査・土層：Ⅱ黒層純腐植黒色土層を掘下げたところで確認した。覆土は遺物を多く含む黒土(2・3層)で主に構成される。掘り込み面はⅡ黒層を2回掘り下げた面である。

床面：中央部がくぼみ、丸味をもつ。 壁：内湾しながら外上方向へ立ち上がる。

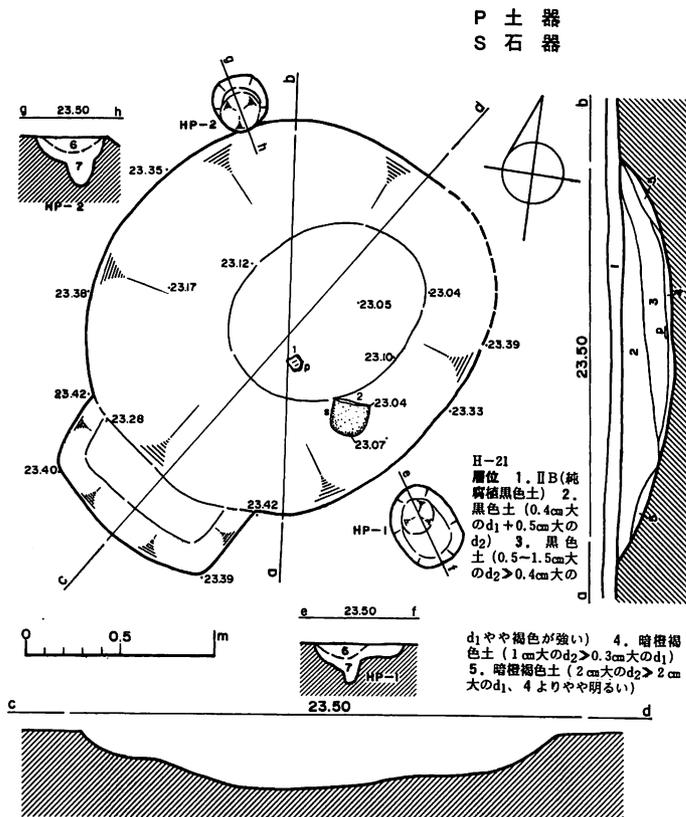
付属ピット：柱穴状小ピットは竪穴肩口付近に2個確認された。柱穴は掘り方を持っており、深さは確認面から平均23cmで、ほぼ垂直に掘られている。また竪穴南西側には平面形が長方形の付属ピットが確認された。

遺物出土状況：遺物は主に2・3層より出土する。石皿は床面中央側に傾いて出土した。1(2層)と同層出土の3点とG<sub>1</sub>-64-20・50(各1点)出土の土器片と接合。3(2層)と3(H-36・覆土)が接合。

時期：3層にⅢ群b-3類土器が含まれていることより、縄文時代中期後葉の遺構である。(鈴木)

遺物：土器 1~3はⅢ群b-3類土器である。1は口縁部の断面が三角形になるもので、口縁斜方向からの刺突が加えられている。2は口縁が薄くなってやや外反するものである。3は整然とした斜行縄文の施されているもので、H-36の3と接合する。

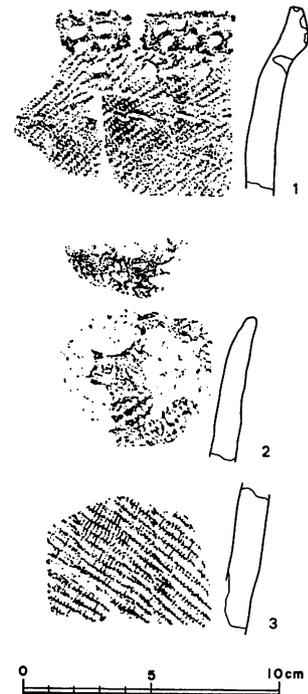
石器 1は安山岩石皿。多孔質で灰白色を呈す。使用面は片面で、やや凸形である。



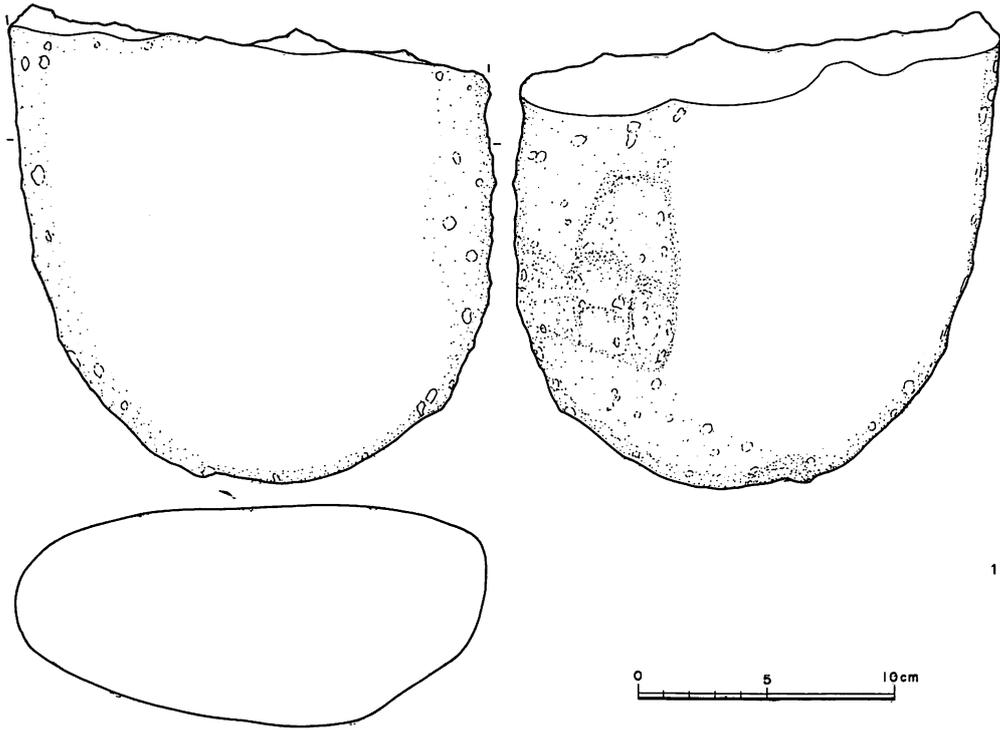
図Ⅲ-55 H-21 実測図

表Ⅲ-17 H-21出土遺物一覧

出土遺物	燧石	土器	小計	RF	石皿	総計
覆土2		4	4	1		5
3	2	1	3		1	4
計	2	5	7	1	1	9



図Ⅲ-56 H-21 出土の土器



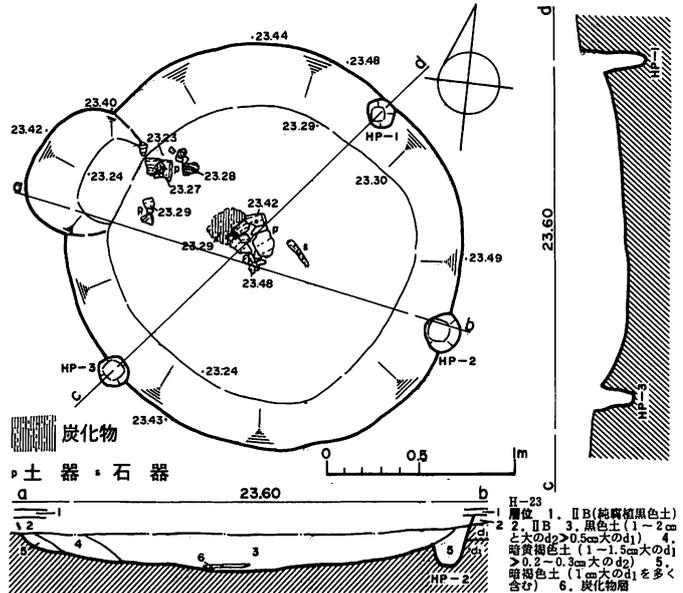
図Ⅲ-57 H-21 出土の石器

**H-23** (図Ⅲ-58~59、図版Ⅲ-35・36)  
**位置**：G<sub>1</sub>-63-31 標高23.5mの台地上に位置する。 **規模**：2.55m / 2.04m × 1.55m / 1.47m × 0.2m **平面形**：長円形 **床面積**：1.97m<sup>2</sup> **長軸方向**：N-71°-W

**確認・調査・土層**：Ⅱ黒層を2回掘り下げたところで竪穴プランを確認した。覆土は遺物を多く含む黒土(3層)と付属ピット側の流れ込み土の4層によって構成される。また床面中央部には構築面から2cmくらい上方のところに炭化物の薄い層が見られる。

**床面**：平坦で、d<sub>2</sub>を約12cm掘り込んでつくられている。 **壁**：内湾しつつ外上方向へ立ち上がる

**付属ピット**：柱穴状小ピットは竪穴肩口に3個検出できた。柱穴は平均24.3cmの深さで、ほぼ垂直に掘られている。また竪穴北西側に長楕円形状の付属ピットが確認された。



図Ⅲ-58 H-23 実測図

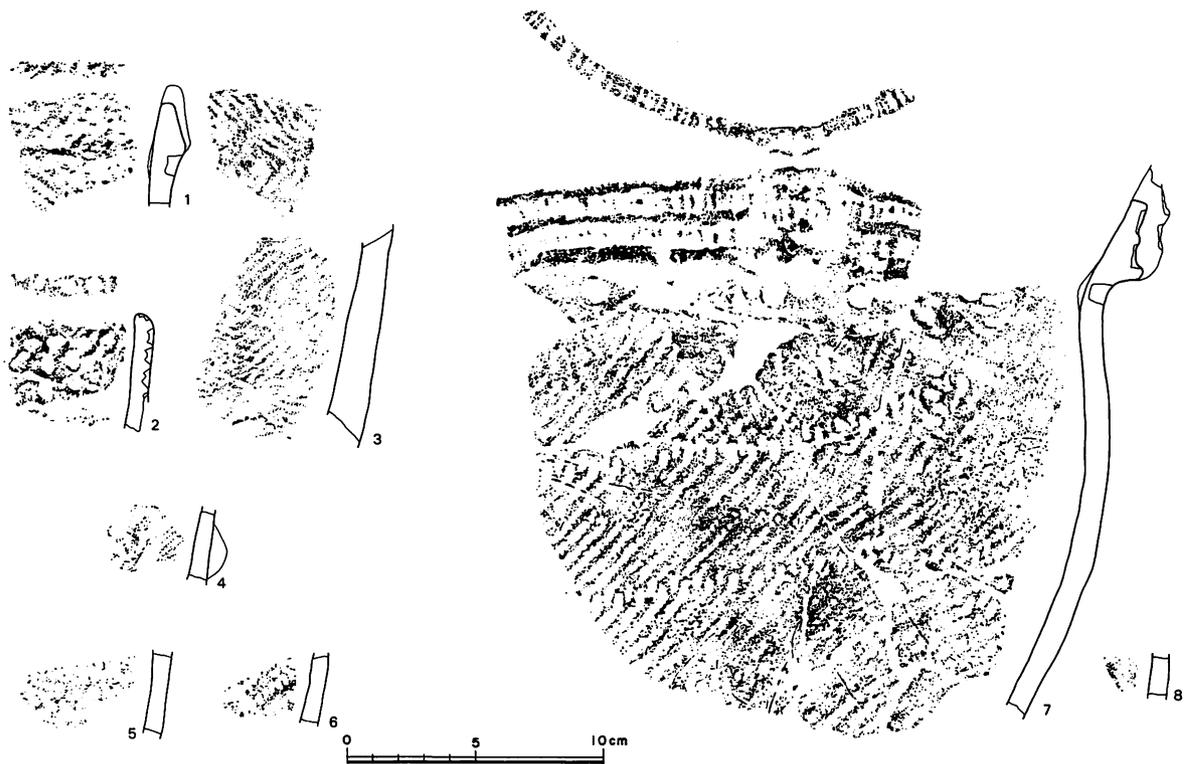
表Ⅲ-18 H-23出土遺物一覧

出土遺物	ナ	Ⅱ	北	背	小計	F	斧	斧	た	小計	礫	総計
覆土	3	14	17			2	1	1	1	3	3	25
5								1		1	1	2
床面	10	8	18			2					2	22
計	13	22	35			4	1	2	1	4	6	49

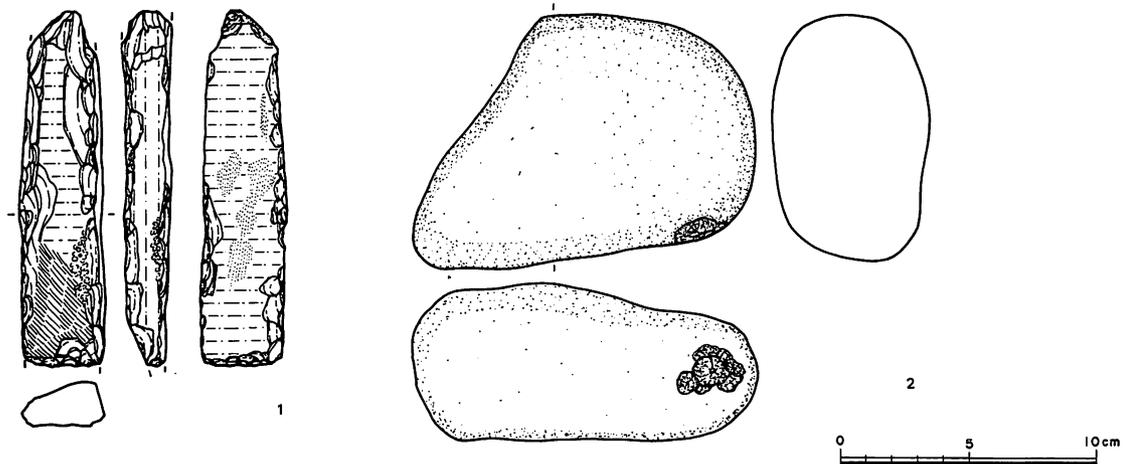
**遺物出土状況：**床面中央の深鉢7は、炭化物集中（6層）の下からつぶれた状態で出土した。その他の床面出土遺物はライン a-b の北側に集中する。7（3層）と5層出土の1点が接合。2（床面）と同床面出土の5点が接合。床面出土の6点と G<sub>1</sub>-63-35（1点）出土の土器片が同一個体。4（3層）と12・13（H-30・覆土）。複数の覆土に跨って接合例が存在することは覆土が比較的短かい期間に堆積したことを示している。

**時期：**床面にⅢ群 b-3 類土器が出土していることより、縄文時代中期後葉の遺構である。（鈴木）

**遺物：**土器 1～7はⅢ群 b-3 類土器、8はⅤ群 b 類の土器である。1は断面三角形をなす肥厚帯をもつもので、口唇と内面にも縄文が認められる。2は口縁に肥厚帯をもたず、口唇と口縁に列横位の円形の浅い刺突文を施し、口縁部には部分的に2列垂下する施文がみられる。柏木川式の特徴



図Ⅲ-59 H-23 出土の土器



図Ⅲ-60 H-23 出土の石器

を残すものとみられる。3は結束第2種の回転文のあるものである。4は貼瘤の認められるもので、H-30の12・13と同一個体に属する。5には浅い縄文、6にはやや深い縄文がみられるが、器壁が薄く、同一個体に属すものとみられる。7は比較的薄手のもので、口唇と口縁部に密に押し引き文を施している。器面には結束のある斜行縄文が施されている。器形には体部のふくらむ特色がある。8は文様の不明瞭な小片である。

石器 1は黒色片岩製石斧（平のみ形）で、平坦な主面のところどころに光沢がある。刃部は欠失している。2はカンラン岩たたき石で、亜角転礫の一端のみ使われている。

#### H-24（図Ⅲ-61～63、図版Ⅲ-37）

位置：G<sub>1</sub>-63-39、G<sub>1</sub>-64-30 標高23.5mの台地上に位置する。 規模：2.2m/1.9m×1.75m/1.45m×0.18m 平面形：長円形 床面積：2.17m<sup>2</sup> 長軸方向：N-53°-W

確認・調査・土層：Ⅱ黒層調査中に黒色土の落ち込みを検出した。遺構の可能性があると判断したのでトレンチを掘り調査した。調査の結果、平面が円形の小竪穴であることがわかった。

床面：床面は、d<sub>2</sub>をわずかに掘り込んでつくられていて凹凸がある。

壁：壁は急角度で立ち上がる。

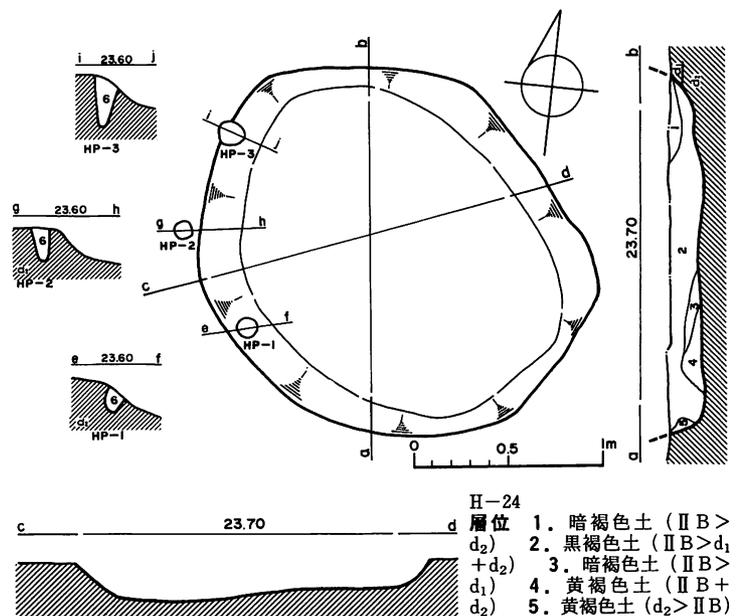
炉跡：炉跡は検出されなかった。

付属ピット：柱穴状小ピットが壁で2個、壁の外側で1個検出された。

遺物出土状況：出土した遺物の点数は少ない。床面直上から北海道式石冠が出土した。覆土からはⅢ群b-3類の北筒式土器、石斧未製品、たたき石、フレイク・チップが出土している。

時期：出土遺物から判断してⅢ群b-3類の北筒式土器の時期と思われる。（工藤）

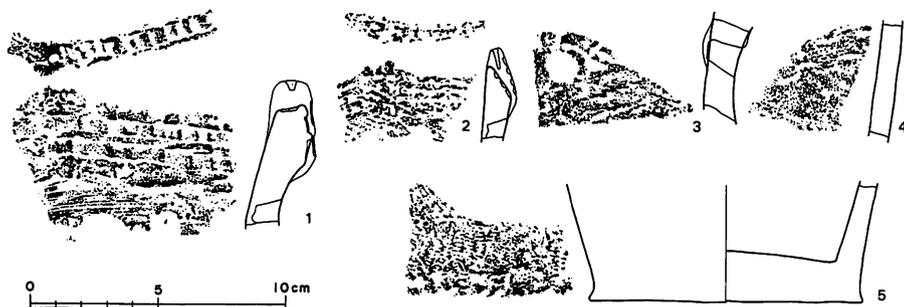
遺物：土器 1～5はⅢ群b-3類土器である。1は口縁に突起があり、口縁部に肥厚帯をめぐらし、口唇を平坦に調整していて、口縁部と口唇部にヘラ状工具による押し引き文を施している。突起の頂部には小さく浅い刺突を施している。肥厚帯下縁はなで調整がなされ円形文が配されている。2は小形のもので、赤色顔料の付着が認められる。口唇と口縁に押し引き文が施されている。3・4はともに二次焼成を受けたかと認められるもので、縄文は定かでない。4には結束第2種の原体が使用されている。5は底部の角が張り出す特色がある。縄文はLRの原体によるが、施文方向は不規則である。



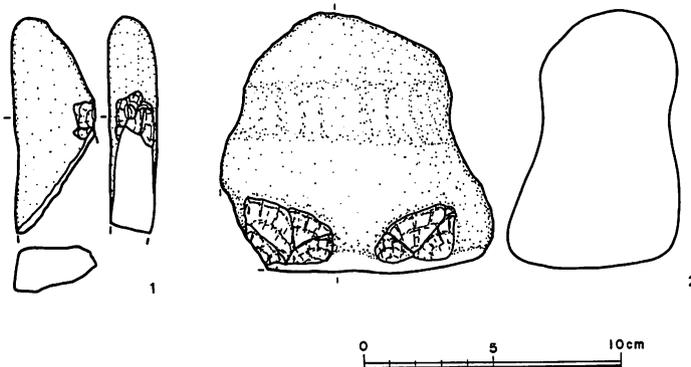
図Ⅲ-61 H-24 実測図

表Ⅲ-19 H-24出土遺物一覧

出土遺物	北 筒	F	F.C.	小計	芥末	たた	石冠	小計	破片	総計
覆土	13	4	2	6	1	2		3	1	23
床面上							1			1
計	13	4	2	6	1	2	1	3	1	24



図Ⅲ-62 H-24 出土の土器



図Ⅲ-63 H-24 出土の石器

比較的薄手である。

石器 1は緑色泥岩石芥末製品で棒状のやや扁平な転礫を表材としている。2は安山岩製北海道式石冠で頂部はやや尖がる。まわりに巡る溝は幅広である。使用面と側面のかどが剥落している。

**H-25** (図Ⅲ-64~66、図版Ⅲ-38)

**位置：** G<sub>1</sub>-64-45 北東から南西へ傾斜する斜面上に位置する。 標高は22.8m~22mである。

**規模：** 2.35m/2.13m×2.32m/2m×0.32m **平面形：** 卵形 **床面積：** 3.33m<sup>2</sup> **長軸方向：** N-84°-E

**確認・調査・土層：** G<sub>1</sub>-64-45の包含層調査中、Ⅱ黒層を10cmほど掘り下げたところでd<sub>1</sub>まじりの黒色土が円形状に見られ、そのまわりにd<sub>1</sub>>d<sub>2</sub>の揚げ土の広がり確認された。土層観察用のベルトに沿って小トレンチを入れ、床面、壁を確認する。覆土はd<sub>1</sub>>d<sub>2</sub>>ⅡBの混合土が約10cm、ⅡB>d<sub>1</sub>+d<sub>2</sub>の黒茶色土が約10cmほど堆積している。

**床面：** 南西側にゆるやかに傾斜している。凹凸があり、d<sub>2</sub>中に構築されている。南東側には炭化物が多量にみられた。 **壁：** 全体に急傾斜で立ち上がり、壁高は22cm~30cmである。

**付属ピット：** 柱穴状小ピットは10個検出されている。HP-9は床面にあり直立している。他は壁面中にあり、内傾している。覆土はⅡB+d<sub>1</sub>>d<sub>2</sub>である。卵形の頂上部にあたる部分には0.72m×0.54m深さ7cm~10cmの隅丸長形状の小ピットが検出されている。所謂先端ピットと呼ばれるも

のである。

炉跡：焼土などは検出されていない。

遺物出土状況：遺物は覆土中からの出土で、床面からは出土していない。

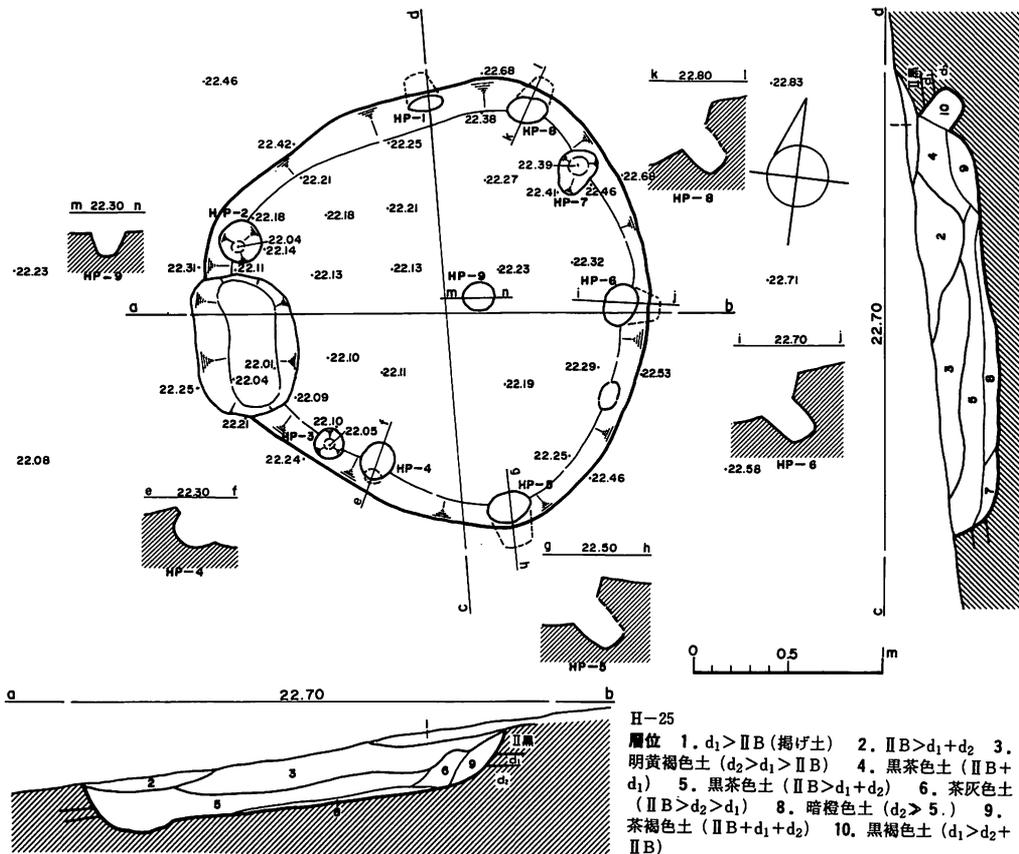
時期：掘り込み面はⅡ黒層中位である。周辺よりⅢ群b-3類土器が多く出土していることから、縄文時代中期後葉（北筒式期）の時期と思われる。

H-25の覆土上に見られた揚げ土状の土はH-26かH-30の揚げ土と考えられる。（和泉田）

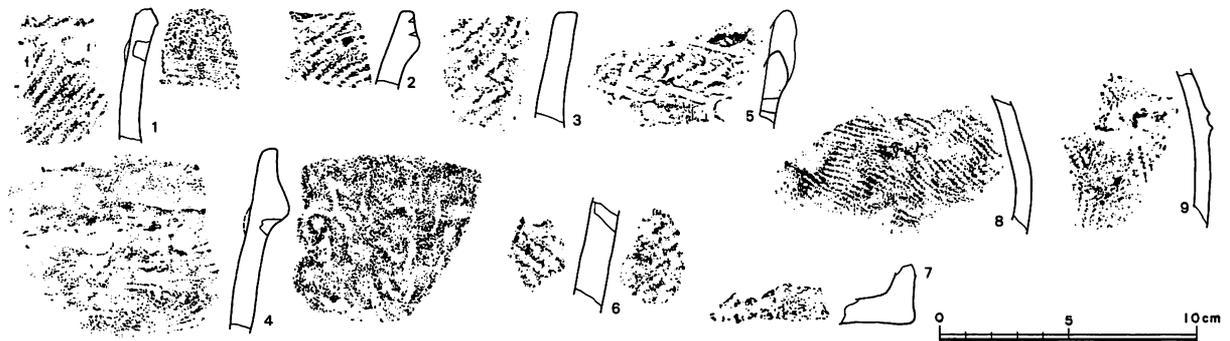
遺物：土器 1～9はⅢ群b-3類土器である。1は内外面ともヘラ削り調整され、口縁に粘土帯

表Ⅲ-20 H-25出土遺物一覧

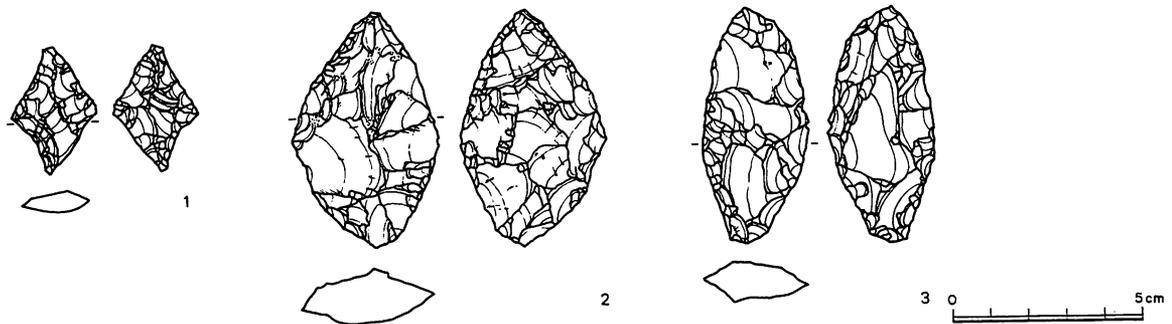
出土遺物	北筒	F	F.C.	小計	礫	総計
覆土	18	27	14	41	1	60



図Ⅲ-64 H-25 実測図



図Ⅲ-65 H-25 出土の土器



図Ⅲ-66 H-25 出土の石器

をかぶせ、口唇の断面を三角形になるように調整したものとみなされる。器面と口縁と、口縁部内面に縄文を施し、口縁にそって円形文を施す。内面には突瘤が形成されている。2は口縁に沿って断面三角形の肥厚帯をもつもので、口縁部は縄文を地として幅せまく、細長い刺突文が2列施されている。口縁の施文後、口唇から内面にかけて滑らかに調整がなされている。3は口唇が平坦になで調整され、器面に粗い斜行縄文の施されているもので、口縁に沿って幅せまく、斜行縄文が施されている。4は口縁のやや下に断面が山形をなす隆起帯があり、そこから口唇にかけては無文である。器面には斜行縄文に結束の回転文が加えられている。内面にもたてに施文されている。5は口縁に突起部のあるもので、口縁に沿って肥厚帯があり、斜行縄文と結束の回転文が加えられている。肥厚帯下に無文部があり、そこに円形文を施している。6は内面にも縄文の施されたもので、円形文がやや突きあげるように施されているものである。7は底面がほぼ平坦に調整されたものである。8はやや薄手で体部のふくらむ器形をもち、器面に細かい縄文をやや不規則に施するものである。胎土には繊維を含んでい

る。9はやはり薄手の土器で、体部のふくらむ器形をもち、体上部の位置に横走る隆帯があり、器面の縄文を施した後、隆帯上に斜方向からの刺突を加えている。器面の縄文は縦行気味で、施文の特色はノダップⅡ式の特徴を示している。8も同様のものと考えられる。

石器 1～3は石槍またはナイフ。1は最大幅が中位にある菱形にちかい小形のものである。2・3は厚みのある木葉形のものである。1～3は黒曜石製である。

**H-26** (図Ⅲ-67～69、図版Ⅲ-39)

**位置:** G<sub>1</sub>-64-44 標高23.1m～22.8mの緩傾斜地に位置する。 **規模:** 1.66m/1.3m×1.47m/1.17m×0.3m **平面形:** 長円形 **床面積:** 1.23m<sup>2</sup> **長軸方向:** N-S

**確認・調査・土層:** G<sub>1</sub>-64-44の包含層調査中、Ⅱ黒層を約10cmほど掘り下げたところで、円形状に黒色土(粘質)が検出され、その周辺に広がるⅡB < d<sub>1</sub>の揚げ土を確認する。土層観察用のベルトを設定し、黒色土を掘り下げる。黒色土の下にはⅡB > d<sub>1</sub>の黒茶色土が10cm～15cmあり、その下にⅡB > d<sub>1</sub> + d<sub>2</sub>の堅い混合土が10cm～15cm堆積しているのが確認される。

**床面:** 平坦で堅い。En-L層中に構築されている。構築面上には2cm～3cmほどの厚さのd<sub>1</sub> + d<sub>2</sub>の混合土があり、この上面が生活面と考えられる。

**壁:** 壁面は非常に堅い。急傾斜の立ち上がりで、壁高は20cm～30cmである。

**炉跡:** 焼土などは検出されていない。

**付属ピット:** 柱穴状小ピットは6個検出されている。壁外30cm～40cmのところをめぐるようにつくられ、覆土は軟質の黒色土で、すべて直立している。

**遺物出土状況：**南東側の覆土（土層3）と壁際（土層5）に流れ込みの状態で土器片、礫片が出土している。

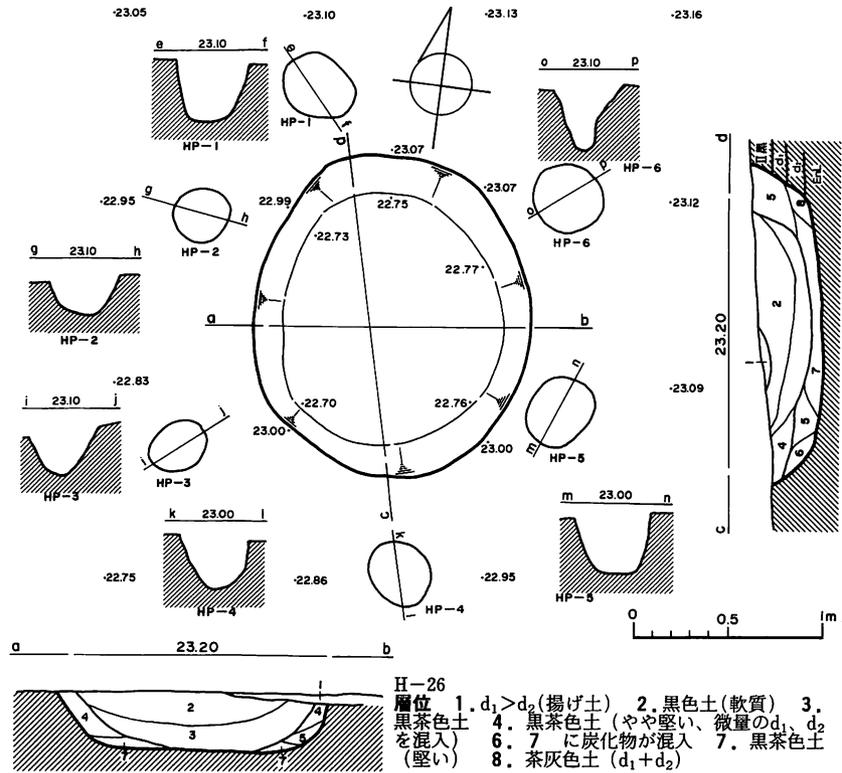
**時期：**掘り込み面はⅡ黒層上位である。周辺よりⅢ群b-3類土器が出土していることから縄文時代中期後葉（北筒式期）の時期と思われる。

本遺構は非常に小形のもので、住居跡とするにはちゆう踏されるが、貼床状の床面と、壁外の小ピットの検出などから、一応住居跡として報告する。（和泉田）

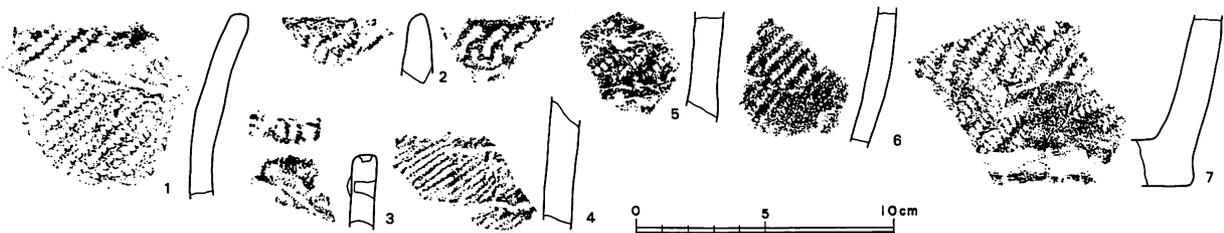
**遺物：**土器 1～7はⅢ群b-3類土器である。1は口縁部が大きく外反し、口唇の断面形は丸味をもっている。器面に斜行縄文に結節の回転文が加えられている。内面にやや凹凸がある。柏木川式の趣きがある。2は口縁部に肥厚帯のあるも

表Ⅲ-21 H-26出土遺物一覧

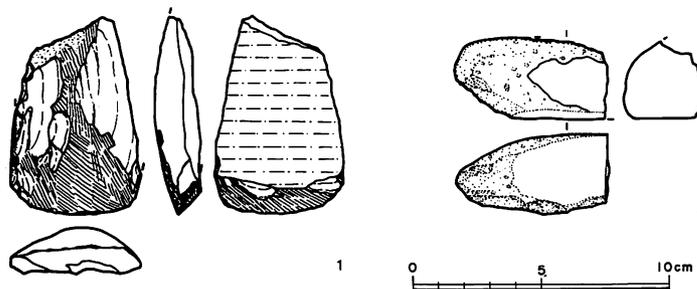
出土遺物	北筒	輪片	F	RF	UF	コ	F.C.	小計	石	礫	片	炭	すり	小計	総計
覆土	65	1	24	1	1	2	29	58	1	1	2	1	5	128	



図Ⅲ-67 H-26 実測図



図Ⅲ-68 H-26 出土の土器



図Ⅲ-69 H-26 出土の石器

ので、内外面に結束のある縄文が施されている。3は口縁が肥厚せず、器面に細かい縄文があり、口唇上に押し文風の刺突が加えられている。円形文は口唇に近い位置に施されている。4は斜行縄文に結節の回転文が施されている。5には縄文帯の縁に捺糸文風の圧痕がある。6は整った斜行縄文の施されているもの、7は粗い斜行縄文のある底部で、若干外側に張り出している。

石器 1は黒色片岩製石斧で、刃線には細かな刃こぼれがみられる。2は流紋岩すり石。棒状転礫を素材とする使用面には遺物の長軸と同じ方向の条痕が多数みられる。

H-27 (図III-70・71、図版III-40)

位置：G<sub>1</sub>-64-20・21・30・31 標高23.5mの台地上に位置する。 規模：(3.2)m/2.47m × 2.74m/2.12m × 0.2m 平面形：長卵形 床面積：4.77m<sup>2</sup> 長軸方向：N-9°-W

確認・調査・土層：G<sub>1</sub>-64-21・31の包含層調査中、II黒層を2回掘り下げたところで竪穴南縁を確認し、G<sub>1</sub>-64-30ではII黒層を3回掘り下げたところで竪穴西縁の北半を確認した。他はII黒層を2回掘り下げたところで確認できた。覆土は遺物を多く含む暗褐色土(2層)を主体とする。掘り込み面はII黒層を2回掘り下げた面より上位と思われる。

床面：平坦で、d<sub>2</sub>上面を床面とする。 壁：直線的に外上方向へ立ち立がる。

炉跡：先端から約2/3奥壁側の中央に炭化物の集積が検出された。この集積はしっかり固まっており、流れ込んだ様子はみられない。

付属ピット：柱穴状小ピットは壁面に5個検出できた。HP-1・2は深さが平均30cmあり、ほぼ垂直に掘られている。

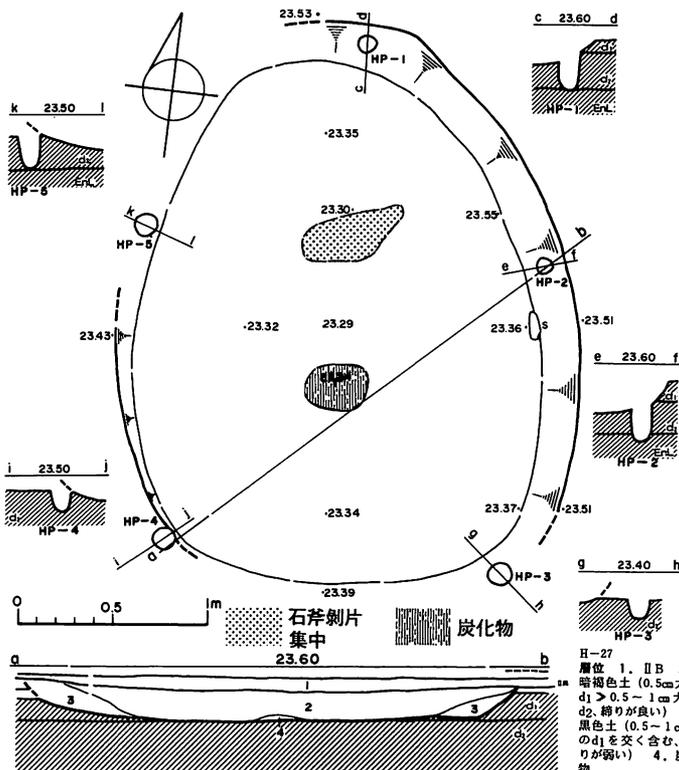
遺物出土状況：遺物はほとんどが2層から出土している。床面からは出土していない。本遺構埋没後、石斧製作の場として利用されていたことを推測させるような、片岩石斧未製品、フレイクの集中が2層上面で検出された。4(2層)と同層出土の1点、2(3層)と同層出土のもの1点、2層出土の1点と3層出土の2点がそれぞれ同一個体。3(1層)他3点と22(P-21覆土)が同一個体。このように複数の覆土に跨って同一個体が存在することは、覆土が比較的短い期間に堆積したことを示している。

時期：覆土中にIII群b-3類土器を含むことより、縄文時代中期後葉の遺構である。(鈴木)

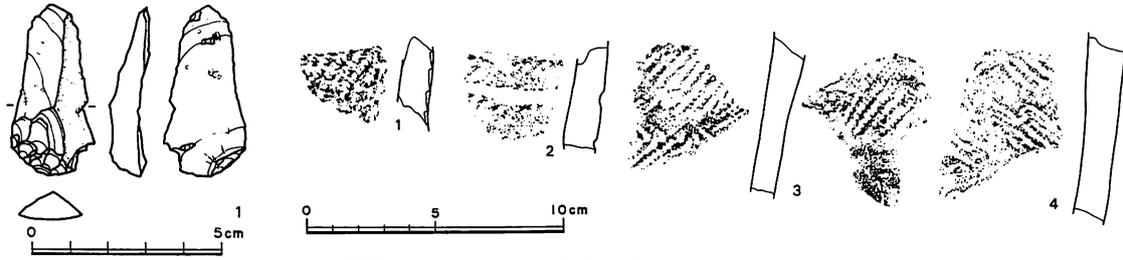
遺物：土器 1~4はIII群b-3類土器である。1は浅く施された縄文地に縦位に押し文が施されている。2はやや

表III-22 H-27出土遺物一覧

出土遺物	北	筒	器	F	RF	UF	F.C.	小計	硯	斧	小計	礫	総計
覆土2	10	1		62	2		32	97	1	16	17		124
3	6			1		1		2				1	9
4					1			1					1
計	16	1		63	3	1	32	100	1	16	17	1	134



図III-70 H-27 実測図



図Ⅲ-71 H-27 出土の土器と石器

厚手であるが、浅い縄文を地として、横位に三条沈線文となっているが、押し引き文の痕跡のある文様を施している。3には結束第1種の羽状縄文、4には結束の回転文が加えられている。

石器 1はスクレイパーである。自然面を残す縦長剥片を素材とし、背面の下縁に加工が施されている。黒曜石製である。

H-28 (図Ⅲ-72・73、図版Ⅲ-40)

位置：G<sub>1</sub>-64-43 標高23m付近の斜面肩口に位置する。 規模：2.17m/1.53m×1.91m/1.31m×0.1m 平面形：長楕円形 床面積：2.04m<sup>2</sup> 長軸方向：N-43°-E

確認・調査・土層：d<sub>1</sub>中の遺構検出作業によって竪穴プランを確認した。覆土はプラン確認が遅れたため、一層のみが残ったに過ぎない。掘り込み面は覆土中にd<sub>1</sub>が混じっていることからd<sub>1</sub>の上位と思われる。

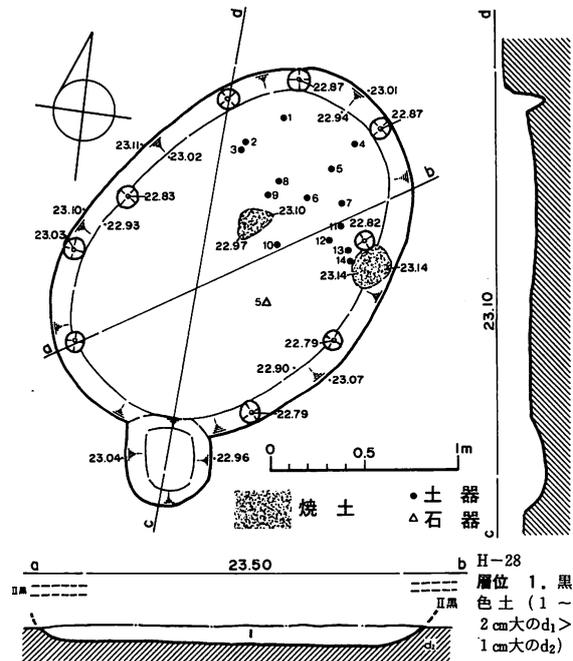
床面：平坦で、d<sub>2</sub>を約10cm掘り込んでつくられている。 壁：内湾しつつ外上方向へ立ち上がる。

付属ピット：柱穴状小ピットは壁面に9個検出できた。小ピットは平均18cmの深さで、ほぼ垂直に掘られている。竪穴南側には付属ピットが確認された。また竪穴中央部の床面から10cm上の覆土中から黒曜石のフレイク集中が、東側からは焼土が検出された。これらは竪穴がある程度埋った時期に営まれた遺構と思われる。

遺物出土状況：床面遺物はラインa-bより北側に多く分布する。覆土出土の1点と、G<sub>1</sub>-64-63 (13点)、G<sub>1</sub>-64-44 (2点) G<sub>1</sub>-64-53 (1点) 出土の土器片とが接合する。

時期：床面からⅢ群b-3類土器が出土していることより、縄文時代中期後葉の遺構である。なお、黒曜フレイク集中、焼土検出面は、V群b類の小形鉢形土器の破片が周囲のグリット出土の同期土器片と接合することから、縄文時代晩期中葉の時期のものかと思われる。(鈴木)

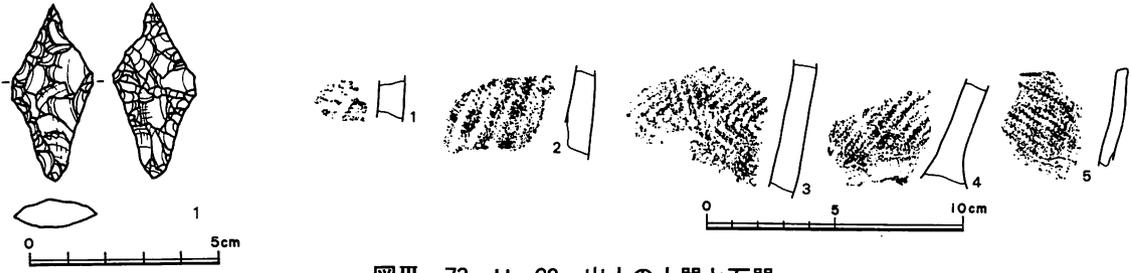
遺物：土器 1~4はⅢ群b-3類土器、5は



図Ⅲ-72 H-28 実測図

表Ⅲ-23 H-28出土遺物一覧

出土遺物	北	南	Vb	小計	石輪	F	F.C.	小計	断片	総計
覆土	6	1		7		33	51	84	1	92
床面	5			5	1	6	1	8		13
焼土							4	4		4
計	11	1	12	1	39	56	96	1	109	



図III-73 H-28 出土の土器と石器

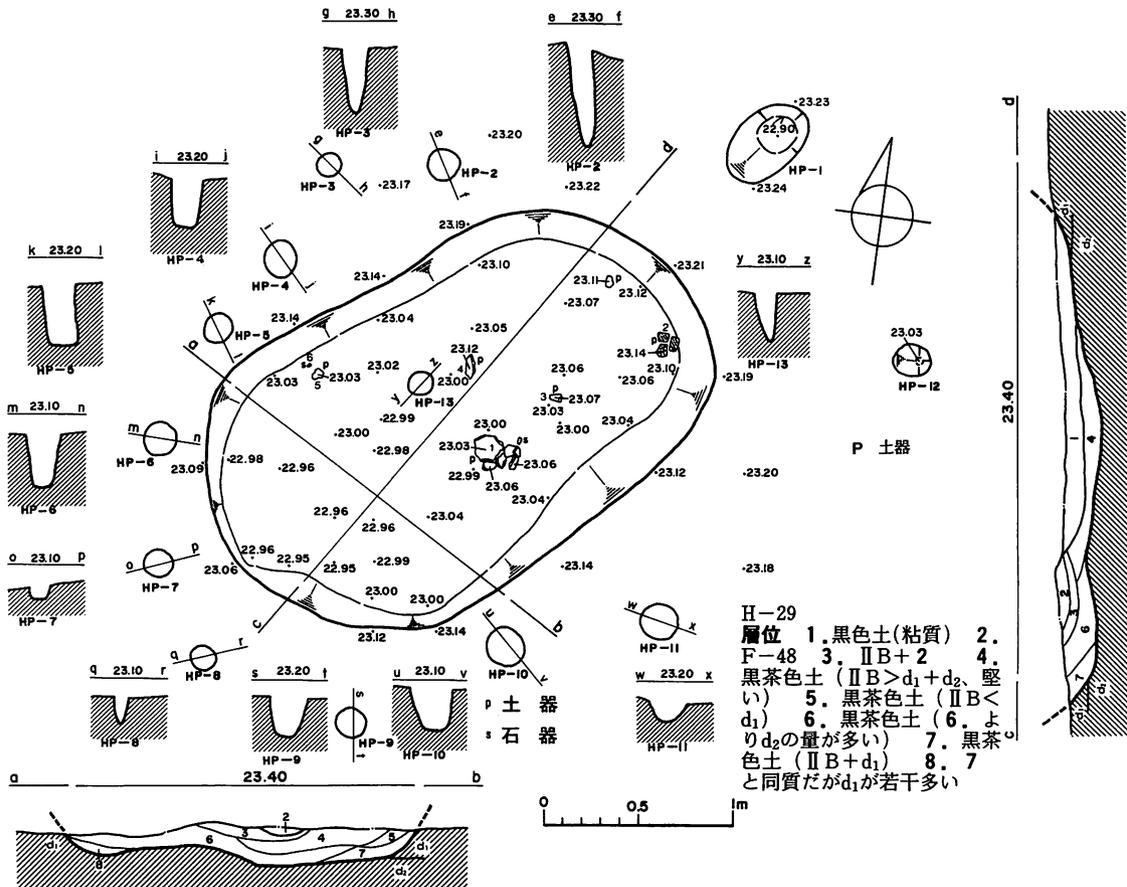
V群b類土器である。1は結束第2種の原体による施文がみられる。2は斜行縄文のみられる小片で二次焼成を受けたためか器面が赤変している。3には結束第1種の羽状縄文があり、内面には器面調整の際の擦痕が認められる。4は底部破片で下端がなで調整されて縄文が一部消されている。5は小形の浅鉢形土器の口縁部の破片である。同一個体の破片が周辺の包含層に認められる。

石器 1は石槍またはナイフで、最大幅は中位にある。黒曜石製である。

H-29 (図III-74・75、図版III-41・42)

位置：G<sub>1</sub>-64-34 標高23.1m付近の緩斜面に位置する。 規模：2.76m/2.58m×1.66m/1.31m×0.18m 平面形：隅丸長方形 床面積：3.01m<sup>2</sup> 長軸方向：N-48°-E

確認・調査・土層：G<sub>1</sub>-64-34の包含層調査中、II黒層を10cmほど掘り下げたところで、隅丸方形



図III-74 H-29 実測図

状の黒色土が確認され、この東～南東側に  $d_1 + d_2$  の揚げ土の広がり確認された。土層観察用のベルトを設定し、黒色土を掘り下げる。黒茶色土を10cm～15cmほど下げたところで土器が一括出土し、その周辺にも遺物が散らばっており、黒茶色土の下を床面として調査を行う。

**床面：**南西側は風倒木痕の影響により、盛り上がっており、全体的に凹凸が見られる。軟質で、 $d_2$  を浅く掘り込んで構築されている。

**壁：**全体にゆるやかな立ち上がりで、断面は皿状である。北側の壁は不明瞭である。

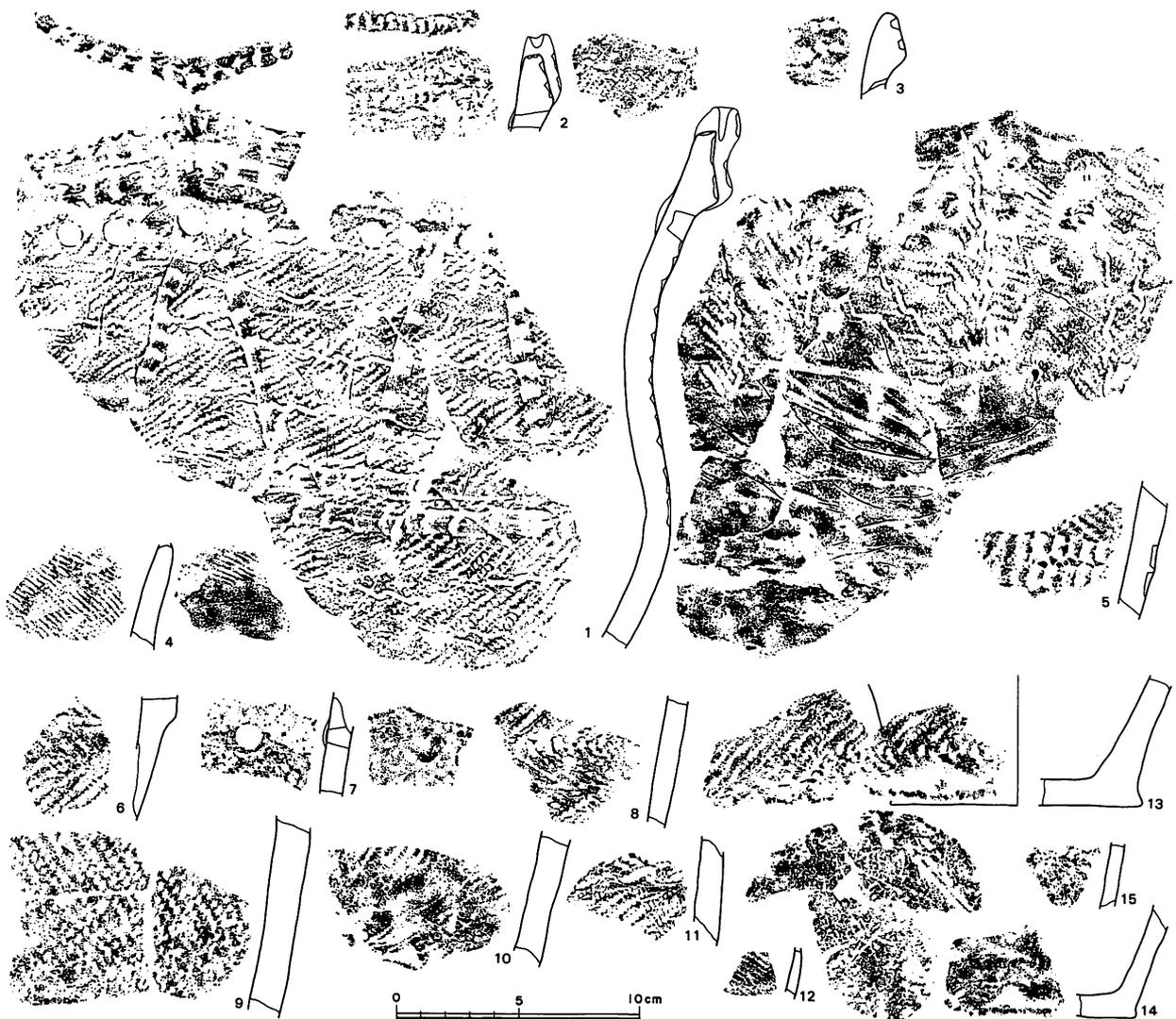
**炉跡：**焼土などは検出されていない。

**付属ピット：**柱穴状小ピットは、壁外に12個、床面で1個検出されている。全て直立しており、覆土は黒褐色土か暗褐色土で、やや粘質である。HP-2、3は細く、先端がとがり、打ち込んだように深い。HP-13は主柱穴と考えられる。

**遺物出土状況：**床面中央部から、内面を上にし、押しつぶされた状態で、土器が一括出土している。

**時期：**掘り込み面は不明である。ただF-46、47、48が覆土上で検出されており、これらが縄文時代中期のものであり、また周辺からⅢ群b-3類土器が出土していることから、縄文時代中期後葉(北筒式期)の時期と思われる。

風倒木痕の浅いくぼ地を利用したものと思われる。(和泉田)

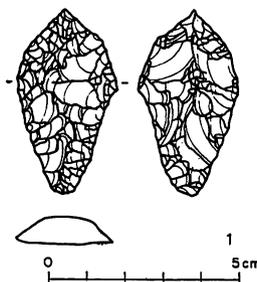


図Ⅲ-75 H-29 出土の土器

表Ⅲ-24 H-29出土遺物一覧

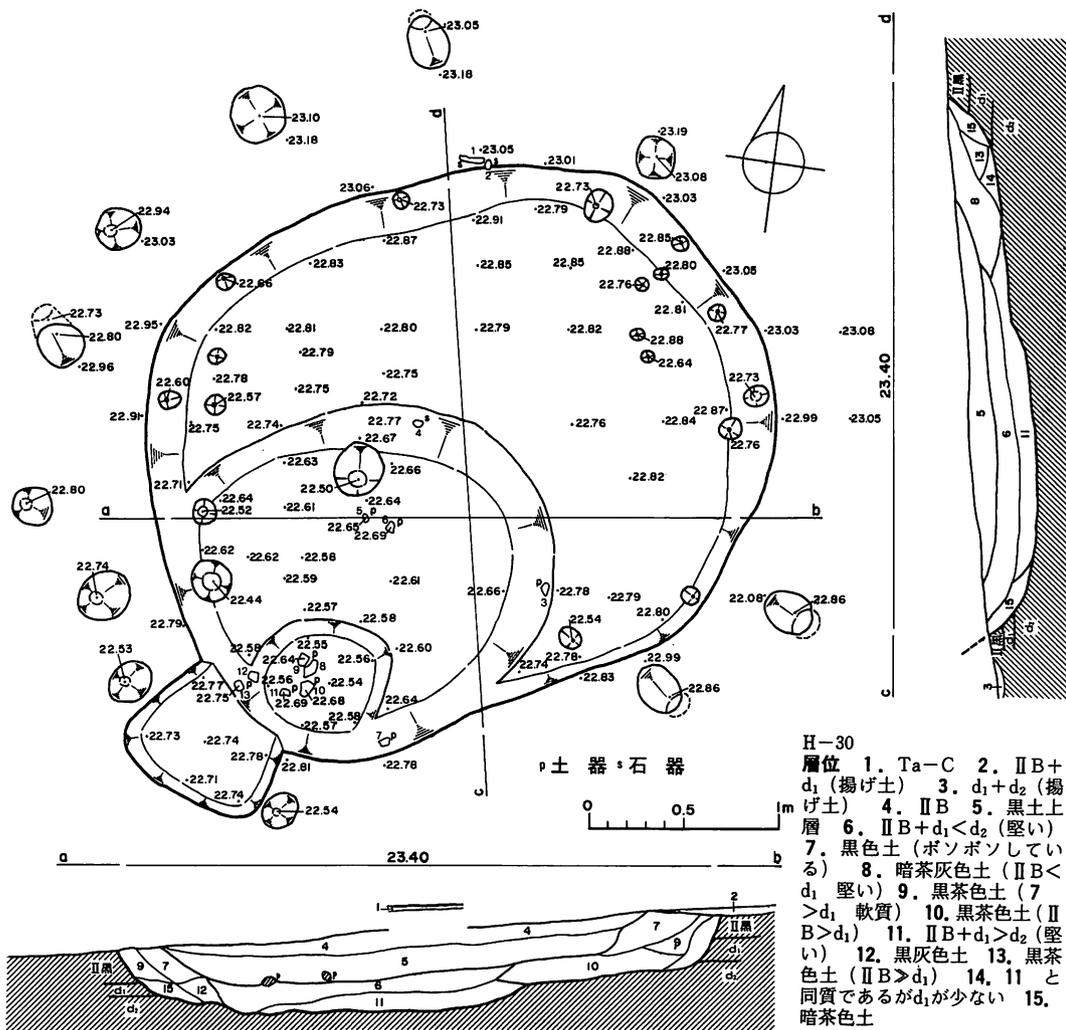
(45×10)

出土遺物	北	Vb	小計	石輪	石器	F	RF	UF	UF	F.C.	小計	斧	礫	燧石	総計
覆土中層	69	1	70	1	1	63	1	1	1	96	164	11	3	1	249
覆土下層						8				6	14				14
床面直上	17		17									1			18
床面	5		5			4					4	1			10
計	91	1	92	1	1	75	1	1	1	102	182	13	3	1	291



図Ⅲ-76 H-29 出土の石器

遺物：土器 1～15はⅢ群b-3類土器である。1は口縁部、口唇部、体上部に押し引き文の施されるもので、地文は縄文に結束の回転文を加えたものである。器面の押し引き文は鋸歯状の文様を構成し、下部を2列の押し引き文で画している。口縁内面にも縄文が施されている。器形は体部の強くふくれる特色をもっている。2は口縁に肥厚帯をもち、口縁部と口唇部には押し引き文を加えている。3は口縁に小突起のあるもので、口縁の肥厚帯に、2列の押し引き文風の刺突文を施している。4は無節の縄文の施されたもので口縁部の内面にも施されている。5は体部の破片で、縄文地に横位2列の押し引き文を施している。6は体部に隆起帯のあるもので、隆起帯上にも縄文が施されている。7は粗い斜行縄文のみられるもので、8には結束羽状縄文、9には複節の縄文、10には細かい斜行縄文、11には結束



図Ⅲ-77 H-30 実測図

の回転文がみられる。12は細かい縄文の施された薄手の土器で、H-25の8と同一の個体に属するものとみなされる。13は結束羽状縄文の施された底部破片で、外側へ強く張り出る傾向がある。器面の縄文はなで調整によりつぶれている。14は無文の底部破片である。15は浅く、粗い縄文のつけられていたとみられるもので、二次焼成によるためか表面の剥落の著しいものである。

石器 1は石槍またはナイフで、身の両側縁は丸味を帯びる。最大幅は中位にある。黒曜石製。

H-30 (図Ⅲ-77~79、図版Ⅲ-41・43)

位置：G<sub>1</sub>-64-34・35・44・45 北東から南西にゆるやかに傾斜する斜面に位置する。標高は23.2m~22.7mである。 規模：3.18m/2.83m×2.73m/2.48m×0.3m

平面形：隅丸長方形 床面積：6.21m<sup>2</sup> 長軸方向：N-72°-E

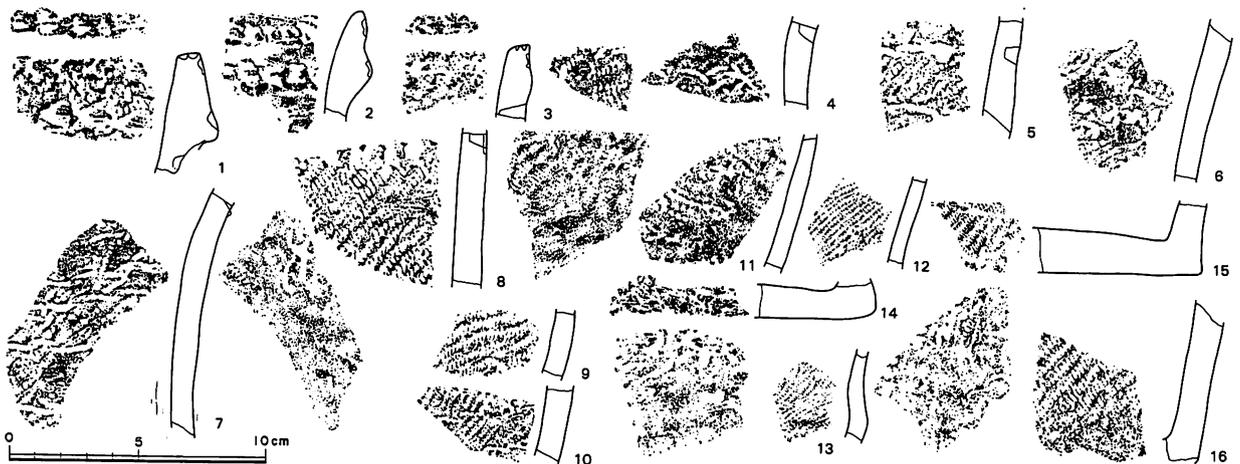
確認・調査・土層：G<sub>1</sub>-64-35の包含層調査中、G<sub>1</sub>-64-45↔35ラインの断面でⅡ黒層中からの落ち込みを検出する。このためG<sub>1</sub>-64-34、44、45のⅡ黒層を順次掘り下げ、10cm~15cm掘り下げたところで長円形状の黒色土の輪郭を検出する。またこの東~南側に揚げ土の広がりも確認する。土層観察用のベルトを設定し、黒色土、ⅡB+d<sub>1</sub><d<sub>2</sub>を除去した時点で、南西側に円形状の落ち込みがあり、この中から遺物が多数出土する。覆土上層は堅く、覆土下層は南西側の一段くぼんだところにあり、ⅡB+d<sub>1</sub>>d<sub>2</sub>で堅く、10cmほどの層厚がある。

床面：全体に南西側にゆるやかに傾斜する。凹凸があり、d<sub>2</sub>中に構築されている。南西側は1.62m×2m×0.1mの長円形状に落ち込んでいる。更に南西コーナーには0.7m×0.7m×0.1mの小ピットがある。所謂先端ピットと思われる。この壁際には0.8m×0.6mの長方形の段状部分が検出されている。

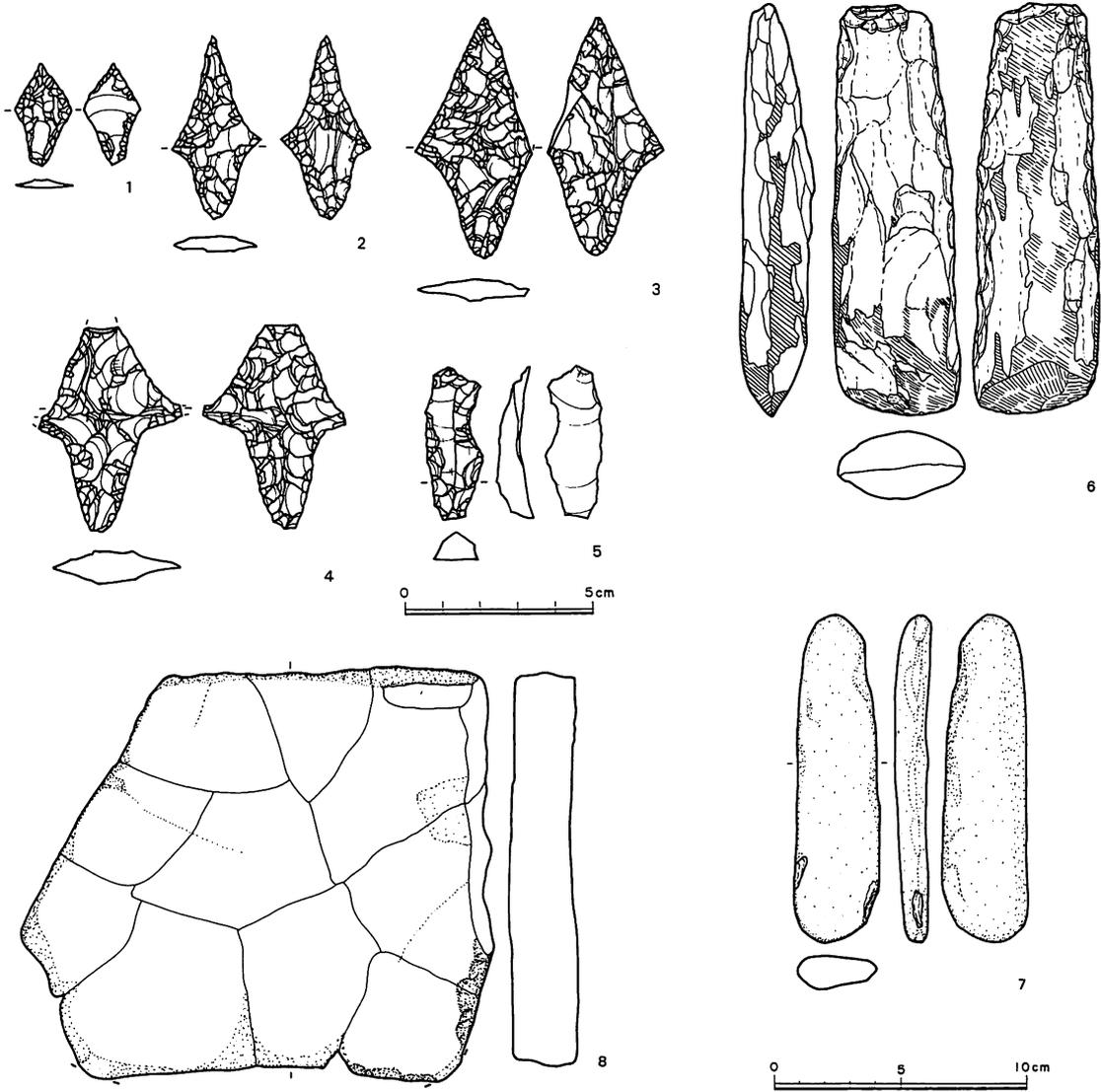
壁：西壁は急傾斜の立ち上がりで、南、北壁はゆるやかな立ち上がりである。壁高は0.22m~0.3mである。

表Ⅲ-25 H-30出土遺物一覧

出土遺物	ノダ	北	小	石	石	槍	片	器	F	RF	F.C.	小	石	珠	片	釘	瓦	石	小	礫	片	総計
覆土上層	2	71	73	1	3	1			140	1	147	293				3			3	1	2	372
覆土中層					1				8			9			1				1			10
覆土下層		18	18					1	23		11	35			1		4	1	6			59
床面直上		1	1						15			15	1	1						2		18
床面		2	2						2			2										4
計	2	92	94	1	4	1			188	1	158	354	1	1	2	3	4	1	12	1	2	463



図Ⅲ-78 H-30 出土の土器



図Ⅲ-79 H-30 出土の石器

**炉跡：**焼土などは検出されていない。

**付属ピット：**柱穴状小ピット29個検出されている。HP-1～10は壁外にあり、覆土はⅡB < d<sub>1</sub>の暗灰色土である。HP-4、8、9、10は内傾しているが、他は浅いくぼみ状である。HP-11～21は壁面中にあり、直立している。覆土は軟質の黒茶色土である。HP-22～26、29は、径約10cm、深さ10cmほどの抗状のものである。HP-27は主柱穴と考えられる。

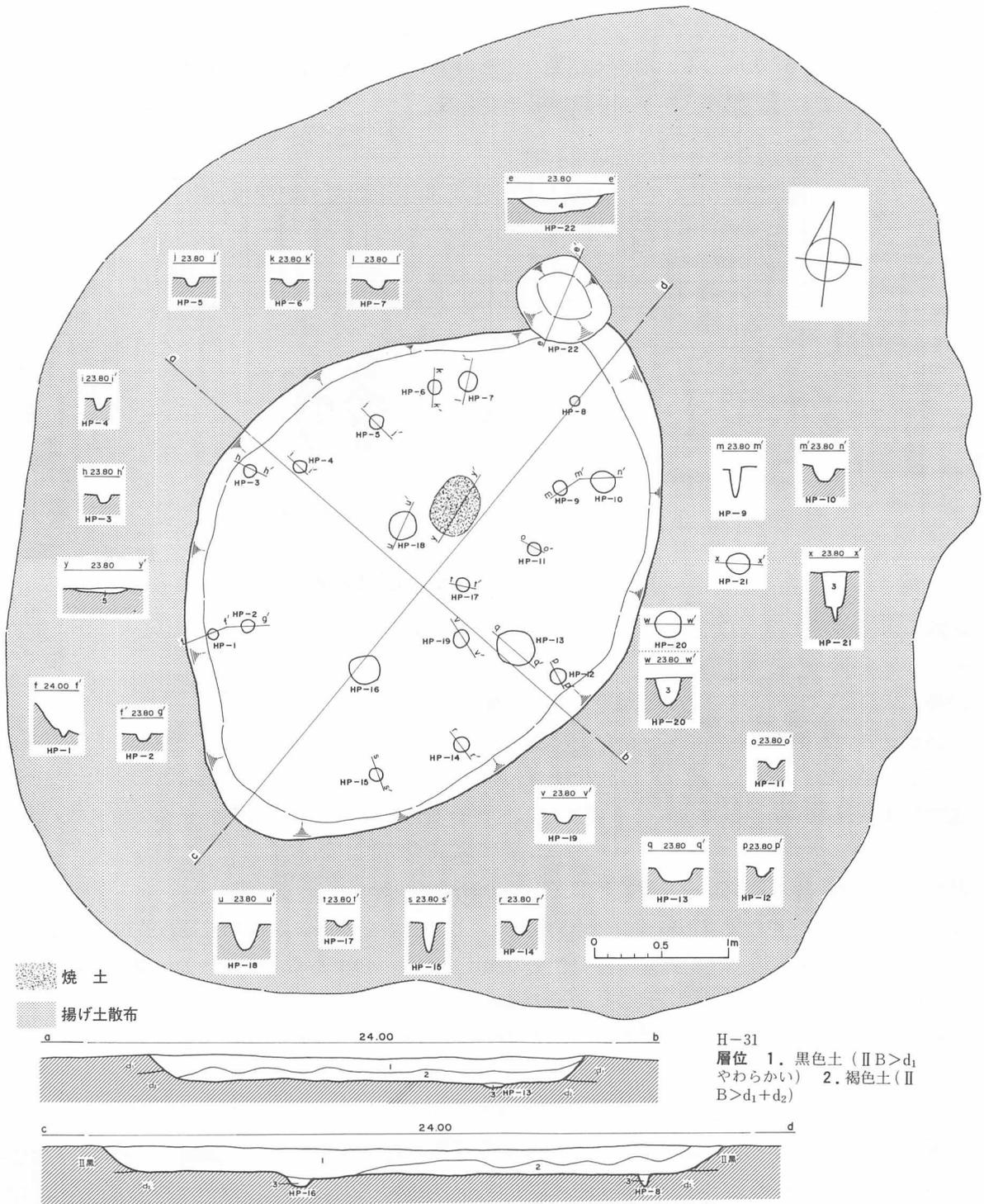
**遺物出土状況：**主に南西側の一段低いところ、特に先端ピット中でかたまって出土している。

**時期：**掘り込み面はⅡ黒層上位である。出土土器はⅢ群b-3類土器であることから、縄文時代中期後葉（北筒式期）の時期と思われる。（和泉田）

**遺物：土器** 1～16はⅢ群b-3類土器である。1は口縁の肥厚帯に縄文を地として、ヘラによる押し文風の刺突を加えるものである。口唇上にも刺突文が加えられている。2は口縁に沿う位置と、やや下の位置に押し文を加えるものである。3は口縁部と口唇部に同一の施文具による押し文の施されたものである。4・5・7・10は器面に縄文を施し結束の回転文を加えている。5の器面には爪によるかともみられる不規則な圧痕がある。6には縄端の圧痕とみられる文様がある。8は横位に押

引き文を施すものである。9・11～13はやや薄手のものでノダップⅡ式的である。14～16は底部で14・15はやや外側へ張り出す。

石器 1は有茎鏃。主剥離西側は基部と尖端部にのみ加工が施されている。2～4は石槍またはナイフ。いずれも最大幅が中位にあり、茎部と身の境が明瞭に区別されている。2は身の両側縁が湾入して細くなっている。5はスクレイパーで、縦長の剥片を素材とし、背面の周縁に加工が施されている。右側縁の上部にはえぐり込みがある。1～5はすべて黒曜石製である。6は黒色片岩製石斧で、



図Ⅲ-80 H-31 実測図

主面は敲打調整を経ず研磨調整を行う。7は黒色片岩石斧素材。扁平な棒状転礫の端部を使用面としたたたき石に用いる。8は細粒砂岩砥石で粒子はそろっていないがよく固結している。色調は灰白色を呈する。板状の断面形をもつ。

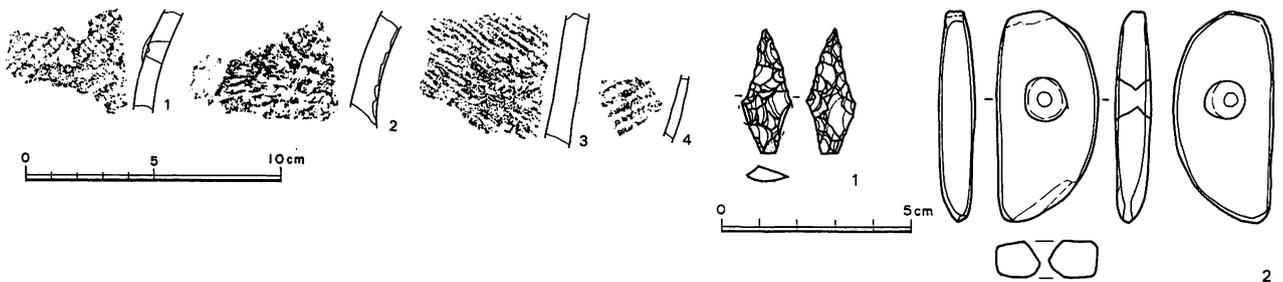
**H-31** (図Ⅲ-80・81、図版Ⅲ-44)

**位置**：G<sub>1</sub>-63-74、75、84、85 標高24mの台地上に位置する。 **規模**：4.6m/4.1m×3.2m/2.85m×0.2m **平面形**：楕円形 **床面積**：8.97m<sup>2</sup> **長軸方向**：N-32°-E

**確認・調査・土層**：Ⅱ黒層上部の調査中黒色土の落ち込みが検出され、その周囲には遺構の掘り上げ土と考えられるd<sub>1</sub>が広がっていたため、東西南北の2本のトレンチを掘って調査した。黒色土を掘り下げるとd<sub>1</sub>とd<sub>2</sub>の混じった褐色土があり、その下でd<sub>2</sub>の面に達し、床面と壁を検出して竪穴であることを確認した。掘り込み面はⅡ黒層上部である。

表Ⅲ-26 H-31出土遺物一覧

出土遺物	北筒	Vb	小計	石鏃	槍片	F	UF	F.C.	小計	斧	垂飾	礫	砥片	総計
覆土	25	1	26	1	1	28	1	61	92	2	1		1	122
床面	4		4											4
焼土								61	61			5		66
計	29	1	30	1	1	28	1	122	153	2	1	5	1	192



図Ⅲ-81 H-31 出土の土器と石器

**床面**：床はd<sub>2</sub>をわずかに掘り込んでいて、ほぼ平坦である。

**壁**：壁は緩やかに立ち上がる。

**炉跡**：床面の中央からやや北側で焼土が1か所検出された。

**付属ピット**：北側の先端部にピットが1基検出された。柱穴状小ピットは竪穴の内側に19個、外側に2個検出されている。

**遺物出土状況**：遺物点数は少なく散点的な出土状態であった。床面ではⅢ群b-3類土器が出土している。

**時期**：出土遺物からⅢ群b-3類の北筒式土器の時期と判断される。(工藤)

**遺物**：土器 1~4はⅢ群b-3類土器である。1は円形文のあるもので、補修孔のあけかけた痕跡がある。2は地文の上に斜方向の押し文の加えられたものである。3は無節の縄文のあるもので原形はRとみられる。4は斜行縄文のみみられる小片である。

**石器** 1は有茎鏃で、黒曜石製である。2は緑色泥岩製垂飾で主面・側面とも若干凸面状を呈している。

**H-32** (図Ⅲ-82、図版Ⅲ-45)

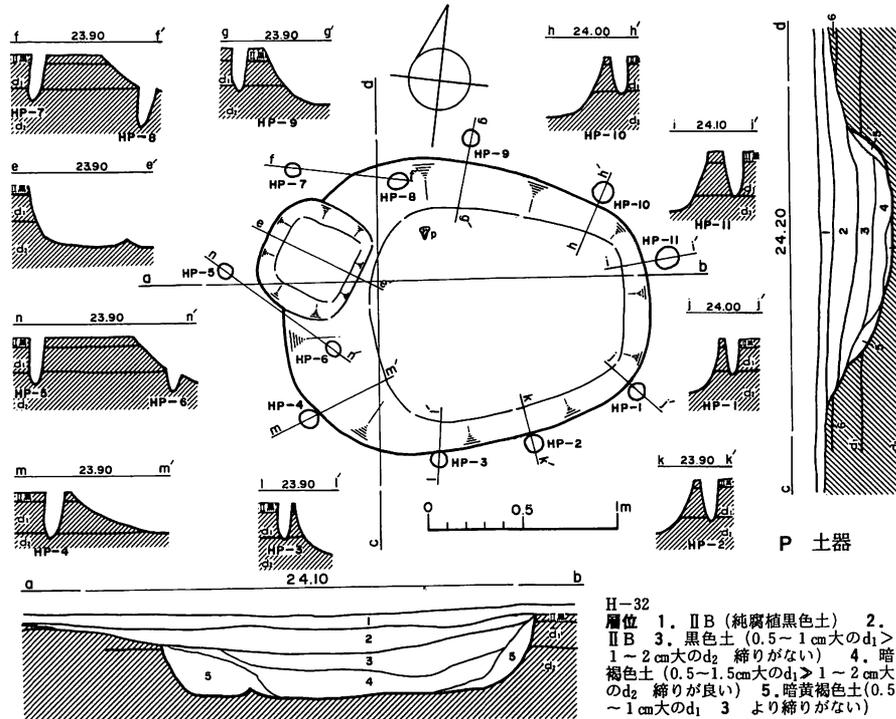
**位置**：G<sub>1</sub>-63-22・23・32・33 標高23.7mの台地上に位置する。 **規模**：1.95m/1.55m×1.33m/1.33m×0.35m **平面形**：隅丸台形状 **床面積**：1.23m<sup>2</sup> **長軸方向**：N-85°-E

**確認・調査・土層**：G<sub>2</sub>-63-23の包含層調査中、Ⅱ黒層純腐植黒色土層を除去し、遺構検出作業に

よって竪穴プランの南東部分を確認し、Ⅱ黒層を2回掘り下げたところで他のプランを確認する。覆土は3～5層と流れ込み土(2層)で構成される。掘り込み面はⅡ黒層を2回掘り下げた面である。  
**床面**：平坦で、 $d_2$ を約26cm掘り込んでつくられている。 **壁**：内湾しつつ上方向に立ち上がる。

表Ⅲ-27 H-32出土遺物一覧

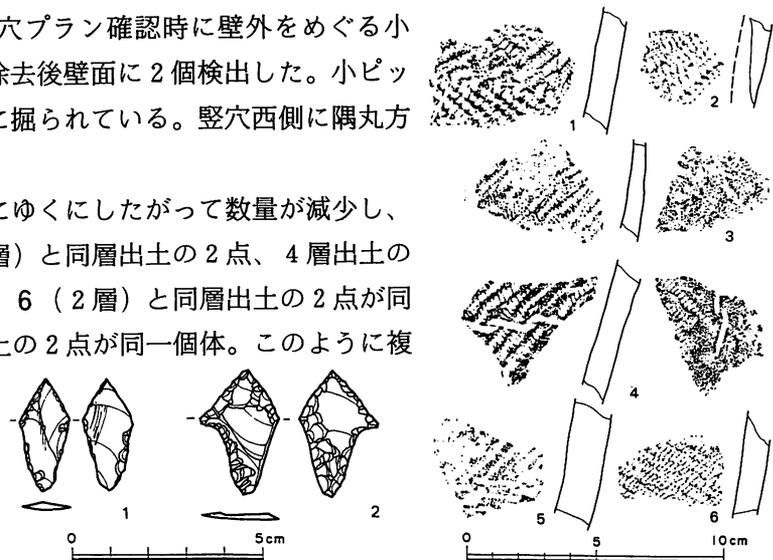
出土遺物	北筒	Na	小計	石鏃	石槍	F	RF	F.C.	小計	すり	礫	総計
覆土2	3	3	6	1	2	2		11	16	1	3	26
3	8		8			3		3	6			14
4	8		8									8
5	3		3				1		1			4
計	22	3	24	1	2	5	1	14	23	1	3	52



図Ⅲ-82 H-32 実測図

**付属ピット**：柱穴状小ピットは竪穴プラン確認時に壁外をめぐる小ピットを9個検出する。また覆土除去後壁面に2個検出した。小ピットは平均18cmの深さで、ほぼ垂直に掘られている。竪穴西側に隅丸形状の付属ピットを検出する。

**遺物出土状況**：遺物は2層から下にゆくにしがって数量が減少し、床面では出土していない。2(3層)と同層出土の2点、4層出土の2点、5層出土の1点が同一個体。6(2層)と同層出土の2点が同一個体。2層出土の1点と3層出土の2点が同一個体。このように複



図Ⅲ-83 H-32 出土の土器と石器

数の覆土に跨って同一個体が存在することは、覆土が比較的短い期間に堆積したことを示している。

**時期：**覆土下層にⅢ群 b-3 類土器が含むことより、縄文時代中期後葉の遺構である。(鈴木)

**遺物：**土器 1~5はⅢ群 b-3 類土器、6はⅣ群 a 類土器である。1は結束羽状縄文の施されたものである。2・3は斜行縄文のみられるもの、4・5は結束の回転文の加えられているものである。6は内面が平坦に調整され、器面にはLRの原体と縦位に施文した縄文がみられる。

**石器** 1・2は有茎鏃。1は薄手の剝片を素材とし、背面、主剝離面側ともに周縁にのみ加工が施されている。2も剝片の周縁にのみ加工が施されたものである。1・2は黒曜石製である。

**H-33** (図Ⅲ-84、図版Ⅲ-46)

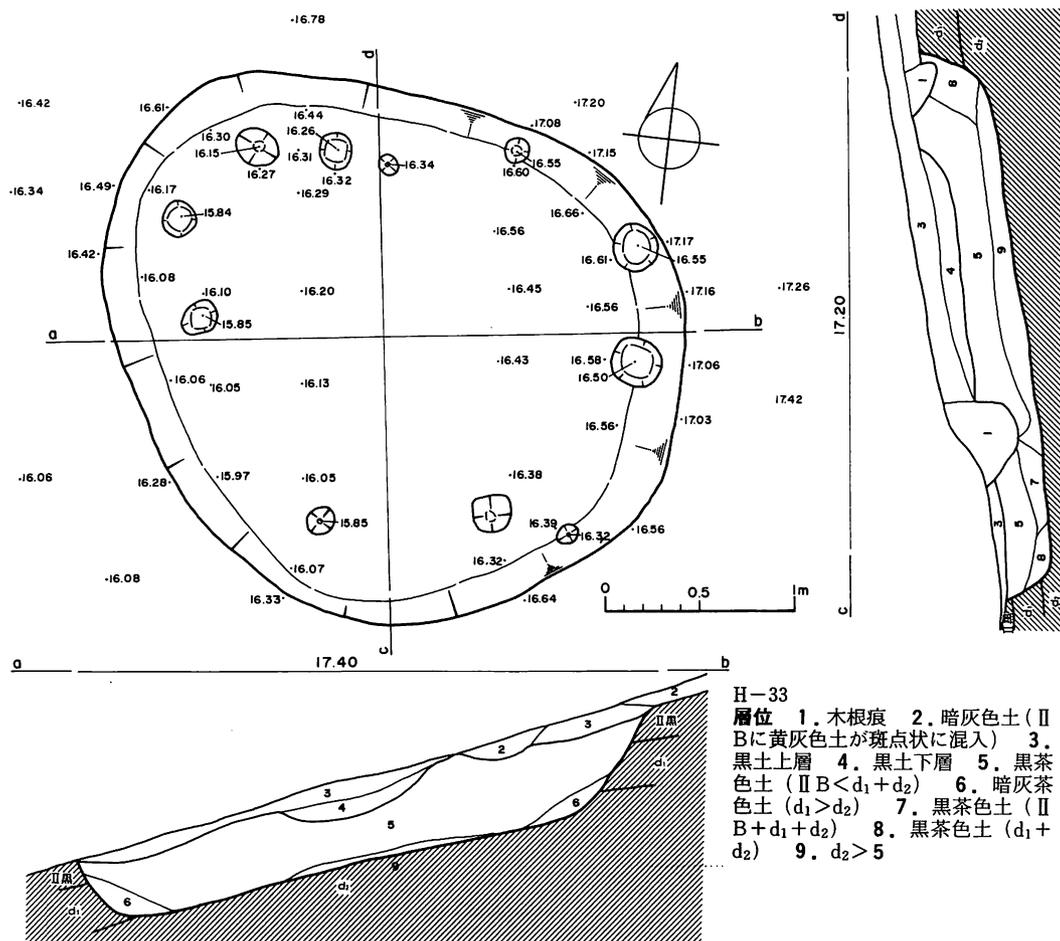
**位置：**G<sub>2</sub>-64-04・05・14・15 北東から南西に傾斜する斜面に位置する。 標高は17.2m~16.2mである。 **規模：**3.23m/2.87m×2.77m/2.46m×0.41m **平面形：**卵形 **床面積：**5.36m<sup>2</sup> **長軸方向：**N-47°-W

**確認・調査・土層：**G<sub>2</sub>-64-15周辺の包含層調査中、Ⅱ黒層を5cm~10cm掘り下げたところで、Ⅱ黒にd<sub>1</sub>の黄灰色土が斑点状に混入する土が広がり、円形状にⅡ黒を多く残す部分が確認された。土層観察用のベルトを設定し、それに沿って小トレンチを入れ、床、壁の検出作業を行う。覆土は厚く、ほぼ30cm~40cmの層厚のあるd<sub>1</sub>+d<sub>2</sub><ⅡBの混合土である。

**床面：**西側に傾斜し、やや凹凸がある。d<sub>2</sub>中に構築されている。

**壁：**全体に急傾斜の立ち上がりで、北、東壁高は約40cm、南、西壁高は20cm~30cmである。

**炉跡：**焼土などは検出されていない。



図Ⅲ-84 H-33 実測図

**付属ピット**：柱穴状小ピットは11個検出されている。壁際と床面から検出され、全体に浅く、直立している。覆土はⅡB +  $d_2 < d_1$  で汚れている。東壁際にある2個はやや内傾している。

**遺物出土状況**：覆土、床面からの出土遺物はない。

**時期**：掘り込み面はⅡ黒層上位である。周辺よりⅢ群b-3類土器が出土していることから、縄文時代中期後葉（北筒式期）の時期と思われる。

H-33はH-34を切っけられている。（和泉田）

**H-34**（図Ⅲ-85、図版Ⅲ-46）

**位置**：G<sub>2</sub>-64-04・05 北東から南西へ傾斜する斜面に位置する。標高17.3m～16.6mである。

**規模**：(2.3)m /

(1.83)m × 1.94m / 1.55m ×

0.37m **平面形**：楕円形 **床面積**：2.14m<sup>2</sup> **長軸方向**：N-42°-W

**確認・調査・土層**：H-33の調査中、南東壁に落ち込みが確認される。G<sub>2</sub>-64-05のⅡ黒層を5cm～10cmほど掘り下げ、ⅡB > 暗灰黄色土（斑点状）のところで長円形状の黒褐色土を検出する。土層観察用のベルトを設定し、覆土を掘り下げ、床、壁を確認する。覆土は $d_1 + d_2$ の混合土で、厚く堆積する。

**床面**：南西側に傾斜し、凹凸がある。 $d_2$ 中に構築されている。

**壁**：全体に急傾斜の立ち上がりである。東壁高は約30cm、南、西壁高は約20cmである。

**炉跡**：焼土などは検出されていない。

**付属ピット**：柱穴状小ピットは壁際、壁面中に5個検出されている。覆土はⅡB <  $d_1 + d_2$ で汚れている。すべて内側に傾いている。

**遺物出土状況**：床面、覆土から遺物は出土していない。

**時期**：時期を決定し得る遺物は出土していない。掘り込み面はⅡ黒層下位である。また周辺よりⅢ群b-3類土器が出土していることから、縄文時代中期後葉（北筒式期）の時期と思われる。

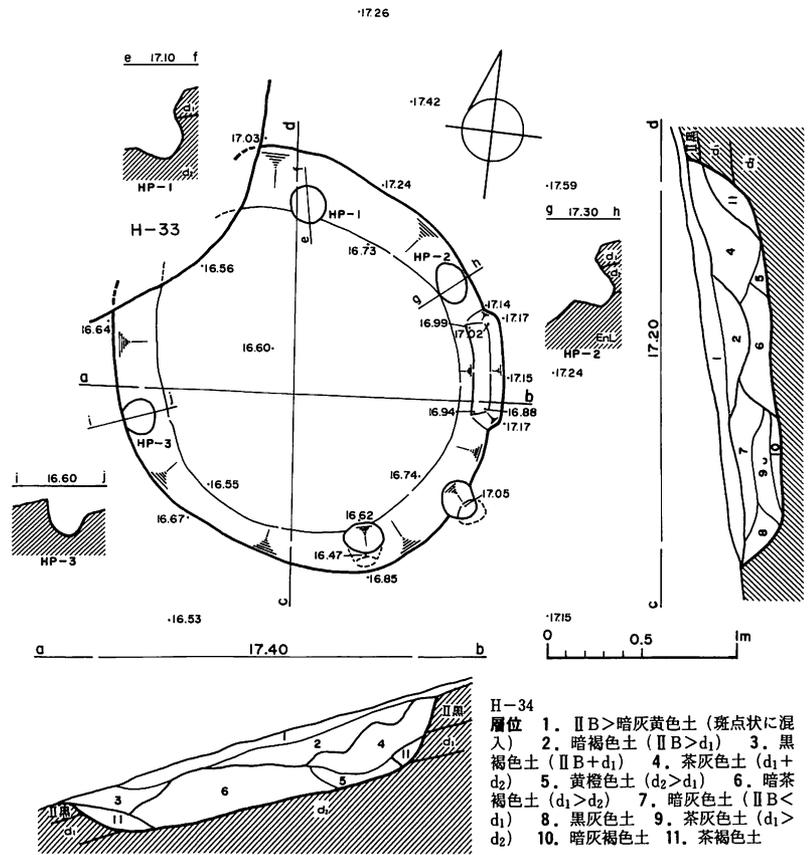
東壁に、0.6m × 0.15mの長形状の段状のものが検出されている。また本遺跡はH-33に切られ、H-37を切っけ構築されている。（和泉田）

**H-36**（図Ⅲ-86・87、図版Ⅲ-46）

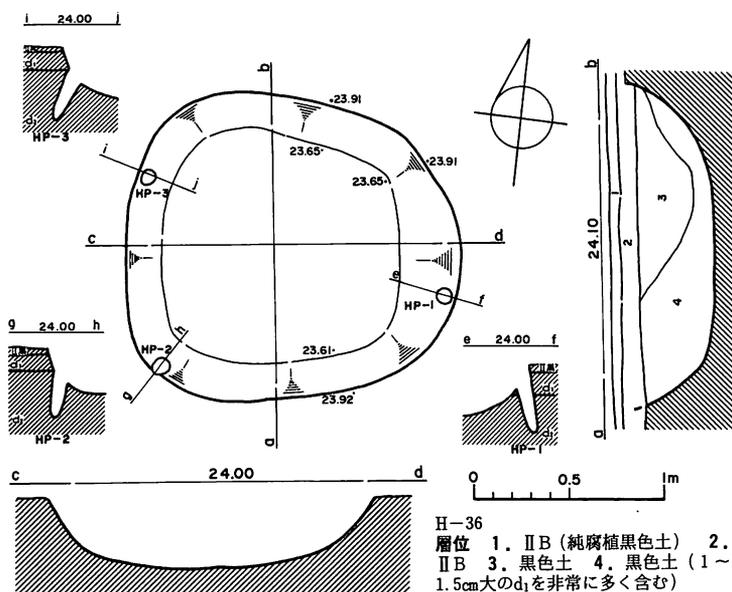
**位置**：G<sub>2</sub>-63-02、12 標高23.7mの台地上に位置する。

**規模**：1.78m / 1.63m × 1.25m /

1.21m × 0.45m **平面形**：卵形 **床面積**：1.31m<sup>2</sup> **長軸方向**：N-84°-E



図Ⅲ-85 H-34 実測図



図Ⅲ-86 H-36 実測図

表Ⅲ-28 H-36出土遺物一覧

出土遺物	煉瓦	台	北	筒	小計	F	斧	末	斧	た	台	石	小計	総計
覆土3	1		19		20	18	1	2	3	1		7	45	
4			4		4								4	4
計	1		23		24	18	1	2	3	1		7	49	



図Ⅲ-87 H-36 出土の土器と石器

ように複数の覆土に跨って同一個体が存在することは、覆土が比較的短い期間に堆積したことを示している。また、接合関係から、H-21とH-36は煉瓦台式期の頃にほぼ埋っていたことを示している。

**時期：**覆土下層にⅢ群b-3類土器を含むこと、H-21と土器の接合関係があることから、縄文時代中期後葉の遺構である。(鈴木)

**遺物：**土器 1~3はⅢ群b-3類土器である。1は斜行縄文のやや不規則に施されたもの、2は結束第2種の回転文の加えられたものとみられる。3は整った斜行縄文の施されたもので、煉瓦台式の趣きがある。H-21の資料と接合する。

石器 1は凝灰岩たたき石(?)。楕円礫を素材とする。風化が著しい。

**H-37** (図Ⅲ-88、図版Ⅲ-46)

**位置：**G<sub>2</sub>-64-05 北東から南西に傾斜する斜面に位置する。標高は17.4m~16.5mである。

**確認・調査・土層：**G<sub>2</sub>-63-12の包含層調査中、Ⅱ黒層を2回掘り下げ、遺構検出作業によってプランの北側を確認し、3回掘り下げたところでプランの南側を確認する。覆土は壁際の流れ込み土が見られず、大部分は4層の黒色土(1cm~1.5cm大のd<sub>1</sub>を非常に多く含む)である。掘り込み面はⅡ黒層2回目掘り下げよりも上位である。

**床面：**平坦で、d<sub>2</sub>を約15cm掘り込んでつくられている。 **壁：**内湾しながら外上方へ立ち上がる

**付属ピット：**柱穴状小ピットは壁面に3個検出できた。小ピットの深さは平均37cmで、床面に対する角度は約73°である。内側に傾いている。

**遺物出土状況：**床面からの遺物出土はなく、ほとんど3層からの出土である。1(3層)と同層出土の2点、4層出土の2点は同一個体。3(3層)とH-21覆土上層出土の1点とが接合する。この

規模：2.44m / 2.08m ×  
1.66m / 1.4m × 0.37m  
平面形：略卵形 床面積  
：(2.27) m<sup>2</sup>

長軸方向：N - 37° - E  
確認・調査・土層：H - 34の調査中、南東壁に落ち込みが検出される。G<sub>2</sub> - 64 - 05のⅡ黒層を15cm ~ 20cmほど掘り下げたところで、H - 34に切られているが揚げ土の広がり確認される。土層観察用のベルトを設定し、揚げ土状の土を掘り下げる。長円形状のⅡ B + d<sub>1</sub> + d<sub>2</sub>の混合土を検出する。混合土を除去し、床、壁の検出作業を行なう。覆土は黒褐色土の混合土で、ほぼ床面上まで厚く堆積している。一度に堆積した状況を示している。

床面：南側に傾斜している。平坦である。E<sub>n</sub> - L中に構築されている。

壁：全体に急傾斜の立ち上がりで、北、北東壁は深い。

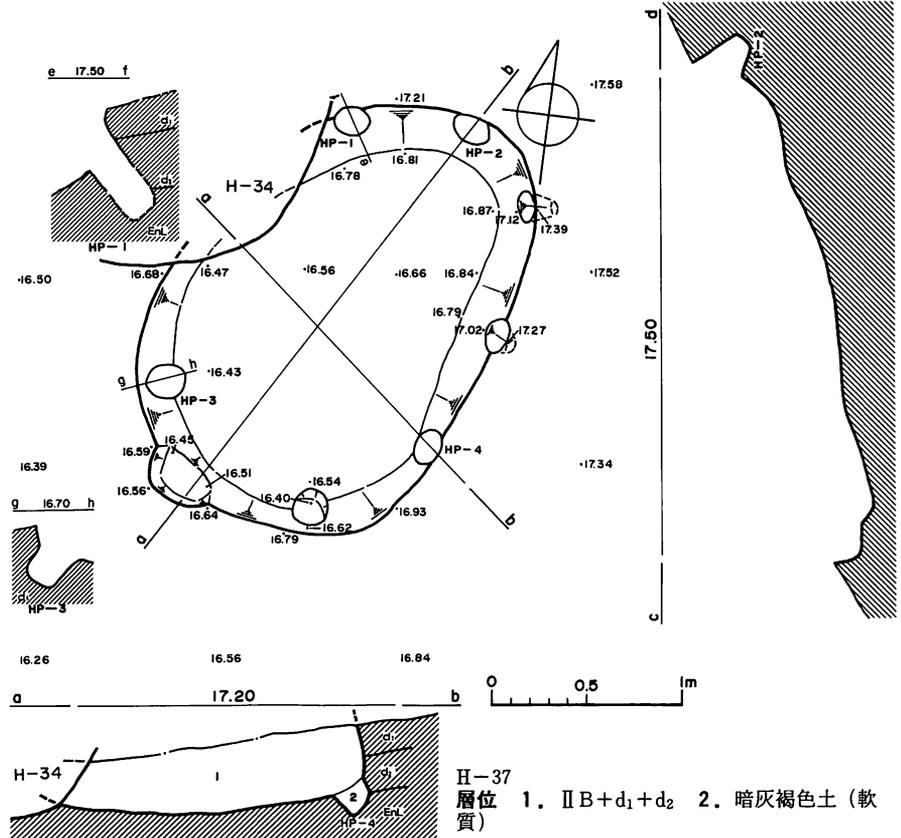
炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：柱穴状小ピットは壁面中に7個検出されている。覆土はd<sub>1</sub> + d<sub>2</sub>あるいはⅡ B + d<sub>1</sub>で汚れた土である。すべて内側に傾いている。

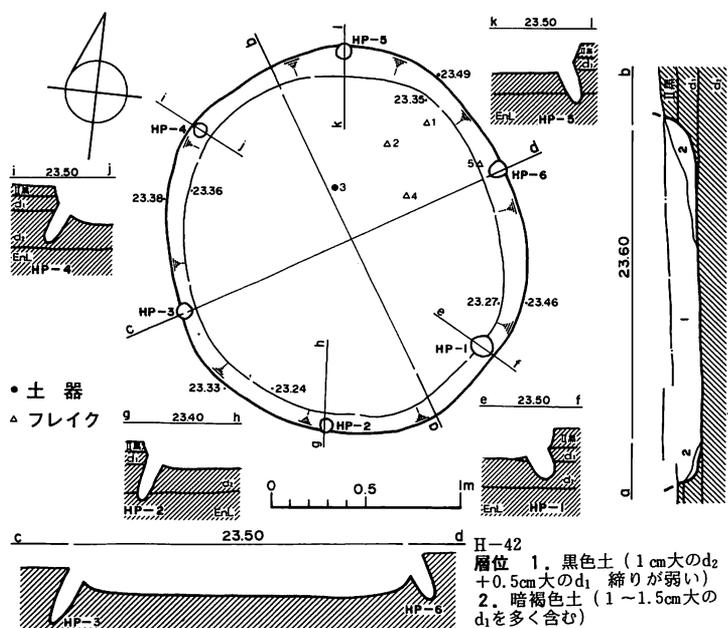
遺物出土状況：床面、覆土から遺物は出土していない。(和泉田)

時期：時期を決定し得る遺物は出土していない。掘り込み面はⅡ黒層下位(d<sub>1</sub>直上)である。周辺からⅢ群b - 3類土器が出土していることから、縄文時代中期後葉(北筒式期)の時期と思われる。

南西壁に浅い段状のものが検出されている。本遺跡はH - 34に切られている。



図Ⅲ-88 H-37 実測図



図Ⅲ-89 H-42 実測図

表Ⅲ-29 H-42出土遺物一覧

出土遺物	刀	北	小	F	斧	片	片	小	礫	総計
覆土	2	10	12	5		1	1	2	2	21
2		7	7	1						8
床面		1	1	3	1			1		5
計	2	18	20	9	1	1	1	3	2	32

H-42 (図Ⅲ-89、図版Ⅲ-47)

位置：G<sub>2</sub>-63-36・37 標高約23.3mの斜面肩口に位置する。 規模：2.05m/1.85m×1.83m/1.59m×0.14m 平面形：円形 床面積：2.42m<sup>2</sup>

確認・調査・土層：Ⅱ黒層を2回掘り下げたところで竪穴プランを確認する。覆土は壁際の流れ込み土(2層)と遺物を多く含む黒色土(1層)で構成される。

床面：平坦で、d<sub>2</sub>を床面としている。 壁：内湾しながら上方へ立ち上る。

付属ピット：柱穴状小ピットは壁面に6か所検出できた。小ピットの深さは平均20cmで、床面に対する角度は65°で、内側に傾いている。

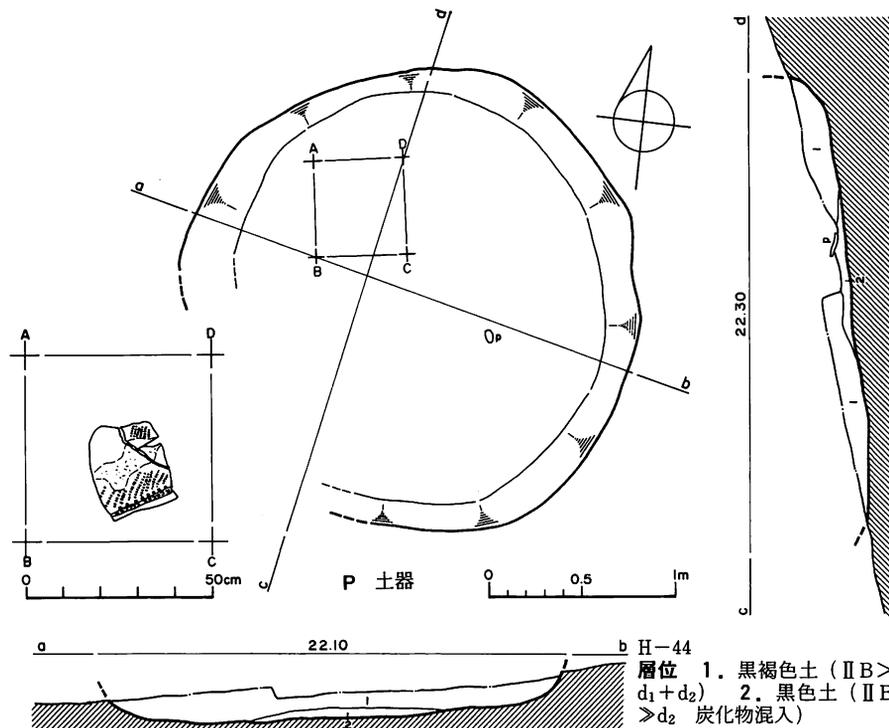
遺物出土状況：床面遺物は竪穴北東側に多く分布している。1層出土の3点と2層出土の1点が同一個体である。このように複数の層に跨って同一個体が存在することは覆土が比較的短い期間に堆積したことを示している。

時期：覆土中にⅢ群b-3類土器が含まれることから、縄文時代中期後葉の遺構である。(鈴木)

H-44 (図Ⅲ-90・91、図版Ⅲ-47・48)

位置：G<sub>1</sub>-64-73 標高約22.5m、台地縁の緩斜面に位置する。 規模：2.5m/2.1m×(2.3m/(2.0)m×0.25m 平面形：略円形 床面積：3.42m<sup>2</sup> 長軸方向：N-70°-W

確認・調査・土層：d<sub>2</sub>まで掘り下げた段階で黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みの南側斜面にはEn-aパミスが多量に認められたことから風倒木痕と考えていたが、調査の結果、風倒木痕を切っ



図Ⅲ-90 H-44 実測図

てつくられた住居跡であることがわかった。

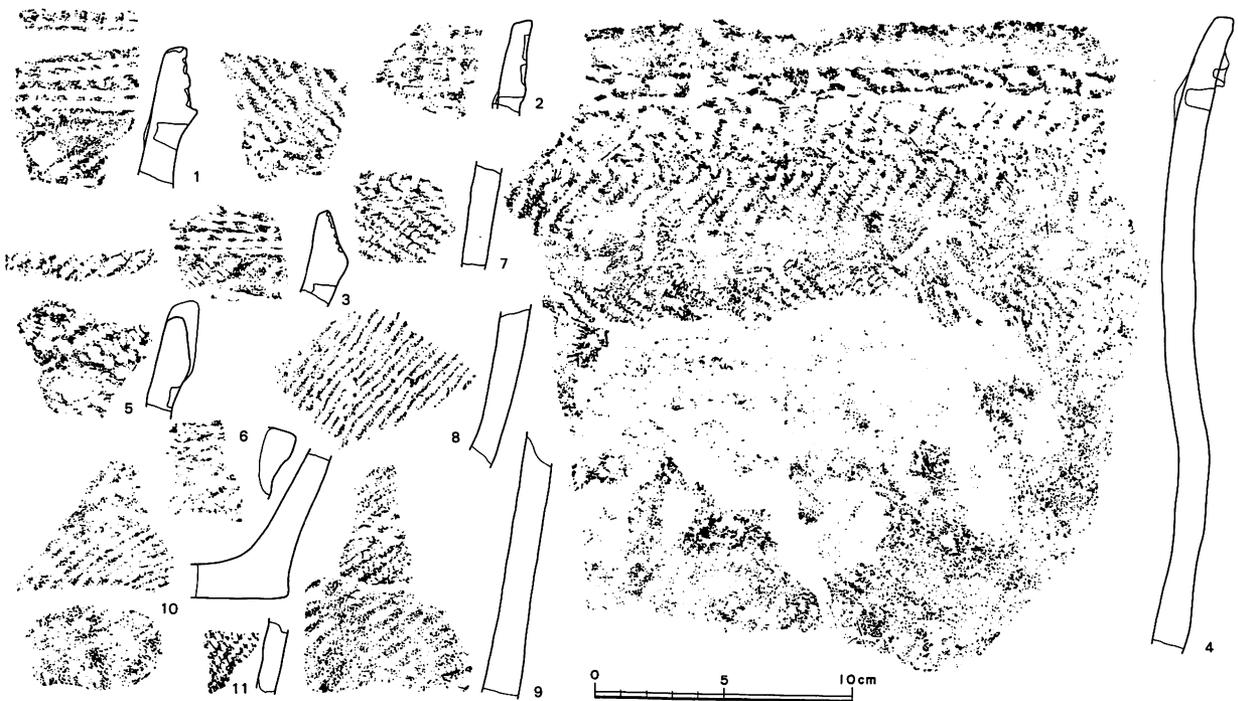
**床面：**床面は地形にそって南西側に傾斜している。d<sub>2</sub>を床面としているが、斜面上方ではEn-L層まで掘り込んでいる。風倒木痕を切っているためEn-aパミスを床面としている部分もある。

**壁：**壁は緩やかに立ち上がる。斜面の下方では壁を検出できなかった。

**炉跡：**焼土、炭化物等は検出されなかった。

表Ⅲ-30 H-44出土遺物一覧

出土遺物	北筒	Na	小計	輪片	撮器	F	RF	UF	F.C.	小計	釜片	燵片	総計
焼土1	58	1	59	1	2	119	2	7	58	189	7	2	257
2	4		4										4
床面	2		2										2
計	64	1	65	1	2	119	2	7	58	189	7	2	263



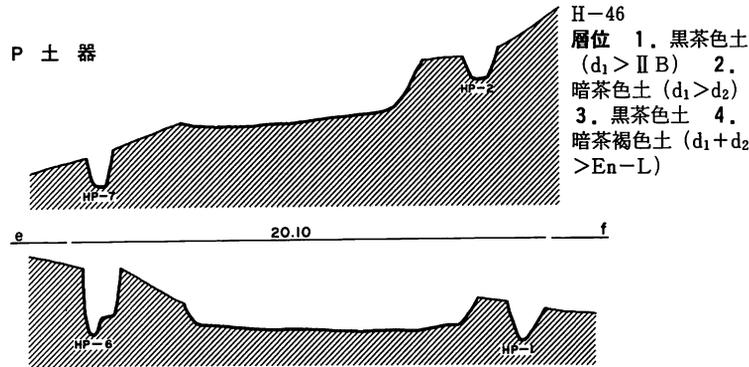
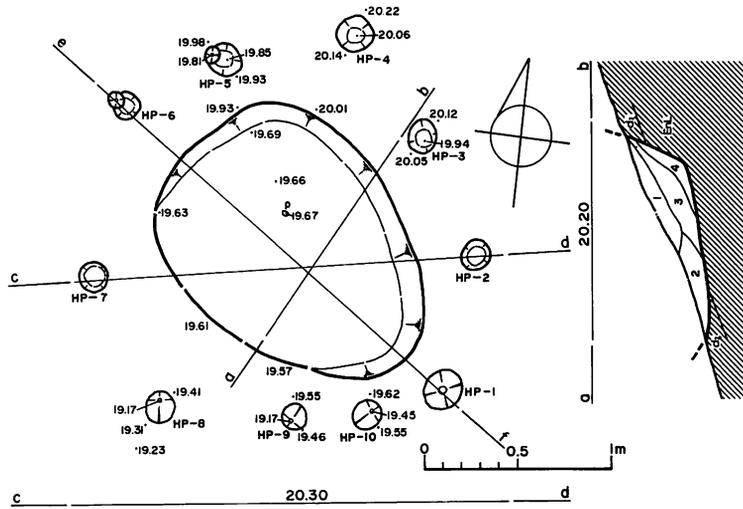
図Ⅲ-91 H-44 出土の土器

**付属ピット：**柱穴は検出されなかった。

**遺物出土状況：**床面から10cmほどのレベルでⅢ群b-3類の大型破片が出土した(図Ⅲ-90)。

**時期：**出土遺物からⅢ群b-3類の北筒式土器の時期と思われる。(工藤)

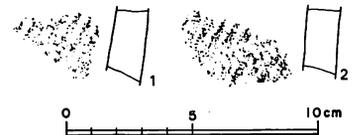
**遺物：**土器 1~11はⅢ群b-3類土器である。1は口縁部がさほど外反せず、口縁部と口唇に押し引き文を施し、内面には縄文を施している。2は口縁部にのみヘラ状工具により押し引き文を施す。3は先端が三叉に分れた工具により、2段に押し引き文を施したものである。内面は平滑に調整されている。4は口縁の少し下の肥厚部に貼付帯をめぐらせ、貼付帯上に刺突文を加えたものである。器面には結束羽状縄文が施されている。5は口縁の肥厚帯に縄文を施し、浅い円形文を施すものである。6は口縁の肥厚帯部分であるが結節の回転文が認められる。7は結束羽状縄文の施されたものである。8は整った斜行縄文の施されたものである。9は浅く斜行縄文の施されたものである。10は底部で外側へ張り出している。11は内面の磨かれた薄手の土器で、ノダップⅡ式とみなされる。



図Ⅲ-92 H-46 実測図

表Ⅲ-31 H-46出土遺物一覧

出土遺物	北筒	F	総計
覆土中層	1		1
覆土下層	1	1	2
床面	1		1
計	3		4



図Ⅲ-93 H-46 出土の土器

H-46 (図Ⅲ-92・93、図版Ⅲ-48・49)

位置：G<sub>2</sub>-64-10 北東から南西に傾斜する斜面に位置する。

標高は20.22m～19.23mである。

規模：1.5m / 1.4m × 1.18m / 1.08m × 0.3m 平面形：楕円形 床面積：1.21m<sup>2</sup>

長軸方向：N-43°-W

確認・調査・土層：G<sub>2</sub>-64-10

の包含層調査中、d<sub>1</sub>直上でⅡB < d<sub>1</sub>、d<sub>1</sub> + d<sub>2</sub>の混合土が長円形状に検出される。土層観察用のベルトを設定し、調査を行う。覆土はⅡB < d<sub>1</sub>、d<sub>1</sub> + d<sub>2</sub>の土が流れ込んだ状態で堆積し、この下には黒茶色土が堆積している。

**床面：**ゆるやかに南西側に傾斜している。堅く平坦である。En-L層中に構築されている。

**壁：**南西側は壁の立ち上がりは認められない。他はほぼ急傾斜で立ち上がり、北東壁高は約30cmである。

**炉跡：**焼土などは検出されていない。

**付属ピット：**壁外20cm～40cmのところに10個の柱穴状小ピットがめぐっている。覆土はEn-L + d<sub>1</sub> + d<sub>2</sub>の汚れた土で、直立している。HP-5、6は細い杭状のものである。

**遺物出土状況：**床面上よりⅢ群b-3類土器が出土している。覆土下層からも同時期の土器や、フレイクなどが出土している。

**時期：**掘り込み面は不明である。床面、覆土から出土している遺物、また周辺からも同時期の土器などが出土していることから、縄文時代中期後葉(北筒式期)の時期と思われる。(和泉田)

**遺物：**土器 1・2はⅢ群b-3類土器である。1には斜行縄文、2には結束第1種の羽状縄文が認められ、ともにやや厚手である。

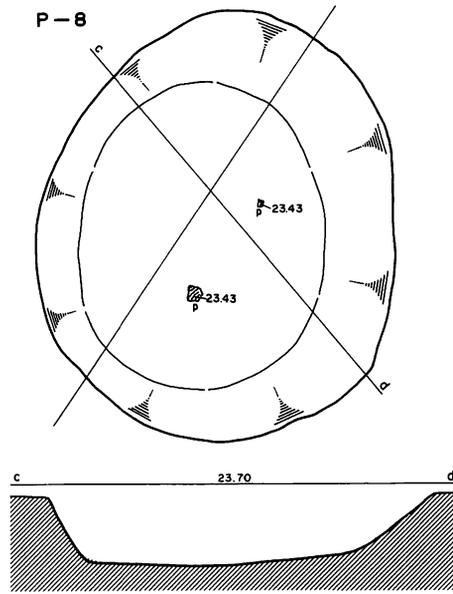
## (2) 土壙 (図Ⅲ-94~102、図版Ⅲ-49~54)

検出された33基の土壙には、調査区の①北東部台地上の平坦部で5基 (P-8・9・11~13) ②南東部台地から斜面肩口にかけて11基 (P-15・21・30~33・49・109・110・113・114) ③中央部台地上から斜面肩口にかけて12基 (P-73・87~89・92~94・103~105・111) ④ ③の南側の斜面に5基 (P-95・101・119~121) と大きく四つのまとまりが見られる。これは住居跡のまとまりとほぼ重なる傾向にある。本土壙はⅡ黒層中、あるいは $d_1$ 、 $d_2$ 上面などで検出されたもので、掘り込み面は明らかではないが、ほぼⅡ黒層上位であろうと推測される。平面形は楕円形、長円形のもの、大半であるが、他に卵形のもの (P-15・95・110・113)、あるいは溝状のもの (P-119・121) などもある。長径は0.4m~0.9mのものが13基、1.0m~1.8mのものが14基で、他に0.3m以下のものが1基 (P-33)、2mを超えるものが4基 (P-8・12・13・89) ある。深さは0.1m~0.3m前後のものが大多数であるが、P-101のように0.7mと非常に深いものもある。壙底は平垣で壁は急角度、やや急角度で立ち上がっているもの (P-8・12・15・33・49・89・91~93・101・103・104・121) と壙底の中央部がくぼみ、壁・壙底の断面が皿状あるいは半円状のものがある。覆土は黒色土が全体に堆積するもの (P-30・31・32・49)、流れ込みの状態を示すもの (P-8・88・93・95・104)、埋め戻し状の様相を見せるものがある。遺物は覆土上層から出土しているものがほとんどで、壙底から遺物が出土しているのはP-8・109・110のみである。覆土上層出土の遺物は壙底中央部に向って傾いているものが多い。またP-15と33は台石と石皿が立った状態で、P-49は台石が傾いた状態で出土している。

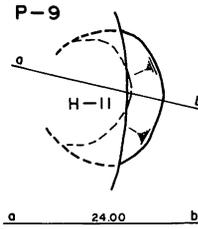
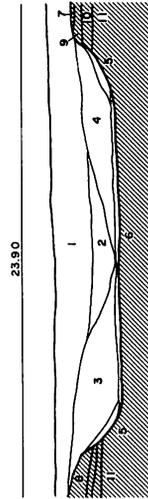
表Ⅲ-32 土壙 (中期) 一覧

遺構番号	位 置	規 模 (m)		最大深	平面形	備 考
		長径	短径			
P-8	G <sub>1</sub> -63-21	2.30 / 1.62	× 1.93 / 1.33	0.22	楕円形	N-1° -E
P-9	G <sub>1</sub> -63-35	(0.70) / (0.45)	× (0.50) / 0.30	0.40	略円形	H-11と重複
P-11	G <sub>1</sub> -63-34	(0.75) / 0.45	× (0.50) / 0.30	0.30	不整形	H-13と重複
P-12	G <sub>1</sub> -63-23	2.44 / 1.75	× 1.56 / 0.94	0.08	長楕円形	H-14と重複、N-41° -W
P-13	G <sub>1</sub> -63-13・14・23	2.10 / 1.90	× 1.70 / 1.40	0.22	楕円形	H-12と重複、N-62° -W
P-15	G <sub>1</sub> -64-41	0.71 / 0.54	× 0.54 / 0.46	0.14	卵形	石皿・台石を伴う、N-81° -W
P-21	G <sub>1</sub> -64-20・21	1.52 /	× 0.98 /	0.26	略円形	
P-30	G <sub>1</sub> -64-54	0.51 /	× 0.51 /	0.28	円形	
P-31	G <sub>1</sub> -64-54	0.54 / 0.36	× 0.41 / 0.23	0.18	長円形	N-86° -E
P-32	G <sub>1</sub> -64-54	0.73 / 0.58	× 0.57 / 0.43	0.20	長円形	N-60° -W
P-33	G <sub>1</sub> -64-50	0.28 / 0.22	× 0.26 / 0.18	0.24	円形	石皿・台石を伴う
P-49	G <sub>1</sub> -64-43	0.52 / 0.39	× 0.32 / 0.26	0.27	長楕円形	台石を伴う、N-32° -E
P-73	G <sub>1</sub> -63-85-95	1.81 / 1.50	× 1.71 / 1.30	0.30	楕円形	
P-87	G <sub>2</sub> -63-12	0.94 /	× 0.56 /	0.43	楕円形	N-57° -E
P-88	G <sub>2</sub> -63-32	0.85 /	× 0.64 /	0.22	長楕円形	N-2° -W
P-89	G <sub>2</sub> -63-75・76・85・86	2.21 / 1.50	× 1.80 / 1.30	0.30	楕円形	
P-91	G <sub>2</sub> -63-24・34	0.59 /	× 0.45 /	0.11	長楕円形	N-40° -E
P-92	G <sub>2</sub> -63-15	1.16 / 0.87	× 1.01 / 0.62	0.22	楕円形	
P-93	G <sub>2</sub> -63-15	1.17 /	× 1.03 /	0.08	略円形	N-6° -W
P-94	G <sub>2</sub> -63-08	1.08 /	× 0.71 /	0.17	長楕円形	N-18° -E
P-95	G <sub>2</sub> -63-27	0.77 /	× 0.64 /	0.20	卵形	N-4° -E
R101	G <sub>2</sub> -64-04-14	1.80 / 1.40	× 1.56 / 1.20	0.70	長円形	N-44° -W
R103	G <sub>2</sub> -63-36	1.14 / 1.00	× 0.82 / 0.69	0.13	長楕円形	N-24° -E
R104	G <sub>2</sub> -63-17-27	1.53 / 1.30	× 1.32 / 1.11	0.23	円形	
R105	G <sub>2</sub> -63-07-17	0.74 /	× 0.70 /	0.23	楕円形	N-28° -E
R109	G <sub>1</sub> -64-63	1.25 / 0.85	× 1.00 / 0.80	0.20	楕円形	石皿を伴う
R110	G <sub>1</sub> -64-63-73	1.51 / 1.20	× 1.40 / 0.90	0.26	卵形	石皿・台石を伴う
R111	G <sub>1</sub> -64-80-81	1.35 / 1.00	× 1.20 / 0.85	0.17	楕円形	
R113	G <sub>1</sub> -64-72-73	1.71 / 1.50	× 1.45 / 1.10	0.25	卵形	
R114	G <sub>2</sub> -64-72	0.45 / 0.20	× 0.35 / 0.15	0.09	楕円形	
R119	G <sub>2</sub> -64-40	1.33 / 1.05	× 0.66 / 0.18	0.32	溝状	N-10° -E
R120	G <sub>2</sub> -63-29	0.81 / 0.64	× 0.54 / 0.32	0.13	楕円形	N-84° -E
R121	G <sub>2</sub> -63-39	1.10 / 0.88	× 0.62 / 0.43	0.33	長円形	N-42° -W
T-1	H <sub>1</sub> -63-04	1.80 /	× 0.46 /	0.38	溝状	

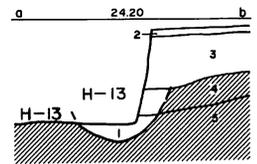
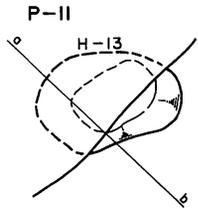
本土壙の性格は余りはっきりしない。ただ、台石・石皿が立った状態で出土しているP-15・33、またP-49は土壙墓の可能性が考えられる。P-119・121は溝状の平面形で、壙底に杭状の小ピットが検出されていることからTピットを想定して構築されたものかとも考えられる。P-101は他の土壙に比べて規模が大きく、覆土も揚げ土状の土が一気に入り込んだ状況を示しており、あるいはH-33との関連性も想定されるが、判然とはしない。本土壙の覆土、壙底から出土する出器片はⅢ群b-3類に相当するものであり、縄文時代 (中期) 後葉の時期のものと思われる。(和泉田)



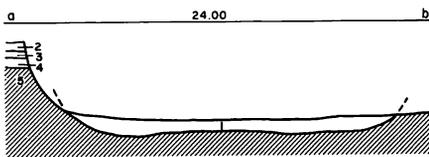
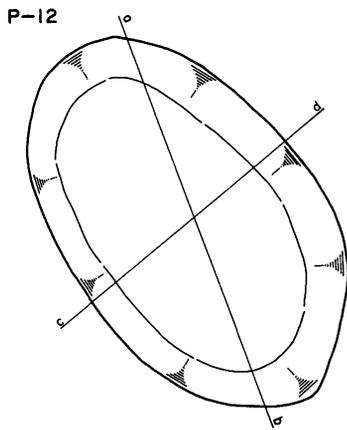
P-8  
 層位 1. ⅡB (純褐色黒色土) 2. 黒色土 (1-1.5cm大の $d_2$ と0.5-1cm大の $d_1$ を少量含む) 3. 褐色土 ( $d_1 > d_2$ , 炭化物を多く含む) 4. 黒色土 ( $d_1 > d_2$ ) 5. 暗褐色土 ( $d_2 > d_1$ ) 6. 黒色土 ( $d_1, d_2$ をほとんど含まない) 7. P-8の掘り土 8. 黒色土 ( $d_1 > d_2$ ) 9. ⅡB 10.  $d_1$  11.  $d_2$



P-9  
 層位 1. 褐色土 ( $ⅡB + d_1 > d_2$ ) 2. 黄褐色土 ( $d_1 + d_2$ ) 3. 黄褐色土 ( $d_2 > d_1$ ) 4. ⅡB 5.  $d_1$  6.  $d_2$

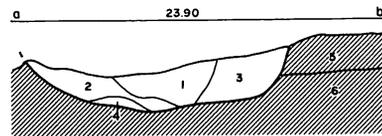
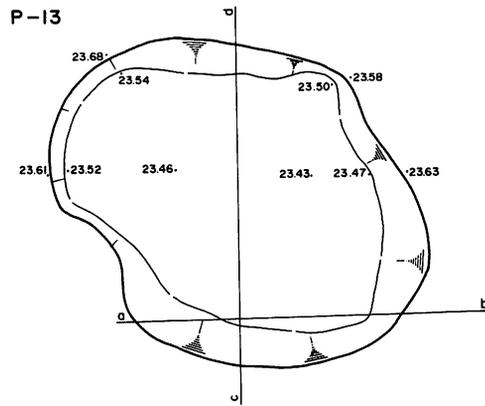


P-11  
 層位 1. 黒褐色土 ( $ⅡB > d_1$ ) 2.  $ⅡB + d_1$ の大きな粒 3. 黒褐色土 4. 褐色土 5.  $d_2$

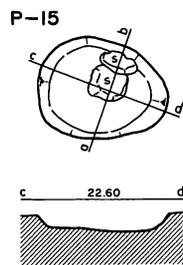


P-12  
 層位 1. 黒色土 (2-3.5cm大の $d_2$ を多く含む) 2.  $d_2$

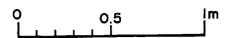
p 土器 s 石器等



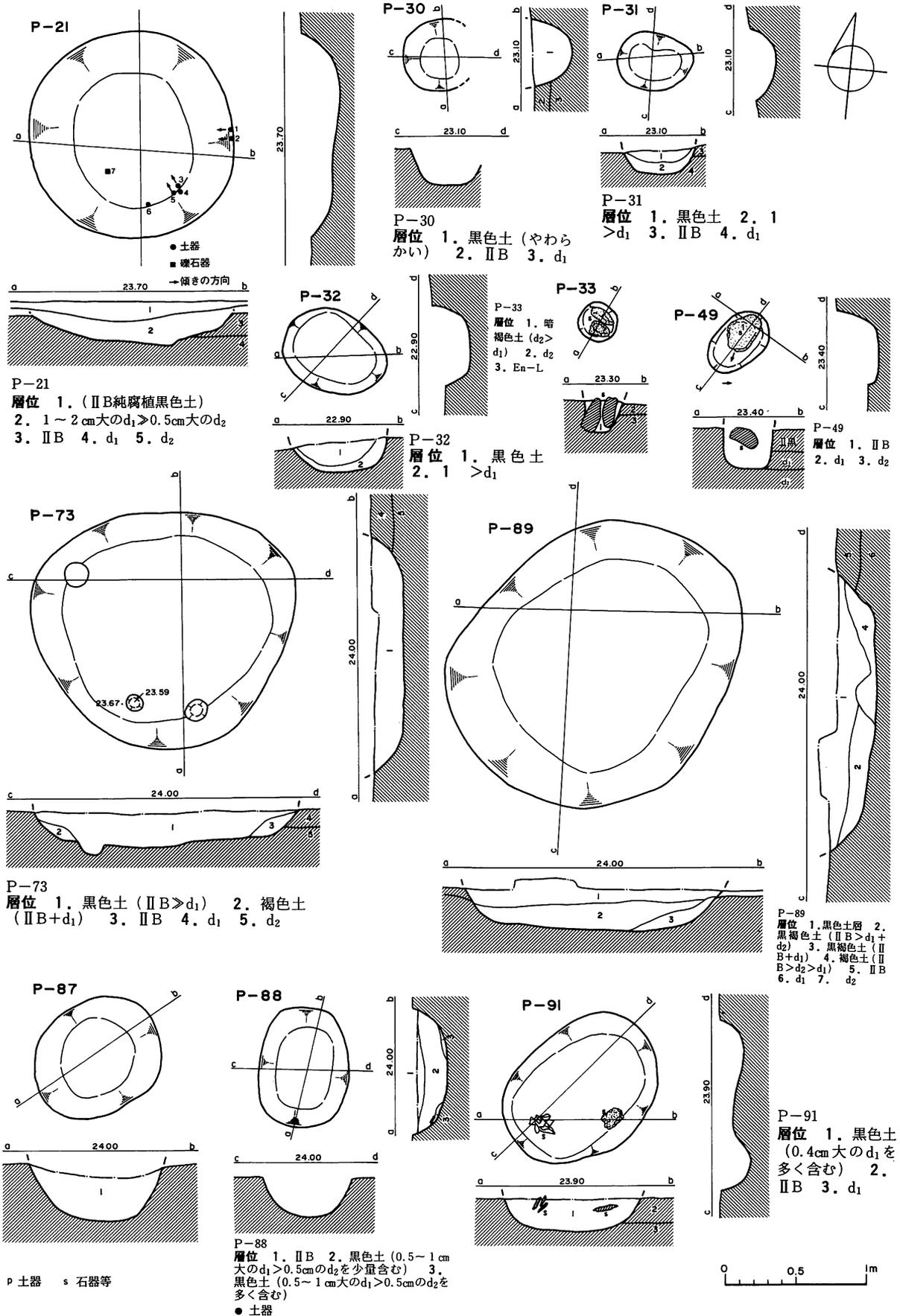
P-13  
 層位 1. 黒茶色土 (黒土上層に近似) 2. 黒茶色土 ( $1 > d_2$ ) 3. 黒茶色土 (黒土上層と黒土下層の混合土) 4.  $2 + d_2$  5.  $d_1$  6.  $d_2$  7. En-L



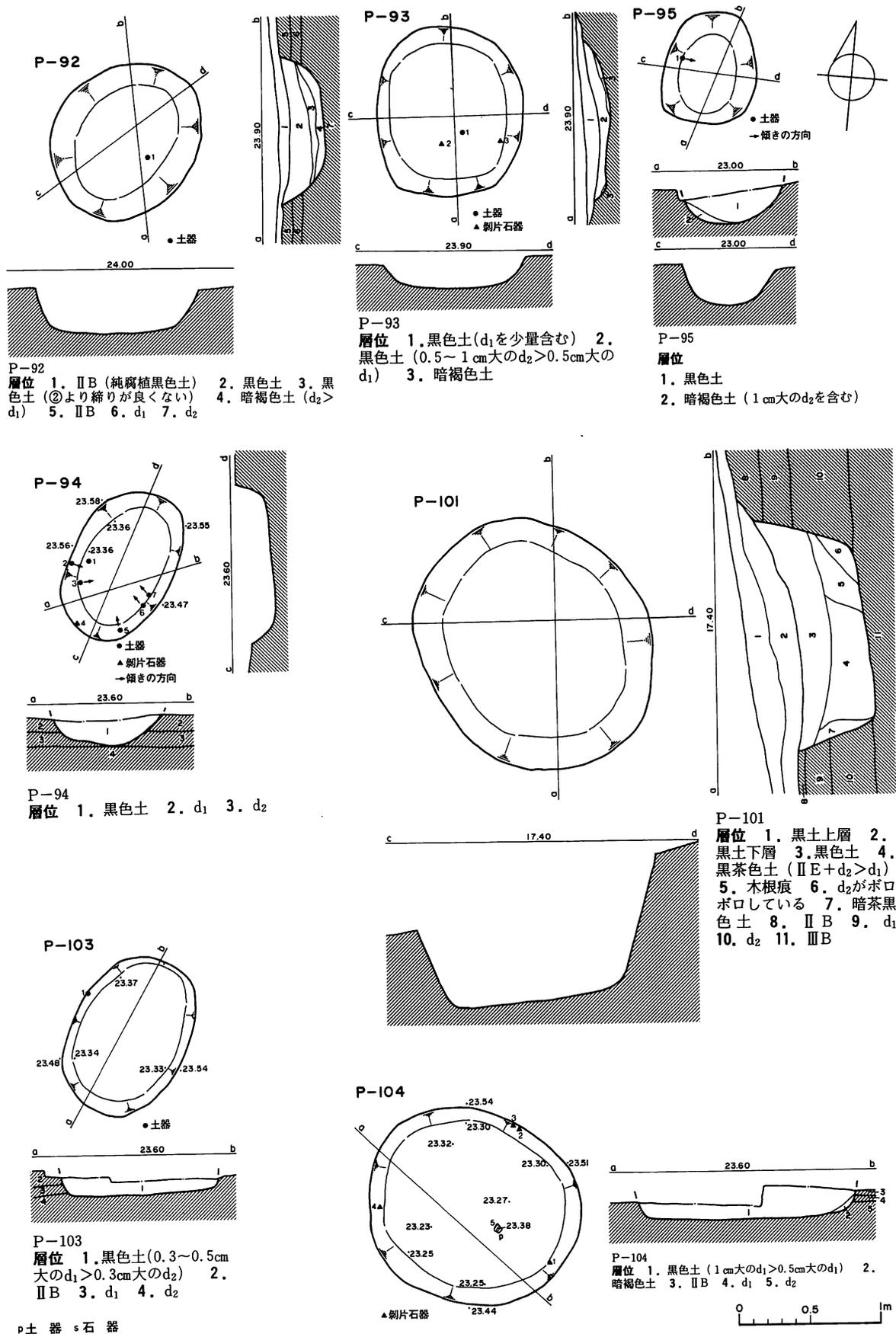
P-15  
 層位 1. 黒色土 (0.5-1cm大の $d_1$ を少量含む) 2. ⅡB 3.  $d_1$  4.  $d_2$



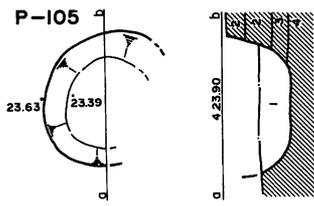
図Ⅲ-94 土壌 (中期) 実測図(1)



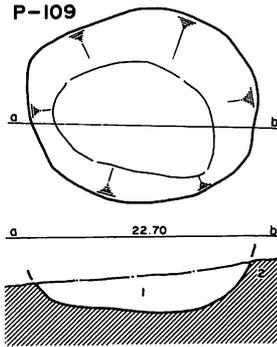
図III-95 土坑(中期) 実測図(2)



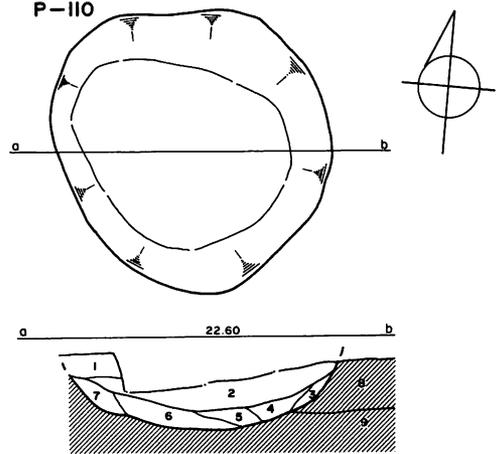
図III-96 土壌(中期) 実測図(3)



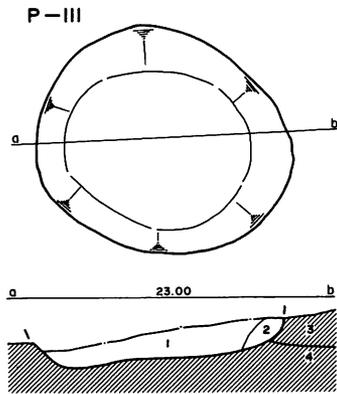
P-105  
層位 1. 黒色土 (0.2~0.5cm大の  $d_1 > 0.2$ cm大の  $d_2$ ) 2. II B  
3.  $d_1$  4.  $d_2$



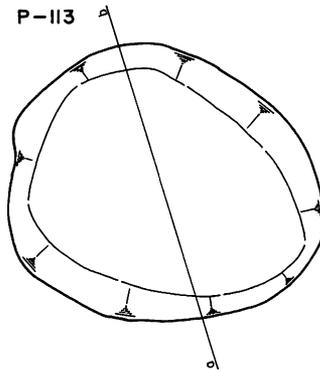
P-109  
層位 1. 黒褐色土 (II B >  $d_1 + d_2$ ) 2.  $d_2$



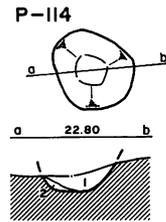
P-110  
層位 1. II B 2. 黒褐色土 (II B >  $d_1 + d_2$ ) 3. 黄褐色土 ( $d_2$ ) 4. 褐色土 (II B +  $d_2$ ) 5. 褐色土 (II B >  $d_2$ ) 6. 暗褐色土 (II B >  $d_2 + E_n - L$ ) 7. 褐色土 (II B  $d_2 > E_n - P$ ) 8.  $d_2$  9.  $E_n - L$



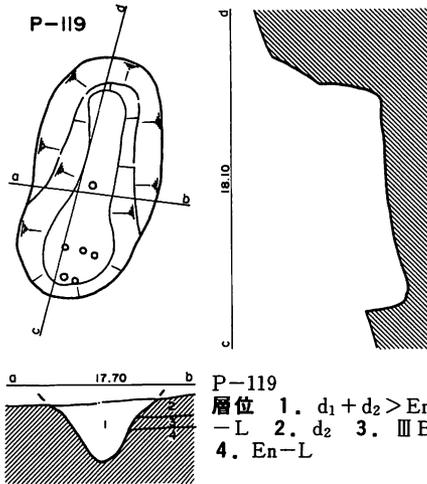
P-111  
層位 1. 黒褐色土 (II B >  $d_1 + d_2$ ) 2. 褐色土 (II B +  $d_2$ ) 3.  $d_1$  4.  $d_2$



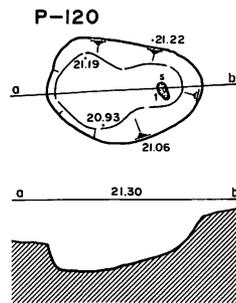
P-113  
層位 1. 黒褐色土 (II B >  $d_1 + d_2$ ) 2. II B 3.  $d_2$



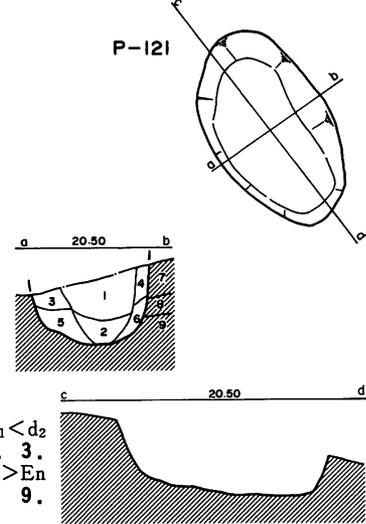
P-114  
層位 1. 黒褐色土 (II B >  $d_1$ ) 2. 黄褐色土 ( $d_2$ )



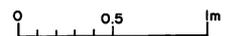
P-119  
層位 1.  $d_1 + d_2 > E_n - L$  2.  $d_2$  3. III B 4.  $E_n - L$



P-120  
層位 1.  $d_1 + d_2$  2.  $d_1 < d_2$  3.  $E_n - L < E_n - P$  4.  $3. > d_2$  5.  $d_2 > d_1$  6.  $d_2 > E_n - L$  7.  $d_2$  8.  $E_n - L$  9.  $E_n - P$



土器・石器

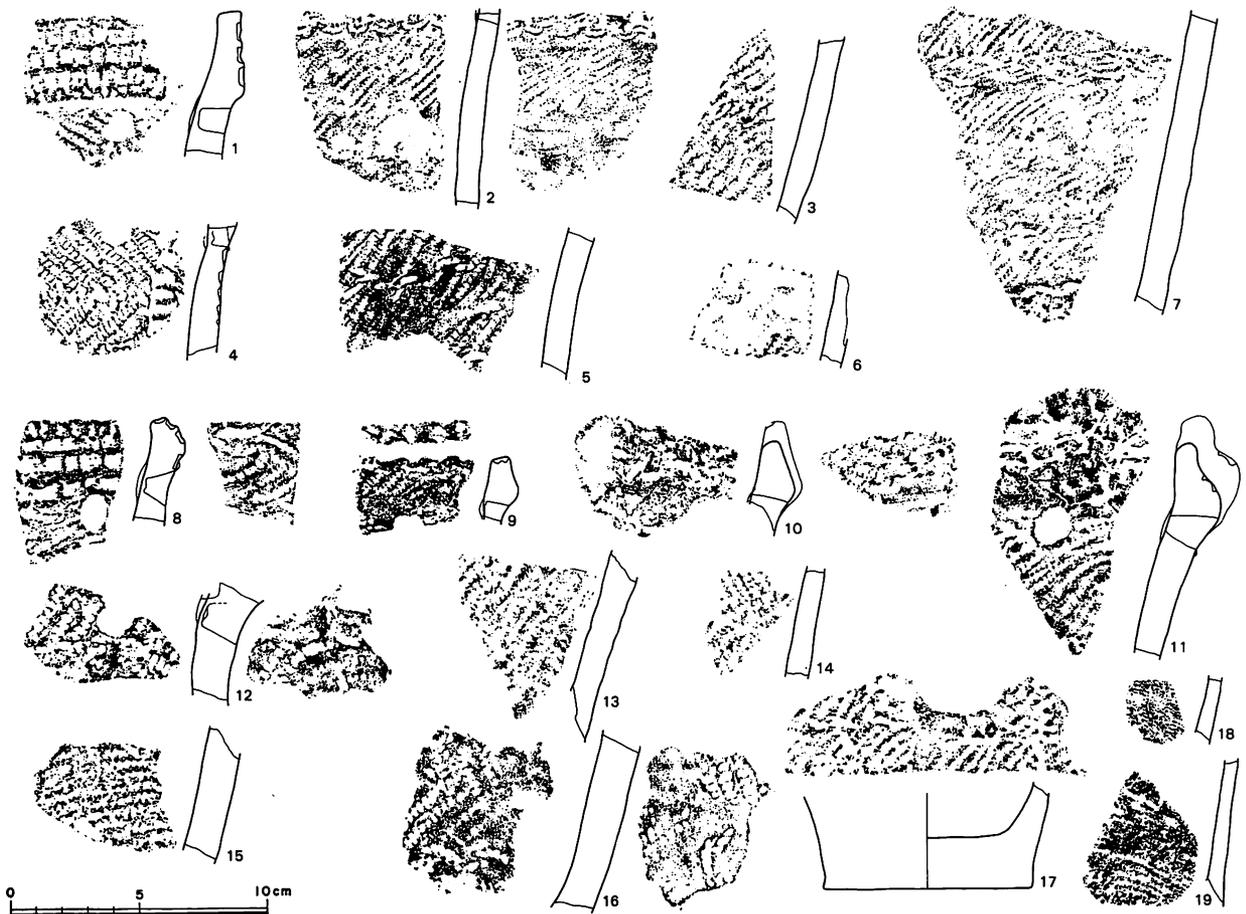


図III-97 土壌 (中期) 実測図(4)

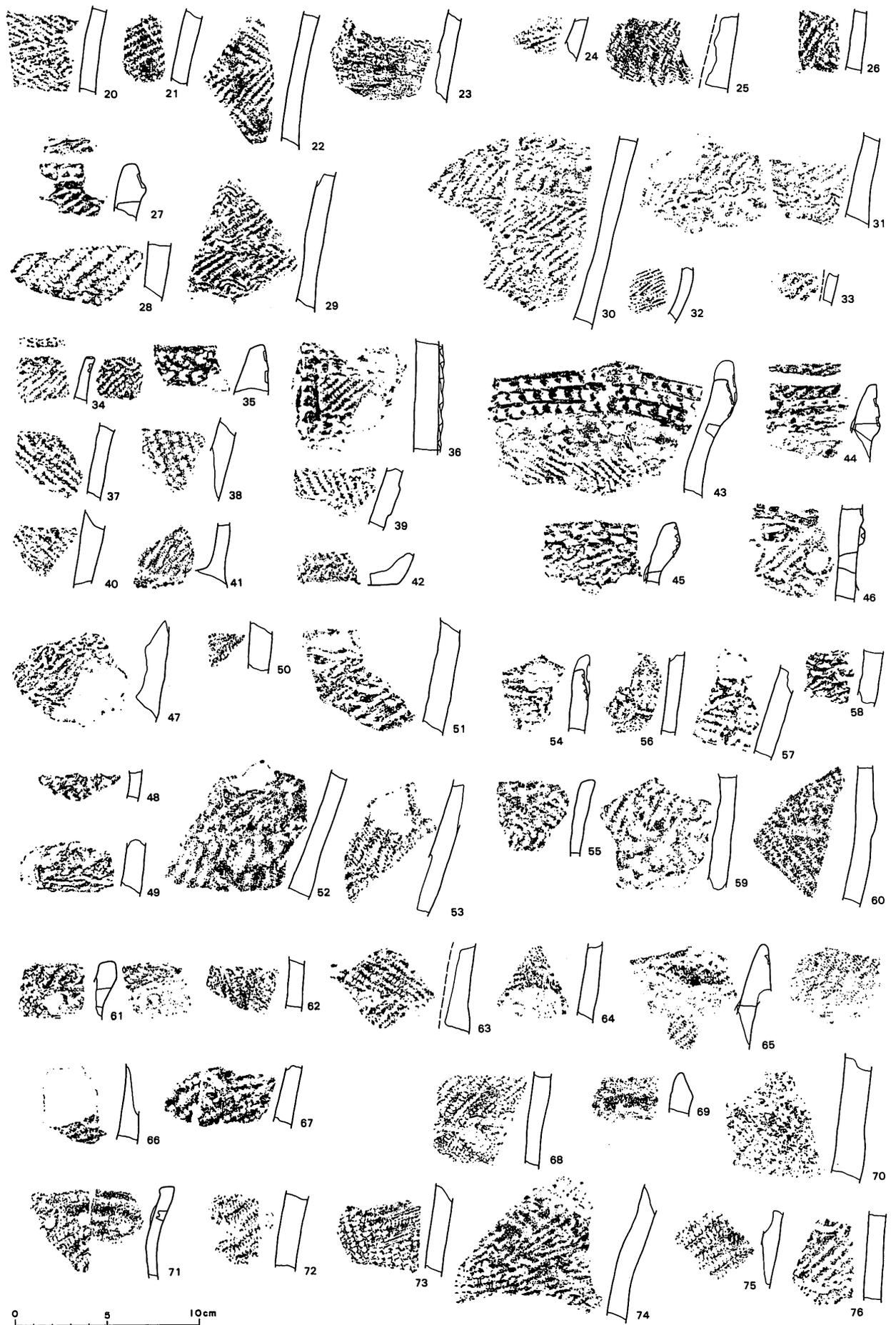
**遺物**：土器 P-8 (1~6)、P-11 (7)、P-13 (8~19)、P-21 (20~23)、P-23 (24・25)、P-31 (26)、P-31 (26)、P-32 (27~29)、P-33 (30~32)、P-49 (33)、P-73 (34~42)、P-87 (43~46)、P-88 (47~49)、P-91 (50)、P-92 (51~53)、P-93 (54~60)、P-94 (61~65)、P-95 (66・67)、P-101 (68~70)、P-103 (71)、P-104 (72~74)、P-105 (75・76) から出土している。6・39・42はⅣ群 a 類土器、他はⅢ群 b-3 類土器である。

1 は口縁部に押引き文が3段施されているものである。2 は結束第2種の原体による縄文が施されているものである。H-17の6と同一個体に属する。3 は結束第1種の斜行縄文の施されているものである。4 は結束羽状縄文の地にヘラ状工具による押引き文の施文されたものである。H-11の1、H-12の1、H-29の5と同一個体に属する。5 は結束第2種の斜行縄文の施されているものである。内面にも施文されている。6 は縦位施文の縄文の施されているものである。7 は斜行縄文を施したのち、なで調整がなされているように見えるものである。一部に結節の回転文がある。8 は口唇から口縁にかけて、4段押引き文の施されているものである。縄文に結節の回転文が加えられている。9 は口縁が三角形をなすように肥厚し、口唇に刺突を加えている。10 は結束第2種の原体による縄文の施されたもので、縄文は粗い。口唇にも施されている。11 は口縁に山形隆起部をもつもので、半截竹管状工具による押引き文を施している。12 は粗い縄文の施されているもので、10と同一個体かとみられる。13 は浅く粗い縄文の施されているものである。14 は結束第1種の羽状縄文の施されているものである。15 は斜行縄文の施された厚手のもので、縄文は浅い。16 は羽状縄文が浅く施されているもので、結束第2種の原体によるものかとみられる。17 は斜行縄文に結節の回転文の加えられているもので、角の張り出す特色をもつ。18 は無節の縄文の施された山形薄手のものである。H-6の19と同一個体とみられる。19 は器面が磨滅しているが、縄文の形跡がある。薄手である。20 は結束第2種の縄文に結節の回転文を加えたものかとみられる。21 は浅く縄文の施されたもの、22 は結束第1種の羽状縄文の施されたもの、23 は浅く無節とみられる縄文の施されているものである。24 は赤色顔料を含むもので、斜行縄文が施されている。25 は浅く縄文の施されているものである。26 は縄文施文後になで調整のなされているものである。27 は無節の縄文の施されているもので、口縁部にヘラ状工具による押引き文が施されている。28 は粗い縄文が深く施されている。29 は斜行縄文が浅く施されている。30 は結束第2種の縄文に結節の回転文が加えられている。31 には結束第2種の縄文が認められる。32 は小形でやや薄手の小片である。H-30の13と接合する。33 は斜行縄文の施された小片である。34 は薄手の小形の土器とみられる。内外面に縄文が施され、結節の回転文も加えられている。口唇に押引き文が施されている。口縁には竹管状の円形文が施されている。35 は口縁に肥厚帯のあるもので、押引き文風の刺突文が施されている。36 は貼付帯のあるもので、貼付帯は、横位の2帯に重ねて縦位に施されている。37 は内面が滑かに調整されているもので、浅い縄文が施されている。38 は粗い縄文が浅く施されているものである。39 は器面に縦位施文、貼付帯上に横位施文の縄文を施すものである。40 は内外面とも赤味をもつもので、縄文が浅く施されている。41 は縦行気味の縄文の施された底部で、角が張ります。42 は縦位施文の縄文が認められるもので、底部の角は丸味をもつ。43 は口縁に小突起があり、口縁部に肥厚帯を設け、押引き文を3段に施している。肥厚帯下縁の無文部に円形文を配する。体部の縄文は特殊な原体によるもので、H-6の2と同一の原体とみなされる。43 は、内面や口唇の調整が丁寧であるのに対し、H-6の2は内面に凹凸が認められ、口唇の形態を整っていない。器壁も43に比べて薄くつくられている。別個体ではあるが、同一人か、もしくは親子で制作したものかと想われ、時期的な差はないものと考えられる。44 は口縁の肥厚帯に2条押引き文を施すものである。45 は口縁部に押引き文風の刺突文を施すものである。46 は肥厚帯下縁に貼付帯をめぐ

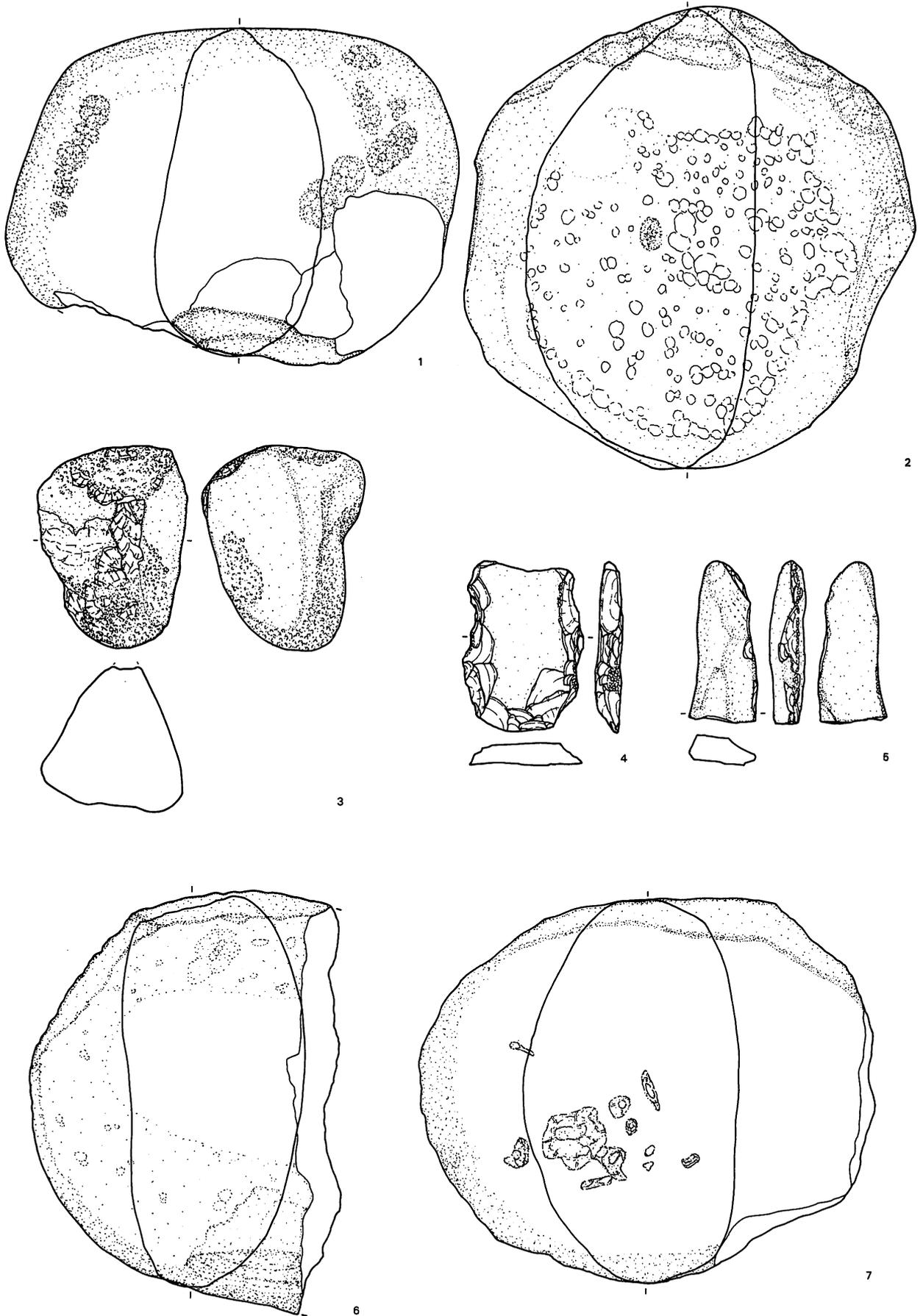
らし、口縁部に押し引き文、貼付帯上に斜方向からの刺突文を施している。赤色顔料の付着が認められる。47は結束第2種の縄文が施されている。48は浅く縄文の施されているものである。49は浅く施された縄文に結節の回転文を加えたものである。50は縄文の浅く施された小片である。51は縄文に結節の回転文を加えている厚手の土器である。52は浅く縄文の施されているものである。53は条の乱れた縄文の施されているもの、54は山形隆起部をもち、押し引き文を施すものである。55はやや薄手のもので、結束羽状縄文が施されている。口縁はヘラによりなで調整されている。56は結節の回転文のみられるもので、内面は平坦に調整されている。57・58はやや条の乱れる縄文が施されている。59は浅く斜行縄文の施されているものである。60は内面が滑かに調整されているもので、器面に隆帯があり、整った縄文が施されている。61は口縁部の幅がせまく、内面にも縄文の施されているものである。62は小形のもので、条の乱れた縄文が施されている。63は羽状に縄文の施されているものである。64は内面が平坦に調整されていて、浅く施された縄文の間に縦位の擦痕が認められる。65は口縁の山形隆起部の破片で、2段に押し引き文が施されている。66は浅い縄文の認められるものである。67は粗い縄文が浅く施されたものである。68は斜行縄文に結節の回転文を加えるものである。69は口縁の断面形が三角形に調整されているもので、口縁部は無文である。70は斜行縄文に結節の回転文の施されたようにみえるが定かでない。器壁に凹凸があり、かなり大形の土器の破片とみられる。71は薄手の土器であるが、縄文は深く施されている。口唇は平坦に調整され、口唇がわずかに隆起する。口縁部は無文である。72は赤味を帯びたもので、縄文が深く施されている。73は器面の一部に擦痕のあるもので、縄文は浅い。74は底部近くの破片で、結束第1種の斜行縄文が施されている。75は浅く縄文の施され



図Ⅲ-98 土壙(中期) 出土の土器(1)



図Ⅲ-99 土壙(中期) 出土の土器(2)



図Ⅲ-100 土壙（中期） 出土の石器(1)

0 5 10cm

ているものである。76には結節の回転文が認められる。

石器 9 (P-73) は石槍またはナイフ。最大幅は上位にある。身の表面は再加工されている。身の部分は本来もう少し長かったと思われる。黒曜石製。10 (P-87) はスクレイパー。幅の均一な縦長剥片を素材とし、背面の右側縁に急角度の刃部が作り出されている。黒曜石製。11~18 (P-91) は石槍またはナイフ。11~16・17は木葉形にちかい。最大幅は中位にあるものが多い。11・12・15・16の身の側縁には部分的に刃つぶれが認められる。7点とも厚みがあり、他の石槍またはナイフに比べて、長さ・幅の割に重量がある。また剥離が大きめで全体に荒い印象を受ける。これらは未製品の可能性がある。すべて黒曜石製である。19 (P-109) は石鏃。自然面を残す薄手の剥片を素材とし、剥片の縁辺に加工が施されている。黒曜石製。

1・2はP-15出土のものである。1は安山岩石皿で、使用面は平坦。2は砂岩台石で、使用面は凸面、風化が著しい。3 (P-32) はカンラン岩敲石、垂角転礫を素材とする。4・5はP-21出土のものである。4は緑色泥岩石斧未製品。両側縁と刃部予定部分は剥離調整が施される。側縁調整によって剥落した未製品片である。5は緑色泥岩石斧素材、断面が偏平な棒状の転礫。6・7はP-33出土のものである。6は安山岩石皿で、使用面は片面で平坦である。7は安山岩台石。8 (P-49) は安山岩台石、片主面に加熱による剥落がみられる。20・21はP-110出土のものである。20は黒色片岩石斧。両側縁は剥離調整され、主面は未調整である。21は片麻岩すり石、片方の主面に光沢がある。22 (P-113) は緑色泥岩石斧未製品。側縁は敲打調整され、主面は一部礫面をのこす。23 (P-114) は黒色片岩石斧。ほぼ全面にわたって研磨調整を施す。刃縁と直交する方向に条線痕がみられる。

### (3) 焼土 (図Ⅲ-103~106、図版Ⅲ-55・56)

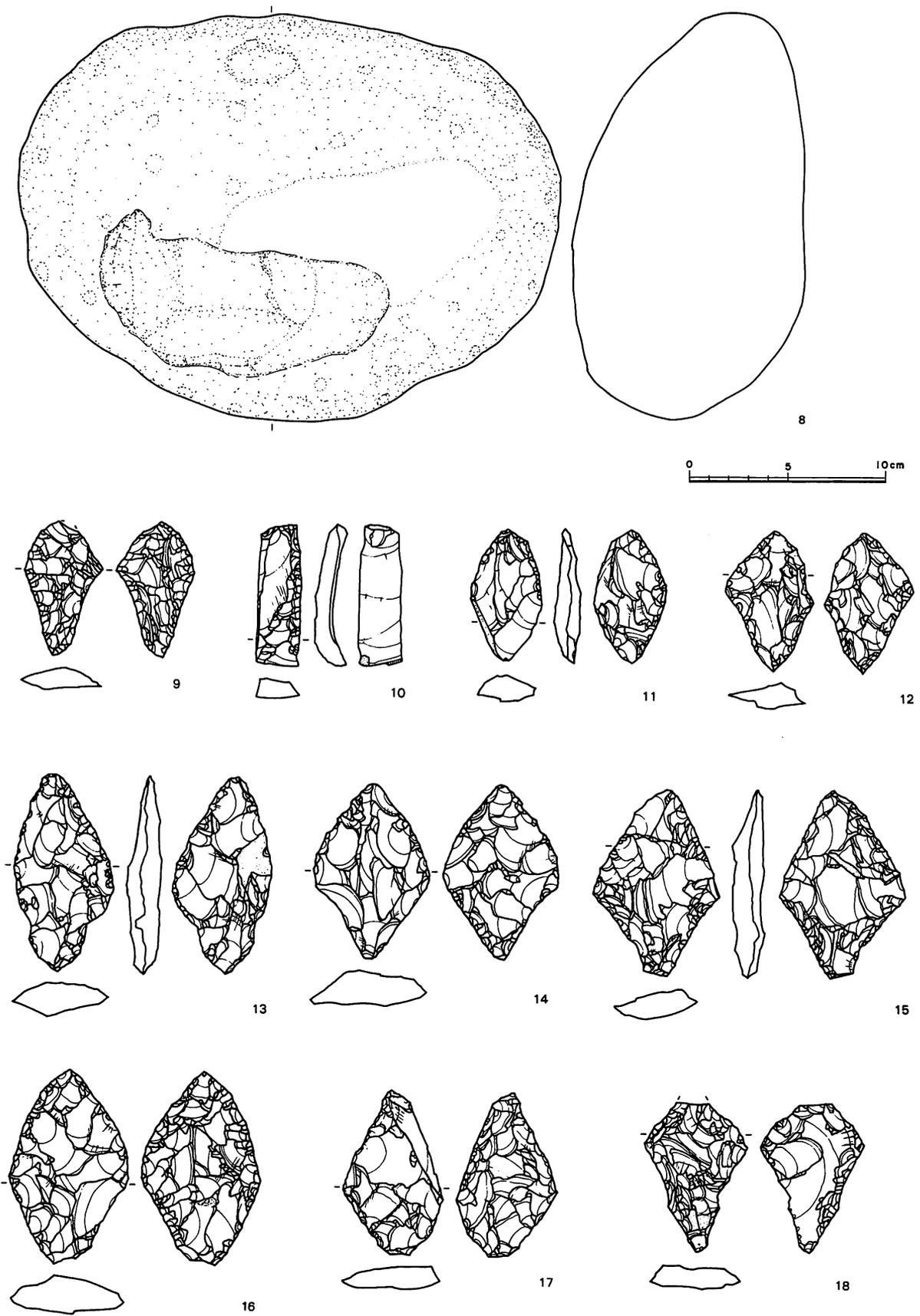
縄文時代中期後葉として報告した焼土は、85か所であった。内訳は、焼土中にあり、被熱しているⅢ群b-3類土器を含む例が12か所、焼土中にⅢ群b-3類土器を含む例が17か所、付近からⅢ群b-3類土器が出土している例が56か所であった。焼土の分布は、東側がG<sub>1</sub>-20ライン、西側がG<sub>2</sub>-40ラインの標高22m~23.6mの斜面肩口付近に集中している。また焼土の分布は、Ⅲ群b-3類土器の集中域と重複する傾向がみられる。焼土の断面形は動いている例を除くと、焼土上面が凹むもの19例、焼土上面が凸るもの7例であり、断面凹形の焼土がやや多く存在するといえる。検出面が4回目以降の焼土は他の遺構と掘り込み面が対応しない。しかし、土器が出土していることから掘り方をもった焼土である可能性が高い。

2回目検出面焼土：群を形成せず散点的に分布する。

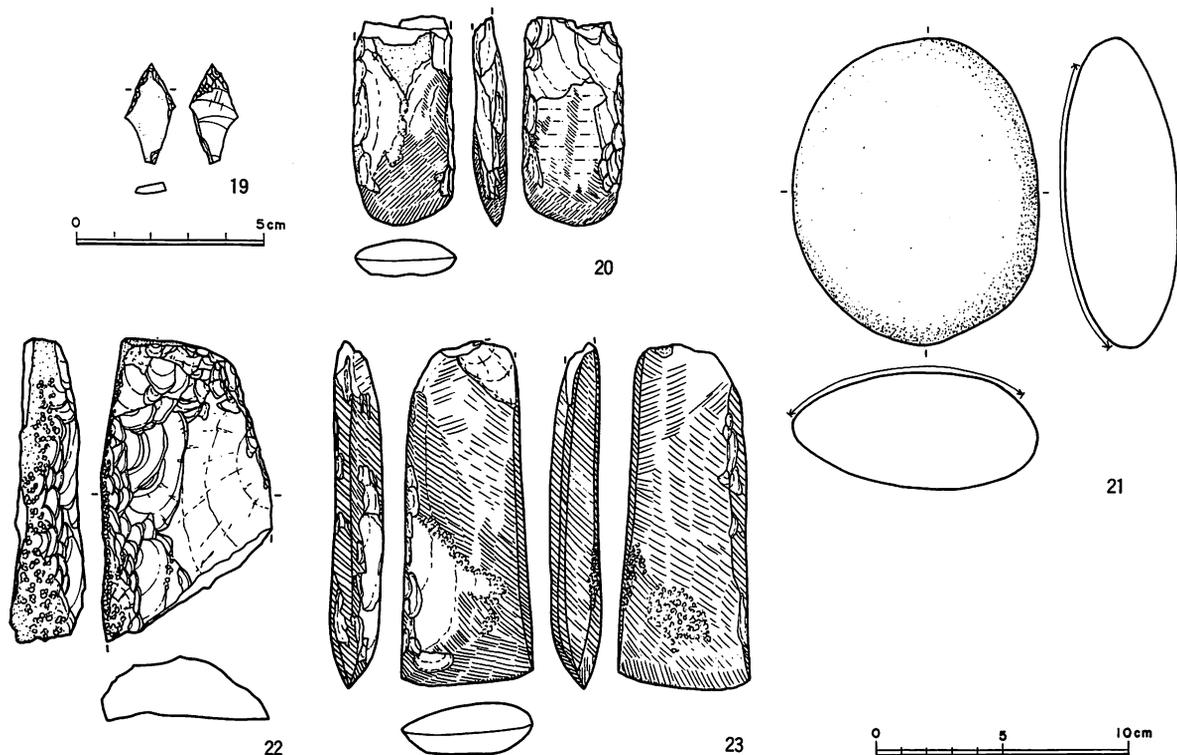
3回目検出面焼土：3個の小群が標高23m付近に散在している。A群 (G<sub>1</sub>-64-43・44)、B群 (G<sub>1</sub>-63-89・G<sub>1</sub>-64-80) はすべて断面凹形の大型焼土で構成される。C群 (G<sub>2</sub>-63-17・26) は凸断面形焼土を1つ含む中型の焼土で構成される。また、これらの検出面はH-4・30・33の掘り込み面と対応する。

4回目検出面焼土：5個の群を形成し、斜面肩口からG<sub>2</sub>ラインに沿って台地上に分布する。A群 (G<sub>1</sub>-64-51・61) は中型の焼土で構成される。B群 (G<sub>1</sub>-63-78)、C群 (G<sub>1</sub>-63-86・94・95・97~99) は4回目検出中の焼土群の中では最っとも広く分布し、小型の焼土で構成される。D群 (G<sub>1</sub>-63-92)、E群 (G<sub>2</sub>-63-15・16) は断面凹形のF-95を含み大型の焼土で構成される。

5回目検出面焼土：これらはG<sub>1</sub>-63-87・88・96・98に集中し、中期焼土の中で最大の焼土群となっている。個々の焼土の規模は中型である。F-70・78からは炭化したクルミの殻皮片が出土している。



図Ⅲ-101 土壌（中期） 出土の石器(2)



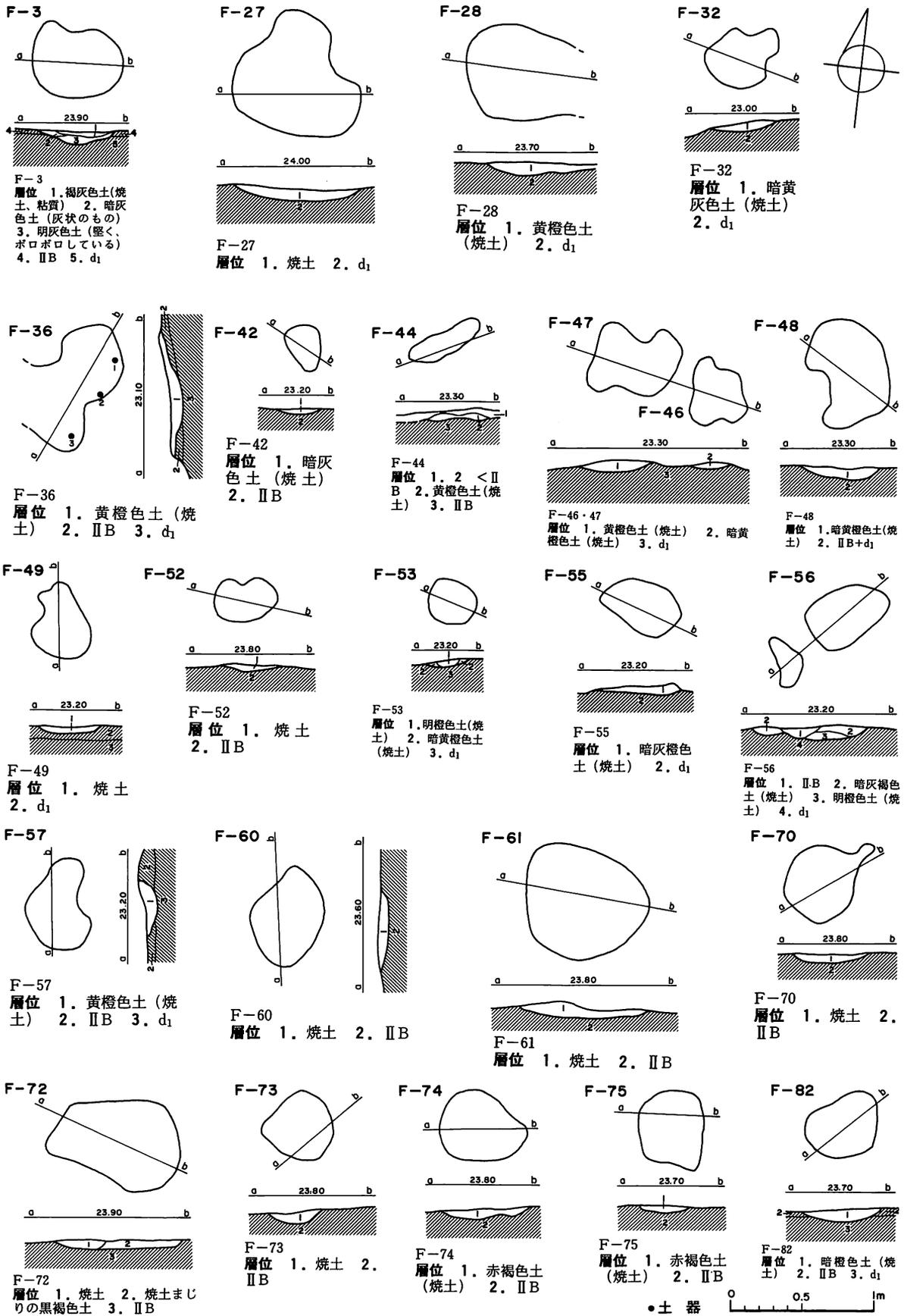
図III-102 土壌(中期) 出土の石器(3)

d<sub>1</sub>直上付近検出面焼土：斜面肩口と台地北東部に群を形成する。この検出面の焼土は、大型で凹断面をもち、遺物の種類数が多いことが特徴である。A群(G<sub>1</sub>-64-25・34・43・51~53)、F-47・55から炭化したクルミの殻皮片が出土した。B群(G<sub>1</sub>-63-98・99)は小型の焼土で構成される。C群(G<sub>2</sub>-63-06・16・17・25・35)は大型で凹断面の焼土を多く有する。F-92からは炭化したクルミの殻皮が、F-94からは炭化したクルミの殻皮片と炭化したキハダ属の種子が出土した。D群(G<sub>1</sub>-63-15・23~25・33・36)は中期焼土群の中では最も大きな焼土によって構成されている。F-3・4からは炭化したクルミの殻皮片が出土している。

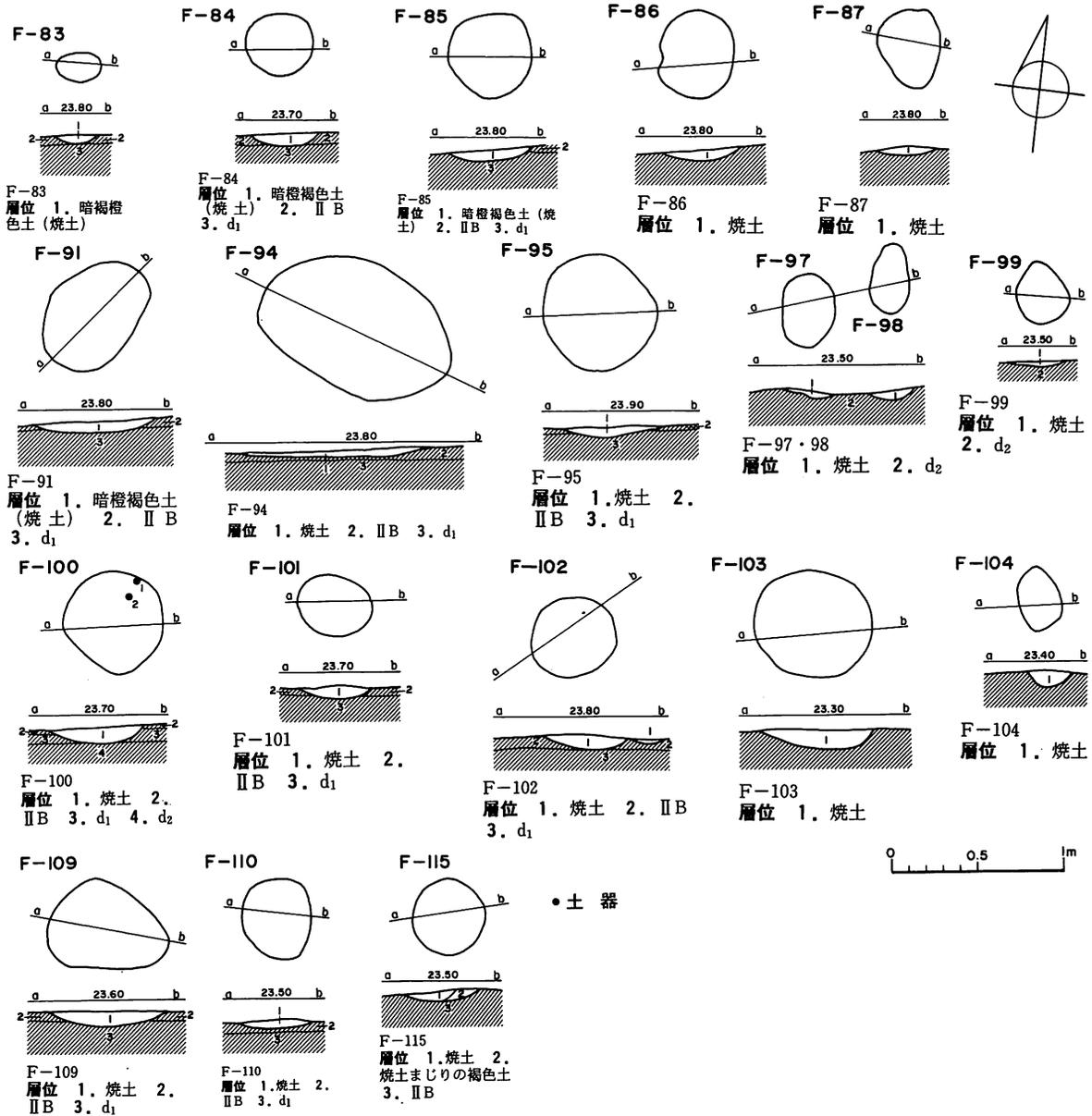
群を構成する焼土の特徴を、断面形ごとに面積・遺物種類数・遺物点数について比較して説明することにする。断面凸形焼土の平均面積は0.15m<sup>2</sup>、平均遺物種類数は3.1種、平均遺物点数は43.3個である。

表III-33 検出面別焼土一覧

検出面群	遺構番号	同じ検出面の堅穴住居跡	平均面積(m <sup>2</sup> )
2 回目	34,48,52	H-4,30,33以外の堅穴住居跡と対応	0.10
3 回目	A 42,44 B 61,103,104 C 106,110	H-4,30,33の堅穴住居跡と対応	0.07 0.31 0.15
4 回目	A 30,60,112~116 B 63,66 C 67,68,69,88,97~99 D 58,(63?),64,65 E 95,100,102	堅穴住居跡の検出面と対応せず	0.18 ---- 0.13 ---- 0.23
5 回目	A 62,70~81,86 87,89,90 107,117	堅穴住居跡の検出面と対応せず	0.22
D 直上 付近	A 30,32,36,37,40,46,47 49,(50?),53,55~57 B 97~99 C 82~85,91~94 100,101,105,109 D 2~4,24~27 28	堅穴住居跡の検出面と対応せず	0.19 0.09 0.26 0.39



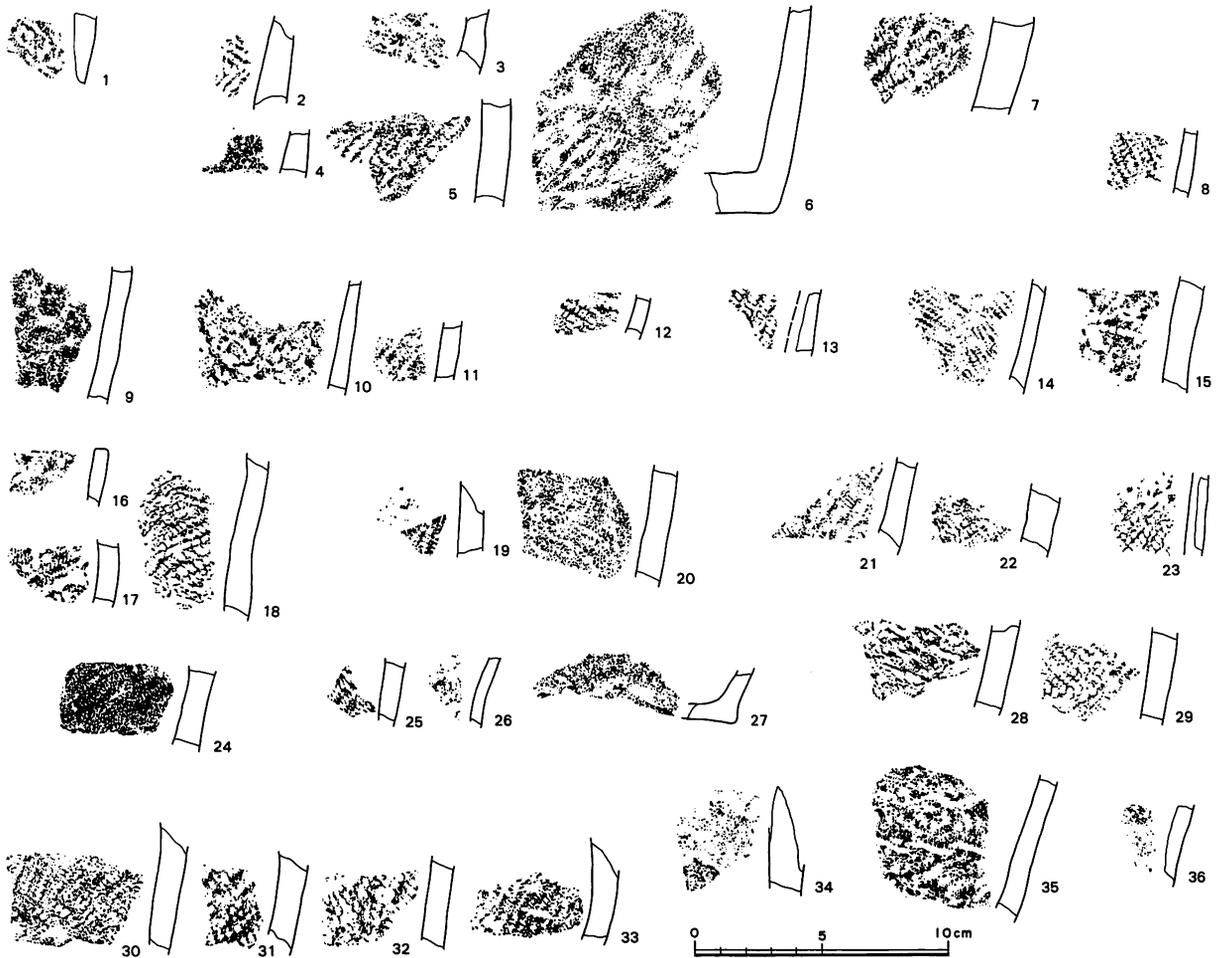
図III-103 焼土(中期) 実測図(1)



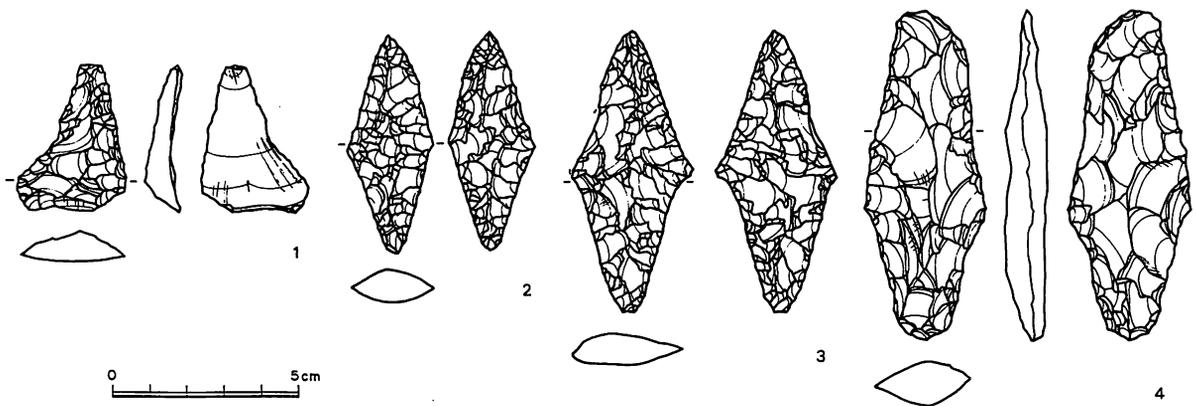
図III-104 焼土 (中期) 実測図

断面凹形焼土のそれは0.28m<sup>2</sup>、3.83種、54.5個である。二者を比べると凹形焼土は大規模で遺物組成が豊富であり遺物点数が多い。凸形焼土は凹形焼土と対称的である。以上より、凹形焼土は掘り方の存在を加味すると、掘り込みをもつ定置的な遺構で屋外炉のようなもの、凸形焼土は焚火のような一時的な遺構であろう。(鈴木)

**遺物：土器** F-3 (1)、F-36 (2~7)、F-37 (8)、F-44 (9)、F-48 (10・11)、F-52 (12)、F-53 (13)、F-55 (14・15)、F-60 (16~18)、F-61 (19・20)、F-70 (21~23)、F-73 (74)、F-80 (25~27)、F-100 (28・29)、F-103 (30~33)、F-109 (34)、F-112 (35)、F-113 (36) から出土している。すべてⅢ群b-3類土器である。1は粗い縄文の施された小片である。2は結束羽状縄文の施されているもの、3は器面がなで調整され無文のもの、4はかすかに縄文の痕跡のあるもの、5はやや粗い縄文の施されたもの、6は器面の磨滅が著しく、縄文の



図III-105 焼土(中期) 出土の土器



図III-106 焼土(中期) 出土の石器

形跡がわずかに認められるもの、7は粗い縄文の施されているものである。8は斜行気味のやや細かな縄文の施されているものである。9は器面の磨滅の著しいもの、10は薄手で粗い縄文の施されているもの、11は細かな斜行縄文の施されているものである。12は薄手のもので、浅く縄文が施されている。他と同様に胎土に繊維を含む。13は粗い縄文の施されているものである。14は薄手のもので、縄文は細かい。15には結節の回転文が加えられている。16は薄手の口縁部で、口唇と内面がなで調整されている。17は細かな斜行縄文が施されている。18は不規則な斜行縄文に結節の回転文が加えられて

いる。19は斜行縄文がわずかに認められる。20は器面が磨滅して縄文の形跡が定かでない。21は粗い斜行縄文の施されたものである。内面に凹凸がある。22は浅く縄文が施されている。23は結束の原体による縄文かとみられる。24は浅い縄文の施されたものである。25は斜行縄文の認められる小片である。26は薄手の浅い縄文の痕跡のあるものである。27は小形土器の底部であるが、文様が磨滅している。28は縄文地に結節の回転文が施されている。29は結束第1種の羽状縄文の施されたものである。30は浅く縄文の施されているもの、31・32は同一個体で粗い縄文の施されているもの、33は細い縄文の施されているものである。34は無文部の小範囲が知られるのみである。35は結束羽状縄文に結節の回転文を加えたものかとみられる。

石器 1 (F-36) はスクレイパーで、剥片の両側縁に加工が施されている。黒曜石製。2・3 (F-60) は石槍またはナイフで、最大幅は中位にある。黒曜石製。4 (F-103) は厚みのある石槍またはナイフで、最大幅は下位にある。頁岩製。

表III-34 焼土(中期)一覽

※ 検出面はII B掘り下げ回数を示す

継時	位置	規模(m)		検出面	備考	継時	位置	規模(m)		検出面	備考
		長径×短径	厚					長径×短径	厚		
F-2	G <sub>1</sub> -63-15	0.48 × 0.44	0.02	d <sub>1</sub> 直上	削り込み	F 74	G <sub>1</sub> -63-88	0.58 × 0.50	0.07	IB5期	
F-3	G <sub>1</sub> -63-15	0.63 × 0.46	0.08	d <sub>1</sub> 直上	磨滅 凹	F 75	G <sub>1</sub> -63-88	0.50 × 0.46	0.05	IB5期	
F-4	G <sub>1</sub> -63-24	0.50 × 0.36	0.04	d <sub>1</sub> 直上		F 76	G <sub>1</sub> -63-88	0.71 × 0.46	0.06	IB5期	削り込み
F-24	G <sub>1</sub> -63-36	0.57 × (0.30)	0.03	d <sub>1</sub> 直上		F 77	G <sub>1</sub> -63-87	0.43 × 0.30	0.03	IB5期	削り込み
F-25	G <sub>1</sub> -63-23	0.40 × 0.32	0.04	d <sub>1</sub> 直上		F 78	G <sub>1</sub> -63-87	0.52 × 0.42	0.06	IB5期	
F-26	G <sub>1</sub> -63-24	0.15 × 0.12	0.02	d <sub>1</sub> 直上		F 79	G <sub>1</sub> -63-87	0.33 × 0.34	0.04	IB5期	
F-27	G <sub>1</sub> -63-33	0.91 × 0.82	0.08	d <sub>1</sub> 直上	磨滅 凹	F 80	G <sub>1</sub> -63-87	0.47 × 0.41	0.04	IB5期	削り込み
F-28	G <sub>1</sub> -64-10	(0.76) × 0.64	0.09	d <sub>1</sub> 直上	磨滅	F 81	G <sub>1</sub> -63-87	0.50 × 0.38	0.05	IB5期	削り込み
F-30	G <sub>1</sub> -64-51	0.33 × 0.32	0.03	d <sub>1</sub> 直上	d <sub>1</sub> 直上より10cmほど上方、上面に磨滅あり	F 82	G <sub>2</sub> -63-35	0.56 × 0.41	0.08	IB2期	凹、d <sub>1</sub> 直上
F-32	G <sub>1</sub> -64-25	0.54 × 0.51	0.06	d <sub>1</sub> 直上	磨滅 凹	F 83	G <sub>2</sub> -63-35	0.22 × 0.18	0.04	IB2期	凹、d <sub>1</sub> 直上
F-34	G <sub>1</sub> -64-53	0.37 × 0.32	0.03	IB中	F-33より5cmほど下方	F 84	G <sub>2</sub> -63-35	0.39 × 0.36	0.06	IB2期	凹、d <sub>1</sub> 直上
F-35	G <sub>1</sub> -64-53	0.39 × 0.15	-	d <sub>1</sub> 直上	F-34より上方	F 85	G <sub>2</sub> -63-35	0.48 × 0.45	0.06	IB3期	凹、d <sub>1</sub> 直上
F-36	G <sub>1</sub> -64-53	0.90 × 0.50	0.08	d <sub>1</sub> 直上	磨滅 凹	F 86	G <sub>1</sub> -63-97	0.60 × 0.44	0.06	IB5期	磨滅 凹
F-37	G <sub>1</sub> -64-53	0.28 × 0.22	-	d <sub>1</sub> 直上	削り込み	F 87	G <sub>1</sub> -63-97	0.46 × 0.36	0.05	IB5期	磨滅 凹
F-40	G <sub>1</sub> -64-52	0.54 × 0.48	0.09	d <sub>1</sub> 直上		F 88	G <sub>1</sub> -63-97	0.32 × 0.26	0.03	IB4期	
F-42	G <sub>1</sub> -64-44	0.32 × 0.24	0.04	IB3期	IB直上より10cmほど下方	F 89	G <sub>1</sub> -63-98	0.51 × 0.40	0.06	IB5期	
F-44	G <sub>1</sub> -64-43	0.55 × 0.16	0.06	IB3期	IB直上より10cmほど下方	F 90	G <sub>1</sub> -63-87	0.60 × 0.59	0.08	IB5期	凹
F-46	G <sub>1</sub> -64-34	0.50 × 0.43	0.04	d <sub>1</sub> 直上 ?	磨滅 凹	F 91	G <sub>2</sub> -63-25	0.68 × 0.52	0.06	d <sub>1</sub> 直上	凹
F-47	G <sub>1</sub> -64-34	0.68 × 0.60	0.10	d <sub>1</sub> 直上 ?	磨滅 凹	F 92	G <sub>2</sub> -63-06	0.49 × 0.34	0.06	IB3期	d <sub>1</sub> 直上
F-48	G <sub>1</sub> -64-34	0.71 × 0.40	0.07		II-23層土層	F 93	G <sub>2</sub> -63-06	0.39 × 0.39	0.05	IB4期	d <sub>1</sub> 直上
F-49	G <sub>1</sub> -64-43	0.52 × 0.40	0.10	d <sub>1</sub> 直上	磨滅 凹	F 94	G <sub>2</sub> -63-06	1.14 × 0.73	0.04	IB4期	d <sub>1</sub> 直上
F-50	G <sub>1</sub> -64-43	0.58 × 0.43	0.04	d <sub>1</sub> 直上		F 95	G <sub>2</sub> -63-15	0.67 × 0.60	0.06	IB4期	凹
F-52	G <sub>1</sub> -64-63	0.44 × 0.30	0.04	IB2期	凹	F 97	G <sub>1</sub> -63-99	0.42 × 0.31	0.03	IB5期	d <sub>1</sub> 直上
F-53	G <sub>1</sub> -64-34	0.33 × 0.32	-	d <sub>1</sub> 直上		F 98	G <sub>1</sub> -63-99	0.40 × 0.22	0.04	IB5期	d <sub>1</sub> 直上
F-55	G <sub>1</sub> -64-34	0.55 × 0.36	-	d <sub>1</sub> 直上		F 99	G <sub>1</sub> -63-98	0.36 × 0.30	0.03	IB5期	d <sub>1</sub> 直上
F-56	G <sub>1</sub> -64-34	0.57 × 0.36	-	d <sub>1</sub> 直上		F100	G <sub>2</sub> -63-16	0.58 × 0.58	0.08	IB3期	d <sub>1</sub> 直上
F-57	G <sub>1</sub> -64-44	0.64 × 0.37	-	d <sub>1</sub> 直上	凹	F101	G <sub>2</sub> -63-06-16	0.42 × 0.35	0.08	IB3期	d <sub>1</sub> 直上
F-58	G <sub>1</sub> -63-92	0.26 × 0.26	-	IB4期		F102	G <sub>2</sub> -63-16	0.48 × 0.48	0.08	IB3期	d <sub>1</sub> 直上、磨滅 凹
F-60	G <sub>1</sub> -64-70	0.70 × 0.50	0.07	IB4期	磨滅 凹	F103	G <sub>1</sub> -64-80	0.68 × 0.60	0.11	IB3期	凹
F-61	G <sub>1</sub> -63-89	0.86 × 0.82	0.11	IB3期	凹	F104	G <sub>1</sub> -64-80	0.36 × 0.24	0.10	IB3期	凹
F-62	G <sub>1</sub> -63-96	0.32 × 0.25	0.05	IB5期		F105	G <sub>1</sub> -64-80	- x -	-		削り込み
F-63	G <sub>1</sub> -63-78	0.56 × 0.50	0.04	IB4期		F106	G <sub>2</sub> -63-26	0.26 × 0.21	0.08	IB3期	
F-64	G <sub>1</sub> -63-92	0.38 × 0.32	0.03	IB4期		F107	G <sub>1</sub> -64-62	0.73 × 0.35	0.04	IB5期	
F-65	G <sub>1</sub> -63-92, G <sub>2</sub> -63-02	0.45 × 0.20	-	IB4期		F109	G <sub>2</sub> -63-17	0.69 × 0.52	0.09	IB3期	d <sub>1</sub> 直上
F-66	G <sub>1</sub> -63-78	0.58 × 0.48	0.06	IB4期		F110	G <sub>2</sub> -63-17	0.50 × 0.40	0.06	IB3期	磨滅 凹
F-67	G <sub>1</sub> -63-86	0.43 × 0.32	0.04	IB4期		F111	G <sub>1</sub> -64-63	0.74 × 0.45	0.03	IB4期	
F-68	G <sub>1</sub> -63-95	0.53 × 0.21	0.03	IB4期	削り込み	F112	G <sub>1</sub> -64-61	0.50 × 0.27	0.03	IB4期	
F-69	G <sub>1</sub> -63-94	0.25 × 0.24	0.04	IB4期		F113	G <sub>1</sub> -64-61	0.28 × 0.24	0.03	IB4期	
F-70	G <sub>1</sub> -63-87-88	0.70 × 0.50	0.06	IB5期	凹	F114	G <sub>1</sub> -64-61	0.31 × 0.27	0.03	IB4期	
F-71	G <sub>1</sub> -63-88	0.30 × 0.18	0.03	IB5期		F115	G <sub>1</sub> -64-61	0.45 × 0.42	0.06	IB4期	
F-72	G <sub>1</sub> -63-88	0.93 × 0.64	0.06	IB5期		F116	G <sub>1</sub> -64-61	0.28 × 0.19	0.03	IB4期	
F-73	G <sub>1</sub> -63-88	0.50 × 0.48	0.08	IB5期		F117	G <sub>1</sub> -64-71	0.26 × 0.23	0.05	IB5期	
						F120	G <sub>2</sub> -63-80	- x -	-		

#### (4) フレイクチップ集中・集石・Tピット状遺構

調査区の北東部平坦部にあるフレイク・チップの集中 (No. 1～9) は住居跡周辺にみられる揚げ土上面で検出されたものである。他についてはⅡ黒層中で検出されており、縄文時代中期後葉の時期のものと思われる。Tピット状遺構は当初小形のTピットと考えていたけれども、深さ、覆土の状態などが、これまで美沢川流域の他遺跡で発見されているTピットとはやや異にしていることから、一応Tピット状遺構として区別した。集石は南側にあるH-35・38の掘り込み面よりも深い処から検出されていることから縄文時代中期のものとした。(和泉田)

##### フレイク・チップ集中 (図Ⅲ-107～109、図版Ⅲ-55・57)

縄文時代中期後葉として報告したフレイク・チップ集中 (以下、集中と略す。) とは黒曜石のフレイク・チップが著しく集中しており、移植ゴテで土ごとそれらを採取しなければならないような状態のものを言う。集中の分布は、調査区中央と北東側の台地上に拡がる。この分布は大まかにⅢ群b-3類土器の分布と重複する。主要な遺物組成は、黒曜石フレイク・チップ、石槍未製品片 (以下、未製品と略す。) R-フレイク、土器である。確認面は住居跡群では揚げ土上面で、その他はⅡ層2・3・5回目から検出されている。形態については、一面に散っている様な状態であり集中No.12が円形の浅い皿状を呈していた以外は、いづれも不整形で特に掘り方は検出できなかった。以下検出面別に、分類した群ごとに説明する。

A群：住居跡群の北西側に位置する。6か所の集中が平均3.6m離れて群をなす。揚げ土上面に存在する。この群には未製品片が集中No.2・3から出土している。

B群：住居跡群の南側に位置する。3か所の集中が3.5m離れて群をなす。揚げ土上面に存在する。この群は3か所で最小の群であるが遺物総点数は最多の5,812点である。また、全ての集中から未製品片が出土している。集中No.5からは炭化したクルミの殻皮片が出土した。d<sub>1</sub>直上付近の焼土群Dと分布を同じくする。

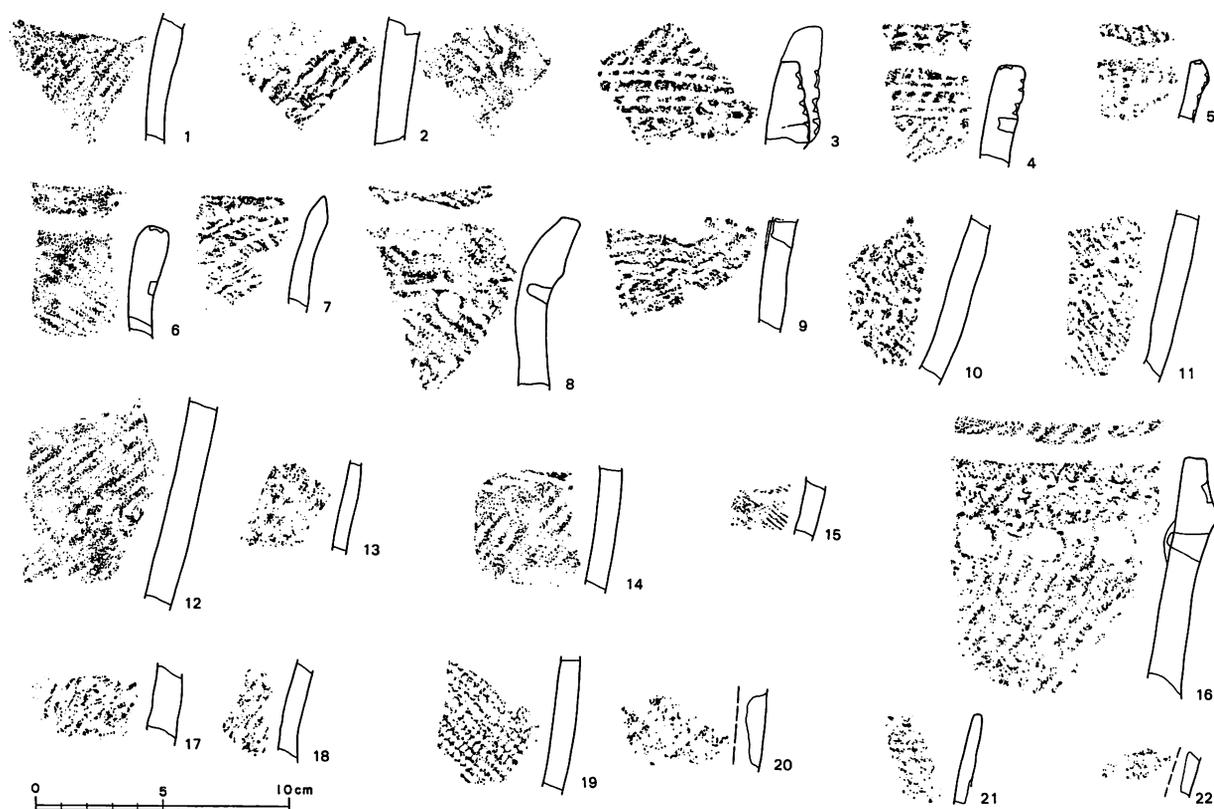
C群：G<sub>1</sub>-63-92・94、G<sub>2</sub>-63-04・05に所在する。3か所の集中が平均6.6m離れて群をつくる。集中No.12は径約30cm、深さ4cmの浅いくぼみにチップとパウダーがまとめられていた。Ⅱ黒2回目に存在する。

D群：G<sub>1</sub>-63-97に所在する。3か所の集中が平均2.6m離れて群をつくる。この群の組成は土器・未製品を含まず単純であり、遺物点数はA～D群最小の230点である。5回目検出焼土と分布を同じくする。

各集中の特徴をフレイク・チップと石槍の石質によって説明する。石質については肉眼による分類内容を下記に示す。なお、産地同定を意図していないので、分類した石質と原産地の石質の間に必ずしも対応関係は生じない。

1) 顆球なし：顆がなく強いガラス光沢を持ち真黒色のもの。同様に墨流し状になるもの。また、墨流し状の薄い部分に赤褐色になるもの。2) 小顆球縞：φ約0.5mm以下の顆球が少量あり、褐色がかった色調で縞状を呈する。3) 小顆球濃淡：2) に似ているが色調が曇りの濃淡がある。4) 顆球大：φ約1.0mm前後の発達した顆球を多量にもつ。

図Ⅲ-108・109のグラフから特徴を述べる。なお、このグラフは層位のはっきりしていない集中、未製品の出土していないD群は対象から外した。0.1g以下のチップがグラフのピークとなる例が集中No.1を除いた13例であった。石質については小顆球縞が最多を占めるのが11例、大顆球が占めるのが2例、他の石質が各1例であった。したがって、小顆球縞の石質で0.1g以下のチップが集中の主体を構成している。



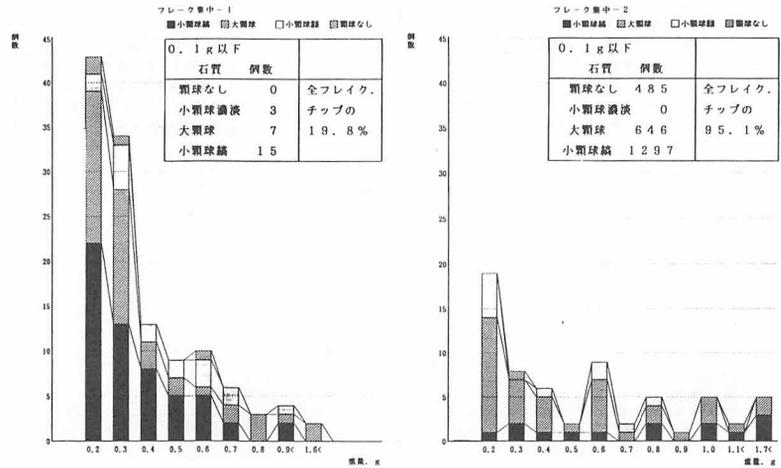
図III-107 フレイク・チップ集中 出土の土器

表III-35 フレイク・チップ集中出土遺物一覧

No. 1 石鏃 F F.C. 小計 斧 総計 掘り土上面 1 73 25 99 2 101	No. 2 ■b-3 ■a 小計 F RF F.C. 小計 斧 礫 礫片 総計 掘り土上面 56 1 57 127 5 2422 2554 1 33 34 6 2651
No. 3 ■b-3 槍末 F RF F.C. 小計 斧 礫 礫片 総計 掘り土上面 4 3 114 4 896 1017 9 1 1 1032	No. 4 ■b-3 槍末 F F.C. 小計 総計 掘り土上面 1 1 11 1691 1703 1704
No. 5 ■b-3 槍末 F RF UF F.C. 小計 礫片 総計 掘り土上面 12 1 134 2 1 3302 3440 5 3457 ※ 炭化クルミあり	No. 7 F F.C. 総計 掘り土上面 19 89 108
No. 6 ■b-3 礫片 槍末 F RF F.C. 小計 斧 礫 総計 掘り土上面 1 1 3 173 4 1691 1872 3 1 1877	No. 8 F F.C. 総計 掘り土上面 15 266 281
No. 9 ■b-3 槍末 F F.C. 小計 斧 礫片 総計 掘り土上面 5 2 24 1302 1328 2 1 1336	No. 11 ■b-3 槍末 F F.C. 小計 斧 総計 IB2回目 6 1 196 3482 3679 2 3687
No. 10 ■b-3 石鏃 槍末 F F.C. 小計 斧 礫 礫片 総計 IB2回目 8 1 3 161 243 408 6 1 1 424	No. 12 F.C. IB2回目 301
No. 13 ■b-3 F F.C. 小計 斧 総計 IB中 4 59 237 296 1 301	No. 14 礫片 F RF F.C. 総計 IB中 1 13 2 4 20 ※ 炭化クルミあり
No. 15 ■b-3 ■a 小計 F F.C. 小計 斧 総計 IB2回目 2 1 3 72 288 360 1 364	No. 16 F F.C. 小計 礫 総計 IB5回目 40 47 87 1 88
No. 17 F F.C. 総計 IB5回目 7 74 81	No. 18 F F.C. 総計 IB5回目 20 41 61
No. 19 ■b-3 F F.C. 小計 総計 IB3回目 2 59 237 296 397	No. 20 ■b-3 F RF F.C. 小計 総計 IB2回目 2 194 1 303 498 500
No. 21 ■b-3 礫片 F RF UF 礫 F.C. 小計 礫 総計 IB中 2 1 928 1 1 1 6775 7707 2 7711	

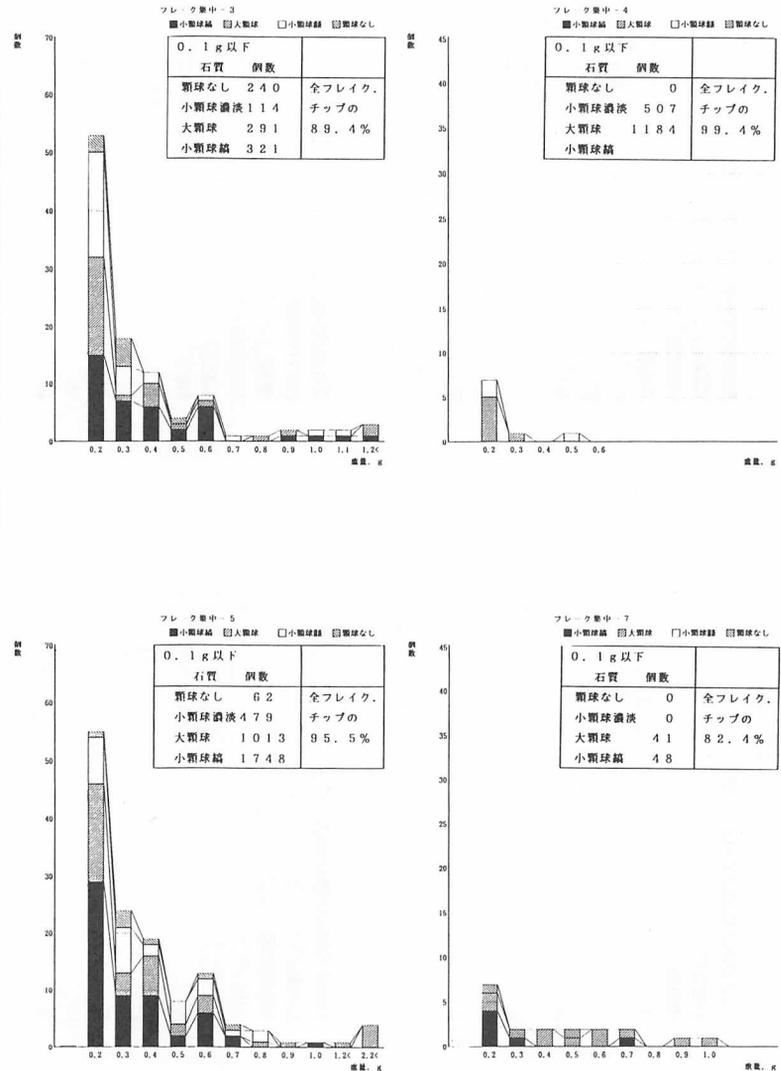
表Ⅲ-36 検出面別の集中一覧

検出面	群	遺構番号	遺物点数
揚2土目土面Ⅲ	A	1. 2. 3. 7 8. 9	5444
	B	4. 5. 6	5812
2回目	C	10.11.12.15	4771
5回目	D	16. 17. 18	230
2目	群を	20	498
3目	もい	19	298
?	成りし	13. 14. 21	556,20,7711



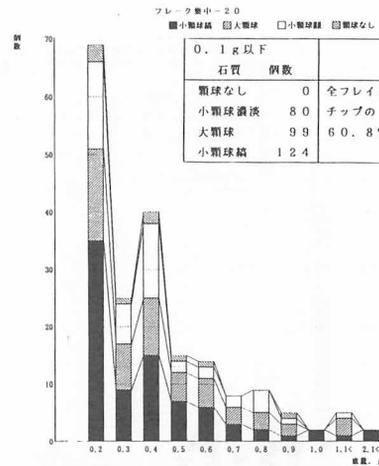
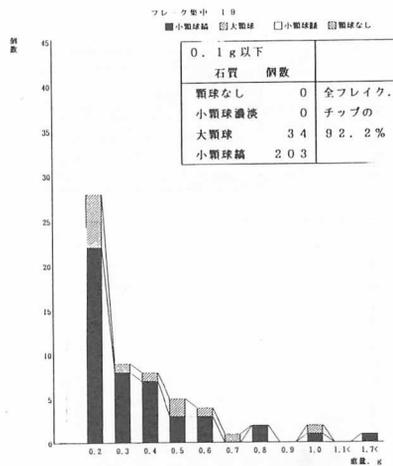
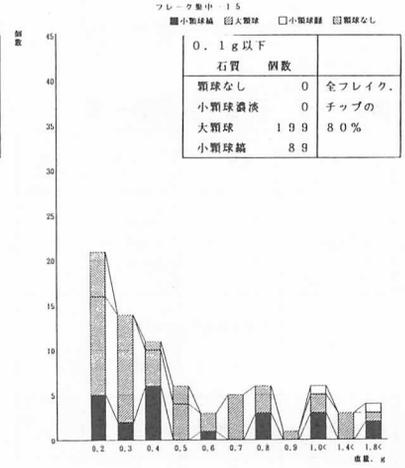
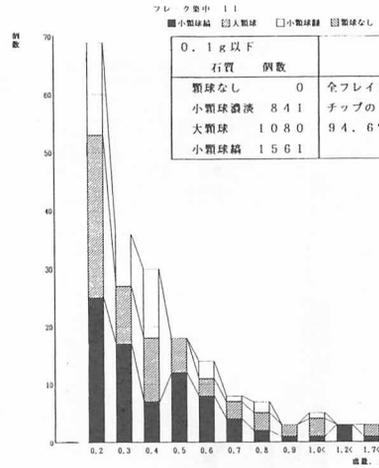
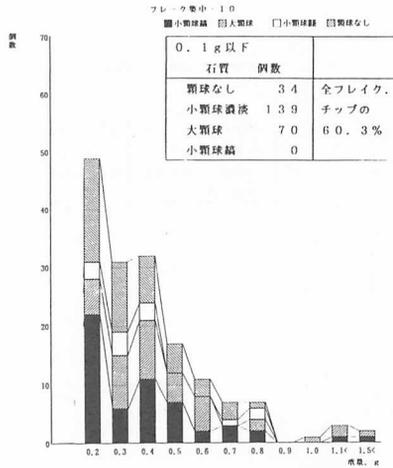
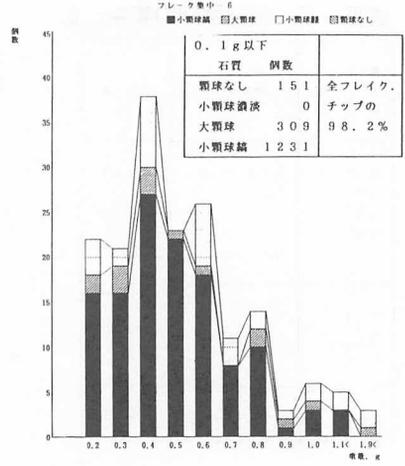
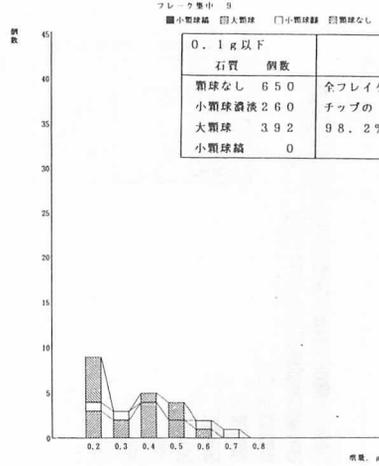
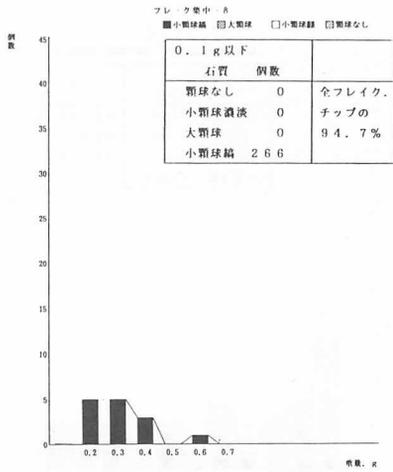
表Ⅲ-37 石槍未製品等一覧

遺構名	遺物名	石質	個数
フレイク集中-2	R-フレイク	大顆球	1
		小顆球、縞	3
		顆球なし	1
フレイク集中-3	石槍未製品片 R-フレイク	大顆球	3
		大顆球	3
フレイク集中-4	石槍未製品片	大顆球	1
フレイク集中-5	石槍未製品片 R-フレイク U-フレイク	大顆球	1
		大顆球	2
フレイク集中-6	石槍片	大顆球	1
		小顆球、縞	2
	石槍未製品片 R-フレイク	小顆球、濃淡	2
		大顆球	1
		小顆球、縞 小顆球、濃淡	1 2
フレイク集中-9	R-フレイク	大顆球 小顆球、濃淡	1 1
フレイク集中-10	石槍片 石槍未製品片	小顆球、縞	1
		大顆球	3
フレイク集中-11	石槍未製品片	顆球なし	1
フレイク集中-20	R-フレイク	顆球なし	1



図Ⅲ-108 黒曜石フレイクの重量分布(1)

Ⅲ 美々3遺跡第Ⅱ黒色土層の調査



図Ⅲ-109 黒曜石フレイクの重量分布(2)

また、0.1g以上の重量パターンについては次のとおりである。量が多く、広い重量分布を示す例が6例（集中No. 5・10・11・19・20）。少量で狭い重量分布をもつ例が3例（集中No. 4・8・9）。量は多くなく、広い重量分布をもつが明瞭なピークを持たない例が3例（集中No. 2・7・15）。量が多く広い重量分布をもち、0.2g以外にピークをもつ例が2例（集中No. 3・6）。以上4種類のパターンがある。1番目は大きな素材から剥片剥離まで、2番目は剥片から細部調整を、3番目は1と2番目を合わせたもの、4番目は1番目と同じ、というような過程を表わしているのだろうか。

また、グラフと表Ⅲ-37を合わせて見ると、未製品片とR-フレイクの石質がその集中内で最多を占める石質と一致するものは集中No. 6、上記で2～3番目の石質を占めるものは集中No. 5・3、未製品片の石質がその集中内で最多を占める石質と一致するものは集中No. 4、その一方で未製品片の石質が集中内に存在しないものは集中No. 11である。以上より、集中No. 6は石槍製作に関わり、集中No. 3・5は石槍以外の剥片石器製作に関わるものであろうと考え得る。（鈴木）

**遺物：**土器 フレイク・チップ集中No. 2（1～13）、同No. 5（14）、同No. 6（15）、同No. 9（16）、同No. 11（17・18）、同No. 15（19・20）、同No. 20（21）、同No. 21（22）から出土している。10はⅢ群a類土器で、他はすべてⅢ群b-3類土器である。1は口縁の外反して羽状縄文の施されたもの、2は結束第2種の回転文の加えられたものである。3は赤色顔料の塗布されたもので、口縁に小突起があり、口縁部に幅のせまい半截竹管状工具により横位の押し引き文を3段に施されている。丁寧な作りである。4は口縁が肥厚せず、口唇と口縁部に押し引き文の施されたものである。5は小形の土器で口唇と、口縁部から体部にかけて押し引き文の施されているものである。6は口縁部が無文のもので、口唇に斜方向からの刺突が加えられている。7は口縁の断面形が尖るもので、無節の条が交差していて、あるいは付加条の原体によるものとみられる。8は口縁の外反するもので、器面と口唇に縄文が施されている。体部には結束羽状縄文が認められる。9・11は結束第2種の回転文の認められるものである。10は縄文の間に縄端によるものとみられる刺突が加えられている。12は結束のある斜行縄文の施されているものである。この土器片の面には細線が認められ、その線に沿って破損している。土器片を何らかに転用するため、土器片に細線で必要な位置を示し、その線に沿って注意深く打ち欠いたものとみられる。13は薄手で斜行縄文の認められるものである。14は結束の回転文の加えられているものである。15は無節の縄文の施されたものである。16は厚手で、口縁部に刺突が加えられている。H-19より同一個体の破片が出土している。17は二次焼成によるためか、器面の剝落が多い。18は斜行縄文の施されたやや薄手のものである。19は内面が平坦に調整されている。ノグップⅡ式に近いものとみられる。20は粗い斜行縄文の施されたものである。21は薄手で横走縄文の施されているもので、内面も一部磨かれている。ノグップⅡ式に近いものとみなされる。22は赤変した底部付近の小片である。

**集石（S-1）**（図Ⅲ-110、図版Ⅲ-55）

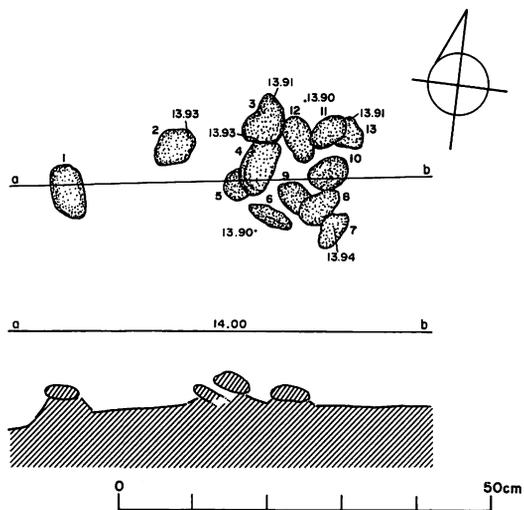
**位置：**G<sub>2</sub>-64-44 II黒層を10cm～15cm掘り下げたところで礫の集中を検出する。II黒層中位にあり、0.4m×0.9mの範囲に13個の礫がかたまつて出土する。余り重なり合っていない。遺構に伴うものかどうか検出作業を行なったが、遺構は検出されなかった。礫は扁平なものが多く、楕円形が棒状の細長いものである。重さは40g～80gで、長さは5cm～7cmである。No. 4のようにやや大きく重いものもある。材質は泥岩や砂岩製のものが大半である。出土層位、周辺の出土遺物などからみて、縄文時代中期後葉の時期のものと思われる。（和泉田）

**Tピット状遺構（T-1）**（図Ⅲ-111、図版Ⅲ-55）

**位置：**H<sub>1</sub>-63-04 **規模：**1.8m×0.46m×0.38m **平面形：**溝状 **長軸方向：**N-21°-

W

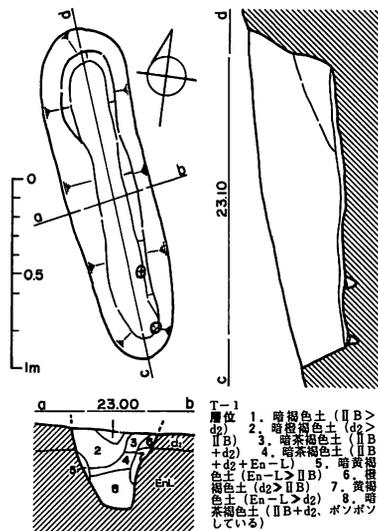
d<sub>2</sub>層上面で検出された。台地の縁辺部に位置し、長軸の方向は等高線に対して直交している。横断面はEn-L層を30cmほど掘り込んでつくられ、北西から南東に向ってわずかに傾斜する。横断面は上部の崩落によりV字状になっている。南東壁際には杭状の小ピットが2個検出されている。小ピットの覆土はボンボンした黒色土である。遺物は覆土の上層からⅢ群b-1類の土器片14点、下層上位からⅢ群b-3類の土器片が1点出土した。縄文時代中期の時期かと思われる。(中田)



図Ⅲ-110 S-1 実測図

表Ⅲ-38 集石出土礫一覧

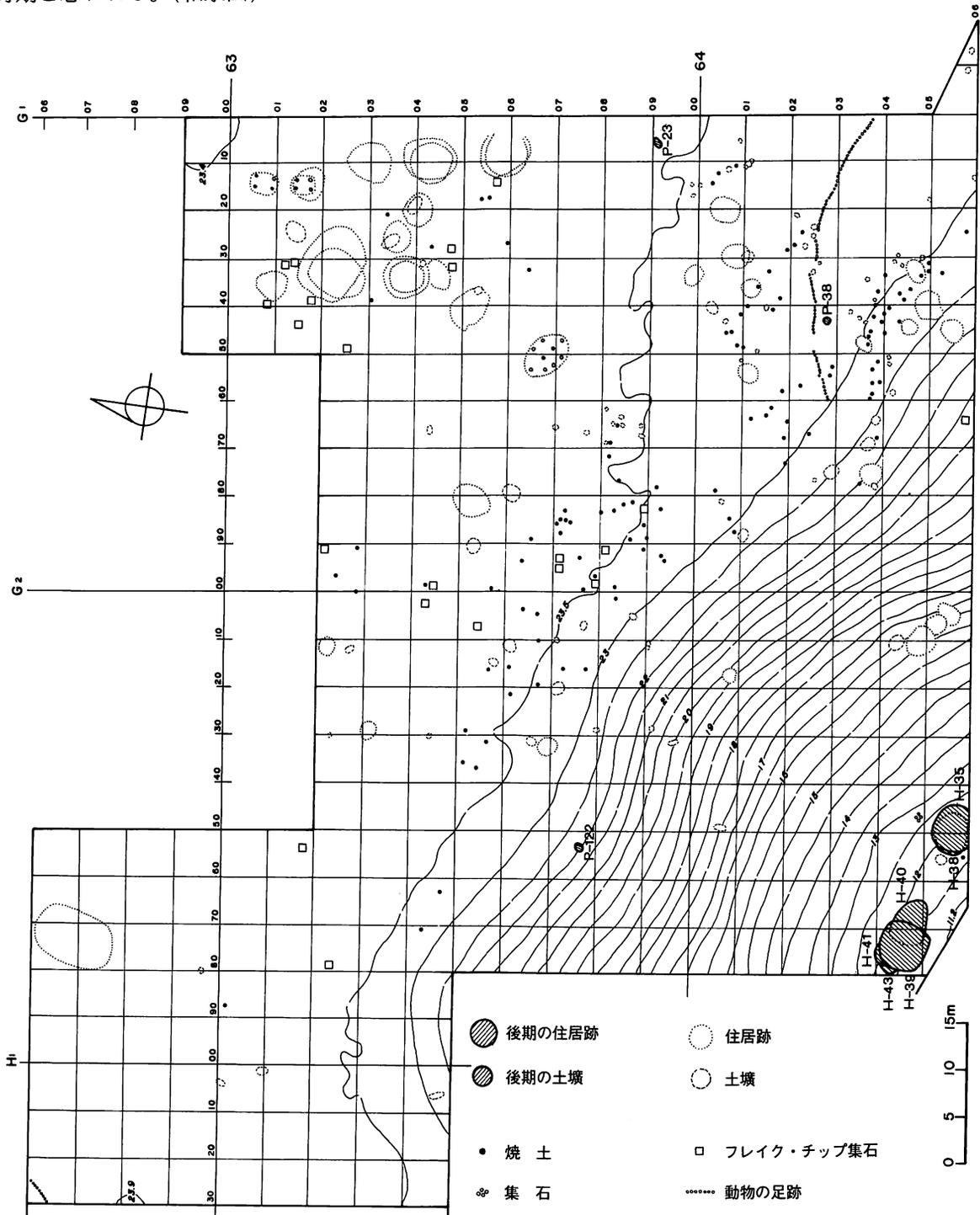
順序	大きさ (cm)	重量 (g)	材質
1	7.7×4.4×1.7	86	砂岩
2	6.5×5.2×2.0	86	チャート
3	6.9×4.9×2.5	106	珪岩
4	9.6×4.1×2.3	167	礫岩
5	5.9×4.5×2.1	83	砂岩
6	6.3×3.8×1.4	47	泥岩
7	6.2×3.3×1.4	50	砂岩
8	6.1×3.9×2.2	64	泥岩
9	5.5×4.2×1.9	58	泥岩
10	6.1×3.9×1.5	53	砂岩
11	6.1×3.7×1.2	39	砂岩
12	5.9×3.8×1.5	54	砂岩
13	4.7×3.6×1.3	37	泥岩



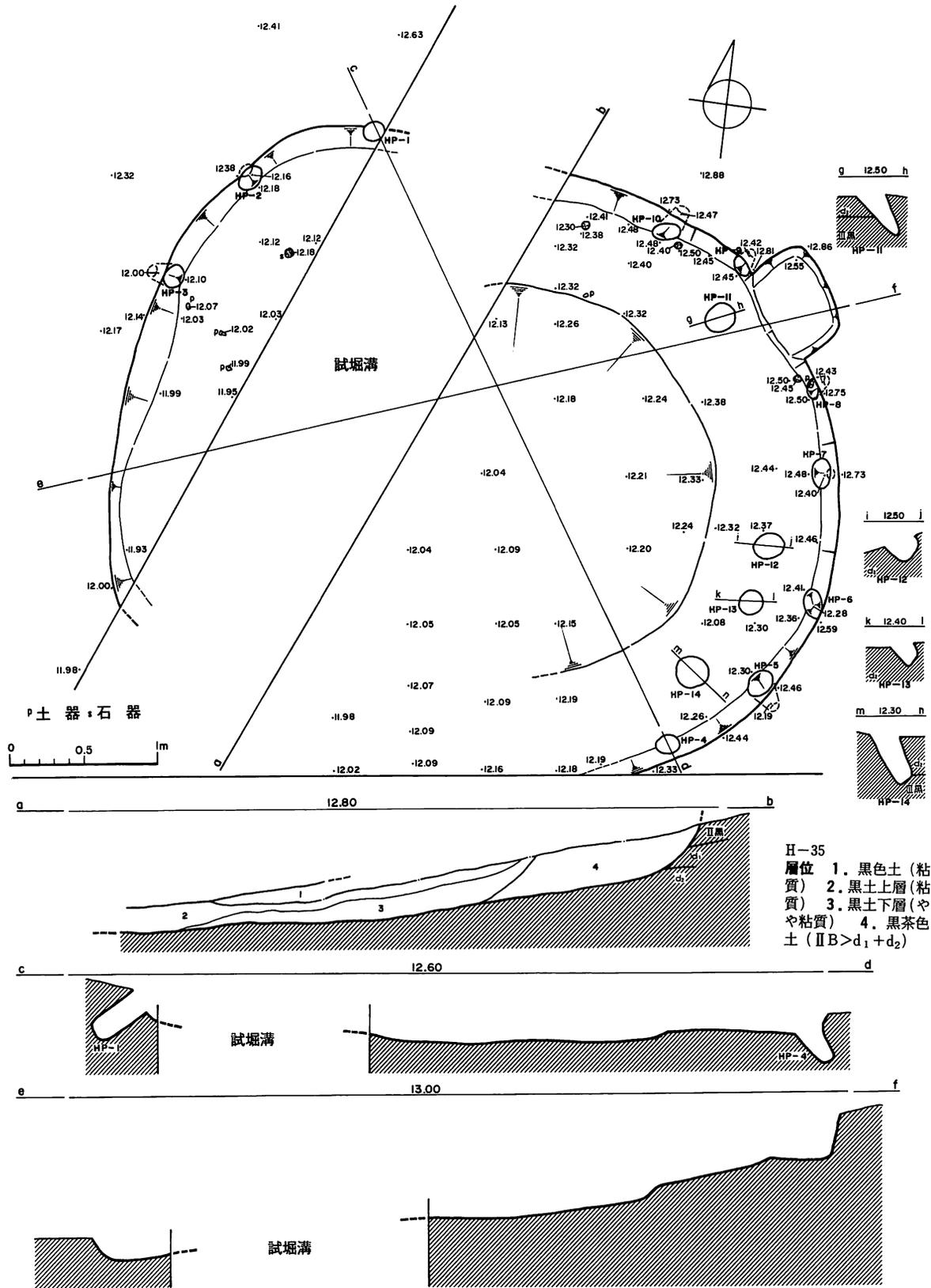
図Ⅲ-111 T-1 実測図

3 縄文時代後期の遺構と遺物

(1) 住居跡 6軒の住居跡は、調査区の南西部で、斜面から緩斜面へ移行するゆるやかな斜面上に位置している。6軒のうちのH-41と43はH-39に大きく切られており、全体像は不明である。ただ壁の立ち上がりから推測すると、浅い皿状のものかと思われる。他は掘り込みをもつ竪穴住居跡である。遺構の出現状況から判断すると、調査区外の南側斜面に遺跡は続いていくものと考えられる。住居跡内および、周辺から出土しているのはIV群a類の土器であり、縄文時代後期初頭（余市式期）の時期と思われる。（和泉田）



図III-112 縄文時代後期の住居跡と土壌位置図



図III-113 H-35 実測図

## H-35 (図Ⅲ-113~115、図版Ⅲ-58)

**位置：**G<sub>2</sub>-64-45、55 北東から南西へゆるやかに傾斜する斜面に位置する。標高は12.8m~12mである。 **規模：**4.96m/4.6m×(4.4)m/(4.0)m×0.3m **平面形：**卵形

**床面積：**15.28m<sup>2</sup> **長軸方向：**N-76°-W

**確認・調査・土層：**試掘溝の断面によって、住居跡の存在が確認される。Ⅱ黒層の上面で若干くぼ地になっているのも確認され、土層観察用のベルトを設定し、土層を観察しつつ順次掘り下げ床、壁の検出作業を行う。黒土上、下層が15cm~20cm堆積し、それを除去したところで、炭化物の散在している面を検出する。北壁側にはⅡB > d<sub>1</sub> + d<sub>2</sub>の汚れた土が流れ込んだ状態で堆積しているのが確認される。

**床面：**南西方向にゆるやかに傾斜している。d<sub>2</sub>中に構築されている。中央部分が1.5m×1.3mのほぼ長円形状にわずかにくぼんでいる。

**壁：**南壁は調査区外にある。北、東、西壁はやや急傾斜で立ち上がる。北壁高は30cm、東壁高は27cm、西壁高は17cmである。

**炉跡：**焼土などは検出されていない。

**付属ピット：**壁面中に内側に傾く柱穴状小ピットが10個検出される。覆土はd<sub>1</sub> > ⅡBである。また床面東側から検出された4個(HP-11~14)の柱穴状小ピットはすべて内側に傾いている。覆土はd<sub>1</sub> + d<sub>2</sub>である。これらは本遺跡の床面を若干掘り下げたところで検出されたもので、H-35の柱穴状小ピットの傾きから考えると、H-35のものとするよりもH-38に伴うものとする方が適切かと思われる。

表Ⅲ-39 H-35出土遺物一覧

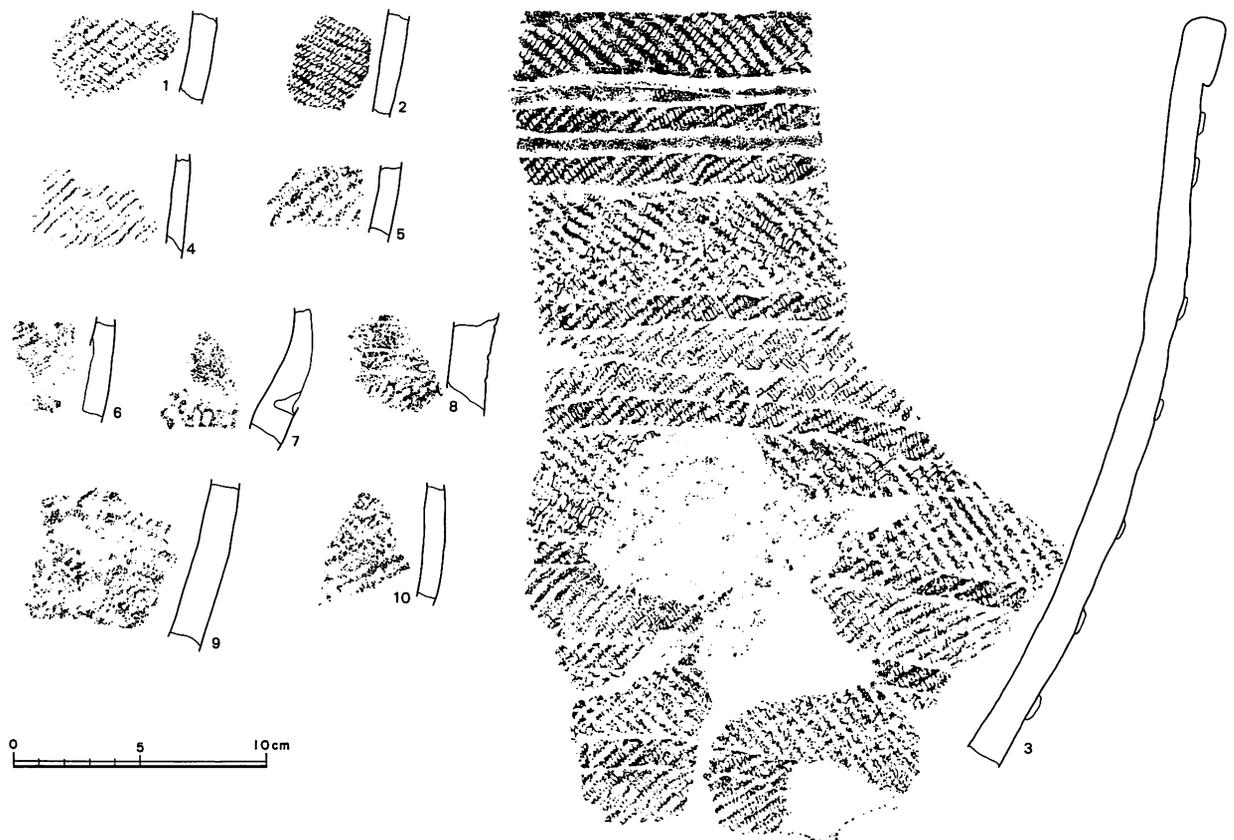
出土遺物	北	南	Ⅱa	小計	RF	コ片	F.C.	小計	斧	瓦片	土	台	小計	礫	瓦片	総計
覆土1					1		1	2						5	1	8
2	15	1	16													16
覆土	1	11	12						1		1	1	3			15
床面	4	1	5			1		1		1						7
計	20	13	33		1	1	1	3	1	1	1	1	3	5	1	46

**遺物出土状況：**床面上から散在的に遺物が出土している。またHP-6の覆土中からⅣ群a類土器(図Ⅲ-114-3)が壁に接するように出土している。

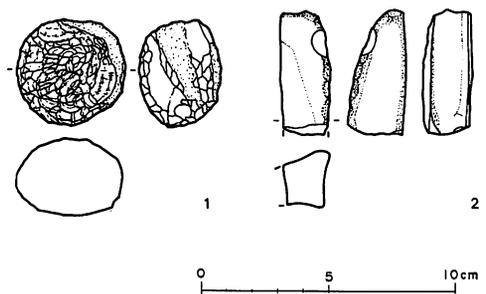
**時期：**掘り込み面はⅡ黒層上位である。HP-6出土の土器や床面直下からⅣ群a類土器が出土していることから縄文時代後期初頭(余市式期)の時期と思われる。

北東壁外には0.7m×0.4mの長形状の段状のものが検出されている。(和泉田)

**遺物：**土器 1~4はⅣ群a類土器、5~10はⅢ群b-3類土器である。1・2は薄手のもので、1は器壁にわずかにふくらみをもち、2は直線的である。内面は丁寧に調整されている。縦位に回転施文された縄文がみられる。1の左端側にかすかに縦位の圧痕が認められる。3は厚手のほぼ器形の知られるものである。口縁部に幅広く無文部を設け、体部に整った羽状縄文を施したのち、口縁に沿う幅の広い貼付帯と、口縁部の無文部、体部の羽状縄文のかわり目に付された貼付帯上にLRの原体による斜行縄文を施している。口唇から内面は丁寧に調整されている。器面の縄文の内、RLの原体による施文に重ねてLRの原体による施文の認められる部分がある。貼付帯上への施文と



図Ⅲ-114 H-35 出土の土器



図Ⅲ-115 H-35 出土の石器

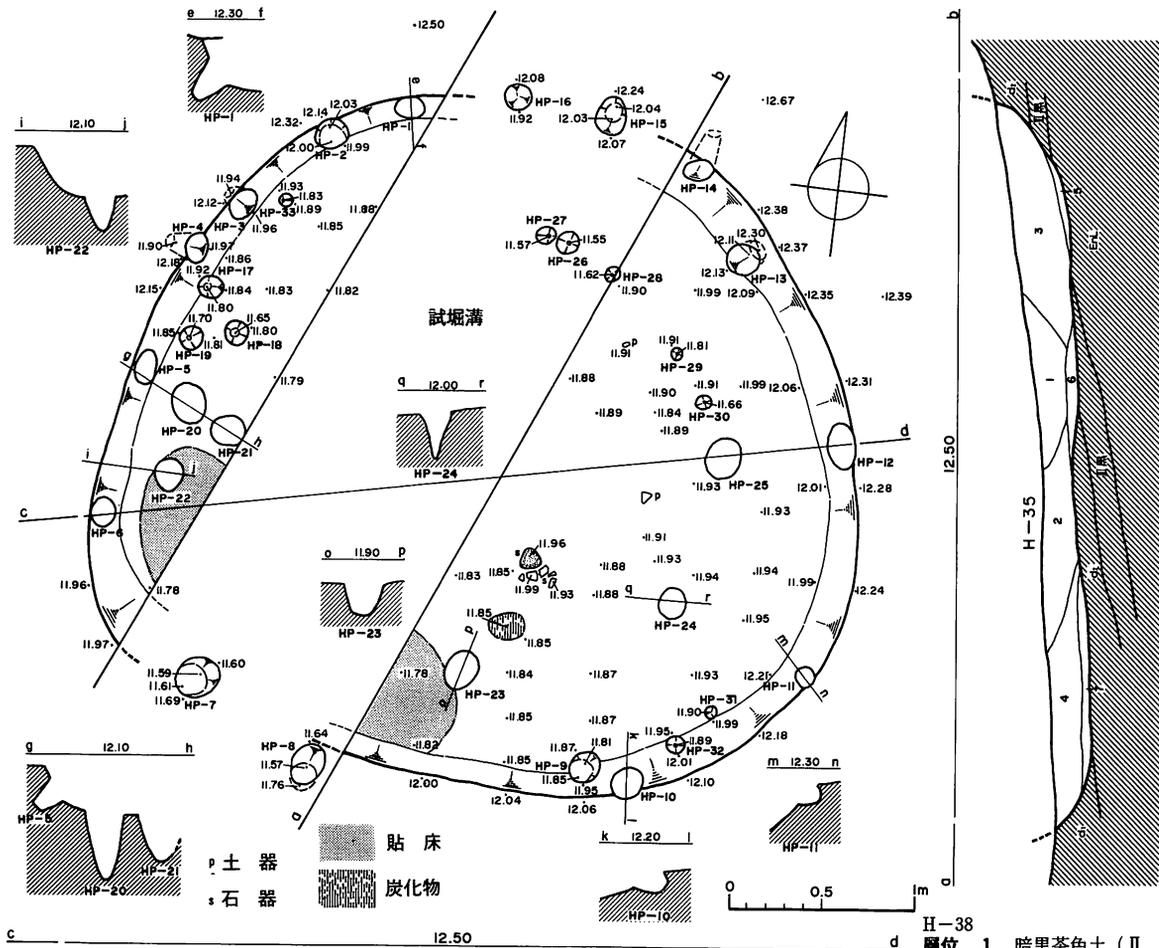
一緒に重ねられたものかとみられる。4は無節の斜行縄文の認められるもので、煉瓦台式の特色を示している。H-40の資料と同一個体に属する。器壁が薄く、便宜的にⅣ群a類としておく。5・6には斜行縄文が認められる。7は厚手の、胎土に雲母を含むものである。8・9は結束のある斜行縄文の施されたものである。10は羽状縄文の施されているものである。

石器 1は黒色片岩たたき石。球形転礫を素材とし、ほぼ全面に剝離調整を施してさらに丸味を出している。2は中粒砂岩砥石。粒子はそろわない。非常によく固結している。色調は灰白色である。

**H-38** (図Ⅲ-116・117、図版Ⅲ-59)

**位置：**G<sub>2</sub>-64-45、55 北東から南西へ傾斜する緩斜面に位置する。 **規模：**4.04m/3.66m×3.6m/3.25m×0.22m **平面形：**卵形 **床面積：**9.87m<sup>2</sup> **長軸方向：**N-67°-W

**確認・調査・土層：**試掘溝の断面土層観察で、H-35に上半を削平された遺構が確認される。土層を確認しつつ、H-35床面下のd<sub>1</sub>、d<sub>2</sub>、ⅡBの混合土を掘り下げ、床、壁の検出作業を行う。覆



図Ⅲ-116 H-38 実測図

土は  $d_1 + II B$ 、 $d_2 + II B$  で約20cmの層厚がある。

**床面：**やや凹凸があるが、ほぼ平坦で、南西側にゆるやかに傾斜している。En-L層を若干掘り込んで構築されている。床面直上には炭化物が散在し、木の枝を思わせる棒状の炭化材がややまとまって検出されている。南側壁付近ではEn-L + III Bの粘質土が貼床状に見られる。

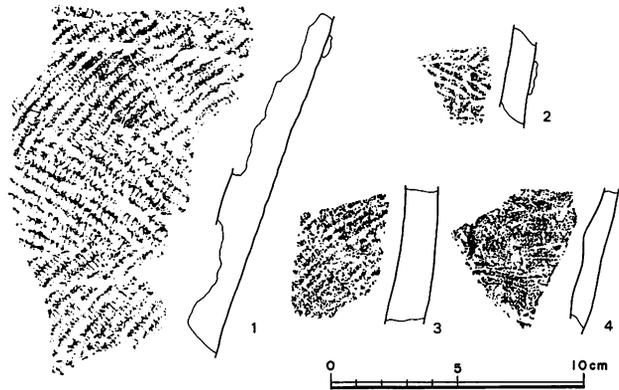
**壁：**全体的にはほぼ垂直的な立ち上がりである。

**炉跡：**焼土などは検出されていない。

**付属ピット：**柱穴状小ピットは全部で34個検出されている。壁面中の16個は、覆土が  $d_2$

表Ⅲ-40 H-38出土遺物一覧

出土遺物	北	南	Na	小計	掘器	F	小計	計F	総計
覆土上層	5	9	14			1	1		15
下層	1		1						1
床面			1	1	1		1	1	3
計	6	10	16	1	1	1	2	1	19



図Ⅲ-117 H-38 出土の土器

+Ⅱ B > d<sub>1</sub> でやわらかく、内傾している。床面上の18個は、覆土が d<sub>1</sub> > Ⅱ B で、直立している。

**遺物出土状況：**床面から土器片、石器などが数点出土している。他は覆土中からの出土である。H-35床面下で覆土最上層からⅣ群 a 類土器がかたまって出土している。

**時期：**掘り込み面は不明である。覆土中からⅣ群 a 類土器が出土していることから、縄文時代後期初頭（余市式期）の時期と思われる。

H-35の床面下で検出された柱穴状小ピットは、本遺構に伴うものと考えられる。ピット内覆土から考えると、壁外をめぐる小ピットから壁面中の小ピットへと、建て換えが行なわれたことも推測される。（和泉田）

**遺物：**土器 1・2はⅣ群 a 類土器である。3・4はⅢ群 b-3 類土器である。1は体下半の破片で、LR と RL の原体による羽状縄文の他に貼付帯を施し、その上に縄文を施している。H-35の3と同一個体に属するとみられる。2はLRの原体による斜行縄文の地に貼付帯を施しさらに縄文をつけるものでH-39の7と同一個体に属する。3は斜行縄文の浅く施されたもの、4は僅かに縄文の施されたもので器面に擦痕があり、内面の凹凸は著しい。

**H-39**（図Ⅲ-118~120、図版Ⅲ-60~64）

**位置：**G<sub>2</sub>-64-64、74、75 北から南へ傾斜する緩斜面に位置する。 標高は12.35m~11.95mである。 **規模：**5.67m/5.4m×5.0m/4.6m×0.45m **平面形：**丸味のある台形

**床面積：**21.11m<sup>2</sup> **長軸方向：**N-84°-W

**確認・調査・土層：**Ⅱ黒層上面でG<sub>2</sub>-64-74周辺において大きくくぼ地になっているのが確認される。また試掘溝の断面観察によって遺構があることも確認された。土層観察用のベルトを設定し、Ⅱ黒層を掘り下げる。Ⅱ黒層を10cm~15cm掘り下げたところで、長円形状の黒色土の堆積が検出される。黒土上・下層を除去し、Ⅱ B + d<sub>1</sub> + d<sub>2</sub> の混合土の上面で焼土が検出される。一時期生活の場として利用されていた可能性がある。この混合土は20cm~30cmの層厚があり、この下に炭化物の混入する黒茶色土が薄く堆積する。覆土は、中央部分にⅡ B > d<sub>2</sub> の軟質の土が堆積し、西、南側にはⅡ B + d<sub>1</sub> > + d<sub>2</sub> の堅い土が厚く堆積している。また北、東側にはⅡ B + d<sub>1</sub> < d<sub>2</sub> の赤っぽい土がやはり厚く堆積している。床面直上の黒茶色土、およびⅡ B + d<sub>1</sub> < d<sub>2</sub> の土には炭化物が多量に混在している。

**床面：**平坦で、d<sub>2</sub>中に構築されている。床面直上3cm~5cmにはd<sub>1</sub> > d<sub>2</sub>の汚れた土があり、炭化物が多い。中央部南側にはd<sub>2</sub>上にEn-Lが5cmほど堆積しており、貼り床と思われる。

**壁：**全体に急傾斜の立ち上がりである。北壁は深く、壁高は40cm~45cmである。他は25cm~30cmである。壁面にはⅡ黒の軟質の土が全体にみられた。

**炉跡：**焼土などは検出されていない。ただ南壁付近床面上に10cm+20cmの範囲にd<sub>2</sub>の焼けた痕跡が認められている。

**付属ピット：**柱穴状小ピットは25個検出されている。このうち20個は壁際から壁面中にあり、直立し

表Ⅲ-41 H-39出土遺物一覧

(45×10)

出土遺物	北壁	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	小計	石輪	輪片	撥片	F	RF	UF	F.C.	小計	石	砂	鉄	釜	すり	瓦	た	石	小計	礫	片	総計	
覆土直上			1	1	1				2			2	5												6	
上層	13	5	2	8	28			1	18		1	31	51			1								1	3	84
下層	10	16		1	27				6		1	2	9		1	2	11	1	1	1	1	16		1	53	
壁面	1	2			3																				3	
床面直上	4	6			10																				10	
床面		1			1		1		2	1			4	1				1	1			2			1	
計	28	30	2	10	70	1	1	1	28	1	1	35	69	1	1	3	12	12	1	1	18	1	4	167		

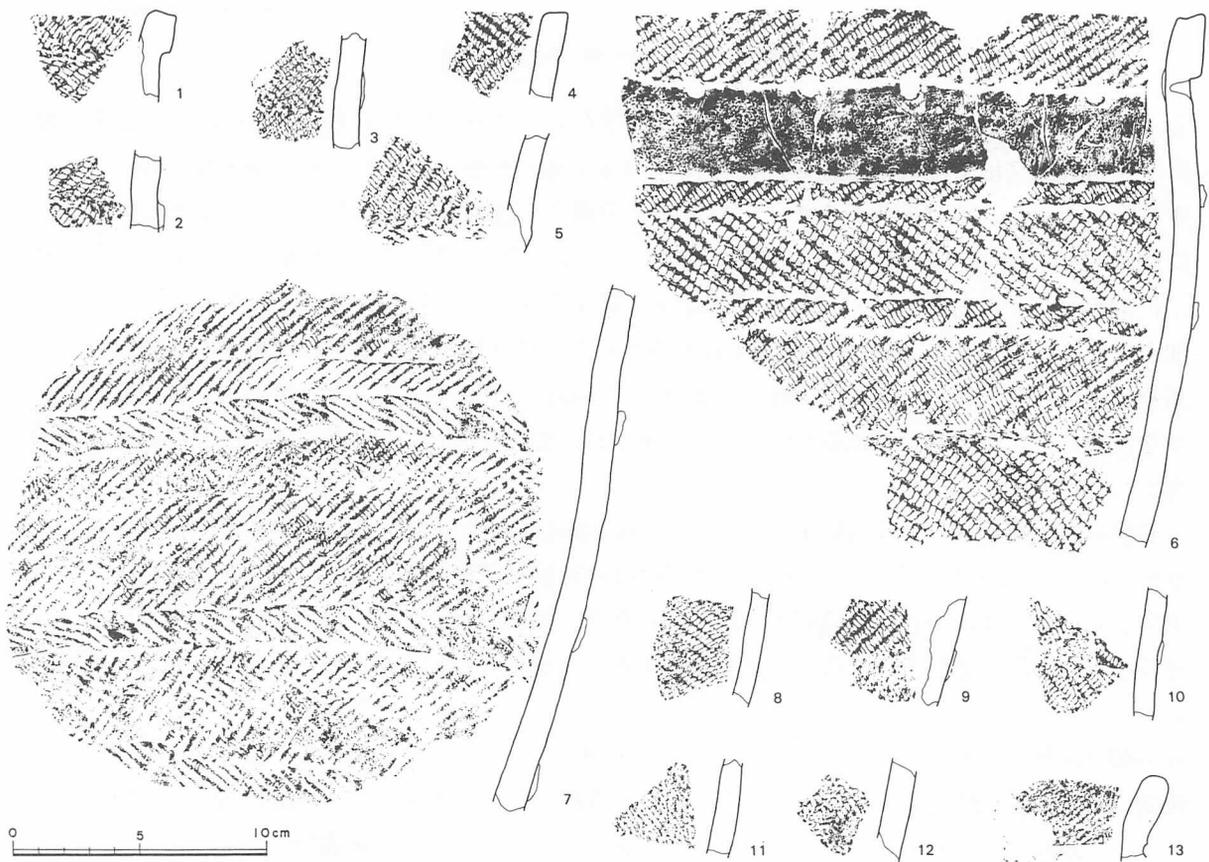
ている。HP-1、20は軟質の黒色土が入り、きわめて丁寧につくられている。床面上には5個の小ピットがあり、覆土は $d_1 + d_2 > III b$ で、直立している。支柱穴の一部分と思われる。

**遺物出土状況**：北東壁際の床面直上で、器面を上にし、押しつぶされた状態で土器片が出土している。また北東壁では、流れ込んだ状態で土器が一括出土している。

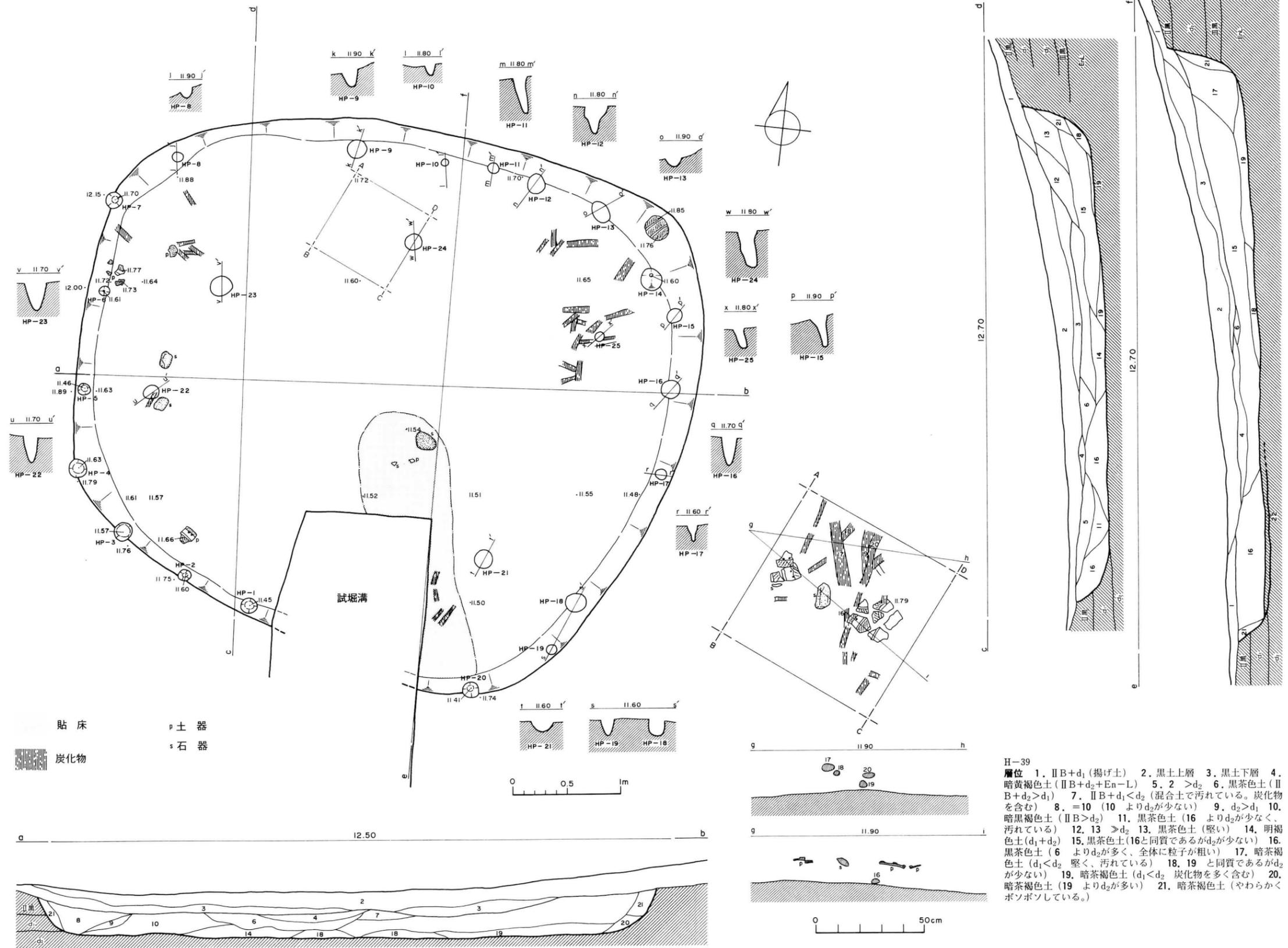
**時期**：掘り込み面はⅡ黒層上位である。床面、床面直上、壁、覆土から出土している土器はⅣ群a類土器であることから縄文時代後期初頭（余市式期）の時期と思われる。

H-40、41、43を切ってつくられている。H-40と同様に炭化物、炭化材状のものなどが床面直上から多数検出されており、焼失家屋跡かとも考えられたが、それを裏付ける明瞭な状況は確認されなかった。（和泉田）

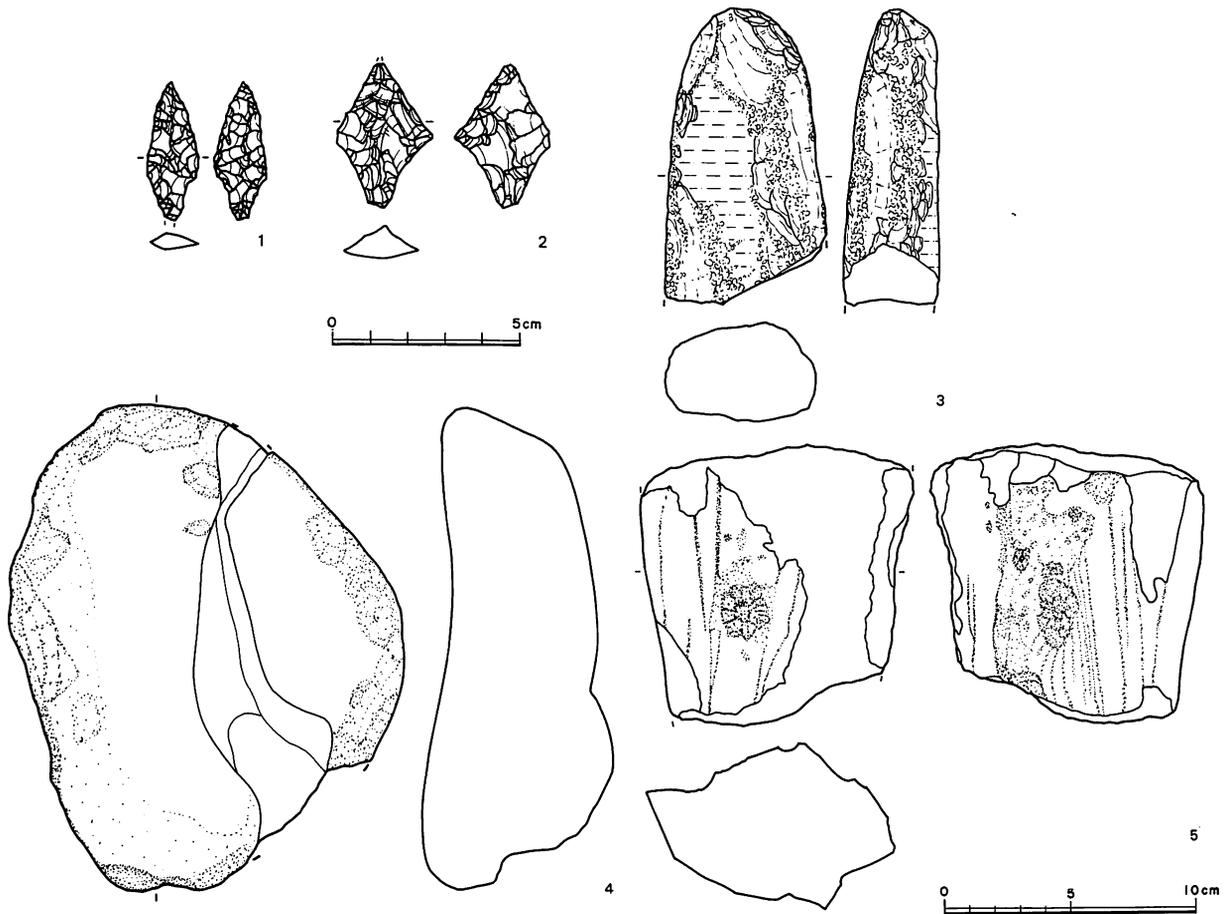
**遺物**：土器 1～10・13はⅣ群a類土器、11・12はⅢ群b-3類土器である。1は器面に縦位、貼付帯上に横位の回転施文のあるもので、H-43の1と接合する。2も器面に縦位、貼付帯上に横位の施文がある。胎土に海綿骨針を含む。包含層に接合する資料がある。3は薄い貼付帯の施されたもので、器面の縄文原体はLR、貼付帯上のはRLである。4は口縁部に薄い貼付帯のあるもので、器面にLRの原体による縄文を施したのち、貼付帯上にRLの原体による縄文を施し、口唇から内面を磨き調整している。胎土に海綿骨針を含む。5は4と同一個体で接合する。薄い貼付帯のところに、羽状縄文の境をおいていて、煉瓦台式の特色を示している。4と接合することから便宜的にⅣ群a類とする。H-40の資料と同一個体である。6はあらかじめ口縁に無文部を設け、体部に羽状縄文を施したのち、貼付帯上に縄文を加えたもので、H-40の底部と包含層の破片を介して接合する。7は皿状に加工されたかと思われる大形土器片であるが、薄いけれども明瞭な貼付帯が三条認められ



図Ⅲ-119 H-39 出土の土器



図III-118 H-39 実測図



図Ⅲ-120 H-39 出土の石器

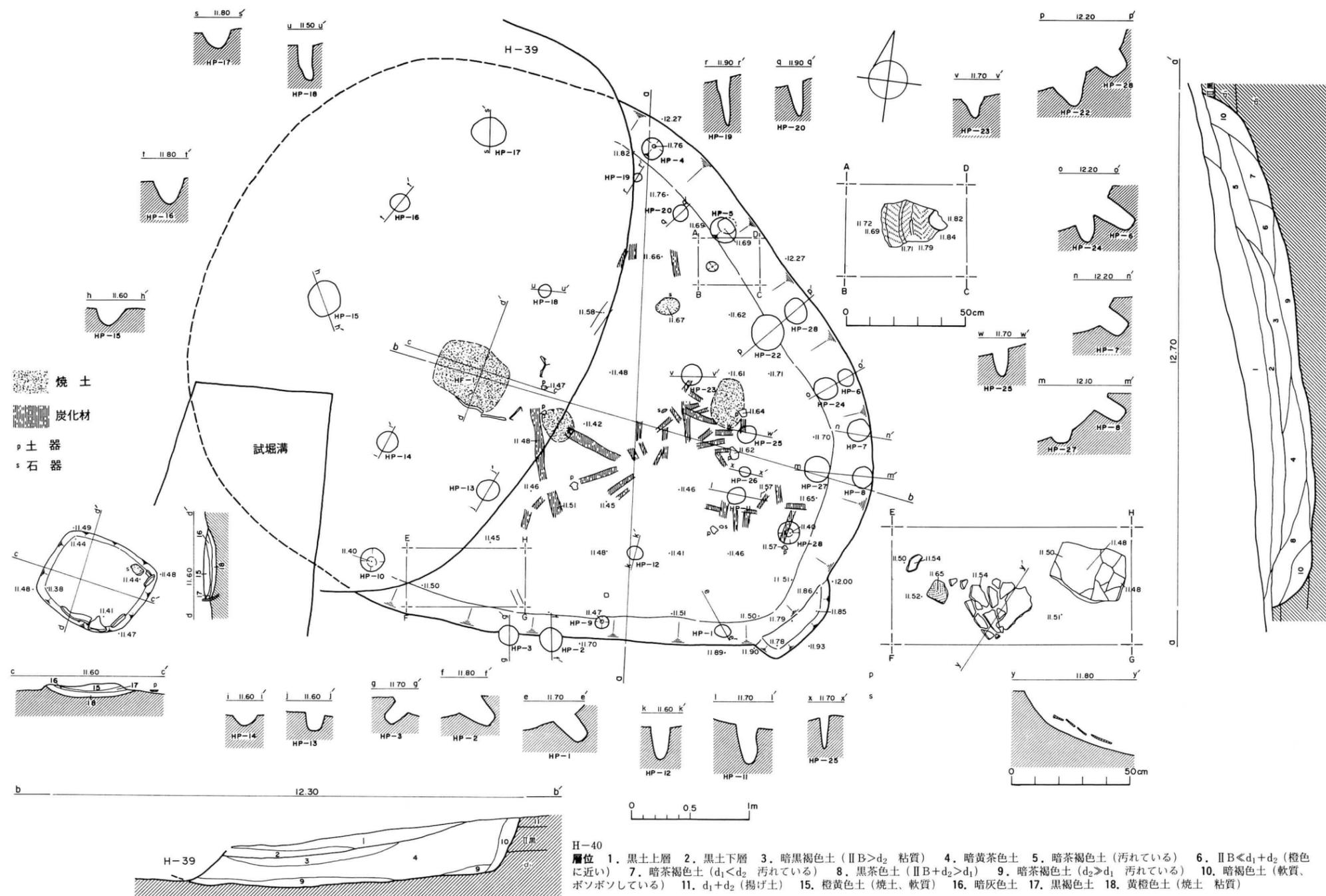
る。この他、上と中の貼付帯間に貼付帯状のわずかに高まる部分がある。文様は細かいLRの原体による斜行縄文地に貼付帯を施し、Rの原体による縄文を施している。H-38・40に同一個体に属する資料がある。8は薄手のもので、縦位施文の縄文が認められる。9はLRの原体による縄文地に貼付帯を施するものである。貼付帯は欠損している。10はLRとRLの原体による羽状縄文の地に、貼付帯を施し、貼付帯上にはRLの原体による縄文を施したのち、縄端によるかともみられる刺突を加えている。H-40に同一個体に属するものがある。11は撚糸文の施された胴部破片である。内面調整は平坦になされている。12は縄文施文後になで調整されたものとみなされる。13は口縁がゆるやかな波状を呈するとみなされるもので、浅く施された縄文を地として沈線文が施されている。内面は磨かれている。

石器 1は有茎鏃。2は石槍またはナイフ。最大幅は中位にある。1・2は黒曜石製である。3は緑色泥岩石斧未製品。両主面は転礫面、両側縁は一部敲打調整が施されている。基端部は火を受けて黒変している。4は中粒砂岩砥石で、粒子はそろそろ。固結はよくない。使用面はくぼんでいる。5は細粒砂岩有溝砥石で粒子はそろそろ。よく固結する。有溝砥石として使用したあとくぼみ石に転用している。

H-40 (図Ⅲ-121~123、図版Ⅲ-60~63・65・66)

位置：G<sub>2</sub>-64-64、74、75 北から南へ傾斜する緩斜面に位置する。 標高は12.2m~11.9mである。 規模：(5.88)m / (5.25)m × 4.73m / 4.1m × 0.4m 平面形：卵形

床面積：17.02m<sup>2</sup> 長軸方向：N-67°-W



図III-121 H-40 実測図

**確認・調査・土層：**Ⅱ黒層上面のG<sub>2</sub>-64-75周辺で浅いくぼ地を確認する。土層観察用のベルトを設定し、Ⅱ黒層を掘り下げる。Ⅱ黒層を10cm～15cm掘り下げたところで、ほぼ半円形状の黒色土を検出する。この周辺にはd<sub>1</sub>+d<sub>2</sub>の揚げ土が広がっているのも検出する。この検出面で西側がH-39に切られていることも確認される。黒土上・下層を除去し、ⅡB+d<sub>1</sub>+d<sub>2</sub>の汚れた混合土を順次掘り下げ、床、壁を検出する。覆土は全体にd<sub>2</sub>を多く含み、赤っぽい色調を呈している。H-39と同じように壁際10cm程軟質のボンボンした土が認められた。

**床面：**若干凹凸があり、ゆるやかに南へ傾斜している。d<sub>2</sub>中に構築されている。床面直上に3cm～5cmほど、軟質で汚れた土が堆積している。この層からは多量の炭化材が検出されている。

**壁：**全体に急傾斜の立ち上がりで、壁際にも炭化材が多く見られた。

**炉跡：**中央部西側に0.88m×0.75mの土器囲い炉が検出される。北、西側はH-39に削平されたた

表Ⅲ-42 H-40出土遺物一覧

出土遺物	北積	IVa	小計	石鏃	石槍	F	RF	UF	F.C.	小計	射	射	小計	礫	総計
覆土上面														1	1
覆土	3	14	17			5	1		1	7		3	3		27
覆土上層	3	14	17			3				3	1	1	2	1	23
下層	13	7	20			14		1	11	26					46
床面直上	4	31	35	1	1	3				5					40
床面	3	38	41								2			1	42
焼土	4		4			266				266				5	275
計	30	104	134	1	1	291	1	1	12	307	2	4	5	8	454

めか、土器はない。土器内面を内側に丁寧なつくりである。焼土は15cmほどの層厚がある。そのほぼ中ほどにⅡB+d<sub>1</sub>の黒褐色土が認められることから、2時期にわたって使用されていたものと推測される。

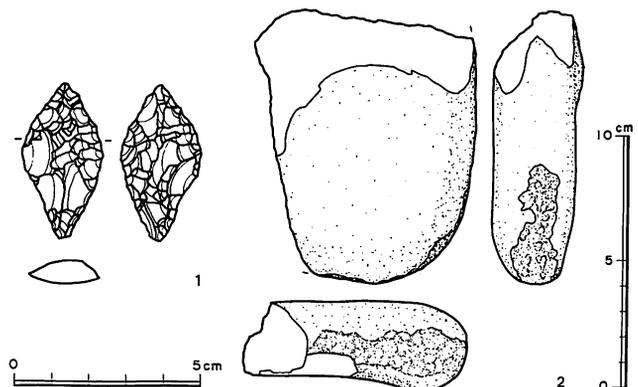
**付属ピット：**柱穴状小ピットは壁面に9個、壁際に10個、床面に10個検出されている。壁面の小ピットは内傾し、覆土はⅡB+d<sub>1</sub>である。壁際の小ピットは直立し、覆土はⅢB+d<sub>2</sub>+d<sub>1</sub>である。また床面の10個は直立し、覆土はⅢB+d<sub>2</sub>+d<sub>1</sub>である。

**遺物出土状況：**南壁際で内面を上にした一括土器が出土している。北壁には流れ込んだ状態で一個体分の土器が出土している。

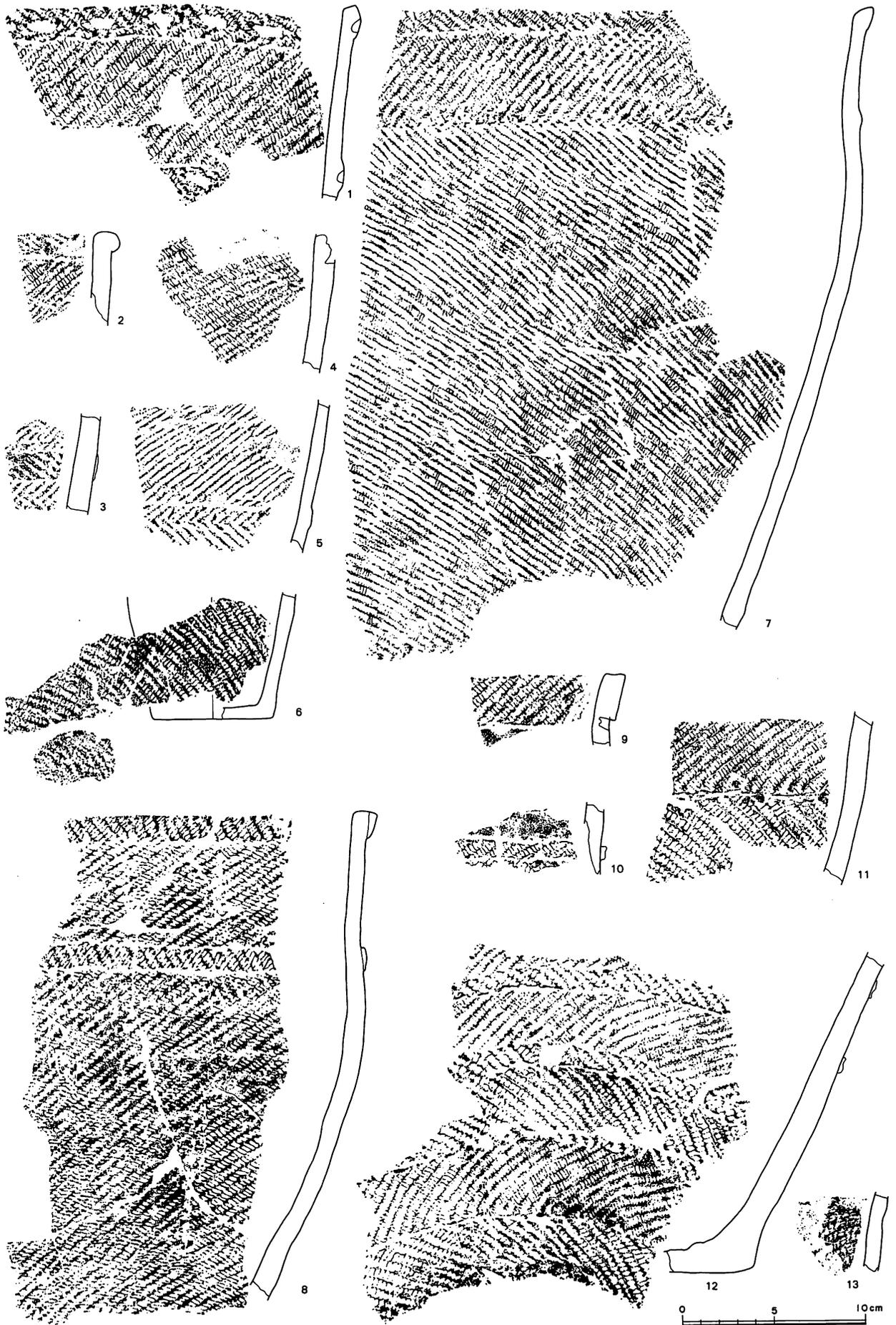
**時期：**掘り込み面はⅡ黒層上位である。床面、床面直上、炉跡出土の土器はⅣ群a類土器であることから、縄文時代後期初頭（余市式期）の時期と思われる。本遺跡出土の土器は余市式の最も古い様相を示すものである。

H-39に切られている。床面直上から多量の炭化材が出土しており、これらに関連するものと思われる焼土も2か所で検出されている。また東壁では柱穴状小ピットをふさぐように炭化材と焼土が検出されている。これらから判断すると、本遺構は焼失家屋跡の可能性が強いと思われる。（和泉田）

**遺物：**土器 1～7はⅢ群b-3類土器の施文の特色を示すが、



図Ⅲ-122 H-40 出土の石器

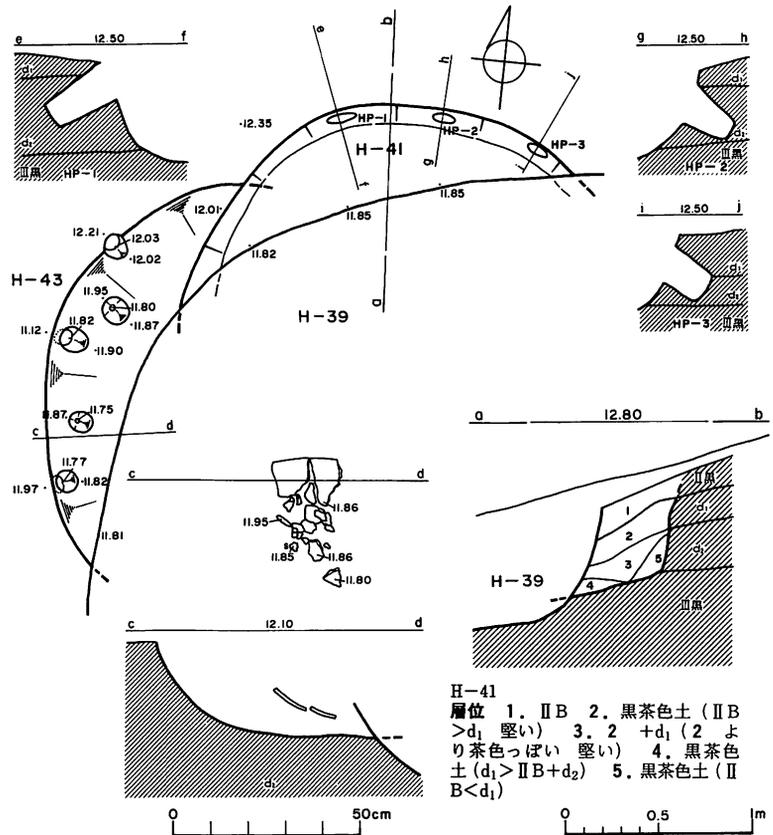


図Ⅲ-123 H-40 出土の土器

IV群 a類の初頭のものと考えておきたい。8～12はIV群 a類土器である。13はIII群 b-3類土器である。1は典型的な煉瓦台式の口縁の特色を示すものである。口縁に沿って断面が三角形をなす貼付帯があり、貼付帯の上半はRL、下半はLRの原体による羽状の縄文を施し、さらに横長の短刻文を施している。ただしこの口縁の貼付帯の貼付のし方は、本来の煉瓦台式の手法とは異なる。口縁部では器面にあらかじめLRの原体による縄文を施し、その上に貼付帯を加え、さらに縄文を施すという手法を示している。口唇から内面の調整はなで調整で、磨かれてはいない。体部には、LRの原体とRLの原体による羽状縄文の接点にIV群 a類と同様の貼付帯をつけ、その上に縄文と短刻文を加えている。H-39の10は同一個体である。2・3は同一個体である。口縁に沿って断面に丸味のある貼付帯がつけられている。LRの縄文地に貼付されていて貼付帯上にRの原体による縄文が施されている。口唇の断面は角に丸味をもつが、平坦に調整され、内面に続いている。H-39の7、H-38の2は同一個体である。4は器面に縦位に施文された縄文のあるもので、H-43の1と同一個体に属するとみなされる。5は薄手のもので、器面にごく薄い貼付帯を施し、そこにLRとRLの原体による羽状縄文の接点をおいている。H-35の4と同一個体である。6は底面にも縄文の施された小形の土器で、粗いけれども斜行縄文が施されている。7はあらかじめLRの原体による斜行縄文を施したのち、口縁に沿って薄い貼付帯を施し、その上にRLの原体による斜行縄文を施したもので、口唇から内面にかけて磨き調整がされている。体部のRLの原体による斜行縄文との境にはあらかじめ隆起帯が形成されていて、口縁部との接点をなすように施文されている。縄文施文後、隆起帯上をなでつけた形跡がある。同様の隆起部は体下半の底部に近い位置にも認められ、底部付近はLRの原体による斜行縄文が施されていたようである。同一個体に属するものが、H-39にもある(4・5)。胎土に海綿骨針(白色針状物質)を多く含む。道南地方からの搬入品とみなされる。8は7と似た器形のもので、口縁部と頸部下縁もしくは肩部の位置とに貼付帯を施し、器面に縦位、貼付帯上に横位施文のRLの原体による縄文を施すもので、包含層出土の接合破片からは底部との境にも貼付帯がめぐらされている。口唇から内面にかけて、貼付帯上に縄文を施したのち、丁寧になで調整されている。9～12は同一個体で、H-39の6と包含層出土の破片を介して接合する。全形では貼付帯が体上部に2条、下部に2条配されているものである。11・12では羽状縄文の各々の縄文帯の境に僅かなすき間を設けるかのように調整がなされた形跡が認められる。

表Ⅲ-43 H-43出土遺物一覧

出土遺物	IVa
床面直上	25



図Ⅲ-124 H-41・43 実測図

められる。13は器面が凹凸の著しいもので、複節の縄文が施されている。胎土に繊維を含む。

石器 1は石槍またはナイフで、最大幅は中位にある。黒曜石製。2は砂岩敲石。扁平楕円礫の端部を使用する。火を受けて赤変している。

H-41・43 (図Ⅲ-124・125、図版Ⅲ-67)

位置：G<sub>2</sub>-64-74

確認・調査・土層：H-39の調査中、北西壁～西壁に落ち込みのあるのが確認される。両遺構ともH-39に大きく削平されているため、全体像は不明である。

付属ピット：H-41・43とも壁面中に内傾する柱穴状小ピットが検出されている。覆土はH-41の小ピットがⅡB+d<sub>1</sub>で深い。H-43の小ピットはd<sub>1</sub>>ⅡBで浅いものである。

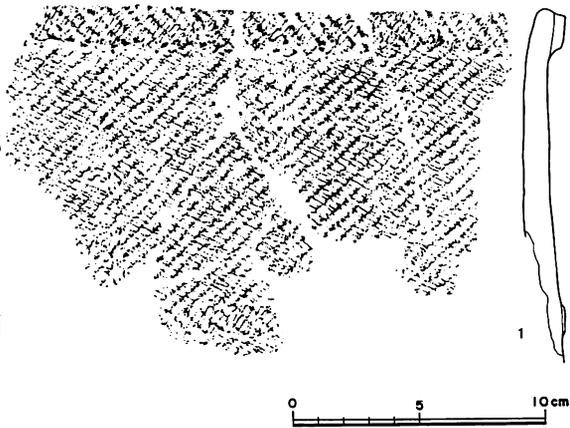
遺物出土状況：H-41では遺物は出土していない。H-43では、床面より10cm～15cm上方に、流れ込んだ状態で土器が一括出土している。

時期：出土遺物、切り合い関係などから、Ⅳ群a類土器期に相当する縄文時代後期初頭(余市式期)の時期と思われる。

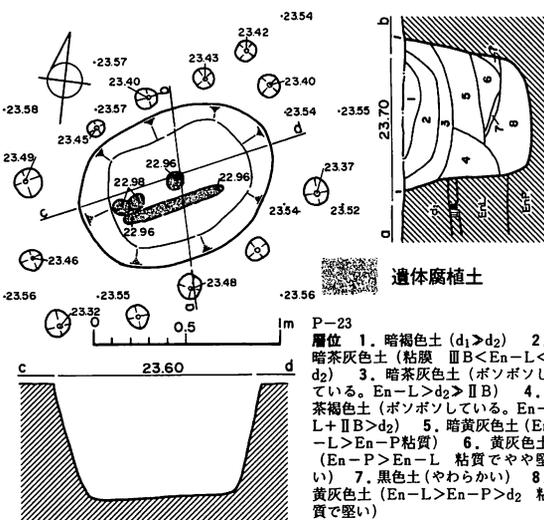
H-43はH-41に切られている。H-41・43はH-39に切られている。

遺物：土器 1はⅣ群a類土器である。口縁に沿う位置と、体部に幅のせまい平たい貼付帯をめぐらし、器面には縦位、貼付帯上には横位に縄文を施したものである。口唇から内面にかけて丁寧になで調整されている。

(2) 土壌 検出された3基の土壌は散在的であり、まったくまとまりはない。平面形は楕円形および長円形で、P-23、38は非常に深く掘られている。覆土はd<sub>2</sub>、En-L、En-Pが混入し、汚れた埋め戻し状の土である。時期を決定し得る遺物は出土していないが、覆土の状況が中期、晩期の土壌のものとは異なり、また周辺遺跡発見の縄文時代後期の土壌との類似が強いことから縄文時代後期の土壌とした。P-23では糊状の骨残片が出土していることから、他の土壌も土壌墓の可能性が高い。



図Ⅲ-125 H-43 出土の土器



図Ⅲ-126 P-23 実測図

(和泉田)

P-23 (図Ⅲ-126、図版Ⅲ-68)

位置：G<sub>1</sub>-63-09 規模：1.1m/0.78m×0.78m/0.54m×0.62m 平面形：長円形 長軸方向：N-57°-E

G<sub>1</sub>-63-09の包含層調査中、d<sub>2</sub>上面でEn-L>d<sub>2</sub>+En-Pの混り合った土が長円形状に検出される。覆土は同層が厚く堆積し、埋め戻し状の土で、同様の堆積状況を示している。壙底は平坦で、En-P層中につくられている。壁はほぼ垂直的に立っている。壙底直上には、長軸方向に遺体腐植土層と思われる褐色土が5cm～10cmほど認められ、南西壁際には約10cm×10cmの範囲に糊状に腐植した状態のものが確認された。また糊状の腐植土から歯の断片が発見されている。頭位を南西側にする土壌墓と思われる。壁外

10cm～20cmのところ12個（径10cm～15cm、深さ10cm～15cm）の小ピットがめぐっている。本遺構に付属する小ピットの可能性がある。中期、晩期の土壌内覆土と異なり、またこれまでの周辺遺跡の調査結果などからみて、縄文時代後期の時期のものと思われる。（和泉田）

**P-38**（図Ⅲ-127、図版Ⅲ-68）

**位置：** G<sub>1</sub>-64-42 **規模：** 0.9m / 0.4m × 0.9m / 0.38m × 0.7m

Ⅱ黒層を3回掘り下げたところで検出する。上面の平面形は円形、壙底の平面形は隅丸方形である。断面は直線的に外上方向に立ち上がる壁と若干丸い壙底で構成される。

掘り込みはⅡ黒層中（3回目）より始まり、En-Lを

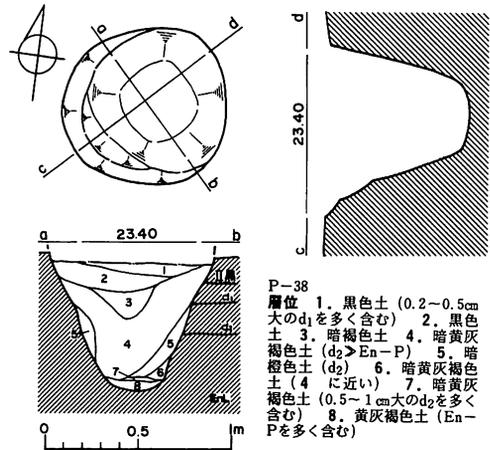
約30cm掘り込んで終る。覆土は全体にしまりがなく、黒色土が混在するため色調は暗色を呈する。また、土壌肩口付近には揚げ土は検出されなかった。遺物は第3層に頁岩、黒曜石、石斧未製のフレークが4点包含されていた。（和泉田）

P-38が位置するG<sub>1</sub>-64-42において、この土壌の掘り込み面が想定されるⅡ黒層3回目より上位層からはⅢ群b-3類土器（49点）、Ⅳ群a類土器（2点）、Ⅴ群b類土器（241点）が出土しており、またⅢ群b-3類土器の出土量ピーク（26点）がⅡ黒層2回目、Ⅴ群b類土器の出土量ピーク（186点）がⅡ黒層1回目、Ⅳ群a類土器の出土量ピーク（2点）がⅡ黒層3回目であることから、おそらく縄文時代後期初頭の遺構と思われる。（鈴木）

**P-122**（図Ⅲ-128、図版Ⅲ-68）

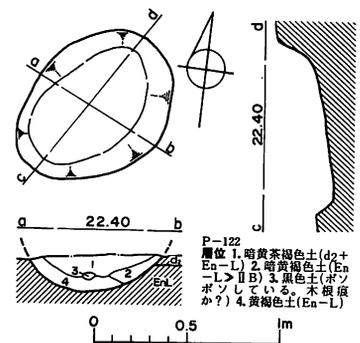
**位置：** G<sub>2</sub>-63-57 **規模：** 0.92m × 0.69m × 0.18m **平面形：** 楕円形 **長軸方向：** N-38°-E

d<sub>2</sub>上面で検出された。壙底はEn-L層を15cmほど掘り込んでつくられ、北東から南西に向って傾斜している。壁はゆるやかに立ち上がる。覆土はEn-Lが主体となっている。遺物は出土していない。時期は覆土の状況からみて縄文時代後期のものと思われる。（中田）



図Ⅲ-127 P-38 実測図

P-38  
層位 1. 黒色土 (0.2~0.5cm 大のd<sub>1</sub>を多く含む) 2. 黒色土 3. 暗褐色土 4. 暗黄灰褐色土 (d<sub>2</sub>>En-P) 5. 暗橙色土 (d<sub>2</sub>) 6. 暗黄灰褐色土 (4に近い) 7. 暗黄灰褐色土 (0.5~1cm大のd<sub>2</sub>を多く含む) 8. 黄灰褐色土 (En-Pを多く含む)

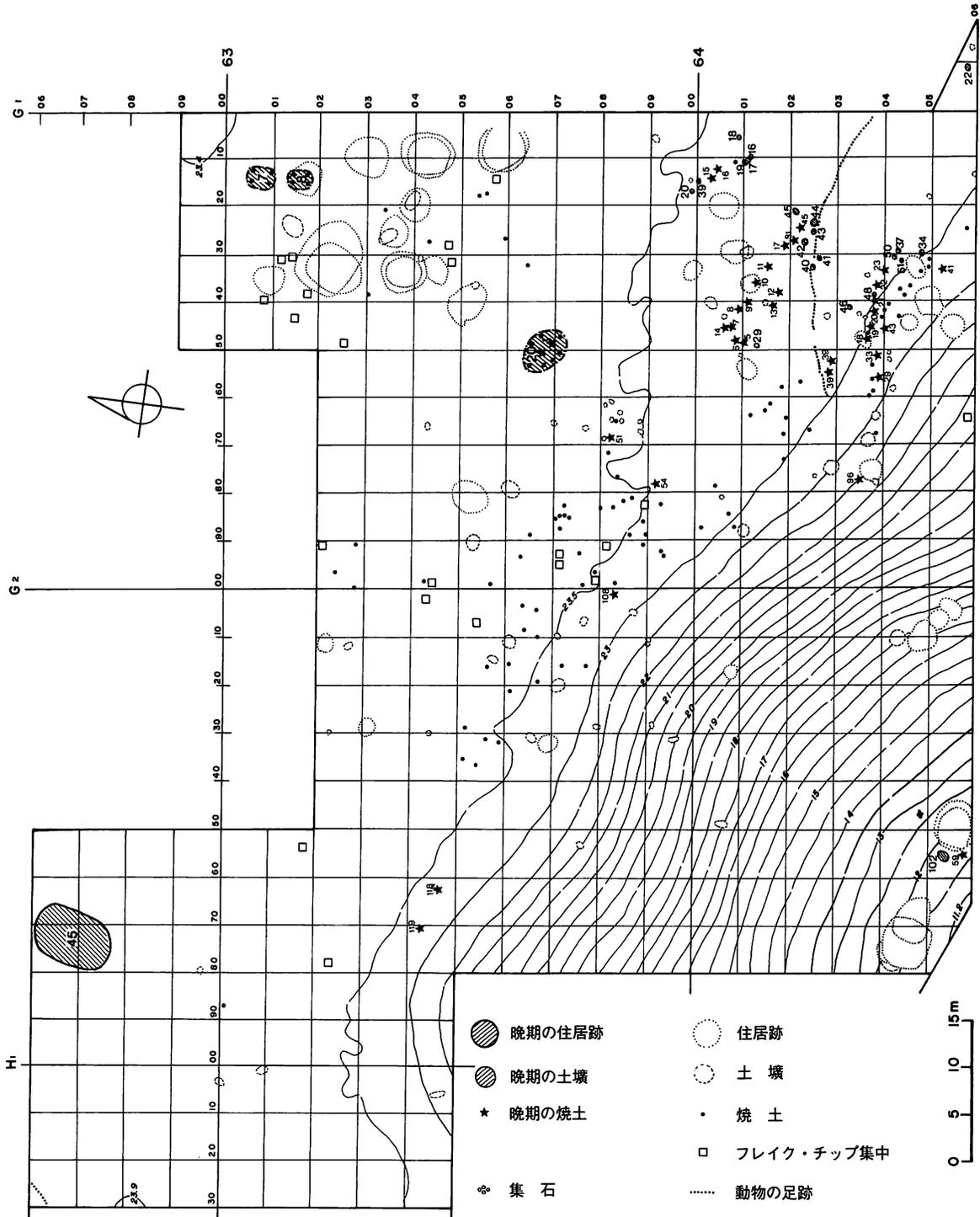


図Ⅲ-128 P-122 実測図

P-122  
層位 1. 暗黄茶褐色土 (d<sub>2</sub>+En-L) 2. 暗黄褐色土 (En-L) 3. 黒色土 (碎ソボンしている。木炭痕か?) 4. 黄褐色土 (En-L)

4 縄文時代晩期の遺構と遺物

(1) 住居跡 検出された4軒の住居跡のうち、3軒が調査区の北東部台地上の平坦部（H-7・8・20）、1軒が同北西部台地上の平坦部（H-45）に位置している。H-45は浅い皿状の住居跡で、H-7・8・20はⅡ黒上面で構築されている掘立て柱状の平地住居跡である。伴出遺物はV群b類に相当する土器であり、縄文時代晩期中葉～後葉にかけての時期のものと思われる。（和泉田）



図Ⅲ-129 縄文時代晩期の遺構位置図

## H-7 (図III-130、図版III-69)

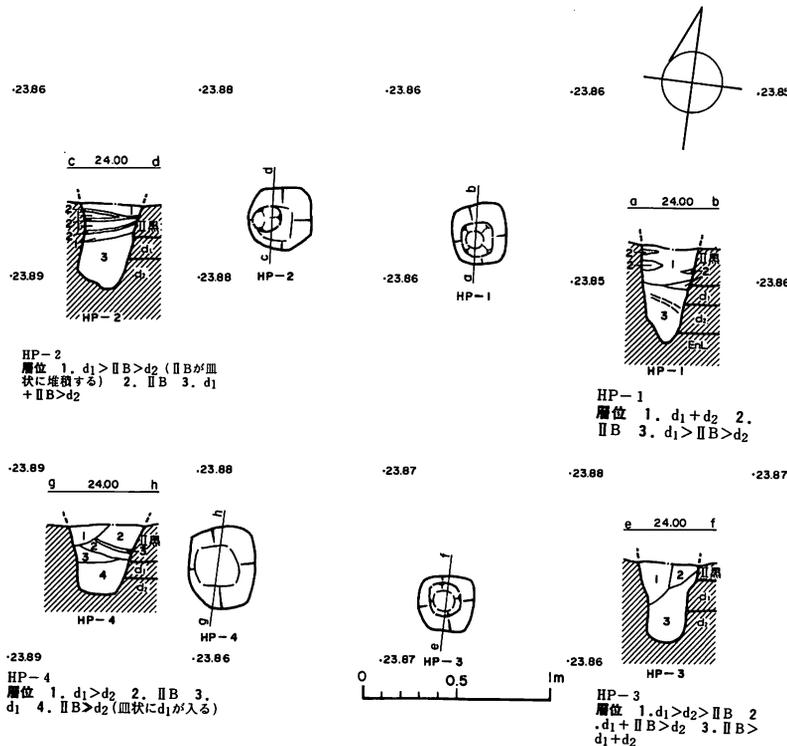
位置：G<sub>1</sub>-63-10 調査区の北東隅、標高23.85m付近の平坦地に位置する。

確認・調査：Ⅱ黒層上面で、径40cm～50cmの隅丸形状の小ピットを4個検出する。小ピットの壁はほぼ垂直に立ち上がっており、壙底は平坦である。d<sub>2</sub>を掘り込んでつくられている。HP-1・2・3の壙底には柱痕と思われる浅いくぼみが確認される。覆土はⅡB、d<sub>1</sub>、d<sub>2</sub>の混合土で、全体にd<sub>2</sub>が多く混入している。小ピットの東西間は約1.14m、南北間は1.9mである。長軸方向をN-Sとする掘立て柱跡と思われる。

小ピットの規模：HP-1～0.28m/0.17m×0.28m/0.17m×0.62m HP-2～0.3m/0.18m×0.3m/0.18m×0.59m HP-3～0.28m/0.17m×0.28m/0.17m×0.47m HP-4～0.34m/0.24m×0.4m/0.2m×0.42m

時期：Ⅱ黒層上面からの掘り込みである。この面でV群b類土器が多く出土していることから、縄文時代晩期中葉～後葉の時期と思われる。(和泉田)

## H-8 (図III-131、図版III-69)



図III-130 H-7 実測図

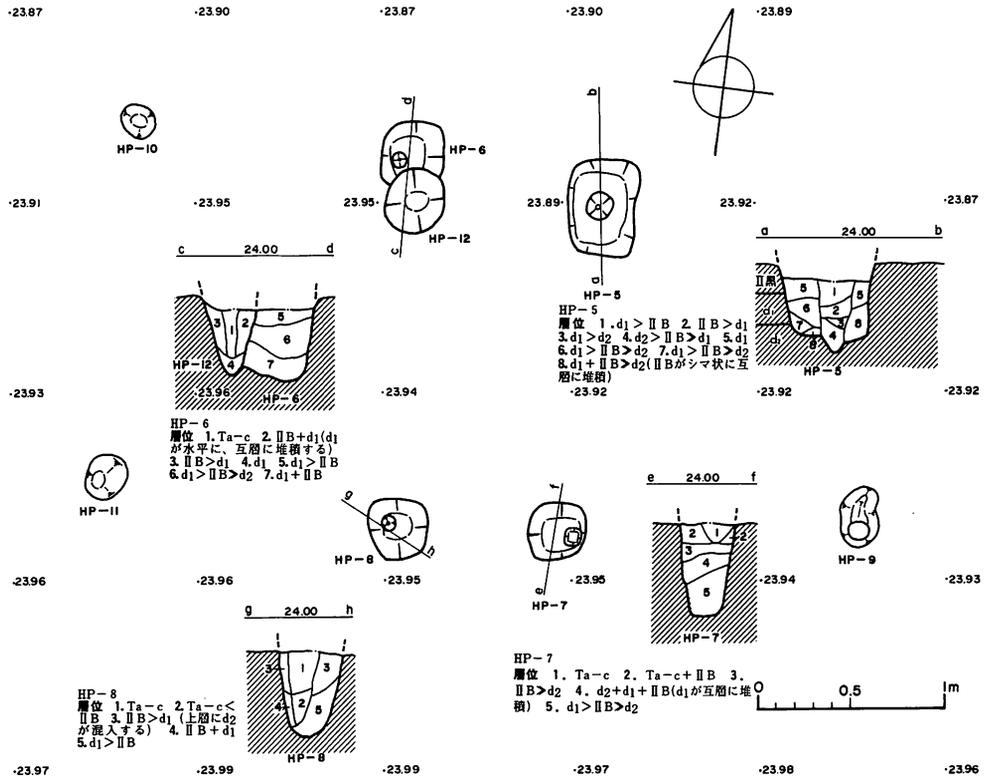
位置：G<sub>1</sub>-63-11 H-7の南側 標高23.9m付近の平坦地に位置する。

確認・調査：Ⅱ黒層上面でTa-cが円形状に堆積する小ピットを4個検出する。平面形はHP-5が隅丸長方形、HP-6・7・8は隅丸方形である。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壙底はHP-5・7が平坦で、HP-6・8は中央部がくぼんでいる。HP-7には径約10cmの浅いくぼみがあり柱痕と思われる。d<sub>2</sub>を掘り込んでつくられている。HP-6・8の西側に2個、HP-7の東側に1個浅い小ピットがあり、本遺構に伴うものかと推測される。小ピットの東西間は約1m、南北間は1.74mである。長軸方向をN-Sとする掘立て柱跡と思われる。覆土はH-7と同じようにⅡB、d<sub>1</sub>、d<sub>2</sub>の混合土である。

小ピットの規模：HP-5～0.48m/0.38m×0.32m/0.28m×0.53m HP-6～0.3m/0.19m

×0.33m / 0.2m × 0.51m HP - 7 ~ 0.28m / 0.19m × 0.28m / 0.17m × 0.48m HP - 8 ~ 0.28m / 0.15m × 0.3m / 0.13m × 0.47m

HP - 7 の覆土上層から黒曜石のフレイク・チップが1点、最下層から炭化物が少量出土している。  
**時期**：掘り込み面はⅡ黒層上面である。この面でV群b類土器が多く出土していることから縄文時



図Ⅲ-131 H-8 実測図

代晩期中葉～後葉の時期と思われる。(和泉田)

**H-20** (図Ⅲ-132・133、図版Ⅲ-70)

**位置**：G<sub>1</sub>-63-46、56、47、57 標高23.75m付近の平坦地に位置する。

**確認・調査**：G<sub>1</sub>-63-57の包含層調査中、Ⅱ黒層を3cm～5cm掘り下げたところで、1.5m×2mの範囲で土器片が集中して出土し、また土器片集中地の北側に焼土(F-1・2)を検出する。焼土の周辺を精査し、遺構検出作業を行なったところ、焼土をはさんで6個の小ピットを検出する。焼土の北、東側約2mの付近は $d_1$ を多量に混入する揚げ土状の土で若干高くなっている。

**床面**：ほぼ平坦でⅡ黒層中につくられている。壁の立ち上がりはなく、平地住居跡かと思われる。

**炉跡**：焼土が2か所検出されており、地床炉である。F-1は1m×0.65mの広がりを持ち浅い掘り込みをもつ。F-2は二次堆積のものである。

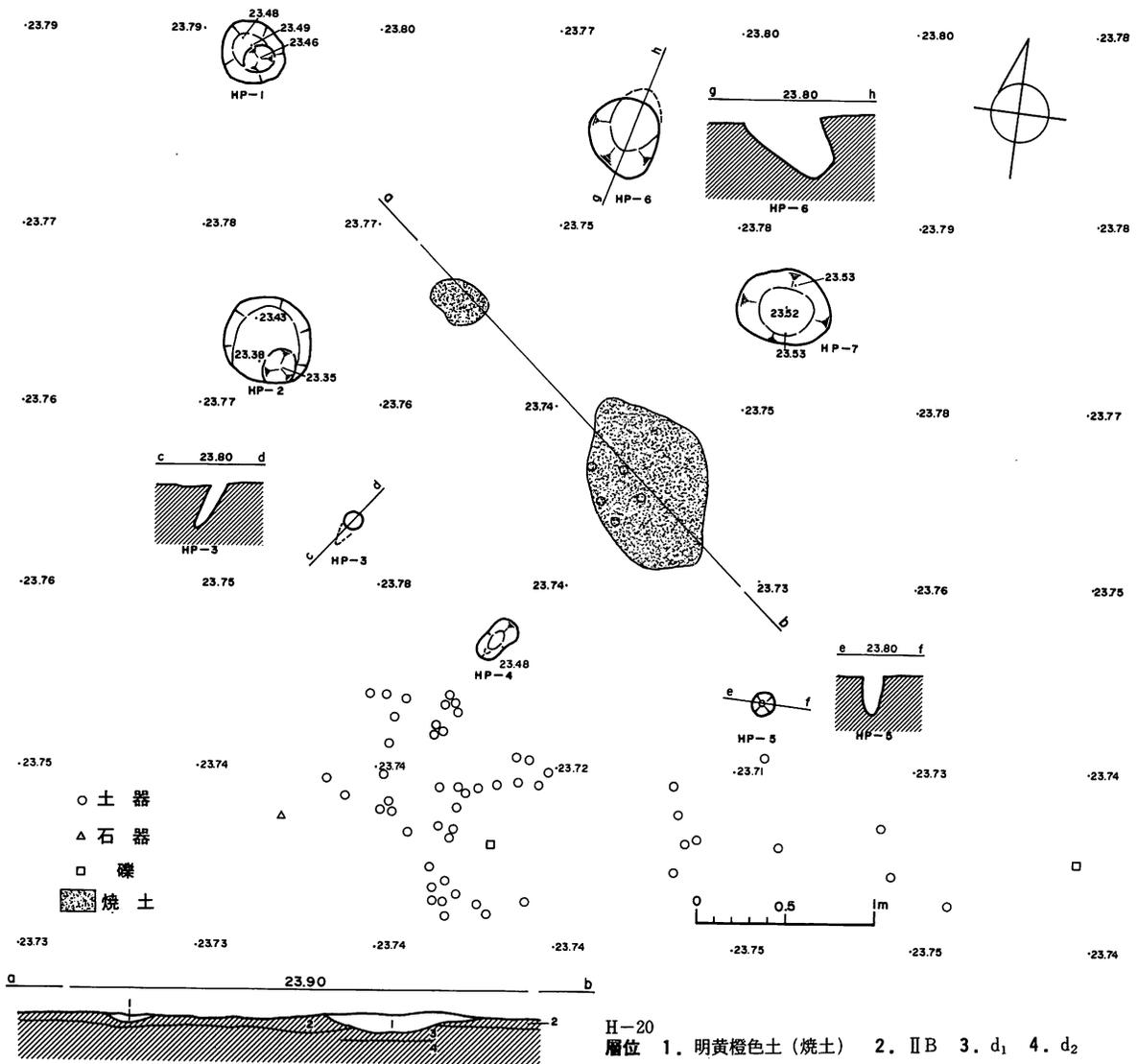
**付属ピット**：柱穴状小ピットが6個検出されている。HP-1・5は直立している。他は焼土側に傾いている。全体に細く、杭状のものである。

**遺物出土状況**：焼土上面からも少量の土器片が出土している。焼土の南側で検出された遺物の集中は、ほとんどが細片で、散らばっている状態である。またHP-6の覆土からも土器片が出土している。

**時期**：Ⅱ黒層上面より3cm～5cm下層を床面としており、縄文時代晩期の生活面上にある。周辺およ

表Ⅲ-44 H-20出土遺物一覧

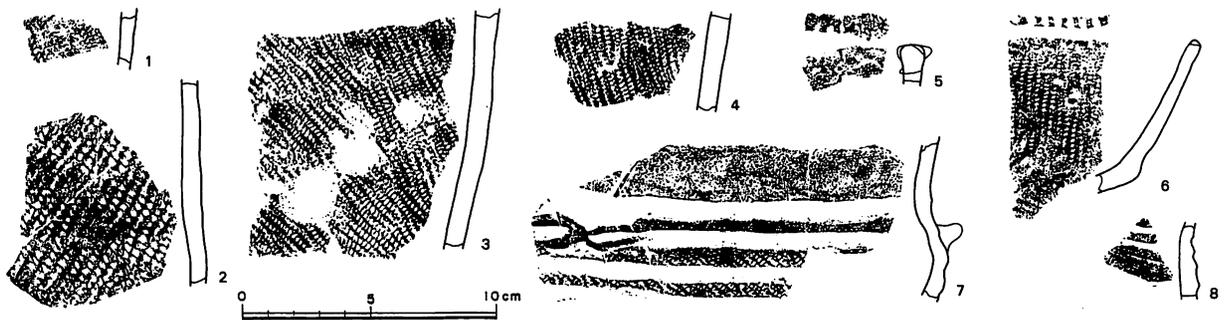
出土遺物	北	南	Vb	小計	F	F.C.	小計	釜	礎	総計
HP-1						1	1			1
HP-3					2		2			2
HP-4			9	9	3					12
HP-5			3	3	1		1			4
HP-6	1		4	5						5
F1直上			3	3	7		7	1	1	12
F-1			2	2	10	56	66		4	72
計	1		21	22	23	57	77	1	5	109



図Ⅲ-132 H-20 実測図

びHP-6出土の土器はV群b類相当のものであることから、縄文時代晩期中葉～後葉の時期と思われる。(和泉田)

**遺物：土器** 1は薄手のかすかに縄文の認められる小片である。2は鉢形土器の体部で、粗い斜行縄文が浅く施されている。3は少し厚手の鉢形土器で、やや細かい縄文が浅く施されている。4は3と同一個体かとみられるが、体上部の破片である。5は鉢形土器の口縁の突起部分で、細い縄の圧痕が認められる。6は小形の浅鉢形土器とみなされ、器壁は薄く、底部にくびれがある。口唇には棒状工具による刻みがつけられている。体部の縄文は縦行している。7は亀ヶ岡式系のもので、大形鉢形土



図Ⅲ-133 H-20 出土の土器

器の肩部である。幅の広い凹線をめぐらし、その間にA突起を配している。8も亀ヶ岡式系の鉢形土器の肩部の小片とみなされる。

**H-45 (図Ⅲ-134・135、図版Ⅲ-71)**

**位置：**G<sub>2</sub>-62-66、67、76、77 標高23.85m付近の平坦地に位置する。 **規模：**9.16m/8.52m × 5.88m/5.28m × 0.24m **平面形：**小判形 **床面積：**39.38㎡ **長軸方向：**N-20°-E

**確認・調査：**Ⅱ黒層上面で長楕円形のくぼみが認められたため、くぼみの長軸方向とそれに直交する方向に3本のトレンチを入れ、d<sub>2</sub>の上面まで掘り下げを行った。トレンチの内部では壁の立ち上がり不明瞭だったため、土層観察用のベルトを残して周囲を2回掘り下げたところ、d<sub>1</sub>がドーナツ状に広がるのをかすかに確認することができた。そこで内部の黒色土や黒色土にd<sub>1</sub>がまじった土を除去すると、緩やかな立ち上がりがあらわれてきたが、その検出は困難であった。

**床面：**d<sub>2</sub>上面につくられており、ほぼ平坦である。

**壁：**断面形は皿状である。

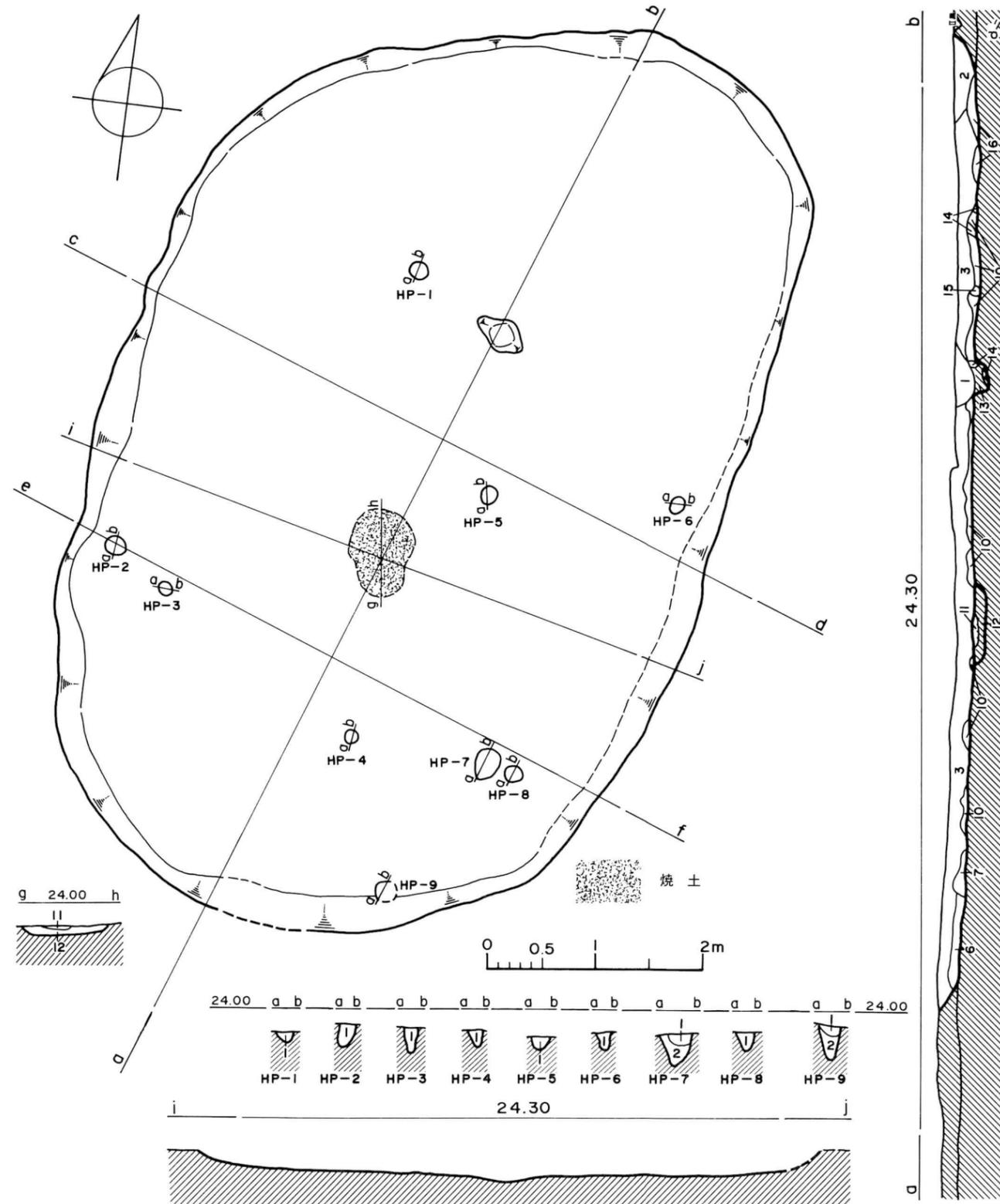
**炉跡：**床面中央よりやや南側に焼土の痕跡を検出する。地床炉と思われる。

**付属ピット：**柱穴状小ピットが9個検出されている。配置には明確な規則性はみられない。いずれも直立し、先端が丸味を帯びている。

**遺物出土状況：**出土遺物は少ない。覆土上位からⅢ群b-3類土器の胴部破片が1点出土している。また覆土中から有茎の石鏃1点、黒曜石のフレイク4点が出土している。南壁近くの床面から有茎の石鏃が1点出土している。炉の焼土内からは水洗選別によって黒曜石のフレイク・チップが105点得られた。本遺構の北側では覆土下位に炭化物が散在していた。

表Ⅲ-45 H-45出土遺物一覧

出土遺物	Vb	石鏃	F	F.C.	小計	総計
覆土上面			1			1
覆土	7	1			1	8
床面		1	3		4	4
焼土				105		105
計	7	2	4	105	5	118

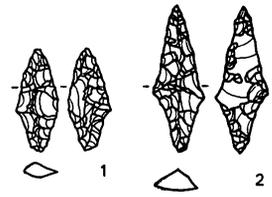


H-45  
 層位 1. 黒色土(粘質, II B > d<sub>1</sub>) 2. 黒褐色土 (II B + d<sub>1</sub>) 3. 黒色土(粘質, II B > d<sub>1</sub>) 4. 黒色土(粘質, II B + d<sub>1</sub>) 5. 黒色土 (II B > d<sub>1</sub>, ③よりも黒味が強い) 6. 褐色土 (II B + d<sub>1</sub>) 7. 暗茶褐色土 (II B > d<sub>2</sub>) 8. 暗褐色土 (II B + d<sub>1</sub> + d<sub>2</sub>) 9. 暗褐色土 (II B + d<sub>1</sub> + d<sub>2</sub>, 汚れている) 10. 暗茶褐色土(粘質, II B < d<sub>1</sub> + d<sub>2</sub>) 11. 黄褐色土 (En-L, 炭化物がまじり) 12. 焼土 (灰褐色土と暗赤褐色土のまじり) 13. 暗褐色土 (II B + d<sub>1</sub>) 14. 橙褐色土 (d<sub>2</sub> > d<sub>1</sub>) 15. 黒色土 (ポロポロしている) 16. 暗褐色土 (粘質, II B + d<sub>2</sub>)  
 HP-1 層位 1. 黒色土 (II B > d<sub>2</sub>)  
 HP-2 層位 1. 黒色土 (II B > d<sub>2</sub>)  
 HP-3 層位 1. 黒褐色土 (II B > d<sub>2</sub>)  
 HP-4 層位 1. 暗褐色土 (II B + d<sub>2</sub>)  
 HP-5 層位 1. 暗茶褐色土 (II B < d<sub>2</sub>)  
 HP-6 層位 1. 暗茶褐色土 (II B < d<sub>2</sub>)  
 HP-7 層位 1. 黒褐色土 (II B > d<sub>2</sub>) 2. 暗茶褐色土 (II B < d<sub>2</sub>)  
 HP-8 層位 1. 暗茶褐色土 (II B < d<sub>2</sub>)  
 HP-9 層位 1. 黒色土 (II B > d<sub>2</sub>) 2. 黒色土 (II B > d<sub>2</sub>)

図III-134 H-45 実測図

時期：検出状況や床面出土の石鏃の形態などから縄文時代晩期中葉の時期と思われる。(和泉田)

遺物：石器 1・2は黒曜石製の有茎鏃である。



図Ⅲ-135 H-45 出土の石器

(2) 土壌 (図Ⅲ-136~140、図版Ⅲ-71~78)

検出された23基の土壌は、調査区の南東部台地上から斜面肩口にかけてのところに位置している。ただP-102は調査区の南西側の緩斜面上で検出されたものである。本土壌はほとんどがd<sub>1</sub>直上、あるいはd<sub>2</sub>上面で検出されており、掘り込み面は明らかでない。平面形は円形、楕円形が主体である。長径は0.5m前後で、深さは検出面から0.2m~0.3mのものが多い。図Ⅲ-135 H-45 出土の石器。壙底は平坦で壁も急傾斜での立ち上がりものが多い。覆土はⅡB + d<sub>1</sub>の混り合った土で埋め戻し状のものである。遺物は覆土中(検出面)で多く発見されており、土壌埋め戻し後置かれたものではないかと推測される。P-42・43・45・48の壙底では、長軸方向の両端部に浅い小ピットが検出されている。出土土器はV群b類に相当するもので、縄文時代晩期中葉~後葉の時期のものと思われる。また本土壌の性格、用途を明確に示すものはないが、遺物の出土状況、覆土の状態などから土壌墓の可能性が高い。(和泉田)

P-16：G<sub>1</sub>-64-01の包含層調査中、d<sub>2</sub>上面で検出する。壙底は中央部がくぼむ半円状で、En-L層中につくられている。壁は垂直的に立ち上がっている。覆土はⅡB、d<sub>1</sub>、d<sub>2</sub>の混合土である。覆土からV群b類土器が出土している。P-17を切っている。

P-17：壙底は平坦でd<sub>2</sub>中につくられている。覆土はⅡB、d<sub>1</sub>、d<sub>2</sub>、En-Lの混合土で汚れている。覆土中からV群b類土器が出土しており、南壁際からは貼り付いた状態で土器片が出土している。P-16、P-19に切られている。覆土出土の土器片と同一個体の土器片がP-42から出土している。

P-18：d<sub>2</sub>上面で検出する。壙底は中央部がくぼみ皿状で、d<sub>2</sub>中につくられている。覆土はd<sub>2</sub> > d<sub>1</sub>の混合土で埋め戻し状である。覆土上面で内面を上に向けた一括土器(V群b類)が出土している。P-16、17、19同様土壌墓の可能性が高い。

P-19：壙底は平坦でd<sub>2</sub>中につくられている。壁は垂直的に立ち上がっている。覆土はⅡB + d<sub>1</sub> + d<sub>2</sub>の混合土である。覆土上層から円球のすり石が出土している。また覆土中からV群b類土器が

表Ⅲ-46 土壌(晩期)一覽

遺構番号	位置	規模(m)			平面形	備考
		長径×短径	最大深			
P-16	G <sub>1</sub> -64-01・10・11	0.57 / × 0.53 /	0.40	円形	P-17と重複	
P-17	G <sub>1</sub> -64-01・10・11	0.55 / × 0.53 /	0.32	円形	P-16・19と重複	
P-18	G <sub>1</sub> -64-00	0.38 / × 0.36 /	0.11	円形		
P-19	G <sub>1</sub> -64-10・11	0.46 / × 0.46 /	0.36	円形	P-17と重複	
P-20	G <sub>1</sub> -63-19	0.50 / 0.32 × 0.46 / 0.32	0.27	卵形	N-46° -W	
P-22	F <sub>2</sub> -64-95	0.62 / × 0.57 /	0.23	略円形		
P-29	G <sub>1</sub> -64-41	0.42 / × 0.22 /	0.31	卵形	N-66° -E	
P-34	G <sub>1</sub> -64-24・34	0.45 / 0.10 × 0.40 / 0.10	—	円形		
P-35	G <sub>1</sub> -64-10	0.64 / × 0.54 /	0.18	円形		
P-37	G <sub>1</sub> -64-24	0.55 / 0.10 × 0.45 / 0.20	0.28	不整形円形		
P-39	G <sub>1</sub> -63-19, G <sub>1</sub> -64-10	0.62 / 0.18 × 0.44 / 0.18	0.21	卵形	N-80° -W	
P-40	G <sub>1</sub> -64-32	0.56 / × 0.50 /	0.22	円形		
P-41	G <sub>1</sub> -64-32	0.52 / × 0.44 /	0.20	卵形	N-17° -E	
P-42	G <sub>1</sub> -64-22	0.70 / 0.63 × 0.30 / 0.28	0.08	楕円形	N-26° -W	
P-43	G <sub>1</sub> -64-22	0.60 / 0.52 × 0.48 / 0.24	0.10	楕円形	N-19° -W	
P-44	G <sub>1</sub> -64-22	0.82 / 0.58 × 0.67 / 0.44	0.26	楕円形	N-45° -W	
P-45	G <sub>1</sub> -64-22	0.66 / 0.48 × 0.50 / 0.38	0.24	楕円形	N-S	
P-46	G <sub>1</sub> -64-43	0.44 / × 0.38 /	0.18	円形		
P-48	G <sub>1</sub> -64-33	0.44 / 0.25 × 0.34 / 0.18	0.19	卵形	E-W	
P-50	G <sub>1</sub> -64-34	0.48 / 0.34 × 0.42 / 0.22	0.30	卵形	N-13° -E	
P-51	G <sub>1</sub> -64-34	0.40 / 0.31 × 0.32 / 0.25	0.18	楕円形	N-S	
P102	G <sub>2</sub> -64-55	1.33 / 1.13 × 1.06 / 0.92	0.28	楕円形	N-S	

出土している。

**P-20**：Ⅱ黒層を3cm～5cm掘り下げたところで土器の集中が確認された。壙底は平坦で、壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は、土器内の黒色土（第1層）、焼土層（第2層）、遺物を含まない暗褐色土（第3層）である。第2・3層は埋め戻し状の土である。土器は底部を斜め下に向け、焼土で固定されていた。焼土中から少量の炭化物と、炭化したクルミが検出された。

**P-22**： $d_1$  上面で検出される。壙底は断面が半円状で、 $d_2$  中につくられている。覆土は $d_1 + d_2 > \text{Ⅱ B}$  の混合土で、汚れている。検出面、覆土上層に土器片がちらばって出土する。 $G_1-64-25$ の晩期の生活面出土の土器片と接合する。

**P-29**：Ⅱ黒層を2回掘り下げたところで検出される。壙底は中央部がくぼみ、 $d_2$  中につくられている。壁は垂直的に立ち上がっている。覆土は1・2層ともに上面がくぼんだ状態で堆積している。遺物を含まない。1層上面で出土している土器片と同一個体の土器片が $G_1-64-24 \cdot 33 \cdot 34 \cdot 40 \cdot 41 \cdot 43 \cdot 52$ の広範囲に散らばっている。

**P-34**：Ⅱ黒層上部の調査中に黒色土の落ち込みを検出する。壙底は部分的に $d_2$  を少し掘り込んでつくられている。断面は半円形である。覆土はやわらかい黒色土である。覆土からⅢ群b-3類土器とフレイクが出土している。

**P-35**： $d_1$  上面で検出する。壙底は丸くくぼみ、壁は外上方へ内湾しつつ立ち上がっている。覆土下層には炭化物を多く混入する。土器は第1層上面と第2層上面の間から出土している。

**P-37**：Ⅱ黒層調査中石皿が出土し、その面で精査し黒褐色土の落ち込みを検出する。壙底は $d_2$  中を掘り込んでつくられている。断面は半円形である。覆土中から石皿のほかⅢ群b-3類土器、V群b類土器、フレイクが出土している。

**P-39**： $d_1$  上面で検出する。壙底はほぼ平坦で、 $d_2$  中につくられている。壁は内湾しながら外上方に立ち上がる。壁面で、直立する小ピットが1個検出されている。覆土は一層で、V群b類の土器片が出土している。

**P-40**： $d_2$  上面で検出する。壙底は中央部がくぼみ、 $E_n-L$  中につくられている。壁は外上方向へ内湾しつつ立ち上がる。覆土は一層で覆土上面から水平の状態でV群b類の土器片が出土している。

**P-41**： $d_2$  上面で検出する。壙底はやや丸味をもち、 $E_n-L$  中につくられている。壁は急傾斜で立ち上がる。覆土には炭化物が多く含み、覆土上面で、ほぼ水平の状態でV群b類の土器が出土している。

**P-42**： $d_1$  上面で検出する。壙底はほぼ平坦で、 $d_2$  中につくられている。壁はほぼ垂直的に立ち上がっている。北西、南東壁際に径約10cm、深さ約10cmの浅いくぼみがある。覆土は $d_1 + \text{Ⅱ B}$  の混合土で、汚れている。検出面で押しつぶされた状態で土器が出土している。V群b類土器である。

**P-48**： $d_1$  上面で検出する。壙底は平坦で、 $d_2$  中につくられている。北東、南西壁際に径約15cm、深さ約5cmの浅いくぼみが検出されている。覆土は $\text{Ⅱ B} > d_1$  の黒茶色土で汚れている。検出面でV群b類土器がややかたまって出土している。

**P-44**： $d_1$  上面で検出する。壙底は断面が半円形状で、 $d_2$  中につくられている。覆土は $\text{Ⅱ B}$ 、 $d_1$ 、 $d_2$  の混合土で汚れている。検出面で内面を上にした状態で土器片が一括出土している。V群b類土器である。P-45覆土出土の土器片と接合するものがある。

**P-45**： $d_1$  上面で検出する。壙底は、断面が皿状である。北、南壁際に径15cm～20cm、深さ約5cmの浅いくぼみがある。覆土は $\text{Ⅱ B} + d_1$  の黒茶色土で、汚れた土である。検出面で内面を上にした土器片が44点出土している。V群b類土器である。また覆土中から石皿が1点出土している。

**P-46**： $d_2$  上面で検出する。壙底は丸味をもち、 $d_2$  中につくられている。壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土には炭化物が多く混入する。遺物は覆土上面でV群b類の土器片が出土している。

**P-48**： $d_1$  上面で検出する。壙底は平坦で、 $d_2$  中につくられている。壁は急傾斜の立ち上がりである。覆土には炭化物が多く混入している。覆土中からV群b類土器が出土している。

**P-50**： $d_1$  直上のII黒層中で検出する。壙底は凹凸があり、 $d_2$  中につくられている。北壁側には $d_1 + II B > En - L$ の黒茶色土が堆積し、南側には焼土を多量に混入する暗褐色土が厚く堆積している。検出面で、内面を上にした多くの土器片が出土する。また焼土まじりの覆土中にも多量の土器片が混入していた。V群b類土器である。

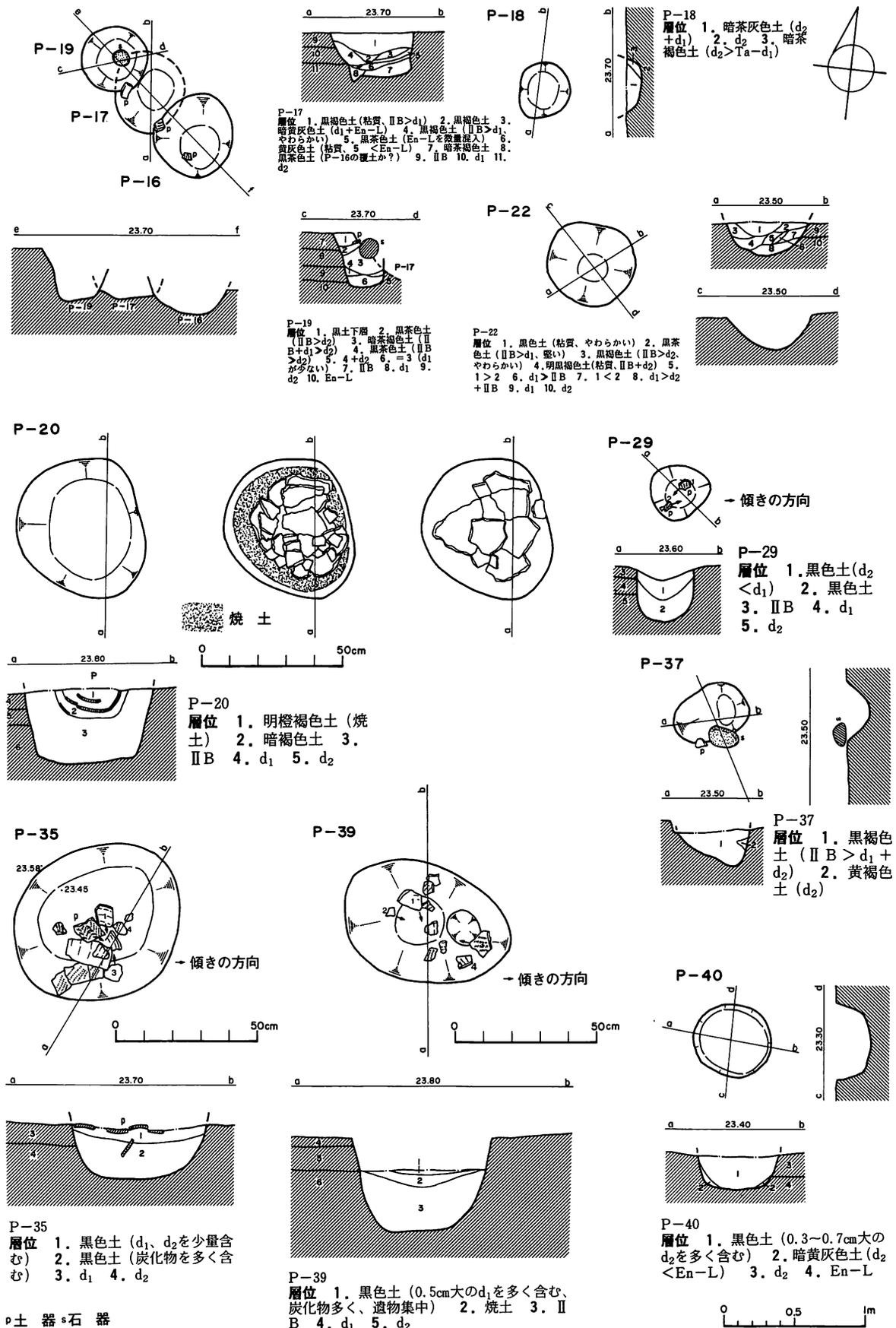
**P-51**： $d_1$  直上のII黒層中で検出する。壙底は中央部がくぼみ、断面が皿状である。 $d_2$  中につくられている。覆土はII B +  $d_1$ の黒茶色土である。覆土中からV群b類土器が出土している。

**P-102**：II黒層上面から5cm程掘り下げたところで検出する。壙底は平坦で、 $d_1$  中につくられている。壁は急傾斜で立ち上がっている。壁・壙底とも堅く、丁寧につくられている。覆土はやや砂質の黒茶色土である。壙底直上から土器片やたたき石片が出土している。

**遺物**：土器 P-16 (1~3)、P-17 (4~8)、P-18 (9・10)、P-19 (11)、P-20 (12)、P-22 (13・14)、P-29 (15)、P-34 (16)、P-35 (17・18)、P-37 (19~21)、P-39 (22~24)、P-40 (25・26)、P-41 (27・28)、P-42 (29~32)、P-44 (33~38)、P-45 (39~42)、P-46 (43・44)、P-48 (45・46)、P-50 (47~53)、P-51 (54)、P-52 (55)、P-60 (56)、P-79 (57~59)、P-102 (60) から出土している。10・16・21・46・50・53・55・56・58・59はIII群b-3類土器とみられるものであり、57はIV群a類土器で、他はV群b類土器である。1は粗い縄文の施された小片で、8と接合する。2は薄手で斜行縄文の施されたもの、3はやや厚手で縦行縄文の施されたもので、ともに深鉢もしくは鉢形と呈するものとみられる。4は深鉢形土器の口縁部で、縦行縄文を地として、口縁部に5条の沈線文をめぐらしている。沈線施文後に口縁をなで調整している。口唇の断面形は切出し形を呈する。5は薄手で比較的細かい縄文の施されているもので、2と同一個体に属する。6は厚手の縦行縄文の施されたもので、3・32と接合する。4・32とも同一個体に属する。7は薄手で細かい斜行縄文の施されたものである。8は粗い縄文の施されているもので、1と接合する。9は口縁の断面がやや切出し形を呈するもので、鉢形もしくは深鉢形を呈するものとみられる。器面には斜行縄文が施されている。10は粗い縄文の施されたものがある。11は比較的薄手のもので、斜行縄文が施されている。2・5と同一個体に属するかとみられる。12は深鉢形土器の底部で、体部には縦行する縄文が間ばらに認められる。底面にも同様な縄文が施されている。13は深鉢形を呈するとみられ、体部に斜行縄文を施し、口縁部には無文帯に縄線文を4条めぐらせている。口唇にも縄文を施す。14は浅鉢形を呈すとみられるもので、体部に斜行縄文を施し、口縁付近になで調整を加え無文としている。口唇も無文である。内面は滑らかに磨かれている。15は器面に縦行気味の縄文を施し、口縁に沿って下から突き上げるような刺突文を一条めぐらし、所々に、3列3段に垂下させる文様を1単位として、配置しているものとみられる。器形は深鉢形を呈するものとみられる。口唇に縄文を施し、内面は磨かれている。16は口縁の小片で内外面に縄文が施されている。17は浅鉢形土器の底部破片で、底面にも複節の縄文を施している。18は深鉢形土器の体部で上半では縦行気味に縄文が施され、底部付近では斜行縄文となっている。底部と体部の境に擦痕が認められる。この擦痕は2・11に認められるものと共通し、それらと同一個体に属する。19は深鉢形を呈するもので、口唇をあらかじめ角形に調整し、口縁の表面側の角を斜めに指頭で押し下げている。F-19の35も同一個体に属するかとみられる。器面には浅く縄文が施されている。20は縄線文の施された小片

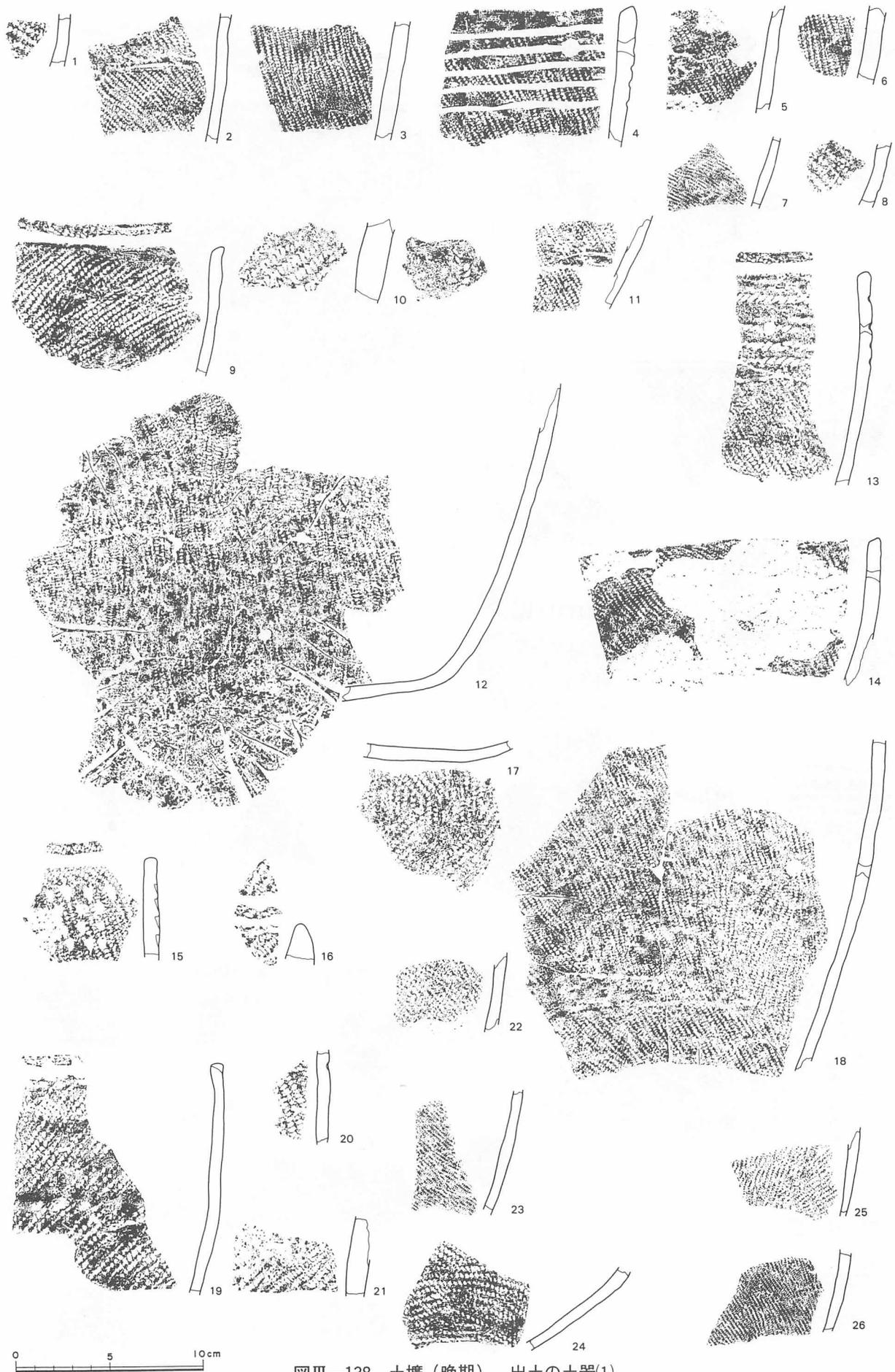
である。深鉢形を呈するものとみられる。21は斜行縄文の施されているものである。22は浅く斜行縄文の施されている比較的薄手のものである。深鉢形を呈すとみられる。23は細かい斜行縄文の施されているもので、亀ヶ岡式系のものとみられる。24は複節の縄文の施されているもので、17の底部と接合する。25・26はともに細かい縄文の施された薄手のもので、25は浅鉢、26は深鉢形を呈するとみられる。27は口縁の断面形が切出し形を呈するもので、浅く斜行縄文が施されている。浅鉢形を呈するとみられる。縄文施文後に口縁をヘラでなで、調整している。28は深鉢形を呈すとみられるが、器面に横走気味の縄文を施し、口唇にも施文している。口縁部には棒状工具で斜め下方から刺突を加えている。29は口縁部にくびれのある鉢形を呈するもので、体部の縄文は磨消されているようである。33と接合する。30は深鉢形を呈するもので、体部に縦行縄文が施されている。31はやや縦行気味の細かい縄文の施されたもので、深鉢形を呈するものとみられる。22と同一個体に属する。32は3・4・6と同一個体である。なおH-20の3・4と接合する。33は鉢形土器の肩部に2個の突起のつけられたものである。29と同一個体である。34・35は浅鉢形土器の口縁部で、35は部分的に口唇に刻みのつけられたものである。36は口唇に密に縄による刻み目を施し、口縁に棒状工具で斜め下方から刺突した刺突文をめぐらすものである。器面には細かい縄文が施されている。37は31と同一個体である。38は器面にかすかに縄文の認められるものである。39は口縁に刻み目を施し、縦行気味の縄文地に三条の沈線をめぐらすもので、小形の鉢形を呈するものかとみられる。40は浅い縄文の認められるもので、34・35・41・42と同一個体である。これらは接合して大形の浅鉢形を呈する。43は口縁部の少しすばまる深鉢形を呈するもので、口唇の断面は尖る。頸部に幅の広い沈線を3段施し、口縁の部分は磨かれている。体部には浅い縄文が認められる。44は深鉢形土器の体部とみなされ、縦行する縄文が施されている。45は44と同一の個体である。46は粗い縄文の施されているものである。47は縦行気味の縄文の施されたもので、浅鉢形土器の口縁部とみられる。48は口縁の断面形が切り出し形を呈し、口唇には細かい撚り紐による刻み目を密に施している。口縁の表面側に棒状工具で刻み目をつけている。器面は口縁付近が幅広く無文となり、体下部に細かい縄文が施されている。49は浅鉢形土器の口縁部で、中央のくぼむ小突起があり、突起部には細い縄による刻み目がある。器面の縄文は縦行気味で、それに重ねて口縁部に4条の細く浅い沈線をめぐらせている。50は無文の小片である。51は薄手の浅鉢形もしくは皿形を呈するもので、口縁近くを無文としている。体下部には整った細かい縄文が施されている。52は亀ヶ岡式系のもので、口頸部に幅の広い凹帯とA突起を配する。体部には細かい斜行縄文が施されている。53は縄文の施された小片である。54は浅鉢形土器かとみられるが、縄文が粗い。55は口縁の肥厚するもので、口縁部には単節、体部には無節の縄文が施されている。あるいは両者が結束された1本の原体によるものかもしれない。56は粗い縄文の施されたものである。57は縦位施文の縄文、58・59は粗い縄文が認められる。60は深鉢形を呈するものとみられる。やや縦行気味の縄文が施されている。

石器 1 (P-16) はラウンドスクレイパー。下縁に急角度の刃部が作り出されている。黒曜石製。2 (P-19) は安山岩すり石で、球形素材である。全面が弱く磨耗している。3 (P-39) は細粒砂岩砥石で、扁平転礫を素材とする。粒子はそろってよく固結している。4 (P-37) は片麻岩石

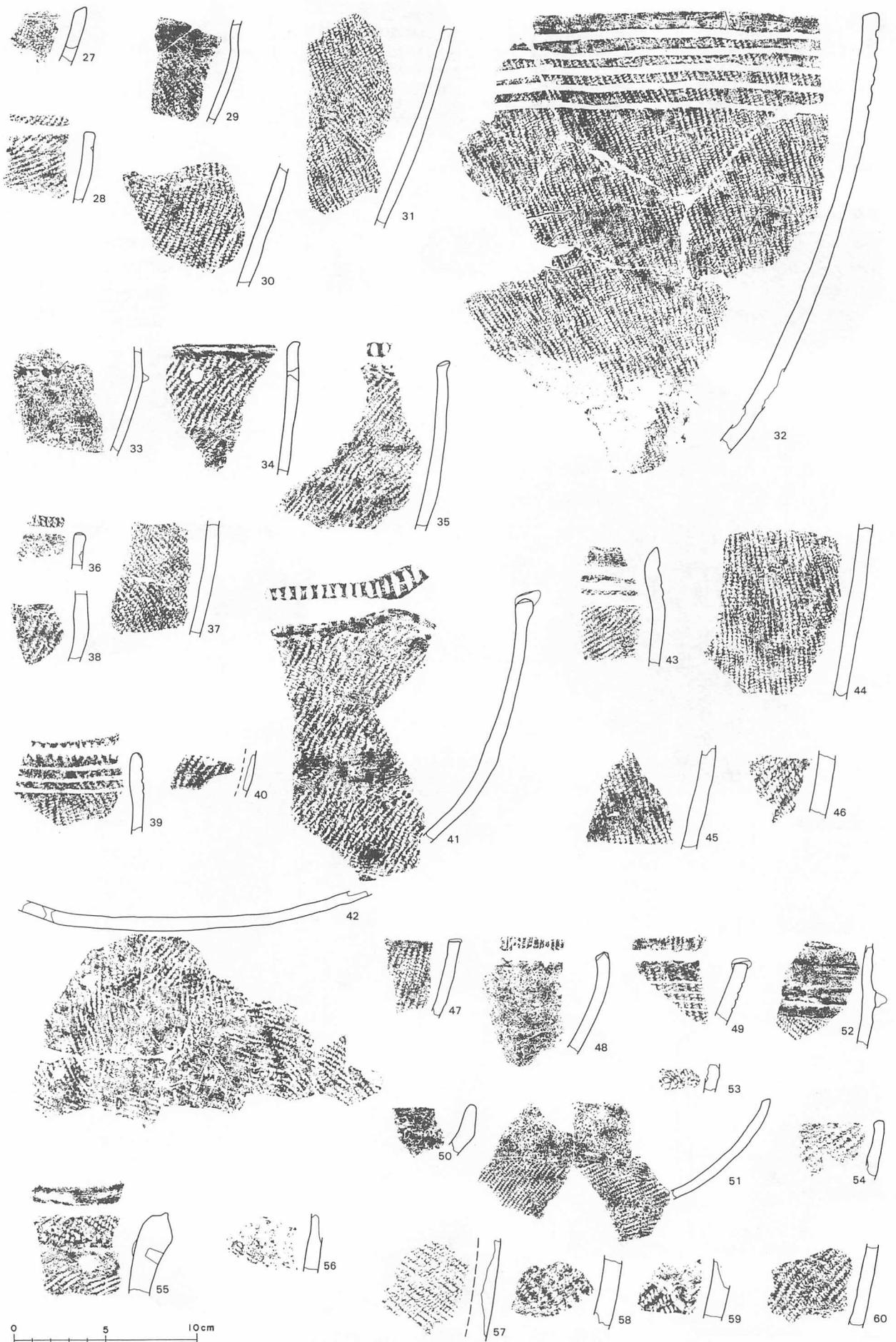


図Ⅲ-136 土壌(晩期) 実測図(1)

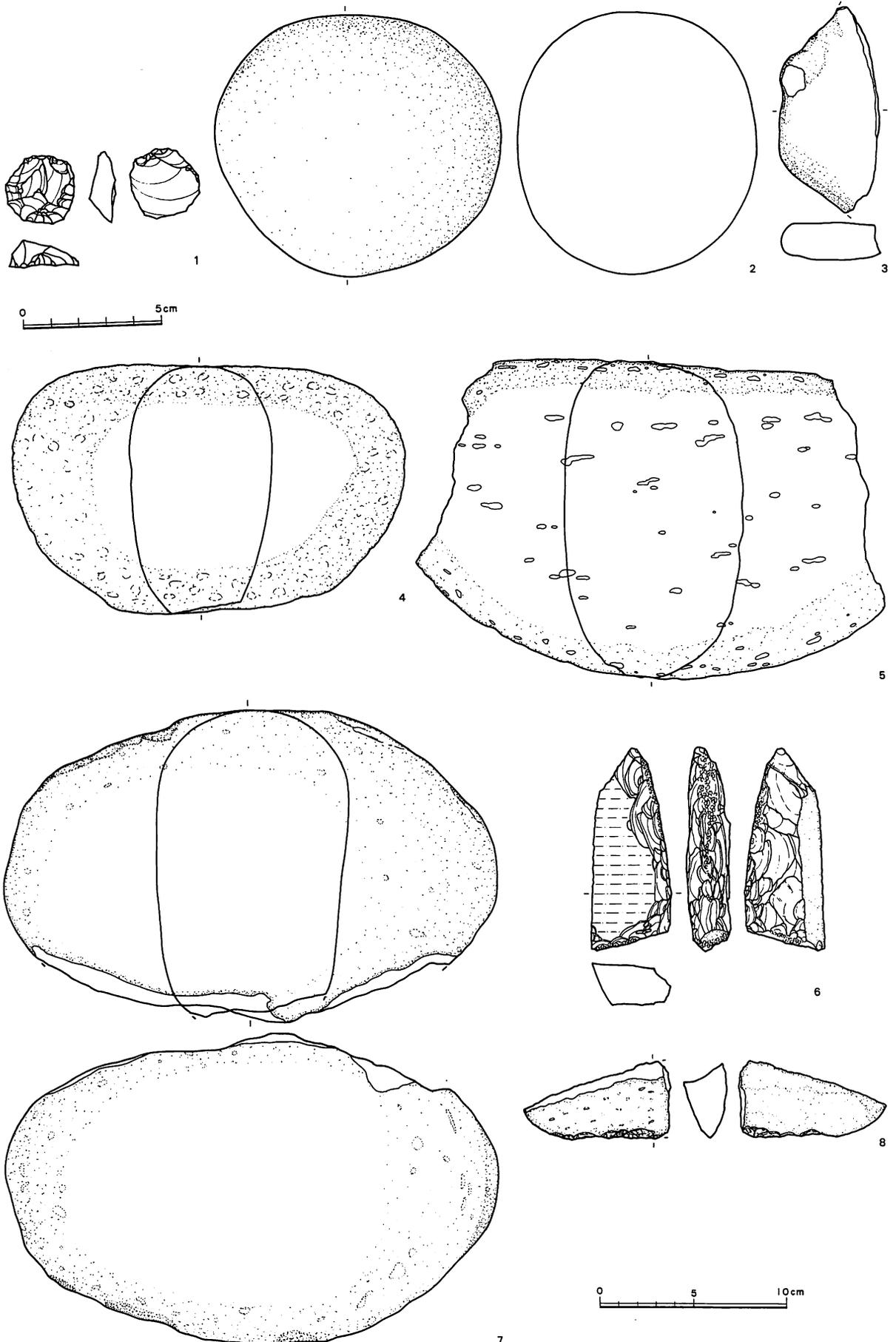




図Ⅲ-138 土壇（晩期） 出土の土器(1)



図III-139 土壌(晩期) 出土の土器(2)



図Ⅲ-140 土壙（晩期）出土の石器

皿で、若干凸面状を呈する主面を使用する。5 (P-45) は片麻岩石皿。若干凸面状を呈する主面を使用する。長軸の両端を欠いている。6・7はP-48出土のものである。6は緑色泥岩石斧未製品。片側縁のみに剝離調整を加える。また折面を使用するたたき石に転用されている。7は片麻岩石皿で、使用面は若干凹んでいる。8 (P-102) は安山岩礫器、断面三角形、両側から刃をつける。

(3) 焼土 (図III-141~143、図版III-79・80)

縄文時代晩期中葉として報告した焼土は、34か所であった。これらの焼土の検出面はすべてII黒層一回目であった。内訳は、焼土中にあり、被熱しているV群b類土器を含む例が14か所、焼土中にIV群b類土器を含む例が12か所、付近からV群b類土器が出土している例が8か所である。

焼土の分布は、G<sub>1</sub>-64区の標高23.3mの台地上から標高23mの斜面肩口にかけて北東~南西方向に長く帯状に分布している。また焼土の分布と晩期土壌とIV群b類土器との集中域は、重複する傾向にある。また、単独で存在しているF-59については同様なことが言える。

焼土の形態的特徴は晩期焼土の場合断面にある。動いている例を除くと、焼土上面が凹むもの(6例)と凸るもの(14例)とがあり、凸形断面のものが一般的である。また平面形についても、凸形断面を持つものは不整形が多く、凹形断面をもつものは楕円・円形の整った形態が多いようである。

A群: G<sub>1</sub>-64-02に所在する。2か所の焼土が平均約1.1m離れて群をつくる。焼土の平均面積は0.35m<sup>2</sup>で晩期焼土の中では1番目に大きい焼土で構成される。最も近くにある土壌は0.8m~3.6m離れて群両端に分布する。F-16は晩期焼土の中で3番目に土器を多く包含し(33点)、その内97%が被熱しており、最高の被熱率を示している。

B群: G<sub>1</sub>-64-21・22・31・40・41に所在する。11か所の焼土が平均1.5m離れて帯状の群をつくる。焼土の平均面積は0.22m<sup>2</sup>で平均的な大きさの焼土が集っているが、凸形が小さく凹形が大きい傾向がある。最も近くにある土壌は0.7~3.0m離れて群の東端に主に分布する。F-17からは炭化したキハダ属の実が検出されている。またこの焼土は、石鏃・R-フレイク他7種類の遺物を含み、晩期焼土中2番目に遺物種類数が多い。F-14の土器(16)はG<sub>1</sub>-64-40・41・50・51(各1点)と接合関係を有する。この接合例は、他の列が焼土の所在するグリット内に収まるのに対して、広域的な接合関係を有する。F-7・14には被熱遺物がなかった。

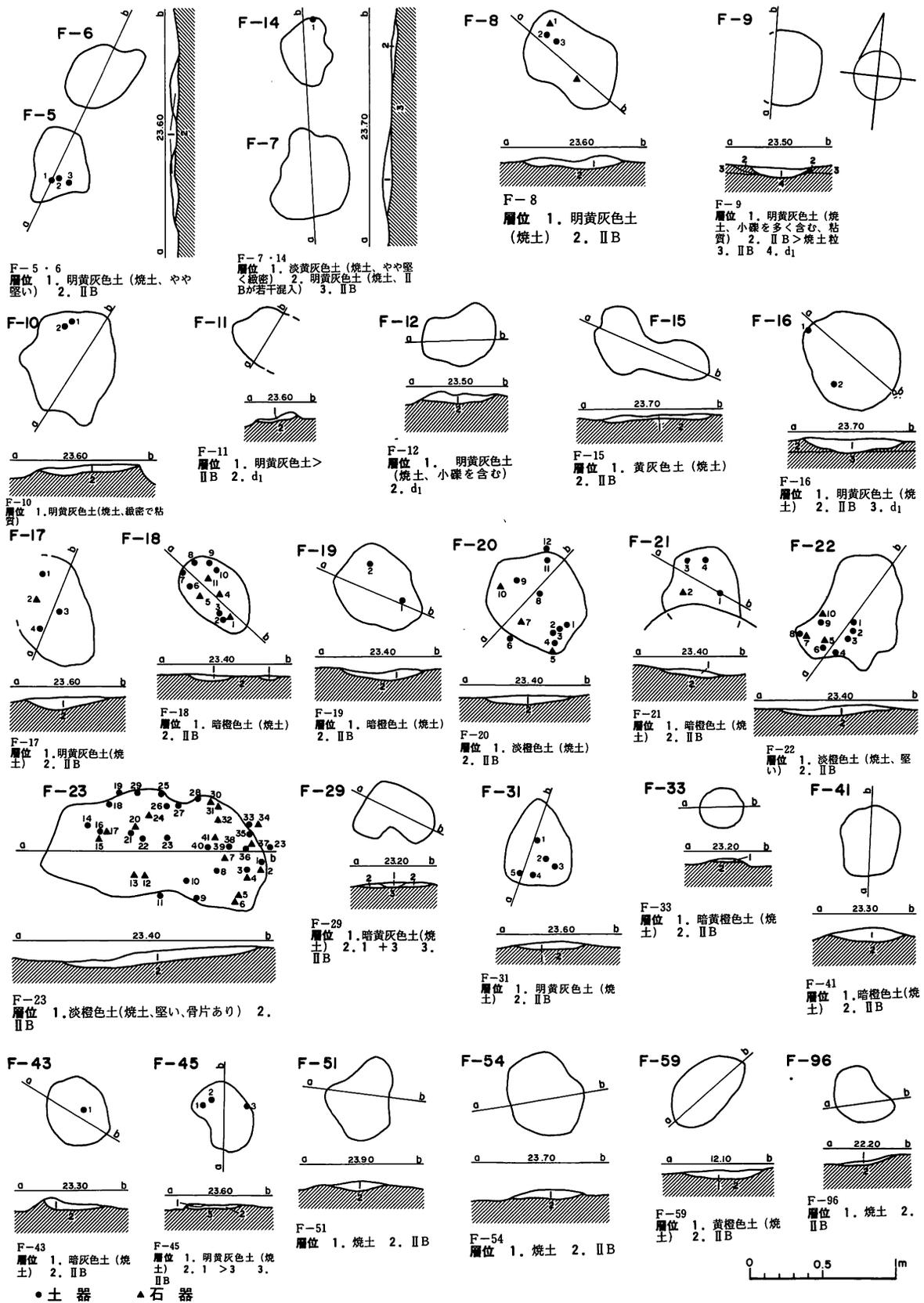
C群: G<sub>1</sub>-64-31・41に所在する。2か所の焼土が平均約1.3m離れて群をつくる。焼土の平均面積は0.15m<sup>2</sup>で晩期焼土の中では最小の面積である。近くに土壌はない。

D群: V群b類土器集中域から外れたG<sub>1</sub>-64-52に所在する。2つの焼土が平均約0.9m離れて群をつくる。これらはいずれも動いており、F-38には被熱した遺物は含まれていなかった。廃棄された焼土であろうか。

E群: G<sub>1</sub>-64-33・43・53に所在する。9か所の焼土が平均約1.6m離れ帯状の群をつくる。焼土の平均面積は0.28m<sup>2</sup>で晩期焼土群中2番目に大きい焼土で構成される。最も近い土壌は1.5m~2.2m離れて主に群の東端に分布する。F-18からは炭化したクルミの殻皮片が出土している。F-23からは焼骨細片が少量出土しているほか被熱した黒曜石フレイクを再利用したU-フレイクも出土している。また、F-23は晩期焼土中最も大きくかつ遺物種類数も13種と最多

表III-47 焼土群(晩期)一覧

群	遺構番号	群と最近隣土壌	群と最近隣で同じ掘込面の土壌	平均面積(m <sup>2</sup> )
A	15,16	18,19,35 39	16,17 20	0.35
B	5~11,14,17 31,45	40~43,45	29,44	0.22
C	12,13	当該土壌なし	当該土壌なし	0.15
D	38,39	当該土壌なし	当該土壌なし	---
E	18~23,29 33,43	37,48,50 51	46	0.28
単 独 土 壌	51,54,96,108 118,119 41 59	当該土壌なし 34 102	当該土壌なし	0.17 0.16



図III-141 焼土(晩期) 実測図

を示している。F-29・33は被熱した遺物を含まない。

F-18 (33) はG<sub>1</sub>-64-43 (1点)、F-29 (56) はG<sub>1</sub>-64-53 (1点)、F-43 (61) はG<sub>1</sub>-64-53 (1点) 出土の土器片と接合する。これらはいずれも焼土の所在するグリット内が隣接した1グリットと接合する。

群を形成しない焼土：これらの平均面積は0.16m<sup>2</sup>で小型の焼土の範ちゅうに入る。断面形は凸形のものがやや多い。これらはV群b類土器の集中域と重複しない例 (F-41・51・54・108・118・119) が多い。また、これらの中には被熱した遺物をふくまない焼土が4例 (F-51・96・108・119)、遺物のない例 (F-118) がある。

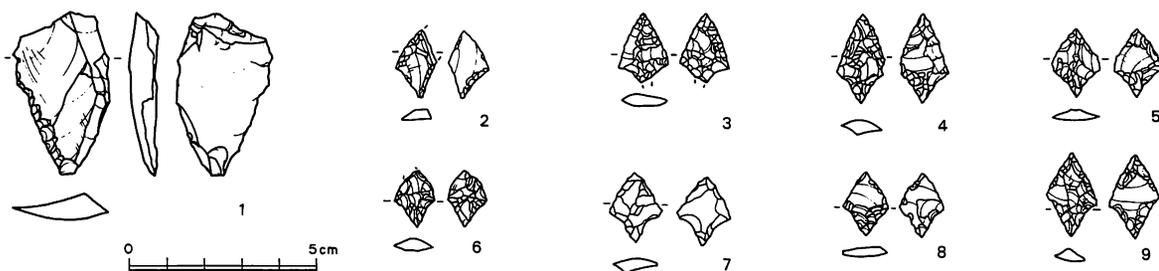
群を構成する晩期焼土の特徴を、断面形ごとに面積・遺物種類数・遺物点数について比較して説明することとする。断面凸形焼土の平均面積は0.21m<sup>2</sup>、平均遺物種類数は3.72種、平均遺物点数は4.18点である。断面凹形焼土のそれは1.36m<sup>2</sup>、5.17種、140点である。二者を比べると、凹形焼土は大規模で遺物組成が豊富であり遺物点数が多い。凸形焼土は凹形焼土と対称的である。さらに凸形焼土の中には動いたもの、被熱した遺物を含まないものがある。凹形焼土については中期焼土で述べた様に掘り込みをもっている可能性がある。以上より、凹形焼土は掘り込みをもつ定置的な遺構で屋外炉のようなもの。凸形焼土は焚火のような一時的なもの。凸形で被熱遺物のないものや動いたようなものは焼土と遺物の廃棄土のようなものということを示している。(鈴木)

**遺物：土器** F-6 (1・2)、F-7 (3~5)、F-8 (6~8)、F-9 (9・10)、F-10 (11~13)、F-11 (14・15)、F-14 (16)、F-15 (17)、F-16 (18~22)、F-17 (23~26)、F-18 (27~34)、F-19 (35~37)、F-20 (38~42)、F-21 (43)、F-22 (44~46)、F-23 (47~55)、F-29 (56)、F-31 (57・58)、F-33 (59)、F-43 (60~61)、F-45 (62)、F-59 (63)、F-63 (64~67) から出土している。2・4・5・34・37・42・46・59はⅢ群b-3類土器であり、他はV群b類土器である。1は鉢形土器の口縁部で、器面と口唇に縄文を施し、口縁部に棒状工具により下側から斜めに刺突文が施されている。口縁へ向って器壁が薄くなっている。2は赤味を帯びた無節の縄文のある小片である。3は鉢形土器の口縁部で器面と口唇に斜行縄文を施す。器壁は口縁へ向って厚味を増す。4・5は斜行縄文の施されているもので、底部の角が張り出す。6~8は鉢形土器の体部で、浅く縄文が施されている。9は底部、10は体部の破片で、浅く縄文が施されている。11は縄線文の施されているもので、浅い沈線も認められる。12は鉢形土器の口縁部で、口唇上に刻みがある。13は浅鉢形もしくは皿状土器かとみられる。器面に縦行する浅い縄文を施し、口縁部をなで調整している。14は口唇に部分的に刻み目を施すものとみられる。15は文様の認められない底部とみられるものである。16は円形刺突文を施すもので、小形鉢形土器の体上部の破片である。17は底部の角にくびれをもつものである。18は鉢形土器の口縁部で、口縁はやや厚い。19は浅鉢形の口縁かとみなされるもので、口唇の幅は広い。20は薄手のもので、器面にかすかに縄文の痕跡が認められる。21は浅鉢形土器の突起部の破片であるが、山形に作り出された頂部に二つの刻み目を付す。22は亀ヶ岡式系の壺形土器の肩部である。縄文は細かく、頸部の沈線にA突起を配している。23は薄手の土器で、亀ヶ岡式系のものかとみられる。細かい縄文が施されている。24は浅く縄文の施されたもので、内面の一部に擦痕が認められる。25は浅鉢形土器の体部の破片とみられるもので、沈線文の間に円形刺突文を配している。26は内面に沈線があり、鉢形土器の頸部とみなされる。27は口唇にしっかりした刻み目のあるもので、口縁部に縄線文が施されている。28~32は鉢形もしくは浅鉢形の破片で、浅く縄文の施されているものである。33は小形の丸底土器で、口唇に密に刻み目を施し、体部には縄文の代りか、雑な沈線の施されているものである。34は粗い斜行縄文の施されたものである。



図Ⅲ-142 焼土（晩期） 出土の土器

35は口唇の幅がやや広く口唇に指頭によるかともみられるくぼみがある。36は細かい縄文の施されているものである。37は器面にかすかに縄文の施されているものである。38~41は浅く縄文の施されたものである。42には無節の縄文が施されている。43は浅鉢形土器の底部の破片かともみられるもので、LRの原体による縄文が施されている。44はわずかに縄文の認められるものである。45は口唇に縄文があり、口縁に下方向からの刺突文が施されている。46は粗い縄文の施されているものである。47は口縁部に2条の縄線文をめぐらし、口唇に刻み目をつけるものである。48は口縁の山形の突起に縄で2列の刻み目をつけている。口縁には縄線文を施している。49は口縁の内面に段がある。50は口唇にも縄文を施す。51は器面に縦行気味の浅い縄文を施すものである。52は若干彫り込み気味の磨消縄文のあるものである。53・54は縄線文の認められるものである。55は浅鉢形土器の口縁部で、内面に2

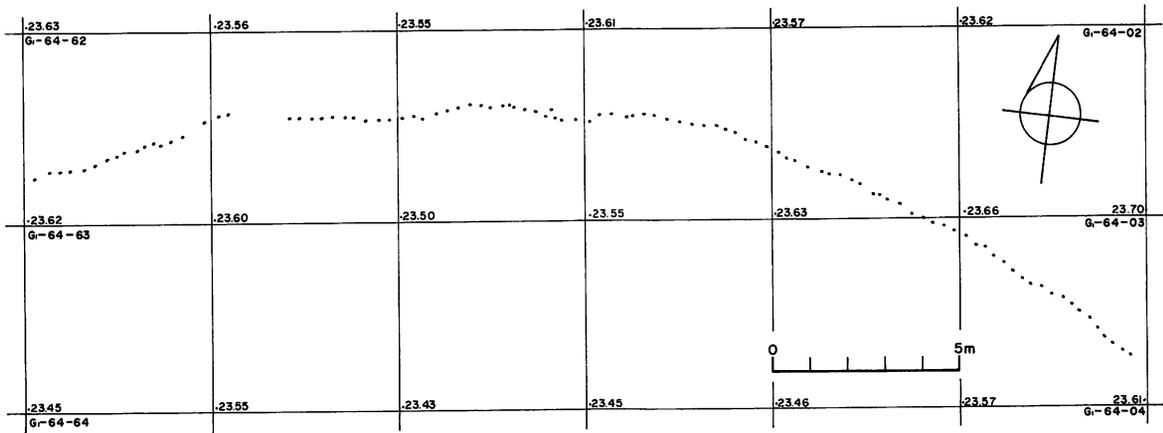


図III-143 焼土(晩期) 出土の石器

表III-48 焼土(晩期)一覽

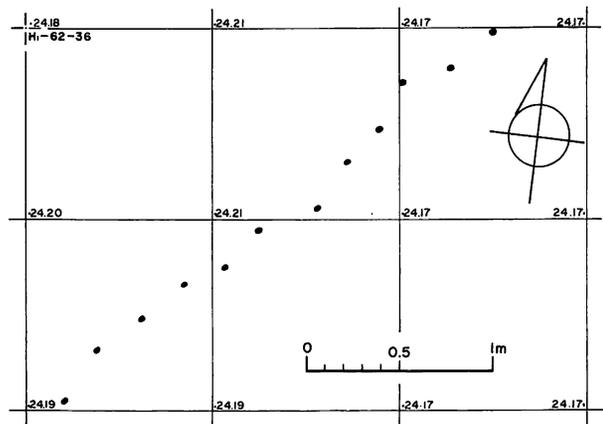
※ 検出面はII B掘り下げ回数を示す

遺構番号	位置	規模 (cm)		検出面	備考
		長径×短径	層厚		
F-1	G <sub>1</sub> -63-46	1.00 × 0.68	0.11	II B1回目	H-20に伴う
F-5	G <sub>1</sub> -64-40, 41	0.46 × 0.35	0.04	II B1回目	断面紡錘形
F-6	G <sub>1</sub> -64-40	0.60 × 0.39	0.06	II B1回目	断面紡錘形
F-7	G <sub>1</sub> -64-40	0.60 × 0.46	0.06	II B1回目	断面紡錘形
F-8	G <sub>1</sub> -64-40	0.68 × 0.42	0.08	II B1回目	凹む
F-9	G <sub>1</sub> -64-31, 41	(0.50) × (0.50)	0.06	II B1回目	
F-10	G <sub>1</sub> -64-31	0.78 × 0.57	0.05	II B1回目	
F-11	G <sub>1</sub> -64-31	— × 0.38	0.04	II B1回目	凹む
F-12	G <sub>1</sub> -64-31	0.51 × 0.35	0.06	II B1回目	断面紡錘形
F-13	G <sub>1</sub> -64-41	0.18 × 0.12	—	II B1回目	動いている
F-14	G <sub>1</sub> -64-40	0.44 × 0.35	0.03	II B1回目	動いている
F-15	G <sub>1</sub> -64-10	0.81 × 0.45	0.02	II B1回目	動いている
F-16	G <sub>1</sub> -64-10	0.72 × 0.63	0.09	II B1回目	凹む
F-17	G <sub>1</sub> -64-21	(0.80) × 0.50	0.09	II B1回目	凹む
F-18	G <sub>1</sub> -64-43	0.58 × 0.37	0.03	II B1回目	動いている
F-19	G <sub>1</sub> -64-43	0.61 × 0.50	0.07	II B1回目	凹む
F-20	G <sub>1</sub> -64-43	0.70 × 0.63	0.06	II B1回目	断面紡錘形
F-21	G <sub>1</sub> -64-33, 43	(0.38) × 0.54	0.04	II B1回目	断面紡錘形
F-22	G <sub>1</sub> -64-33	0.83 × 0.56	0.06	II B1回目	断面紡錘形
F-23	G <sub>1</sub> -64-33, 34	1.48 × 0.76	0.09	II B1回目	フレイク・チップを多量に混入
F-29	G <sub>1</sub> -64-53	0.55 × 0.38	0.03	II B1回目	断面紡錘形
F-31	G <sub>1</sub> -64-22	0.56 × 0.45	0.05	II B1回目	断面紡錘形
F-33	G <sub>1</sub> -64-53	0.30 × 0.26	0.02	II B1回目	断面紡錘形
F-38	G <sub>1</sub> -64-52	0.34 × 0.18	0.04	II B1回目	動いている
F-39	G <sub>1</sub> -64-52	0.46 × 0.18	0.04	II B1回目	動いている
F-41	G <sub>1</sub> -64-35	0.47 × 0.40	0.10	II B1回目	断面紡錘形
F-43	G <sub>1</sub> -64-43, 44	0.48 × 0.42	0.08	II B1回目	凹む
F-45	G <sub>1</sub> -64-22	0.48 × 0.30	0.02	II B1回目	動いている
F-51	G <sub>1</sub> -63-68	0.58 × 0.44	0.06	II B1回目	断面紡錘形
F-54	G <sub>1</sub> -63-79	0.59 × 0.52	0.06	II B1回目	断面紡錘形
F-59	G <sub>2</sub> -64-55	0.90 × 0.65	—	II B1回目	断面紡錘形
F-96	G <sub>1</sub> -64-73	0.42 × 0.30	0.03	II B1回目	
F-108	G <sub>2</sub> -63-08	0.41 × 0.40	0.03	II B1回目	
F-118	G <sub>2</sub> -63-64	0.30 × 0.27	0.04	II B1回目	
F-119	G <sub>2</sub> -63-74	0.36 × 0.22	0.03	II B1回目	



図Ⅲ-144 動物の足跡(A)

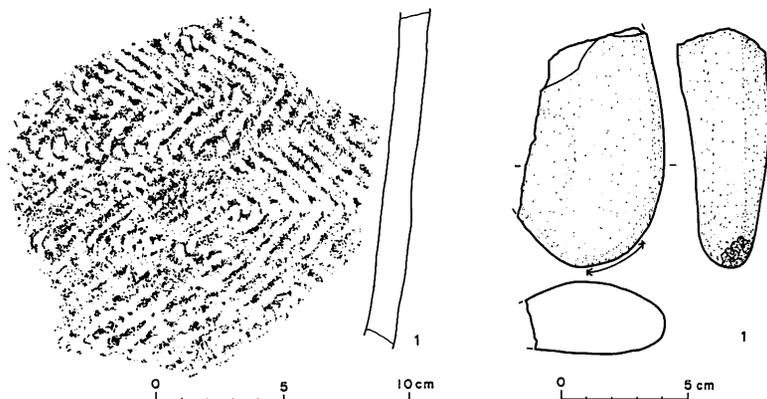
条の浅い沈線をもち、口縁にはかすかな凸帯があり、口縁部の下縁の隆起帯に沿って縄線文が一条めぐらされている。体部には磨消縄文が認められる。56は小形の丸底の浅鉢形土器で、無文地に弧線で文様を施している。57は縄線文の施されたもので、口縁は無文となっている。58は浅く施された縄文の認められるもの、59はかすかに斜行縄文の認められるものである。60と56は同一個体に属する。61はかすかに縄文の認められるものである。62は薄手で細かい縄文の施されているものである。63はやや整った斜行



図Ⅲ-145 動物の足跡(B)

縄文の認められるものである。64は口縁の小片で薄い、口唇の調整を内側へ向けて行っている。65には横走気味の浅い縄文が認められる。66は整った細かい斜行縄文の施されているもので、内面調整もなめらかである。亀ヶ岡式系のとみられる。縄文の原体はRLである。67は浅鉢形土器で器面には口縁から2列に縦の隆起帯をつけている。口唇は隆起帯の位置を含めて平坦に調整され、口唇上には細い縄で刻み目を密につけている。さらに口唇の表面側の角に、断面円形をなす棒状工具を押しつけて刻みをつくり、口唇の少し下に、下側から斜めに突き上げた刺突文を施す。同様の刺突文は破片の下端の、底への移行部分にも施されている。器面に縄文が認められない。

石器 1 (F-8) はスクレイパーで、縦長剝片を素材とし、背面の側縁に加工が施されている。



図Ⅲ-146 SP-6出土の土器とP-75出土の石器

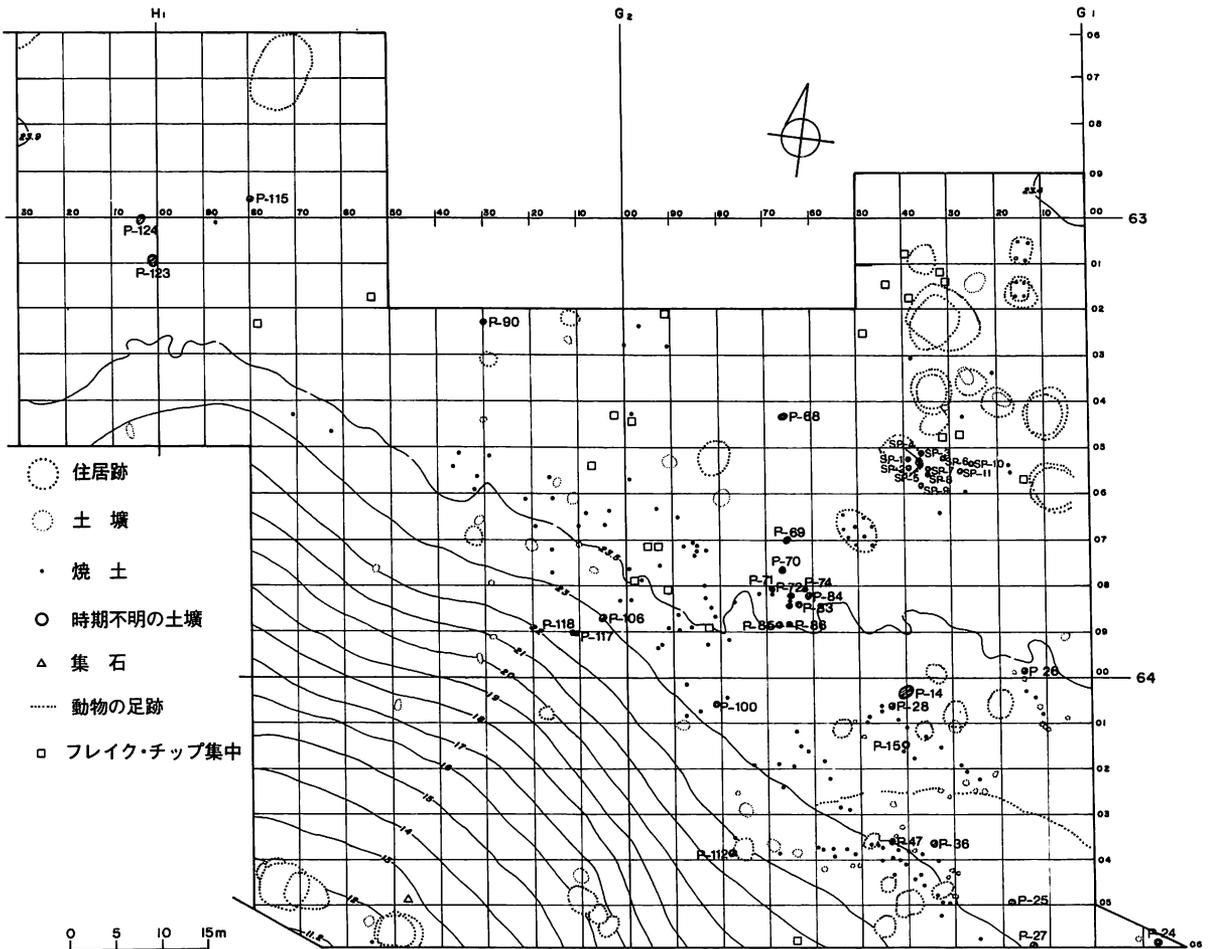
黒曜石製。2～4 (F-17) は有茎の石鏃で、いずれも黒曜石製である。5 (F-18) は有茎鏃、6・7 (F-22) は有茎石鏃、8・9 は有茎の石鏃で、いずれも黒曜石製である。

(4) 動物の足跡 (図Ⅲ-144・145、図版Ⅲ-81)

調査区の南東側 (A) と北西側 (B) で、各々1列づつの動物の足跡が検出される。Ta-cを除去し、Ⅱ黒層上面で確認される。径15cm～20cm、深さ2cm～3cmの楕円形状の浅いくぼみで、25cm～30cmほどの間隔で続いている。動物の足跡 (A) は、南東-南西へ弧状に伸びている。浅いくぼ

表Ⅲ-49 時期不明の土壌一覧

遺構番号	位置	規 模 (m)				最大深	平面形状	備考
		長径	短径	長径	短径			
P-14	G <sub>1</sub> -64-30-40	1.50	0.47	1.22	0.24	0.22	長楕円形	N-33° -E, ⅡB2目検出
P-24	F <sub>2</sub> -64-85	0.80	0.47	0.60	0.24	0.19	楕円形	N-56° -W, Ta-d <sub>1</sub> 上面検出
P-25	G <sub>1</sub> -64-24	0.70	0.40	0.62	0.36	0.35	長円形	N-S, Ta-d <sub>1</sub> 上面検出
P-26	G <sub>1</sub> -63-19	0.46	0.23	0.40	0.16	0.22	卵形	N-31° -W, Ta-d <sub>1</sub> 上面検出
P-27	G <sub>1</sub> -64-15	(0.80)	0.50	0.64	0.30	0.32	卵形	N-11° -W, Ta-d <sub>1</sub> 上面検出
P-28	G <sub>1</sub> -64-40	0.48	0.34	0.42	0.32	0.24	卵形	N-28° -W, Ta-d <sub>1</sub> 上面検出
P-36	G <sub>1</sub> -64-33	0.60		0.52		0.24	卵形	N-4° -W, Ta-d <sub>1</sub> 上面検出
P-47	G <sub>1</sub> -63-43	0.50		0.44		0.32	円形	Ta-d <sub>1</sub> 上面検出
P-68	G <sub>1</sub> -63-44	0.92		0.70		0.20	長楕円形	
P-69	G <sub>1</sub> -63-94	0.68		0.66		0.20	略円形	Ta-d <sub>1</sub> 上面検出
P-70	G <sub>1</sub> -63-67	0.60		0.52		0.18	楕円形	Ta-d <sub>1</sub> 上面検出
P-71	G <sub>1</sub> -63-68	0.39		0.28		0.15	長円形	
P-72	G <sub>1</sub> -63-68	0.58		0.41		0.14	楕円形	
P-74	G <sub>1</sub> -63-68	0.42		0.28		0.20	楕円形	
P-75	G <sub>1</sub> -63-68	0.69		0.49		0.17	楕円形	
P-83	G <sub>1</sub> -63-68	0.58		0.55		0.14	円形	
P-84	G <sub>1</sub> -63-68	0.56		0.42		0.23	楕円形	
P-85	G <sub>1</sub> -63-68	0.64		0.53		0.15	楕円形	
P-86	G <sub>1</sub> -63-68	0.47		0.33		0.24	長楕円形	
P-90	G <sub>1</sub> -63-22-32	0.50	0.33	0.35	0.19	0.17	長楕円形	N-83° -E, ⅡB2目検出
P100	G <sub>1</sub> -64-80	0.60		0.58		0.34	略円形	
P106	G <sub>1</sub> -63-08	0.90		0.64		0.16	楕円形	N-32° -E, ⅡB2目検出
P112	G <sub>1</sub> -64-73	0.71		0.68		0.11	楕円形	Ta-d <sub>1</sub> 上面検出
P115	G <sub>1</sub> -62-79-89	0.87	0.62	0.62	0.45	0.33	楕円形	E-W
P117	G <sub>1</sub> -63-18-19	0.56	0.34	(0.50)	0.30	0.14	楕円形	Ta-d <sub>1</sub> 上面検出
P118	G <sub>1</sub> -63-18-19	(0.48)	(0.30)	(0.52)	0.34	0.16	略円形	Ta-d <sub>1</sub> 上面検出
P123	H <sub>1</sub> -63-00-01	1.06		0.91		0.24	楕円形	N-25° -W
P124	H <sub>1</sub> -62-09, H <sub>1</sub> -63-00	1.12	1.48	0.47	0.16	0.22	楕円形	N-28° -E



図Ⅲ-147 時期不明の遺構位置図

みであるが若干南西側が深くなっていることからみて、南東から南西の斜面に向っての歩行が推測される。動物の足跡（B）は北-南の方向に伸びている。これまでの調査で確認されている動物の足跡と同様、足跡の大きさ、歩幅、並び方などからキツネのものと思われる。（和泉田）

## 5 時期不明の遺構と遺物

### (1) 土壌

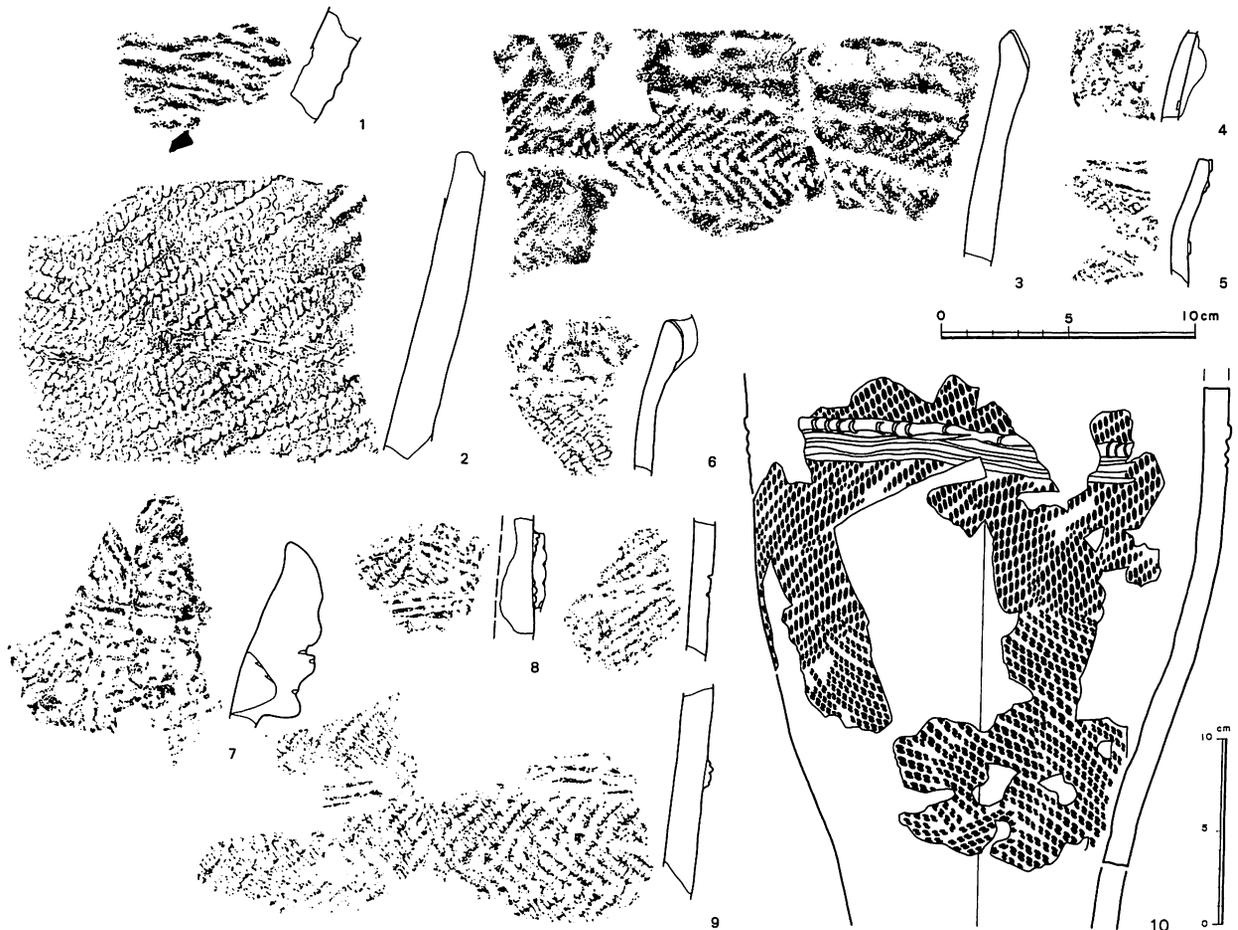
本土壌のほとんどが  $d_1$  上面か  $d_2$  上面で検出されたものであり、覆土および墳底から時期を推測し得る遺物が出土していないため、時期不明の土壌としたものである。P-123・124は長径が1mを超えるけれども他は0.5m~0.9mである。平面形は長円形、長楕円形のものが多い。29基の土壌のうち、P-25・27・68・69・70・71・72・74・75・83・84・85・115・123の14基は、II B +  $d_2$  の黒茶色土が斜めに堆積し、一方の壁がなかなかはっきりしないという状態などから考えると、風倒木痕の可能性が強い。他については一応II B +  $d_1$  の混り合った土が入っているものが多いけれども性格・用途なども明らかではない。（和泉田）

### (2) 小ピット群

G<sub>1</sub>-63-26・36の  $d_2$  上面で検出する。掘立て柱状のものかとも思われるが、明瞭な配列関係は認められない。径20cm~30cm、深さ20cm~30cmで、平面形は円形、楕円形である。覆土はおおむねII B +  $d_1$  の黒茶色土である。SP-2・7・9の覆土中からはフレイク、フレイク・チップが数点出土しており、SP-6の墳底からはIII群b-3類土器が出土しているが、時期は明確ではない。（和泉田）

**遺物：土器** 1は結束羽状縄文の施されている体部である。内面上部は滑かに調整されている。

**石器** 1は、欠損した砂岩製のたたき石である。



図Ⅲ-148 包含層出土の土器：Ⅱ群a-1類、a-2類、Ⅲ群a類、b-1類

## 6 包含層出土の遺物

### (1) 土器 (図Ⅲ-148~174、図版Ⅲ-82~92)

包含層から出土した土器にはⅡ群~Ⅴ群に属するものがある。そのうちⅢ群b-3類とⅤ群b類に属するものが特に多い。

#### Ⅱ群a-1類 (図Ⅲ-148-1)

体部の小片である。胎土に繊維を含み、節の明瞭でない、条の横走る縄文が認められる。

#### Ⅱ群a-2類 (図Ⅲ-148-2)

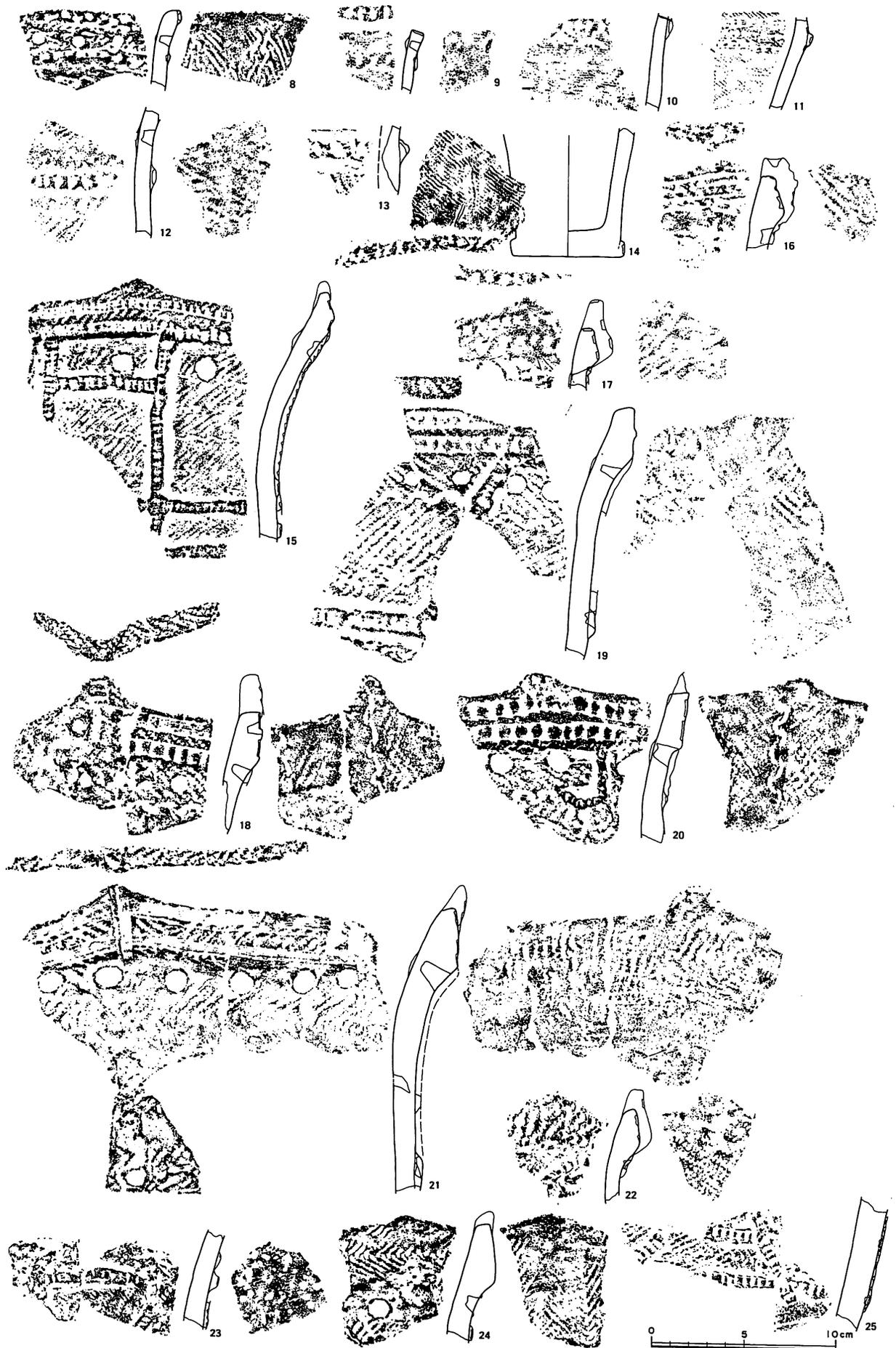
体部のやや大きい破片である。器面にはLRの原体を横位と縦位に施している。規則的な羽状縄文で構成するものではない。なお接合面から破損していて、断面が丸味をもつ擬口縁が、内面寄りに位置している。

#### Ⅲ群a類 (図Ⅲ-148-3~6)

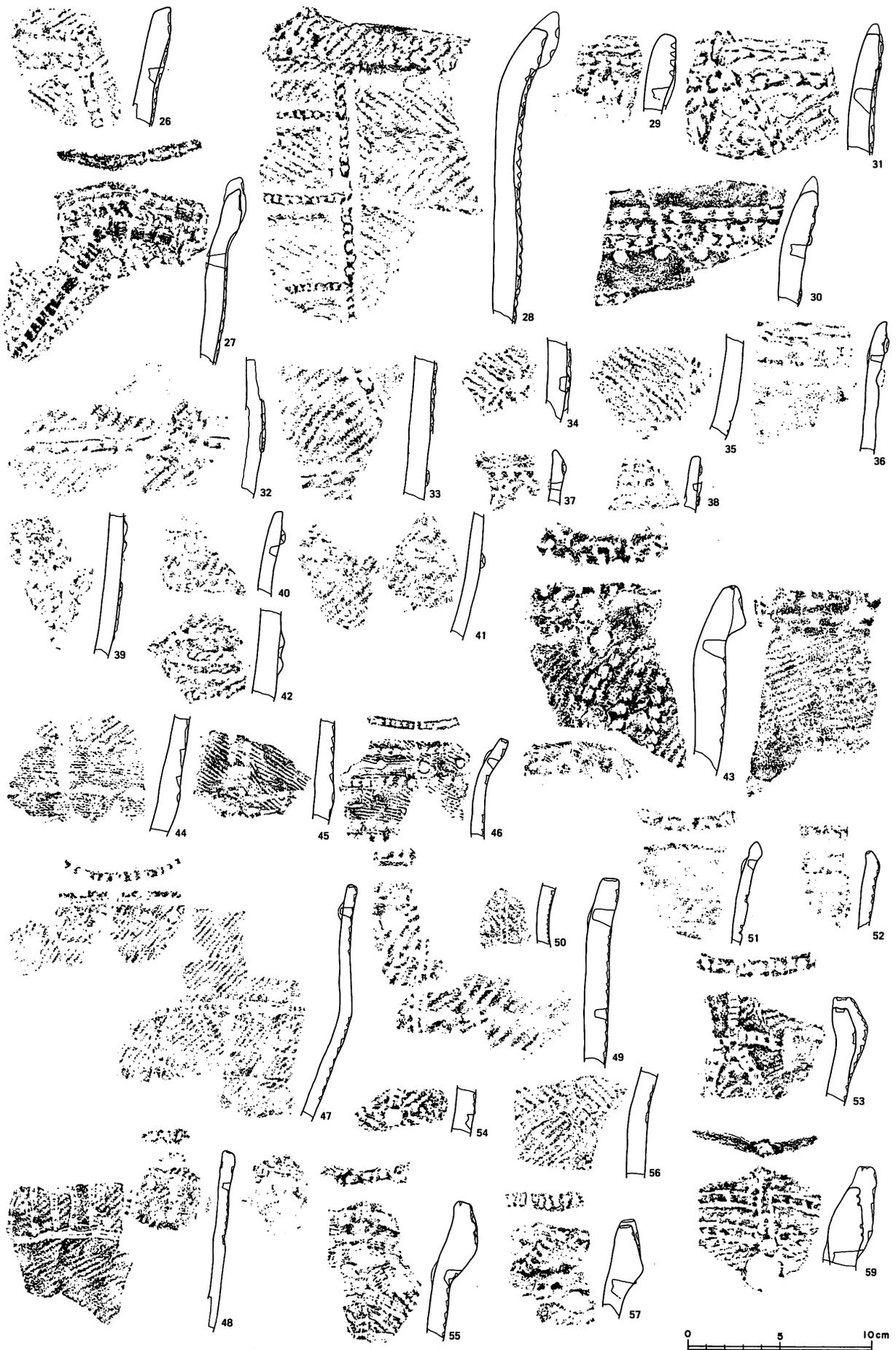
3は大形の土器で、口縁部に鋸歯状もしくは貼付帯がある。器面には結束羽状縄文が施されている。4~6は小形の土器で、4は口縁の凸起部に近い破片で、器面には無文地に瘤状の貼瘤と細い貼付帯、幅の狭いヘラ状工具による横方向から斜めに施された刺突文が認められる。貼付帯上に細い撚紐の圧痕がある。5は縄文地に細い貼付帯の施されているもので、貼付帯は口唇に沿って施されているほか、



図Ⅲ-149 包含層出土の土器：Ⅲ群b-3類(1)



図Ⅲ-150 包含層出土の土器：Ⅲ群b-3類(2)



図Ⅲ-151 包含層出土の土器：Ⅲ群b-3類(3)

体上半部にゆるやかな波状をなして施されるものとみられる。貼付帯上には細い撚紐の圧痕がある。6は口縁にそって器体に太い粘土帯が加えられ、外反する口縁の肥厚する形態をもつもので、口縁に太い貼付帯を波状に施すものとみられる。貼付帯上と口縁に縦位に細い撚紐の圧痕を施している。これらのⅢ群 a 類土器は円筒土器上層 b 式の末から次のサイベ沢Ⅶ式に相当するものとみなされる。

### Ⅲ群 b-1 類土器 (図Ⅲ-148-7~10)

7は口縁の突起部分で、突起は極端に大きい。突起には貼付帯がめぐらされ、先端が弧状をなす。半截竹管状工具の先端による刺突が加えられている。8・9は同一個体で細い半截竹管状工具により貼付帯上に刺突文及び綾杉状の刺み目を施すもので、地文は結束のある羽状縄文である。10はH-18などの遺構出土のものと同層のものが接合したもので、体部上半に横走気味の斜行縄文が施され、半截竹管状工具による平行沈線を2列めぐらせ、それにそって貼付帯を施し、貼付帯上に押引き文を加えている。体下半には複節斜行縄文が施されている。

### Ⅲ群 b-3 類土器 (図Ⅲ-149~165)

Ⅲ群 b-3 類土器は出土土器の中で最も多く、多様なものがある。昨年度にならって A 類から H 類に区分し記載することにする。昨年度報告資料と接合したもの、同一個体に属するものも記載の便宜上掲載したことがある。なお用語は昨年度と同様、頸部にめぐらされた円形刺突文は円形文と略する。

**A 類** (8~42) は器面に貼付帯の施されているものである。8~14は他のものとは若干趣きを異にするもので、柏木川式のなごりをとどめているものかと思われる。8・9・12には内面にも縄文、撚糸文が施されている。8は口唇にそう位置と、わずかにくびれる頸部に貼付帯をめぐらしその間に円形文を配するもので、貼付帯上には横方向から斜めに棒状工具による刺突が加えられている。地の縄文には結節の回転文が加えられている。9・10は同一個体で、口唇と口縁部の貼付帯及び体部の器面にヘラ状工具による刺突文を施している。地文は細かい撚糸文で、口縁の貼付帯の上縁にそって円形文が施されている。11は体部に貼付帯の認められるもので、貼付帯の上と上・下縁に幅の狭い押引き文が施されている。地の縄文は無節で、結節の回転文が加えられている。12は口縁を欠失するが横位の貼付帯と円形文が認められる。貼付帯状にはヘラ状工具を押捺して刻み目をつけている。地の縄文は結束のある斜行縄文とみられる。13はやや太い貼付帯があり、棒状工具による斜めの刻み目がつけられている。より古い時期のものかと思われるが、便宜的に含めておく。14は底部下端に貼付帯のあるもので、ヘラ状工具による押引き文風の刺突文がつけられている。器面の縄文は無節である。15は昨年度報告の7と同一で、口縁部文様帯が、器壁を肥厚させることで強調された北筒式に一般的な器形の特色を示すもので、体部には縦位の貼付帯に横位の貼付帯を重ねて格子状の文様を構成するものである。上位の貼付帯の左右には剥落痕がある。地の縄文は口縁部と体部にあらかじめ施され、結節の回転文を加えている。内面には指頭による調整痕が残る。

16は口縁部と、体部と内面に結束第2種の原体によるとみられる縄文が施され、それに重ねて、体部に貼付帯を垂下させている。口唇と口縁部と貼付帯上に押引き文を施している。17も口縁部と、体部と内面に縄文を施し、口唇と、口縁部と貼付帯上に押引き文風の刺突文を施している。口縁の縄文は浅く施されている。18・19は同一個体で、昨年度報告資料(11)に接合した例である。口縁部と体部と、口唇と内面に結節第2種の原体による羽状縄文を施し、体部に太い貼付帯を、口縁の突起に対応する位置に八の字形に貼付し、体部を横環する貼付帯の接点に円形の刺突文を施している。口縁に

はヘラによる押し引き文と突起の左右に刺突文を加えている。20は体部と内面に結束第2種の原体による羽状縄文を施し、口縁部と、口唇はヘラによるなで調整がなされている。体部に環状に貼付されたかとみられる細い貼付帯があり、口縁部から垂下する貼付帯とつながる。さらに環から突出するように短い貼付帯がつけられている。口縁部には幅の広いヘラ状工具、貼付帯上には狭いヘラ状工具により、ともに押し引き文が加えられている。21は口縁部、体部、口唇、内面に結束第1種の原体による羽状縄文が施され、体部にはY字状の太い貼付帯が、口縁の突起の位置に対応して施されていた痕跡がある。体部を横環する貼付帯との接点には円形の刺突文が加えられている。口縁部にはヘラ状工具により、沈線化した押し引き文が施され、貼付帯上には縄文が施されている。器面に赤色顔料が付着している。

22・23は同一個体で、口縁部と体部と口唇と内面に縄文が施されている。体部には横環する貼付帯に斜め方向からの貼付帯を重ね交点に円形の刺突文を施している。口縁の山形隆起部に対応して八の字形の貼付帯が認められ、体部に鋸歯状を重ねる文様を構成するのかもしれない。口縁部には半截竹管状工具による斜方向からの刺突文を施している。24・25は同一個体で、口縁部と体部と内面に結束第1種の細かい羽状縄文が施されている。口唇は指頭によるなで調整がなされている。体部に薄い貼付帯を八の字形に配し、横環する2条の貼付帯との交点に刺突を加えている。頸部無文帯に施された円形文は浅く突瘤を形成していない。26は口縁と体部に結束第1種の羽状縄文を施し、口唇から内面にかけてヘラによるなで調整がなされていて突瘤はない。口縁部には左上方から斜めに、半截竹管状工具の丸味のある端部を器面にあてるようにして刺突した刺突文が2段にめぐらされている。体部の貼付帯は縦の貼付帯の間に横位の貼付帯を加えた梯子状の文様を構成するかとみられる。貼付帯上には幅の狭いヘラ状工具により、押し引き文風の刺突が加えられている。27は口縁部と体部と口唇の一部に結束第1種の羽状縄文を施し、口縁部に沈線化あるいはなで調整化したとも言えるヘラ状工具による押し引き文を施し、体部に薄い貼付帯を口縁の隆起部に対応して八の字形に貼付しているように見える。この薄い貼付帯は器面の溝に埋めこまれていて、器面に出ている部分が薄く見える状態である。貼付帯上にはヘラ状工具による押し引き文が施されているけれども、貼付帯が薄く埋めこまれている所では器面に押し引き文を施したように見える。口唇の大部分と内面は指頭によるなで調整がなされている。器面は赤味をもつが、胎土自体が赤い。28は昨年度報告の8と同一個体である。口縁と体部に結束第1種の羽状縄文を施し、口唇と内面はヘラにより調整されている。口縁部には半截竹管状工具による斜方向からの刺突文を施し、体部には梯子状に細い貼付帯を施して、狭いヘラ状工具によりその上に押し引き文を加えている。貼付帯により円形文の埋められた所があり、また内面に突瘤はない。

29はH-13出土の体部と同一個体に属する口縁部の小片である。地の文様は定かではないが、体部には結束第1種の羽状縄文が施されていて、口縁部にも浅く施されているようである。口唇と内面はヘラにより平坦に、かるく磨かれたように調整されている。体部には梯子状の細い貼付帯を施し、口縁部と貼付帯上に、先端が2又になった工具による押し引き文が施されている。内面に突瘤はない。

30は昨年H-1から出土した資料(11)に接合したもので、器壁にくびれはなく、口縁の少し下に埋めこまれた状態の貼付帯があり、口縁部を区画しているようである。この区画された口縁部にはヘラ状工具による押し引き文が施されている。口縁を画する貼付帯から下に、口縁の突起に対応して縦位の貼付帯があり、また体部に横位の貼付帯がある。貼付帯上には細い半截竹管状工具による斜方向からの刺突文が施されている。突瘤はない。31・33は同一個体で、口縁部から体部にかけて貼付帯の施されたものである。あらかじめ縄文の施された器面に、粘土帯を貼付して、口縁部下縁の段差を形成し、さらに口唇近くにもう一条粘土帯を貼付して、口縁部に2条のヘラ状工具による押し引き文風の



図Ⅲ-152 包含層出土の土器：Ⅲ群b-3類(4)

刺突文をめぐらせている。この口縁部の貼付帯上から体部にかけて、さらに口縁の突起に対応する位置に八の字形の貼付帯を施し、その上に押し引き文を施している。30・31は体部の破片で、これからみると鋸歯状に貼付されていたかのようなものである。体部をめぐる貼付帯との接点には刺突が加えられている。口唇と内面には縄文が施されず、ヘラによりなで調整されている。突瘤はない。34はH-18出土資料(9)と同一個体で、結束羽状縄文地に施された押し引き文のある貼付帯の交点に円形刺突文を施すものである。35は全形が不明であるが、縦位の貼付帯下に横位の押し引き文が施されている。36は器面の斜行縄文がなで消されたものとみなされたが、口唇直下に一条と円形文をはさみその下に一条の、横環する2条の貼付帯の施されていたもので、上位の貼付帯の一部に押し引き文風の刺突文が施されている。口唇にそう部分と断面が丸味をもつ口唇、さらに内面もなで調整されている。上位の貼付帯の欠損部は溝状のくぼみとなっているが、この溝の底に半截竹管状工具による押し引き文風の刺突が加えられている。37は口縁に肥厚体をもつようにみえるが、肥厚帯の頂部は粘土紐の貼付によるものであることが知られる。貼付帯上には押し引き文風の刺突があり、貼付帯上縁から口唇にかけてはなで調整されている。器面にはあらかじめ縄文が施されている。38・39は同一個体で、薄手で小形の土器とみなされるが、粗い縄文の施された器面に、細い貼付帯があり、梯子状の文様を構成するかとみられる。口唇直下と、円形文の下と、体部に一条横環するようである。口唇と内面は指頭によるなで調整がなされている。40・41は同一個体で、昨年度報告資料(5・6)と同一個体である。口縁部を画する貼付帯があり、口縁部と丸味をもつ口唇と内面は無文で、突瘤はない。体部の縄文は整った斜行縄文で、貼付帯は縄文地に施され、斜方向からの刺突が加えられている。42は内面が平坦にヘラにより調整されたもので、煉瓦台式と似ている。器面にはあらかじめ結束羽状縄文が施されている。その縄文地に幅が2cm弱ほどの、中くぼみの貼付帯があり、所々長さ1.5cm前後の縄の圧痕が深く施文されている。28・34~40は特に異例のものとみられる。

**B類(2・5・43~67)**は体部に押し引き文の施文されるもので、その類縁のものを含めている。43・44は押し引き文とは異なる施文のあるもので、柏木川式に近いものかともみられる。口縁に粘土帯を貼付して、肥厚帯を形成するもので、口唇に1列刻み目があり、肥厚帯にも2段に刺突が加えられている。体部と内面にはあらかじめ縄文が施されているが、口縁部と口唇は明らかではない。体部には棒状工具によるかとみられる放射状の刺突列が認められる。口縁の突起部に対応するものかともみられる。突瘤はほとんど認められない。44は横走する燃糸文の施されているもので、上部には斜行縄文が重ねられている。棒状工具により縦位と横位に押し引き文風の刺突文が施されている。43は縦位と横位の押し引き文風の刺突文の施されたものであるが、その接点には貼付文があった形跡がある。器面にはあらかじめ無節の縄文が施されている。46~49は口縁が肥大していないものである。46は口縁がやや強く外反するもので、施文の上で、口縁部と体部が分けられている。円形文が頸部に施されている。口縁部から体部にかけてあらかじめ無節の縄文が施され、内面にも施文されている。口唇と口縁部には幅3mm、体部には幅が5mmほどのヘラによる押し引き文が認められる。47は赤味のあるもので、器面には全面に縄文が施されているが、口唇と内面にはない。口唇と口縁には幅4mm、体部には5mm幅の押し引き文が施されている。文様構成は体部に鋸歯状、口縁部から体上部にかけてY字状に施されている。48は口縁小突起があり、口唇と口縁部と体部と内面にも押し引き文を施している。文様構成は口縁部と体部の横位の区画の間に縦位にやや密に施されている。49は昨年の報告資料(12)と同一個体に属するものである。縄文は口唇と内面には認められない。文様は口縁部に横環する押し引き文を施し、口唇から縦に「L」の字状に押し引き文を施し、その端部と、かこまれた中に円形刺突文を施す。似た文様は805にみられる。50も口縁近くから垂下する押し引き文の認められるもので同様の文様を構成する

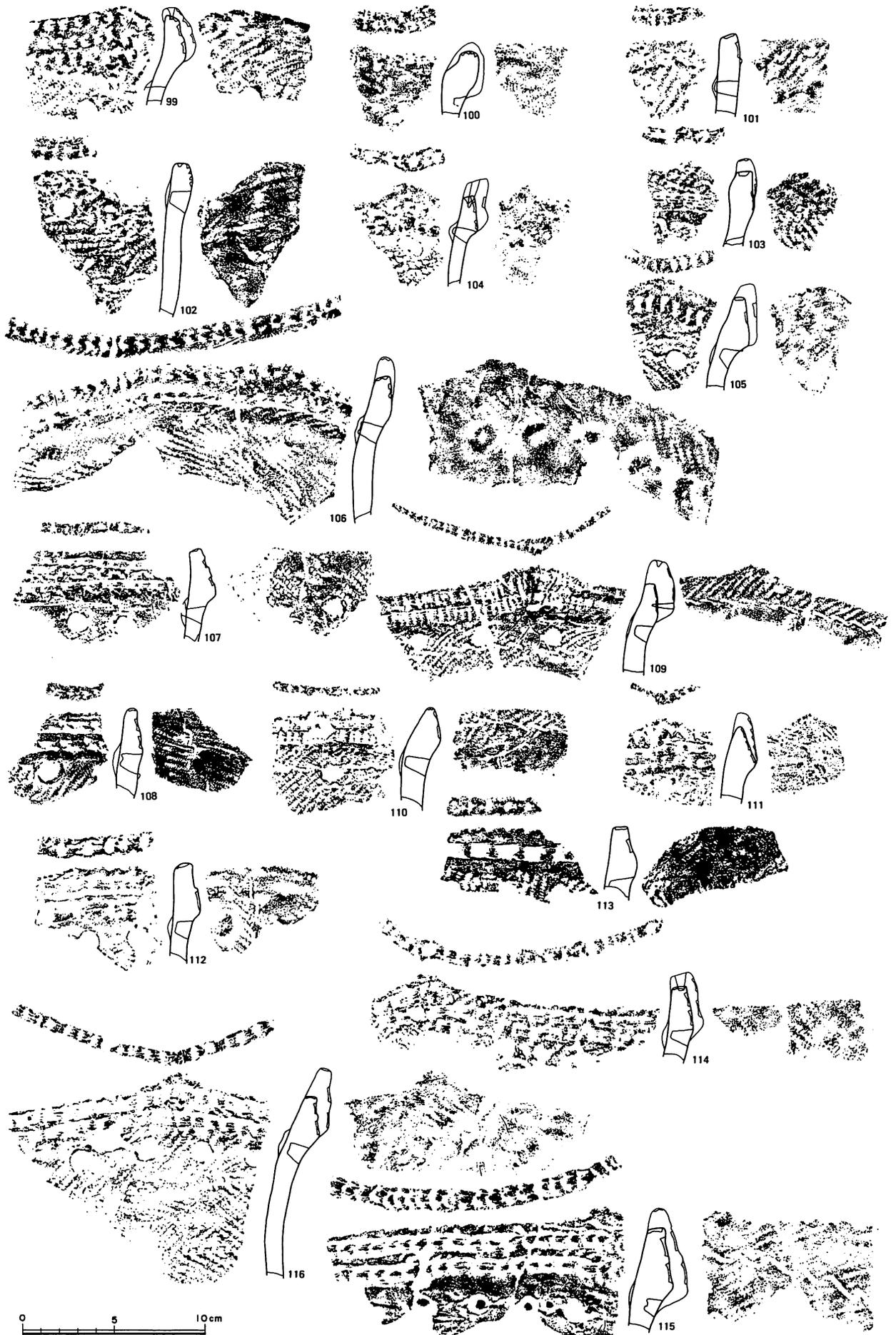
ものかとみられる。51・52は薄手の口縁がやや肥厚するものである。49は口唇と体部に押し引き文をめぐらせている。体部にはあらかじめ縄文が施されている。50は縄文がなく、円形文も認められていない。口唇と口縁に刺突を施し、体部には縦と横に押し引き文を施している。フレイク・チップ集中No. 2出土のものと同一体に属する。5・53～58は口縁に肥厚帯があり、口唇に押し引き文を施すものである。5は口縁と体部と底部が接合せず、器形を想定して復元した赤味のある土器である。昨年度報告資料(37)と同一体である。口縁部と体部と内面に縄文を施している。口縁部に2条、体部に1条の押し引き文をめぐらし、その間に鋸歯状に押し引き文を配している。53・54は同一個体で、口縁部と体部に縄文を施している。口縁の突起部から押し引き文を縦に垂下し、体部では八字形に施文する。また口縁の肥厚帯上に1条押し引き文をめぐらせている。54は体部の押し引き文の端部に円形刺突文の施されているものである。55・56は同一個体のもので、昨年度報告資料(17)と同一体である。55は体部に縄文が施されている。口縁の隆起部から縦に押し引き文を垂下し、体部では左右に広がる押し引き文を加えている。口縁部には2条の押し引き文をめぐらせている。57はH-11の1と同一体である。体部にのみ縄文が施されている。58は幅3mmほどの押し引き文を口唇に1条、口縁部に2条めぐらす。体部は縄文地に、口縁の隆起部に対応して、交差する押し引き文を施し、横位の押し引き文で画している。赤味をもつ土器である。2・59～63は口唇の施文のないものである。2は体部上半と下半が接合せず想定復元したものである。器形は口縁部が強く張り出し、胴部にふくらみをもつもので、底部は直線的にすばまっている。口縁部と体部に縄文を施し、口唇と内面は指頭による調整痕をのこす。口縁部には1条の押し引き文をめぐらす。頸部に1条と胴部2条の押し引き文を横環し、口縁部の突起に対応する位置にY字状の押し引き文を加え各押し引き文の接点に円形刺突文を配す。円形文は頸部の押し引き文に重ねて施されている。59は体部に縄文を施し、口縁の突起から縦に押し引き文を垂下している。口縁部には無文の地に2条押し引き文がめぐらされる。60は昨年度報告資料(13)と同一体である。体部と内面に縄文が施され、体部に八の字形に押し引き文が施されている。61・62は同一個体で、口縁部と体部に縄文を施し、口唇から体部にまで縦位の半截竹管状工具による沈線を引き、体部を横環する押し引き文で画している。63は口唇をヘラでなで調整している。口縁部と体部と内面に縄文を施し、口縁部と体部に各2条の押し引き文をめぐらせている。64は口唇と内面をヘラによりなで調整している。口縁部と体部に縄文を施し、口縁の突起に対応して体部に押し引き文風の刺突文を垂下している。突瘤はない。65～67は口縁部を欠失するもので、65は内面にも縄文が施されている。

**C類**(3・6・68～181)は口唇と口縁に施文されるものである。6は昨年度報告資料(19)が接合したもので小形の底部から直線的に開く器形のもので、筒形と称するにはやや口が広い。底部の角はやや外側へ張り出す。体部にはオオバコのとうを回転施文した文様がある。この種のオオバコ文の土器は、やや大形のものが、昨年H-1から出土していて(3)、それには円形文が認められる。この例には円形文がないけれども、他の特徴が共通することから、一応本類に含めておく。口縁部はやや外側へふくらみをもたせて形成されていて、口唇の断面は尖り気味である。口唇上とそれに接する口縁に半截竹管状工具による押し引き文を施している。口唇への施文後に口縁に施文している。また内面調整も口唇施文後になされている。3は口縁に肥厚帯をもつ筒形に近い器形を呈すもので、口縁部の肥厚帯から体部にかけて全面に結束第1種の羽状縄文が施されている。縄文は口唇や内面には施されていない。半截竹管状工具による施文は口縁部の上端、口唇直下に1条めぐらされ、所により2条となり、口縁部に広がって施文されている。口唇への施文は全周せず、部分的で押し引き文のくずれた刺突文となっている。口唇と内面には指頭によるとみられる調整痕がのこる。

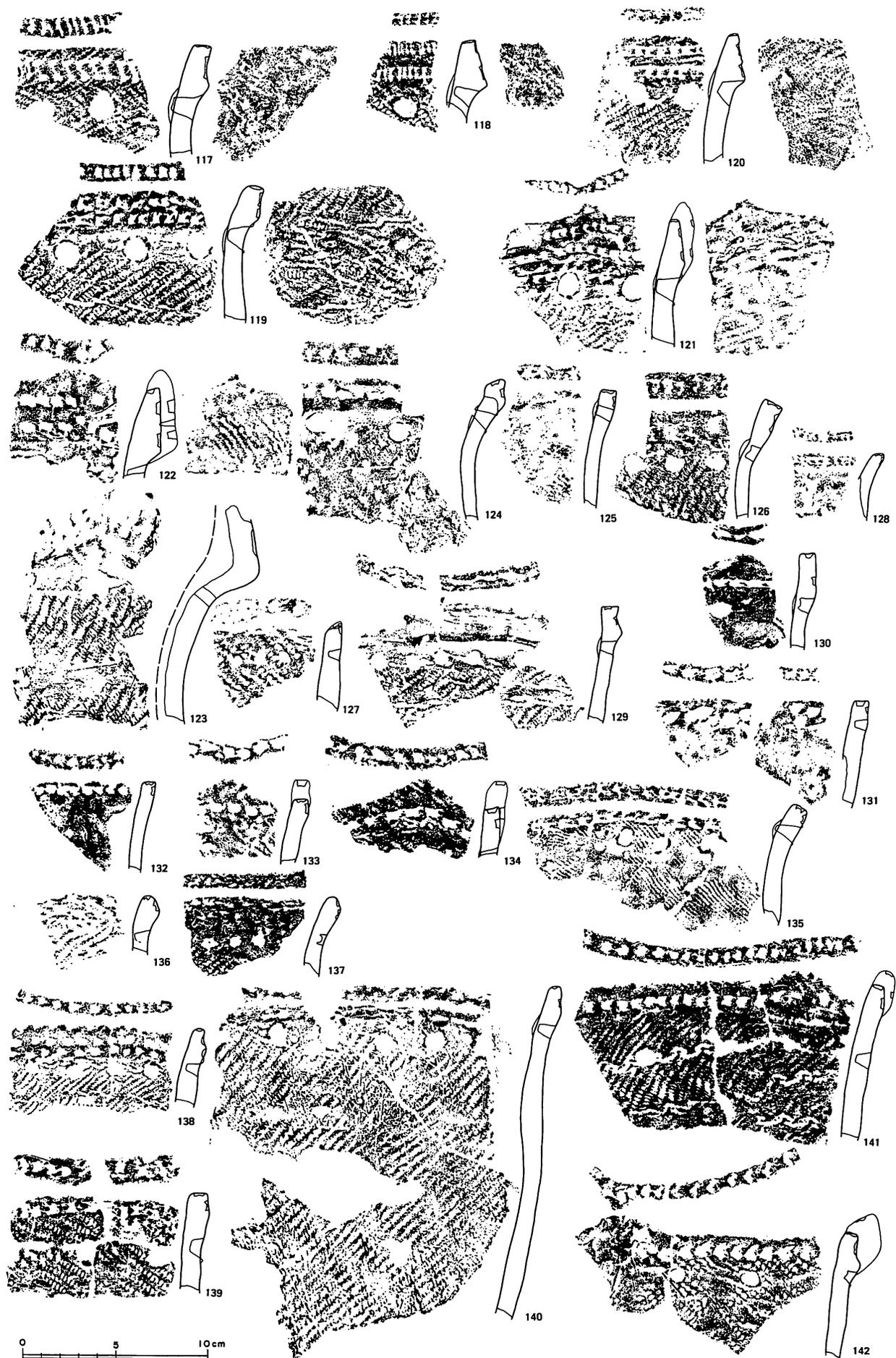
C類土器の施文には3・6のように口縁部文様帯を形成しているとは言い難いような口唇と連接



図Ⅲ-153 包含層出土の土器：Ⅲ群b-3類(5)



図Ⅲ-154 包含層出土の土器：Ⅲ群b-3類(6)



図Ⅲ-155 包含層出土の土器：Ⅲ群b-3類(7)



図Ⅲ-156 包含層出土の土器：Ⅲ群b-3類(8)

した施文や、口縁部を画す隆起帯の頂部へ意識的に施文するものなどがある。それらについてもまず記載することとしたい。また便宜的に内面に縄文の施文されているものと、施文されていないものとに区分しておきたい。

68～123は内面にも縄文を施すものである。68～82は口縁の外反するもので、口唇は丸味をもつか尖り気味である。68は口唇施文にヘラ、口縁部施文に棒状工具を用いている。69・70・72・75・77・78・80・82には半截竹管状工具、71・73・74・76はヘラ状工具、79は棒状工具、81は先端が二又になった工具を使用している。69は昨年度報告資料(20)と同一個体である。83～92は口縁に肥厚帯があり、外反気味で、口唇は角ばるか丸味をもつ。83～85は口縁部を画する隆起帯上に半截竹管状工具による押引き文を施している。86は口唇、口縁の施文とも縄端を使用している。87・93は半截竹管状工具、88・90・91はヘラ状工具、89・92は先端が二又に分かれた工具を使用している。83は昨年度報告の(23)、87は同じく(56)、92は同じく(32・33)と同一個体が接合した資料である。94～107は口縁が内湾気味に立ち上がるもので、94・95・99・101・104はヘラ、96・98・100・103・105・107は半截竹管状工具、97は口唇に半截竹管状工具、隆起帯上には先端が二つに分れた工具、102は先端が二つに分れた工具により施されている。これらの内106は昨年度報告資料(35)と接合したものである。107～122はやや幅の広いヘラ状工具による押引き文の施されたものである。103は内面が剥落しているが、昨年度報告資料(61)と同一個体である。特に幅の広いヘラによる刺突文が施されている。

124～181は内面に縄文の施されていないものである。124～145は口縁の外反する傾向をもつものである。124～126・129・130は体部の器壁が薄く、口縁部で厚くなっている。124は結束のある無節の縄文の施されているもので、口縁と口唇に棒状工具による刺突を加えている。125にも細い無節の縄文が施されているらしい。器面が風化している。126は浅く縄文が施されている。122は半截竹管状工具による押引き文が施されている。129・130は同一個体で、細い棒状工具により押引き文風の刺突文を施している。131・132は無文地にヘラ状工具による刺突文の施されているものである。133・134は浅く縄文の施されているもので、口唇と口縁にそって、半截竹管状工具の丸味のある面を器面にあてて斜めに刺突を加えている。135～137は口唇と口縁に半截竹管状工具による押引き文風の刺突文を施している。135には径の小さい円形文が不規則に認められる。138は内面をヘラで調整しているもので突瘤はほとんど認められない。口唇と口縁に押引き文風の刺突文を施している。139は半截竹管状工具で、押引き文風の刺突文を施しているものである。140は口唇と口縁に細い棒状工具による押引き文を施すものである。縄線文程度の太さである。内面は指頭による調整痕をのこしている。口径16cm内外のものである。141はヘラ状工具による押引き文風の刺突文が認められる。器面の円形文の位置は不ぞろいである。142は先端の細くなったヘラ状工具による押引き文風の刺突文が施されている。143はやや密にヘラ状工具による押引き文風の刺突文が施されている。144は口唇と口縁に大きいヘラ状工具による刺突文がまばらに施されている。

145～160は口縁のやや内反気味に立ち上るものである。145は断面円形の棒状工具で斜方向から刺突した刺突文が口唇に1列、口縁部に2列施されている。内面に指頭調整痕がある。146は横位に斜方向から器面を深く刺突しているので、146よりも深い。147は口唇と口縁に半截竹管状工具による刺突を加えている。地は無節の縄文である。148は口唇と口縁の内外に棒状工具による斜方向からの刺突文が施されている。円形文は小さく密に施され、突瘤は顕著ではない。149は口縁部と体部に縄文を施し、口唇と口縁部肥厚帯の頂部に細い半截竹管状工具により押引き文風の刺突文を施している。150は口唇と口縁に細い半截竹管状工具による押引き文風の刺突文を施している。151は口唇と口縁にヘラ状工具で刺突文を加えている。152は口唇上と口縁に半截竹管状工具による押引き文風刺突文を



図Ⅲ-157 包含層出土の土器：Ⅲ群b-3類(9)

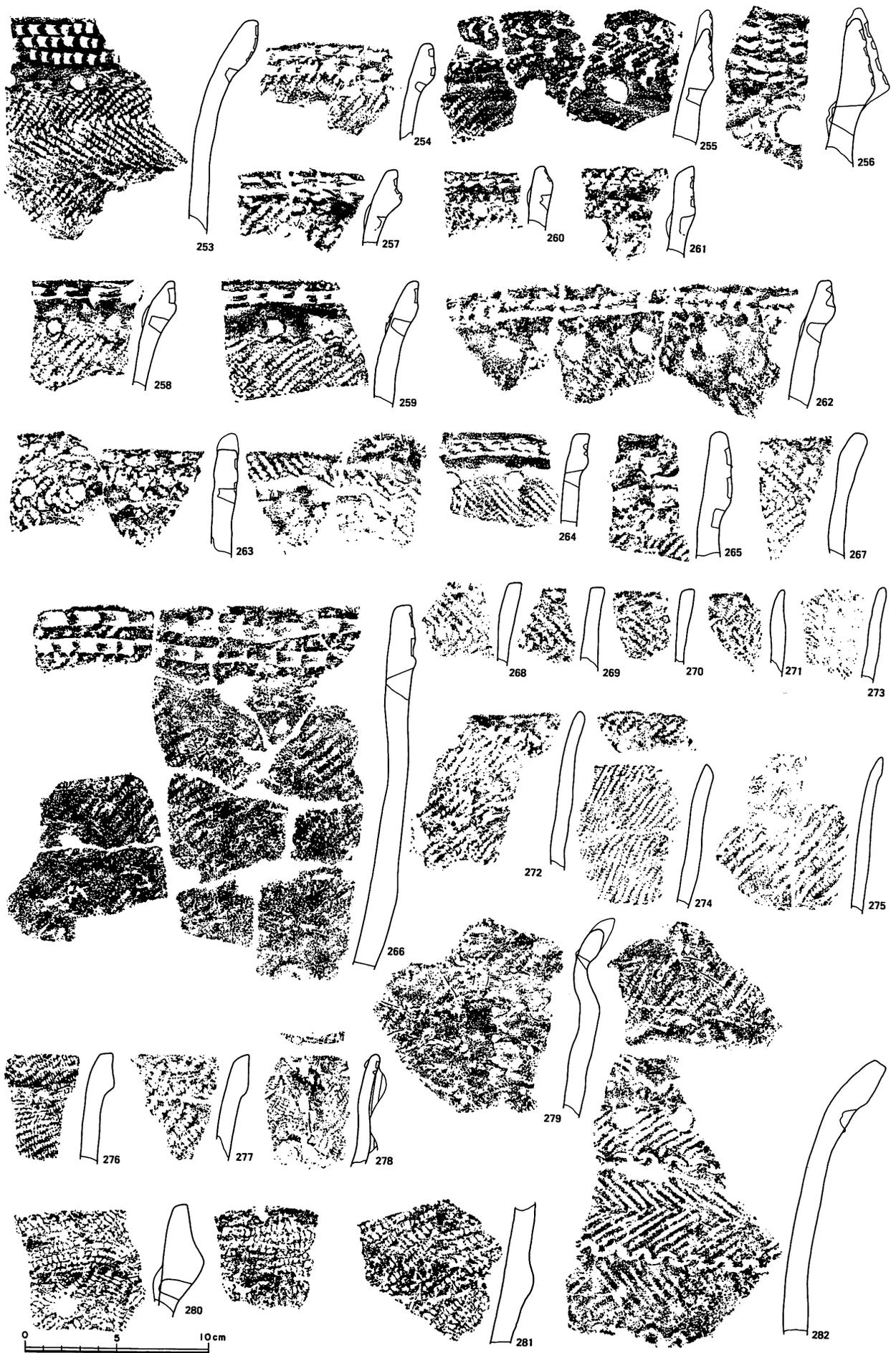
加えている。153は平坦に調整された口唇と、上下縁になで調整を加えて浮き出させた口縁部隆起帯上に、八の字形の先端をもつヘラ状工具による刺突が加えられている。昨年度報告資料(31)と同一個体である。154は153と似るが円形文が認められない。なで調整による隆帯を2条口縁にめぐらせ、口縁の突起部から縦に隆帯を形成している。横位の隆帯と口唇に半截竹管状の工具による刺突を加えている。昨年度出土資料(30)に接合したものである。155は口縁の少し下に粘土紐を貼付し隆起帯とし先端が二又に分れた工具により刺突を加えたもので、口唇にも斜方向からの刺突を加えている。156は内面が平坦になで調整されているもので、口唇と口縁に幅の狭いヘラによる押引き文を加えている。突瘤はほとんど認められない。157は口唇と口縁部に細い棒状工具による押引き文が施されている。内面の口唇直下に竹管文状の痕跡が一つある。158～161は口唇が丸味をもつもので、158は口唇と口縁に押引きと刻み目を施している。159は昨年度報告資料(45)に接合したもので、半截竹管状工具による押引き文を施している。160は159と同一個体である。161は口唇と口縁に先の尖るヘラ状工具による押引き文が施されている。162は口縁部に棒状工具による刺突文のあるもので、口唇の断面形は丸味をもつ。163・164は口縁部が比較的薄いもので、163は先が二つに分れた工具による押引き文を施す。164はヘラ状工具による押引き文を施している。口唇はともに尖り気味である。165～170は押引き文が密に施されているもので、口縁部の幅の狭いものである。165・168～170はやや厚手のもので、166・167は薄手の小形のものである。171～179は口縁部の幅が広く、2.5cm前後のものである。171は幅の広い半截竹管状工具を使用しているもので、昨年度報告資料(53)と同一個体である。173の口唇には口縁の施文と同様、押引きの形跡は不明瞭でヘラナデ状となっている。口縁部と口唇は、このヘラなで状押引き文の後に施された縄文が部分的に認められる。174は口唇、口縁ともに粗く押引き文の施されているものである。175は胎土に礫を含み、ヘラによる押引き文を施すものである。176は内面が平坦に調整されていて、突瘤は認められない。177は口唇と口縁部下端にヘラ状工具による押引き文を施している。縄文は細く、整っている。178は口縁部の肥厚帯の顕著ではないもので、浅く施された押引き文が認められる。179は体部に網目状燃糸文の施されたものである。180・181は口縁部の幅が狭いもので、そこへ2列の幅の狭い押引き文を施している。ともに内面は平坦に調整されていて突瘤はない。182・183は口縁部の肥厚帯が顕著でないけれども、幅の広いヘラ状工具による押引き文が施されている。

**D類(184～226)**は口唇に施文されるものである。口縁部の肥厚帯のあるものとなないものがあり、肥厚帯のあるものは最後に一括して記載する。

184～217は薄手のものから厚手のもの、口縁の外反するものから内反気味のものまで認められるが、口縁部の定形的な肥厚帯のないものがある。薄手で外反する器形のものが多い。184は口唇の幅の広いもので、内面にも縄文が施され、口唇には縄線文がめぐらされている。185は口唇に棒状工具による刺突文を加えるものである。186は口縁とすべきかもしれないが、口唇を広げて幅の広いヘラにより押引き文もしくは刺突文を施している。内面に縄文が施されやや厚手である。187は口縁に山形隆起部をもつ薄手のもので、口唇に半截竹管状工具による刺突文を施している。188は口唇にヘラ状工具による押引き文風の刺突文を施している。189は口唇のふくらむもので、半截竹管状工具による刺突文を施している。190は口縁に突起があり、口縁に棒状工具による押引き文風の刺突文を加えている。191は口唇が平坦で、半截竹管状工具による押引き文風の施文がある。192は口縁に無文帯があり、口唇の幅を広げてヘラ状工具による押引き文風の刺突文を加えている。193は直線的な器壁をもつもので、半截竹管状工具による押引き文風の刺突を加えている。194・195は同一個体で口縁が強く外反し、口唇と内面に半截竹管状工具による押引き文風の刺突を加えている。196は薄手の山形土器で口唇に半



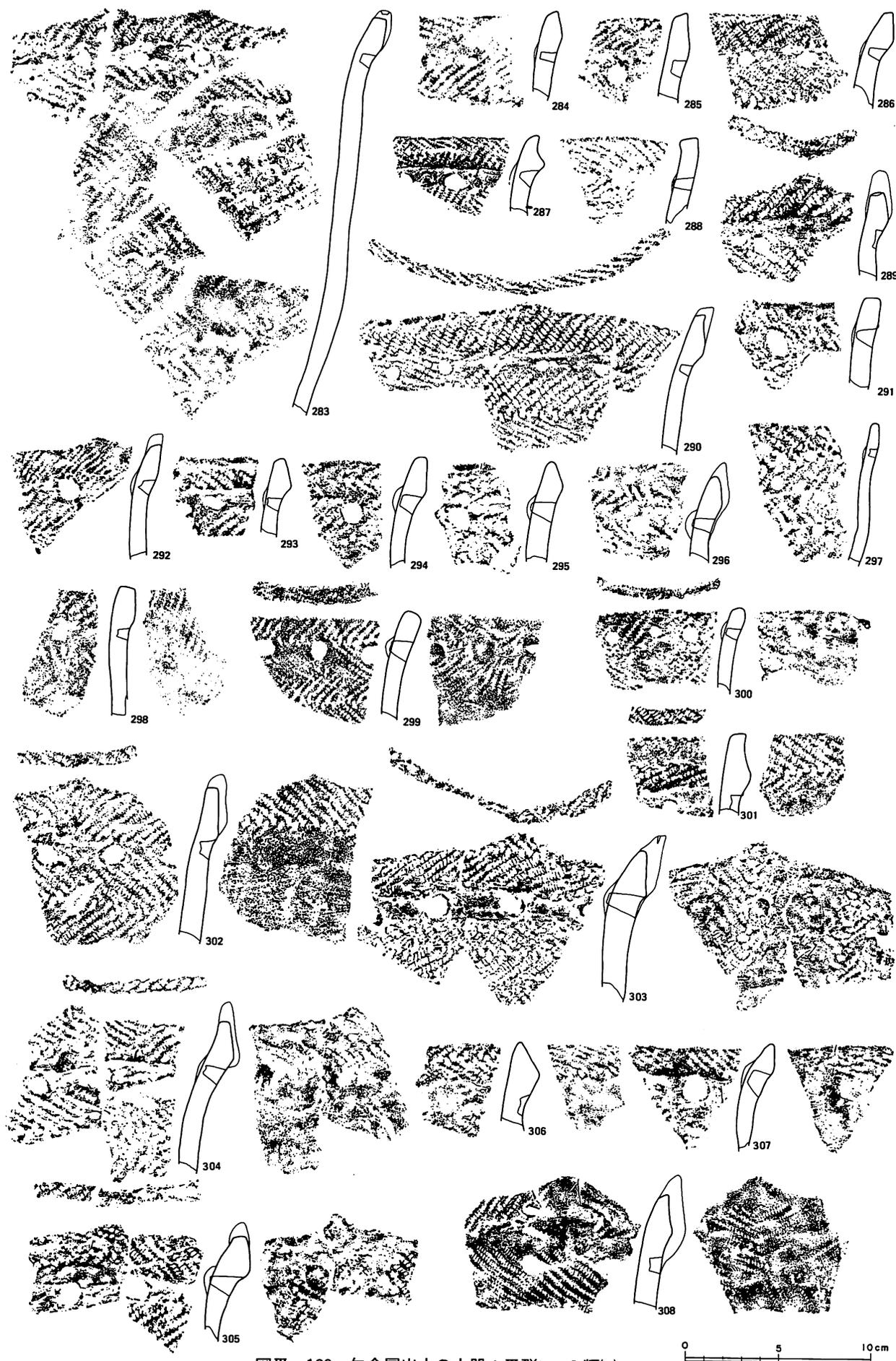
図III-158 包含層出土の土器：III群b-3類(10)



図Ⅲ-159 包含層出土の土器：Ⅲ群b-3類(1)

截竹管状工具による押し引き文を施している。197～200はやや厚手のものである。197は半截竹管状工具によりまばらに刺突文を施している。198はへら状工具により押し引き文を深く施している。199は押し引き文を浅く施している。200はへら状工具により押し引き文風の刺突を施している。内面にも縄文が施されている。201は口縁の欠失部に突起をもつと思われる。縦横の貼付帯と縄文の施文に先立って貼付しているようである。口唇に押し引き文風の刺突を施す。内面にも縄文を施している。202は薄手で内面にも縄文を施す。口唇に半截竹管状工具による押し引き文風の刺突を加えている。器面の口縁付近は円形文の施文に先立ってなで調整されている。203は口唇に半截竹管状工具による施文があるように見えるが定かではない。204は口唇に押し引き文がある。内面の口縁に縄文が施されている。205は口唇に半截竹管状工具による押し引き文が施されている。206は口唇に浅く押し引き文が施されている。207にも口唇に押し引き文がある。口縁の突起を欠失しているらしい。208はやや外傾する器形とみられるが、小片のため定かでない。口唇に幅の狭い工具による押し引き文が施されている。209は二次焼成のため器面が荒れているが、口唇に押し引き文の痕跡が認められる。210は口縁がわずかに外反するもので、押し引き文がある。211は器壁が厚く、口唇は断面が丸味をもつ。押し引き文がある。212にはへら状工具による押し引き文がある。213～217は内面にも縄文の施されるもので、213ではへら状工具による押し引き文、214では口唇と内面にも縄文を施し、さらに口唇に刺突を加えている。215には押し引き文、216には縄による刻み目が施されている。217～226は口縁部と体部が肥厚帯で区分されるものである。217は口縁部の肥厚帯がやや下にあるもので、口唇上に押し引き文がある。内面にも縄文が施されている。218は尖り気味の口唇に刺突を加えている。内面にも縄文がある。219～226は内面に縄文が施されていない。219は口縁の少し下に隆起帯のあるもので、それより上の口縁部では縄文が不明瞭である。内面はへら調整され、口唇に押し引き文を施す。220は口唇が上向きの特徴をもつもので、半截竹管状工具による押し引き文が施されている。赤味のある土器である。221は口縁と内面が無文で、口唇に押し引き文がある。222には棒状工具による刺突文が認められる。223は口唇に浅く刺突を施すものである。224は口唇に刺突文が施されている。225は頸部が広く無文となっている。口縁に縄文を施し、口唇に押し引き文をつけている。226は内面が広く剥落しているため縄文が施文されていたか否か知りえない。口唇に細い棒状工具による刺突文が施されている。

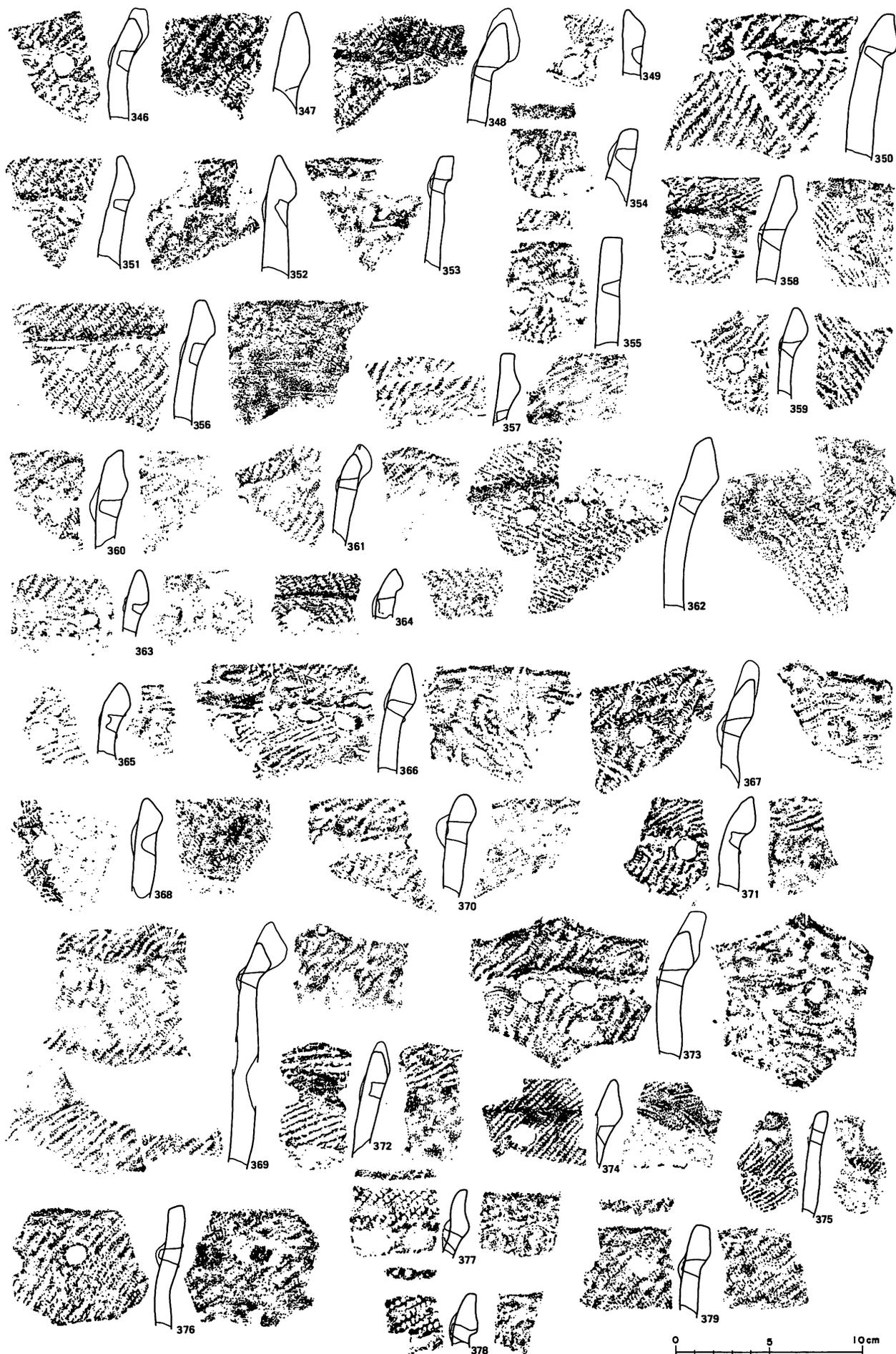
**E類** (227～266) は口縁に施文されるものである。特殊な施文のあるものをまずとり上げることとする。227は口唇と内面に深く縄文を施し、口縁部に左斜方向から刺突を施している。押し引き文風である。228は口唇直下に右斜方向からの刺突文の認められるものである。229は口縁にへらによる刺突が施されている。内面にも施されている。230は口縁下縁に隆起帯のあるもので口縁部と隆起帯上には刺突が密に施されている。231は口縁部に棒状工具による刺突を施している。232は内面に縄文を施すもので、口縁に幅の狭いへらにより2条押し引き文を施している。233は口縁が三角形に肥厚するもので、内面に縄文がある。口縁部に幅の狭いへら状工具で2条、やや深い押し引き文を施している。234は口唇直下に縄線文のみられるものである。235は口縁部に浅い刺突を施すものである。236は口唇と口縁部と体部に縄文を施し、口縁部に刺突文をめぐらす。フレイク・チップ集中No. 9の資料と接合する。内面に赤色顔料が付着する。237は口縁の断面形が尖るもので、口縁に2条、浅い押し引き文が施されている。238は口縁部に幅の広いへら状工具による浅い押し引き文の施されているものである。239は内面と口唇と、口縁部、体部に縄文を施し、口縁部に2条の浅い押し引き文をめぐらしている。240は内面と体部に縄文を施し、口縁部に幅の広いへら状工具でやや浅く押し引き文を施している。241は口唇と内面がへらで調整されていて突瘤はない。口縁部に幅の広いへらを刺突している。242～246は内面に縄文の施されているもので、口縁部には押し引き文が施されている。242は口唇にも縄文が施



図Ⅲ-160 包含層出土の土器：Ⅲ群b-3類(12)



図Ⅲ-161 包含層出土の土器：Ⅲ群b-3類(13)



図Ⅲ-162 包含層出土の土器：Ⅲ群b-3類(14)



図Ⅲ-163 包含層出土の土器：Ⅲ群b-3類(15)

されている。243は頸部に1条押し引き文をめぐらしている。247～266は、263を除き、内面に縄文が施されていないものである。247はヘラ状工具、248は先が三又の楯状工具、249は半截竹管状工具、250は幅の狭いヘラ状工具、251はヘラ状工具かとみられる施文具で押し引き文を施している。252～254は口縁部に幅の狭いヘラ状工具により押し引き文風の刺突文を施すものである。255は半截竹管状工具、256が先の二つに分れたヘラ状工具かとみられるもので刺突文を施している。257は棒状工具、258・259はヘラ状工具、260・261は半截竹管状工具により押し引きや刺突文を施している。262・263・265・266は口縁部に押し引き文や刺突文を施すもので、施文具のヘラは幅が広い。264は口唇が平らにヘラによりなで調整され、肥厚帯は角形で、縄文は整った斜行縄文となっていて、Ⅵ群 a 類に近いⅢ群 b-3 類の末頃に置かれるものかと考えられる。口縁部は無文地に刺突文が施されている。なお、248はこの種の土器では異例なことであるが、内面が磨かれている。突瘤はない。

**F 類** (4・7・267～401) は縄文のみのものである。7・267～277は全面に縄文が施されていて、円形文の認められないものである。267～269・271には結束第1種の羽状縄文が施されている。7・274・275は口縁部が作り出されている。276・277は肥厚帯をもつ。278～281は異形のもので、278は縦に貫通孔のある耳を器体につけている。279は頸部の強くくびれるもので、円形文は甚だ小さい。280・279は頸部の強くくびれるもので、円形文は甚だ小さい。280・281は同一個体とみられるが、281には隆起帯がある。282～297は器面に羽状縄文を施し、内面が無文のものである。結束羽状縄文が多く認められ、内面が広くヘラで調整されるもの(282・283)がある。口唇をヘラでなで調整するもの、口唇に縄文の認められるもの(289・290)、内面がヘラと指頭とで調整されるものがみられる。298は内面に縄文を施したのち、ヘラ調整を加えているものである。299～305は器面に羽状縄文があり、口唇と内面にも縄文が施されているものである。306～311は器面に羽状縄文があり、内面にも縄文を施すものである。312・313は結束のある斜行縄文の施されているもので、内面に施文のないものである。314・315は内面にも施文のあるものである。4・316～319は斜行縄文に結節の回転文の加えられているもの、口唇と内面とに施文されているものである。320～325は口唇になく内面に施文されているものである。326～335は内面と口唇に施文のないものである。336～353は斜行縄文の施されているもので、口唇、内面に縄文のないものである。354・355は口唇に縄文の施されているものである。356～376は内面に縄文の施されているものである。377～389は口唇と内面に縄文の施されているものである。379は複節斜行縄文である。390は異条縄文の施されたもので、内面にも施されている。391～401は口縁になで調整を加えていて、無文とするものである。

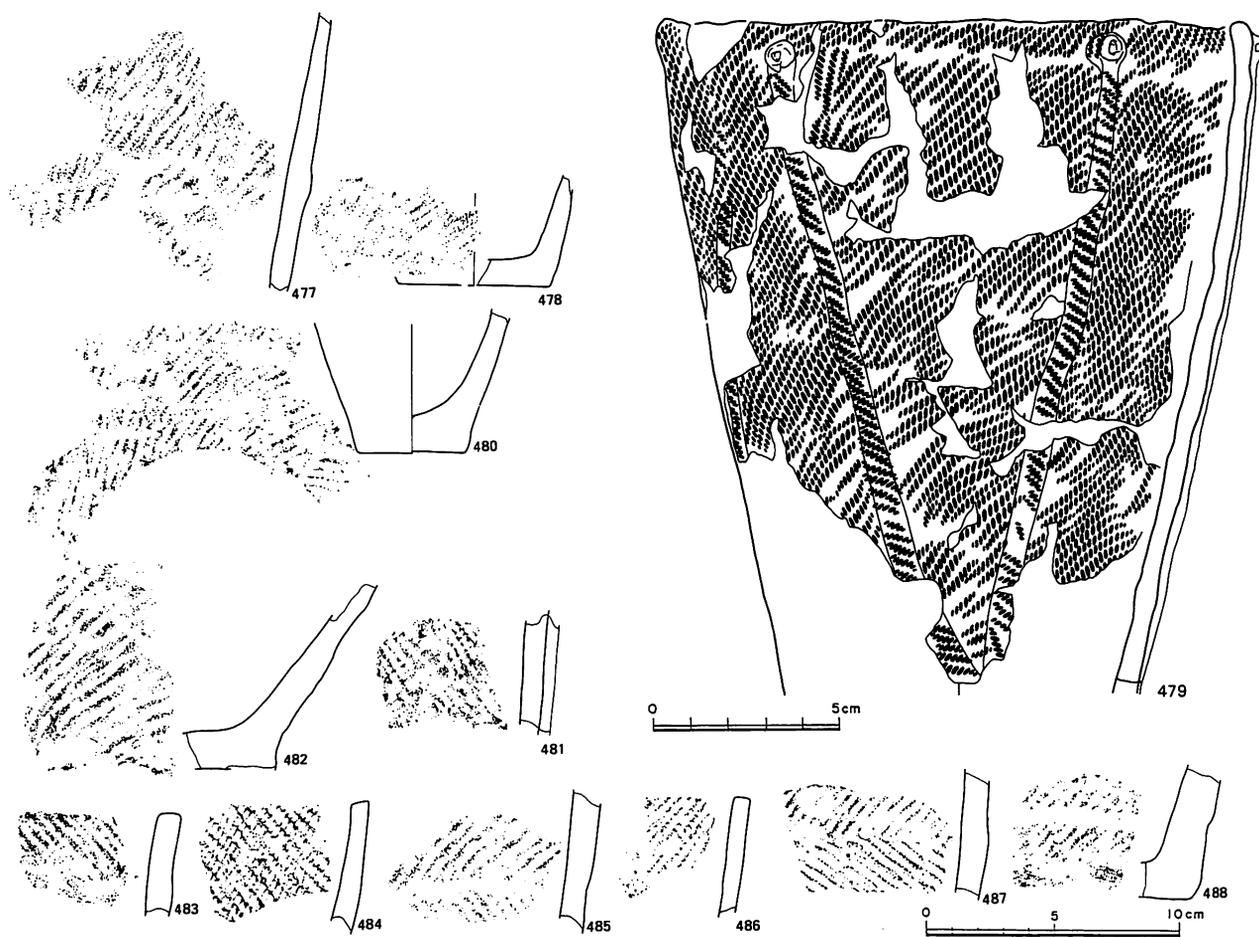
**G 類** (402～409) は無文のもので、402は円形文が認められる。403～405も若干口縁部を肥厚させる傾向をもつ。

**H 類** (410～488) はノダップⅡ式、煉瓦台式に近縁のものと考えられるものであるが、今年度の調査によって資料が増加している。充分検討する間がないので若干目にふれた特色を略記しておきたい。

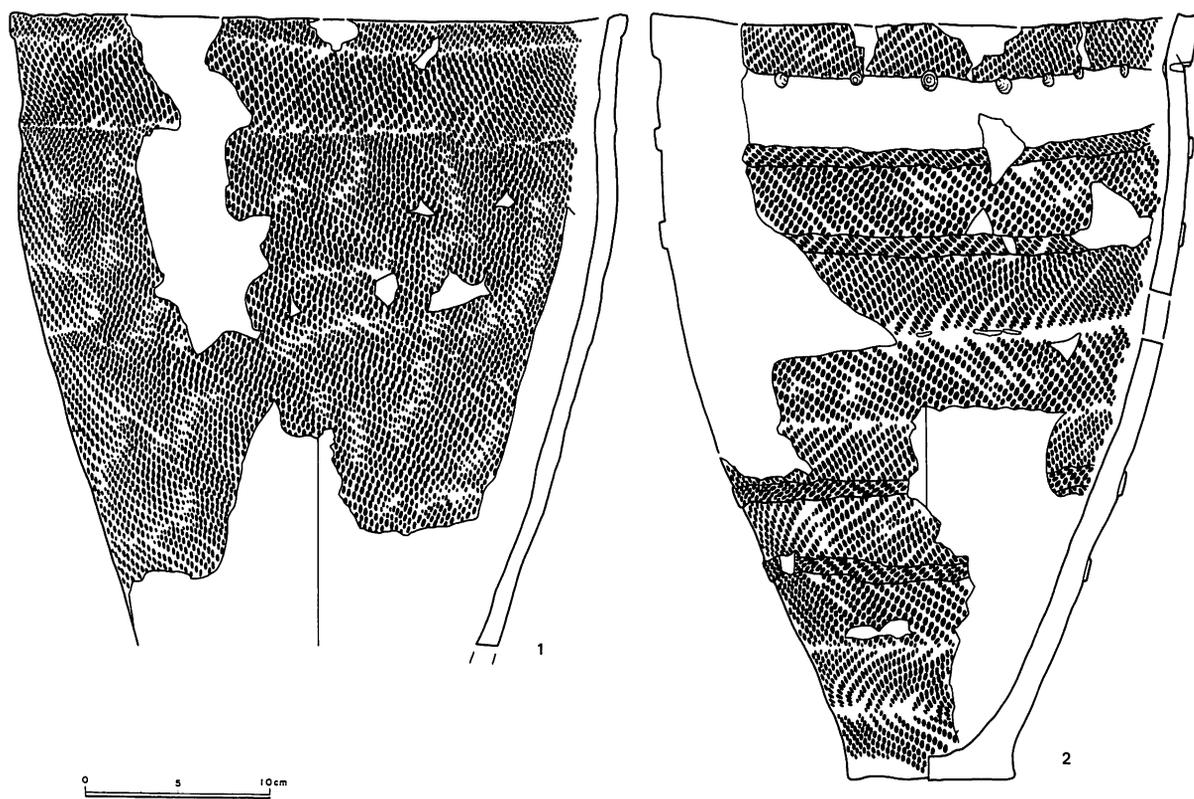
410は口唇が平らに調整され、口縁部から体部にかけてLRの縄文を施文したのち、貼付帯を施し、刺突を加えてから、軽く縄文を上側にのみ施しているようである。411の資料は昨年度出土の資料(170)と同一個体で、径16cm弱の深鉢形を呈し、口縁の少し下の貼付帯から4cmほど下にもう1条貼付帯をめぐらし、器面の相対する位置に上下の貼付帯の所に縦長の瘤を貼付して、それに縦位の貫通孔をあけている。上位の貼付帯から「L」字形に半截竹管状工具で押し引き文を施し、L字の縦軸にそって2個径2mmほどの刺突文を加えている。上位の貼付帯より上は横位にヘラ調整され無文で、体部には複節の縄文が施されている。貼付帯上には右斜横から半截竹管状工具でえぐるような刺突を加えてい



図III-164 包含層出土の土器：Ⅲ群b-3類(16)

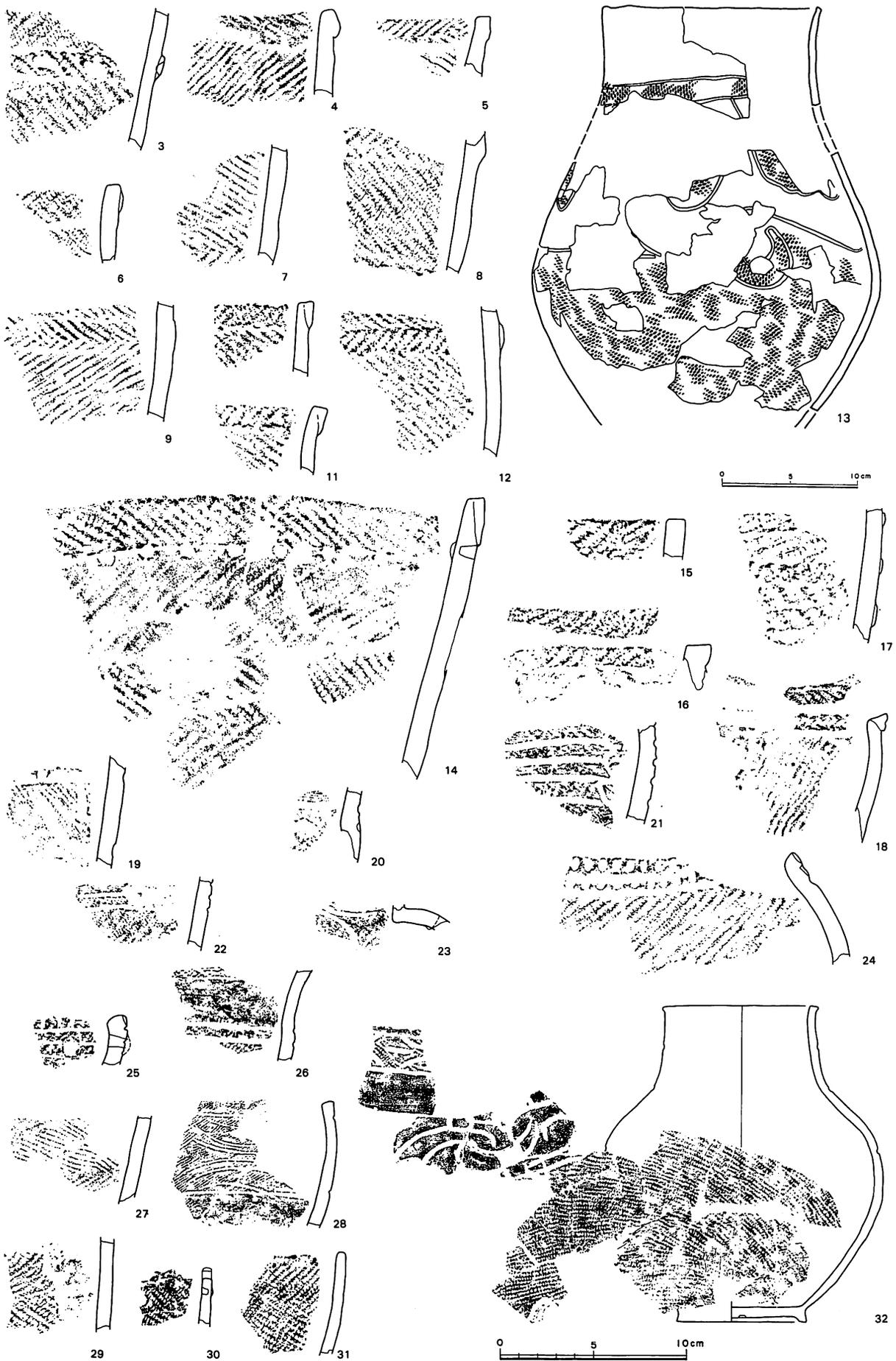


図III-165 包含層出土の土器：Ⅲ群b-3類(17)



図III-166 包含層出土の土器：Ⅳ群a類

る。412は411と厚味がほぼ等しいもので、縄文地に貼付帯を施している。413は薄手の土器で、器面に横気味の縄文（原体LR）を施し、細い貼付帯を施すものが、貼付帯上には半載竹管状工具で刺突を加えている。414はやや厚味のあるもので、内面は指頭で調整され、口縁部肥厚帯の下線に縄線文を1条めぐらせている。415は遺構からも同一個体の破片が出土している。広口壺形あるいは鉢形を呈するかとみられる。口縁部を無文とし、体部の縄文地に縦位に貼付帯を垂下させるもので、縄線文が施されている。416は内面が磨かれたもので、器形は明らかになし難い。417は隆起帯が2条施され、縄線文をめぐらせている。器面の縄文の原体と同一とみられる。418は器面の隆起帯に所謂短刻線文が施されているものである。内面は磨かれている。419は無節の縄文の施されているもので、口唇にも施文されている。口唇の角を口縁を水平として20°くらいの角度でえぐっているものである。420は口縁の直下に2列えぐり込む状態で刺突文を施している。421は口唇と口唇直下に短刻文を施している。422も口唇の直下くらいに刺突するものである。423は体部に竹管文状の刺突文を施している。内面は磨かれている。424は内面の磨かれた土器で半載竹管状工具で刺突文を施している。425は内面の磨かれた上器で底部近くとみなされるが、縦位の沈線が加えられている。426は雑な交差する刻線の引かれているもので、胎土に繊維を含む。427は内面が磨かれている。428は折返し口縁となっている。429は内外面に細かい縄文の施されているものである。430～613は縄文の施されているものである。435は器形を明らかになし難いものである。436は耳つき土器で、口縁部が無文となっている。437は口唇から内面にかけて磨かれていて、口縁部に隆起帯があり隆起带状とその下縁に2条縄線文が施されている。438は広口壺のような器形をなし、肩に隆起帯があり、縄線がめぐらされている。439は円盤形に加工されたものかもしれない。440は深鉢形を呈するものかとみられるが、横位の隆帯より上は無文である。縦位に隆帯を垂下し縄線をそわせている。441・442は広口壺のような形態をなすもので、縄線文が施されている。443は薄手のもので、短刻文がある。444は隆起帯上に半載竹管によって施されたかとみられる2列の短刻文が施されている。445・446は同一個体で、口縁と体部とに短刻文がめぐらされているものとみられる。447は横走気味の縄文の施されたもので、横位に短刻文が施されている。448は体部のまがり角の部分の破片とみられるが、二本の短刻線が施されている。449は口縁部にそって縄端圧痕がめぐらされている。450は口唇から内面にかけて磨かれているもので口縁部にそってわずかな隆起帯が形成されている。451・452は斜行縄文、453～455は横走縄文が施されている。456はH-13出土の資料と同一個体で、口唇は角ばる部分がある。縄文は比較的整った斜行縄文で、胎土に繊維を含んである。466は底部の角が張り出すもの、461は体部の途中に稜をもつものである。410～461はほぼノダップⅡ式頃のものと考えている。462・463・465・466は羽状縄文の施されたもので、464は口縁部と体部とに斜行縄文を施している。465には羽状縄文の軸部に刺突文を施している。467は北筒式とみられるが、内面が磨かれ口唇は無文で口縁にそって貼付帯をめぐらす手法は余市式を想わせるものである。便宜的にここに記載したものである。473は口縁に断面形がやや丸味をもつ貼付帯の施されているもので、器面に縦位、貼付帯上を横位に施文する手法は余市式と同様である。本遺跡出土の他の余市式初期の資料に比べて器壁が薄く、便宜的にここに記載したものである。468は壺形土器様のもので、口縁に角張る貼付帯がつけられている。体部は段差のある作りとなっている。470は短刻文の施されているもの。472は底部の周囲を一周する貼付帯に縦位の貼付帯が接していて、貼付帯上に刺突の施されているものである。横環する貼付帯の一部は欠失している。器面の縄文は縦位施文と横位施文で構成されている。474・475は同一個体で、隆帯上に小さな刺突が加えられている。479は昨年度出土資料（182）に接合したもので、口縁部をめぐる隆起帯に、中央に刺突のある瘤を貼付し、そこから隆起帯を垂下しV字形となるように配置されている。このような貼付文は



図Ⅲ-167 包含層出土の土器：Ⅳ群a類、b類、c類

北筒式の突起の下にも認められるものがある。481は器壁の一部が縦位の隆起帯となっているもので、煉瓦台式の特色とみなされてきた施文である。以上略述したが、従来未見の資料も多く、今後に検討すべき課題は多い。

#### Ⅳ群土器（図Ⅲ-166・167）

Ⅳ群土器にはa類からc類のものが認められている。この内a類のものがG<sub>2</sub>-64区にまとまって出土した。

#### Ⅳ群a類土器（1～20）

1・3～9はⅢ群b-3類土器のなごりを示すものとみなされる。1はH-40などの遺構出土のものに包含層の資料が接合したものである。3もH-40のものと同接合する。4はH-40出土のものと同個体である。5～9は口縁と体部に薄い貼付帯を施し、羽状の縄文を施すもので、施文技法は煉瓦台式の特色を示すものである。10～12は口縁と体部に薄い貼付帯を施し、器面には縦位、貼付帯上には横位に縄文を施文している。13は広口壺の形態をもつもので底部を欠失する。器壁が薄く、浅い沈線による区画に縄文を施している。さらに赤色顔料を塗布していたものらしく、所々に残存している。文様構成は波状の沈線で体部下半を画す手法は大木10式と共通するが、頸部を画す横位の縄文帯は、やや遅れるものであることを示すようである。Ⅳ群a類の初頭の湧元I式に属するものと考えておきたい。2・14は口縁部にやや幅の広い貼付帯をもつもので、貼付帯の下縁に円形刺突文を施し、内面に突瘤を形成する。2はH-39・40出土のものが包含層の資料を介して接合したものである。15は口唇がなで調整されたもので、口縁に貼付帯が施されている。16・17は同一個体に属するとみられ、口唇にも縄文を施している。幅の狭い貼付帯を多数めぐらせている。18はやや器壁が薄く、口縁が内反する。口縁に幅の狭い貼付帯をめぐらし、縄線文を加えている。19は縄文地に太い沈線を描くようであるが、縄文が部分的であるようにもみられ、縄文を縁取る沈線かもしれない。20は細い条線を太い沈線で縁取りし、また縄文地に太い沈線文を施すものである。16・17は入江式（大津式）の古い段階に相当するものとみなされる。

#### Ⅳ群b類土器（21～24）

21は横走る沈線に蛇行する沈線を重ねている。地の縄文は2段Rの原体とみられるが、より戻しのものである。22は細かい斜行縄文を地にして沈線文の施されたものである。23は頸部の直立する壺形の器形をもつものとみられるが、肩に穴があり注口部としては位置が高いため、窓があったものかと思われるものである。24は口縁に刻み列を2段めぐらす口縁の内反する鉢形か、無頸壺のような形態を呈するものとみられる。21～23は手稻式、24は「鮎澗」式である。

#### Ⅳ群c類土器（25～31）

25は口唇の断面が切出し形を呈し、口縁に縄文を施した後、沈線をめぐらし、内面から刺突して器面に突瘤文を施したのち、2段に刻み列を加えているものである。26は頸部に無文帯をもつ深鉢形、27は細かい縄文の施された鉢形土器の破片である。これらは堂林式に相当するものとみなされる。28～31は後期終末頃のものと考えられるもので、28は細かい縄文地に沈線文を施している。29は縄文の施された体部で、条の方向が変化している。30は突瘤文のあるもの、31は方向を変えて縄文を施しているものである。30はかろうじて器形の復元されるもので、口縁部には縄文地に沈線を加え、肩部に

は無文地に沈線で文様を描くものである。低い台のつく壺形土器である。これらは御殿山式に相当するものかと考えられる。

### V群土器 (図Ⅲ-168~174)

V群土器はb類に属するもので、その内に比較的古い特色をもつものと新しい特色を示すものがある。古い特色をもつものをまず区分し、他のものを深鉢形もしくは鉢形、鉢形もしくは浅鉢形あるいは皿形、壺形の三者に分け、外来系の亀ヶ岡式の特色をもつものと最後に一括して記載する。

19~27は口唇に斜方向の刻みを付すもので、鋸歯状や交差するように施されるものである。これらは比較的古い特色を示すものとみなされる。19は器面にRLの原体でやや条の横走る斜行縄文の施されたもので、内面は横位になで調整がなされている。その後に口唇に整った刻み目を方向を変えて施している。口縁の少し下に1個の貫通孔が認められる。20は19より薄手のもので、LRの原体より、条が縦行気味の縄文を施している。21はRLの原体で条の縦走る縄文を施したものである。22は二次焼成を受けている。口縁に無文部分がある。23は口唇に深く鋸歯状に刻み目を付すものである。24は口縁の頂部にくぼみをもつ突起を付すもので、突起に対応して2個の貫通孔を設けている。器面にはRLの原体による斜行縄文を施し、口縁に沿って、2条の細線の区画に斜方向からの刺突文を加えた文様を施している。これらの施文工具は、口唇の刻み目と同様、細い棒状工具によるものとみなされる。25は薄手で、細かい縄文の施されているものである。26は底径が6cm程の小形の鉢形を呈するもので、底部は揚げ底である。器壁は薄手でLRの原体によるやや粗い縄文が施されている。27はほぼ器形の知りうる浅鉢形土器である。底面は径12cm程の円形をなすが、器壁は体部から口縁にかけて内反気味に立ち上がり、口縁には半円状の大突起と小突起を付す。大突起には左右2個の小突起を加えている。この大突起の配置は口縁の相対する位置にもう1個置かれていたものとみなされ、その間に小突起が2個ずつ配されていたものかと考えられる。ただしその小突起は等間隔ではなく、大突起寄りに、大突起を中心に置くと、左右に少し離れて小突起が位置するように配されているようである。このような形態のものとしてみると、上面観は大突起を結ぶ線を中心線とした21×19cmほどの楕円形を呈するものと考えられる。文様は口縁に沿って沈線をめぐらし、大突起には弧線を加え、口唇には交差する刻み目を施す。その後器面にLRの原体による斜行縄文を施し、内面に横位になで調整を行い、さらに大突起に付された小突起の間と小突起の頂部には器壁に対して縦の刻み目をつけている。28は器面が無文のもので、口唇に刻み目がつけられている。

1~4・29~76は小片のため器形の定かでないものもあるけれども概して深鉢形もしくは鉢形を呈するものとみなされる。これらの鉢形土器の内、4と34は他のものに比べて器壁が厚く、やや新しい時期に属するものかとみられる。34はP-42の資料と接合する。4は口縁部に指頭でなでたような凹線をめぐらすもので、口縁の断面形態は指頭でつまみ上げた突起部では尖るけれども、概して丸味をもつ切出し形で、内面に縄文を施して、I黒層出土のものと近い印象を受ける。他のものは概ね均一の特色を示している。3はP-20出土の体部下半の資料と接合し全形の知られるものである。高さと同径がほぼ等しく、29cm前後と測られる。2も接合しないが体部下半の資料があり、やはり口径と同径がほぼ等しく28cm前後のものである。底部は76になすような角の丸いもので、底面にも縄文が施されている。器壁にわずかにふくらみをもつ。装飾文様は口縁部に3cm~4cmの幅で施されるものが多い。1は器面に縦行気味の縄文を施したのち、幅3cm前後なで調整を行い、口縁は無文となっている。棒状工具で下側から突き上げる手法による刺突文がめぐらされている。口唇には浅く縄文が施されていて、F-22の45と同一個体である。45~51にも同様な刺突文が施されている。48は3列3

段程度の刺突文を一単位として口縁部の5か所程に配置しているようである。45は口縁にわずかに無文部を残し、口唇無文の薄手のもので浅鉢形を呈する可能性がある。46・47は口唇に刻み目があり、同一個体とみなされるものである。46にみるように刺突により内面に突瘤の形成される部分がある。45～47の刺突は小さい。49は1と似るものであるが、口縁に突起の形成されるものらしい。50・51は口唇にも刻み目の施されるものであるが、51では器面側に傾斜している。2・3は口縁部に縄線文をめぐらすものである。3では、あらかじめ口縁部に無文部を形成し、細い2段RLの原体を5条押捺し、体部に縦行気味の縄文を浅く施している。口唇の調整は部分的に断面が角形もしくは切出し形に調整されている。2も口縁部に無文帯を設けやや太い2段RLの原体を3条押捺している。器面には斜行縄文が浅く施されている。口唇にも縄文が施されていて、そのためか幅の広がっている所がある。35～44も口縁部に縄線文のめぐらされているもので、35・37・38・42は比較的細い縄線文の施されているもので、36・39・40・41・43・44は太い縄線文の施されているものである。35は器壁が薄く、口唇が角形に調整され、整った縄文が施されている。37は3と似たものであるが、口唇の調整がやや整っている。器形は口縁が内反するものとみられる。37は小形のもので口唇に小さい刻み目がつけられている。42は横気味の縄文が施されているもので、口縁部の縄文はなで消されている。縄線文の原体はLRで、口唇にも縦に押捺されている。36は5条ほど縄線文の施されたもので、文様帯の下部には地の縄文が認められる。39は口唇に指頭による刻み目を付し、器面に縦行する縄文を施したのち、縄文を地として口縁部に縄線文を4、5条施すものである。内面調整は口唇施文後に丁寧に磨かれている。40は口縁に太い棒状工具で刻み目を施すものである。44は口縁部の縄文をかるくまで消してLRの太い原体を4段ほど施しているものである。口唇には内面調整後に施文されている。43は縄文地にRLの太い原体より縄線文を施すもので、口唇に縄文を強く施しているためか幅広がっている。41は口縁に突起をつけられたもので、突起部から2列の貼付帯を垂下し、突起部と貼付帯の両側に縄線文を施すものである。突起部には内面側からの刺突があり、口唇上にも縄の圧痕が加えられている。29～34は沈線文の施されたものである。29は器壁の薄いもので、縦行縄文を地文として、幅3cmほどの間に6条の沈線をめぐらし文様帯としている。文様帯の下部に径3cm～4cmの範囲に密集する径1mm内外の刺突文が認められる。口唇断面は角形かもしくは丸味をもってふくらむ。30は口縁の突起部の破片で、突起の頂部と口唇には縦に細い縄の圧痕がある。口縁部には縄文を地として沈線文が施されている。31は口縁の断面が切出し形に調整されているもので、口縁部には縦行縄文を地として5条の沈線を引き、その下縁に鋸歯線を加え、交互に円形刺突文を配する。口唇には表面側に傾斜する刻み目が施されている。32・33は同一個体とみられる。器面に斜行縄文を施し口縁部の縄文をなで消して3条の沈線をめぐらせている。34は前述のものである。52～54は縄端の圧痕文の施されているものである。52は口縁が山形に隆起するもので、頂部に指頭を押しつけ、その後に内面の調整を行っている。器面と口唇にはあらかじめRLの原体による縄文が施され、口縁部に縄端圧痕文を施したのち器面をかるくまで調整している。53・54は同一個体とみなされ、器面にLRの原体による縄文を施し、53は2段、54では1段の縄端圧痕文を施している。縄文施文後になで調整されている。55～57は縄文の施された口縁部と底部の破片である。55は薄手のもので、縦行縄文が施されていて、口唇は断面が丸味をもち、無文であるけれども古い特色を示すものと同一群を構成するものとみなされる。56は口縁に山形隆起帯をもつもので口唇はなで調整されている。57は口縁がやや内反するもので、太い原体により浅く縄文が施されている。58も同様の施文があり、口唇に刻み目を付す。59はやや厚手のもので、細かい斜行縄文が施されている。口唇には刻み目を施している。60・61は浅くRLの原体による縄文の施されているもので、口唇に刻み目がある。62・63は口唇に指頭の圧痕

のあるもので、62はあらかじめ厚く、角形に調整された口唇の器面側角を押しつぶしているものである。63は口唇の断面が丸味をもつもので、特に厚く調整されてはいない。器面側に傾斜するように施されている。64～70は口唇に縄文の施されたものである。64の口唇断面は丸味をもつ。65の口唇はやや内面にふくらむ。66は口縁がやや外反気味である。67は器面側に口唇形成時の粘土紐のつぎ目を残すものである。67は口唇がつぶれて内外面にはみ出すものである。69は口唇施文後に内面調整がなされているものである。70は縄文施文後に口唇から器面にかけてなで調整されて無文帯を形成するものである。7～76は体部、底部破片で、71は方向を変えた縄文の施されているもの、72・75は縦行縄文、73・76は斜行縄文である。74は自縄自巻きとなった原体による縄文の施されているもので、これまで道北地方の晩期の土器に認められていたが、意図的なものであるとすれば、関連するものかもしれない。一見東釧路Ⅳ式や赤穴式系の弥生式土器の文様と似ている。75は薄手で角をもつ。

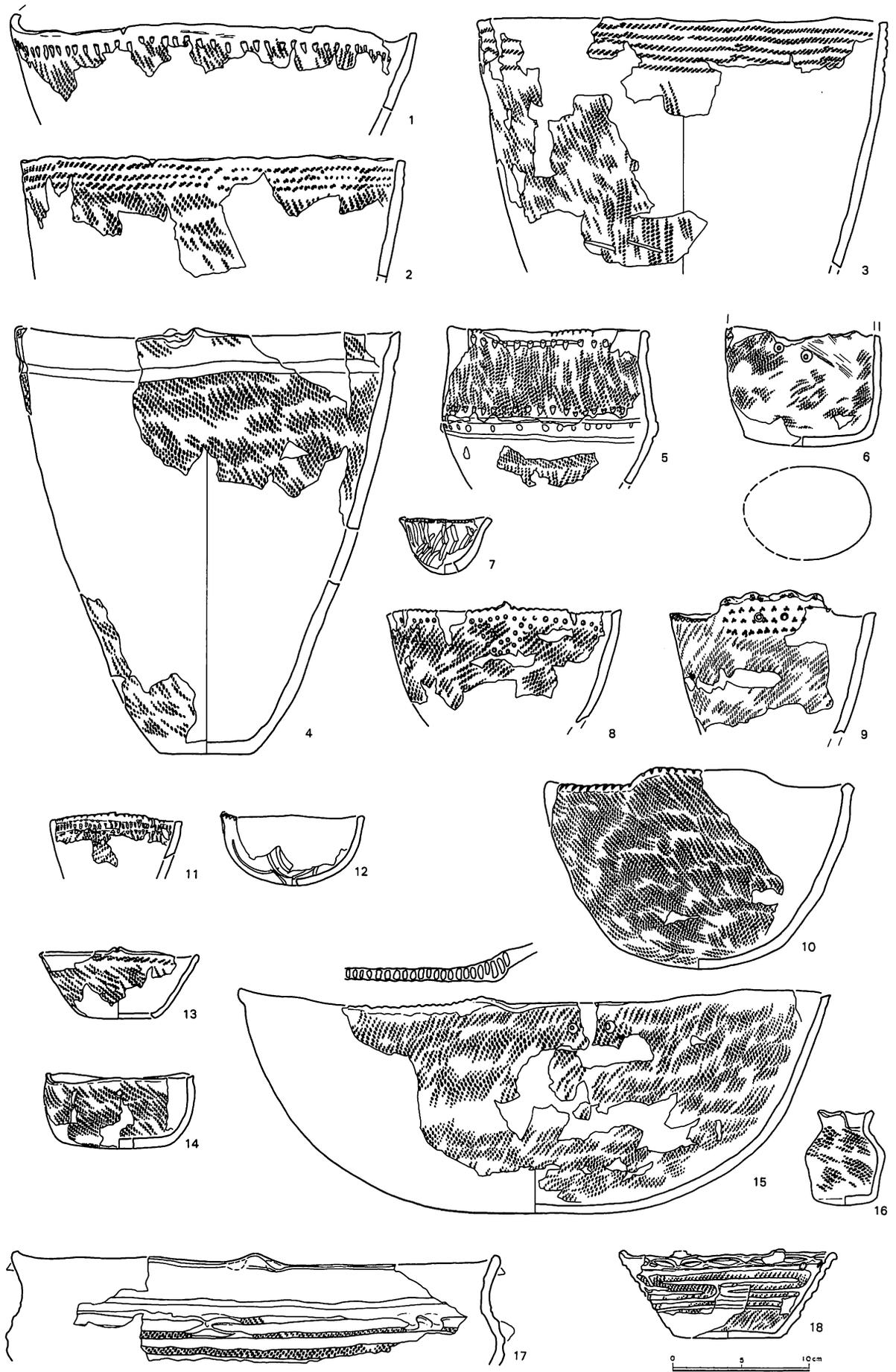
5～15・77～177は浅鉢形もしくは皿形を主とするもので、異形鉢形など形態不明のものを含めている。5は口縁がすぼまり、体部に沈線で画し円形刺突文を施した凸帯をめぐらせる資料で、口縁と凸帯近くに刺突文をめぐらせている。断面が丸味をもつ口唇の所々に縄による刻み目を付す。縄文は体上半が縦行、体下部には斜行で縦行の縄文が認められる。157は同一個体で体下半の様子が知られる。6は器体が楕円形をなす船形土器様のもので、口縁部は欠失している。細かい縄文が施されている。8は口縁に円形刺突文を1列めぐらし、所々にV字形の刺突文を加えている。口唇に刻み目がある。9は口縁の一方所に台形状の突起をつけ、その上に3か所指頭で押捺を加え、4つの山をつくり、その頂部と、そこから続く口唇の一部、台形突起の下部の器面に縄端圧痕文を施している。口唇及び器面には無節の縄文が施されている。台形突起の下の縄端圧痕文の部分に2個の貫通孔を設けている。10は口径22cm、高さ13cmほどの丸底に近い浅鉢形土器で、口縁の一部に台形突起を設けている。器面にRLの原体による斜行縄文を施し、口唇にも縄による刻み目を付す。器壁は厚い。7はF-18出土のものに包含層出土資料が接合した、ミニチュアの土器とみられる。丸底で口唇にヘラによる刻み目があり、器面には縄文の代用かとみられる粗い斜線が引かれている。11は小形の浅鉢形をなすものとみられ、ヘラによる爪形文がめぐらされている。口唇にもヘラによる刻み目がある。12はH-29出土のものに包含層の資料が接合したもので、器壁の薄い丸底のもので、器面には棒状工具による弧線文、口唇には同一工具による刻み目が施されている。13は口縁に小突起をもち、口縁部に縄線文の施された薄手のものである。原体は太くはない。口唇は無文である。14は底部の角が丸味をもつ斜行縄文の施された浅鉢形土器で、口縁は内反気味である。口縁の近くに一方所貫通孔が施されている。口唇断面は切出し形を呈する。15は大形の浅鉢形土器で、左半分は器形不明である。P-45から出土した資料と包含層出土資料が接合したもので、左右に長い楕円形の口となるものとみなされ、その両側縁の中央部の口唇が外側へ張り出し刻みがつけられている。148はこの土器の口縁の一部とみられる。77は口縁部が内面へ向って押し曲げられているもので刺突文が2段に施されている。口唇には縄文があるようであるが定かではない。61も77と同様の口唇形態をもつもので、口唇には縄端によるかとみられる刺突が加えられている。78・80・83～85は沈線文の施されているもので、浅鉢形を呈するとみられるが、全体の形は明らかになし難い。78は大形の皿形土器の口縁部とみなされ、口唇には内側に細縄線文2条をめぐらし、口縁に細かい刻みを加えその後刻みの間の口唇の表面側の部分に小突起を加えている。器面には沈線文の区画の間に径3mmの円形の小刺突を施している。口唇の刺突は同一原体の先端部の角を利用してさらに小さい刺突を加えたものとみなされる。体下部の同一個体の破片には浅く縄文が施されている。79は体下半を画する段があり、口頸部に4mm間隔の細い横線をめぐらせていたものとみなされる。未貫通の補修孔の痕跡がある。80は口頸部と体部の境に凸帯の形

成されているもので、縄による刻み目がつけられている。口頸部には縦位の沈線が施されている。83は87と同一個体とみなされるが、皿形土器の端部に付けられた装飾文のある部分で、内面側では突起部に細縄線で渦文などを施し、中心に1個もしくは2個の刺突を加えている。外面には突起部から垂下する貼付帯に縄で刻み目をつけ、突起部には弧状の沈線を加えている。貼付帯には縄による刻み目がつけられている。89には縄の刻みのある貼付帯と、円形の貼付文上に縄線文と刺突文を加えている。84は船形もしくは角のある皿形を呈するものとみなされ、突起部には口唇に細い縄による刻み目をつけ縦に3か所刺突を加えている。また突起部の下の肥厚部に貫通孔があり、その両側に細い縄による刻み目をつけその下にV字形の沈線と、さらにそれを大きくとり囲む沈線を加えている。突起部の左右の口縁部にも小刺突文を加えているものとみられる。85は時期の新しいものとみられ、口縁の断面形が尖るもので、器面には縄文を地として斜めに交差する沈線文、口縁の内面にはやや太い縄線文をめぐらし、表面側の角を棒状工具で内側へ押し込んでいる。81・82・88・91は器面に縄線文の認められるもので、81・82では突起部から太い縄線文を斜めに押捺施文している。81の突起部は縄の3条の押捺がなされ、82は口唇に棒状工具によるかとみられる刻み目を付す。88は細い縄線文を突起部から2条口縁に沿ってめぐらしている。突起部には渦文、口唇には刻み目を縄で施している。81・82の縄線文も突起部から左右に施された縄線文の一部とみることができる。なお86は口唇に縄端による刺突文の加えられているものである。91は平縁の浅鉢形を呈するもので、口縁部に1条の太い縄線文をめぐらし、口唇には棒状工具による刻み目を施している。89は口縁に二山の突起のあるもので、口唇に棒状工具による刻み目を施したのち内面調整がなされる。なお、90は口唇に円形の刺突文を施すのみで器面が無文のものである。93は台形状突起の上面が楕円形の平坦面を形成するもので、円形刺突文2個と、内面へ傾斜する大きい刻み目がある。この平坦部の周囲には細かい刻み目が付され、また平坦面上には刺突に先だてて細い縄線文が施されている。口唇には縄による刻み目、口縁の角には棒状工具による刻み目、口縁部に斜下方からの刺突文をめぐらせている。器面は無文である。84～107・109～111・115～119は器面に縄文を施し、口唇に縄線文または縄による刻み目の施されているものである。108はあるいは106と同一個体に属すかとみられるものである。112は器が剥落しているもので、縄文の施されていたものと考えられる。113は口唇に指頭による押捺を加えるもの、114・120～123は口唇に縄文を施すもの、124～134は口唇が無文のものである。大形浅鉢もしくは皿形土器の形態には多様なものがあるけれども、器壁の形態には口縁部から底部へなだらかに曲線を描く103・119のようなものと、体部と底部の境に稜の形成される94・99・126のような形態の二者がある。126と同一個体に属する破片には稜線に沿って部分的に爪形の刺突文を施すものがある。また器面の縄文の施文の状態をみると、口縁部に幅広く無文部を形成する96・106・119・124のようなものと、なで調整を加える94・126・129・133・134のようなものなどがある。口唇の施文などから出土地点にかなりの差があるけれども96と119、98と104などは同一個体に属する可能性がある。なお突起部につづく隆起帯が94・95・104に認められる。円形の貼付文が103に存在する突起には縄線文による渦文もしくは同心円文が認められる。110・111は同一個体とみなされるが渦文を施し、中央に刺突を加えている。110は2個もしくは3個連結するもので、111は単独の突起である。主要な突起を中心に左右に縄線文を施す口唇が続き、単独の突起を境にして無文の口唇となり、境が段をなす例が一般的かとみられる。112の口唇には縄線に重ねて沈線が施されている。やや後出の施文法とみられる。135～137は異形なもの、特殊な施文のあるものなどを示している。135～140は沈線文の施されているもので、135～137は同一個体とみられる。口唇に刻み目を付し、136の突起部には円形の刺突文を加えている。突起部の下には器面に円形刺突文を施し、また口縁に沿って縄端圧痕文を配している。沈線文の状態から12と近似の

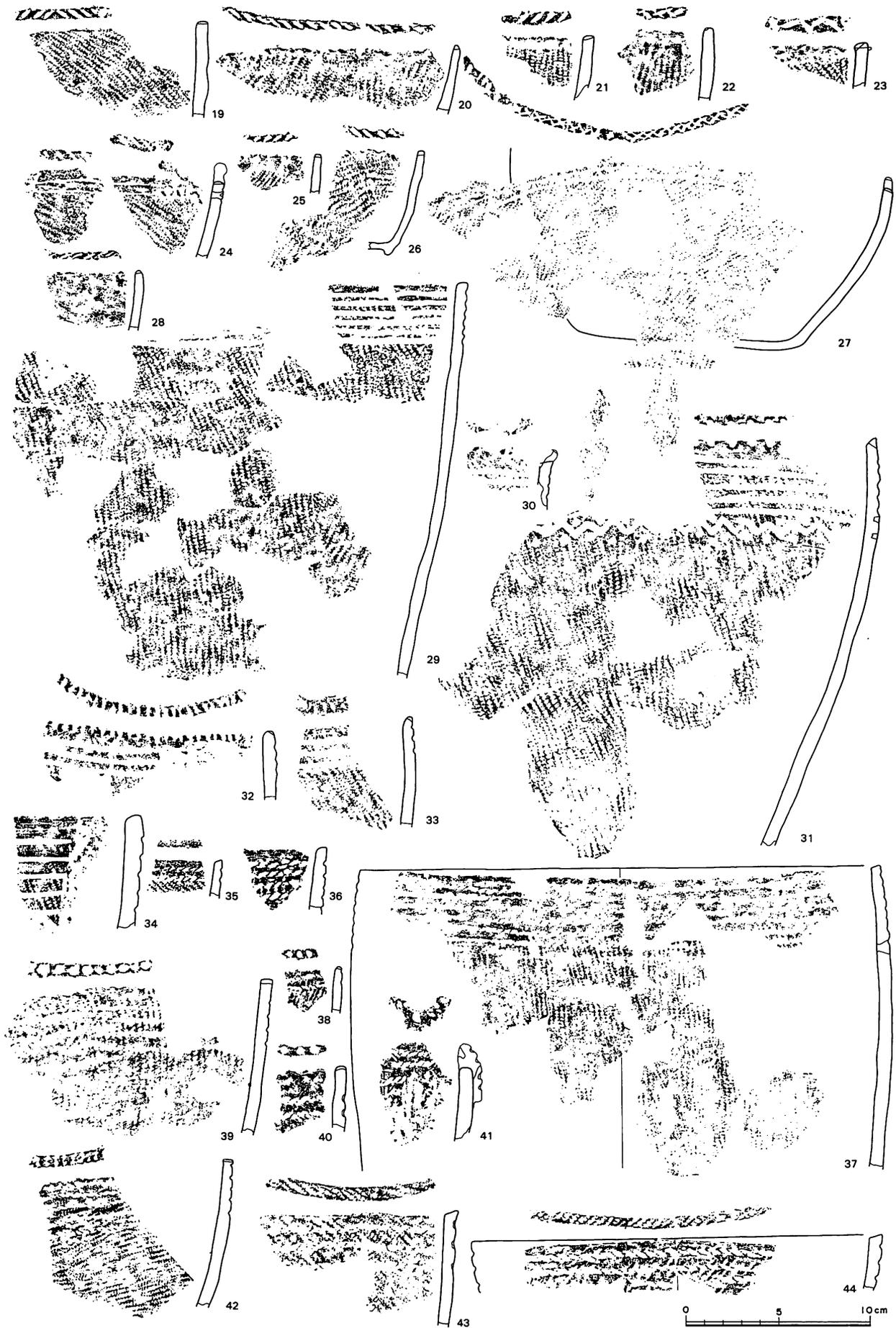
時期のものと思われる。138は口縁部に横位の沈線と波状の沈線を施し、それに沿って刻み目を施したものである。体部に凹突があり、口縁部と体部を画する段があるわけではない。139は細沈線に沿って縄端圧痕文が施されている。140は口縁に小突をものかとみられる。縄文地に細沈線で波状線を描き、その空白部や下縁に径1mm内外の刺突文を施している。141は口唇に棒状工具で刻み目を施し、口縁には細い縄線文を施すものである。142・143はミニチュアのものかとみられる。142には沈線2条、143は縄端圧痕文がある。144と155は耳付土器で、144は薄手で、耳には縦に縄線文と棒状工具による横の刻み目をつけ、口縁に沿って縄線文を施し、それに沿って棒状工具で下から突き上げる刺突文を配している。耳の穴は左から右へ貫通している。155は耳が口縁の隆起部につけられ、耳の上部には口唇の刻み目と同様縄による横位の刻み目がつけられ、また縦に指頭によりくぼみがつけられている。口縁部には棒状工具により下から突き上げる刺突文をめぐらしている。耳の貫通孔は右から左へ突いて開けられている。145は口縁の突起と口唇の表面側に刻み目を施している。146は口縁部に縄の圧痕があり、口唇も縄で刻んでいる。147は口縁の山形の隆起部のあるもので、口縁部と口唇に縄端の圧痕がある。148は15の口縁部とみなされるが、口唇の内面側と表面側とに刺突文を加えている。149～151は同一個体とみなされる。体部に2段の屈曲する稜があり、縄端による刺突を加えている。縄を弧状に曲げて、あたかも半截竹管状工具による刺突に似せているものかとみられる。器面には細かい縄文が施されている。口縁部と口唇には縄の圧痕文がある。152・153は棒状工具による刺突のあるもので、152は口唇に刻み目、153は指頭による押捺を加えている。154は縄線文と縄端の圧痕のあるものである。156は縄文地に太い沈線文の認められるもので、U字形の沈線と、その下の剝落部のさらに下に横方向の沈線が認められる。157は5と同一個体である。158は細かい斜行縄文の施された薄手のもので口縁の内面に半截竹管状工具による刺突文が施されている。159は口が方形をなすように角ばる部分の破片で、棒状工具による刺突文がめぐらされている。160は縄文を地として口縁部に縄端圧痕を2段にめぐらすもので、口唇には指頭による押捺が加えられている。161～165は器面に縄文があり、161の口唇には刻み目が施されている。いずれも薄手小形のものである。166は薄手小形の指頭調整痕のあるものである。167は棒状工具による刺突をめぐらすものである。168・169は同一個体とみなされ、口唇直下と底部との境に横線を施し、大柄な3本の弧線で区画を設け円形刺突文をそわせている。地に浅い縄文が施されている。170は頸部にくびれをもち、口唇に指頭による押捺の加えられた無文のものである。171は無文地にほぼ等間隔に沈線の引かれているものである。172には口縁近くの破片で垂下する貼付帯のあるものである。173は小形の土器の底部で縄端の圧痕文がめぐらされている。174は異形土器で、口の角張る浅鉢形を呈するものかとも思われるが定かでない。上下の横走沈線帯の間に弧線を配している。175は亀ヶ岡式系の浅鉢を模倣して製作されたものとみなされ、口縁部に短刻線のある凸帯を上下2条めぐらし、その間に2個一単位の円形の貼瘤をつけている。体部との境に縄線文を1条めぐらし、横走縄文の器面を彫り込んで文様を施している。口縁の内面に2条の凹線をめぐらせている。器壁は薄い。176は底面と体部に細い沈線文のあるもの、177は縄文の施された体部破片である。

16はミニチュアの壺形土器で、底部が比較的大きい。肩部から体下半にかけて縄文が施されている。178は無文の壺形土器で、口径は6cm前後とみられる。179は小形の壺形土器で、口頸部は無文、体部には縦行縄文が施されている。口縁に突起があり、貫通孔が設けられている。突起の上部を欠失する。頸部の下端に縄端圧痕文がめぐらされている。

17・18・180～205は亀ヶ岡式系のものである。17は大形の鉢形土器で、体部最大径は40cmほどになる。口縁に突起を設け、肩部から体上部に幅の広い凹線をめぐらせている。196は体部の破片である。



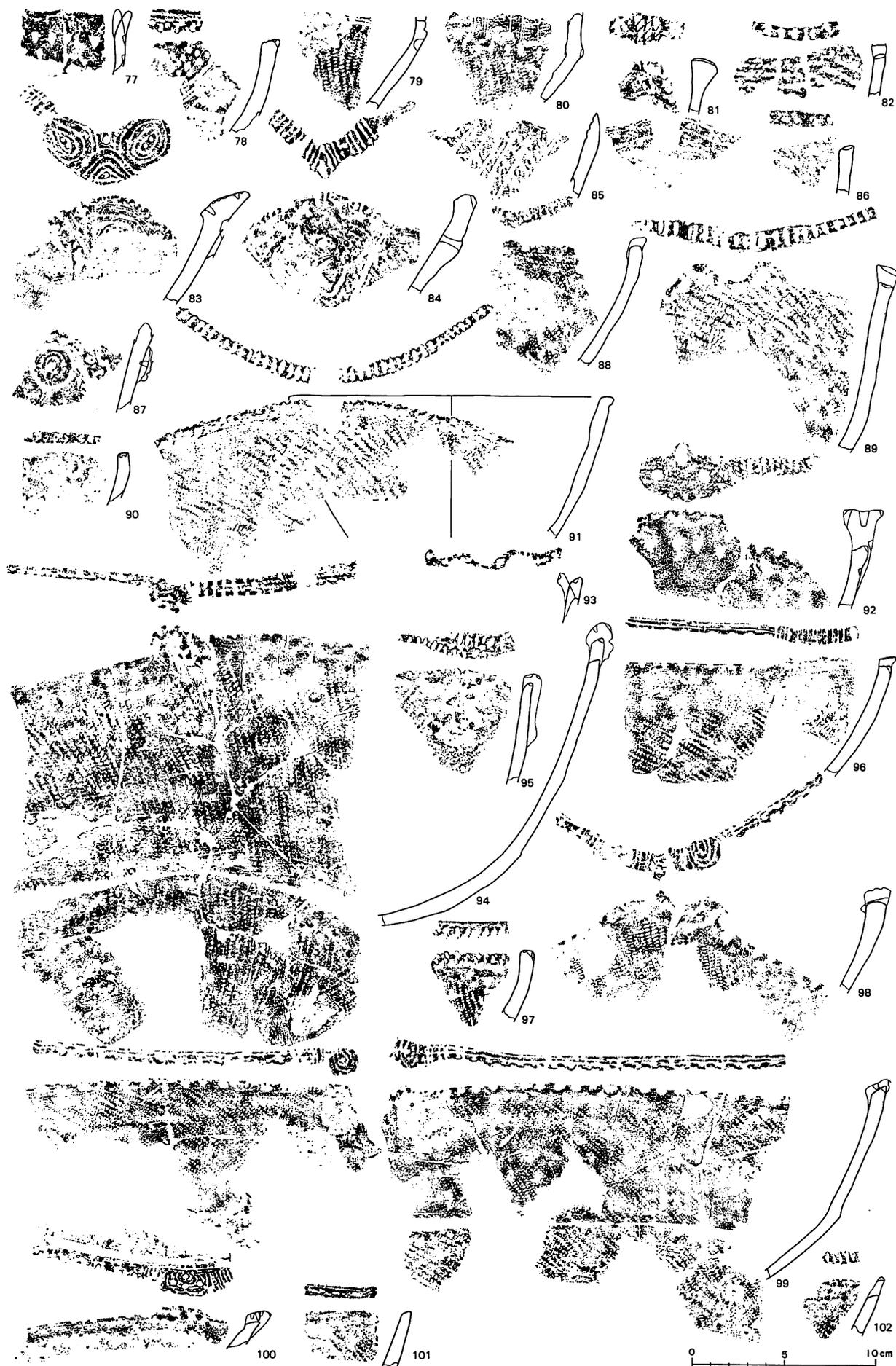
図Ⅲ-168 包含層出土の土器：V群b類(1)



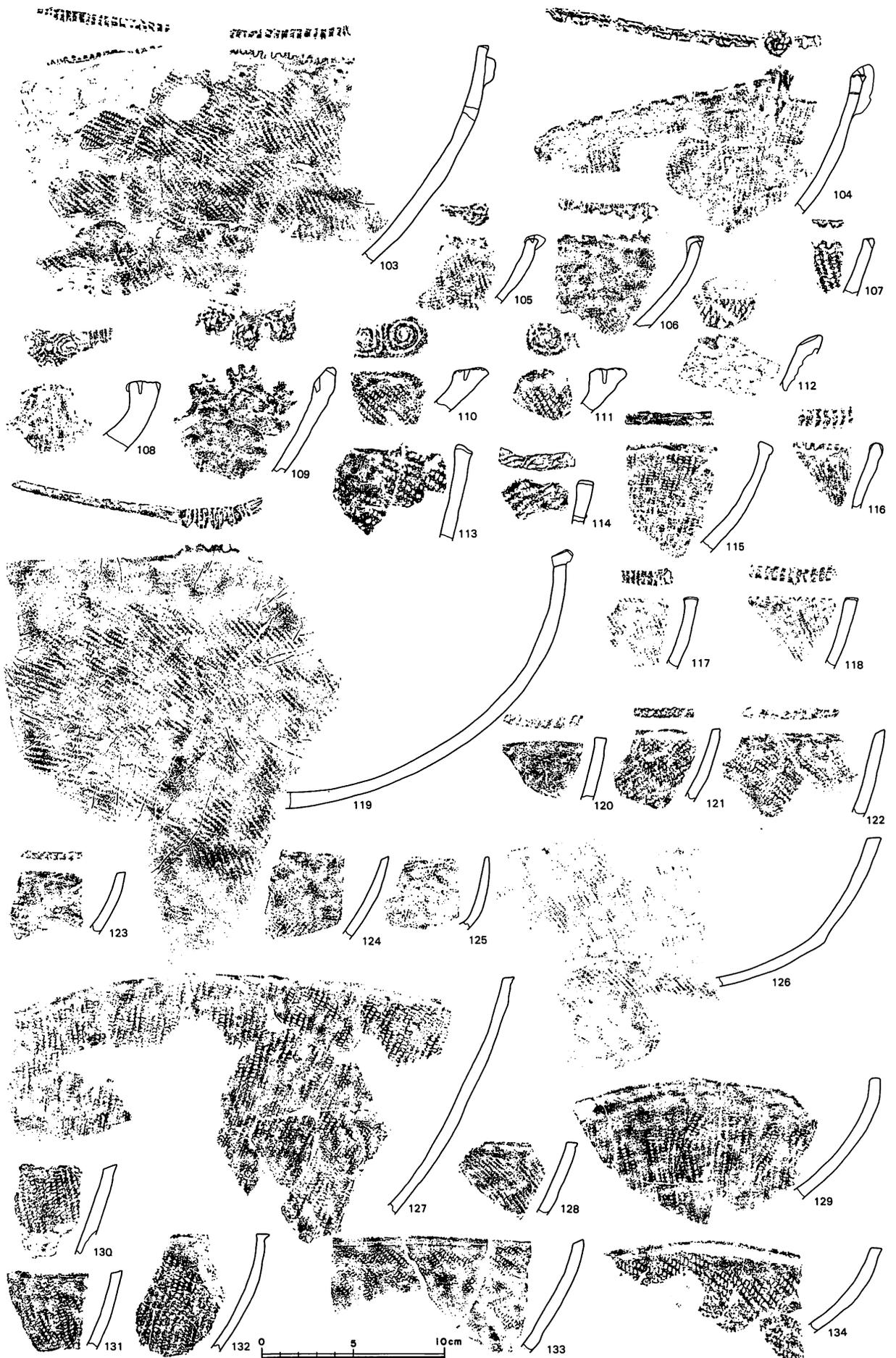
図Ⅲ-169 包含層出土の土器：V群b類(2)



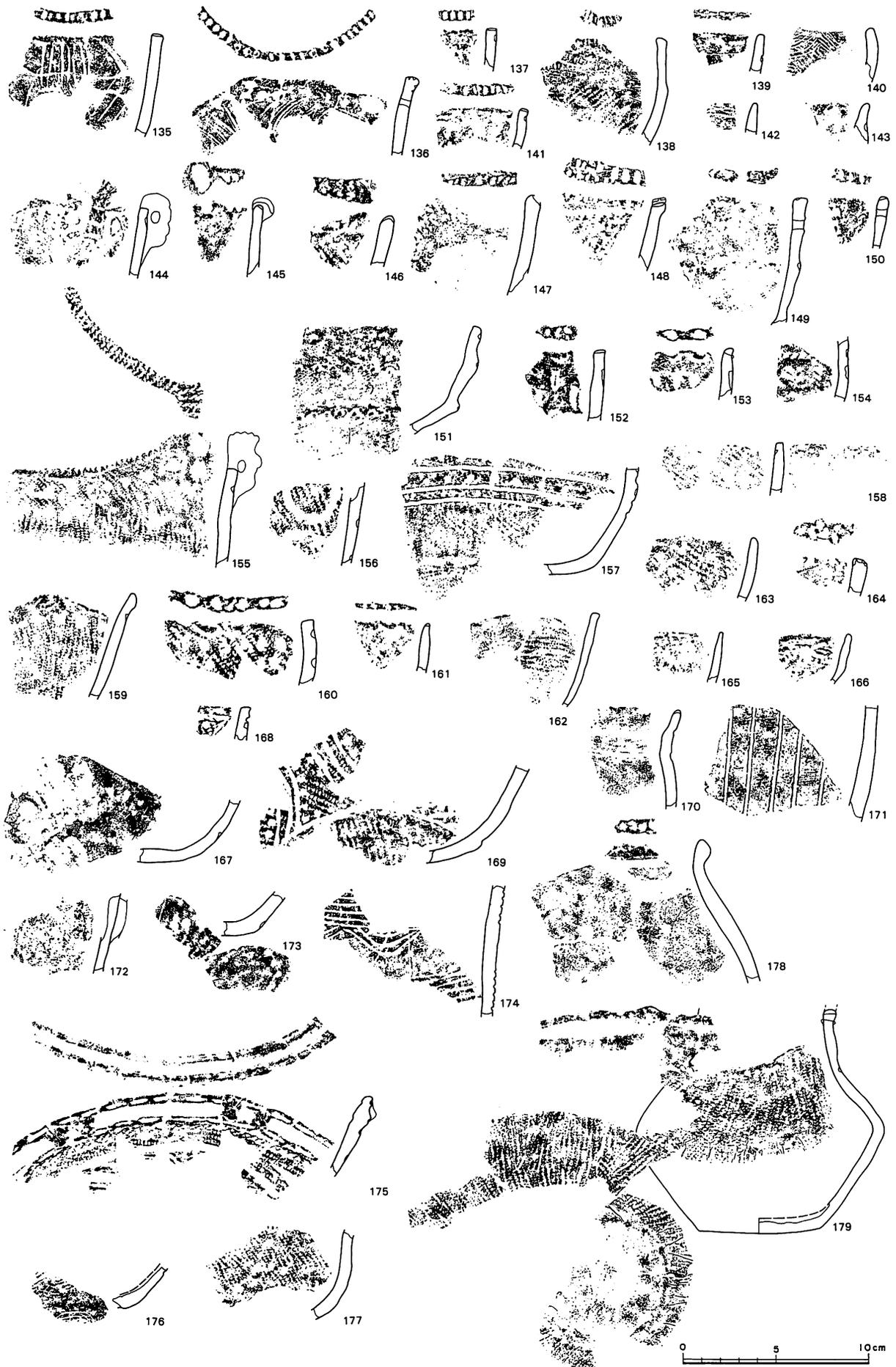
図Ⅲ-170 包含層出土の土器：V群b類(3)



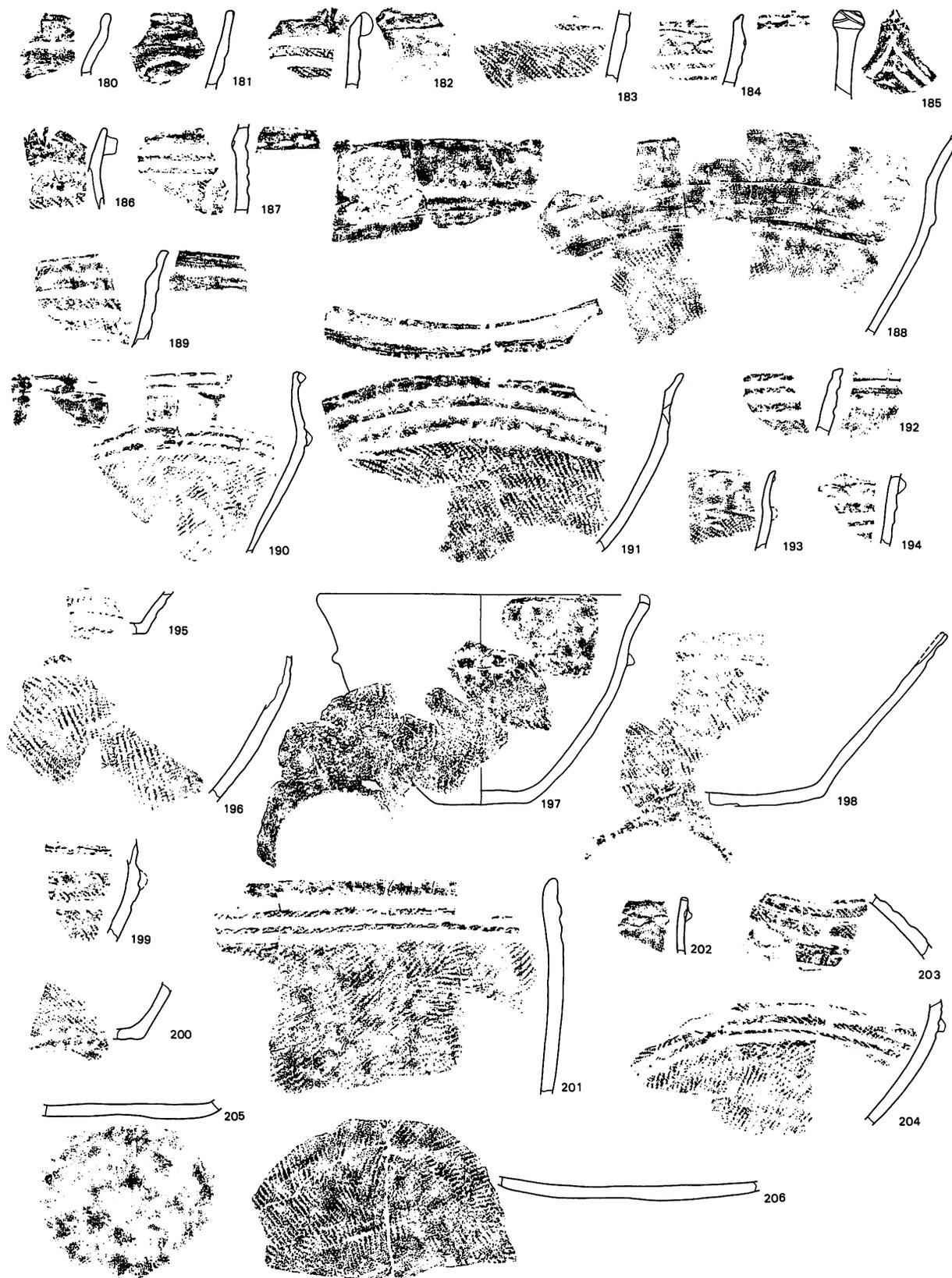
図III-171 包含層出土の土器：V群b類(4)



図Ⅲ-172 包含層出土の土器：V群b類(5)



図Ⅲ-173 包含層出土の土器：V群b類(6)



図Ⅲ-174 包含層出土の土器：V群b類(7)

肩部凹線には A 突起と B 突起を交互に配置している。口縁の内面にも凹線を 2 条めぐらし凸帯を形成している。18は口径が15.5cmほどの浅鉢形土器で、口縁に 2 個一対の小突起を配し、口縁部には粘土帯を貼付してほぼ等間隔に A 突起を形成し、連鎖状の文様帯が形成されている。体部には沈線により三単位で一周する大柄な工字文が描かれ、彫刻的な文様を形成している。底の周囲には磨きに加えられ沈線状の凹線を形成している。口縁内面には 2 条の沈線がめぐらされ、上側の沈線には、口縁の突起の裏面へのびる影込みが加えられている。地の縄文は LR の原体により全面に施文されている。180は口縁に幅の広い凹線を設ける浅鉢形土器で、口縁に突起があるらしい。181は口縁にそってわずかに厚味があり、列点状の文様を配す。体部には彫刻的な手法による文様が施されているが、構成は明らかではない。縄文はない。182・183は同一個体の口縁部と体部にかかるものがある。口縁には小突起があり、浅い凹線をめぐらし文様としている。184は口縁部にくぎれのある浅鉢形を呈するとみなされるものが、口縁内面と口縁部の下の稜をなす部分に列点状のくぼみを配する。体部には浅く凹線をめぐらせている。185は鉢形土器の把手で、下面に沈線文が施されている。186は鉢形土器の口縁部で、口縁に 2 山に分かれる低い突起のある器面に、A 突起を貼付したものがあ。器面の縄文は細かい。187は口縁部の内面の肥厚部に列点文の施されているものとみられる。188は口頸部の磨かれている浅鉢形土器で、口縁に小突起がある。189は浅い凹線の施された浅鉢形土器で、口縁の内面に凹線がめぐらされている。190は小形の鉢形土器で、口縁部と、肩部に 2 個一対に突起が配されている。191は口縁の内面に凹線をめぐらし頸部の無文帯に浅い沈線を施している。192は口唇がやや平坦なもので、内面に凹線を 2 条めぐらす。口縁には縄文地に凹線を 3 条施している。193は口縁にそって隆起帯のめぐらされていたものであるが、剥落したものとみられる。口頸部は甚だ薄く、体部の境に段が形成されている。肩部に凸起がつけられていたようである。194は口縁にそって貼付された A 突起の部分から、その下の凹線の施された部分の破片である。27は浅鉢形土器の底部かとみられるもので、底部付近は磨かれている。197は高さ10cm、口径17cm前後の浅鉢形土器で、体上部に貼付された 2 個の突起があり、口縁にも 2 個の突起がある。口縁の突起と体部の突起は円周上に交互に配置されている。体部には縄文を磨消した形跡がある。198は、器壁が直線的に開く浅鉢形土器である。底径は 8 cm 程度で、底面は、わずかに丸味をもつ。破片から知られる文様は、口縁部に凹線を 2 条めぐらすのみである。199は鉢形土器の肩部から体部の破片である。肩部に貼付帯の剥れた形跡がある。200はやや揚げ底風の底部で、細かい縄文が施されている。201は少し厚味のある深鉢形土器とみられる。口縁に凸帯があり、その下に凹線が 2 条めぐらされている。口径は15cm程度である。202は壺形土器の口縁部かとみられるもので、口唇上に指部による押捺を加えている。口縁には突起とくぼみがめぐらされている。203・204は同一個体の壺形土器とみなされ、肩部から体上半にかけて磨消縄文が認められる。文様構成は定かではない。205は壺形土器の底面、206は浅鉢形土器の底面とみなされるものである。(大沼)

(2) 石器等 (図Ⅲ-175~180、図版Ⅲ-93~98)

Ⅱ黒層から出土した石器等は171,901点である。内訳は表Ⅲ-50のとおりである。今年度は代表的なものを図示し、詳細は来年度報告する。石質は特に記載しないかぎり黒曜石である。

細石刃核 (1)

1はⅡ黒層から出土したものである。角礫もしくは亜角礫を素材としている。製作の順序はつぎのように考えられる。①a面・b面を大きく剥離して荒く形態を整える。②d面でc面の方向からスポールをとる。③d面を打面として形態の細部調整のためa面を剥離する。④c面で細石刃を剥離する。Ⅱ黒層には本来、旧石器時代の遺物は認められないので他の場所から持ち込まれたものと考えられる。

石鏃 (2~26)

2は側縁にふくらみのある木葉形の鏃である。Ⅰ群b-3類の中茶路式土器に伴うとみなされている。3は整った剥離のみられる長身鏃である。凹基で基部近くがややくびれる。Ⅰ群土器の頃のものかとみられる。珪質頁岩製。4~9は三角形の鏃である。側縁が直線的なものやまるみをもつものがある。4~6は平基、7~9は凹基である。これらはⅠ群b-4類からⅡ群b類土器の頃にみられるものである。10~26は有茎の鏃である。10~19のような中形のものや20~26のような小形のものがある。10~13は最大幅が下位にある。14は細身で茎部と鏃身の境が不明瞭なものである。10~14はⅣ群a類の余市式土器の頃にみられる。15・16は菱形。17は剥片の周縁を加工しただけの五角形のものである。15~17は石槍またはナイフに分類したもののなかにそれぞれ類似する形態のものがあり、Ⅲ群b-3類に伴うとみなされる。18~19はⅣ群土器の頃のものと思われる。20は細身である。21~26は小形の鏃。主剥離面の残るものが多い。短い茎部に特色がある。これらはⅤ群b類土器に伴うとみなされる。

石槍またはナイフ (27~50)

長さ4cmを大きく越えない小形のもの(27・28・35・36・38~43)、4cm以上10cm未満の中形のもの(29~32、44~46、49・50)、長さが10cmを越える大形のもの(34・47)がある。27~34は茎部と身の境が明瞭に区別されているもの。27~32は最大幅が中位にある。33は最大幅が上位にあるけれども、身が再加工されていて、本来、中位に最大幅をもつものとみられる。34は大形のもので、最大幅は下位にあり、幅広でまるみのある茎部をもつ。35~37は茎部と身の境が不明瞭なもの。38・39は茎部と身の境の位置が左右異なり、左右非対称のもの。40・41は菱形を呈するもの。42・43は五角形のもの。44は縦長剥片の周縁に加工が施されたもので珪質頁岩製。46は厚みのある細身のもの。47・49・50は木葉形のもの。49・50は厚みがある。49・50は珪質頁岩製。48は大型品の破損したもので、最大幅は上位にある。27~48はⅢ群b-3類の北筒式土器に伴うとみなされる。

石錐 (51~55)

51・52は棒状のもので、52の機能部は磨滅が顕著である。53は幅広の剥片の先端に機能部を作り出したもの。54・55は複数の機能部をもつものである。

つまみ付ナイフ (56~59)

56は縦長の剥片を素材としてバルブの側につまみ部を作り出すもので肩が張っている。主剥離面の右側縁に細加工を行ない、背面の右側縁にやや急角度の刃部の調整を施している。背面の左側縁は磨滅している。Ⅰ群b類土器の頃とみなされる。57は厚みのある剥片を素材とした両面加工のものである。背面の左肩が張り、右側縁に急角度の刃部が作り出されている。56・57は珪質頁岩製。58は縦長の剥片を素材とし、主剥離面の左側縁に細加工が施され、背面の左側縁にやや急角度の刃部の調整

が施される。56とは逆の加工法である。57は背面の周縁にのみ加工が施されるもので、剥片の末端につまみが作り出されている。

#### スクレイパー類 (60～74)

60は木葉形のものである。厚みのある縦長剥片を素材として背面に急角度の刃部が作り出されている。横断面は半円形を呈する。61は肩の張るもので、背面の周縁に急角度の刃部を作り出している。60・61は珪質頁岩製。62は細身で両面加工のものである。63・64は幅の整った縦長剥片を素材とし、側縁に加工が施されたものである。Ⅲ群b-3類土器に伴うとみなされる。64～70は不定形剥片の側縁あるいは周縁に加工が施されたものである。68は珪質頁岩製。71は厚みのある縦長の剥片を素材とし、背面の両側縁に急角度の刃部が作り出されている。刃部には刃つぶれが認められる。72はラウンドスクレイパー。73・74は玄武岩製の大型スクレイパー。剥片の両側縁に加工が施されている。72～74はV群b類土器に伴うとみなされる。(工藤)

#### 磨製石斧

A：刃部巾が胴部最大巾より狭い平面形

A 1 断面形が円形に近く、主面・側縁が敲打調整を受け、曲刃で鑄なし。(H-13の10、H-14の1)

A 2 断面形が半円形に近く、主面・側縁が研磨調整を受け、曲刃で鑄なし。75・76。

A 3 断面形が長方形で、主面・側面が研磨調整を受け、曲刃で鑄なし。78。

B：刃部巾が胴部最大巾より広い平面形

B 1 断面形が長楕円形で、主面・側縁が研磨調整を受け、曲刃で鑄なし。77。

B 2 断面形が長方形で、主面・側縁が研磨調整を受け、直刃か直刃に近く鑄なし。80・81・82。

B 3 断面形は扁平で、主面は研磨調整、側縁が剝離調整を受け、直刃で鑄あり。(H-18の4)

C：刃部巾が胴部最大巾と同じ平面形

C 1 断面形が半円形に近く、主面・側縁は研磨調整を受け、曲刃で鑄あり。79。

C 2 断面形が方形で、主面・側面は研磨調整を受け、直刃で鑄なし。(H-23の1)

#### 石斧未製品 刃部に研摩調整を受けていないもの

A：転礫を素材とするもの

A 1 断面形が円形に近い。A 2 断面形が長楕円形。A 3 断面形が隅丸長方形。A 4 断面が紡錘形。

B：剥片を素材とするもの

I：剝離調整 a刃部、b側縁(面)、c主面、d基部。II：敲打調整 部位は剝離調整に準ずる。

83はA2-B I a・b・d。84はA2-B I b。85はA1-B I a・b・c II b・c。

くぼみ石 敲打痕が集中しているものを仮りに敲石から分離した。

86は砂岩 2か所以上の集中が片面にみられる。87は片麻岩、1～2か所の集中が両面にみられる。

たたき石 石質と形態との間にある程度の相関関係がみられることから、石質で大別し形態で細分した。

A カンラン岩・泥岩の形態

A 1 球形転礫。A 2 半球形転礫。A 3 扁平円転礫。A 4 扁平亜角礫。A 5 多面体亜角礫

B 片麻岩・砂岩・安山岩の形態

B 1 扁平転礫。B 2 扁平楕円転礫。B 3 扁平長楕円転礫。B 4 棒状亜角礫

88～92は、カンラン岩。88はA 1全面使用。89はA 2周縁使用。90はA 3周面使用。91はA 4各稜を使用。92はA 5両端使用。93・94は、緑色泥岩。93はA 3。94はA 4。

95～98は、片麻岩。95はB 2、周縁の一端を使う。96～98はB 3長軸の一端を使用。99～101は砂岩。99はB 3長軸の両端を使用。100はB 5一端を使用。101はB 3一側縁を長く使用する。

**すり石** 石質と形態について分類した。

A：紡錘形、棒形の形態をもち、使用痕が条痕の長軸方向につく。A 1：断面が4つの平面に整形され、側面形は紡錘形。石質は安山岩質・流紋岩質凝灰岩。A 2：側断面が2つの凸曲面に整形され、側面形は長楕円形。石質は流紋岩、流紋岩質安山岩。A 3：断面が凸曲面で構成され、側面形は棒形。石質は流紋岩。A 4：形態はA 3と同じ、使用面は平坦で条痕がない。石質は流紋岩・凝灰岩。

B：断面は薄く平面形は円盤状で、石質は安山岩。

C：板状の断面形をもち、その巾の狭い面を使用する。剝離調整によって狭い面を作出する例もある。

D：垂角礫の稜を使用するもの。

102・103はA 1。104はA 2、両端各面に敲打痕。105はA 3。106・107はA 4。108はB。109・110はC。

**石鏝** 側面形は半円形を呈す。石質は凝灰岩。111の上端面は未調整。

**石錘** 2ヶ所にノッチのあるもののみが出土した。形態について分類する。

A：長軸端部にノッチがあるもの。A 1：両面からノッチを施すもの。A 2：片面からノッチを施すもの。

B：短軸側にノッチがあるもの。B 1：両面からノッチを施すもの。B 2：片面からノッチを施すもの。

112はB 2、片麻岩で風化が著しい。

**砥石** 使用面が平滑のものと有溝のものがある。

形態 A：四面柱状 A 1：断面正方形 A 2：断面長方形

B：盤状 B 1：平面方形 B 2：平面不整形

C：板状 C 1：平面方形 C 2：平面不整形

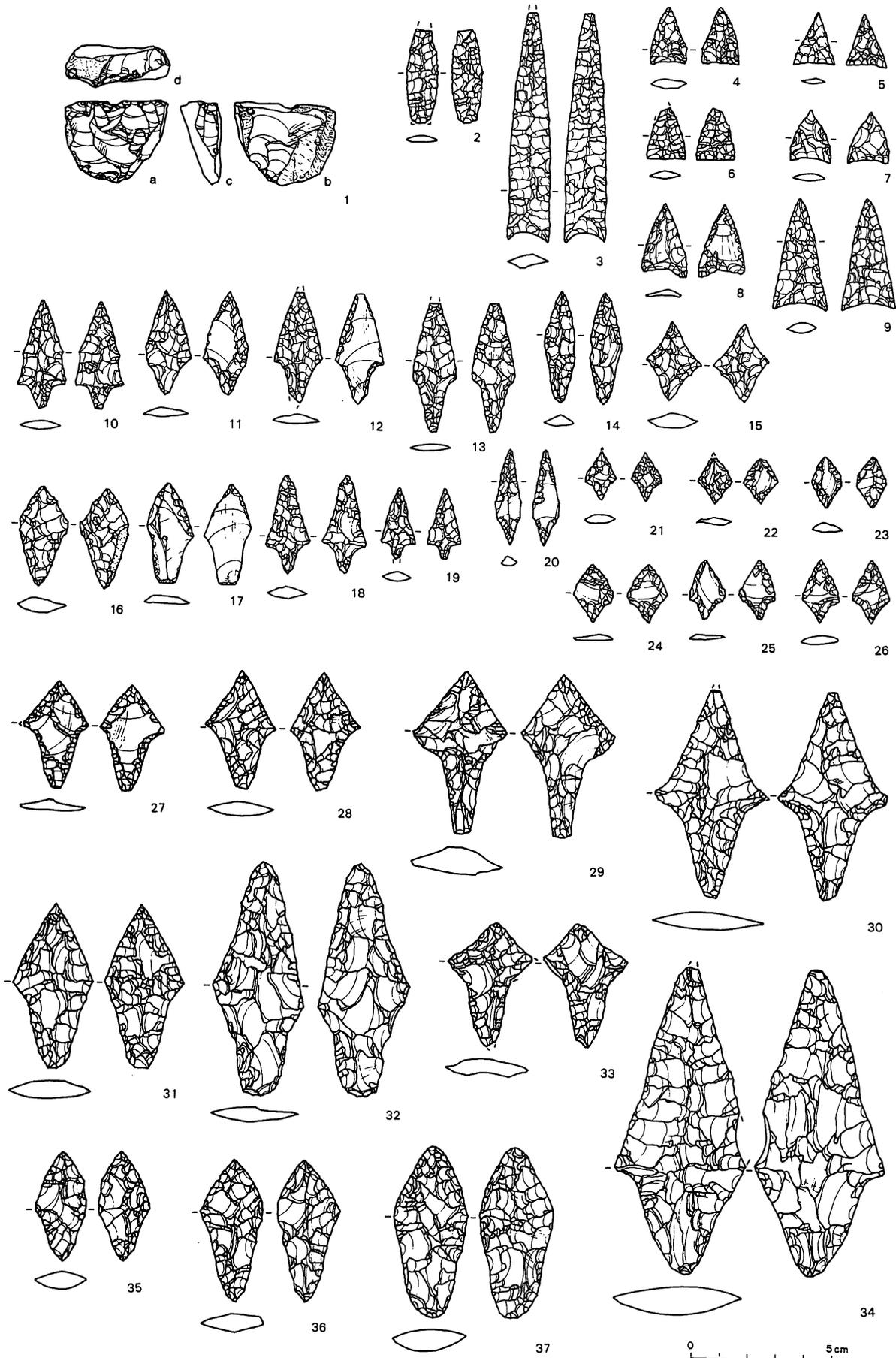
D：塊状 D 1：Ⅱ方体に近い D 2：不整形

石質 イ) 粒径 (wentworth 式)：極細粒・細粒・中粒・粗粒・極粗粒 ロ) 固結度：風化・加熱が加わった表面の観察について。1：あまり固結していない (触ると剝落する。) 2：やや固結する (爪で搔くと剝落する。) 3：よく固結する (爪で搔いても剝落しない。) 以上は砂岩について。

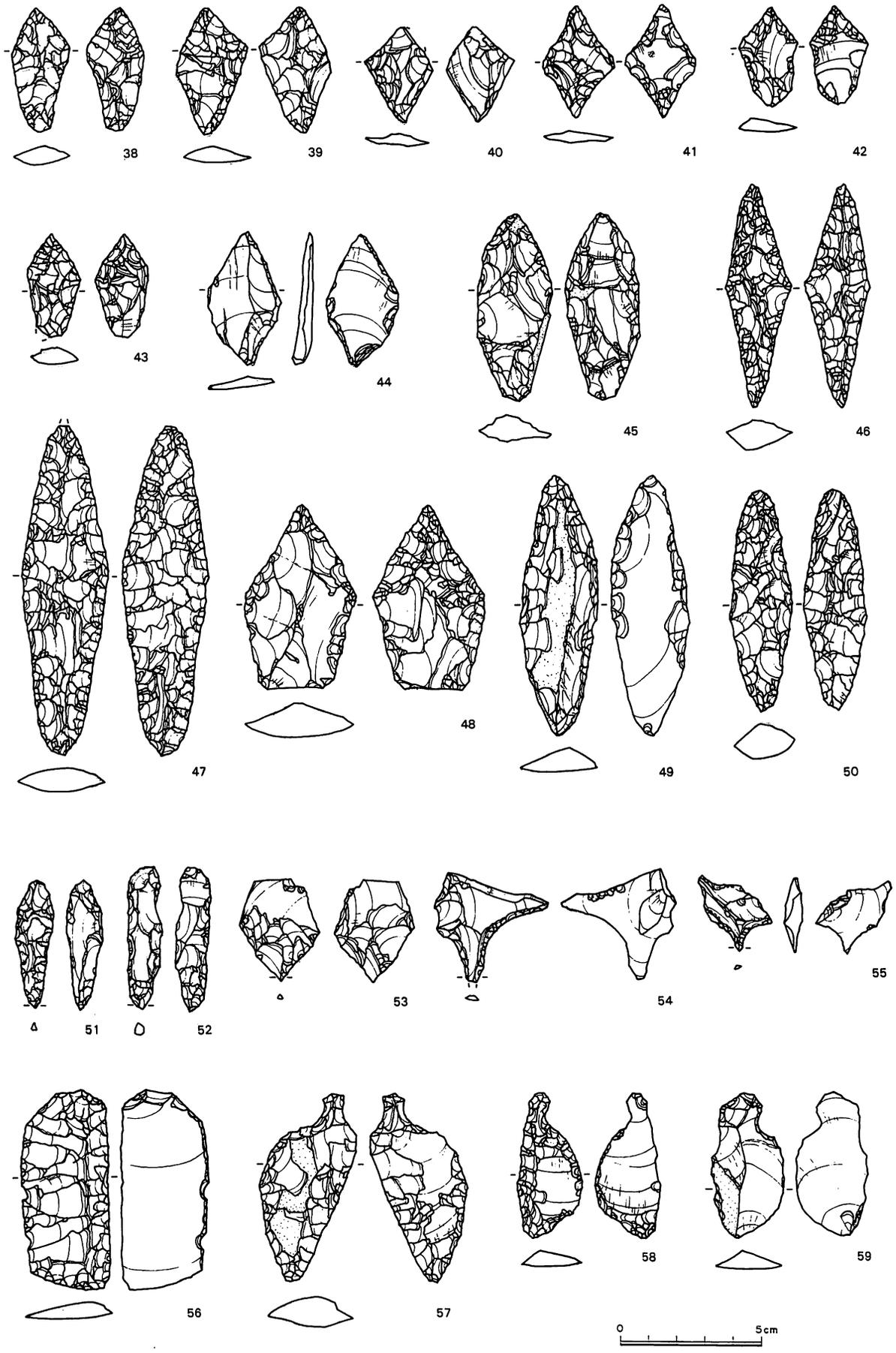
113はA 1・中粒・よく固結。114はA 2・極細粒・よく固結。115はB 1・中粒・あまり固結せず。116はB 2・極細粒・やや固結。117はC 2・細粒・よく固結。119はD 1・極細粒・よく固結。118は軽石製有溝砥石。

**石製品 (120～133)**

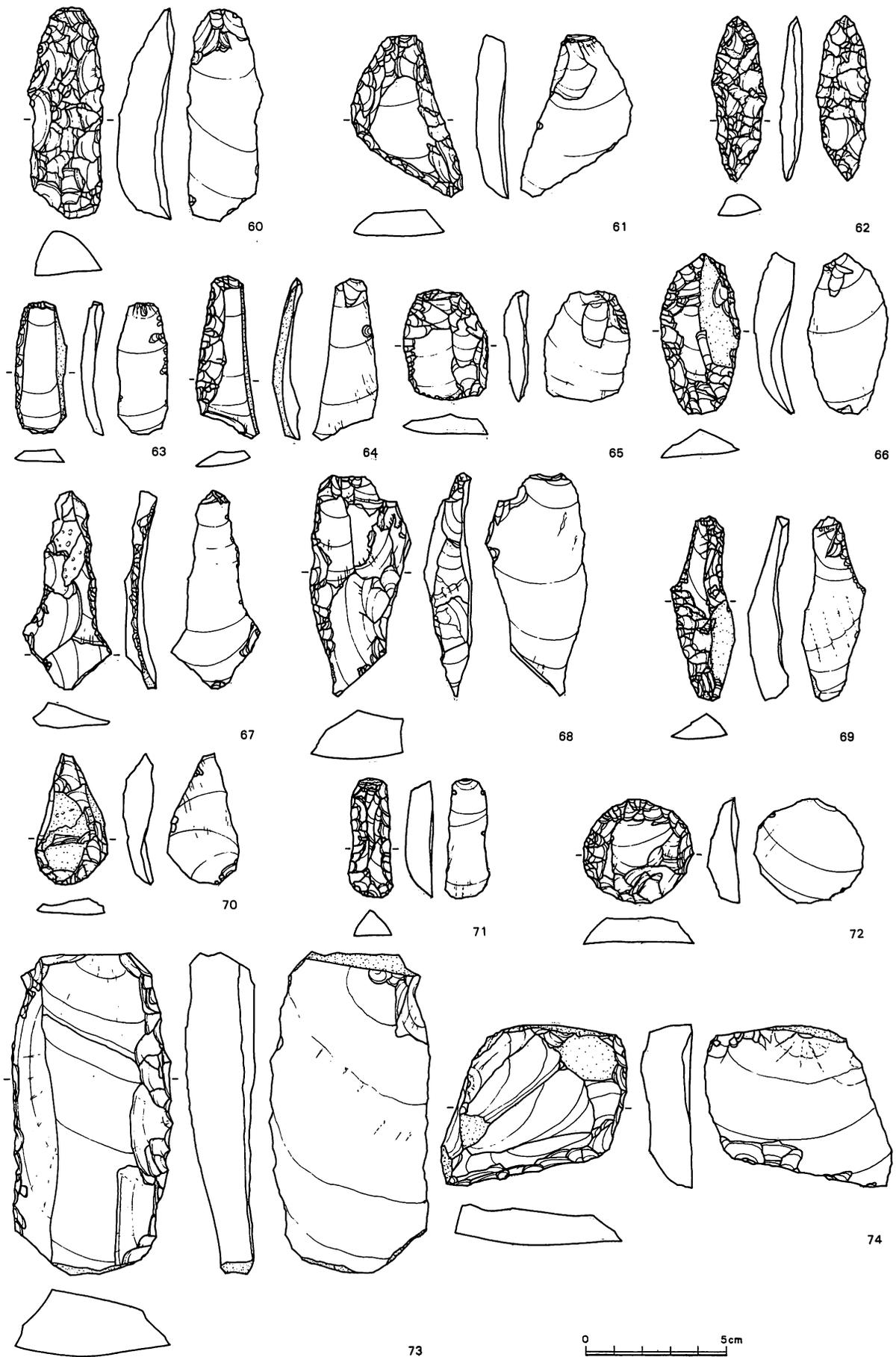
120～122は蛇紋岩製管玉、120は面取を施す。123・124は蛇紋岩製平玉、123はV字状溝が側面に廻る。124は風化が著しい。125～128は垂飾。125・127・128は礫の形状をのこす。126は平坦な面に1条の溝が走る。129～131は石斧ミニチュア。くさびのような機能も想定されるが現時点ではミニチュアとして報告した。132～133は垂飾未製品 礫の形状をのこす。(鈴木)



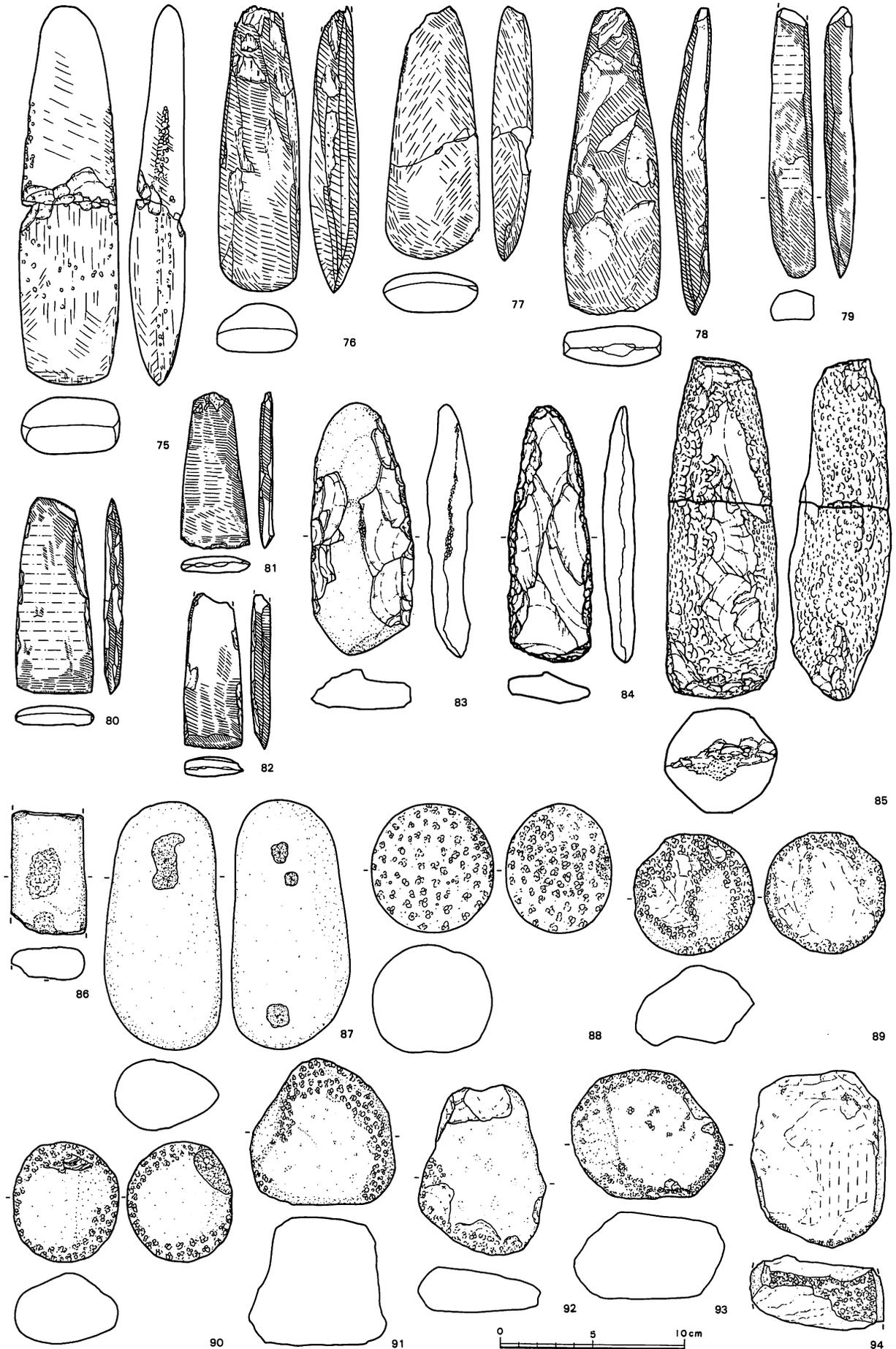
図Ⅲ-175 包含層出土の石器(1)



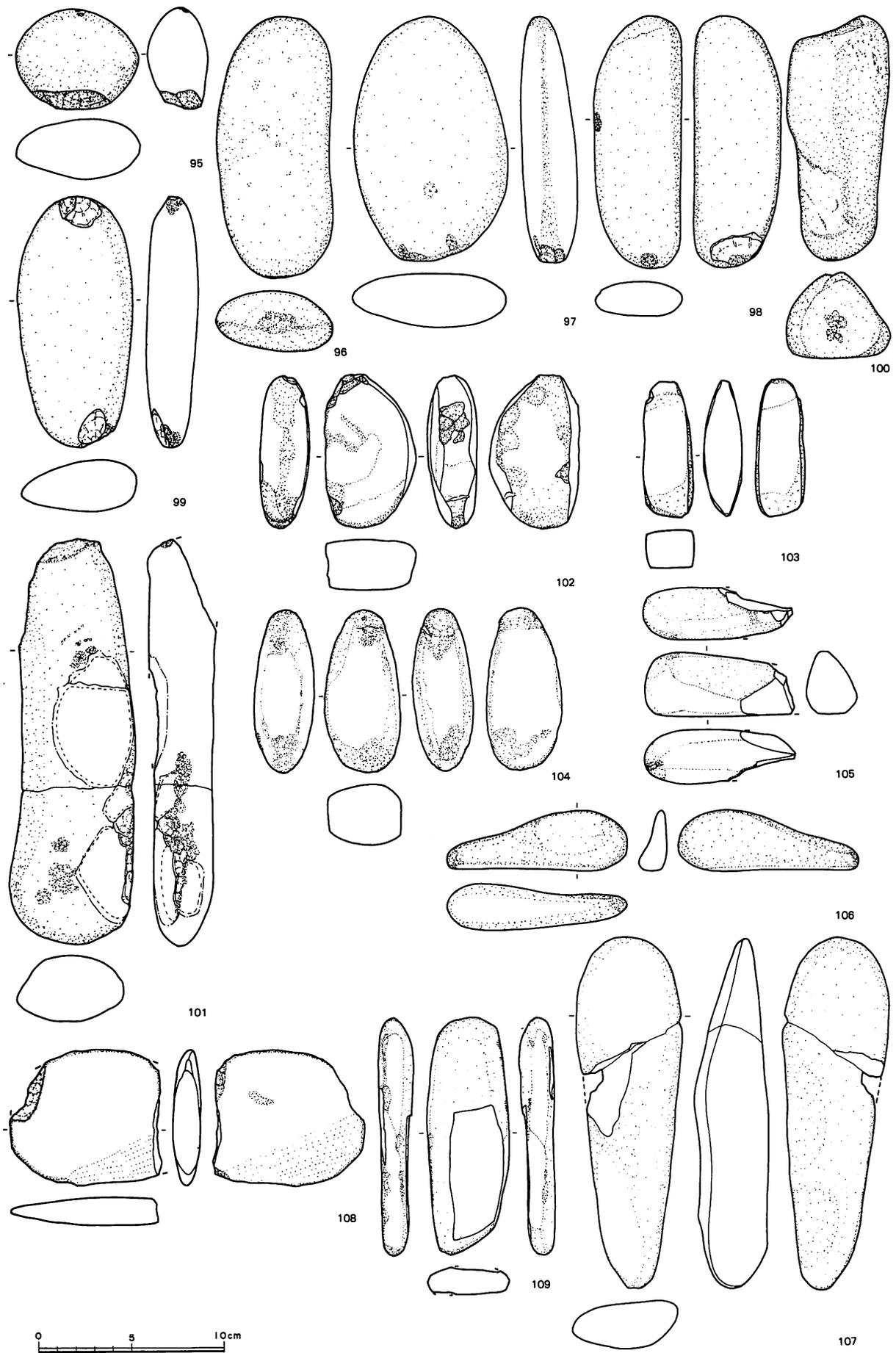
図Ⅲ-176 包含層出土の石器(2)



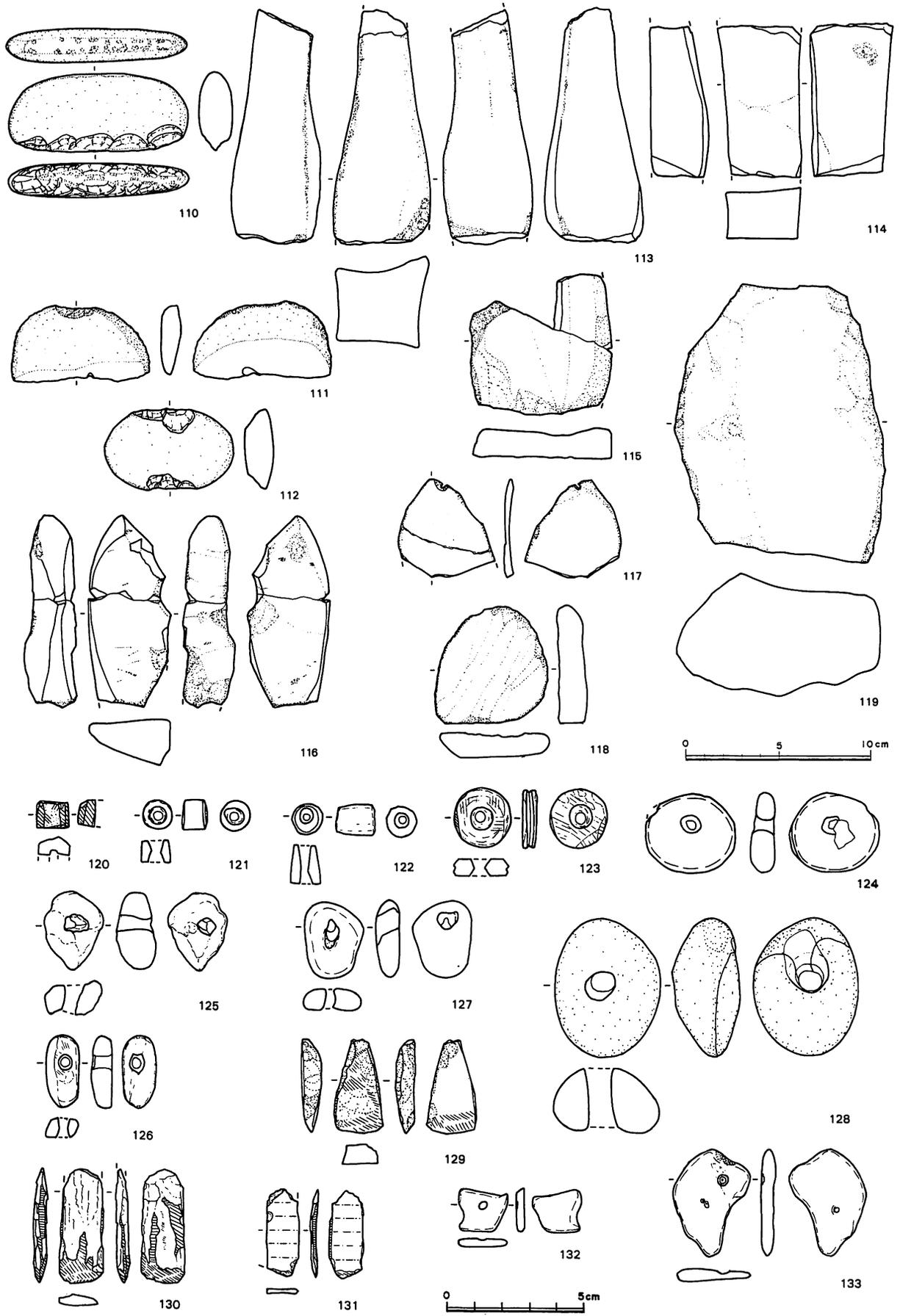
図Ⅲ-177 包含層出土の石器(3)



図III-178 包含層出土の石器(4)



図Ⅲ-179 包含層出土の石器(5)



図Ⅲ-180 包含層出土の石器(6)

表Ⅲ-50 包含層の出土遺物一覽

土器分類	數量		表塚・埴土	計
	ⅡB上面~1回目	2回目~ⅡB下面		
Ⅱa-1	1	14		15
Ⅱa-2		6		6
Ⅱa	22	191		213
Ⅱb-1		40		40
Ⅱb-2		1		1
Ⅱb-3	5207	32265	263	37735
Ⅳ a	286	1151	3	1440
Ⅳ b	38	548	1	587
Ⅳ c	121	50		171
V b	6212	5215		11427
小計	11887	39481	267	51635

石器名稱	數量		表塚・埴土	計
	ⅡB上面~1回目	2回目~ⅡB下面		
石斧	62	160		222
銚	228	281	2	511
斧F	917	3969	13	4899
石鏟	3	1		4
刮石	9	6		15
砥石	23	174		197
台石	55	219		274
石皿	8	28		36
たき石	64	226		290
くぼみ石	2			2
石鏡	27	23		50
小計	1398	5084	15	6497

石器名稱	數量		表塚・埴土	計
	ⅡB上面~1回目	2回目~ⅡB下面		
石鏟	120	185	3	308
石槍	174	654	1	829
石鏟	9	19		28
搔器	89	208	1	298
つばね	4	7		11
RS	5	1		6
ES	2	1		3
F	16327	47605	487	64419
RF	205	542	3	750
UF	225	496	4	725
コア	89	136		225
F.C.	26378	77573	347	104298
新石器	1			1
小計	43628	127427	846	171901

石器名稱	數量		表塚・埴土	計
	ⅡB上面~1回目	2回目~ⅡB下面		
礫	316	1638	1	1955
礫片	18	67	3	88
小計	334	1705	4	2043
総計	57247	173697	1132	232076

表Ⅲ-51 遺構の出土遺物一覽

名稱	分類	數量		計
		覆土	床面	
土器	Ⅱb-1	52		52
	Ⅱb-3	3413	544	3957
	Ⅳ a	166	41	207
	Ⅳ c	2		2
	V b	398	412	810
小計		4031	997	5028

名稱	數量		計
	覆土	床面	
礫	74	327	401
礫片	90	25	115
小計	164	352	516

名稱	數量		計
	覆土	床面	
石鏟	29	6	35
石槍	60	5	65
銚	14		14
石鏟	4		4
搔器	20	4	24
RS	1		1
F	9355	1634	10989
RF	73	3	76
UF	57	7	64
コア	19	2	21
F.C.	39816	9816	49634
小計	49448	11477	60925

名稱	數量		計
	覆土	床面	
石斧	32	9	41
銚	29	2	31
斧F	930	72	1002
石鏟	2		2
石鏟	1		1
石鏟	1		1
刮石	3		3
砥石	59	4	63
台石	36	1	37
石皿	14		14
たき石	26	4	30
くぼみ石	1		1
小計	1134	92	1226
総計	54777	12918	67695

表Ⅲ-52 遺構別出土遺物一覽 (土壌・焼土・Tピット・集石)

中期の土壌

P-8	Ⅲb-3	Ⅳ a	小計	F	F.C.	小計	斧F	礫片	計
覆土	1		1						1
覆土3層	19	3	22	3	3	6	6	1	35
覆土4層	4		4						4
覆土5層		1	1						1
埴底	2		2						2
小計	26	4	30	3	3	6	6	1	43

P-11	Ⅲb-3	F	F.C.	計
覆土	4	2	3	9

P-15	石皿	台石	計
覆土	1	1	2

P-13	Ⅲb-3	F	RF	F.C.	小計	斧F	砥片	台片	小計	計
覆土上層	43		2	103	105	11			11	159
覆土下層	11	10		29	39	4	1	1	6	56
小計	54	10	2	132	144	15	1	1	17	215

P-21	Ⅱ/Ⅲ	Ⅲb-3	V b	小計	F	RF	小計	斧片	斧末	斧F	砥片	小計	礫片	計
覆土上面								1				1		1
覆土	1	5	1	7	45	1	46			6		6		59
覆1上部									1		5	6		6
覆1下部		3		3	2		2		1			1		6
埴底		6		6									1	7
小計	1	14	1	16	47	1	48	1	2	6	5	13	1	79

P-30	F
覆土	3

P-31	Ⅲb-3	F	F.C.	小計	計
覆土	1	3	6	9	10

Ⅲ 美々3遺跡第Ⅱ黑色土層の調査

P-32	Ⅲb-3	F	斧F	焼石	小計	計
覆土	3	4	2		2	9
城底	2			1	1	3
小計	5	4	2	1	3	12

P-33	Ⅲb-3	F	台石	皿片	小計	計
覆土	29	2	1	1	2	33

P-49	Ⅲb-3	F	台石	計
覆土			1	1
覆土1	3	2		5
小計	3	2	1	6

P-73	Ⅲb-3	Ⅳa	小計	石槍	槍片	F	RF	UF	F.C.	小計	斧F	計
覆土	26	5	31	1	1	62	2	5	72	143	3	177

P-87	Ⅲb-3	槍片	搔器	搔片	F	UF	F.C.	小計	鏃	鏃片	小計	計
覆土	12		1	1	36		19	57	1	1	2	71
覆1上部	6	1			1	1		3				9
小計	18	1	1	1	37	1	19	60	1	1	2	80

P-88	Ⅲb-3
覆2上部	2
覆2下部	2
小計	4

P-92	Ⅲb-3	F	RF	UF	F.C.	小計	斧F	計
覆土1層	1	18			15	33	1	35
覆2上面	2	1				1		3
覆土2層	3	3	1	1		5		8
覆3上面	2	1				1		3
覆4上面	1							1
城底	1							1
小計	10	23	1	1	15	40	1	51

P-91	Ⅲb-3	石槍	槍片	F	小計	鏃片	計
覆1上部	1	7	1	1	9	1	11

P-93	Ⅲb-3	Ⅳa	小計	槍片	搔片	F	F.C.	小計	斧F	焼石	小計	計
覆土1層	1		1			18	21	39				40
覆1上部							1	1				1
覆2上面	7		7			1		1				8
覆土2層		1	1			24	15	39				40
覆2上部	7		7			1		1		1	1	9
覆2下部	3		3			2		2				5
覆土3層				1		19	5	25	1		1	26
覆3上部	1		1			1		1				2
城底	1		1		1	1		2				3
小計	21	1	22	1	1	67	42	111	1	1	2	134

P-94	Ⅲb-3	F	RF	小計	計
覆土	2				2
覆1上面	2	1		1	3
覆土1壁	7		1	1	8
覆1上部	1				1
覆1下部	1				1
小計	13	1	1	2	15

P-95	Ⅲb-3	F	F.C.	小計	焼石	計
覆土	2	5	5	10		12
覆1下部					1	1
覆土2壁	1					1
小計	3	5	5	10	1	14

P-103	Ⅲb-3	F	計
覆1上面	2		2
覆1上部	1	1	2
覆土1壁		1	1
小計	3	2	5

P-104	Ⅲb-3	F	UF	小計	計
覆土1壁		2		2	2
覆1下部	6	1		1	7
覆土2壁		1	1	2	2
覆2上部		2	1	3	3
小計	6	6	2	8	14

P-105	Ⅲb-3	F	計
覆土1層	3	2	5

P-109	Ⅲb-3	石鏃	F	UF	小計	斧F	計
覆土	19		6	6	12	1	32
城底	4	1			1		5
小計	23	1	6	6	13	1	37

P-110	Ⅲb-3	F	RF	小計	斧F	台石	皿片	小計	計
覆土	10	9	1	10	1	1	1	3	23
城底	2								2
小計	12	9	1	10	1	1	1	3	25

P-111	Ⅲb-3	F	F.C.	小計	計
覆土	5	2	1	3	8

P-113	Ⅲb-3	F	UF	UF	F.C.	小計	斧未	斧F	小計	計
覆土	30	23		2	14	39	1	2	3	72
城底	3		1			1				4
小計	33	23	1	2	14	40	1	2		76

P-114	Ⅲb-3	F	石斧	計
覆土	1	1	1	3

P-120	斧未
覆土	1

T-1	Ⅲb-1	Ⅲb-3	計
覆土上層	14		14
覆土下層		1	1
小計	14	1	15

S-1	鏃
ⅡB中	13

後期の土層

P - 23	Ⅲb-3	F	RF	小計	礫	計
覆土上層	3	2	1	3		6
城底直上					4	4
小計	3	2	1	3	4	10

P - 38	F	斧F	計
覆土3層	3	1	4

晩期の土層

P - 16	Vb	RS	F	小計	計
覆土上層	3	1	1	2	5

P - 17	Vb	F	RF	小計	計
覆土上層	22	8	1	9	31
覆土中層	2		1	1	3
覆土下層	2	3		3	5
小計	26	11	2	13	39

P - 18	Ⅲb-3	Vb	計
覆土	2	15	17

P - 19	Vb	礫石	計
覆土		1	1
覆土上層	6		6
覆土下層	1		1
小計	7	1	8

P - 20	Ⅲb-3	Vb	小計	F.C.	礫	計
覆土		148	148	1		149
焼土	3		3	3	2	8
小計	3	148	151	4	2	157

P - 22	Vb	F	F.C.	小計	計
覆土上層	27	4	2	6	33

P - 34	Ⅲb-3	F	計
覆土	1	5	6

P - 35	Vb
覆1上面	2
覆1上部	3
覆1下部	3
覆2上面	2
覆2下部	2
覆土	3
小計	15

P - 39	Vb	F	砥石	計
覆土1層	17	2		19
覆1上面	7		1	8
覆1下部	2			2
覆3下部	1			1
小計	27	2	1	30

P - 37	Ⅲb-3	Vb	小計	F	石皿	計
覆土	1	5	6	1	1	8

P - 40	Vb
覆1上面	2

P - 41	Vb
覆1上面	2

P - 42	Vb	F	計
覆土	27	1	28

P - 44	Vb	F	計
覆土	18	6	24

P - 45	Vb	石皿	計
覆土	44	1	45

P - 46	Vb
覆1上面	3

P - 48	Ⅲb-3	Vb	小計	斧末	石皿	小計	計
覆土					1	1	1
覆1上部	1	3	4				4
覆1下部				1		1	1
小計	1	3	4	1	1	2	6

P - 50	Ⅲb-3	Vb	小計	F	F.C.	小計	斧F	計
覆土	1	39	40	4		4		44
焼土		49	49	12	23	35	3	87
小計	1	88	89	16	23	39	3	131

P - 51	Vb	F	斧F	小計	計
覆土	2	3	2	5	7

P-102	Vb	焼石	焼片	小計	礫	礫片	小計	計
覆土	1	1	2	3	1	1	2	6
城底直上			1	1				1
小計	1	2	2	4	1	1	2	7

時期不明の土層

P - 14	礫
覆土4層	1

P - 24	F
覆土	2

P - 36	F
覆土2層	2

P-106	F	礫片	計
覆土上層	3	1	4

P-112	Ⅲb-3	Vb	計
覆土	1	1	2

P-115	礫片
覆土	1

SP-2	F.C.
覆土	3

SP-6	Ⅲb-3
覆土	1

SP-7	F	F.C.	計
覆土上層	1		1
覆土下層		1	1
小計	1	1	2

SP-9	F	UF	F.C.	計
覆土	1	1	3	5

中期の焼土

F-2	F.C.	F-3	Ⅱb-3	F	FC.	小計	礫	計	F-4	F	FC.	小計	礫	計	F-30	FC.	F-32	FC.
焼土中	4	焼土中	1	10	42	52	8	61	焼土中	8	27	35	1	36	焼土中	2	焼土中	2

F-27	F	FC.	小計	礫	計	F-28	Ⅱb-3	F	FC.	小計	礫	計	F-34	F	FC.	小計	礫	計	
焼土中	20	18	38	1	1	40	焼土中	1	6	81	87	18	106	焼土中	2	6	8	2	10

F-35	石器	F	FC.	小計	礫	計	F-36	Ⅱb-3	槍片	F	FC.	小計	槍片	礫	計	F-37	Ⅱb-3	F	計
焼土中	1	6	22	29	1	30	焼土直上	3				3	1		4	焼土中	1	6	7
							焼土中	5	2	7	27	36		8	49				
							小計	8	2	7	27	39	1	8	53				

F-40	F	FC.	計	F-42	Ⅱb-3	F	FC.	小計	斧F	礫	計	F-44	Ⅱb-3	F	FC.	小計	計
焼土中	2	9	11	焼土中	1	14	19	33	1	2	37	焼土中	6	6	31	37	43

F-46	F	FC.	小計	礫	計	F-47	Ⅱb-3	F	FC.	小計	計	F-48	Ⅱb-3	F	F.C.	小計	礫	計
焼土中	4	33	37	2	39	焼土中	1	5	41	45	46	焼土中	2	11	124	135	2	144

F-49	F	FC.	小計	礫	計	F-50	Ⅱb	F	FC.	小計	礫	計	F-52	Ⅱb-3	F	FC.	小計	計
焼土中	1	23	24	9	33	焼土中	4	7	23	30	1	35	焼土中	1	2	9	11	12

F-53	Ⅱb-3	F	FC.	小計	礫	計	F-55	Ⅱb-3	F	F.C.	小計	礫	計	F-56	Ⅱb-3	F	FC.	小計	計
焼土中	1	8	62	70	1	72	焼土中	4	34	250	284	1	289	焼土中	2	77	18	95	97

F-57	F	FC.	小計	礫	計	F-58	FC.	F-60	Ⅱb-3	石楯	F	FC.	小計	礫	計
焼土中	1	11	12	1	13	焼土中	8	焼土中	12	2	14	32	48	1	61

F-61	Ⅱb-3	槍片	F	UF	F.C.	小計	斧F	礫	計	F-63	Vb	F	FC.	小計	計	F-68	FC.
焼土中	11	1	32	1	105	140	14	5	170	焼土中	20	5	7	12	32	焼土中	9

F-70	Ⅱb-3	F	FC.	小計	礫	計	F-71	FC.	礫	計	F-72	Ⅱb-3	F	FC.	小計	斧F	計
焼土中	34	7	74	81	4	119	焼土中	9	3	12	焼土中	7	3	28	31	6	44

F-73	Ⅱb-3	F	FC.	小計	計	F-74	Ⅱb-3	F	F.C.	小計	斧F	礫	計	F-75	F	FC.	小計	礫	計
焼土中	1	2	28	30	31	焼土中	1	14	278	292	1	1	295	焼土中	10	17	27	5	32

F-76	Ⅱb-3	F	FC.	小計	計	F-77	F	FC.	計	F-78	F	礫	計	F-79	F	FC.	小計	礫	計
焼土中	2	6	21	27	29	焼土中	11	30	41	焼土中	7	1	8	焼土中	1	5	6	3	9

F-80	Ⅱb-3	F	礫	計	F-81	F	FC.	計	F-82	Ⅱb-3	F	礫	計	F-84	F	F-85	FC.
焼土中	3	2	1	6	焼土中	5	15	20	焼土中	2	12	1	15	焼土中	1	焼土中	5

F-86	Ⅱb-3	F	FC.	小計	礫	計	F-87	F	FC.	計	F-89	FC.	礫	計	F-90	F	FC.	小計	斧F	礫	計
焼土中	5	2	24	26	3	34	焼土中	4	39	43	焼土中	4	3	7	焼土中	4	30	34	1	2	37

F-91	F	FC.	小計	斧F	礫	計	F-92	FC.	F-93	F	FC.	計	F-94	Ⅱb-3	F	FC.	小計	礫	計
焼土中	1	39	40	5	1	46	焼土中	9	焼土中	1	5	6	焼土中	2	10	5	15	5	22

F-95	F	FC.	小計	礫	計	F-100	■b-3	F-101	FC.	礫片	計	F-102	F	FC.	小計	礫	計
焼土中	2	32	34	2	36	焼土中	2	焼土中	2	1	3	焼土中	5	33	38	17	55
F-104	F	FC.	計	F-106	FC.	礫片	計	F-109	■b-3	FC.	計	F-110	FC.				
焼土中	4	18	22	焼土中	3	6	9	焼土中	1	33	34	焼土中	19				
F-112	■b-3	F	FC.	小計	礫	計	F-113	■b-3	F-117	FC.	F-120	■b-3	F	FC.	小計	計	
焼土中	1	7	9	16	1	18	焼土中	1	焼土中	2	焼土中	1	2	9	11	12	

※ F4,55,70,82,86,92,95の焼土中にはクルミが含まれていた。

晩期の焼土

F-1	Vb	F	FC.	小計	礫	計	F-5	Vb	FC.	計	F-6	■b-3	Vb	小計	F	FC.	小計	計		
焼土中	1	19	7	26	1	28	焼土中	5	9	14	焼土中	1	19	20	1	26	27	47		
F-7	■b-3	Vb	小計	FC.	計	F-8	Vb	椀器	F	UF	F.C.	小計	計	F-9	Vb	F	FC.	小計	計	
焼土中	2	2	4	10	14	焼土中	6	1	4	1	116	122	128	焼土中	5	9	87	96	101	
F-10	Vb	F	F.C.	小計	礫	計	F-11	Vb	FC.	計	F-12	Vb	F	FC.	小計	計				
焼土中	13	27	202	229	10	252	焼土中	2	3	5	焼土中	2	3	55	58	60				
F-14	Vb	FC.	礫	計	F-15	■b-3	FC.	礫	計	F-16	Vb	F	F.C.	小計	礫	計				
焼土中	1	15	2	18	焼土中	1	14	2	17	焼土中	33	16	181	197	11	241				
F-17	Vb	石	礫片	F	RF	F.C.	小計	礫	礫片	計	F-19	■b-3	Vb	小計	F	F.C.	小計	斧	礫	計
焼土中	16	2	1	7	1	227	235	10	1	262	焼土中	15	5	20	11	106	117	8	11	156
F-18	■b-3	Vb	小計	石	F	UF	F.C.	小計	斧片	礫	計	F-20	Vb	F	FC.	小計	計			
焼土中	2	22	24	1	37	1	586	671	23	23	741	焼土中	8	3	1	4	12			
F-21	■b-3	Vb	小計	F	FC.	小計	計	F-22	■b-3	Vb	小計	石	F	F.C.	小計	礫	計			
焼土中	2	2	4	4	26	30	34	焼土中	2	45	47	2	68	118	189	3	239			
F-23	■b-3	Vb	小計	石	F	UF	F.C.	小計	石	斧片	小計	礫	計	F-29	Vb	FC.	計			
焼土中		55	55		155		1111	1266				64	1385	焼土中	8	1	9			
焼土直上		4	44	48	2	13	1	2	18	1	1	2	68							
小計		4	99	103	2	168	1	1113	1284	1	1	2	64	1453						
F-31	Vb	F	FC.	小計	礫	計	F-33	■b-3	FC.	計	F-38	F	FC.	小計	礫	計				
焼土中	4	10	7	17	2	23	焼土中	1	2	3	焼土中	1	24	25	5	30				
F-39	Vb	F	FC.	小計	計	F-41	■b-3	F	FC.	小計	礫	計	F-43	Vb	F	FC.	小計	礫	計	
焼土中	1	10	51	61	62	焼土中	1	27	81	108	1	110	焼土中	7	11	31	42	1	50	
F-45	Vb	F	FC.	小計	計	F-51	Vb	F	FC.	小計	礫	計	F-54	■b-3	F	FC.	小計	石	礫	計
焼土中	2	1	12	13	15	焼土中	1	6	16	22	2	25	焼土中	2	1	28	29	6	3	40
F-59	Vb	F	F.C.	小計	礫	計	F-96	F	FC.	計	F-108	FC.	F-119	FC.						
焼土中	25	6	620	626	3	654	焼土中	6	40	46	焼土中	11	焼土中	2						



遺構	番号	分類	出土層位	遺構	番号	分類	出土層位	遺構	番号	分類	出土層位	遺構	番号	分類	出土層位
H-20	1	Vb	SP-6覆土	P-88	48	Ⅲb-3	覆土	F-100	27	Ⅲb-3	焼土中	P-40	23	Vb	覆土1層
	2	〃	SP-5覆土	P-91	49	Ⅲb-3	〃	F-103	28	〃	〃	P-41	24	Vb	〃
	3	〃	〃	P-92	50	Ⅲb-3	〃	F-103	29	〃	〃	P-42	25	Vb	〃
	4	〃	〃	P-93	51	Ⅲb-3	〃	F-109	30	〃	〃	P-44	26	Vb	〃
	5	〃	SP-6覆土		52	Ⅲb-3	〃	F-112	31	〃	〃		27	Vb	〃
	6	〃	〃		53	Ⅲb-3	〃	F-113	32	〃	〃		28	Vb	〃
	7	〃	〃		54	Ⅲb-3	〃		33	〃	〃		29	Vb	〃
	8	〃	SP-4覆土		55	Ⅲb-3	〃		34	Ⅲb-3	焼土中		30	Vb	〃
P-8	1	Ⅲb-3	覆土		56	Ⅲb-3	〃		35	Ⅲb-3	焼土中		31	Vb	〃
	2	〃	〃		57	Ⅲb-3	〃		36	Ⅲb-3	焼土中		32	Vb	〃
	3	〃	〃		58	Ⅲb-3	〃	FCNa.2	1	Ⅲb-3	焼土上面		33	Vb	〃
	4	〃	〃		59	Ⅲb-3	〃		2	〃	〃		34	Vb	〃
	5	〃	揚子土		60	Ⅲb-3	〃		3	〃	〃		35	Vb	〃
	6	〃	覆土		61	Ⅲb-3	〃		4	〃	〃		36	Vb	〃
	7	〃	〃		62	Ⅲb-3	〃		5	〃	〃		37	Vb	〃
	8	Ⅳa	覆土		63	Ⅲb-3	〃		6	〃	〃		38	Vb	〃
P-11	9	Ⅲb-3	覆土		64	Ⅲb-3	〃		7	〃	〃		39	Vb	〃
P-13	10	Ⅲb-3	覆土1層		65	Ⅲb-3	〃		8	〃	〃		40	Vb	〃
	11	〃	〃		66	Ⅲb-3	〃		9	〃	〃		41	Vb	〃
	12	〃	〃		67	Ⅲb-3	〃		10	Ⅲa	〃		42	Vb	〃
	13	〃	覆土下層		68	Ⅲb-3	〃		11	Ⅲb-3	〃		43	Vb	〃
	14	〃	〃		69	Ⅲb-3	〃		12	〃	〃		44	Vb	〃
	15	〃	〃		70	Ⅲb-3	〃		13	〃	〃		45	Vb	〃
	16	〃	〃		71	Ⅲb-3	〃		14	〃	〃		46	Vb	〃
	17	〃	〃		72	Ⅲb-3	〃		15	〃	〃		47	Vb	〃
	18	〃	〃		73	Ⅲb-3	〃		16	〃	〃		48	Vb	〃
	19	〃	〃		74	Ⅲb-3	〃		17	〃	〃		49	Vb	〃
P-20	20	Ⅲb-3	覆土		75	Ⅲb-3	〃		18	〃	〃		50	Vb	〃
	21	〃	〃		76	Ⅲb-3	〃		19	〃	〃		51	Vb	〃
	22	〃	〃		77	Ⅲb-3	〃		20	〃	〃		52	Vb	〃
	23	〃	〃		78	Ⅲb-3	〃		21	〃	〃		53	Vb	〃
	24	〃	〃		79	Ⅲb-3	〃		22	〃	〃		54	Vb	〃
	25	〃	〃		80	Ⅲb-3	〃		23	〃	〃		55	Vb	〃
	26	〃	〃		81	Ⅲb-3	〃		24	〃	〃		56	Vb	〃
	27	〃	〃		82	Ⅲb-3	〃		25	〃	〃		57	Vb	〃
	28	〃	〃		83	Ⅲb-3	〃		26	〃	〃		58	Vb	〃
	29	〃	〃		84	Ⅲb-3	〃		27	〃	〃		59	Vb	〃
	30	〃	〃		85	Ⅲb-3	〃		28	〃	〃		60	Vb	〃
	31	〃	〃		86	Ⅲb-3	〃		29	〃	〃		61	Vb	〃
	32	〃	〃		87	Ⅲb-3	〃		30	〃	〃		62	Vb	〃
	33	〃	〃		88	Ⅲb-3	〃		31	〃	〃		63	Vb	〃
	34	〃	〃		89	Ⅲb-3	〃		32	〃	〃		64	Vb	〃
	35	〃	〃		90	Ⅲb-3	〃		33	〃	〃		65	Vb	〃
	36	〃	〃		91	Ⅲb-3	〃		34	〃	〃		66	Vb	〃
	37	〃	〃		92	Ⅲb-3	〃		35	〃	〃		67	Vb	〃
	38	〃	〃		93	Ⅲb-3	〃		36	〃	〃		68	Vb	〃
	39	〃	〃		94	Ⅲb-3	〃		37	〃	〃		69	Vb	〃
	40	〃	〃		95	Ⅲb-3	〃		38	〃	〃		70	Vb	〃
	41	〃	〃		96	Ⅲb-3	〃		39	〃	〃		71	Vb	〃
	42	〃	〃		97	Ⅲb-3	〃		40	〃	〃		72	Vb	〃
	43	〃	〃		98	Ⅲb-3	〃		41	〃	〃		73	Vb	〃
	44	〃	〃		99	Ⅲb-3	〃		42	〃	〃		74	Vb	〃
	45	〃	〃		100	Ⅲb-3	〃		43	〃	〃		75	Vb	〃
	46	〃	〃		101	Ⅲb-3	〃		44	〃	〃		76	Vb	〃
	47	〃	〃		102	Ⅲb-3	〃		45	〃	〃		77	Vb	〃
	48	〃	〃		103	Ⅲb-3	〃		46	〃	〃		78	Vb	〃
	49	〃	〃		104	Ⅲb-3	〃		47	〃	〃		79	Vb	〃
	50	〃	〃		105	Ⅲb-3	〃		48	〃	〃		80	Vb	〃
	51	〃	〃		106	Ⅲb-3	〃		49	〃	〃		81	Vb	〃
	52	〃	〃		107	Ⅲb-3	〃		50	〃	〃		82	Vb	〃
	53	〃	〃		108	Ⅲb-3	〃		51	〃	〃		83	Vb	〃
	54	〃	〃		109	Ⅲb-3	〃		52	〃	〃		84	Vb	〃
	55	〃	〃		110	Ⅲb-3	〃		53	〃	〃		85	Vb	〃
	56	〃	〃		111	Ⅲb-3	〃		54	〃	〃		86	Vb	〃
	57	〃	〃		112	Ⅲb-3	〃		55	〃	〃		87	Vb	〃
	58	〃	〃		113	Ⅲb-3	〃		56	〃	〃		88	Vb	〃
	59	〃	〃		114	Ⅲb-3	〃		57	〃	〃		89	Vb	〃
	60	〃	〃		115	Ⅲb-3	〃		58	〃	〃		90	Vb	〃
	61	〃	〃		116	Ⅲb-3	〃		59	〃	〃		91	Vb	〃
	62	〃	〃		117	Ⅲb-3	〃		60	〃	〃		92	Vb	〃
	63	〃	〃		118	Ⅲb-3	〃		61	〃	〃		93	Vb	〃
	64	〃	〃		119	Ⅲb-3	〃		62	〃	〃		94	Vb	〃
	65	〃	〃		120	Ⅲb-3	〃		63	〃	〃		95	Vb	〃
	66	〃	〃		121	Ⅲb-3	〃		64	〃	〃		96	Vb	〃
	67	〃	〃		122	Ⅲb-3	〃		65	〃	〃		97	Vb	〃
	68	〃	〃		123	Ⅲb-3	〃		66	〃	〃		98	Vb	〃
	69	〃	〃		124	Ⅲb-3	〃		67	〃	〃		99	Vb	〃
	70	〃	〃		125	Ⅲb-3	〃		68	〃	〃		100	Vb	〃
	71	〃	〃		126	Ⅲb-3	〃		69	〃	〃		101	Vb	〃
	72	〃	〃		127	Ⅲb-3	〃		70	〃	〃		102	Vb	〃
	73	〃	〃		128	Ⅲb-3	〃		71	〃	〃		103	Vb	〃
	74	〃	〃		129	Ⅲb-3	〃		72	〃	〃		104	Vb	〃
	75	〃	〃		130	Ⅲb-3	〃		73	〃	〃		105	Vb	〃
	76	〃	〃		131	Ⅲb-3	〃		74	〃	〃		106	Vb	〃
	77	〃	〃		132	Ⅲb-3	〃		75	〃	〃		107	Vb	〃
	78	〃	〃		133	Ⅲb-3	〃		76	〃	〃		108	Vb	〃
	79	〃	〃		134	Ⅲb-3	〃		77	〃	〃		109	Vb	〃
	80	〃	〃		135	Ⅲb-3	〃		78	〃	〃		110	Vb	〃
	81	〃	〃		136	Ⅲb-3	〃		79	〃	〃		111	Vb	〃
	82	〃	〃		137	Ⅲb-3	〃		80	〃	〃		112	Vb	〃
	83	〃	〃		138	Ⅲb-3	〃		81	〃	〃		113	Vb	〃
	84	〃	〃		139	Ⅲb-3	〃		82	〃	〃		114	Vb	〃
	85	〃	〃		140	Ⅲb-3	〃		83	〃	〃		115	Vb	〃
	86	〃	〃		141	Ⅲb-3	〃		84	〃	〃		116	Vb	〃
	87	〃	〃		142	Ⅲb-3	〃		85	〃	〃		117	Vb	〃
	88	〃	〃		143	Ⅲb-3	〃		86	〃	〃		118		

Ⅲ 美々3遺跡第Ⅱ黒色土層の調査

図番	名	特	層位	大きさ(mm)	直さ(μ)	材質	分類	図番	名	特	層位	大きさ(mm)	直さ(μ)	材質	分類	図番	名	特	層位	大きさ(mm)	直さ(μ)	材質	分類	
H-1-8	1	石礫	礫土	27.5 x 18.7 x 3.3	1.2	Obs	---	H-3-1	1	石礫	礫土	33.8 x (13.0) x 4.5	(1.0)	Obs	---	1.3	石礫	礫土	59.7 x 39.8 x 9.0	17.1	---	---	---	
	2	石礫	礫土	41.9 x 10.4 x 10.4	2.1	---	---		2	石礫	礫土	55.3 x 26.4 x 9.1	24.0	Gr-Mud	---	1.4	石礫	礫土	67.0 x 40.4 x 11.8	26.7	---	---	---	
	3	スクレイパー	礫土	49.4 x 29.0 x 10.0	12.9	---	---	H-3-2	1	石礫	礫土	29.3 x 12.8 x 2.7	0.7	Obs	---	1.5	石礫	礫土	67.7 x 32.8 x 11.0	22.8	---	---	---	
	4	石礫	礫土	128.2 x 44.3 x 12.4	134	Gr-Mud	B 3		2	石礫・ナイフ	礫土	32.7 x 20.9 x 3.0	1.3	---	---	1.6	石礫	礫土	67.0 x 40.4 x 11.8	26.7	---	---	---	
	5	砂石	礫土	110.7 x 47.2 x 19.1	210	Sa	B 1	H-3-5	1	砂石	礫土	41.2 x 42.4 x 30.7	74	Br-Sch	A 1	1.7	石礫	礫土	56.8 x 34.0 x 7.9	14.0	---	---	---	
H-2-1	1	石重	灰産	(186.6) x (183.6 x 86.7 x 3531)		And	---		2	砂石	礫土	(46.6) x (16.2) x 21.8	(27)	Sa	?	1.8	石礫	礫土	(51.6) x 34.8 x 6.5	(10.0)	---	---	---	
H-2-3	1	石片	礫土	(137.8) x 31.6 x 15.7	(159)	Br-Sch	C 2	H-3-6	1	砂石	礫土	94.4 x 52.5 x 44.3	254	To	?	1.9	石礫	礫土	25.6 x 13.6 x 2.6	0.6	---	---	---	
	2	砂石	礫土	140.8 x 109.2 x 51.4	1230	Per	A 4	H-3-8	1	石礫	礫土	38.0 x 13.5 x 4.3	1.7	Obs	---	2.0	石礫	礫土	(78.0) x 40.2 x 15.0	70	Br-Sch	B 1	---	
H-2-4	1	石片未製品	礫土	64.6 x 32.6 x 16.2	79	Gr-Mud	A31b		2	石礫・ナイフ	礫土	104.7 x 50.6 x 37.9	422	Gr-Mud	Allbc	2.1	石礫	礫土	120.9 x 96.7 x 45.5	823	Can	---	---	
	2	砂石	礫土	(10.58) x 65.0 x 101.9	915	And	---	H-3-9	1	石礫	礫土	191.7 x 159.0 x 73.8	2123	Sa	---	2.2	石礫	礫土	(99.8) x (66.8) x (25.1)	237	Gr-Mud	A21bd	---	
H-2-5	1	石礫・ナイフ	礫土	33.7 x 22.0 x 5.1	(32.0)	Obs	---		2	石礫	礫土	191.7 x 159.0 x 73.8	2123	Sa	---	2.3	石礫	礫土	130.8 x 45.2 x 19.3	248	Br-Sch	B 2	---	
	2	石礫	礫土	61.8 x 47.7 x 13.6	24.8	---	---	H-4-0	1	石礫・ナイフ	礫土	41.1 x 21.5 x 6.0	4.1	Obs	---	中期の礫土	1	スクレイパー	礫土	(41.3) x 24.8 x 8.3	(5.6)	Obs	---	---
	3	石礫	礫土	61.5 x 47.7 x 10.3	15.6	---	---		2	砂石	礫土	(102.2) x (19.3) x 28.9	440	Sa	B 2		2	石礫	礫土	57.2 x 22.8 x 8.2	7.3	---	---	---
H-2-6	1	石片	礫土	(42.0) x (49.7) x (14.4)	(84)	Br-Sch	A 2	H-4-5	1	石礫	礫土	36.6 x 11.0 x 3.8	0.9	Obs	---	3	石礫	礫土	74.2 x 32.0 x 5.5	12.0	---	---	---	
	2	砂石	礫土	(59.8) x (31.1) x (30.8)	(66)	Rhy	A 3		2	石礫	礫土	38.1 x 14.0 x 5.2	1.5	---	---	4	石礫	礫土	86.5 x 32.0 x 11.8	22.9	---	---	---	
H-2-7	1	スクレイパー	礫土	44.0 x 21.1 x 8.7	5.6	Obs	---	中期の礫土	1	石礫	礫土	283.5 x 117.9 x 84.9	5250	Sa	---	晩期の土層	1	スクレイパー	礫土	25.1 x 23.8 x 9.0	4.4	Obs	---	---
H-2-8	1	石礫・ナイフ	礫土	46.3 x 21.7 x 6.7	6.7	Obs	---		2	砂石	礫土	244.5 x 226.5 x 120	8000	Per	A 5	2	砂石	礫土	152.3 x 138 x 128.4	7392	And	A 1 ?	---	
H-2-9	1	石礫・ナイフ	礫土	49.0 x 26.2 x 7.3	6.9	Obs	---		3	砂石	礫土	104.5 x 79.3 x 75	946	Gr-Mud	A31ab	3	砂石	礫土	53.7 x 108.6 x 18.9	134	Sa	B 2	---	
H-3-0	1	石礫	礫土	26.9 x 14.8 x 2.2	0.6	Obs	---		4	石片未製品	礫土	(84.0) x (58.3) x 11.8	(104)	Gr-Mud	A31b	4	砂石	礫土	208.8 x 132.0 x 76.8	3448	Gio	---	---	
	2	石礫・ナイフ	礫土	49.0 x 23.8 x 4.0	2.6	---	---		5	砂石	礫土	(83.7) x 31.6 x 15.0	77	---	---	5	砂石	礫土	251.1 x 162.0 x 95.7	5150	And	---	---	
	3	石礫	礫土	83.5 x (30.8) x 5.5	(6.9)	---	---		6	砂石	礫土	240.3 x 204.6 x 113.4	6000	---	---	6	砂石	礫土	(99.7) x 43.2 x 2.0	122	Gr-Sch	飯用	---	
	4	石礫	礫土	(54.8) x 38.3 x 8.5	(9.0)	---	---		7	砂石	礫土	274.8 x 204.3 x 119.1	9250	---	---	7	砂石	礫土	261.6 x 164.4 x 101.4	6500	And	---	---	
	5	スクレイパー	礫土	40.5 x 15.0 x 6.4	3.3	---	---		8	石礫・ナイフ	礫土	46.8 x 26.5 x 6.8	6.1	Obs	---	8	砂石	礫土	77.6 x 18.4 x 25.5	70	---	C	---	
	6	石片	礫土	160.8 x 48.9 x 25.3	343	Br-Sch	B 3		9	スクレイパー	礫土	47.7 x 14.1 x 5.4	5.6	---	---	9	砂石	礫土	---	---	---	---	---	
	7	砂石	礫土	128.4 x 34.1 x 90.6	96	---	B 1		10	石礫・ナイフ	礫土	45.0 x 24.0 x 8.5	7.7	---	---	10	砂石	礫土	---	---	---	---	---	
	8	砂石	礫土	(185.4) x 111.9 x 25.6	(1182)	Sa	B 1		11	石礫	礫土	47.9 x 29.0 x 8.8	8.3	---	---	11	砂石	礫土	---	---	---	---	---	
									12															

表Ⅲ-55 包含層の掲載土器一覽  
Ⅱ群a-1類、a-2類、Ⅲ群a類、b-1類

番号	発掘区	番号	発掘区										
1	G <sub>1</sub> -63-15	3	H <sub>1</sub> -63-22	5	G <sub>2</sub> -63-75	7	G <sub>1</sub> -64-75	9	G <sub>1</sub> -64-25	10	G <sub>1</sub> -63-06-15-16, (H-10-18)		
2	G <sub>1</sub> -64-20	4	G <sub>1</sub> -63-92	6	G <sub>2</sub> -63-74	8	G <sub>1</sub> -64-25						

Ⅲ群b-3類

番号	発掘区	番号	発掘区	番号	発掘区	番号	発掘区	番号	発掘区	番号	発掘区	番号	発掘区
1	G <sub>1</sub> -63-12-14-22-40	26	G <sub>2</sub> -63-13-30	74	G <sub>1</sub> -63-09	122	G <sub>1</sub> -63-89	173	G <sub>1</sub> -64-25	225	G <sub>1</sub> -63-16	278	G <sub>1</sub> -64-54
	G <sub>1</sub> -64-52	27	G <sub>1</sub> -64-45		G <sub>2</sub> -63-29	123	G <sub>1</sub> -63-24	174	G <sub>1</sub> -63-11	226	G <sub>1</sub> -63-98	279	G <sub>1</sub> -64-71
2	G <sub>1</sub> -62	28	G <sub>1</sub> -63-62	75	G <sub>2</sub> -64-11	124	G <sub>1</sub> -63-69		G <sub>1</sub> -64-55	227	G <sub>1</sub> -63-99	280	G <sub>1</sub> -63-18
	G <sub>1</sub> -63-30	29	G <sub>1</sub> -63-25	76	G <sub>1</sub> -63-14		G <sub>1</sub> -64-44	175	G <sub>2</sub> -63-88	228	G <sub>1</sub> -64-61	281	G <sub>1</sub> -63-79
	G <sub>1</sub> -63-43	30	G <sub>1</sub> -63-35	77	G <sub>2</sub> -63-35	125	G <sub>1</sub> -63-88		G <sub>2</sub> -63-05	229	G <sub>1</sub> -63-45	282	G <sub>1</sub> -63-79
	G <sub>1</sub> -62-71-72, (H-2-15	31	G <sub>1</sub> -63-79	78	G <sub>1</sub> -64-72	126	G <sub>1</sub> -64-90	176	G <sub>1</sub> -63-43	230	G <sub>1</sub> -63-01	283	G <sub>2</sub> -63-06-17
	P-7)	32	G <sub>1</sub> -63-96	79	G <sub>2</sub> -63-26	127	G <sub>1</sub> -63-15	177	G <sub>1</sub> -64-32	231	G <sub>1</sub> -63-82	284	G <sub>1</sub> -64-15
3	G <sub>1</sub> -63-34	33	G <sub>2</sub> -63-12-53	80	G <sub>2</sub> -64-52	128	G <sub>1</sub> -64-82	178	G <sub>1</sub> -63-88	232	G <sub>1</sub> -63-62	285	G <sub>1</sub> -63-06
	G <sub>1</sub> -63-24	34	G <sub>1</sub> -64-72	81	G <sub>1</sub> -63-80-82	129	G <sub>1</sub> -63-87	179	G <sub>2</sub> -63-12	233	G <sub>1</sub> -63-97	286	G <sub>2</sub> -63-06
	G <sub>1</sub> -64-13	35	G <sub>2</sub> -63-23-31	82	G <sub>1</sub> -64-44-45	130	G <sub>1</sub> -63-97	180	G <sub>1</sub> -63-15	234	G <sub>1</sub> -64-71	287	G <sub>1</sub> -64-34
	G <sub>1</sub> -64-22)	36	G <sub>2</sub> -63-25-35	83	G <sub>1</sub> -64-35	131	G <sub>1</sub> -63-91	181	G <sub>1</sub> -63-62	235	G <sub>1</sub> -63-11	288	G <sub>1</sub> -64-64
	G <sub>1</sub> -62-57-58-68-78-	37	G <sub>1</sub> -64-44	84	G <sub>1</sub> -63-15	132	G <sub>2</sub> -63-15	182	G <sub>2</sub> -64-54	236	G <sub>1</sub> -63-14	289	G <sub>1</sub> -63-25
	G <sub>1</sub> -63-29	38	G <sub>1</sub> -64-53	85	G <sub>1</sub> -64-46-55	133	G <sub>1</sub> -64-81	183	G <sub>2</sub> -63-27	237	G <sub>1</sub> -63-15	290	G <sub>1</sub> -63-12-15-
	G <sub>1</sub> -64-42-	39	G <sub>2</sub> -63-27	86	G <sub>1</sub> -64-25	134	G <sub>1</sub> -64-42	184	G <sub>1</sub> -64-15	238	G <sub>1</sub> -63-14	291	G <sub>1</sub> -63-89
	G <sub>1</sub> -63-50-	40	G <sub>2</sub> -63-38	87	G <sub>2</sub> -63-11-15-	135	G <sub>1</sub> -63-89	185	G <sub>2</sub> -63-09-47	239	G <sub>1</sub> -63-14	292	G <sub>1</sub> -63-39
	G <sub>1</sub> -62-56-60	41	G <sub>2</sub> -64-31	88	G <sub>1</sub> -64-60	136	G <sub>2</sub> -63-33-81-	186	G <sub>1</sub> -64-73	240	G <sub>1</sub> -63-26	293	G <sub>1</sub> -64-55
	G <sub>1</sub> -63-70-73	42	G <sub>2</sub> -63-16	89	G <sub>1</sub> -64-60	137	G <sub>1</sub> -63-46	187	G <sub>1</sub> -64-34	241	G <sub>1</sub> -63-24	294	G <sub>1</sub> -64-71
	G <sub>1</sub> -63-80-84	43	G <sub>1</sub> -64-82	90	G <sub>2</sub> -63-22	138	G <sub>1</sub> -64-44	188	G <sub>1</sub> -64-44	242	G <sub>2</sub> -63-09-24	295	G <sub>1</sub> -63-79
	G <sub>1</sub> -63-24	44	G <sub>1</sub> -63-06	91	G <sub>2</sub> -63-44	139	G <sub>1</sub> -64-51	189	G <sub>2</sub> -63-05	243	G <sub>1</sub> -63-37-47	296	G <sub>1</sub> -63-25
	G <sub>1</sub> -63-62-	45	G <sub>1</sub> -64-35	92	G <sub>1</sub> -63-82	140	G <sub>1</sub> -63-16-26	190	G <sub>1</sub> -63-78	244	G <sub>1</sub> -63-14	297	G <sub>1</sub> -63-47
	G <sub>1</sub> -63-88-	46	G <sub>1</sub> -64-71-91	93	G <sub>2</sub> -64-00	141	G <sub>1</sub> -63-15	191	G <sub>1</sub> -63-25	245	G <sub>1</sub> -64-45	298	G <sub>1</sub> -63-87
	G <sub>1</sub> -64-71,	47	G <sub>1</sub> -63-12	94	G <sub>1</sub> -63-11	142	G <sub>1</sub> -64-42	192	G <sub>2</sub> -63-25	246	G <sub>1</sub> -64-55	299	G <sub>1</sub> -63-12
	G <sub>1</sub> -63-27-	48	G <sub>1</sub> -63-17	95	G <sub>1</sub> -64-31	143	G <sub>1</sub> -63-25	193	G <sub>1</sub> -64-54	247	G <sub>1</sub> -64-55	300	G <sub>1</sub> -63-05
	G <sub>1</sub> -64-00-	49	G <sub>1</sub> -63-42	96	G <sub>1</sub> -64-35	144	G <sub>1</sub> -63-25	194	G <sub>1</sub> -63-14	248	G <sub>1</sub> -64-43	301	G <sub>2</sub> -63-22
	G <sub>1</sub> -63-15	50	G <sub>1</sub> -63-82	97	G <sub>1</sub> -63-17	145	G <sub>2</sub> -63-05	195	G <sub>1</sub> -64-55	249	G <sub>1</sub> -63-15	302	G <sub>1</sub> -63-87
	G <sub>1</sub> -64-71	51	G <sub>1</sub> -63-82	98	G <sub>1</sub> -63-83	146	G <sub>1</sub> -63-40	196	G <sub>1</sub> -64-62	250	G <sub>1</sub> -63-15	303	G <sub>1</sub> -63-89

330	G <sub>1</sub> -63-19	356	G <sub>2</sub> -63-48	380	G <sub>1</sub> -63-41	403	G <sub>1</sub> -63-25	428	G <sub>2</sub> -64-54	452	G <sub>1</sub> -64-34	475	G <sub>2</sub> -64-55
331	G <sub>1</sub> -63-93	357	G <sub>2</sub> -63-17	381	G <sub>2</sub> -63-67	404	G <sub>1</sub> -64-70	429	G <sub>1</sub> -64-43	453	G <sub>1</sub> -63-79	476	G <sub>2</sub> -63-07-26-44
332	G <sub>1</sub> -64-64	358	G <sub>1</sub> -63-88	382	G <sub>1</sub> -63-43	405	G <sub>2</sub> -64-44	430	G <sub>1</sub> -63-87	454	G <sub>1</sub> -63-59	477	G <sub>1</sub> -63-92
334	G <sub>2</sub> -63-28	359	G <sub>1</sub> -64-70	383	G <sub>2</sub> -64-24	406	G <sub>1</sub> -63-87	431	G <sub>1</sub> -63-87	455	G <sub>1</sub> -63-51	478	G <sub>2</sub> -63-22
335	G <sub>1</sub> -63-29	360	G <sub>2</sub> -64-02	384	G <sub>1</sub> -63-15	407	G <sub>1</sub> -64-71	432	G <sub>1</sub> -64-35	456	G <sub>2</sub> -63-59-64	479	G <sub>1</sub> -63-17
336	G <sub>1</sub> -64-43	361	G <sub>2</sub> -63-15	385	G <sub>1</sub> -63-98	408	G <sub>1</sub> -64-90	433	G <sub>1</sub> -64-43	457	G <sub>1</sub> -64-24		G <sub>1</sub> -63-71-77-80
	G <sub>2</sub> -64-15	362	G <sub>2</sub> -63-12	386	G <sub>2</sub> -63-23	409	G <sub>2</sub> -64-62	434	G <sub>1</sub> -64-73	458	G <sub>1</sub> -63-52		G <sub>2</sub> -62-38-91-99
337	G <sub>2</sub> -63-36	363	G <sub>2</sub> -64-15	387	G <sub>2</sub> -63-22	410	G <sub>2</sub> -63-52	435	G <sub>1</sub> -63-98	459	G <sub>1</sub> -64-54		G <sub>2</sub> -63-02-13-17-20-25-32-38-39-40-42-72-73
338	G <sub>1</sub> -63-96	364	G <sub>1</sub> -63-95	388	G <sub>2</sub> -63-63	411	G <sub>1</sub> -62-49	436	G <sub>1</sub> -63-79	460	G <sub>1</sub> -64-53		G <sub>1</sub> -62-88
339	G <sub>1</sub> -64-61	365	G <sub>1</sub> -64-94	389	G <sub>1</sub> -63-21	412	G <sub>1</sub> -63-88	437	G <sub>2</sub> -63-09	461	G <sub>2</sub> -64-55		G <sub>1</sub> -62-06
340	G <sub>1</sub> -63-34	366	G <sub>1</sub> -63-25	390	G <sub>1</sub> -63-72	413	G <sub>1</sub> -63-06	438	G <sub>1</sub> -64-90	462	G <sub>1</sub> -63-78		G <sub>1</sub> -62-69
341	G <sub>1</sub> -63-62	367	G <sub>1</sub> -64-64	391	G <sub>1</sub> -63-64	414	G <sub>1</sub> -64-52	439	G <sub>1</sub> -63-97	463	G <sub>1</sub> -64-12		G <sub>1</sub> -64-55
342	G <sub>1</sub> -63-24	368	G <sub>1</sub> -63-44	392	G <sub>1</sub> -63-88	415	G <sub>1</sub> -63-24	440	G <sub>1</sub> -64-91	464	G <sub>2</sub> -63-13		G <sub>1</sub> -64-24
343	G <sub>1</sub> -64-61	369	G <sub>2</sub> -64-35	393	G <sub>2</sub> -63-51	416	G <sub>1</sub> -63-98	441	G <sub>1</sub> -64-80	465	G <sub>1</sub> -63-48		G <sub>1</sub> -63-16
345	G <sub>1</sub> -63-14	369	G <sub>2</sub> -63-27	394	G <sub>1</sub> -64-44	417	G <sub>1</sub> -64-65	442	G <sub>1</sub> -64-91	466	G <sub>1</sub> -64-41		G <sub>1</sub> -62-88
346	G <sub>2</sub> -63-38	370	G <sub>1</sub> -64-61	395	G <sub>1</sub> -63-31	418	G <sub>2</sub> -63-24	443	G <sub>1</sub> -64-64	467	G <sub>2</sub> -63-24		G <sub>1</sub> -62-88
347	G <sub>1</sub> -64-44	371	G <sub>1</sub> -64-80	396	G <sub>1</sub> -64-63	419	G <sub>1</sub> -64-53	444	G <sub>2</sub> -62-22	468	G <sub>1</sub> -63-33		G <sub>1</sub> -62-69
348	G <sub>1</sub> -64-53	372	G <sub>1</sub> -63-42	397	G <sub>1</sub> -63-62	420	G <sub>1</sub> -64-91	445	G <sub>1</sub> -63-95	469	G <sub>2</sub> -63-22		G <sub>1</sub> -64-55
349	G <sub>1</sub> -64-81	373	G <sub>1</sub> -63-98		G <sub>1</sub> -64-53	421	G <sub>1</sub> -64-91	446	G <sub>1</sub> -63-79	470	G <sub>2</sub> -63-23		G <sub>1</sub> -64-24
350	G <sub>1</sub> -63-86	374	G <sub>1</sub> -64-01		G <sub>2</sub> -64-01	422	G <sub>1</sub> -63-34	447	G <sub>1</sub> -64-71	471	G <sub>1</sub> -64-05		G <sub>1</sub> -63-16
351	G <sub>2</sub> -64-20	375	G <sub>2</sub> -63-16	398	G <sub>1</sub> -63-15	423	G <sub>2</sub> -64-64	448	G <sub>2</sub> -63-72	472	G <sub>1</sub> -64-43		G <sub>1</sub> -63-89
352	G <sub>1</sub> -64-43	376	G <sub>2</sub> -63-97	399	G <sub>1</sub> -63-25-31	424	G <sub>1</sub> -64-43	449	G <sub>2</sub> -63-13	473	G <sub>2</sub> -64-55		G <sub>1</sub> -63-98
353	G <sub>1</sub> -63-25	377	G <sub>1</sub> -64-64	400	G <sub>2</sub> -64-13	425	G <sub>2</sub> -63-05-06	450	G <sub>1</sub> -64-90	474	G <sub>2</sub> -64-55		
354	G <sub>1</sub> -64-61	378	G <sub>1</sub> -64-55	401	G <sub>2</sub> -63-16	426	G <sub>1</sub> -63-35	451	G <sub>1</sub> -64-35				
355	G <sub>2</sub> -63-16	379	G <sub>1</sub> -64-15	402	G <sub>2</sub> -63-05	427	G <sub>1</sub> -63-33						

IV群a類、b類、c類

番号	発掘区	番号	発掘区	番号	発掘区	番号	発掘区	番号	発掘区	番号	発掘区	番号	発掘区
1	G <sub>2</sub> -64-65, (H-39-40)	5	G <sub>2</sub> -64-74	11	G <sub>2</sub> -63-36	14	G <sub>2</sub> -64-63	20	G <sub>2</sub> -64-53	26	G <sub>1</sub> -64-04	32	G <sub>2</sub> -63-53, G <sub>2</sub> -64-55, H <sub>1</sub> -63-21
2	G <sub>2</sub> -64-65, (H-39-40)	7	G <sub>2</sub> -63-26	13	G <sub>1</sub> -63-88-98, G <sub>2</sub> -63-07-08-09, 12-17-18-19, 22-23	16	G <sub>1</sub> -63-89	22	G <sub>2</sub> -64-23	28	G <sub>2</sub> -64-21		
3	G <sub>2</sub> -64-65	8	G <sub>2</sub> -64-70			17	G <sub>1</sub> -64-00-02	23	F <sub>2</sub> -64-95	29	F <sub>2</sub> -64-95		
4	G <sub>2</sub> -64-44	9	G <sub>2</sub> -64-73			18	G <sub>1</sub> -63-06	24	F <sub>2</sub> -64-95	30	G <sub>2</sub> -64-73		
		10	G <sub>1</sub> -63-88			19	G <sub>2</sub> -64-34	25	F <sub>2</sub> -64-95	31	H <sub>1</sub> -63-24		

V群b類

番号	発掘区	番号	発掘区	番号	発掘区	番号	発掘区	番号	発掘区	番号	発掘区	番号	発掘区	番号	発掘区
1	G <sub>1</sub> -64-24-34-38	18	G <sub>1</sub> -63-68-77-78	47	G <sub>1</sub> -64-02	79	G <sub>1</sub> -64-24	110	G <sub>1</sub> -64-43	142	G <sub>1</sub> -64-34		24-35		
2	G <sub>1</sub> -64-43-44-53	19	G <sub>2</sub> -64-74	48	G <sub>1</sub> -64-40	80	G <sub>1</sub> -63-98	111	G <sub>1</sub> -64-53	143	G <sub>1</sub> -64-41		176	G <sub>1</sub> -64-32	
3	G <sub>1</sub> -63-19-29	20	G <sub>2</sub> -64-55	49	G <sub>1</sub> -64-53	81	G <sub>1</sub> -64-44	112	G <sub>1</sub> -64-55	144	G <sub>2</sub> -63-92		177	G <sub>1</sub> -63-58	
	G <sub>1</sub> -64-10, (P-20)	21	G <sub>2</sub> -64-74	50	G <sub>1</sub> -64-43	82	G <sub>1</sub> -64-33	113	G <sub>2</sub> -63-74	145	G <sub>1</sub> -64-40		178	G <sub>1</sub> -63-74	
4	G <sub>2</sub> -63-76	22	G <sub>2</sub> -64-74	51	G <sub>1</sub> -64-11	83	G <sub>1</sub> -64-32	114	G <sub>1</sub> -64-40	146	G <sub>1</sub> -64-50			G <sub>2</sub> -63-87	
5	G <sub>1</sub> -64-34-44	23	G <sub>2</sub> -64-55	52	G <sub>1</sub> -64-42	84	G <sub>1</sub> -63-56	115	G <sub>1</sub> -64-43	147	G <sub>1</sub> -64-21		179	G <sub>2</sub> -63-87	
6	G <sub>1</sub> -64-43, (F-18)	24	G <sub>1</sub> -63-13-36	53	G <sub>1</sub> -64-53	85	G <sub>2</sub> -64-75	116	G <sub>1</sub> -64-34	148	G <sub>1</sub> -64-40		180	G <sub>1</sub> -64-31	
7	G <sub>1</sub> -64-40-41-50-51	25	G <sub>2</sub> -64-75	54	G <sub>1</sub> -64-53	86	G <sub>1</sub> -64-31	117	G <sub>1</sub> -63-19	149	G <sub>1</sub> -64-44		181	G <sub>1</sub> -64-33	
8	G <sub>1</sub> -64-34-44	26	G <sub>2</sub> -64-64	55	G <sub>2</sub> -64-74	87	G <sub>1</sub> -64-32	118	G <sub>1</sub> -64-10	150	G <sub>1</sub> -64-44		182	G <sub>1</sub> -64-42	
9	G <sub>1</sub> -64-64	27	G <sub>2</sub> -64-55	56	G <sub>1</sub> -64-21	88	G <sub>1</sub> -64-40	119	G <sub>1</sub> -64-43	151	G <sub>1</sub> -63-47		183	G <sub>1</sub> -63-78	
10	G <sub>1</sub> -64-64	28	G <sub>2</sub> -64-74	57	G <sub>1</sub> -64-34	89	G <sub>1</sub> -63-77-87	120	G <sub>1</sub> -64-10	152	G <sub>1</sub> -64-34		184	G <sub>1</sub> -64-42	
11	G <sub>1</sub> -64-24-33	29	G <sub>1</sub> -64-21-22	58	G <sub>1</sub> -64-44	90	G <sub>1</sub> -64-44	121	G <sub>1</sub> -64-44	153	G <sub>1</sub> -64-43		185	G <sub>1</sub> -64-20	
12	G <sub>1</sub> -64-53, (H-29, F-29)	30	F <sub>2</sub> -64-85	59	G <sub>1</sub> -64-35-44	91	G <sub>1</sub> -64-35-44	122	G <sub>1</sub> -64-21	154	G <sub>1</sub> -64-42		186	G <sub>1</sub> -64-35	
13	G <sub>1</sub> -63-77	31	G <sub>1</sub> -64-43-52-54	60	G <sub>1</sub> -64-35-44	92	G <sub>1</sub> -63-57-77	123	G <sub>1</sub> -64-35	155	G <sub>1</sub> -64-22		187	G <sub>1</sub> -64-10	
14	G <sub>1</sub> -64-43-44-53	32	G <sub>1</sub> -63-57	61	G <sub>2</sub> -64-24-34	93	G <sub>1</sub> -64-41	124	G <sub>1</sub> -64-14	156	G <sub>1</sub> -64-05		188	G <sub>1</sub> -63-19	
15	G <sub>1</sub> -64-11-21-23-24-43	33	G <sub>1</sub> -64-22	62	G <sub>1</sub> -64-31	94	G <sub>1</sub> -64-34-44	125	G <sub>1</sub> -64-34	157	G <sub>1</sub> -64-41		189	G <sub>1</sub> -64-42	
16	G <sub>1</sub> -64-45	34	G <sub>1</sub> -63-57	63	G <sub>1</sub> -64-51	95	G <sub>1</sub> -64-22	126	G <sub>1</sub> -64-34-43-44	158	G <sub>1</sub> -64-35		190	G <sub>1</sub> -64-13	
17	G <sub>2</sub> -63-56, G <sub>2</sub> -62-88-89	35	G <sub>1</sub> -64-22	64	G <sub>1</sub> -64-51	96	G <sub>1</sub> -63-03-26-66-76	127	G <sub>1</sub> -64-33-34-43	159	G <sub>1</sub> -64-41		191	G <sub>1</sub> -64-41	
		36	G <sub>1</sub> -64-15	65	G <sub>1</sub> -64-21	97	G <sub>1</sub> -64-34	43		160	G <sub>1</sub> -64-41		192	G <sub>1</sub> -64-24	
		37	G <sub>1</sub> -64-14-24-41-43	66	G <sub>1</sub> -64-40	98	G <sub>1</sub> -63-28-50-57	128	G <sub>1</sub> -64-10	161	G <sub>1</sub> -64-24		193	G <sub>1</sub> -64-32	
		38	G <sub>1</sub> -64-34	67	G <sub>1</sub> -64-12	99	G <sub>1</sub> -64-21-32-42	129	G <sub>1</sub> -64-30	162	G <sub>1</sub> -63-77-78		194	G <sub>1</sub> -63-09	
		39	G <sub>1</sub> -64-24	68	G <sub>1</sub> -63-56-56	100	G <sub>1</sub> -64-20	130	G <sub>1</sub> -64-11	163	G <sub>1</sub> -64-43		195	G <sub>1</sub> -64-04	
		40	G <sub>1</sub> -64-24	69	G <sub>1</sub> -64-01	101	G <sub>1</sub> -64-20	131	G <sub>1</sub> -64-20	164	G <sub>1</sub> -64-53		196	G <sub>1</sub> -63-59	
		41	G <sub>1</sub> -63-08	70	G <sub>1</sub> -64-00	102	G <sub>1</sub> -64-20	132	G <sub>1</sub> -64-41-42	165	G <sub>1</sub> -64-34		197	G <sub>1</sub> -64-40	
		42	G <sub>1</sub> -64-22	71	G <sub>1</sub> -64-12-39-54	103	G <sub>1</sub> -64-12	133	G <sub>1</sub> -64-41-42	166	G <sub>1</sub> -64-75		198	G <sub>1</sub> -64-22	
		43	G <sub>2</sub> -64-22	72	G <sub>1</sub> -63-98	104	G <sub>1</sub> -64-25	134	G <sub>1</sub> -64-10	167	G <sub>2</sub> -63-91		199	G <sub>1</sub> -64-53	
		44	G <sub>1</sub> -64-24-25-34	73	G <sub>1</sub> -64-10	105	G <sub>2</sub> -64-43-44	135	G <sub>1</sub> -64-43-44	168	G <sub>1</sub> -64-12-22		200	F <sub>2</sub> -64-95	
		45	G <sub>1</sub> -64-40	74	G <sub>2</sub> -64-44	106	G <sub>2</sub> -64-34-44	136	G <sub>1</sub> -64-44	169	G <sub>1</sub> -64-40		201	G <sub>1</sub> -64-43	
		46	G <sub>1</sub> -64-63	75	G <sub>2</sub> -63-80	107	G <sub>1</sub> -64-40	137	G <sub>1</sub> -64-43	170	G <sub>1</sub> -64-40		202	G <sub>1</sub> -64-04	
				76	G <sub>1</sub> -64-22	108	G <sub>1</sub> -64-43	138	G <sub>1</sub> -64-52	171	G <sub>1</sub> -63-56		203	G <sub>1</sub> -64-20	
				77	G <sub>1</sub> -64-33	109	G <sub>1</sub> -64-44	139	G <sub>1</sub> -64-41	172	G <sub>1</sub> -64-52		204	G <sub>1</sub> -64-11-22	
				78	G <sub>1</sub> -63-95, G <sub>2</sub> -63-05			140	G <sub>1</sub> -64-11	173	G <sub>1</sub> -64-44		205	G <sub>1</sub> -64-41	
								141	G <sub>1</sub> -64-44	174	G <sub>1</sub> -63-46-56		206	G <sub>1</sub> -64-35	
										175	G <sub>1</sub> -64-05-23				

表III-56 包含層の掲載石器一覽

図番	名	発掘区	層位	大きさ(mm)	重さ(g)	材質	図番	名	発掘区	層位	大きさ(mm)	重さ(g)	材質
1	細石刃	H <sub>1</sub> -63-13	II B	27.8 x 36.1 x 11.5	11.8	Obs	30	石楯・ナイフ	G <sub>1</sub> -64-28	II B	72.4 x 39.0 x 7.0	10.7	Obs
2	石鏃	G <sub>1</sub> -63-88		(32.2) x 11.0 x 2.8	(1.0)	"	31	"	G <sub>1</sub> -63-89	"	57.0 x 28.0 x 7.0	6.7	"
3	"	G <sub>1</sub> -64-75		(80.3) x 14.9 x 4.6	(4.5)	Qua-Sh	32	"	G <sub>1</sub> -64-62	"	80.3 x 32.4 x 6.7	14.9	"
4	"	G <sub>1</sub> -64-55		19.5 x 13.0 x 3.8	0.6	Obs	33						

Ⅲ 美々3遺跡第Ⅱ黒色土層の調査

図番	名	種	発掘区	層位	大きさ(mm)			重量(g)	材質	図番	名	種	発掘区	層位	大きさ(mm)			重量(g)	材質
					長さ	短径	最大深								長さ	短径	最大深		
59	スクリューナイフ	G <sub>2</sub> -63-77	"	"	60.8	24.8	7.3	7.0	Obs	97	巖石	G <sub>1</sub> -64-62	IB①	"	129.4	81.7	28.5	472	Gni
60	"	G <sub>1</sub> -63-17	"	"	74.9	26.0	14.8	40.5	Qa-Sh	98	"	G <sub>1</sub> -63-97	IB②	"	132.7	46.3	18.1	212	"
61	"	G <sub>1</sub> -64-35	"	"	60.5	32.5	9.3	22.5	"	99	"	G <sub>1</sub> -63-87	IB③	"	132.3	61.2	26.6	316	Sa
62	"	G <sub>1</sub> -63-95	"	"	68.0	18.0	7.5	7.5	Obs	100	"	G <sub>1</sub> -63-94	D <sub>1</sub>	"	120.0	53.6	43.2	410	"
63	"	G <sub>1</sub> -63-34	"	"	47.0	17.8	6.9	5.2	"	101	"	G <sub>1</sub> -64-35	IB②	"	211.5	60.0	33.4	701	"
64	"	G <sub>1</sub> -64-16	"	"	57.5	20.4	4.9	6.1	"	102	礫石	G <sub>1</sub> -64-61	IB②	"	80.2	25.2	47.8	136	Tu
65	"	G <sub>1</sub> -64-44	"	"	39.3	30.0	6.6	8.0	"	103	"	G <sub>1</sub> -63-42	IB①	"	71.0	20.4	26.5	52	"
66	"	G <sub>1</sub> -63-89	"	"	67.0	28.0	9.0	16.6	"	104	"	G <sub>1</sub> -63-96	IB⑤	"	84.9	31.6	40.6	129	"
67	"	G <sub>1</sub> -64-35	"	"	70.0	31.7	7.2	9.8	"	105	"	G <sub>1</sub> -64-44	IB⑤	"	79.5	27.6	30.9	(85)	Rhy
68	"	G <sub>1</sub> -63-42	"	"	77.5	33.0	12.8	38.7	Qa-Sh	106	"	G <sub>1</sub> -63-15	IB①	"	96.3	24.9	28.1	69	"
69	"	G <sub>1</sub> -63-82	"	"	65.0	19.0	11.5	12.2	Obs	107	"	G <sub>1</sub> -64-74	IB②	"	186.3	67.5	38.9	289	Tu
70	"	G <sub>1</sub> -63-18	"	"	46.6	25.9	10.5	8.7	"	108	"	G <sub>1</sub> -64-70	IB①	"	(73.3)	71.4	15.0	(90.8)	"
71	"	G <sub>1</sub> -63-97	"	"	42.0	16.0	0.8	6.5	"	109	"	G <sub>1</sub> -64-83	IB②	"	126.5	43.0	16.2	162	And
72	"	G <sub>1</sub> -64-55	"	"	39.2	35.8	8.8	14.1	"	110	"	G <sub>1</sub> -64-70	IB①	"	95.2	17.6	41.1	112	Sa
73	"	G <sub>1</sub> -64-50	"	"	113.0	55.0	21.0	191.5	Ba	111	"	G <sub>1</sub> -63-79	IB①	"	73.2	39.8	9.3	29	And
74	"	G <sub>1</sub> -64-41	"	"	51.8	78.4	"	76.6	"	112	石鏡	G <sub>1</sub> -64-70	IB①	"	68.5	41.3	13.6	70	Gni
75	石斧	G <sub>2</sub> -63-56	IB②	"	198.7	53.4	29.3	492.7	Gr-Mud	113	石鏡	G <sub>1</sub> -64-14	IB②	"	(113.7)	44.8	41.4	(331)	Sa
76	"	G <sub>2</sub> -63-80	IB①	"	149.4	41.6	23.6	280.0	Br-Sch	114	"	G <sub>1</sub> -63-22	IB③	"	(77.4)	38.0	29.7	169	"
77	"	G <sub>1</sub> -63-80	IB④	"	132.4	50.2	20.9	213.5	Gr-Mud	115	"	G <sub>1</sub> -64-43	IB④	"	(70.1)	74.0	15.9	(130)	"
78	"	G <sub>2</sub> -64-43	IB⑤	"	111.0	39.3	7.2	249.2	Br-Sch	116	"	G <sub>2</sub> -63-43	IB⑤	"	101.0	44.0	15.6	107	"
79	"	G <sub>1</sub> -63-97	IB④	"	(140.8)	22.5	13.9	91.9	"	117	"	G <sub>1</sub> -63-89	IB①	"	(51.8)	48.8	4.5	(20)	"
80	"	G <sub>1</sub> -63-16	D <sub>2</sub>	"	101.6	40.4	9.1	74.3	"	118	"	G <sub>1</sub> -64-22	IB②	"	60.5	59.5	13.3	19.9	Tu
81	"	G <sub>1</sub> -63-24	IB③	"	81.8	36.4	80.2	41.4	Gr-Mud	119	"	G <sub>1</sub> -63-43	IB②	"	142.1	106.2	62.6	1185	"
82	"	G <sub>1</sub> -63-13	IB①	"	(77.6)	30.9	9.8	48.0	Br-Sch	120	管玉	G <sub>1</sub> -63-19	IB①	"	9.4	11.4	11.4	1.1	Ser
83	石斧未製品	G <sub>1</sub> -63-16	IB①	"	131.7	52.1	18.2	198.7	Gr-Mud	121	"	G <sub>2</sub> -63-06	IB②	"	8.2	10.5	10.5	1.4	"
84	"	G <sub>1</sub> -64-42	IB②	"	134.6	44.4	16.8	142.4	Br-Sch	122	"	G <sub>2</sub> -63-06	IB③	"	13.5	10.1	10.2	2.5	"
85	"	G <sub>1</sub> -63-03	IB①	"	178.8	58.8	54.5	847	Gr-Mud	123	平玉	G <sub>1</sub> -63-58	IB②	"	5.9	21.0	21.0	4.0	"
86	くぼみ石	G <sub>1</sub> -63-86	IB②	"	(63.0)	39.3	16.8	(80)	Sa	124	"	G <sub>1</sub> -63-16	IB①	"	3.2	27.0	7.7	4.4	"
87	"	G <sub>1</sub> -64-52	IB③	"	130.7	59.7	32.7	444	Gni	125	垂飾	G <sub>1</sub> -64-27	IB②	"	27.6	21.4	12.2	8.1	Jad
88	巖石	G <sub>1</sub> -63-85	IB③	"	67.2	66.3	57.0	425	Per	126	"	G <sub>1</sub> -63-92	IB②	"	26.0	11.2	7.8	3.6	Ser
89	"	G <sub>1</sub> -63-14	IB②	"	66.3	64.0	40.2	270	"	127	"	G <sub>1</sub> -64-72	IB④	"	27.3	21.2	7.9	7.7	?
90	"	G <sub>1</sub> -63-37	IB③	"	71.0	59.2	50.3	286	"	128	"	G <sub>1</sub> -63-18	IB②	"	50.0	38.6	22.6	48.8	Qua
91	"	G <sub>1</sub> -63-79	IB③	"	76.2	75.5	67.1	751	Per	129	石斧ミニチュア	G <sub>1</sub> -63-52	IB①	"	33.3	18.0	7.5	5.1	Sa
92	"	G <sub>2</sub> -64-12	IB②	"	88.3	62.5	23.6	256	"	130	"	G <sub>1</sub> -64-82	IB①	"	41.2	16.3	4.8	5.4	Br-Sch
93	"	G <sub>1</sub> -63-89	IB⑤	"	80.6	69.3	44.0	431	Gr-Mud	131	"	G <sub>1</sub> -64-61	IB②	"	32.0	12.3	1.9	1.3	"
94	"	G <sub>1</sub> -64-25	IB⑤	"	92.2	75.6	31.0	383	"	132	垂飾未製品	G <sub>1</sub> -64-43	IB①	"	17.7	15.0	3.2	1.4	Gr-Mud
95	"	G <sub>1</sub> -63-25	IB②	"	66.4	54.0	30.8	164	Gni	133	"	G <sub>1</sub> -64-59	IB①	"	38.4	23.3	4.3	5.2	"
96	"	G <sub>1</sub> -64-60	D <sub>1</sub>	"	137.1	60.2	31.3	469	"										

表Ⅲ-57 遺構一覽(住居跡および類似遺構)

遺構番号	位	置	平面形	規模(m)			床面積(㎡)	長軸方向	備	考
				長径	短径	最大深(m)				
H-3	G <sub>1</sub> -63-30-31	"	隅丸三角形	3.21/2.91×2.39/2.19	0.4	4.04	N-W-SE	先端ビット H-19と重複		
H-4	G <sub>1</sub> -63-21-22-31-32	"	略扇形	6.66/5.42×6.19/4.90	0.28	36.22	"	炉跡(焼土5か所、石砌炉1か所)	先端ビット H-4と重複	
H-19	G <sub>1</sub> -63-21-22-31-32	"	略扇形	6.32/4.62×5.36/4.28	0.28	20.74	N-21°-E			
H-5	G <sub>1</sub> -63-02-03-12-13	"	扇形	4.6/4.4×4.32/4.0	0.3	13.33	N-S			
H-6	G <sub>1</sub> -63-03-04-13-14	"	長円形	5.72/4.85×4.4/3.66	0.43	14.62	N-6°-W	炉跡(焼土1か所)	先端ビット 階段状付属ビット H-4と重複	
H-9	G <sub>1</sub> -63-03-04-13-14	"	楕円形	4.52/4.36	0.28	(15.81)	N-28°-W	H-6と重複		
H-10	G <sub>1</sub> -63-05-15-06-16	"	略扇形	4.6/4.5	0.14	(18.64)	"	H-18と重複		
H-11	G <sub>1</sub> -63-34-35-44-45	"	不整形	4.3/3.8×3.3/2.9	0.4	9.34	N-45°-W	P-9と重複		
H-12	G <sub>1</sub> -63-13-23-14-24	"	楕円形	3.6/3.3	0.24	8.94	"			
H-13	G <sub>1</sub> -63-33-43-44	"	扇形	5.2/4.8×4.8/4.5	0.43	16.19	N-4°-W	炉跡(焼土1か所)	H-22-17と重複	
H-22	G <sub>1</sub> -63-33-34	"	略扇形	3.9/3.8×3.4/3.3	0.08	9.18	N-4°-W	炉跡(焼土1か所)	H-13と重複	
H-14	G <sub>1</sub> -63-23	"	長楕円形	3.25/2.72×2.94/2.43	0.33	5.56	N-8°-W			
H-15	G <sub>1</sub> -64-20-30	"	長楕円形	3.18/2.76×2.64/2.22	0.36	4.8	N-3°-W	階段状付属ビット		
H-16	G <sub>1</sub> -63-11	"	略扇形	3.53/3.3×3.03/2.83	0.24	7.64	N-83°-W	階段状付属ビット		
H-17	G <sub>1</sub> -63-34	"	不整形	(3.8)×(3.5)	0.45	5.65	"	H-13と重複		
H-18	G <sub>1</sub> -63-05-15-06-16	"	略扇形	5.8/5.35×4.93/4.35	0.2	(16.9)	N-54°-W	H-10と重複	炉跡(焼土1か所)	
H-21	G <sub>1</sub> -64-50-51	"	長楕円形	2.51/1.93×1.34/0.87	0.3	3.56	N-50°-E	付属ビット		
H-23	G <sub>1</sub> -63-31	"	長楕円形	2.55/2.04×1.55/1.47	0.2	1.97	N-71°-W	付属ビット		
H-24	G <sub>1</sub> -63-39, G <sub>1</sub> -64-30	"	長楕円形	2.2/1.9×1.75/1.45	0.18	2.17	N-53°-W			
H-25	G <sub>1</sub> -64-45	"	扇形	2.35/2.13×2.32/2.0	0.32	3.33	N-84°-E	先端ビット		
H-26	G <sub>1</sub> -64-44	"	長楕円形	1.66/1.3×1.47/1.17	0.3	1.23	N-S			
H-27	G <sub>1</sub> -64-20-12-30-31	"	長楕円形	(3.2)/2.47×2.74/2.12	0.2	4.77	N-9°-W	P-21と重複		
H-28	G <sub>1</sub> -64-43	"	長楕円形	2.17/1.53×1.91/1.31	0.1	2.04	N-43°-E			
H-29	G <sub>1</sub> -64-34	"	隅丸長方形	2.76/2.58×1.66/1.31	0.18	3.01	N-48°-E			
H-30	G <sub>1</sub> -64-34-35-44-45	"	隅丸長方形	3.18/2.83×2.73/2.48	0.3	6.21	N-72°-E	先端ビット		
H-31	G <sub>1</sub> -63-74-75-84-85	"	楕円形	4.6/4.1×3.2/2.85	0.2	8.97	N-32°-E	炉跡(焼土1か所)		
H-32	G <sub>1</sub> -63-22-23-32-33	"	長楕円形	1.95/1.55×1.33/1.33	0.35	1.23	N-85°-E	付属ビット		
H-33	G <sub>1</sub> -64-04-05-14-15	"	扇形	3.23/2.87×2.77/2.46	0.41	5.36	N-47°-W	H-34と重複		
H-34	G <sub>1</sub> -64-04-05	"	楕円形	(2.3)/1.83×1.94/1.55	0.37	2.14	N-42°-W	H-33-37と重複	階段状ビット	
H-36	G <sub>1</sub> -63-02-12	"	扇形	1.78/1.63×1.25/1.21	0.45	1.31	N-84°-E			
H-37	G <sub>2</sub> -64-05	"	略扇形	2.44/2.08×1.66/1.4	0.37	2.27	N-37°-E	H-34と重複	階段状ビット	
H-42	G <sub>2</sub> -63-36	"	円形	2.05/1.85×1.83/1.59	0.14	2.42	"			
H-44	G <sub>1</sub> -64-73	"	略扇形	2.5/2.1×2.3/2.0	0.25	3.42	N-70°-W			
H-46	G <sub>2</sub> -64-10	"	楕円形	1.5/1.4×1.18/1.08	0.3	1.21	N-43°-W			

遺構番号	位	置	平面形	規模(m)			床面積(㎡)	長軸方向	備	考
				長径	短径	最大深(m)				
H-35	G <sub>2</sub> -64-45-55	"	卵形	4.96/4.6×(4.4)/(4.0)	0.3	15.28	N-76°-W	H-38と重複	階段状ビット	
H-38	G <sub>2</sub> -64-45-55	"	卵形	4.04/3.66×3.6/3.25	0.22	9.87	N-67°-W	H-35と重複	粘土 たてかえ	
H-39	G <sub>2</sub> -64-64-74-75	"	隅丸台形	5.67/5.4×5.0/4.6	0.45	21.11	N-84°-W	H-40-41-43と重複		
H-40	G <sub>2</sub> -64-64-74-75	"	扇形	(5.88)/(5.25)×4.73/4.1	0.4	17.02	N-67°-W	H-38と重複	階段状ビット炉跡(土器囲い炉)	
H-41	G <sub>2</sub> -64-74	"	"							
H-43	G <sub>2</sub> -64-74	"	"							

遺構番号	位	置	平面形	規模(m)			床面積(㎡)	長軸方向	備	考
				長径	短径	最大深(m)				
H-7	G <sub>1</sub> -63-10	"	"					N-S	掘立柱跡	
H-8	G <sub>1</sub> -63-11	"	"					N-S	掘立柱跡	
P-20	G <sub>1</sub> -63-46-56-47-57	"	"					NW-SE	平地住居跡	
H-45	G <sub>2</sub> -62-66-67-76-77	"	小判形	9.16/8.52×5.88/5.28	0.24	39.38	N-20°-E	炉跡(焼土1か所)		

## 7 まとめ

(1)遺構 第Ⅱ黒色土層からの検出遺構は、住居跡44軒、土壙86基、焼土120か所、フレイク・チップ集中21か所、集石1か所、Tピット状遺構1か所、動物の足跡2か所、小ピット群1か所である。時期は縄文時代中期、後期、晩期に跨っており、なかでも中期（後葉）の遺構が遺跡の中心をなしている。住居跡として報告したものには、明瞭な掘り込みをもつ堅穴住居跡、浅いくぼ地を利用したと考えられるものの、平地上に掘立て柱跡の認められるもの、という三つの形態上の違いがある。また長径が2mにも満たない小形のものも住居跡として報告している。これらは一応柱穴状の小ピットが検出されたり、床面、壁などが明確でしっかりしていることなど、生活の痕跡が認められるものであることから住居跡として報告している。住居跡の規模はかなりバラつきがある。平面形はほぼ卵形のもが多く、長軸方向はおおむねN-S、NW-SE、NE-SWという三つの方向性が認められる。このうちN-Sを長軸方向とするものは長楕円形状のもので、他は卵形、楕円形、長円形のものである。土壙は、土壙墓と認定できるもの（P-23）と、土壙墓の可能性の強いもの（後期と晩期の土壙）と、性格、用途などが不明のもの（中期、時期不明の土壙）があり、規模・平面形・長軸方向など一定していない。焼土は、屋外炉的なもの、一時的な焚火的なもの、二次堆積状のものという三つの違いが認められる。遺構の分布状況を見ると、住居跡、土壙、焼土がほぼ重なるように、四つほどのまとまりがある。これらに囲まれた台地上の中央部分は、三時期にわたって遺構の空白部分になっており、広場的な性格があったのかも知れない。以下住居跡について、時期別に概括し、問題点、課題を列記し、まとめとしたい。

縄文時代中期：検出された住居跡（34軒）はいずれもⅢ群b-3類土器を伴うもので、なかでも北筒式土器が圧倒的に多い。34軒のうちH-9・10・12は浅いくぼ地を利用したものである。平面的な卵形が多く、他に長円形、楕円形、円形、長楕円形などがある。長軸方向はN-S、NW-SE、NE-SWである。床面積は大小さまざまで、最小はH-26・32の1.23㎡、最大はH-4の36.22㎡である。2㎡～4㎡のものが14軒、5㎡～16㎡のものが13軒である。炉跡があるものは6軒で、このうちH-13・19は石組みの炉であり、他（H-6・18・22・31）は地床炉である。柱穴のないのはH-12・44の2軒で、他は柱穴状小ピットが検出されている。H-4・6・19は長軸線を対称軸とし、10個、8個、10個の小ピットがある。他は余り規則性が見られず、床面、壁際、壁面、壁外に直立、あるいは内傾する小ピットがめぐっている。先端ピットと呼称されるものが12軒で検出され、ほぼ長軸方向の先端部に認められる。またそれに伴うと思われる段状の張り出し部をもつものもある。重複関係にあるものが4か所、8軒あり、また掘り揚げ土の重複、切り合い関係の確認されたのが5か所ある。これらの状況と土器の接合関係から、一部例外も認められるが、おおよそ長軸方向NE-SW→NW-SE→N-Sという順に構築されていることが推測される。なお同方向内においても新旧関係が認められている。

縄文時代後期：検出された住居跡（6軒）はいずれもⅣ群a類土器を伴うもので、後期初頭のものである。調査区南西部の緩斜面上に位置し、地形的にみると同時期の遺跡の中心部は調査区外の美沢川寄りにあるのではないかと予測される。H-41・43はH-39に大きく削平されて全体は不明である。浅い皿状のものと推測される。他は堅穴住居跡で、平面形はほぼ卵形であるが、H-39は丸味をもつ台形状のものである。長軸方向はほぼNW-SEである。床面積は10㎡～21㎡で、H-40は土器囲い炉である。柱穴は壁面に内傾する小ピットがめぐる。H-35・40の先端部には段状の張り出し部がある。なおH-39・40で検出された資料の放射性炭素による年代測定結果はつぎの通りである。

Nu-323 木炭 H-39床面出土 3680±90 Nu-325 木炭 H-40覆土下層出土 3990±90  
(日本大学年代測定室)

縄文時代晩期：検出された住居跡(4軒)はいずれもV群b類土器を伴うもので、晩期中葉から後葉にかけてのものである。H-45は浅い皿状の断面をもつ大形住居跡である。他は平地上を床面とする掘立て柱を伴うものである。H-20は地床炉が検出されており、H-45では火熱を受け赤化している部分が検出されている。

調査区の南・西側が未調査であり、美々3遺跡の全体像は明らかでない。しかし、縄文時代中期後葉から後期初頭、更に晩期中葉から後葉にと、断続的に生活の場として利用されていたことは検出された遺構、出土した遺物によって明らかである。ただ未説明の問題点が多く残ったようである。即ち①遺構の検出されなかった空白部分が、遺跡の中でどのような意味をもっているのか。②炉跡を伴わない住居跡が多くを占めているが、このことと周辺で検出された多くの焼土とはどのような関連性があるのか。③先端ピットと段状の張り出し部は出入口部と考えてよいのかどうか。④各時期の住居跡などの具体的な新旧関係はどうなのか。同時期の生活単位は何軒だったのか。⑤周辺遺跡との関係と美沢川流域における美々3遺跡の歴史的な位置付けはどのようなものであるのか。また他地域との関連性は、等々多くの問題点が残されている。次年度以降の調査の成果が期待されるとともに、今年度までの調査結果を踏えた総合的な検討がなされなければならないだろう。(和泉田)

**(2)土器** 美々3遺跡からⅢ群b-3類を中心として多量の土器が出土した。遺構、包含層の出土遺物の項で記載してきたが、ここで概括しておくこととする。

Ⅲ群b-3類以前の資料は、昨年のもものと合わせても極めてわずかで、Ⅱ群a-1類、Ⅱ群a-2類、Ⅲ群a類、Ⅲ群b-1類、Ⅲ群b-2類に属するものが認められる。これらの時期の住居跡並びに集落跡は、Ⅲ群b-1類の時期のものを除き、美沢1遺跡、美々5遺跡など、美沢川流域の他の遺跡(道教委 1977、1978、1979)で認められ、出土資料もそれらとほぼ共通している。Ⅱ群a-1類は縄文土器であるが、美沢3式(北埋調報 58、62)、美々7式の時期よりは新しく、美々5遺跡(北埋調報 3)の石川野式に伴うかとみられるものと似ている。Ⅱ群a-2類は中野式の類であるが、縦位の羽状縄文を構成するようにもみえ、やはり美々5遺跡の例と似ている。Ⅲ群a類土器は、昨年度出土したものは、円筒上層式に属するものであり、本年度のものは、サイベ沢Ⅶ式に相当するものを含んでいる。類例は美々4遺跡などにある。Ⅲ群b-1類は、体部の資料が出土していて、原体を異にする縄文の施文がみられる。なお地文に結束羽状縄文の施されたものは萩ヶ岡2式とみなされるが便宜的に本類に含めてある。Ⅲ群b-2類に属する土器は美々4遺跡、美々5遺跡からも出土している。

Ⅲ群b-3類土器は、隣接の美々4遺跡出土資料(北埋調報 24)と同一個体に属するものもあり、本遺跡がこの時期には美々4遺跡と一連のものであったことが知られ、また、美々5遺跡から類例が出土していて、美々4遺跡と美々5遺跡も連続していることから、台地上に、広範囲に遺跡の形成された時期とみなすことができる。本類土器には道南系とみなされるノダツⅡ式、煉瓦台式を含めていて、それらの資料からみて、3~4期の変遷のあることは想定されている。北筒式に属する文様のあるものを、A~Fの6類に区分して記載してきたが、半截竹管状工具もしくはヘラ状工具などによる施文の位置によってC~Fの4者に区分し、主に胴部に貼付帯のあるものをA類、押引き文のあるものをB類としておいた。これらは相互に関連をもつものとみなされる。特にA類土器の存在は道央部の特色とみなされ、石狩地方から後志、胆振地方にかけて認められるものである。道北地方の名寄市智東出土のいわば智東式(畠山 1960)は、貼付帯の施されたもので、A類と似ているが、

円形文が施されていない。道東地方では貼付帯の施されたものは稀で、貼付帯の形状もあまり似ていないようである。

本遺跡の A 類自体にも多様なものがあり、道央部の内でもやや地域差の窺えるものがある。幅広い貼付帯を施し、押し引き文の施されるものは一般的であるが、横走る撚糸文の施されるものは登別市千歳 5 遺跡（北埋調報 12、21）にあり、胆振地方に認められるもので、細い貼付帯による施文も同様なものとみられる。また本遺跡では明らかでないが、体部に横環する一条の貼付帯をもつものが白老町虎杖浜 4 遺跡（北埋調報 1）で出土していて、他の地方には認められない特色をもつものとみられる。江別市西野幌 12 遺跡（北埋調報 54）、札幌市 S 267・S 268 遺跡（札幌市教委 1977）からは口縁部に縄線文の施されたものや、貼付帯上に縄線文を施するものが認められ、柏木川式末葉のものに円形文の施された趣がある。道央部での成立期の北筒式と考えられるものである。

さて、これらの北筒式の時期については、大まかに、道南のノダップⅡ式から煉瓦台式（静狩式）に相当する時期のものと考えられていた（大沼 1981）が、登別市千歳 6 遺跡（登別市教委 1982）で煉瓦台式（静狩式）の単純遺跡とみてよい出土状態が確認され、また厚真 7 遺跡（苫小牧市教委 1987）や、日高地方の門別町エサンヌップ 4 遺跡（門別町教委 1987）でこの種の資料がややまとまった出土状態を示し、本遺跡でもやや多く認められ、単に搬入品ばかりとは思われない状態であった。これらを考え合わせると、少なくとも道央部の太平洋岸の胆振地方においては、北筒式の次に少なくとも末期の煉瓦台式（静狩式）が成立する、もしくは受け入れられていると判断せざるを得ないこととなる。そうして、これらの煉瓦台式（静狩式）を母体として所謂余市式が成立したことも確かなようである。本遺跡の低位部においては、細片の北筒式は認められるけれども、主体となるものは余市式的な土器であり、それらは少くからず煉瓦台式な特色が認められる。この状況を見ると、この地方では北筒式から余市式へつながるのではなく、北筒式から煉瓦台式を経て、余市式が成立するものとみられるのである。煉瓦台式末葉もしくは最初頭の「余市式」とみられる資料には胎土に海綿骨針を含むものがあり、道南地方から搬入されたことを示している。その後において在地的な余市式が一般化してゆくとみなされる。このように考えられることからすれば、本遺跡の北筒式は、ノダップⅡ式の時期を主体とするもので、やや煉瓦台式に及ぶものがあるかとみられることとなる。今のところ北筒式の詳細な検討をなし得る暇はないのであるが、住居の重複状況からも、少なくとも 2～3 期の変遷を想定し得る。初期の住居を柏木川式に近い特色をもつもの、新しい方を煉瓦台式に近い特色をもつものとし、その中間のノダップⅡ式と関連するものを考えることはできそうである。札幌市 M 67 遺跡（札幌市教委 1988）の図 42 の 3 の資料はノダップⅡ式的な特色をもつ土器に円形文の施されているものである。なお、静川 8 遺跡（苫小牧市教委 1990）では北筒式の一般的な、本遺跡で C 類としたものの他に、より新しそうな煉瓦台式な北筒式が出土している。また静川 8 遺跡の報告書の包層出土の土器の内 141、142 として掲載されたものは、隆帯上の刺突が、煉瓦台式の浅い短刻線文とは異なり、狭く深い刺突となっているようで、柏木川式の末頃のものともみなされる。また本遺跡の B 類の 49 には「L」字状の押し引き文が施されているが、これは H 類の 411 にみられる L 字状の押し引き文と関連するものとみなされる。このような L 字状の押し引き文は江別市元江別 10 遺跡（江別市教委 1990 図 II-6）でも出土している。これらの詳細な吟味が必要であり、今後の課題となる。

IV 群 a 類土器は、口縁部に幅のせまい貼付帯のあるものが、低位地区の住居跡から出土していて、その覆土に口縁部の貼付帯の幅のより広い土器が出土した。その後口唇に縄文の施された貼付帯の多数施されるものと、口縁部に一条の貼付帯のみものなどが位置づけられ、所謂タコブ式へと変遷してゆくとみなされる。これらの余市式系の土器群の次に、道南の大津式や、入江式の類が出現す

る。なお涌元式（涌元Ⅱ式）とみなされる広口壺形の土器に類するものは江別市からも破片が出土している。なお西野幌12遺跡で出土した破片には、磨消文部分に粘土のヒレのつく土器が認められ（北埋調報 54 P 280-143）、大木10式に相当するものかと考えられる。

Ⅳ群 b、c 類土器は少量の出土がある。これらの土器群は、美々4遺跡に多く出土し、遺構に伴っていた。本遺跡は当時周辺部になっていたものとみられる。

V 群 b 類土器はⅢ群 b-3 類土器に次いで多く出土した。在地系の土器を主体とし、道南の亀ヶ岡式系の土器を少量伴っている。大洞 C<sub>1</sub> 式系のもの、C<sub>2</sub>～A 式頃のものがある。亀ヶ岡式系のものには、鉢形や浅鉢形、壺形などがある。大洞 C<sub>1</sub> 式相当の土器は苫小牧市共和遺跡（苫小牧市教委 1987）で良好な資料が出土している。白老町社台1遺跡（北埋調報 1）と同時期頃のものともみなされるが、縄線文の施されるものが多く、幣舞式の古い段階かそれ以前のものとなる。美々3遺跡ではこの時期のものが、低位地区から出土している。大洞 C<sub>1</sub> 式相当の資料は苫小牧市遠浅1遺跡（苫小牧市教委 1987）で出土している。幣舞式に伴うものとみなされる。本遺跡の V 群 b 類の主体をなすのはこの遠浅1遺跡の資料に類するものである。これらの資料は美沢川流域では従来あまり出土していなかったものである。（大沼）

(3)石器 遺物の出土状況から、出土した石器の多くは北筒式土器に伴うと考えられる。また、まとめて出土した V 群 b 類土器に伴うとみなされる石鏃もやや多く出土している。このほか、旧石器時代の細石刃核が1点、縄文時代早期、前期、後期の特徴的な石器が少しずつみられる。器種別にみると、石槍またはナイフ、スクレイパー類が多い。礫石器では石斧、石斧末製品、たたき石が多く出土している。昨年度にはみられなかったすり石も出土している。このほかの遺物では、昨年度と同様、黒曜石のフレイク・チップ、緑色泥岩の剥片が多量に出土している。黒曜石のコアも出土量が多い。

今年度は、器種ごとに代表的なものを図示するにとどまり、北筒式土器に伴う石器群について充分な検討はできなかった。黒曜石のコアは分類中なので掲載していない。次年度の報告で責を果たしたい。黒曜石のフレイク・チップが大量に出土していることは、昨年度の報告で指摘されているとおりの遺跡で石器の製作が行なわれていた可能性が強いことを示しているけれども、遺物の分析は途についたばかりである。次年度の課題としたい。（工藤）

礫石器については、形態による分類のみ呈示することにとどまった。石斧については、未製品の接合による製作過程の復元、敲石については、重量・使用部位等の属性分析、砥石については粒径と形態の関係の追求が残されている。加えて大型の礫石器（石皿・台石）の接合復元、搬入礫の石質分類などが整理中であり、今回の報告で述べることができなかった。これらのことについて次年度の課題としたい。（鈴木）

#### 参考文献

- |              |                               |        |
|--------------|-------------------------------|--------|
| 北海道教育委員会     | 1977『美沢川流域の遺跡群』Ⅰ              |        |
| 〃            | 1978『美沢川流域の遺跡群』Ⅱ              |        |
| 〃            | 1979『美沢川流域の遺跡群』Ⅲ              |        |
| 北海道埋蔵文化財センター | 1980『美沢川流域の遺跡群』Ⅳ              | 北埋調報 3 |
| 〃            | 1986『美沢川流域の遺跡群』Ⅸ              | 北埋調報24 |
| 〃            | 1989『美沢川流域の遺跡群』Ⅻ              | 北埋調報58 |
| 〃            | 1990『美沢川流域の遺跡群』Ⅻ              | 北埋調報62 |
| 〃            | 1983『4歳5遺跡』                   | 北埋調報12 |
| 〃            | 1985『4歳5遺跡』                   | 北埋調報21 |
| 〃            | 1981『社台1遺跡・虎杖浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡』 | 北埋調報   |

## 1

- 北海道埋蔵文化財センター 1989『江別市西野幌12遺跡』北埋調報54
- 札幌市教育委員会 1977『札幌市文化財調査報告書』XIV
- 登別市教育委員会 1982『札内台地の縄文時代集落址』
- 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター  
1987『苫小牧東部工業地帯の遺跡群』Ⅱ  
〃 1990『苫小牧東部工業地帯の遺跡群』Ⅲ
- 門別町教育委員会 1987『エサンヌップ4遺跡』
- 札幌市教育委員会 1988『M 67遺跡』札幌市文化財調査報告書 XXXIV
- 畠山三郎太 1960「名寄市智東出土の北筒式土器」『ウタリ』38
- 大沼忠春 1990「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌』  
66-4
- 江別市教育委員会 1990『元江別10遺跡 (2)』江別市文化財調査報告書 38

# Ⅳ 美々3遺跡第Ⅰ黒色土層の調査

## 1 調査の概要

I黒層の調査は、平成元年度調査区の南側、2900m<sup>2</sup>についておこなった。調査区は美々4遺跡の西側に隣接する標高12.1m～23.4mの美沢川左岸の斜面上に位置している。

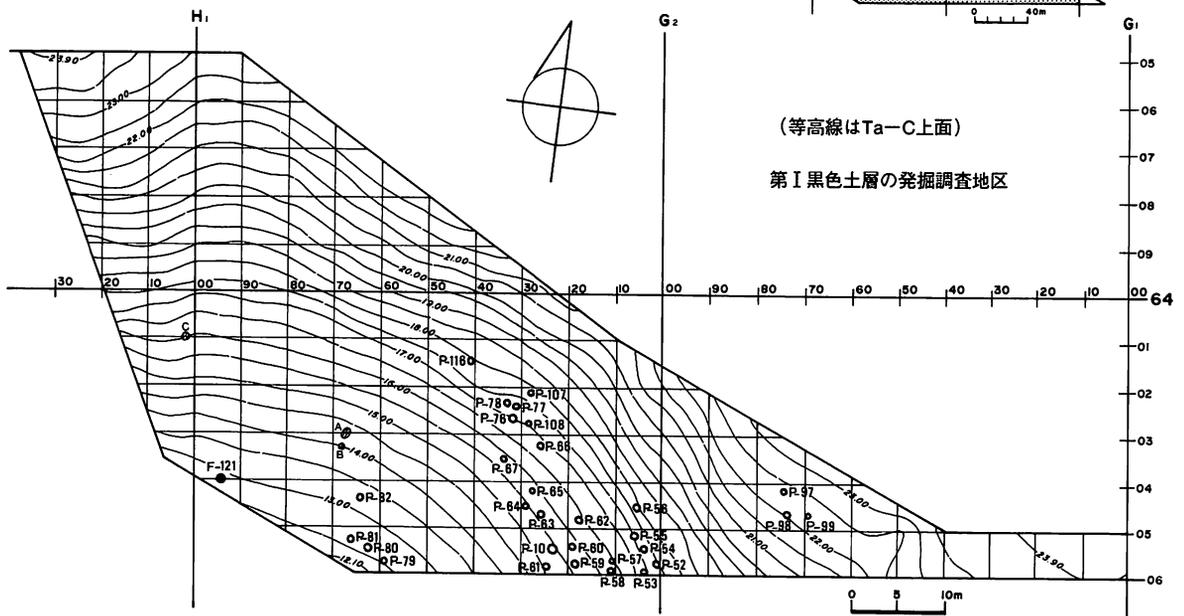
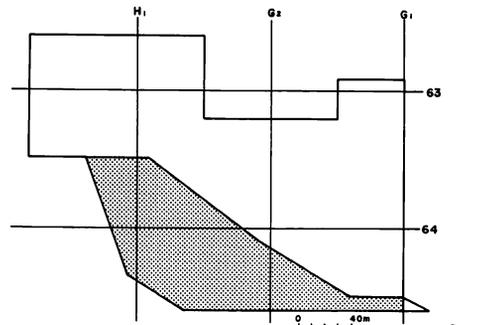
調査の結果、遺構は土壇25基、焼土1か所、一括遺物の出土3か所が検出され、遺物は土器、石器など3,597点出土している。

遺構は、I黒層の下位、Ta-c（最上層部は腐植化して暗褐色細砂となっている）直上付近で検出されている。P-10を除く他の土壇はII黒上面で検出された。当初II黒上面を掘り込み面とするものと思われたが、以下の観察結果からI黒層中を掘り込み面とする土壇と判断した。

- ①覆土は、Ta-cに暗褐色細砂が混入し、壇底とその付近の壁に暗褐色細砂が薄く堆積している。
- ②P-67出土の遺物はII黒層上面より上方で検出されている。

覆土および壇底、壇底付近の形状などから、P-10とあまり時期差はないと考えられ、遺構の性格も同様のものであると思われる。遺物の出土状況、埋め戻し状の覆土、またP-67出土土器の内面にベンガラ痕が認められることなどから、これらの土壇は土壇墓と推測される。時期は縄文時代晩期（V群C類土器）のものと考えられる。焼土（F-121）はI黒層の上位で検出された。径約10cm、層厚約2cmで、周辺に炭化材が見られることから、Ta-b降灰時頃に焼けたものと思われる。一括出土の遺物は、人為的な廃棄によるものかどうかは判然としない。

出土遺物のうち、土器は3,500点、石器などは95点である。土器は、Ⅲ群b-3類のものが微量出土しているが、他はV群C類のものである。石器は石鏃、石斧片、砥石、たたき石、台石、スクレイパーなどが出土している。（和泉田）

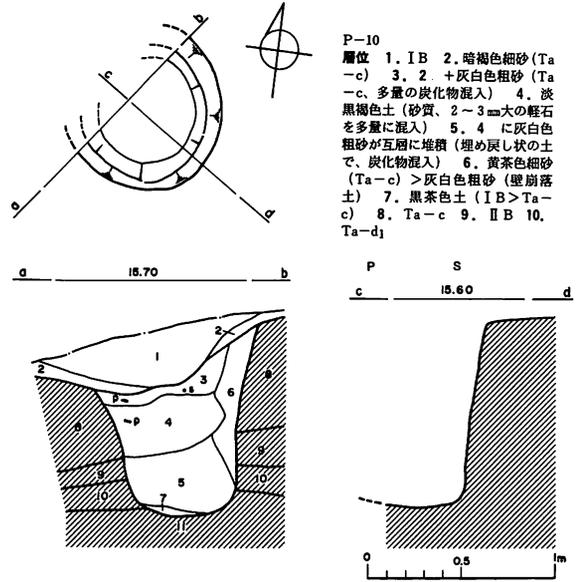


図Ⅳ-1 発掘調査地区と遺構位置図

2 遺構および遺構出土の遺物

(1) 土壌

P-10 (図IV-2・3、図版IV-3) 位置: G<sub>2</sub>-64-25 標高15.20m~15.60mの緩斜面上に位置する。規模: 0.85m/0.53m × (0.90m) / (0.53m) × 0.98m 平面形: 円形 試掘調査で確認されたものである。掘り込み面は Ta-c 直上である。覆土は、Ta-c の混り合った埋め戻し状の汚れた土である。覆土全体に炭化物が混入しているが、特に最上層に多い。墳底は皿状で、d<sub>2</sub> 中につくられている。覆土最上層から土器片、黒曜石のコアが出土し、上層から土器片が出土している。時期は掘り込み面、周辺出土の遺物などから縄文時代晩期 (V群C類土器) のものと思われる。覆土の状態などから土壌墓の可能性が考えられる。



P-10  
層位 1. IB 2. 暗褐色細砂 (Ta-c) 3. 灰白色粗砂 (Ta-c, 多量の炭化物混入) 4. 淡黒褐色土 (砂質、2~3mm大の軽石を多量に混入) 5. 4 に灰白色粗砂が互層に堆積 (埋め戻し状の土で、炭化物混入) 6. 黄茶色細砂 (Ta-c) > 灰白色粗砂 (壁崩落土) 7. 黒茶色土 (IB > Ta-c) 8. Ta-c 9. II B 10. Ta-d<sub>1</sub>

図IV-2 P-10 実測図

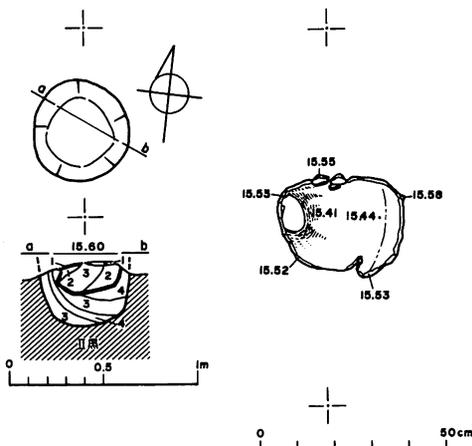
図IV-2はIII群b-3類土器の口縁部である。器形は口縁に小突起をもつ深鉢形を呈するもので、口唇面は無文、口縁部のせまい肥厚帯に斜行縄文を施し、下縁になで調整を加え、円形刺突文を配する。II黒層に類例があり、本遺構がII黒層を掘り抜いているため、遺構形成時に混入したものとみなされる。



図IV-3 P-10 出土の土器

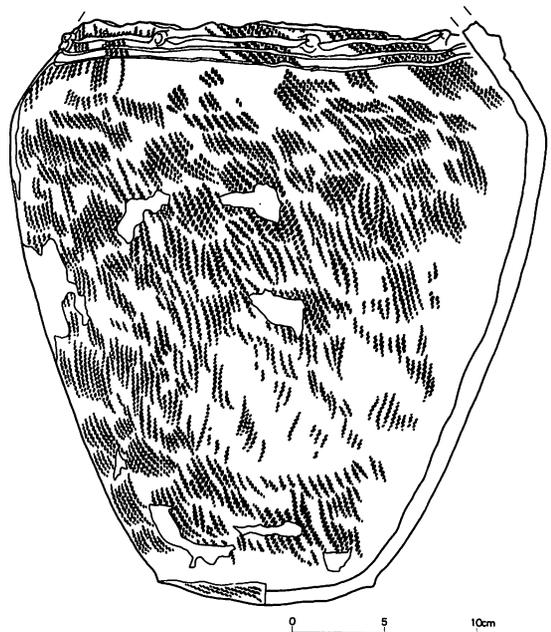
P-67 (図IV-4・5、図版IV-3) 位置: G<sub>2</sub>-64-33 規模: 0.52m/0.35m × 0.50m/0.35m × 0.33m 平面形: 円形

II黒層直上の Ta-c 層除去中に細片化した土器片が出土する。II黒層上面を精査してほぼ円形のプランを確認する。覆土は Ta-c であるが、Ta-c 最上層の暗褐色細砂が混入している。墳底は皿状で、II黒層中につくられている。墳底の約15cm上方から、壺形土器 (図IV-4・5) が横だおしの状態で出土している。土器内面の底部付近にはベンガラ痕が認められる。土器の出土位置、覆土など

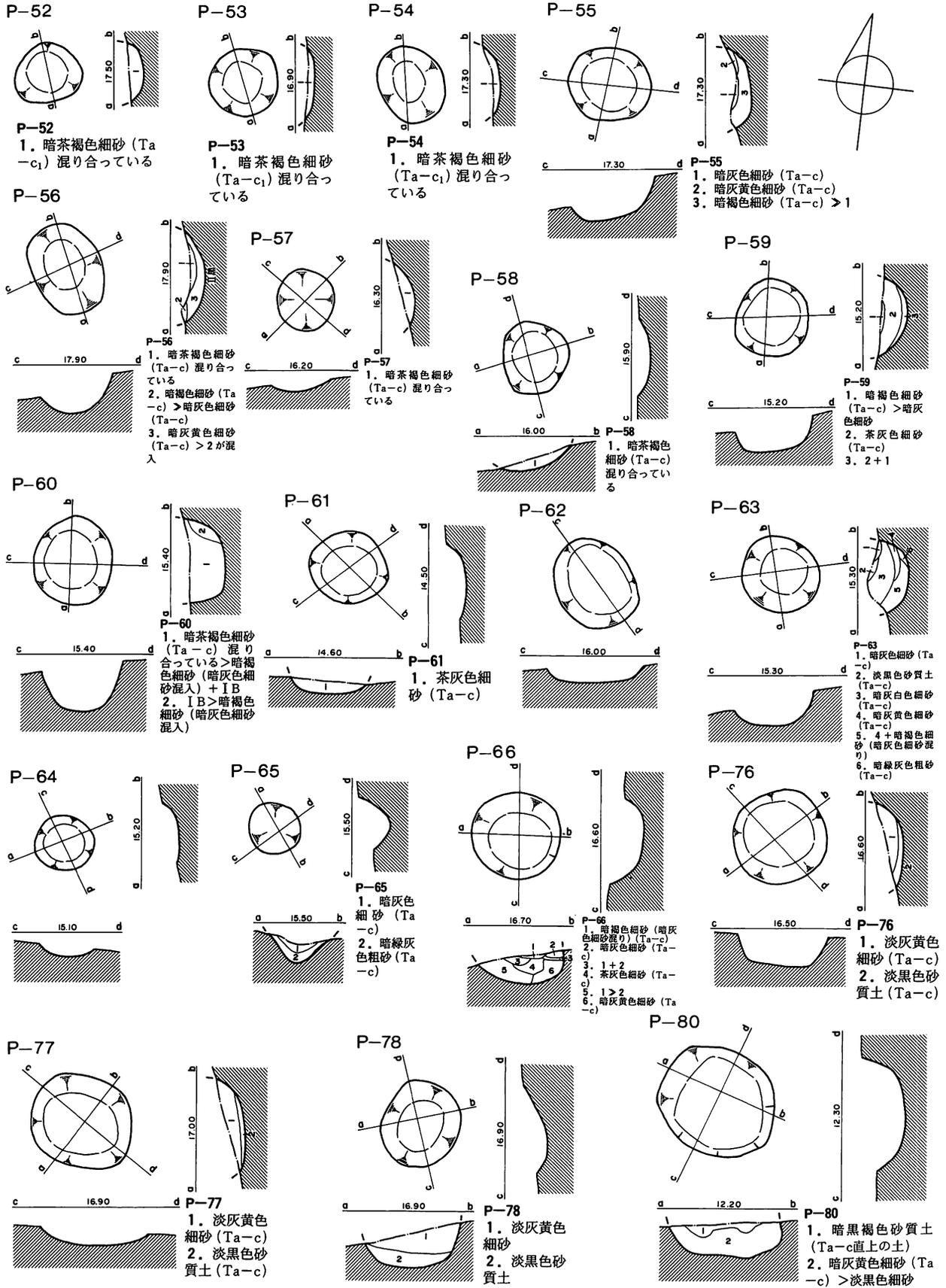


P-67 層位 1. 暗褐色細砂 (Ta-c) > 暗灰色細砂 (Ta-c)  
2. 1 > 3 3. 暗灰黄色細砂 (Ta-c) 4. 1 > 3

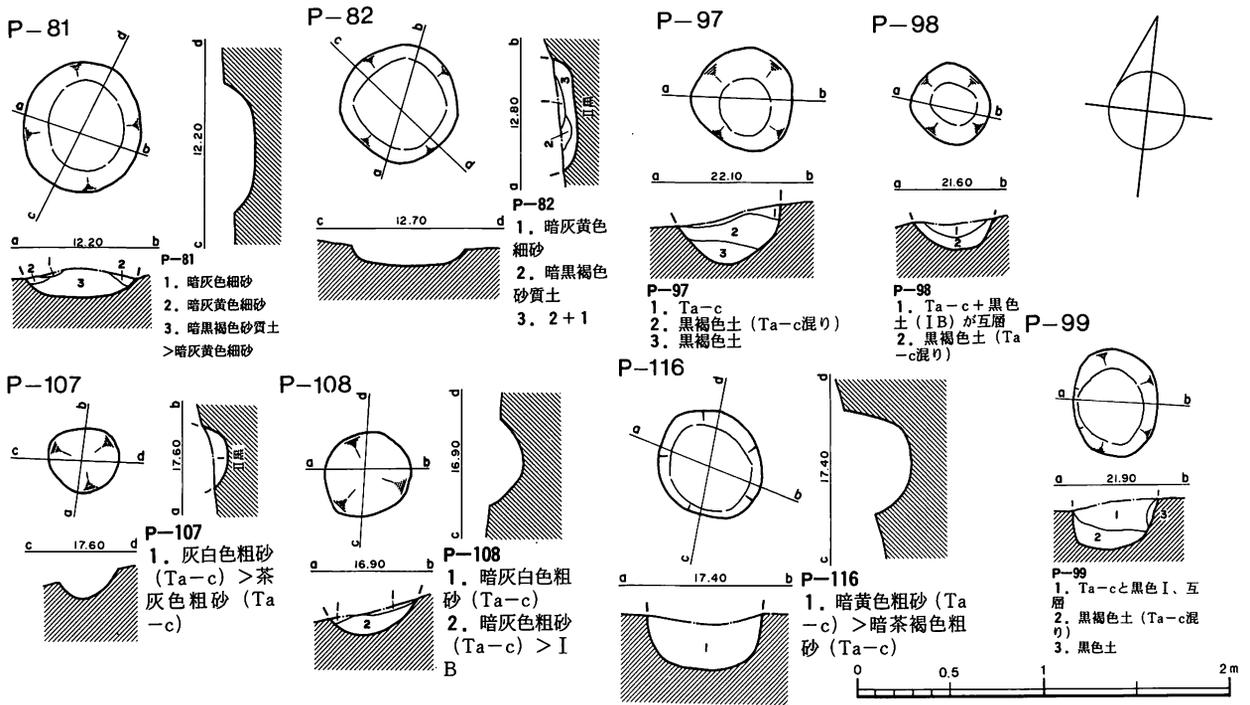
図IV-4 P-67 実測図



図IV-5 P-67 出土の土器



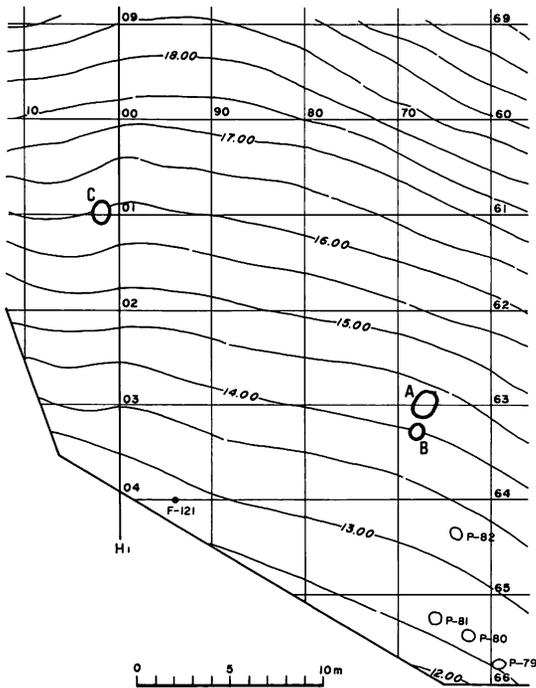
図IV-6 土壌 実測図(1)



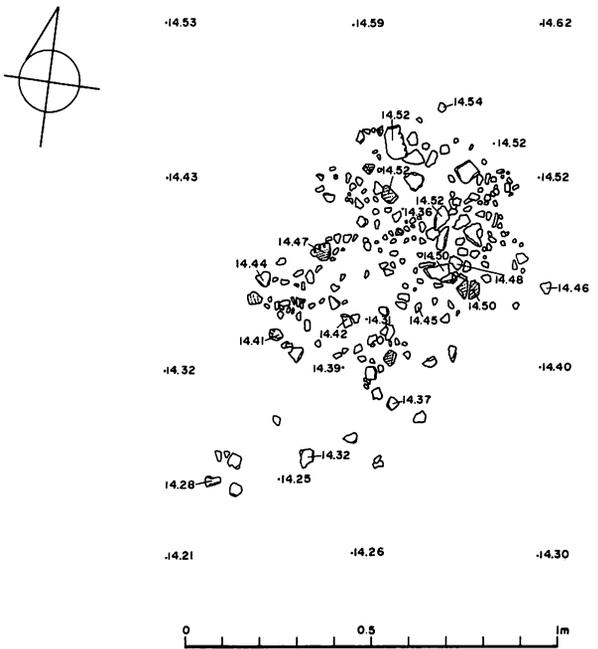
図IV-7 土壌 実測図(2)

からみて掘り込み面は Ta-c 直上と考えられる。土器の出土状態や埋め戻し状の覆土などから考えると土壌墓の可能性が考えられる。時期は縄文時代晩期 (V群C類土器) のものと思われる。

図IV-5の壺形土器は、頸部以上と肩部の半ばを欠失している。器形には肩のふくらみが直線的で、体部と丸底をなす底面との境にくびれをもつ特色がある。文様は頸部下端に貼瘤文を8か所につけ、その間をつなぐ沈線を引き、その下縁を2条の沈線で画している。器面の縄文はRLの原体によるもので、沈線文施文後に浅く施されている。



図IV-8 一括遺物の出土位置



図IV-9 一括遺物(A)の出土状況

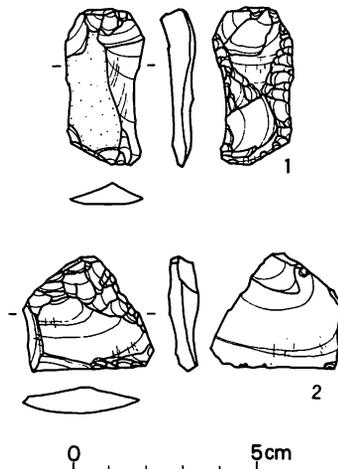
(2) 一括遺物の出土状況 (図IV-8~12、図版IV-4)

Ta-c直上で一括遺物が3か所で出土している。縄文時代晩期(V群C類土器)の土器片である。(A): G<sub>2</sub>-64-62・63 標高14.25m~14.52mの緩斜面上に位置する。1.1m×0.7mの範囲で、層厚約12cmの淡黒色細砂(Ta-C直上)中に混入している。出土土器の総点数は973点で、非常に細かく割れている。風倒木痕の影響によるものか、浅い皿状の凹地にたまっている状態である。深鉢形土器2個体分の土器片である。

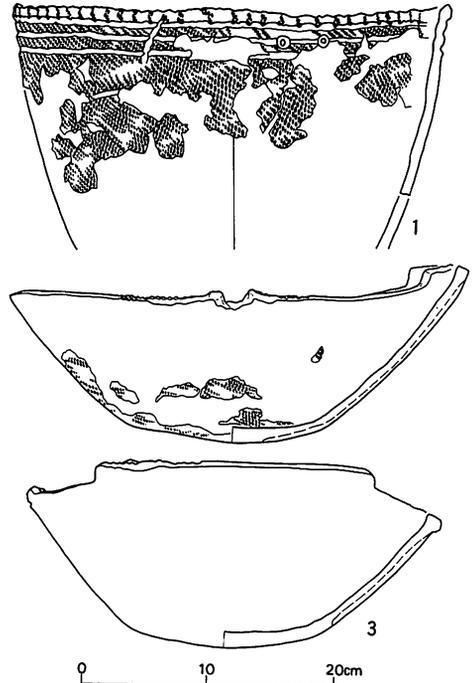
(B): G<sub>2</sub>-64-63 (A)の南約1mのところであり、標高13.9m~14.1mの緩斜面上に位置する。0.6m×0.45m×0.1mの隅丸長方形の浅い落ち込みの中にあり、淡黒色細砂中に混入している。出土土器の総点数は535点で、スクレイパーも2点出土している。

浅鉢形土器1個体分の土器片である。

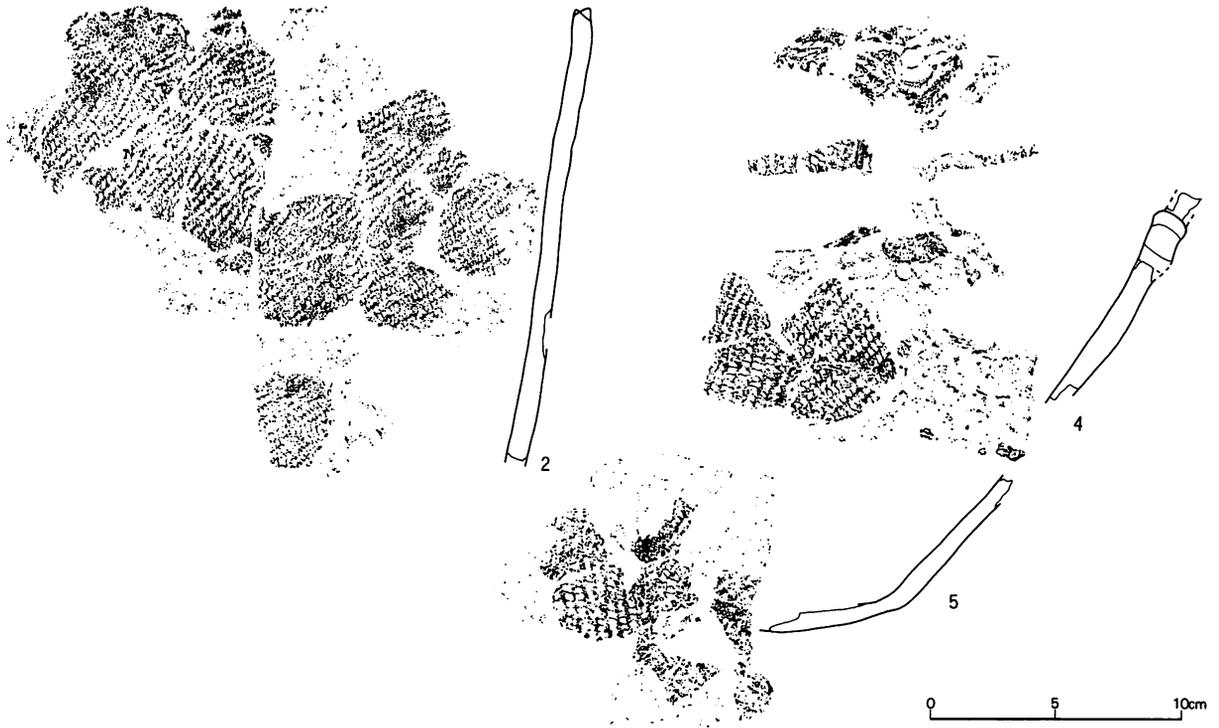
(C): H<sub>2</sub>-64-00・01 標高16mの斜面上に位置する。約1m四方の範囲から、ほとんど内面を上にして、平面的に散布している。出土土器の総点数は285点で、浅鉢形土器1個体分の土器片である。



図IV-10 一括遺物(B)出土の石器



図IV-11 一括遺物(A)、(B)出土の土器



図IV-12 一括遺物(A)、(C)出土の土器

これらが人為的に廃棄されたものかどうかは不明である。ただ(C)は平面的な散布状態からみて原位置からは動いているものと推測される。

土器 1・2 は一括遺物(A)である。1 は口径35cmの大形の深鉢形とみられるもので、口縁がやや外反する傾向をもち、口唇の断面形は尖り気味で、丸味をもつ部分もある。文様は器面に RL の原体による斜行縄文を施したのち、口縁部に比較的幅の広い沈線を 3 条めぐらし、口縁の内外面に縦位の縄の圧痕を並列している。この縄の圧痕は器面の縄文の原体と同一のものとみなされる。2 は口唇の断面が切出し形を呈し、口唇と器面に LR のやや細い原体による斜行縄文を施し、口縁には指頭による押捺を加える。器形は深鉢形とみなされるが、1 よりも薄く、施文の特色から 1 よりはやや古い時期のものとみなされる。一括遺物(A)の主体をなすものは 1 の資料とみなされる。

3 は一括遺物(B)に属するものである。器面に剝落の多いもので、上面観は楕円形をなし、一端に突起を付すものかとみられる。口唇と器面に縄文を施し、内面は平滑に調整されている。両側縁に小突起を設け、その中央を深くくぼませている。器壁はやや厚く、出土位置が(A)と近いことから、1 と同時期頃のものと考えられる。

4・5 は同一個体で、一括遺物(C)である。口唇の断面形は概して切出し形を呈し、突起部に指頭によるかとみられる深くくぼみがつけられている。器面には浅く斜行縄文が施されている。口唇には縄による刻み目があり、口縁部の内面には縄線文がめぐらされている。1・3 と近い時期のものとみなされる。

石器 1・2 は黒曜石製のスクレイパーである。1 は自然面を残す縦長剝片を素材としており、背面の両側縁に加工が施されている。2 は剝片の周縁に加工が施されている。

### 3 包含層出土の遺物

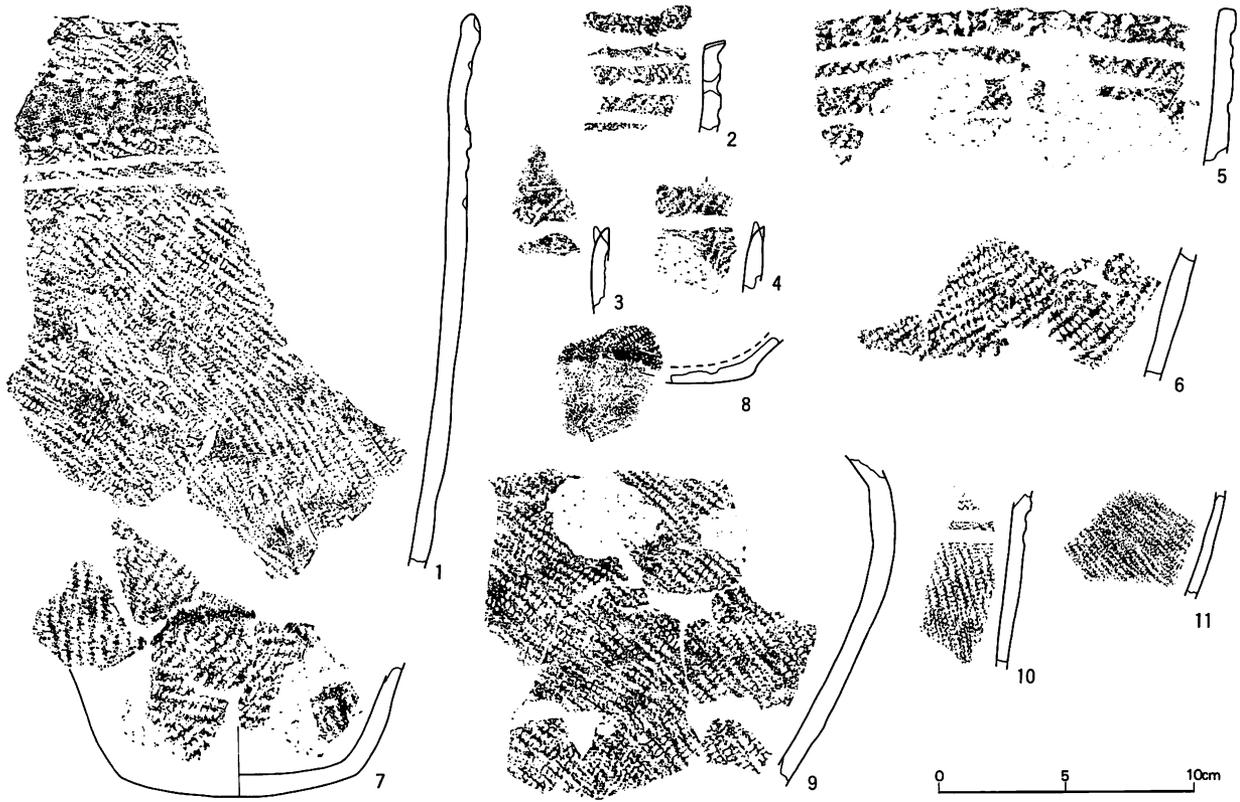
#### (1) 土器 (図Ⅳ-13)

土器はすべて V 群 C 類に属するものである。在地の特色を示すものの外に少量の亀ヶ岡式系統の特色を示すものがある。在地系のもの器形には深鉢形もしくは鉢形を呈するものと、浅鉢形、壺形を呈するものがある。

1～7 は深鉢形もしくは鉢形を呈するものである。1 は口縁部に無文帯の形成されているもので、口縁は外反気味で端部がやや立ち上がる傾向があり、そこに棒状工具によるハの字形の刻み目がつけられている。口縁部の無文帯の上下には斜方向からの刺突文が加えられ、その下に二条の沈線を引き、さらに刺突文を加えている。2 は口唇に棒状工具による刻み目を施すもので、さらに指頭の圧痕が加えられている。器面には横走る沈線文が施されている。3・4 は口縁に指頭による押捺のあるものである。口唇と器面に LR の原体による縄文を施している。5 は口縁に縄の圧痕による刻み目を施し口縁部に 4 条の沈線をめぐらすものである。6 は 5 と同一個体である。7 は鉢形土器の底部で、体部との境に稜があり、底面は丸味をもつ。8 は浅鉢形土器の底部破片で、体部との境にくびれをもち、底面には縄文痕跡を認める程度である。体部の縄文は細かく整っている。9 は壺形土器の肩部から体部にかけての破片で、浅く斜行縄文が施されている。10・11 は亀ヶ岡式系統の特色をもつ土器である。10 は細かい縄文の施された薄手の土器で、浅鉢形土器の体部破片かとみられる。

#### (2) 石器 (図Ⅳ-14)

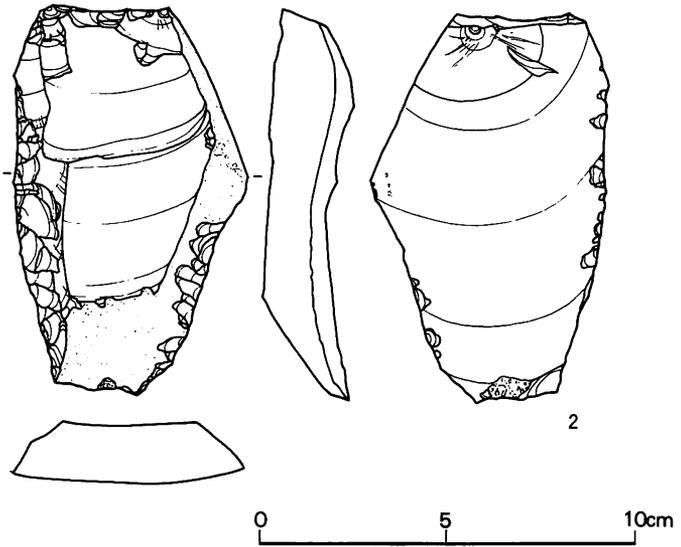
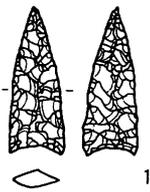
I 黒層から出土した石器は 11 点、剝片を含めて 71 点である。出土した石器には石鏃、スクレイパー、石斧片、砥石片等があるけれども、石斧片、砥石片は細片であるため、石鏃とスクレイパーのみ図示



図IV-13 包含層出土の土器

した。

1は凹基の石鏃。やや肉厚である。  
2はスクレイパー。大形で厚みのある縦長剝片を素材とし、左右両側縁に加工が施されている。右側縁から下縁にかけて礫皮面が残る。1・2いずれも黒曜石製。



図IV-14 包含層出土の石器

表IV-1 遺構一覽

遺構番号	位置	規模 (m)			平面形	検出面	掘り込み面
		長径×短径	最大深				
P 10	G <sub>2</sub> -64-25	0.85 × 0.90	0.98	円形	Ta-c直上	Ta-c直上	
P 52	G <sub>2</sub> -64-05	0.51 × 0.43	0.10	楕円形	ⅡB上面		
P 53	G <sub>2</sub> -64-05	0.52 × 0.49	0.05	円形	ⅡB上面		
P 54	G <sub>2</sub> -64-05	0.51 × 0.47	0.08	長円形	ⅡB上面		
P 55	G <sub>2</sub> -64-05	0.60 × 0.52	0.15	長円形	ⅡB上面		
P 56	G <sub>2</sub> -64-06	0.67 × 0.50	0.14	長円形	ⅡB上面		
P 57	G <sub>2</sub> -64-15	0.44 × 0.40	0.10	円形	ⅡB上面		
P 58	G <sub>2</sub> -64-15	0.50 × 0.49	0.16	楕円形	ⅡB上面		
P 59	G <sub>2</sub> -64-15	0.54 × 0.51	0.19	楕円形	ⅡB上面		
P 60	G <sub>2</sub> -64-15	0.62 × 0.55	0.32	長円形	ⅡB上面		
P 61	G <sub>2</sub> -64-25	0.57 × 0.51	0.24	楕円形	ⅡB上面		
P 62	G <sub>2</sub> -64-14	0.68 × 0.54	0.14	長円形	ⅡB上面		
P 63	G <sub>2</sub> -64-24	0.57 × 0.52	0.30	楕円形	ⅡB上面		
P 64	G <sub>2</sub> -64-24	0.40 × 0.39	0.09	円形	ⅡB上面		
P 65	G <sub>2</sub> -64-24	0.38 × 0.37	0.38	円形	ⅡB上面		
P 66	G <sub>2</sub> -64-23	0.63 × 0.60	0.21	円形	ⅡB上面		
P 67	G <sub>2</sub> -64-33	0.52 × 0.50	0.33	円形	ⅡB上面		
P 76	G <sub>2</sub> -64-32	0.68 × 0.63	0.26	円形	ⅡB上面		
P 77	G <sub>2</sub> -64-32	0.76 × 0.65	0.13	楕円形	ⅡB上面		
P 78	G <sub>2</sub> -64-32	0.60 × 0.55	0.12	長円形	ⅡB上面		
P 79	G <sub>2</sub> -64-55	0.52 × 0.47	0.08	円形	ⅡB上面		
P 80	G <sub>2</sub> -64-65	0.86 × 0.74	0.25	楕円形	ⅡB上面		
P 81	G <sub>2</sub> -64-65	0.68 × 0.64	0.14	長円形	ⅡB上面		
P 82	G <sub>2</sub> -64-64	0.60 × 0.60	0.09	円形	ⅡB上面		
P 97	G <sub>1</sub> -64-74	0.56 × 0.50	0.24	楕円形	ⅡB上面		
P 98	G <sub>1</sub> -64-74	0.42 × 0.39	0.13	長円形	ⅡB上面		
P 99	G <sub>1</sub> -64-64	0.57 × 0.47	0.25	長円形	ⅡB上面		
P107	G <sub>2</sub> -64-22	0.37 × 0.36	0.10	楕円形	ⅡB上面		
P108	G <sub>2</sub> -64-22	0.48 × 0.45	0.10	円形	ⅡB上面		
P116	G <sub>2</sub> -64-41	0.60 × 0.54	0.24	楕円形	ⅡB上面		

表IV-2 遺構別出土遺物一覽

遺構番号	名称	分類	層位	点数
P 10	土器	Ⅱb-3	Ⅱb土上層	1
			Ⅱb土中層	1
	コア	Ⅱb土中層	1	
計				3

遺構番号	名称	分類	層位	点数
P 60	土器	Ⅱb-3	Ⅱb土下層	1
P 67	土器	V c	Ⅱb土中層	208
計				

遺構番号	名称	分類	層位	点数
P 79	土器	Ⅱb-3	Ⅱb土下層	3
			Ⅱb土	1
	砥石		3	
計				7

遺構番号	名称	分類	層位	点数
P 52	土器	Ⅱb-3	Ⅱb土下層	1

遺構番号	名称	分類	層位	点数
P 76	F	F.C.	Ⅱb土下層	1
			Ⅱb土	4
計				5

遺構番号	名称	分類	層位	点数
- 楕円形	(A)	V c		973
				535
			搔器	2
				285
計				1795

遺構番号	名称	分類	層位	点数
P 56	F	F.C.	Ⅱb土下層	1
			Ⅱb土下層	16
計				17

表IV-3 遺構の出土遺物一覽

名称	分類	数量
土器	Ⅱb-3	7
	Ⅳa	1
	V c	2001
搔器		2
F		2
F.C.		20
コア		1
砥石		3
計		2036

表IV-4 包含層の出土遺物一覽

名称	分類	数量	名称	数量
土器	Ⅱb-3	3	石鏃	2
	V c	1488	搔器	1
計		1491	F	40
			R F	2
			F.C.	17
			たがひ	3
			台石	1
			軽石	1
			計	67

表IV-5 遺構の掲載土器一覧

遺構番号	甗	分類	層位
-格土器(A)	1	Vc	IB
-格土器(A)	2	Vc	IB
-格土器(B)	3	Vc	IB
-格土器(C)	4	Vc	IB
-格土器(C)	5	Vc	IB
P-67	1	Vc	覆土

表IV-6 包含層の掲載土器一覧

図番	発掘区	分類	層位
1	G <sub>2</sub> -64-43-1	Vc	IB下位
2	G <sub>2</sub> -64-84-1	Vc	IB
3	G <sub>2</sub> -64-45-1	Vc	IB
4	G <sub>2</sub> -64-45-1	Vc	IB
5	G <sub>2</sub> -64-63-1	Vc	IB
6	G <sub>2</sub> -64-63-1	Vc	IB
7	G <sub>2</sub> -64-54-1	Vc	IB
8	G <sub>2</sub> -64-25-1	Vc	IB
9	G <sub>2</sub> -64-25-1	Vc	IB
10	G <sub>2</sub> -64-80-1	Vc	IB
11	G <sub>2</sub> -64-92-1	Vc	IB

表IV-7 遺構の掲載石器一覧

遺構番号	甗	名称	層位	大きさ (mm)	重さg	材質
-格土器(B)	1	搔器	IB	41.2×20.8×6.4	5.4	obs.
-格土器(B)	2	搔器	IB	30.0×33.7×7.0	6.0	obs.

表IV-8 包含層の掲載石器一覧

甗	名称	発掘区	層位	大きさ (mm)	材質
1	石鏃	H <sub>1</sub> -64-00	IB	39.5×14.5×4.8	obs.
1	搔器	G <sub>1</sub> -64-45	IB	101.8×61.2×15.6	obs.

#### 4 まとめ

I黒層では、南向きの斜面上で26基の土壇が検出された。掘り込み面はTa-c直上(P-10以外はII黒上面での検出であるが、覆土の堆積状況から、Ta-c直上からの掘り込みであると判断した)である。これらの土壇には、①標高22m~22.5mの台地縁辺、②標高15m~18.5mの斜面、③標高12.5m~13.5mの緩斜面の三つのまとまりが認められる。P-10以外の全体像は不明であるが、覆土、検出面での状態から判断すると、P-10と同様の規模、形状などが推測される。また構築時期も大きな隔たりはないものと思われる。平面形は円形か楕円形、径約1m、深さ約0.9mほどで、壇底はII黒層中につくられている。覆土はTa-cをベースにした混合土で、土壇墓と考えられる。時期は縄文時代晩期(V群C類土器)のものである。平成元年度調査では台地縁辺部のI黒層中位から焼土が1か所検出され、また台地上では同時期(今年度の出土土器よりもやや古い様相が認められる)の土器、石器などが出土している。美沢川流域(用地内)のI黒層では、これまで縄文時代晩期(V群C類土器)の住居跡が2遺跡で、土壇(墓)が6遺跡で発見されている。最も上流に位置する美々2遺跡<sup>1)</sup>では、川沿い低地部で住居跡が34軒、その周辺から斜面上にかけて土壇(墓)など295基発見されている。美々3遺跡の東に隣接する美々4遺跡<sup>2)</sup>では、低地緩斜面から斜面上にかけて土壇(墓)などが245基発見されている。また美々5遺跡<sup>3)</sup>では、低地部で住居跡が1軒、その周辺と斜面上にかけて土壇(墓)が4基発見されている。美沢川右岸で美々4遺跡の対岸にある美沢1遺跡<sup>4),5)</sup>では、低地部で土壇墓が7基発見されている。台地上では同時期の土器、石器などが出土しているが、遺構は土壇が2基発見されているにすぎない。このように住居跡は川沿いの低地平坦部から緩斜面(標高7m~12m)につくられ、その周辺から斜面上にかけて土壇(墓)がつくられているという立地の違いが顕著に認められる。美々3遺跡も、土壇(墓)についてはこの傾向内にあるといえるだろう。美々3遺跡は遺構の検出状況から、調査区外の南側、川沿いに遺跡が広がることは明らかであり、あるいは川沿いの低地部に住居跡を含む遺跡の中心部がある可能性は大きいといえるだろう。

美沢川流域で発見されている土壙（墓）の規模、形状などに大差は見られない。

美沢川流域のⅠ黒層では川沿いの低地部から斜面、さらに台地上に縄文時代晩期（Ⅴ群C類）の土器、石器などが多く出土している。ところが斜面上からの出土遺物より台地上からの出土遺物の方がやや古い様相が認められる。川沿いから斜面にかけての各遺跡間には、出土遺物から判断すると、新旧の差異が余り認められないという傾向が伺える。このような諸状況を考え合わせると、Ta-c降灰以後、台地上がまず生活の場として利用され、その後余り時期を隔てずに川沿い低地部に移動して、美々2遺跡周辺と、美々3、4、5遺跡周辺という二つの大きなまとまりをもって集落が営まれていたことが推測される。そして縄文時代後期から晩期にかけてのように、死者を葬るのに周提墓や盛土墓などを構築することなく、住居の周辺あるいは斜面上に土壙を掘って埋葬したのであろう。

Ⅰ黒層出土の土器には深鉢形もしくは鉢形、浅鉢形、壺形の土器と亀ヶ岡式系統のものが認められるが、これらを昨年度出土した資料などと比較すると、その間に若干特色を異にするものがある。

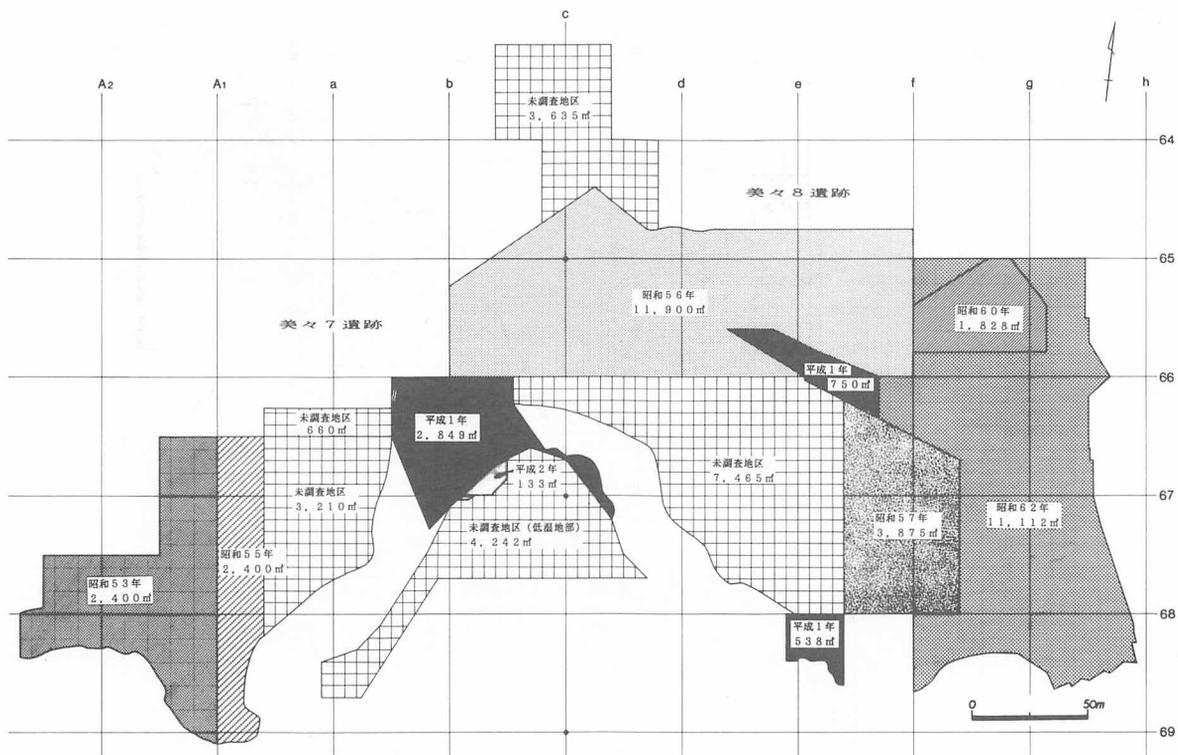
昨年度出土した資料では、口縁に指頭の押捺を加えるものがまとまって出土しているが、本年度出土資料ではわずかである。また皿形土器の口唇の施文も本年度の浅鉢形土器のものよりも整ったものが認められる。本年度出土資料には口縁に縄を押捺するものが認められ、昨年度のものとは趣きを異にしている。

これらをⅡ黒層出土の資料と比較すると、昨年度の出土資料の方が、Ⅱ黒層の資料に近似していて、本年度のものよりも古い段階のものと認められそうである。これらのことから、Ⅰ黒層出土資料には器形の面で、口唇の断面が切出し形を呈するものから尖り気味のものへ、口縁に指頭痕のあるものから縄の圧痕のあるものへと変遷する傾向をもつと考えられる。

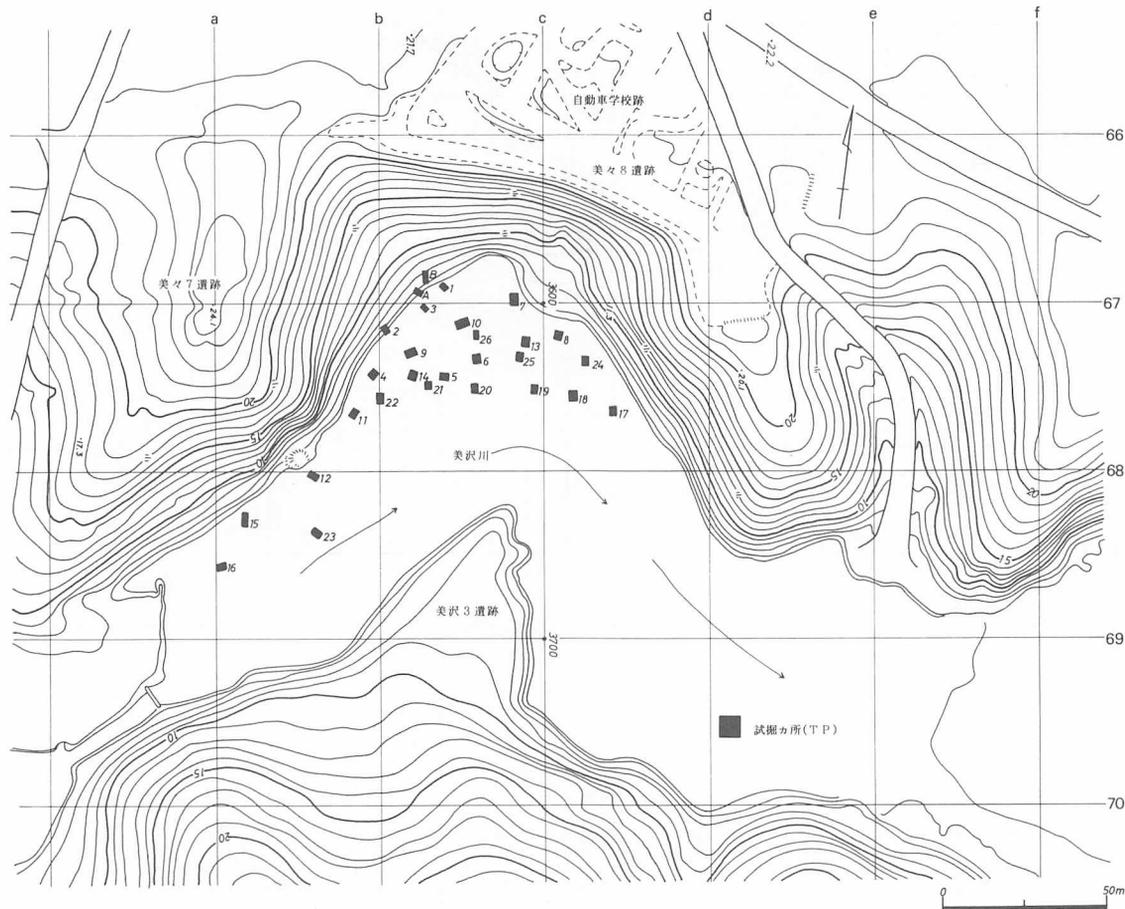
#### 註

- |                  |           |              |
|------------------|-----------|--------------|
| 1) 財北海道埋蔵文化財センター | 1984・1985 | 『美沢川流域の遺跡群』Ⅸ |
| 2) 北海道教育委員会      | 1977      | 『美沢川流域の遺跡群』Ⅱ |
| 財北海道埋蔵文化財センター    | 1983      | 『美沢川流域の遺跡群』Ⅶ |
| 財北海道埋蔵文化財センター    | 1984      | 『美沢川流域の遺跡群』Ⅷ |
| 財北海道埋蔵文化財センター    | 1984・1985 | 『美沢川流域の遺跡群』Ⅹ |
| 3) 財北海道埋蔵文化財センター | 1984      | 『美沢川流域の遺跡群』Ⅷ |
| 4) 北海道教育委員会      | 1976      | 『美沢川流域の遺跡群』Ⅰ |
| 5) 財北海道埋蔵文化財センター | 1987      | 『美沢川流域の遺跡群』Ⅺ |

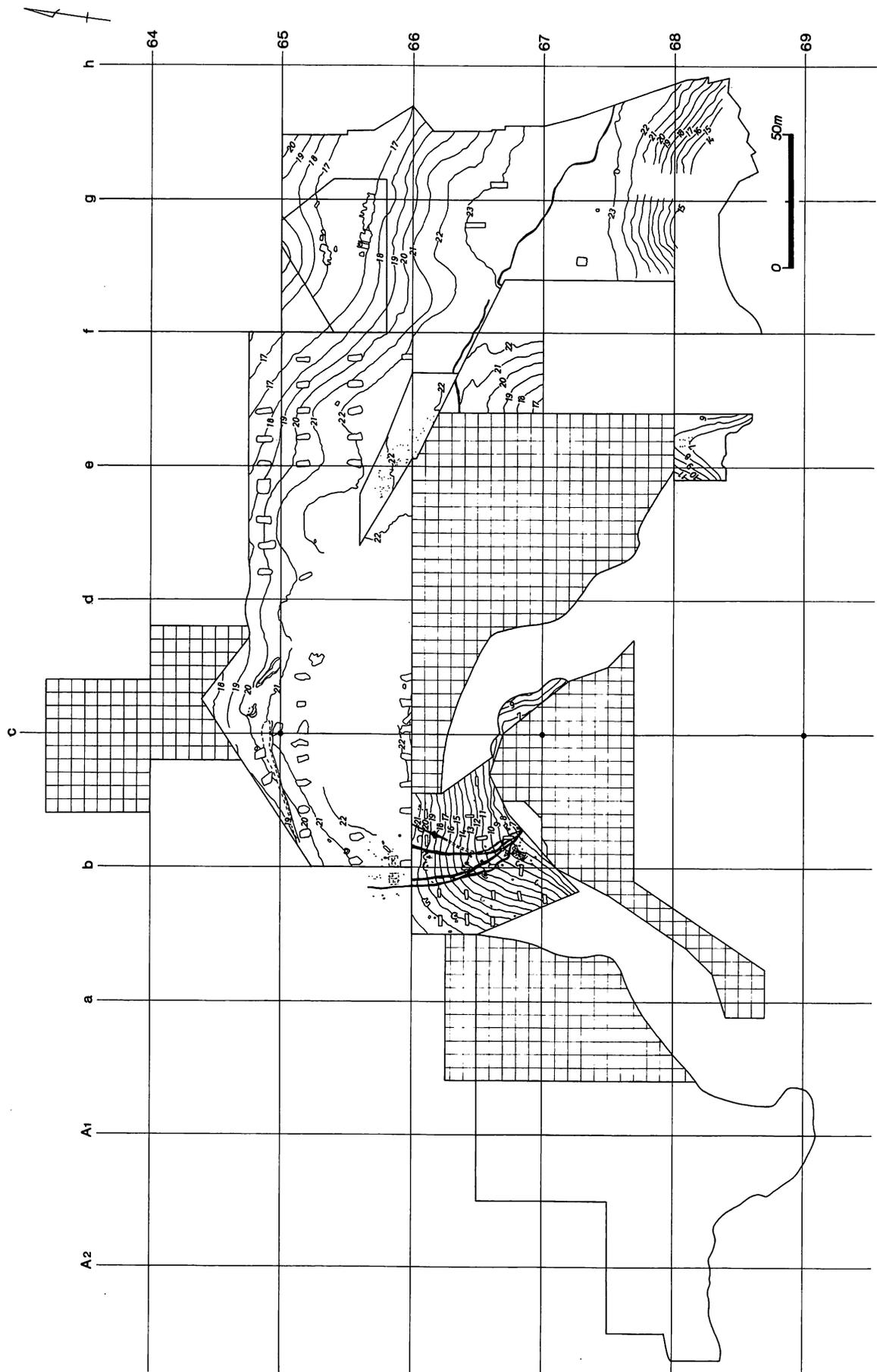




図V-1 美々8遺跡の調査推移



図V-2 調査前の現況



図V-3 I 黒層上面の遺構

美沢川の河道寄り部分と前回の試掘箇所の補足調査を行い、TP-17~26を掘削した。試掘調査は、斜面の発掘調査終了後、湿地用バックホウとブルドーザーで斜面をTa-d<sub>2</sub>層まで掘削し、美沢3遺跡に向かって埋立て転圧した。土量の不足分は、包蔵地外の美々7、美々8遺跡下の斜面・崖部分を削平し補充した。現状では機材や採取した多量の脆弱遺物を台地上へ運ぶことが困難であるため、調査用道路を斜面部分に造成した。また、斜面からの湧水が埋立部分に侵入し重機の走行を妨げるため、斜面の裾に排水用の側溝を廻らした。美沢川の現河道付近では、土量を補充し埋土を転圧する度に軟弱土壌がヘドロ状に河道に向かって流出し、埋立てに限界を生じた。このため、遺跡がさらに広がる可能性はあるが、これより先への埋立ては現状では困難であると判断し、美々8遺跡湾入部約3,000m<sup>2</sup>と美々7裾の約700m<sup>2</sup>を埋立てた段階で、バックホウの安全のために鋼鉄板を敷き、TP掘削を実施した。埋土作業に日数を費やしてしまったことからやや粗い遺物採取作業とならざるをえなかった。調査の結果、現河道付近では前回より包含層のレベルが低く、層厚が厚いため、包含層の上部しか採集出来ない場合も多かったが、前回同様に多量の木製品が検出された。数地点において繊維製品や微細遺物の検出に努めた結果、背負い縄が完全な形で検出でき、土壌ごと取上げた。

・遺物整理1（平成元年8月7日～平成2年3月27日）

整理体制が整わないため現場段階での遺物選別・集計作業のみ行った。遺物はコンテナとセンター屋外水槽で水漬保管した。一部の脆弱遺物については保存処理を開始した。

・遺物整理2（平成2年5月7日～平成3年3月27日）

各TPごとに接合作業を行ったのち、再度分類し、製品ごとにコンテナ・シール容器に分別した。観察カードに必要事項を記録したものから、実測、写真撮影、樹種同定を行い、随時、保存処理を行っている。保存処理は平成3年度以降も継続して行う。

(2) 調査の経緯

調査地点は、美沢川左岸のふたつの舌状に張出した台地に挟まれた湾入部分に位置する低湿地（現状）である。西側は美々7遺跡に、中央部と東側は美々8遺跡下の斜面あるいは崖部分に接する。この地点は、松浦武四郎の『再航蝦夷日誌』に描かれた「ビビ小休所」とみられる建物跡が確認された地点から舌状の台地を挟んで約100m程上流である。周辺の調査では、昭和56年度（1981 北埋調報7）に台地上で家屋とみられる柱穴群と道跡が発見されている。平成元年度の調査によってその道跡が斜

表V-2 試掘調査出土遺物一覧

TP	A	B	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	計
名 称																													
加工木	41		3	15	50	123	7	114	319	107	121	390	5	14	32		9	46	20	7	16	10	4	8		130	11	277	1,879
炭化木材									26	23	10	20		11			1		3										94
加欠・自然木計	101			519	274	826	303	771	718	262	597	399	1132	211	86		860	194	148	53	139	11	130	51		155	2	334	8,276
腐食・不明						1			12	4																			17
木製遺物計	142	0	3	534	324	850	310	885	1075	396	728	809	1137	238	118	0	870	240	171	60	155	21	134	69	0	285	13	611	10,268
背負紐(竹)																								1					1
繊維製品計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
自然遺物計	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	29
鉄 鍋	1																												1
瓦 甃					1																								1
瓦 丸											1																		1
金属製品計	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
縄文時代早期	1																												1
縄文時代晚期															1														1
弥文土器									2																			2	4
土 器 計	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
磁 石												1																	1
火 打 石					2				3			5																	10
礫	6		1	12	229	35	49	32	53	41	18	512	1	6			17		5	3	1	6	5	1		28	19	1,080	
剥 片					1																								1
軽 石			1		30	5	5		2			119	2	2			2						1			1		170	
石器等計	6	0	2	12	262	40	54	32	58	41	19	636	3	8	0	0	19	0	5	3	1	6	6	0	0	29	0	1,262	
合 計	151	0	5	547	590	993	364	919	1138	439	749	1445	1140	245	118	0	889	240	177	63	156	27	140	61	0	323	13	636	11,568

※純はTP-2付近の監視区からの出土である。

面を下り調査区外の美沢川の水面下に没していることが判明した。建物跡や焼土群も確認されており、無数の杭跡群も水面下に分布範囲が拡大すると予想された。しかし、低湿地部分は発掘調査予定区外であることや建設中のカルバート（函渠）工事終了後は直ちに盛土工事を行う予定であったことなどから、急遽、北海道教育委員会と北海道開発局札幌開発建設部との間で数次にわたる協議を重ねた。その結果、包含層の内容確認とその範囲確認のための試掘調査を早急に行うことになった。試掘地点は低湿地のため地盤が軟弱で調査者の歩行も困難な状況にあったため、埋土・転圧を繰り返しながら重機（バックホウ）により遺物包含層を土壌ごと採取し調査することにした。採取した土壌からは、人力により遺物を抽出し精査した。調査の結果、水面下（現水面標高5.2m）約3～4mに杭をはじめ木製遺物や繊維製品を多量に包蔵する層の存在が確認された。包含層はさらに美沢川向かって広がると予想されたが、これ以上の分布調査は困難であることから、美々8遺跡低湿地部では4,375㎡を包蔵地として新たに取り込んだ。なお、この付近の地下には被圧地下水があるとされている。（美々4遺跡呑口の報告では、地下7mと9mに被圧地下水があり、それらの圧力はそれぞれ+1m、+3mである。）調査計画の策定に当たっては十分なデータ収集と安全対策が必要である。

### （3）調査の概要（表V-2）

今回の調査において、28カ所中、TP-B、14、23を除いた25カ所のTPから多量の木製遺物、土器、石器製品、金属製品、自然遺物などが11,568点検出された。木製遺物はその90%を占める。表中の各TPにおいての遺物点数の差は遺物密度を反映したのではなく、バックホウのバケットが包含層までに十分に達していなかった場合や遺物採取・選別段階での調査精度の差である。

木製品の包含層は0黒層とⅠ黒層であり美沢川に向かって層厚が増す。0層厚については、Ta-a層（1739年降灰）とTa-b層（1667年降灰）に挟まれており時代を特定できる。Ⅰ黒層中にもUs-b<sub>2</sub>（1663年降灰）やTMに相当する火山灰が存在し、分層及び時代の特定が可能である。

遺物は、アイヌ文様の彫刻、飾り板、花矢状、中柄状、ヤス、シロシの刻まれた樫受部、ペラ、木槌、曲げ物の把手、底、桶の側板、盆状の剝物、漆器、ホゾ穴のある建材、薄柱目板、板材、角材、杭状、箸状、串状の木製品、木端、切片、切痕のある枝などの加工木が多量に出土した。土器は縄文時代早期、晩期、擦文土器時代の破片が出土し、石製品は砥石、火打石、錘石と思われる棒状の礫も多数出土した。金属製品には、鉋、鉄鍋片、葉莢などがある。また、樹皮、カワシンジュガイ殻皮、堅果類、木葉、昆虫などの自然遺物も多数出土している。平成2年度の調査では、上記に加えて、ヒキリ板、樫、シロシのある樫受部、板綴舟の側板、マキリの柄、マレック台、種々のヤス、弓、アイヌ文様の彫刻部材、杓子、団子篋、炉鉤、チセの柱材、楔の打ち込まれた木組、完形の漆塗椀、根付、縄などが検出された。また、TM火山灰の上下から擦文土器が出土したほか、Ta-c層を掘り込んで出土した続縄文時代の倒立した完形の壺も検出されている。金属製品では、煙管の雁首、鉄鍋片、カスガイ、洪武通宝などが出土した。他に、透明な緑色のガラス玉や琥珀玉が検出されている。出土した木製遺物などの多くはTa-a降下（1739年）以前の江戸時代のものである。

各包含層の年代を遺跡周辺の遺物を含めて検討すると、Ⅱ黒層は不明部分が多いが美沢3遺跡の状況から縄文時代早期～後期、Ⅰ黒層は縄文時代晩期～続縄文時代～擦文文化期～（アイヌ期）～江戸時代（1667年まで）、0黒層は江戸時代（1667年～1739年まで）、表土層は、江戸時代（1739年から）～幕末～明治～大正～現代までの時代幅と考えられる。しかし、表土層も、低地部分では数枚に分層可能であり、今後、現代の地表面と新旧を区別する必要がある。

2年の調査を総合すると、擦文土器の分布は少なくともTP-26まで確認でき、台地上では1軒しか確認されていない住居跡などが集落として低地部分から確認される可能性もある。木製品などの

一部もこれらに伴うものかも知れない。低湿地部は単なる遺物のみの包蔵地ではなく、舟の部材、漁撈具、建材、多種多様な生活用具の出土や立並ぶ杭列などから舟着場などの施設と共に家屋等の遺構が存在すると予想される。遺物は多種多様であり、内容は地点ごとに変化に富んでいる。上記の構築物を始め、当時の生活に必要な道具・用具類等のすべてが埋蔵されている可能性が強い。

遺物からはアイヌと和人の両要素がうかがわれ、現状では次のような二つの状況が想定される。ひとつは、0黒層～I黒層上面では「ユウフツ越」以前の内陸交通の中継地点として舟着場などが存在し、アイヌの人々が道先案内や荷役を行っていたとの想定である。板綴舟などを和人のために誂えていた可能性もある。出土した和産物の一部は、ここを訪れた和人からアイヌへの交易品であったのかもしれないということである。もう一つの考え方は、交通路の存在は否定できないが、多量のアイヌの民具の出土から、アイヌの集落がここに存在し、漁撈や造船などの作業空間あるいは生活用品などの送り場の空間であった可能性である。その場合の和産物は既に交易品として入手したアイヌ自身の所有物であったとも考えられないであろうか。いずれにしても、考古学上だけではなく民具研究、交通史にとっても時間と場所を特定できる数少ない貴重な遺跡であることは間違いない。今後の層位的調査が期待される。

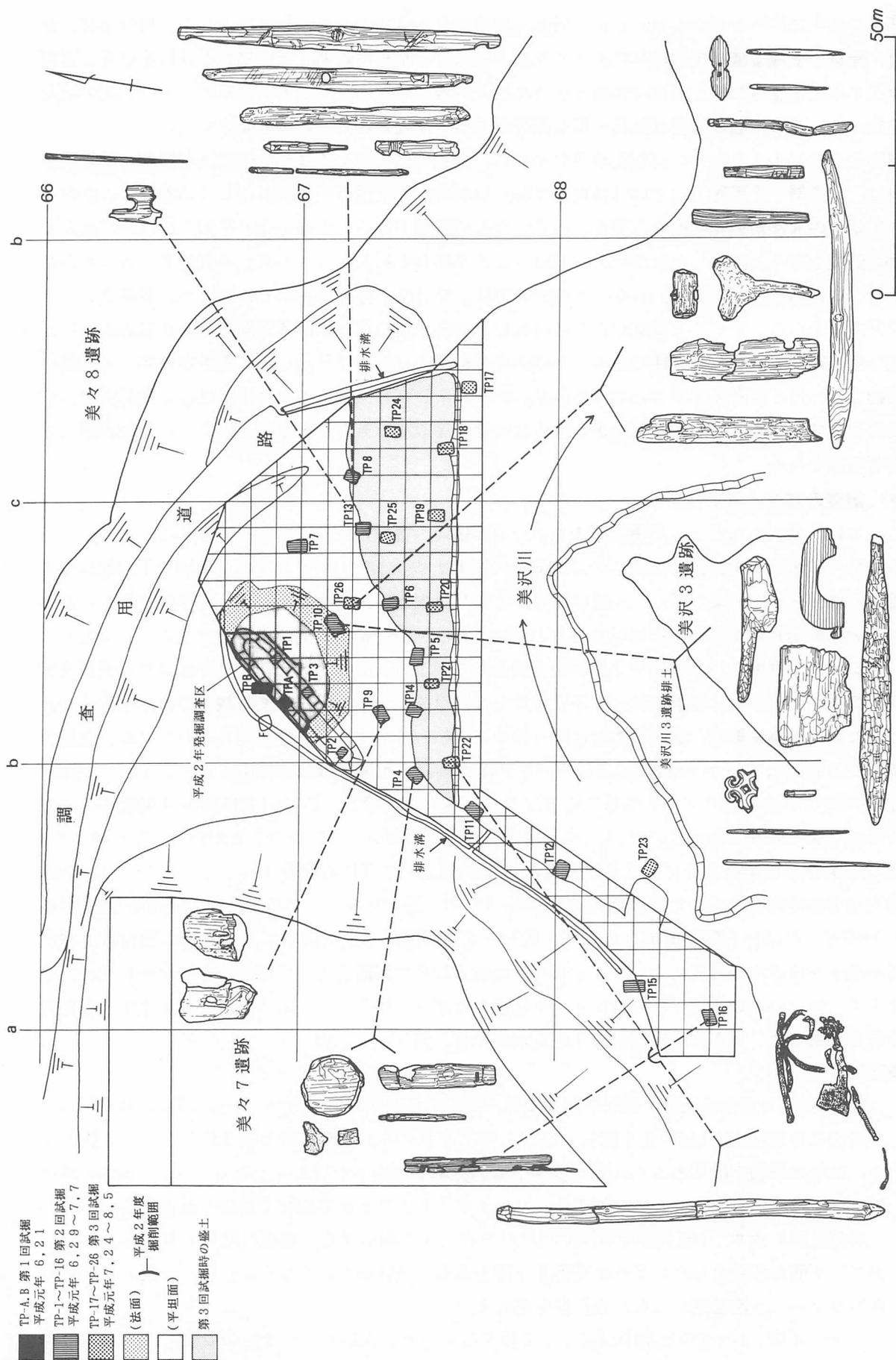
#### (4) 調査の方法 (図V-5)

ここでは、調査方法とともに重機調査における問題点および留意点を含めて記述する。

調査地点は現低湿地部及び美沢川の河道部分に位置する。調査の対象となる0黒層やI黒層は厚く堆積したTa-a層およびTa-b層に埋もれており、現水面下(標高5.2m)に存在することから人力での試掘調査はまったく不可能であると判断した。検討の結果、対象土壌をクラムシェルあるいはバックホウで掘削し、0黒層やI黒層を土塊として取上げ、それを人力により砕きながら遺物を採取する方法がとられた。地盤が軟弱で不安定なためクラムシェルなどの大型重機は走行が不可能であるばかりか、土壌採取時に脆弱な木製遺物を粉々に破損してしまう可能性が考えられたため、走破性、運動性から判断してバケット容量0.7m<sup>3</sup>のバックホウによる土壌採取法が採用された。TPの壁面があざやかになるよう、バケットに爪を隠すアタッチメント付けた。当初のTP掘削は現状のままで行っていた。しかし、包含層が対岸に向かって広がることが判明したため、バックホウの走行が可能になるようにできる限り低湿地部を埋立ててTPを掘削することにした。TPの掘削地点は予め検討されていたが、地盤の状況が必ずしも一定でなかったためと時間の制約から埋土(盛土)の安定した部分を随時選択しながら、約10~20m間隔にTPを掘削した。土壌の層位は、掘削カ所が湧水や浸透水の浸入により、すぐにヘドロ状となり土層断面として確認できなかったため、やむをえず、掘上げ土の土性(特に火山灰)を確認しながら、沈んだアームの深度で対象土壌の層位及び位置を判断した。以下に重機調査の工程を説明する。図V-5参照。

#### 調査工程

1. 掘削開始。(埋土転圧後、掘削を開始する。周辺に細かな亀裂が入り、一部に崩落が始まる。)
2. 周辺に亀裂拡大。(崩落土を除去しながら掘削を進める。浸透水のためTP内がヘドロ状となる。植物繊維層を破るとさらに水が湧き出る。泥水で水面下が見えなくなる。Ta-a層を確認し、掘上げ土壌を土性ごとに分別する。バックホウおよび水面の振動で亀裂が拡大する。)
3. 崩落を繰り返す。(壁が地滑り状にバタバタと大きく崩落する。亀裂に注意しながら、出来るかぎり水面を波立たせないように崩落土を除去する。包含層が近くなると、アーム長でおよその深度つかみ、土性を確認しながら作業を進める。)
4. 土壌の採取。(ヘドロで水中がまったく見えないため、深度および土性の変化で包含層の位置



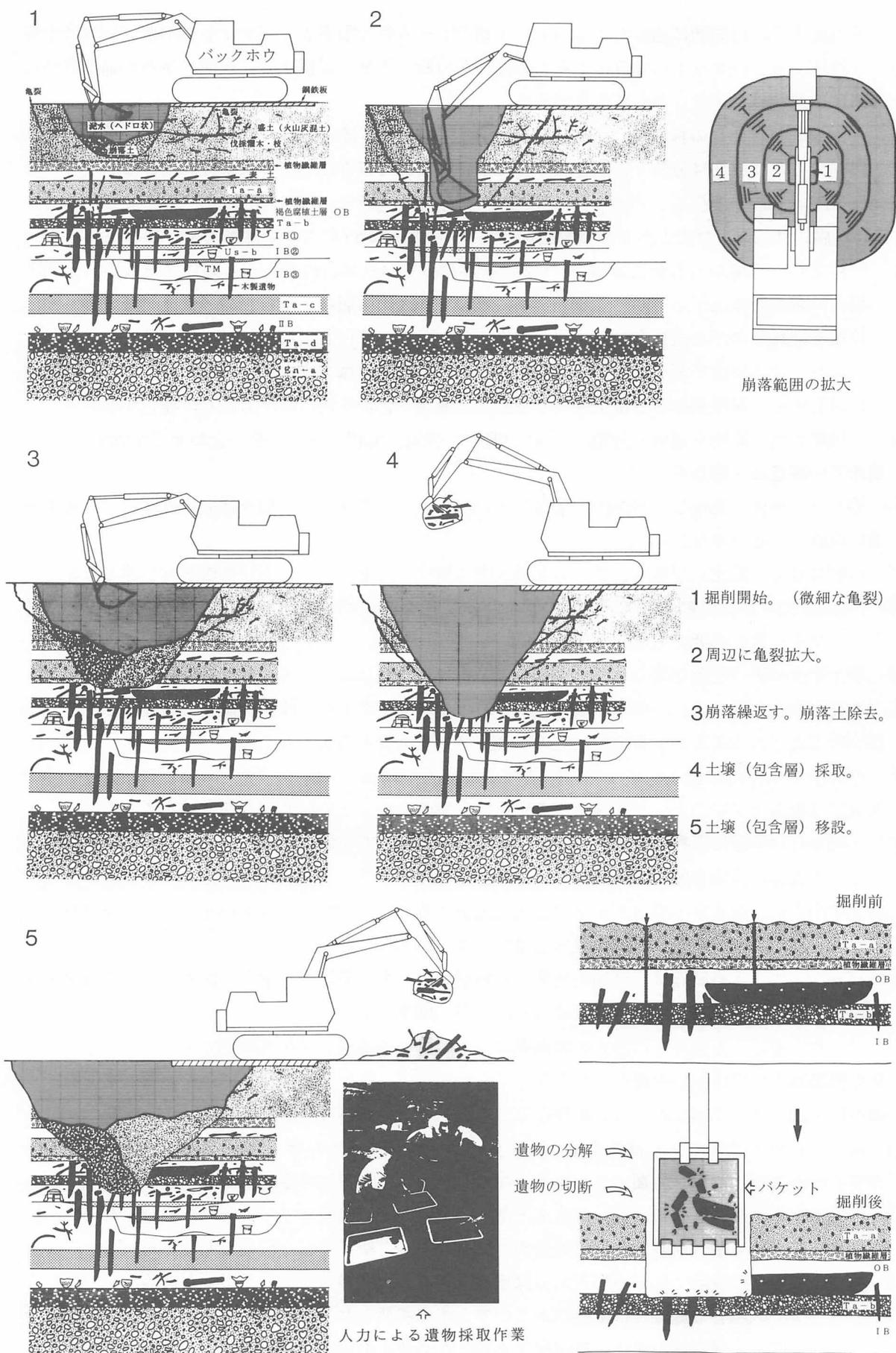
図V-4 調査後の現況と試掘位置 (TP)

を判断する。目的層に達したところで、重機のアーム長の限界までバケットを下げ、一気に土壌を採取する。バケットによりほとんどの遺物が分断、折損・圧損する。水面下からの掘上げ時に一部の遺物はヘドロとともに流れ落ちる。)

5. 土壌（包含層）の移設。（土壌を TP から離れた場所へ移設する。バケットから土壌を降ろす段階でさらに遺物は分断・折損される。土壌はコア部分以外はヘドロ状に流れ広がる。）
6. TP は、必ず埋戻し、バケットで転圧。（掘削箇所にテープ張りを視認できるようにする。TP 周辺は、掘上げ土とヘドロで泥沼状となり、重機の走行や人の歩行が困難となる。）
7. 移設した土壌から遺物を採取。（ヘドロ状となっている場合は手さぐりの作業となる。土塊の場合は包含層の上下が不明となる場合があるので、火山灰層などから土層の先後を確認し、検出位置を記録しながら遺物を採集する。採集された遺物は TP および層位ごとに分別し、水を張ったコンテナに漬けておく。ただし、脆弱なものや重要遺物は当て木や不織布で養生し、別の容器に保管する。繊維製品などは土壌ごと取上げ、崩壊や乾燥を避けるため直ちに梱包する。）
8. 採集された遺物を選別・分類。（TP、遺物の種類、形状、保存状態に合わせて保管する。）

#### 調査での問題点・留意点

- ① 調査地点全体を整地し、平坦面を確保していないと一定の深度で土壌を採取できないため対象土壌の位置が想定できない。
- ② 軟弱な埋土（盛土）が厚く、アームを最大限に伸ばしてもバケットが包含層まで到達しない。
- ③ 作業指示および土層観察を担当するものと TP 周辺やバックホウ周辺の崩落や亀裂を常時チェックする者が必要である。
- ④ 埋土や火山灰の崩落が著しいためトレンチ調査は台地縁返部のわずかな地区に限られる。
- ⑤ 地盤が軟弱な場合は、バケットを引き上げるときにバックホウ自体が沈降してしまう。あるいは鋼鉄板ごとずれることがあるので地盤の安定を待って調査を開始すること。
- ⑥ バケット 1 杯分の径 1～2 m 程の掘削地点が崩落の繰返しにより径 4～6 m 程に広がる。TP 周辺には近寄らないこと。バックホウの走行に支障のないように掘削地点を検討すること。
- ⑦ 土壌からは早急に遺物を採取することが望ましいが、時間を置く可能性がある場合は、乾燥を避けるため十分に土壌を湿らせブルーシートなどで包んでおくこと。また、直接地面に移設すると、盛土中のものが混入する場合があるので充分注意すること。鋼鉄板やコンパネの上に土壌を移設しておくことで遺物採集が容易に行え、混入を避けることができる。
- ⑧ バックホウによる調査は、遺物の切断・分断が著しいので遺物量が増え、保管スペースも増大する。クラムシェル使用した場合は、それらがさらに増加する。
- ⑨ バックホウによる調査での最大の問題点は、大型遺物や遺構の存在を確認できないことであり、舟や構築物としての屋根や壁などが存在しても、部材の一部だけしか採集できないことである。木組や桁・梁のように組まれたものが存在してもその構造は知ることができない。
- ⑩ 同一 TP 内の遺物であれば接合率も非常に高いので、できるかぎり割れ口の新鮮なうちに接合作業を行うこと。選別・分類作業が容易となり実測図作成・写真撮影時に混乱が起きない。
- ⑪ 自然木と思われるものでも充分な水洗・選別・分類が終了するまでには安易に廃棄しないこと。加工木と接合する場合が多く、保存処理のテストピース、樹種試料や環境復元の参考試料となる。
- ⑫ 遺物の取上げの段階で保存処理方法や保管方法がある程度検討しておく必要がある。
- ⑬ 当センターの現有の施設には限界があるので、水に浸漬した多量の遺物整理作業スペースおよび保存処理・収蔵・保管施設を早急に確保することが必要である。



図V-5 重機調査の状況

## 2 土層の状態

平成元年度の試掘調査時の状況に平成2年度の予備調査の状況を加えて記載する。標準土層については図I-2を参照のこと。想定図は図V-5に模式化している。

低湿地部の土層は、表土層上部、Ta-a層上部、0黒層上部に植物繊維層が認められるのみで、台地上と大きく変わるものではない。各層とも美沢川に向かってしだいに層厚が厚くなる傾向がある。II黒層、Ta-d層、En-a層は斜面縁辺では確認できたが、美沢川よりの遺跡中央では確認できていない。現在の水面標高は5.2mである。埋土（盛土）面標高は約6.5～7.0m、厚さは約2.5～3.5mである。埋土には腐植土、火山灰、伐採した枝が混在している。埋土は平成元年8月から平成2年7月の1年間に約0.5～0.6mほどの沈下が認められた。遺物包含層は、水面下約1.5m～3.5mに位置し、その標高約2.0～4.0mである。木製品などの有機質遺物の包含層は、0黒層とI層である。表土層にも若干遺物を包含していると思われる。0黒層は台地上では層厚が極薄く、粒径の大きいTa-b層の隙間に沈降していて分層が困難な層である。しかし、低湿地部では美沢川に向かって厚くなり、約20～40cmの層厚を持つ。出土した木製遺物のほとんどは0黒層出土のものである。周辺の地形図や試掘時の包含層の深度変化から、美々8遺跡斜面のd-66区から美沢川に向かって沢跡が認められ、沢地形の凹地部分は、独木舟や板綴舟などの停泊しやすい入江状の沼であったと想定される。0黒層は1739年（Ta-a降灰）から1667年（Ta-b降灰）までの時間幅を与えることができ、今回の調査で良好な包含層として確認できたことは成果の一つである。Ta-b層は台地上から斜面縁辺にかけては約3～5cmと層厚が薄いですが、美沢川に向かってしだいに厚くなり約10～20cmの安定した堆積となる。Ta-b層は0黒層を確認するための重要な層であり、低湿地部の調査では堆積状況とその範囲を早急に押さえることが急務である。今後は台地上においても0黒層を丹念に精査し、低地の遺構、遺物との関係を検討することが重要である。I黒層は美沢川に向かって急激に厚くなり、0.5～1.5mの堆積となる。I黒層はTa-b降灰により美沢川の水位が上昇するまでのあいだは安定した微高地であったと考えられる。I黒層中にも0黒層と同様に入江状の沼が存在したと考えられる。I黒層自体はこれまでの調査から縄文時代晩期、続縄文時代、擦文土器時代～江戸時代初期の包含層とされている。試掘時の数カ所のTPからUs-b（1663年降灰）やTMと考えられる火山灰が検出され、平成2年度の調査では斜面縁辺に沿って広がるTMを挟んでその上下から擦文土器が多数出土した。以上から今後はI黒層もUs-bやTM層によって数層に分層することが可能である。木製遺物はTMより上層に多く包含されてはいるが、さらに美沢川によった部分で擦文時代の木製遺物が確認できるかも知れない。平成元年度の調査で確認された杭跡群は低湿地部でも確認され、TMの面にも多数の杭跡が認められた。Ta-c層を貫いて、II黒層に達しているものもある。杭跡や木製遺物は擦文土器時代～江戸時代初期の可能性があり、その多くはI黒層上面の江戸時代初期のものであろう。I黒層下位はTa-cとI黒層が混在しており二次堆積の土壌と考えられる。これまで擦文時代の遺物については、斜面部分や低地部からはほとんど出土がみられなかった。また、台地上では多量の土器、石器、焼土、集石等が検出されるにも関わらず、良好な住居は確認されていない。住居跡が検出されないことがこの遺跡の特徴であり、疑問点でもあった。今後の調査において低湿地部から擦文時代の堅穴住居や江戸時代の舟着場、建物などの構築物の検出が期待される。II黒層についてはTP-9から早期の土器が検出されたのみであり、バックホーのバケットが包含層まで届かなかったため不明である。しかし、対岸の美沢3遺跡のII黒層中の遺物が低湿地に続いていたことや上流の美々4遺跡呑口部分（1979年 北海道教育委員会）にII黒層の低湿地遺跡が存在することから、同様の状況が想定できる。

### 3 出土遺物の概要

本調査の目的は、遺物包含層の存在とその範囲を確認することが目的であった。従って、先に述べたように調査方法も本来の発掘調査とは大きく異なるものであり、ヘドロの中からの手さぐりの遺物採集という状況に加え、期間が限定されていたこと等、通常の分布調査によって得られるデータと比較しても不備な点を多く残すものであったことは否めない。また、既に平成2年度に予備的調査が行われ、1万点を越える木製品、繊維製品、擦文時代の土器、金属製品、陶磁器、ガラス玉等が出土している。しかし、現在整理作業中であるため、補足的に一部平成2年度の概要をつけ加える程度し、ここでは、あくまでも平成元年度の試掘時の状況について簡単にまとめ、それぞれの遺物の概略について述べる。細かな分類については、次年度以降の調査報告時に行うものとする。掲載遺物の出土位置、法量などの属性は一覧表に記している。今回使用したアイヌ名は萱野 茂「アイヌの民具」(1978)によるが、今後検討を要するものが多々ある。皆様のご指導、ご助言に期待するのである。

#### (1) 土器 (図V-6-1~6) (図版V-4-1~6) (表V-3-1~6)

縄文時代早期1点、縄文時代晩期1点、擦文時代の土器が4点出土した。平成2年度の調査ではTa-cを掘り込んだ続縄文時代の倒立した完形の壺形土器が1点、擦文土器がTMを挟んでその上と下から出土した。0黒層からは磁器が1点出土している。

1はI群b-4類の胴部破片である。自縄自巻LRとRLの原体で羽状に文様が構成されている。II黒層出土である。2はV群c類の胴部破片である。RLの原体で斜行縄文が施されている。内面に炭化物が付着している。I黒層出土である。3~6はVII群で、I黒層出土である。3は甕形土器の口縁部破片である。表面が一部剥落している。口縁はやや外反し、沈線と短刻が認められる。内面はヘラミがきが施され黒色である。4は甕形土器の口縁部破片である。表面が一部剥落している。口縁は外反し上部で立ち上がる。口縁直下に2条の短刻がめぐり、垂下する短刻が施されている。内面はヘラミがきが施されている。5は甕形土器の胴部破片である。外面はハケ目調整されている。内面はヘラミがきが施され、黒色である。6は椀形土器の底部破片である。底部からわずかに内湾ぎみに立上がる。ロクロ整形され、底部は回転ヘラ切りされている。胎土には海綿骨針が多く認められる。

#### (2) 石器・石製品等 (図V-6~10) (図版V-4-10~16、図版V-5) (表V-3)

砥石(ルイ)1点、黒曜石剥片1点、大小の礫1080点、火打石と考えられるもの10点、軽石170点が出土した。礫の中には火打石(カラスマ)、ゴザなどを編む錘石(ピツ)と考えるものも含まれる。出土層位は0黒~I黒層である。すべてのTPから満遍なく採取したものではなく、盛土中の礫と区別が付かなくなったものや極細礫及び細礫については、その一部しか採取してない。平成2年度の調査では、I黒~0黒層から砥石、珪岩の火打石、多数の大小の礫のほか、透明な緑色のガラス玉、琥珀製の玉が出土した。また、台地上の調査でみられるような礫の集中がI黒層で確認された。

10は板状の砥石である。表裏は片減りし、擦りくぼんでいる。上部、下部もわずかに擦られている。材質は凝灰岩である。11は黒曜石製のフレイクである。

礫は90%以上が角の無い転礫である。総重量は25.7kgである。表V-7~10に各TPごとの重量分布、長径短径比のグラフを掲載した。最大長で細分すると次のようになる。極細礫(0~10mm)、細礫(10~20mm)、小礫(20~30mm)、中礫(30~100mm)、大礫(100mm以上)などがある(図版V-5-5)。最大重量は1260g、最小重量は0.4g、平均重量は82.16gである。小礫、中礫には扁平なものと棒状のものがおおい。各TPとも顕著なまとまりを示すものは無く、細礫、小礫に相当する重量0~30g、長径10~30mm、短径8~20mmのものが多い。中礫のうち長径50~70mm、短径30~50mm、重量40~70gのものは台地上で確認されるような集中礫であった可能性がある。錘石(ピツ)して使

用されたものかもしれない。今後、面的調査を行えば台地の調査と同形態の集中礫として出土すると考えられる。材質は台地上でえられた礫集中と同様に砂岩、泥岩、片麻岩が多い。珪岩やチャートは火打石の素材の可能性がある。角礫には図版V-4-12~16などがある。12は泥岩。15・16は珪化した凝灰岩である。13・14には部分的に打痕が認められる。火打ち石として用された可能性が強い。材質はチャートである。

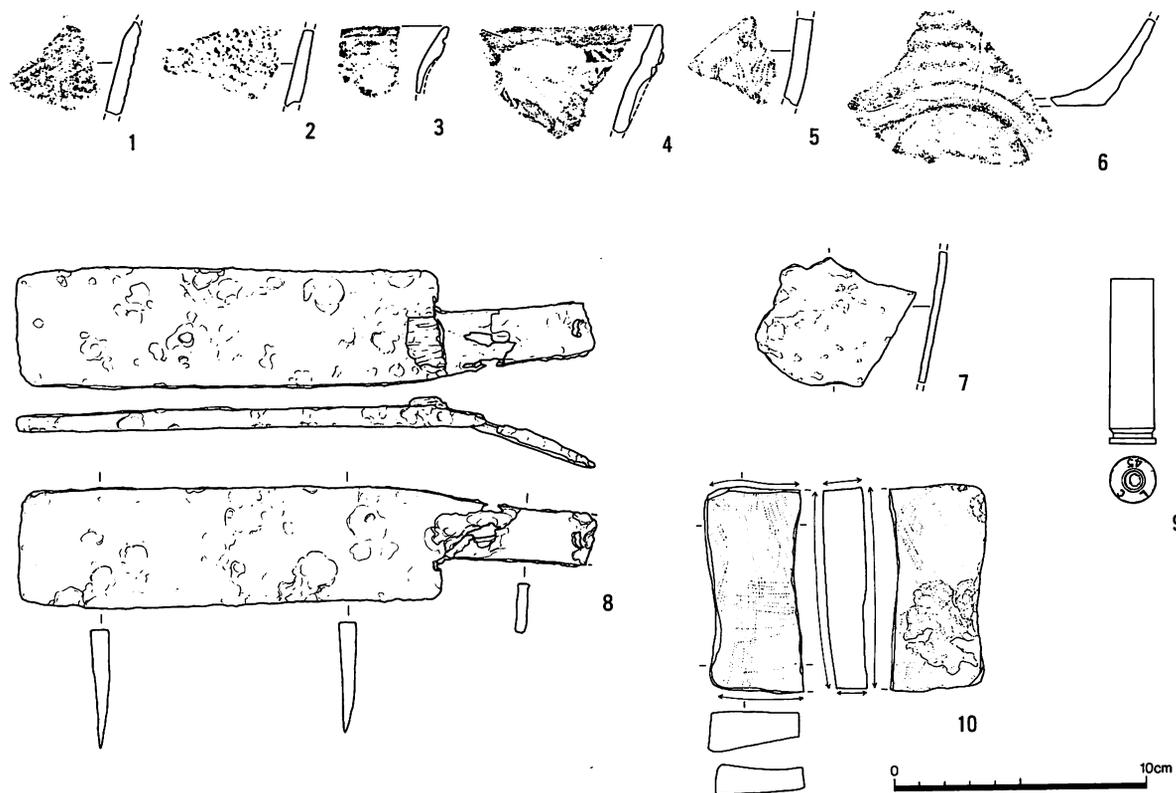
(3) 金属製品等 (図V-6-7~9) (図版V-4-7~9) (表V-3-7~9)

鉈、鉄鍋片、葉莢、弾丸が各1点出土した。鉈が0黒~表土層、鉄鍋片はI黒~0黒層出土の可能性が高い。葉莢、弾丸は表土層の出土である。平成二年度の調査では、I黒~0黒層から煙管雁首、多数の鉄鍋片、カスガイ、洪武通宝等が出土した。

7は鉄鍋の胴部破片である。厚さは2.5mmである。8は鉈である。いわゆる「腰鉈」と呼ばれる形態である。刃部には使い減りがみられ、棟は打ち敲かれてつぶれている。茎の一部には柄の木質が残り、目釘孔が認められる。茎尻は欠損している。9は葉莢である。朝鮮戦争時に駐留米軍が演習に使用したものであろう。7・8はプライマルMV-1で保存処理し、9にはインクラックを塗布した。

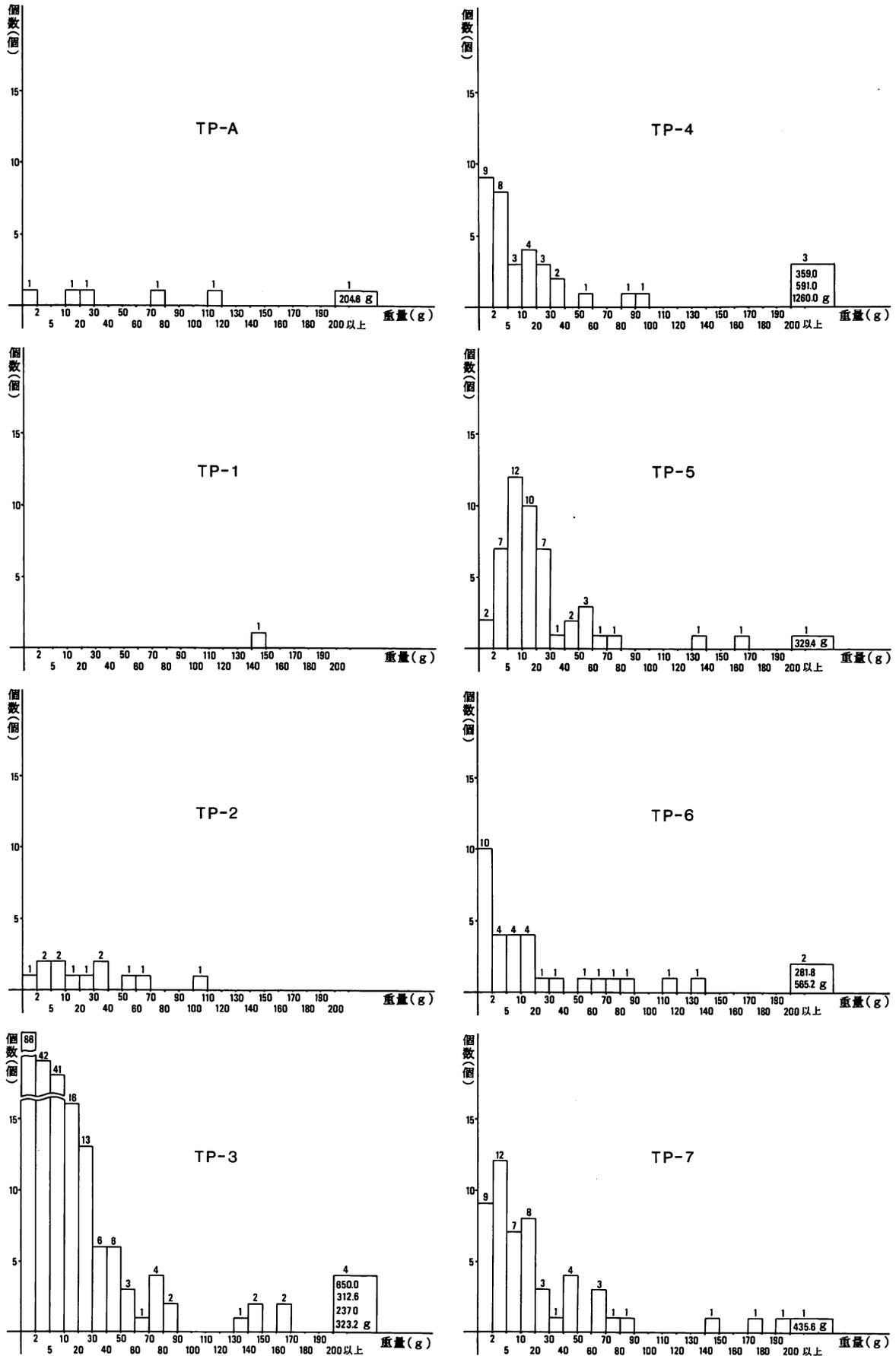
表V-3 掲載土器・石器・金属器一覧

図版号	名称	分類	TP番号	部位	図版号	名称	分類	TP番号	部位	図版号	名称	TP番号	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ (g)	備考
1	土器	Ib-A	TP-4	胴部	4	土器	VII	TP-7	口縁部	7	鉄鍋片	TP-7	(5.1)×(5.3)×(0.3)	(31.4)	MV-1処理
2	土器	Vc	TP-12	胴部	5	土器	VII	TP-26	胴部	8	鉈	抜取区	(22.6)×4.8×0.7	(248.2)	MV-1処理
3	土器	VII	TP-26	口縁部	6	土器	VII	TP-7	口縁部	9	葉莢	TP-4	3.2×0.8×0.8	4.7	インクラック施
										10	砥石	TP-9	8.0×3.7×1.7	67.2	凝灰岩
図版号	名称	TP番号	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ (g)	備考	図版号	名称	TP番号	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ (g)	備考				
4-2-11	フレイク	TP-A	(1.6)×(1.3)×(0.4)	(1.0)	凝灰岩	4-2-14	火打石	TP-22	3.6×3.3×2.4	43.8	チャート				
4-2-12	角礫	TP-10	(3.4)×(2.9)×(1.9)	(15.8)	凝灰岩	4-2-15	角礫	TP-3	5.3×4.2×3.0	53.8	珪化凝灰岩				
4-2-13	火打石	TP-7	(2.7)×(2.1)×(1.2)	(5.8)	チャート	4-2-16	角礫	TP-3	6.7×4.6×2.8	73.4	珪化凝灰岩				

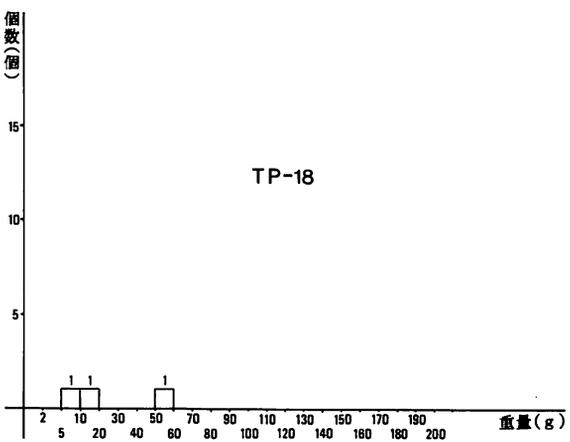
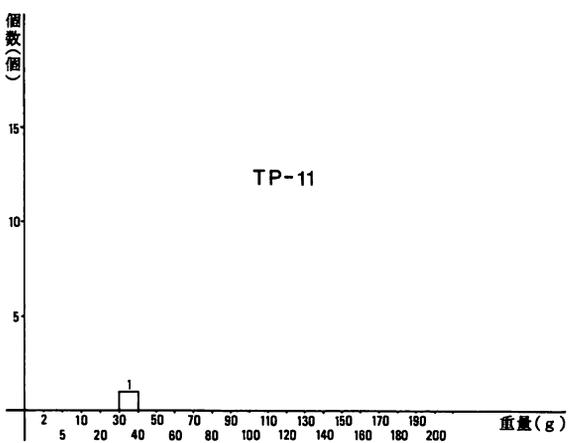
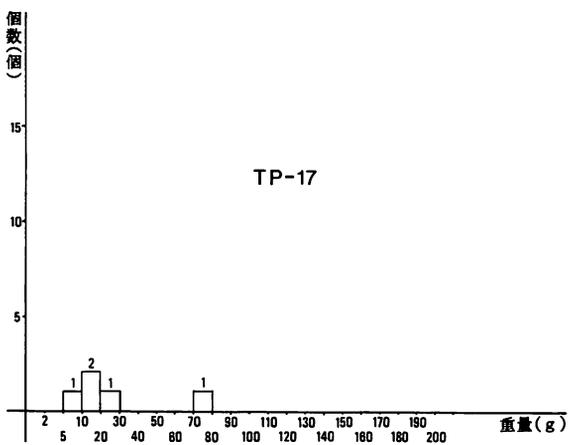
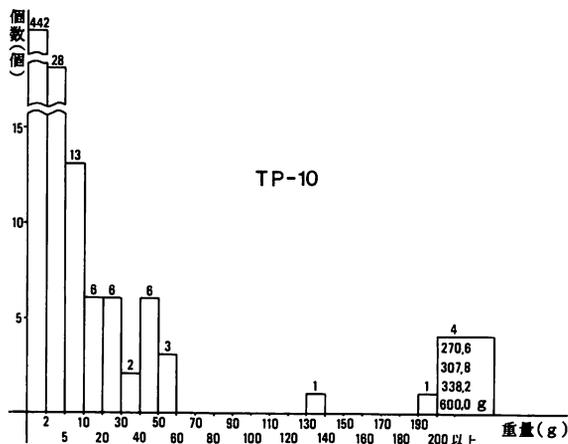
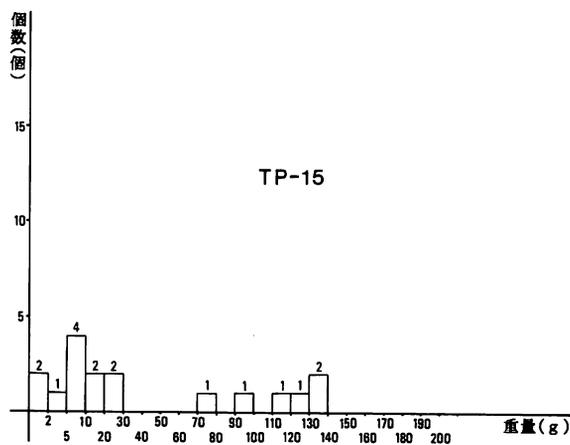
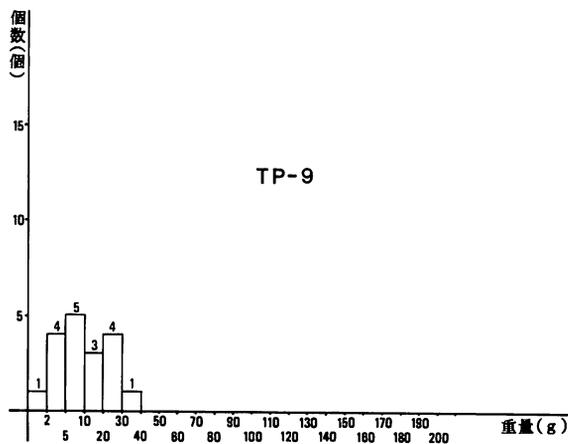
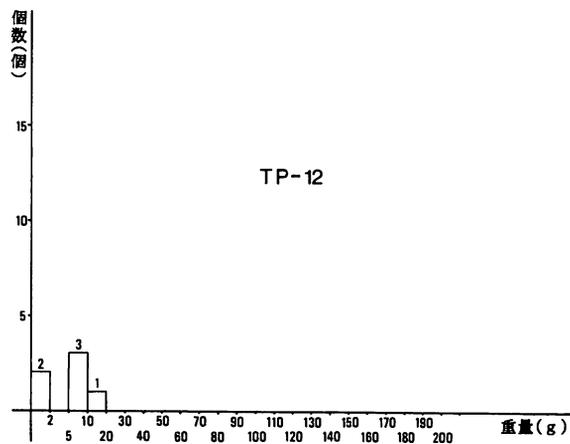
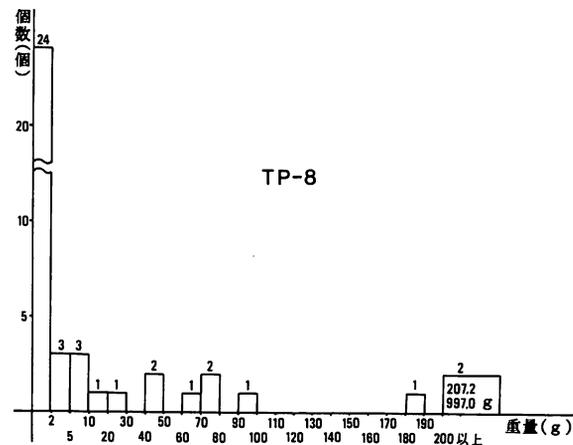


図V-6 土器・石器・金属製品

V 美々8遺跡低湿地の調査（試掘）

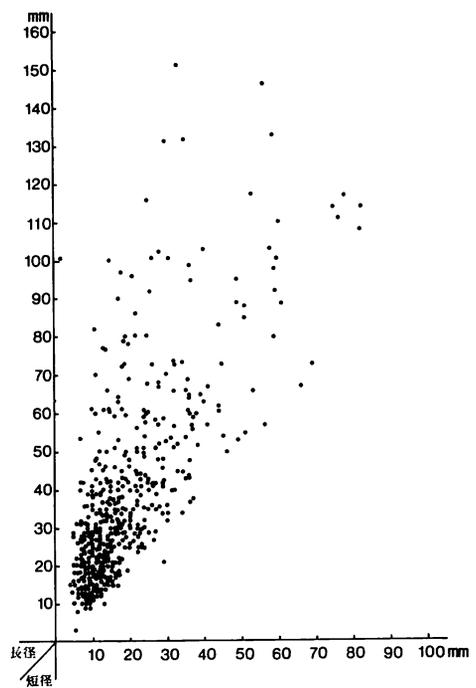
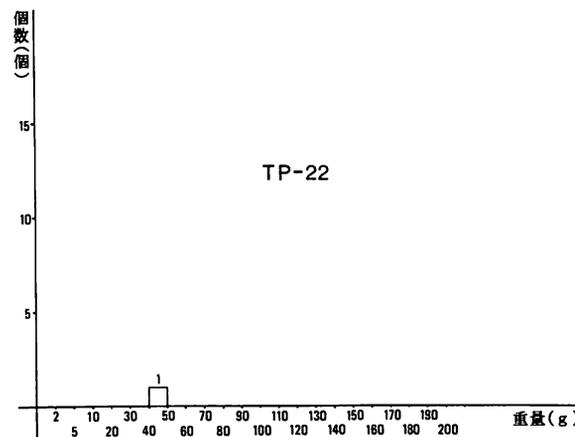
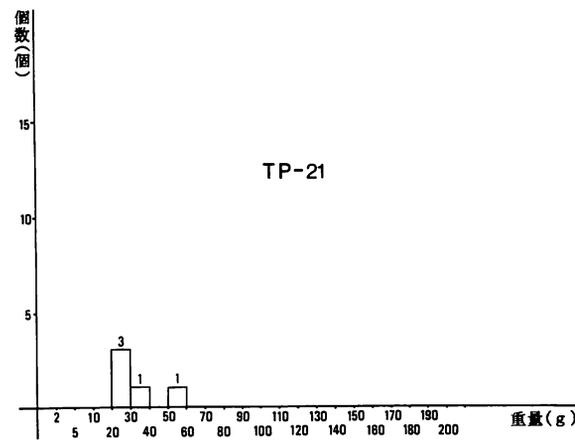
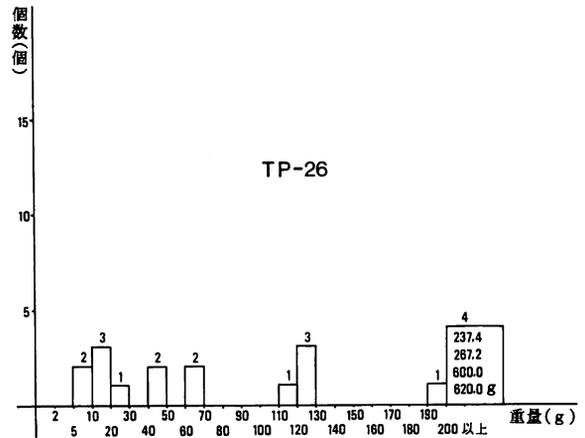
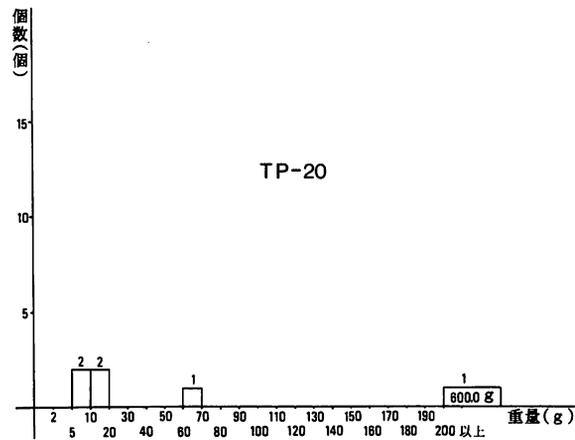
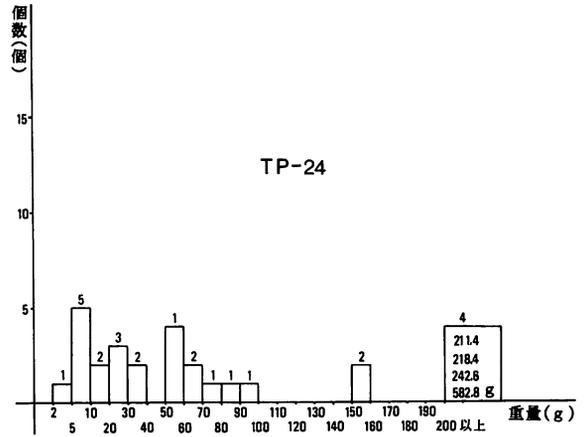
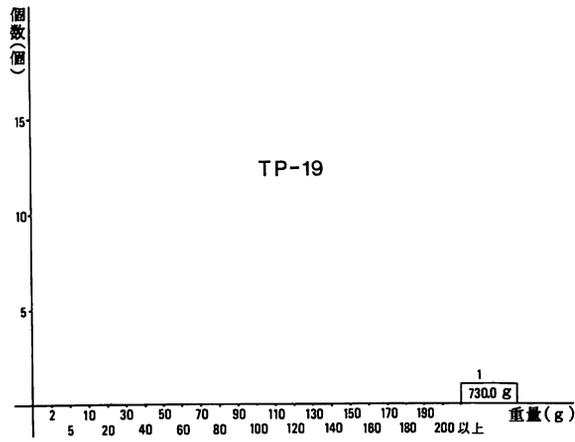


図V-7 テストピット出土礫(1)

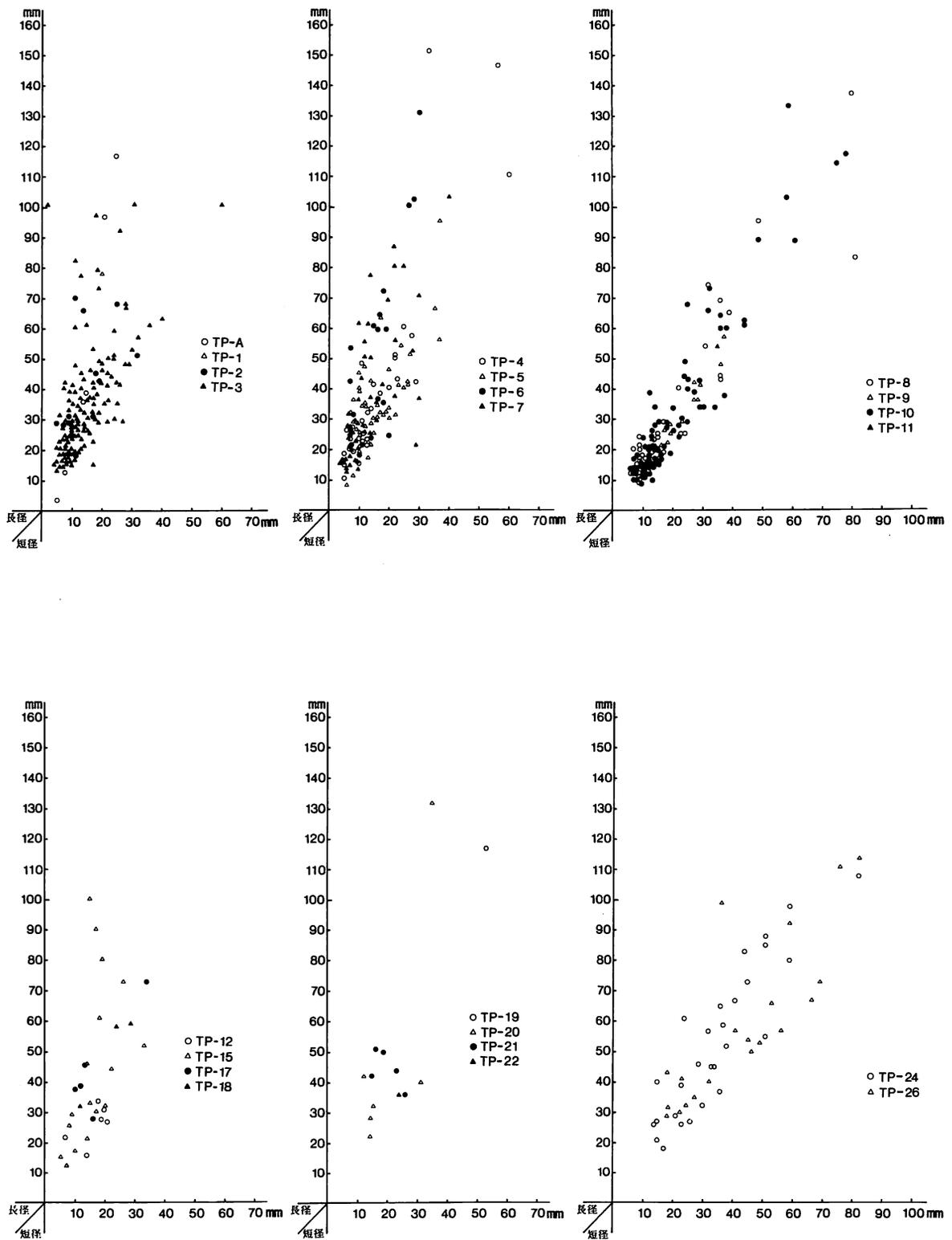


図V-8 テストピット出土礫(2)

V 美々8 遺跡低湿地の調査 (試掘)



図V-9 テストピット出土礫(3)



図V-10 テストピット出土礫(4)

**(4) 木製品・繊維製品等**（口絵1～4）（図V-11～28）（図版V-6～20）（表V-5～7）

製品・加工木1,879点と自然木或いは加工部分を欠損したと考えられるもの8,276点が出土した。他に炭化材94点、破損や腐食等著しい不明品が17点出土した。木製遺物は出土遺物の90%を占める。すべて0黒層からI黒層の出土である。木製品には、アイヌ文様の彫刻、飾板、シロシのある花矢（ヘペライ）状、中柄状、ヤス状、表裏にシロシのある樫受部（タカマ）、楔（センピ）の打ち込まれた縦槌（トッチ）、漆器片、曲げものの把手、桶などの側板・底板、盆状の割物（ニマ）、箕状の割物（ムイ）、アツシ等を織るときのペラ、敲棒、箸（イペパスイ）、串（イマニツ）、杭、棒、板材、角材、割材、ホゾ穴のある建材、短部にコケシ状の抉りのある部材、股木材、焼けた木、薪の燃え尻（アペケシ）、切痕のある枝、木端、切片、完形の背負い縄（タラ）、巻いた樺の皮（タツニカブ・チノイエタツ）、その他の樹皮、焼けた樹皮等が多量に出土している。

平成2年度の調査では、上記の遺物のほか、斜面の杭跡群に関係すると考えられる多数の立ち杭及び杭跡に残った杭先端部、板綴舟（イタオマチブ）の孔のあいた側板、樫（アッサブ）、樫などの握り部、彫刻のある樫受部（タカマ）と考えられるもの、ほぼ完形のヒキリ板、飾り板に精巧なアイヌ彫刻を施したものの、各種のヤス、根付、木組のホゾ穴に楔の刺さった建材、桁材が乗るように加工されたチセの柱のような建材、自在鉤台（マレブニビヒ）団子篋（シトペラ）、杓子（カスブ）、完形の漆塗椀（イタンキ）、小刀（マキリ）の柄、炉鉤（スワツ）、股木を利用した縦槌、桜の皮で編んだ曲げものの片、弓（7）、側面に彫刻のある板材、結束した樹皮製の紐、撚り紐等の多量の遺物がわずか40～50㎡ほどの範囲から出土した。

**アイヌ文様彫刻**（1）：ウレン・モレウが透し彫りされ、中央に角孔があげられている。表裏とも文様を縁取るように沈線が彫られている。下部、左右のウレン・モレウは欠損している。

**有孔飾板**（2）：柁目板に左右対称の突起、角孔、波状の抉りが作出されてる。

**花矢状木製品**（3）：先端に特徴となる削りかけは無いが、花矢に良く似る。器面は丹念な面取り調整がなされ、片面にシロシが刻まれている。茎は細く作出され、装着痕が認められる。

**中柄状木製品**（4）：先端はつぶれ、器面は丹念な面取り調整がなされている。基部には隆帯が巡り、短い茎が作出されている。茎には装着痕が認められる。

**ヤス状木製品**（5・6）：先端はぶれ、面取り調整がなされている。茎は最大径からすばまり、装着痕が認められる。茎尻は欠損している。材の芯（髄）が腐植し、裏面が溝状となっている。

**樫受部材**（7～10）：板綴舟の両舷に縛り付け、車樫を受ける部分である。断面は隅丸三角形で、両端部に向かってわずかにすばまり、端部に装着のため抉りが作出されている。舷との接合面は平坦である。中心からわずかにずれた部分に樫受軸が付く、軸は2タイプあり、差込み式（7）と枝を利用した軸直接作出式（8）がある。7は差込み孔の裏側周縁が盛り上がっている。（口絵2-1）。片側の表裏にシロシが刻まれている。8は軸が途中で折れている。7より肉厚で一回り大きい。上面の両側にシロシが刻まれている。9・10は同一個体と思われる。両端部、軸を欠損している。

**有孔部材**（11）：2つの孔があり、面端を欠損している。舟材の一部であろうか。

**縦槌**（12・13）：12の頭部は樹皮付きの円筒形で角孔に楔の打ち込まれた柄が刺さっている。使用面に敲打痕が顕著である。13は股木を利用したもので、頭部は樹皮付きの幹である。柄は枝の樹皮を剥き、わずかに面取りしている。使用面に敲打痕が顕著である。

**横槌**（14）：股木を利用し、幹を頭部、枝を柄としている。頭部は切截痕が顕著で、下部に繊維などを敲いた痕跡わずかに認められる。柄は握りやすく面取り調整がなされている。

**敲打棒**（15）：打撃痕かすかに残り、打撃部はやや太く、全体が緩くカーブしている。非常に硬い



木である。サケ等を敲いたものであろうか。

**ペラ (16)** : 先端に向ってやや幅広となる両刃剣状をなし、茎尻は欠損している断面レンズ状で両側縁に細かな刻目列がまれている。樫を再加工したものとも考えられる。

**漆器 (17~19)** : 17・18は椀の胴部砂片である。17の内面には朱漆外面には黒漆地に朱漆で文様が描かれる。18の内面は漆膜が剥がれ、外面は黒漆地に朱漆を重ねている。19は椀底部である。内面には朱漆、外面には黒漆地に朱漆で文字? が書かれている。

**曲物把手 (20)** : 曲物の口縁と接合部には抉入部があり、その一端は欠損している。

**桶 (21~23)** : 21・22は側板である。角溝と角孔が彫られている。22の下部には箍の装着痕が残る。

**盆状木製品 (刳物) (24・25)** : 24は底がほぼ平で、側縁が立ち上がる。図上、下側縁は非常に厚く、その形態から舟の垢汲み (ワッカケブ) とも考えられる。

**木箱 (26)** : 側面に木釘孔が並ぶ、箱等の底板であろう。

**箸状木製品 (27~42)** : 胴径が1.5cm以下で、全面に調整加工がなされ、端部に向かって徐々に細くなるものを箸状として取りまとめた。34・35・42などは、先端部が幅広く串として使用された可能性もある。35・39~42は基部が欠損しているものである。形態からは5タイプに分けられる。A類は胴部を太くしてその両端を細く丸く削ったもの (27・38)、B<sub>1</sub>類は基部が太く先端のみ細く削り、基端が尖るもの (28)、B<sub>2</sub>類は基部が太く先端のみ細く削り、基端が平らなもの (30・31)、B<sub>3</sub>類は基部が太く先端のみ細く削り、基端が丸いもの (33・34)、C類は胴部が同じ太さで両端部のみ尖るもの (36・37) に分類される。今後の調査では、胴部、両端部とも同径の寸胴型のD類も出土するかもしれない。胴部断面の形態についてみると、長方形 (34・35・37・39)、正方形 (42)、八角形 (27・30・32)、多角形 (28・29・31・33・36・40・41) の4種に分けられる。29は基部が炭化している。41は折れ口が炭化している。

**串状木製品 (43~58)** : 胴径が2cm以下で顕著な面取り調整がなされていないものを取りまとめた。基部を欠損しているものがほとんどである。杭として使用された可能性もある。43は先端は2面削りされたヘラ状である。上端にも5面削りの尖端部がある。44~48・50~53丸い棒の尖端が片側1面削りのものである。51・54は胴部が長楕円形または長方形で幅広のものである。55は胴部が長方形で先端部のみ削られている。57・58は分割されたササ製のものである。47は胴部が一部炭化している。49は胴部から先端にかけ炭化している。56は尖端部が炭化している。51の欠損部には貫通孔ある。

**ヒキリギネ?** : 29・49・56などは箸状・串状としたが径もほどよく、ヒキリギネの可能性もあるので注意が必要である。特に樹種がスギ属・アジサイ属のものは、着火率も良くその可能性が高い。

**薄椀目板材 (59~68)** : 59・63は端部が残っている。59~65は厚さがほぼ均一である。曲げ物、折敷、屋根を葺いた椀材等の可能性がある。66~67は断面がカマボコ形である。樹種が違うことや文様の有無など異なる点もあるが、短冊状で断面形がカマボコ型の形状だけみると捧酒箸 (トゥキバスイ) に似ている。68は断面が三角形である。62~68などのような薄い材は尻拭木 (ホヤイケニ) の可能性も考えておく必要がある。

**有孔板材 (69・70・74)** : 69には2つの孔があり、そこから折れている。70は孔と孔の間隔が少し狭いが下駄に似ている。74は楕円の孔が2個あけられている。板綴舟の側板であろうか。

**抉入板材 (71~73)** : 71~72は側面に弧状の抉りが認められる。

**板材 (75~83)** : 75の図右下側に溝状のくぼみがある。77・78は断面が厚く、弧状となっている。80は器面下部が炭化している。83は断面凸レンズ状で、下部側縁が削られている。

**端部抉入付部材 (84~87・89・91)** : 抉入部をコケシ状に加工しているのは、マレブ台、ヤス、棹

等と縄や樹皮でしっかりと連結するための加工であり、連結部の裏面は接着面を安定させるために平坦面が作出されている。重複した部分が極端に厚くならないように斜位に平坦面を作出している。

**端部鉤付部材 (88)** : 断面は多角形で、鉤部分は端が折れている。

**挟入付棒 (90)** : 孔等に差し込むための加工である。

**ホゾ穴付部分 (93)** : 組合せ式の建築部材である。

**丸棒状木製品 (92・94～100)** : 92は裏に平坦面があり、結合時の縄目が深く残っている。94は器面に途中でやめた削り痕が残る。95～97は先端が丸く、端部に向かかってやや太くなる。96・97は權受部の軸のような形態である。98・99は先端部が欠損し、基部は丸い。100は先端部がやや細くなるよう面取りしている。

**角材 (101～112)** : 101は裏に平坦面があり、先端部は薄い。102は先端部のみ一面削りしている。103・106・108・109・111は短身の角材、104は長身の角材である。105は先端部が4面削りでやや細い。107は先端部がやや細い多角形である。105・107は角杭の可能性はある。

**杭状木製品 (113～151)** : 1面削りあるいは2面削りのものは、先端部が鋭角となるものが多く、4面削り以上の場合には先端の角度が開く傾向がある。113～121・125は1面削りのものである。122は半割材であり両側縁が2面削りされている。123～130・136・144・146・147は削り面が切りあった2面削りのものである。断面は底辺の丸い三角形となる。131・132～141・150は4面削りのものである。142・143は5面削りである。148は角杭である。149・151は板杭である。114・116・138を除いてほとんどが端部を欠損するか腐食・炭化している。端部の加工は先端部より角度が開く場合が多い。120・131・143・145の端部は炭化している。121・150の先端部は炭化している。115・126・130・132・133・137・144の端部は腐食している。腐食していない部分は当時から地中に刺さっていた部分と考えられ、その深さはおよそ30cm前後である。

**枝切痕 (152～161)** : 切痕のある股木などで、枝部分が残るものである。152は枝部分を尖らせており、木鋸(ニシツブ)の可能性はある。154は中央に中途の削り痕がある。

**木端 (162～168)** : 当初の形態が想定できる肉厚で大型の木片である。162～163・167・168は丸木材、165・166は角材片である。168は炭化している。

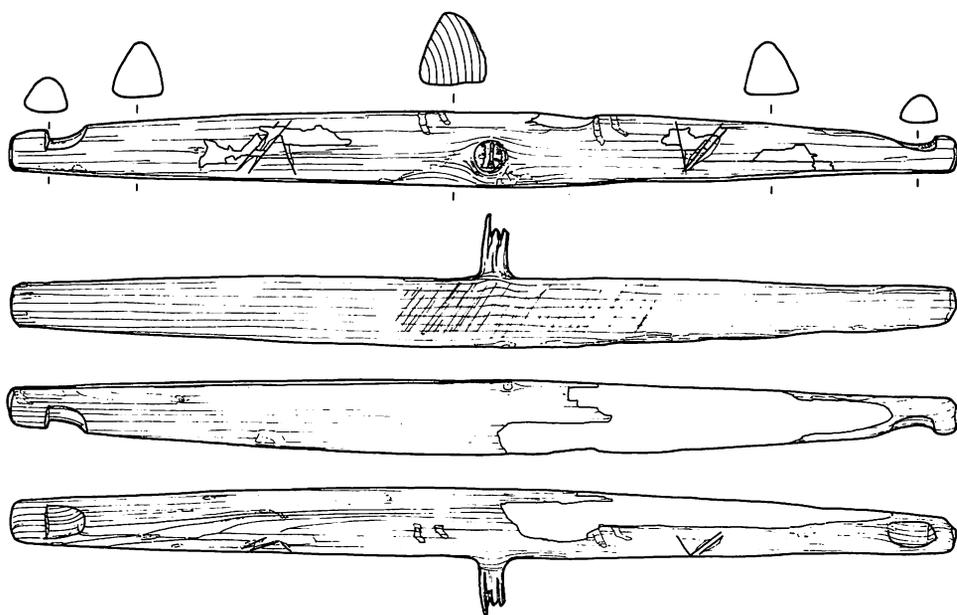
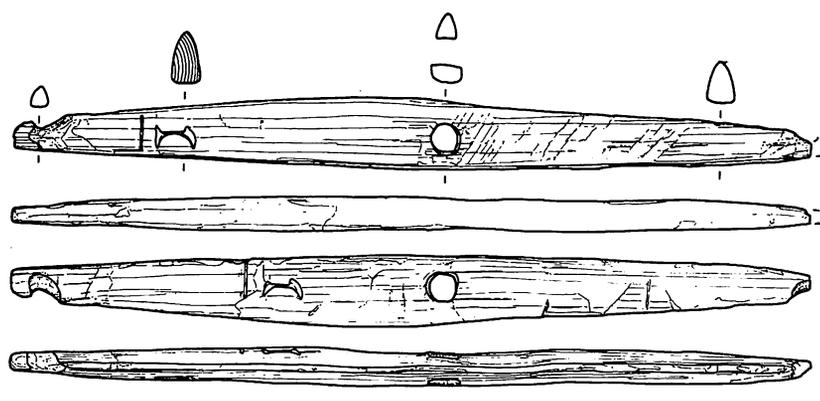
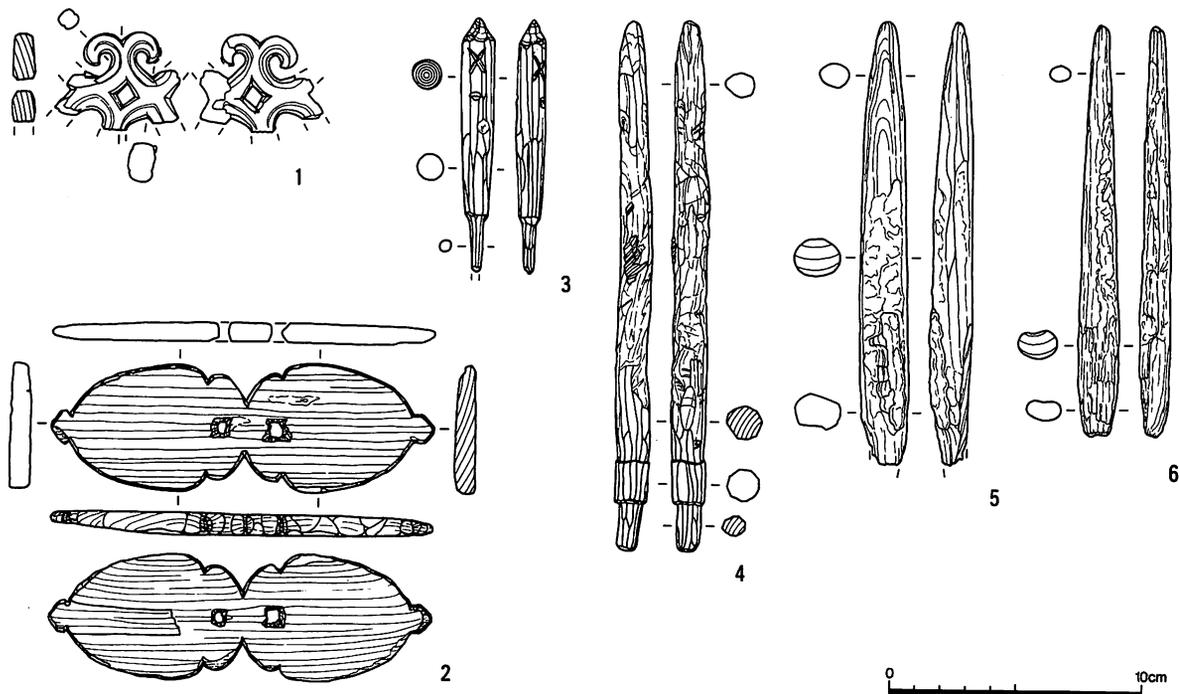
**切片 (169～180)** : 各種の木材加工による薄い剥片である。178～180は炭化している。

**繊維製品 (181)** : 背負い縄(タラ)である。頭に当てる部分(タリペ)は羽状に編み込まれ、部分的にその羽状が一例置きに極薄く黒色化して見える。赤外線写真撮影などの分析が必要である。

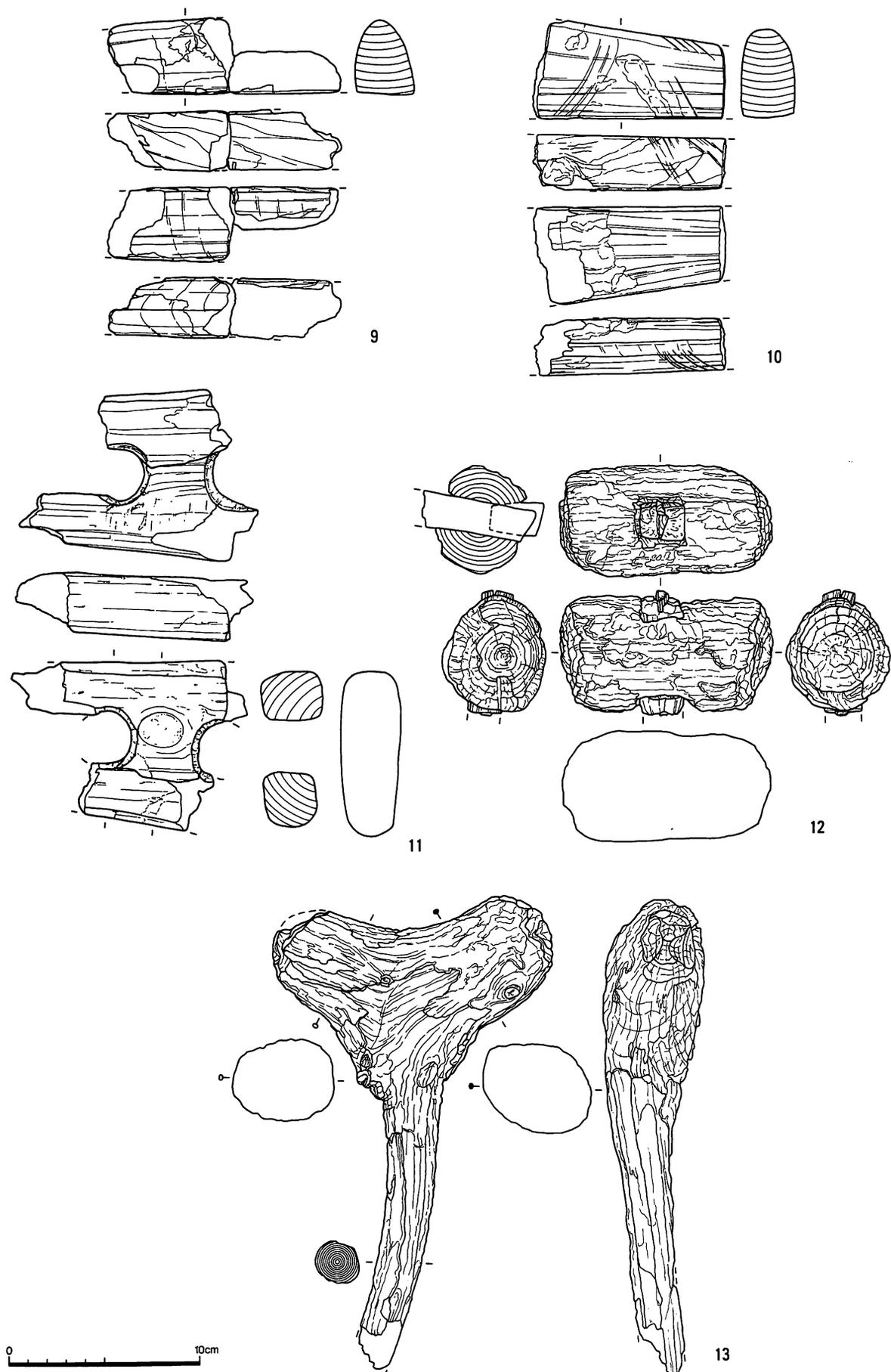
**樹皮 (182～185)** : シラカンバ属などの樹皮で、切痕がある。182・184・185は端部が炭化している。たきつけ、燈火用(チノイエタツ)のほか敷物、容器、結束具として使用された可能性がある。

#### (5) 自然遺物 (図版V-4-1-1～6、口絵2-3)

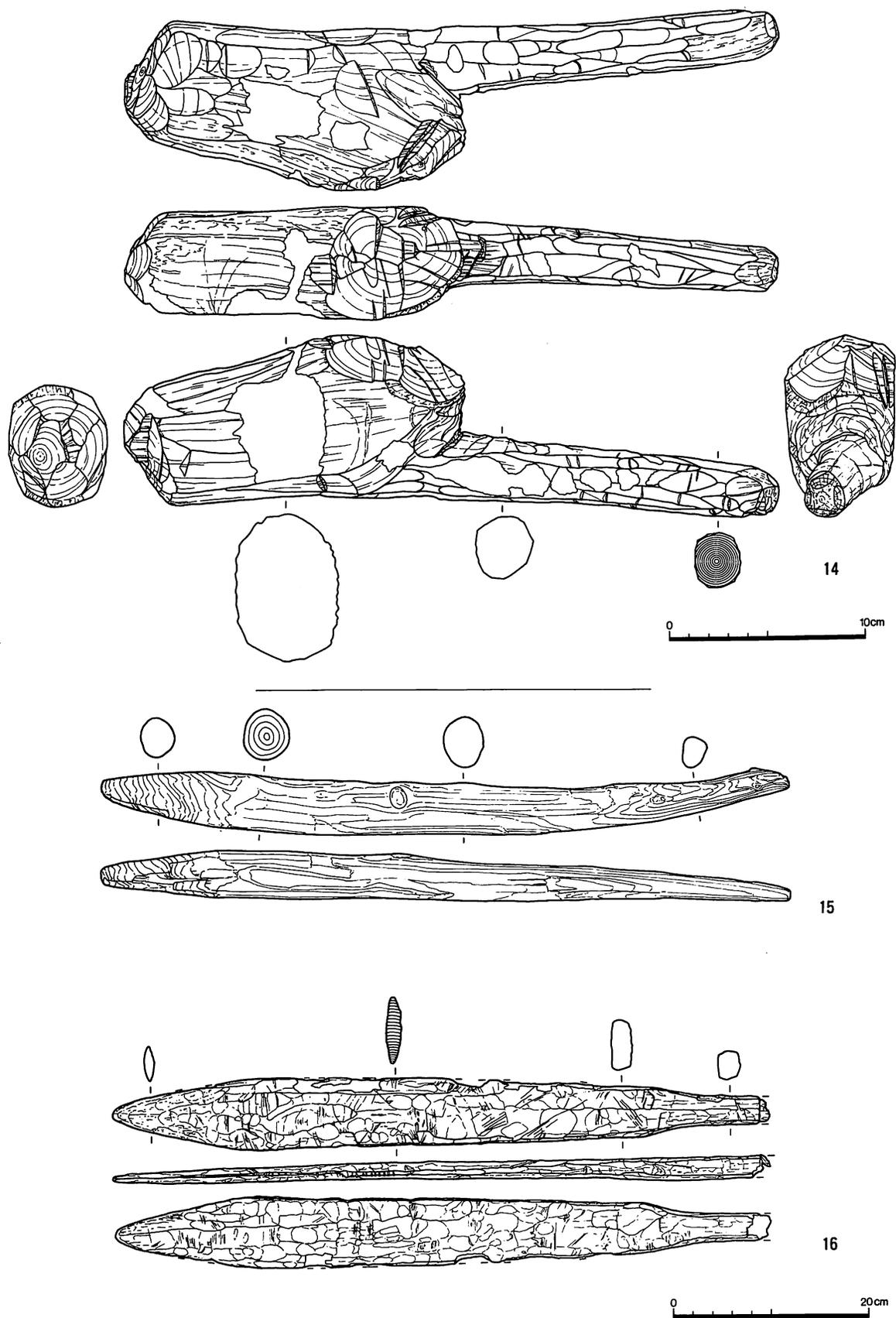
土壌中には、木葉、種子、貝皮、昆虫遺体が多量に認められたが、ほとんど採集しなかった。平成2年度の調査では、カワシンジュガイ殻皮などは左右に開いた状況で折り重なるように多量に出土した。今後の調査ではフローテーション、ウォーターセパレーションを行う予定である。動物遺体や骨角器は台地上や斜面の調査時に多量に出土しているので今後検出される可能性が高い。1～3はスモモ?、4～6はオニグルミ、7はサルのコシカケ科に属する硬質菌類である。火口(カラパシ)として使用された可能性がある。8はタニシ?の蓋、9・10カワシンジュガイの殻皮、カワシンジュガイの存在からピパの出土も予想される。11は昆虫の肢、鞘翅等である。



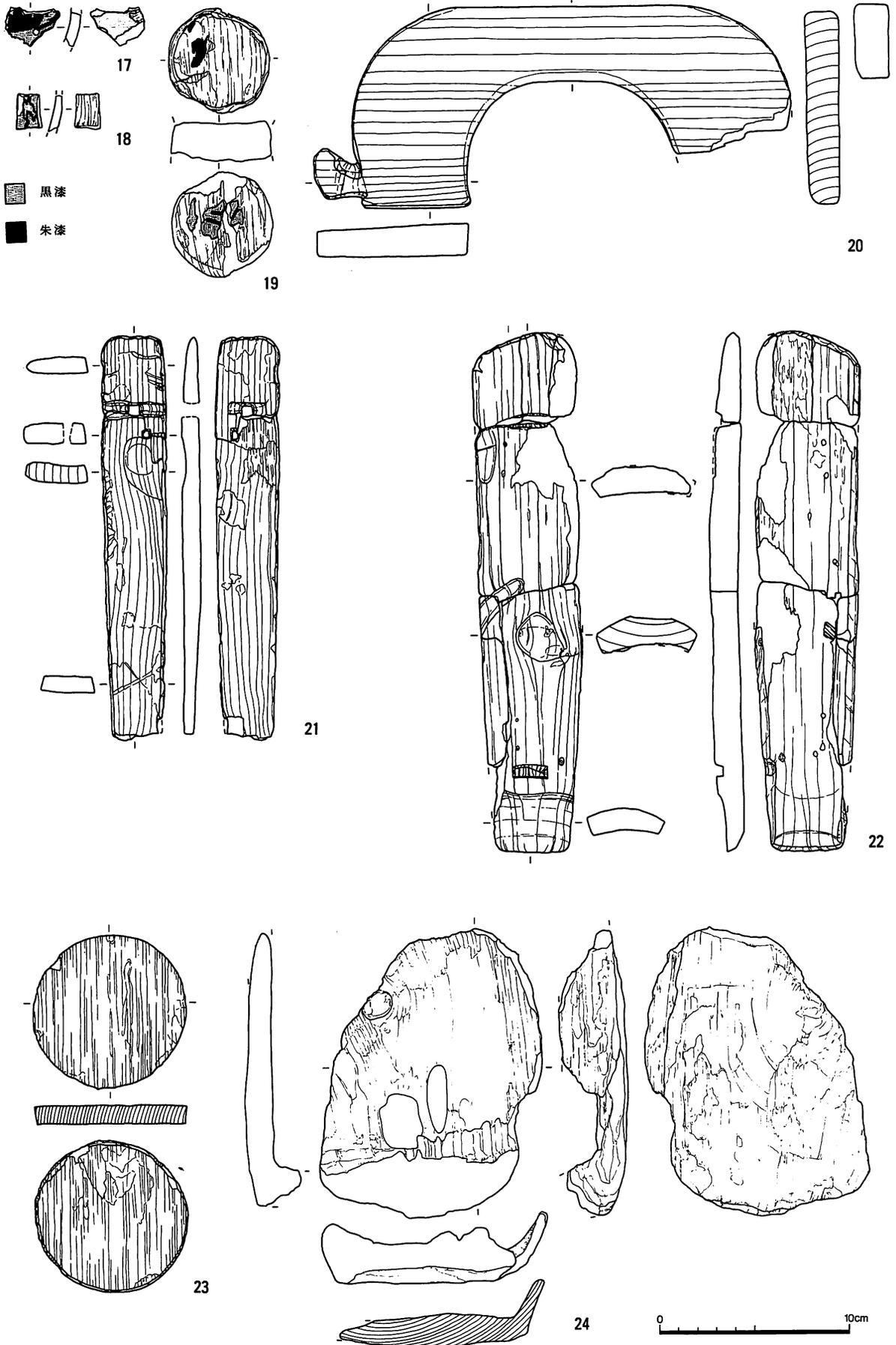
図V-11 木製品(1)



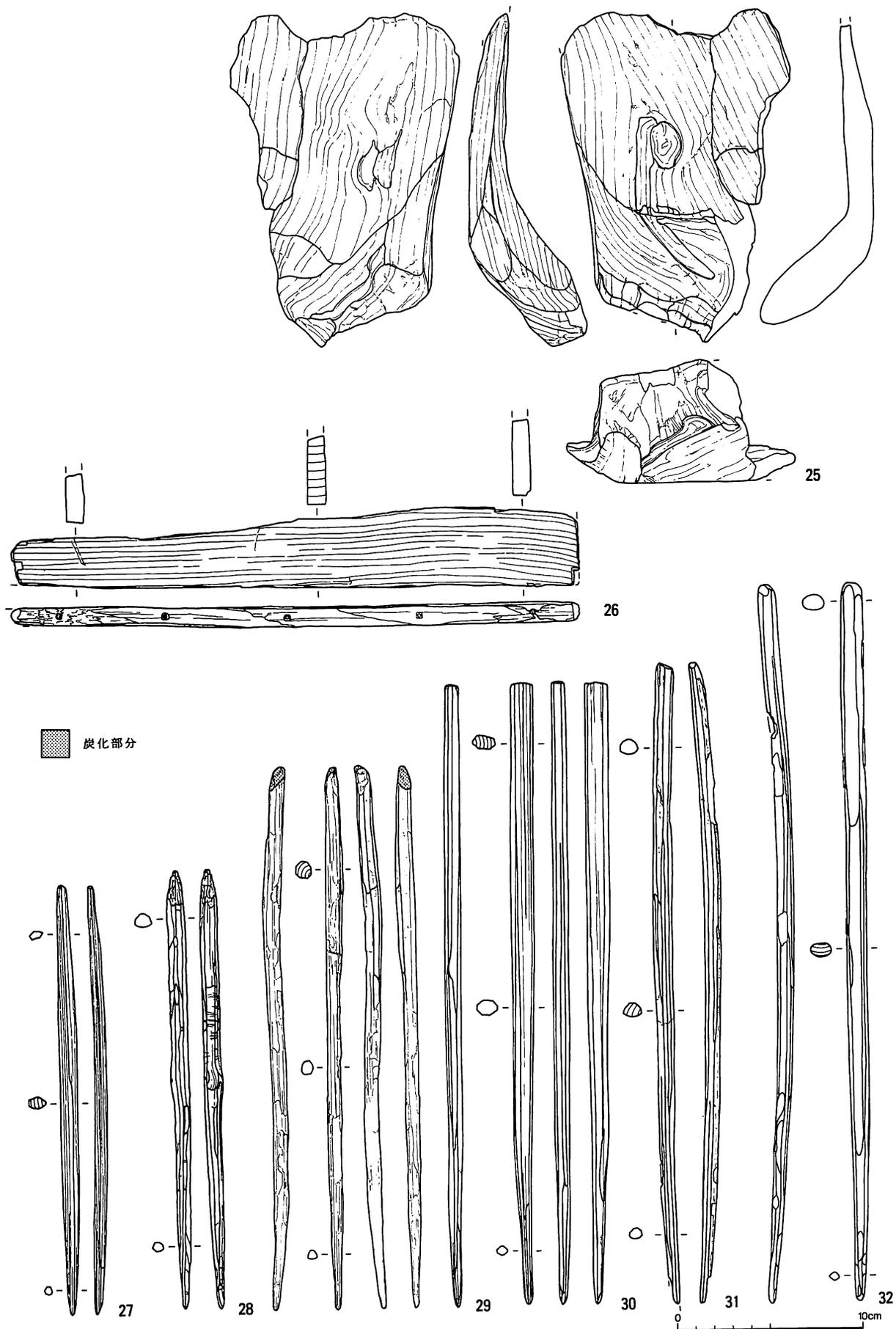
図V-12 木製品(2)



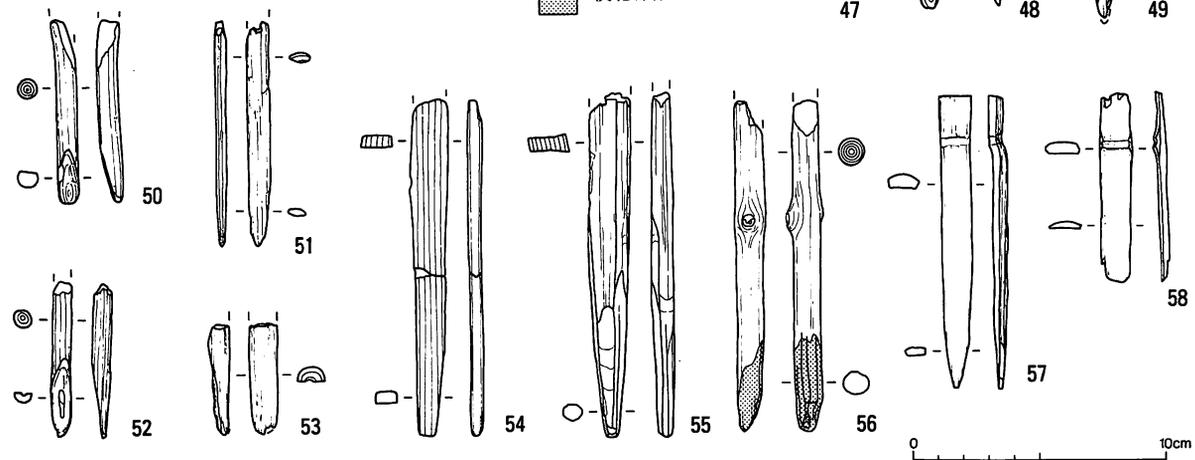
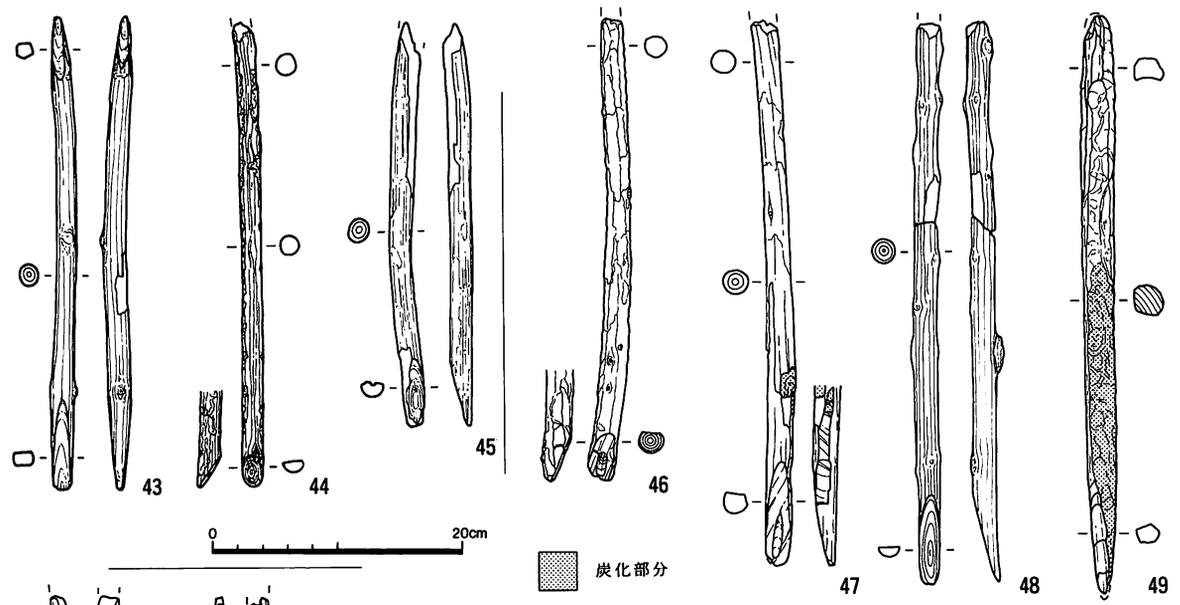
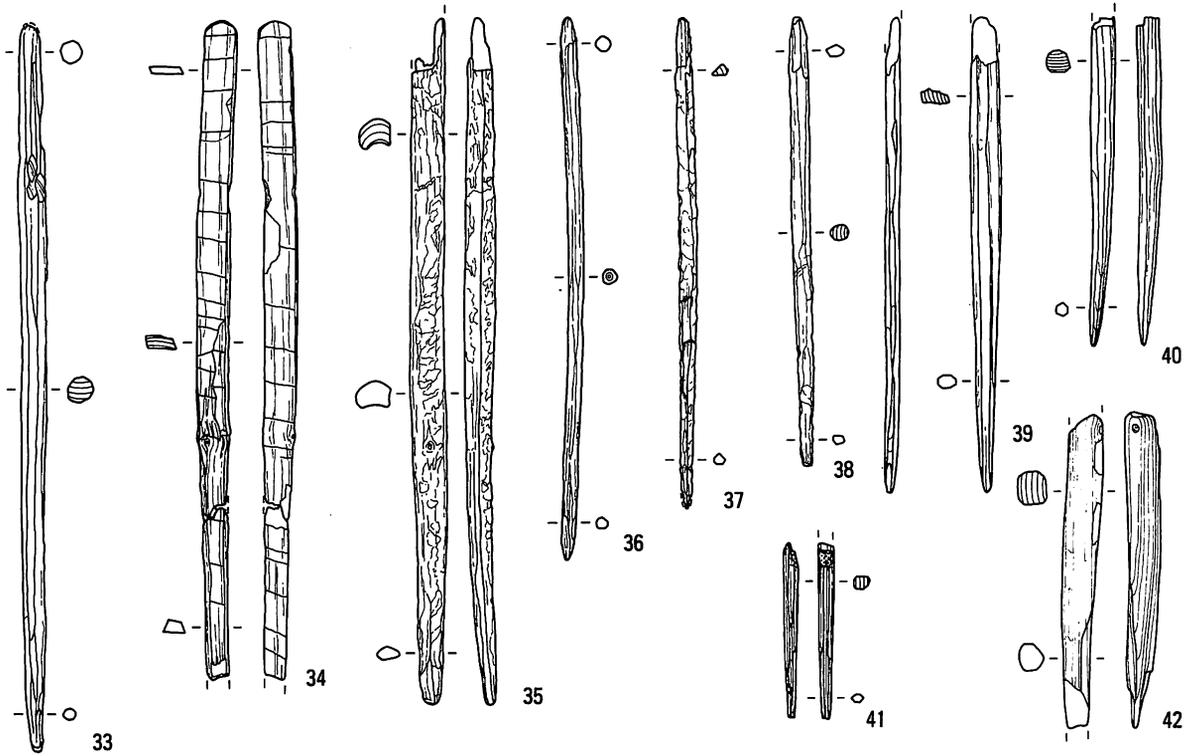
図V-13 木製品(3)



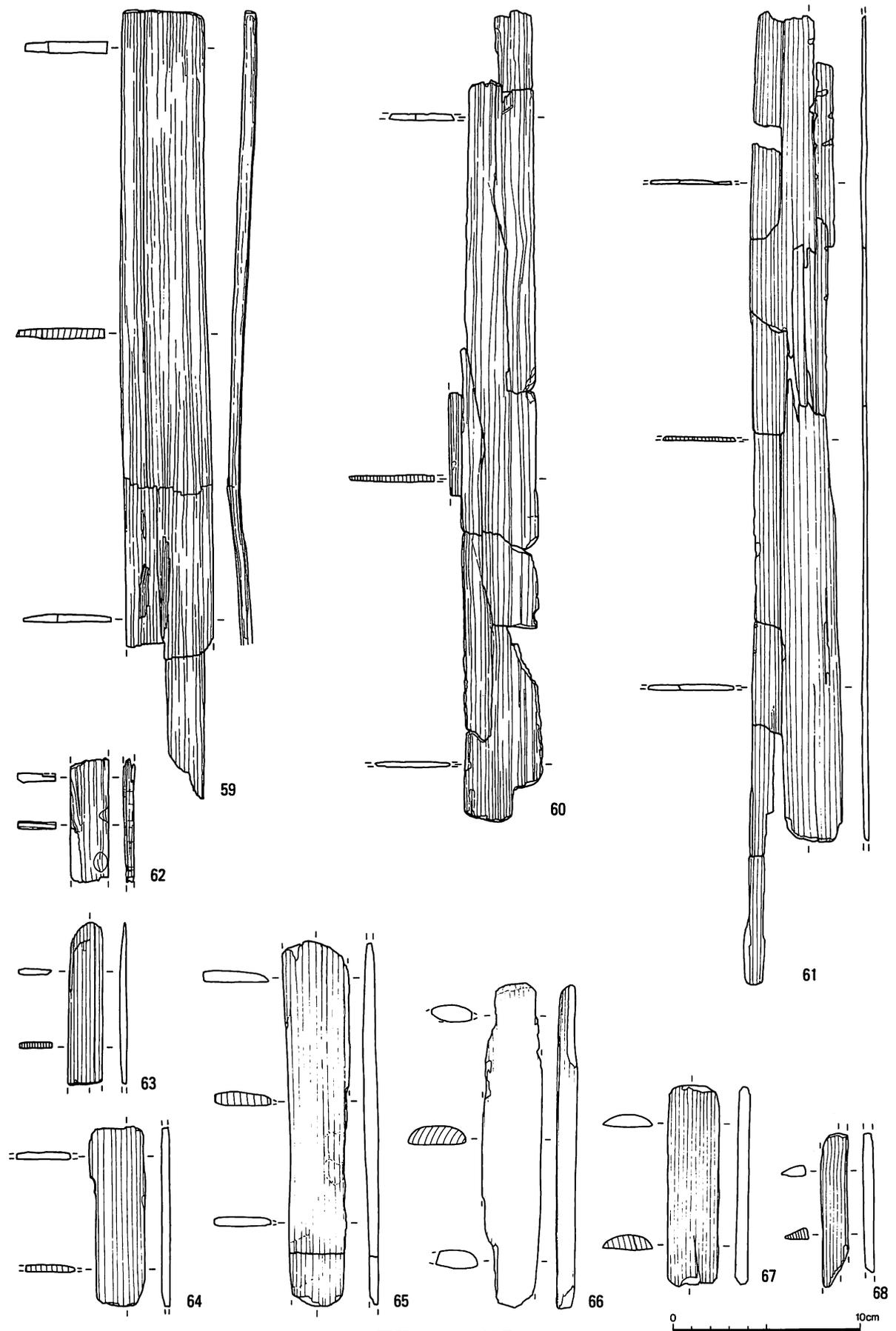
図V-14 木製品(4)



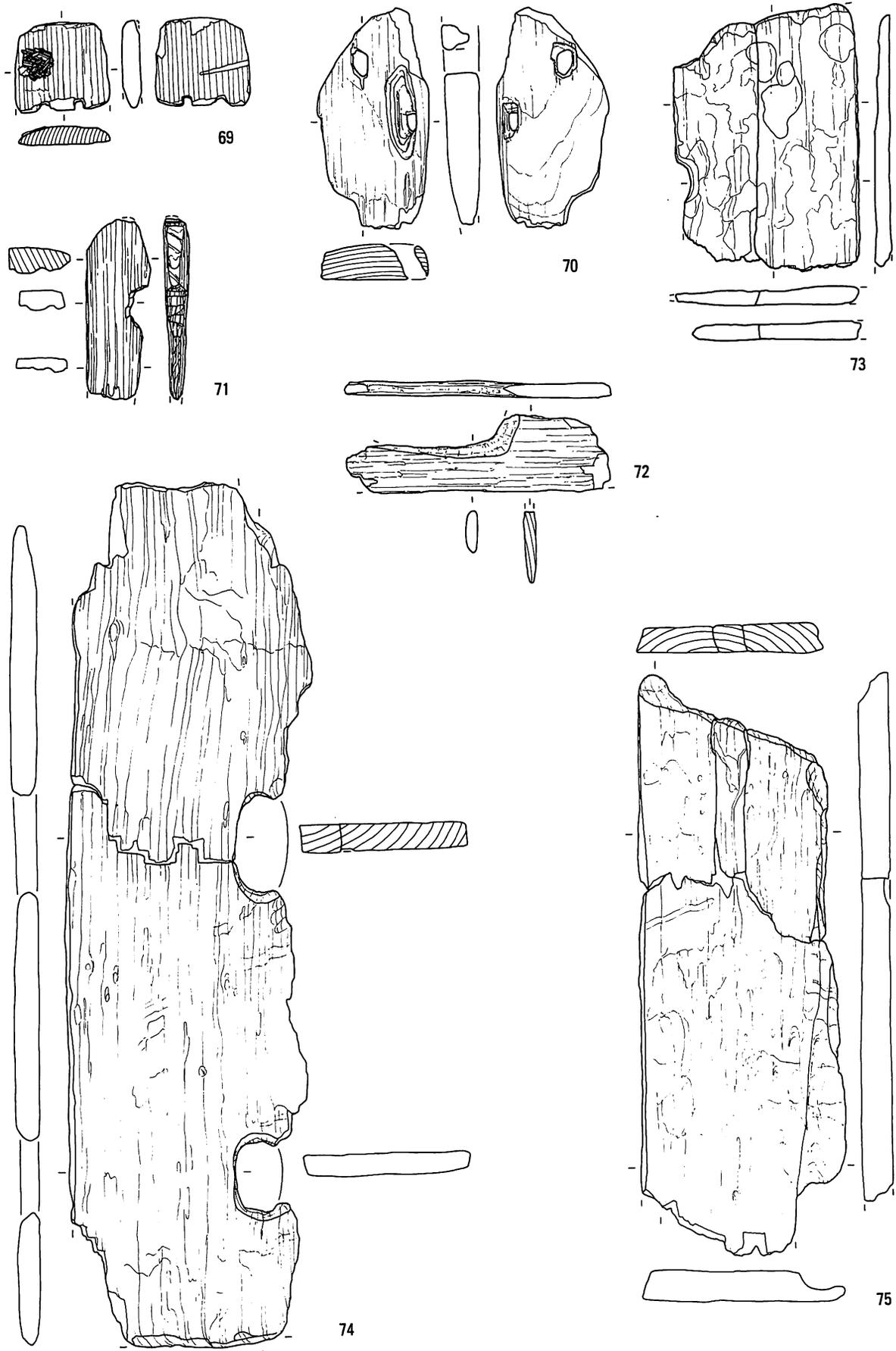
図V-15 木製品(5)



図V-16 木製品(6)

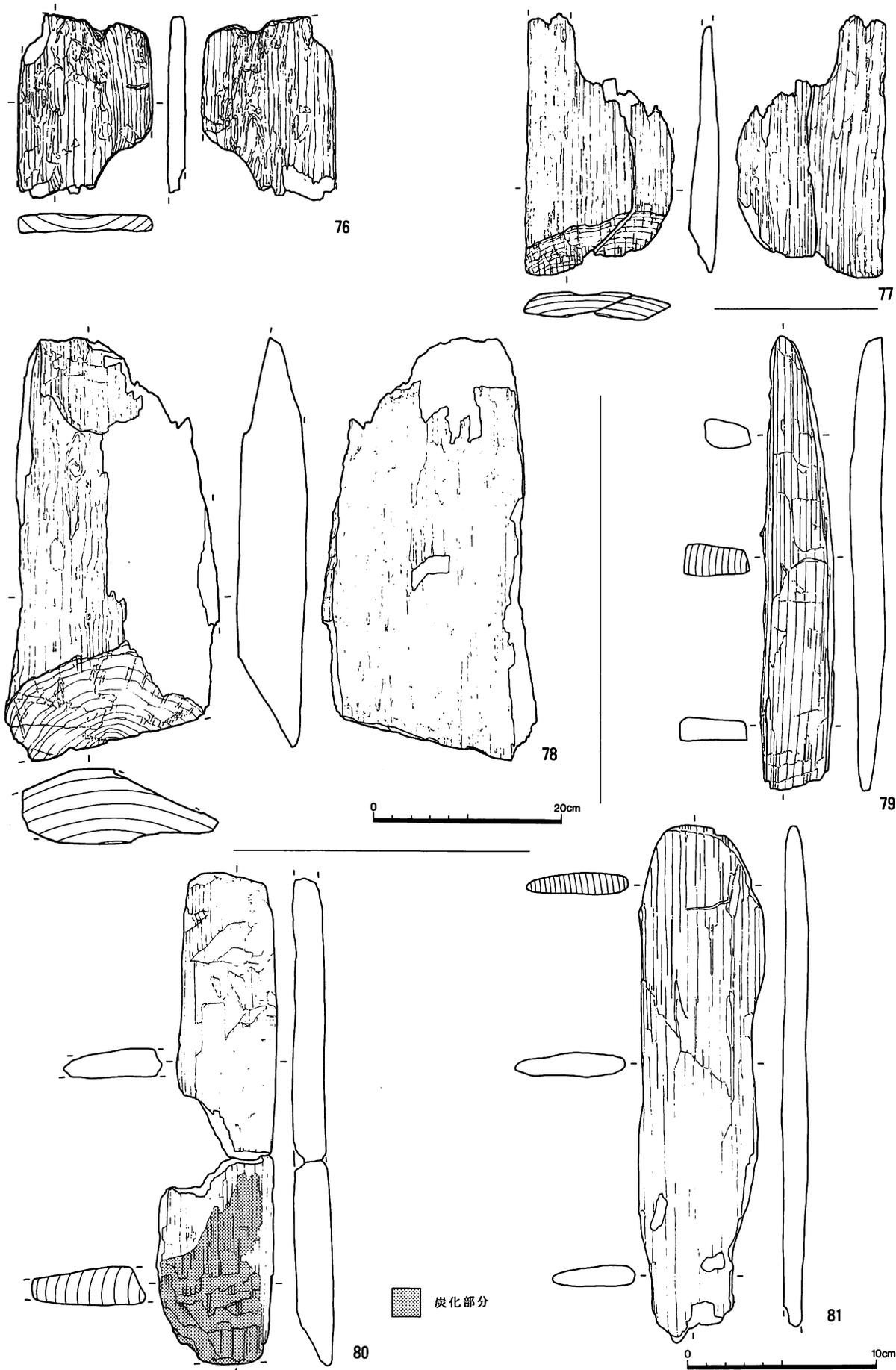


図V-17 木製品(7)

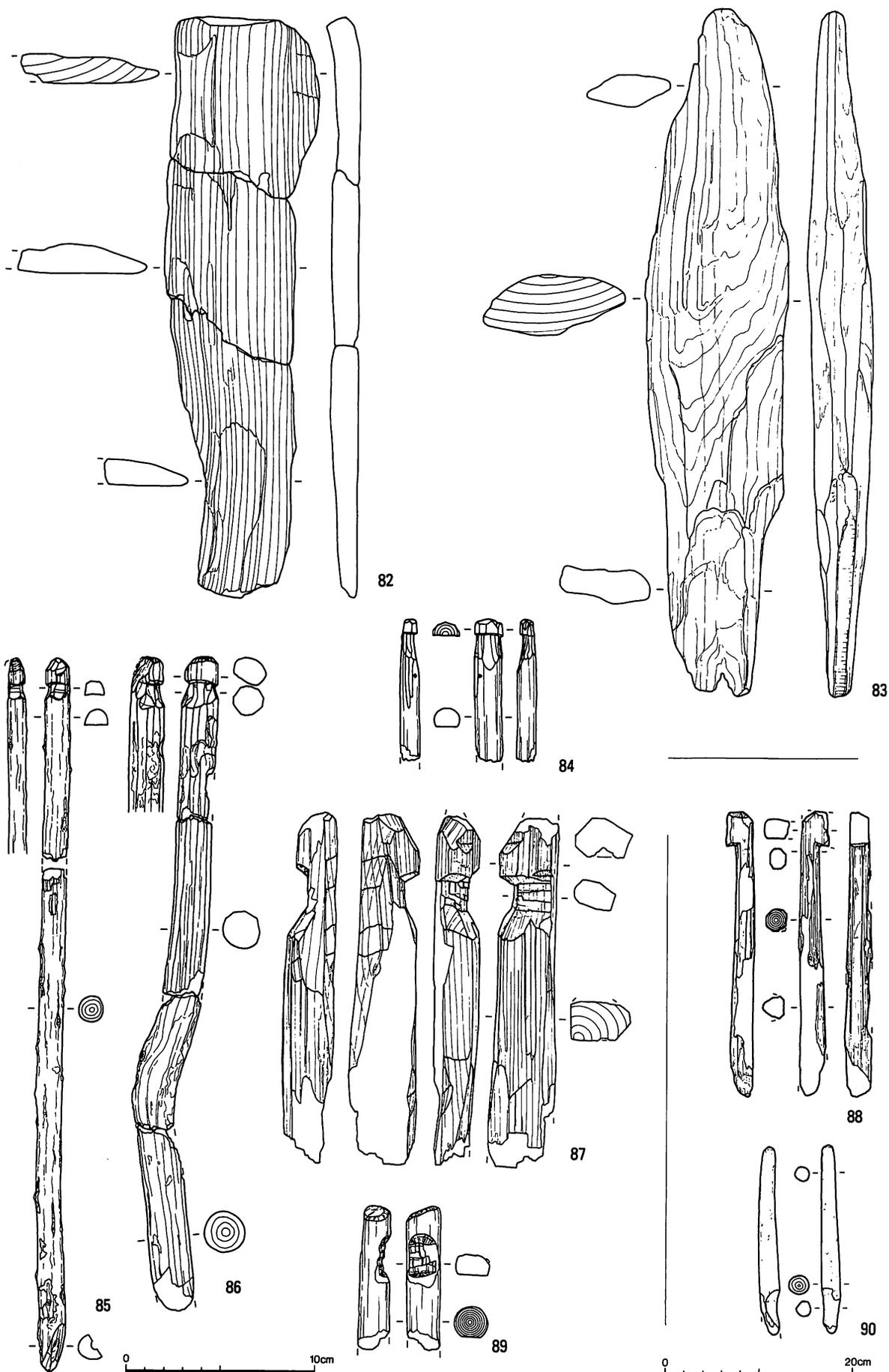


0 10cm

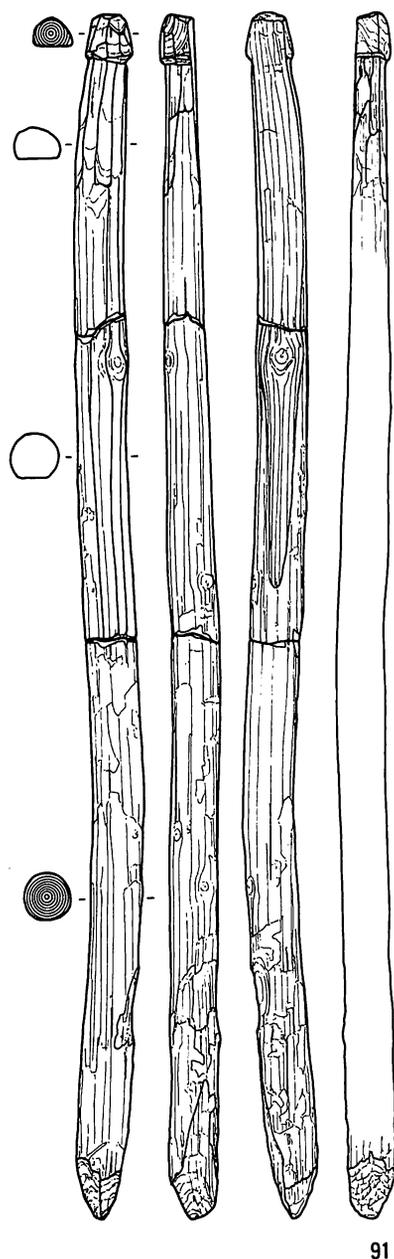
図V-18 木製品(8)



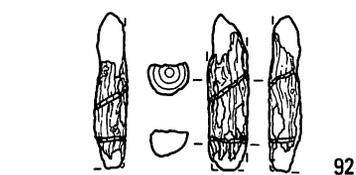
図V-19 木製品(9)



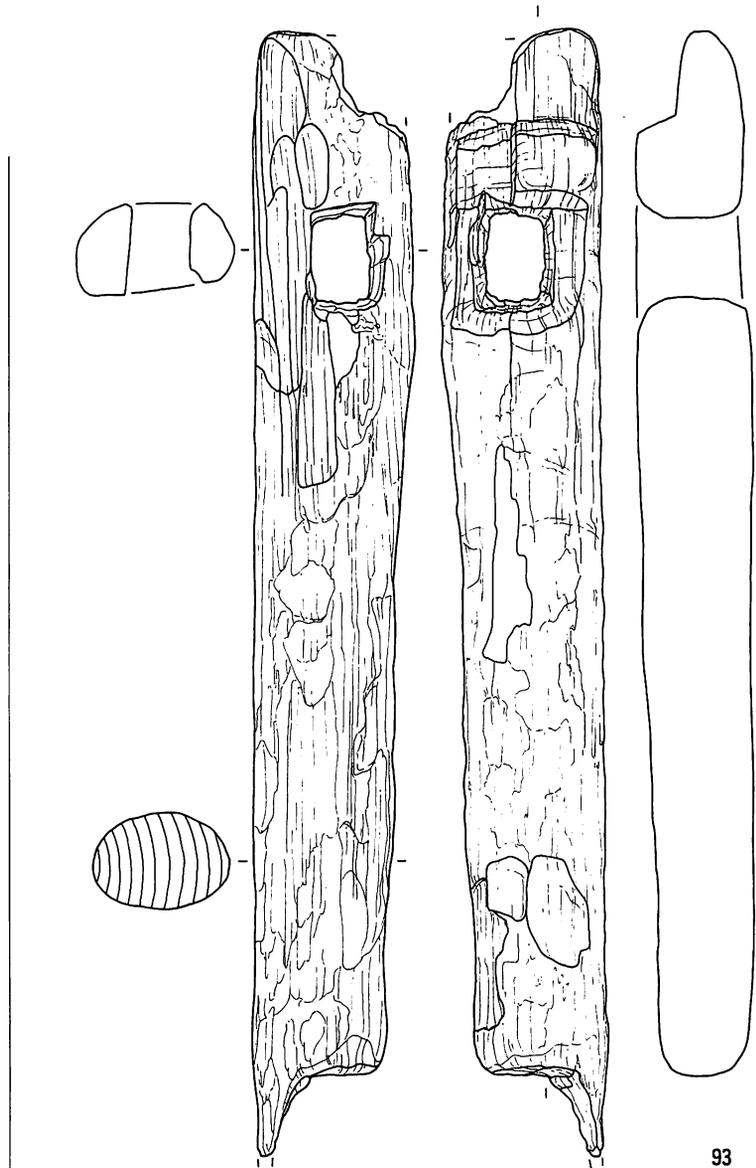
図V-20 木製品(10)



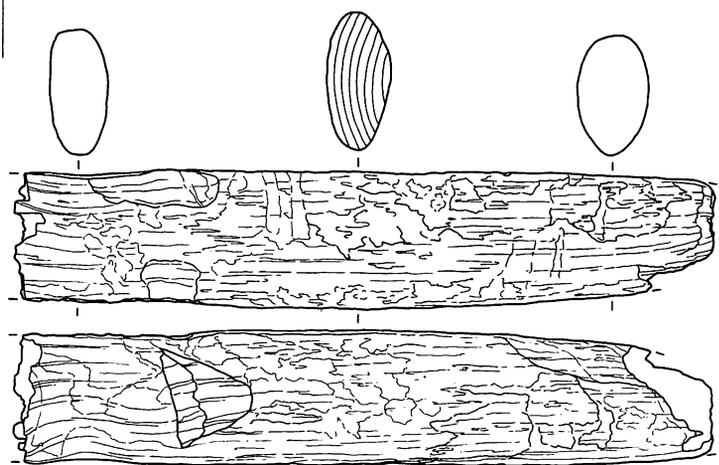
91



92



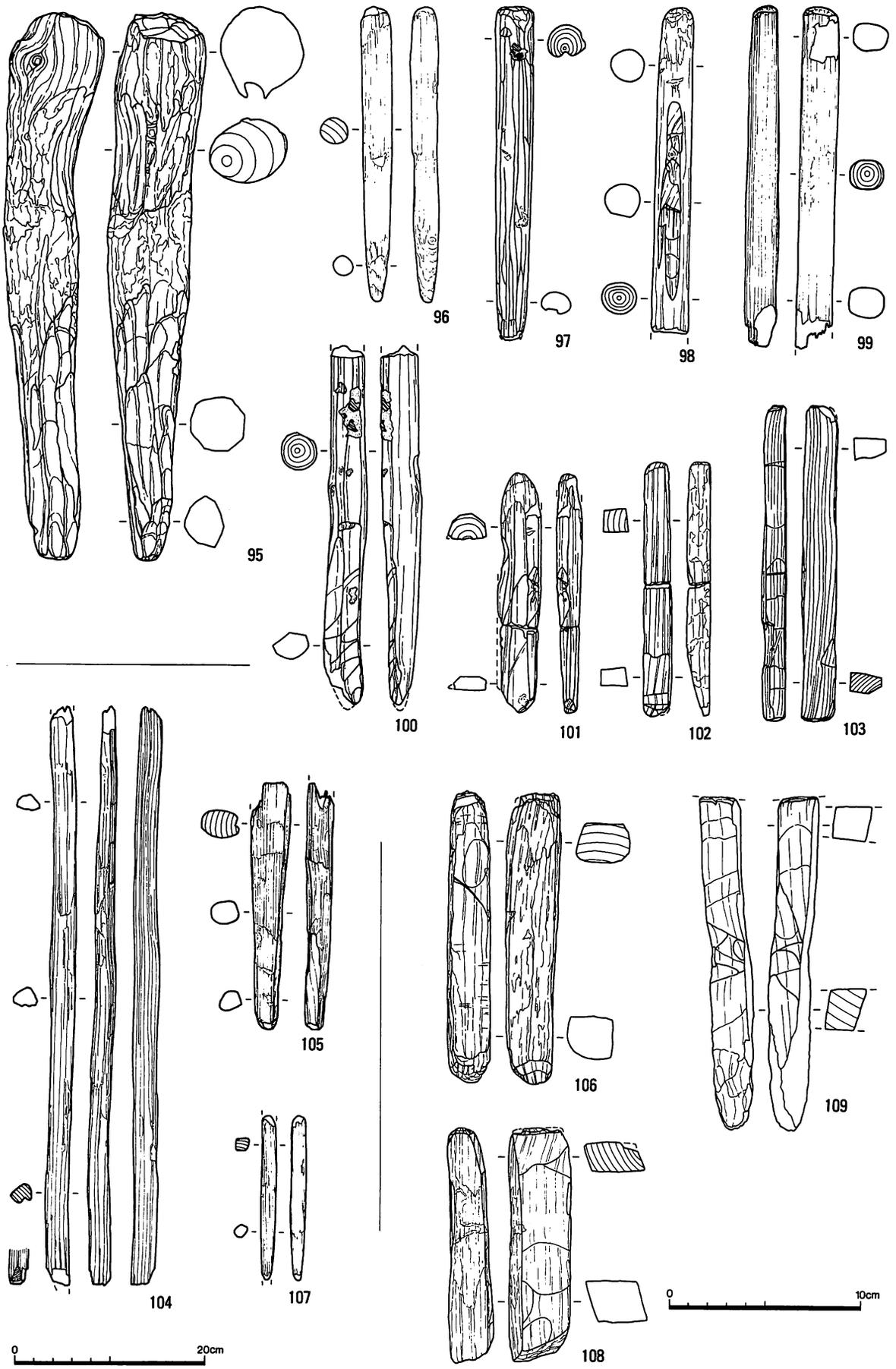
93



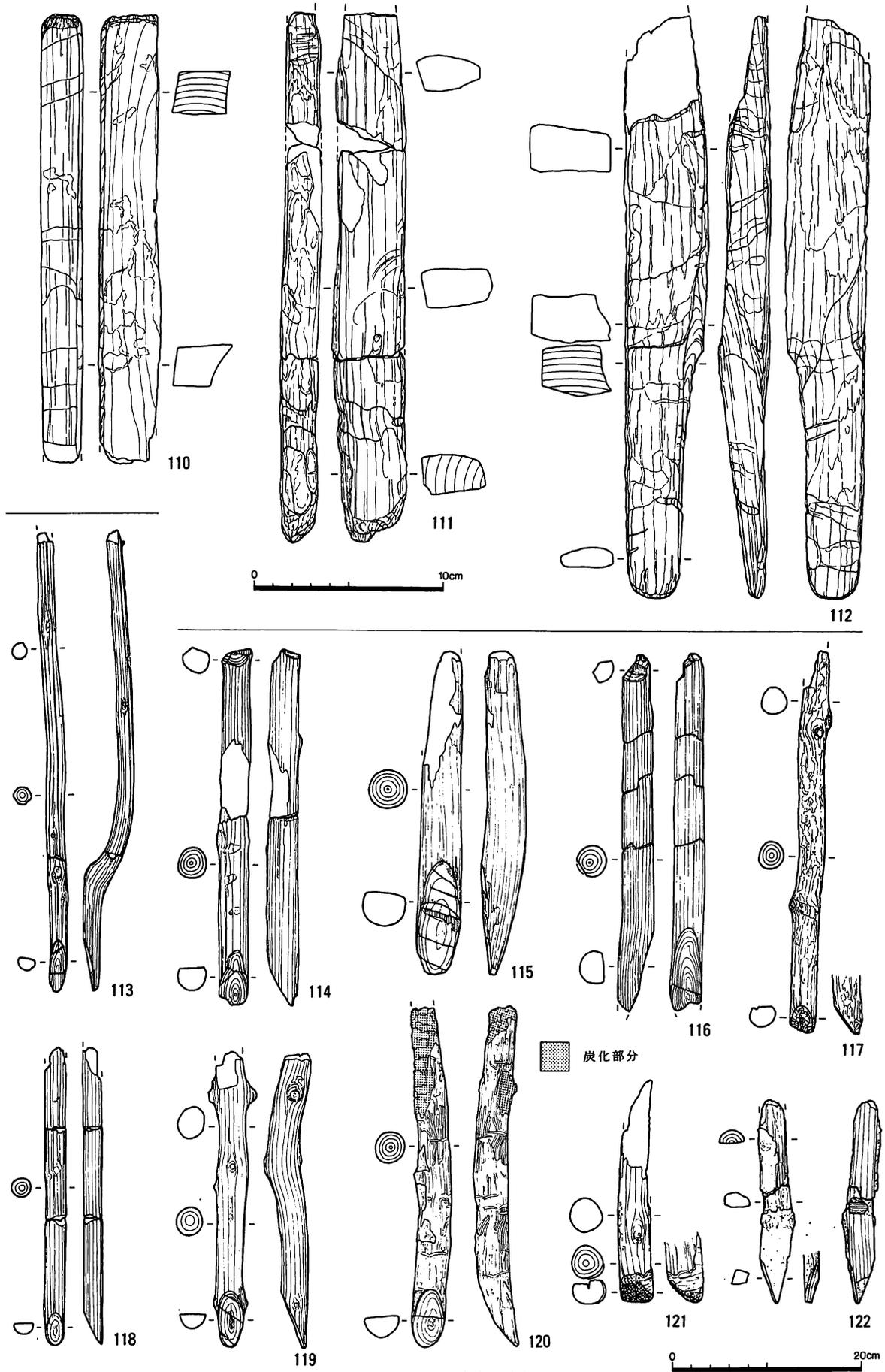
94



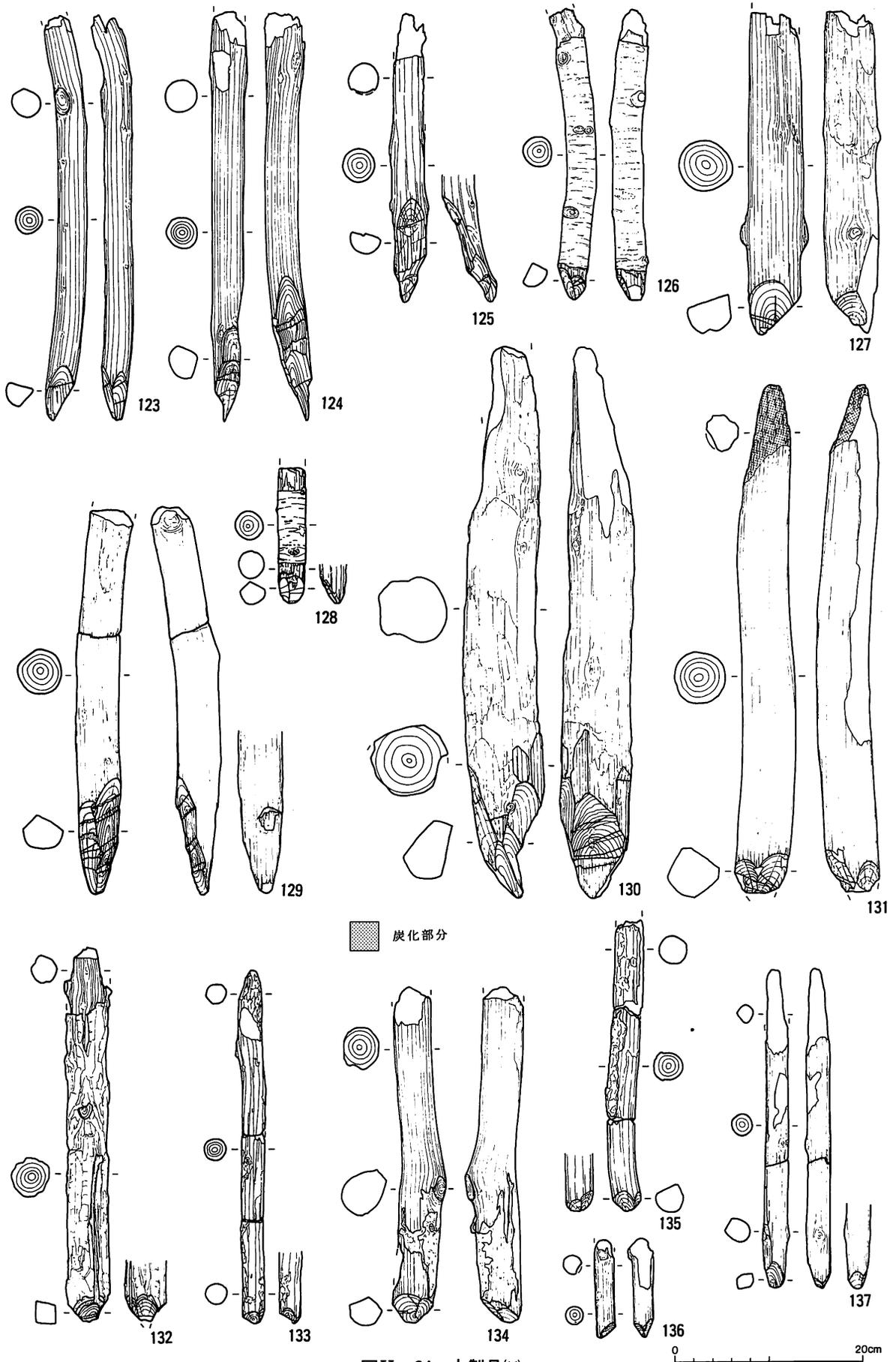
図V-21 木製品(11)



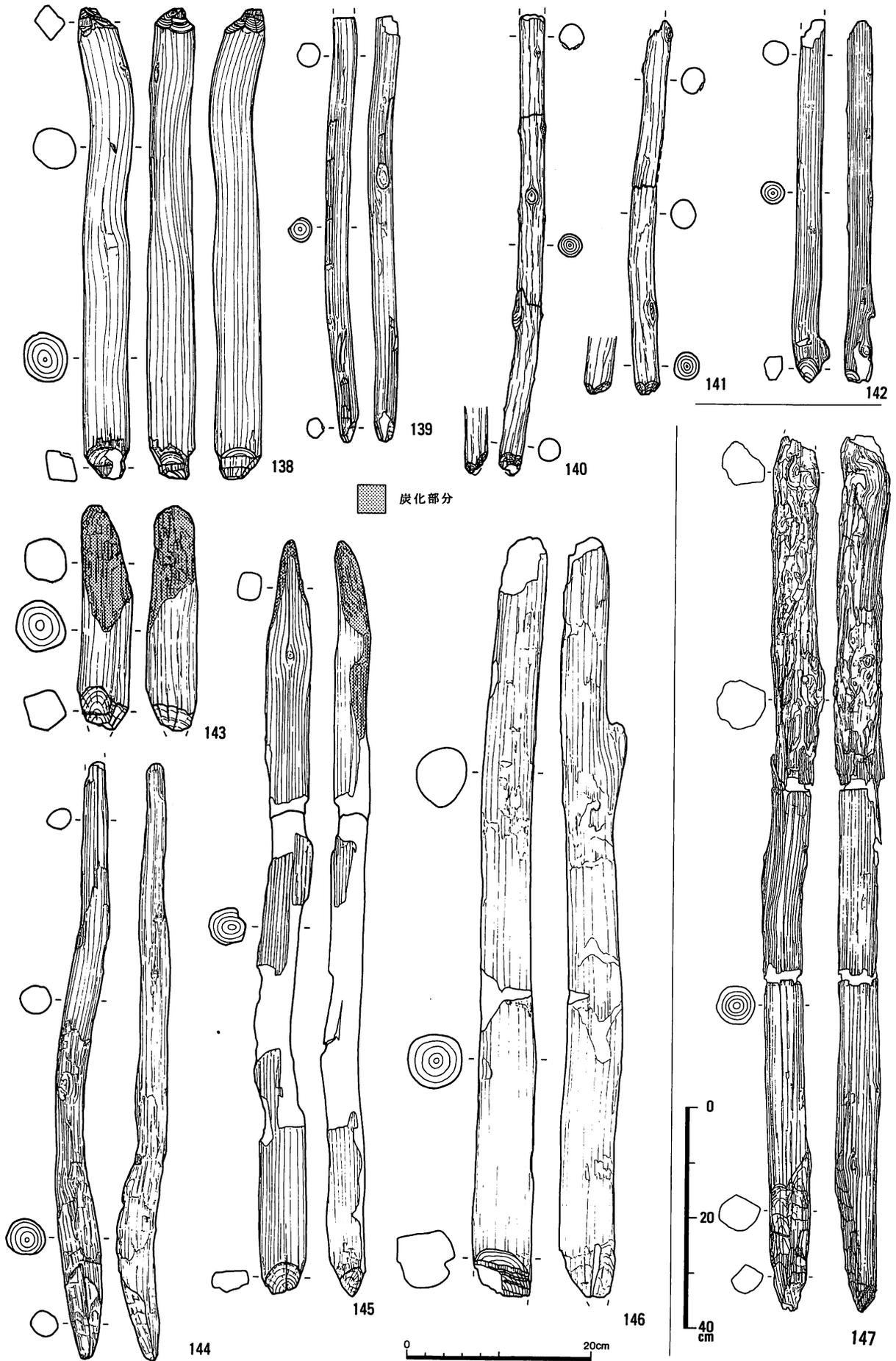
図V-22 木製品(12)



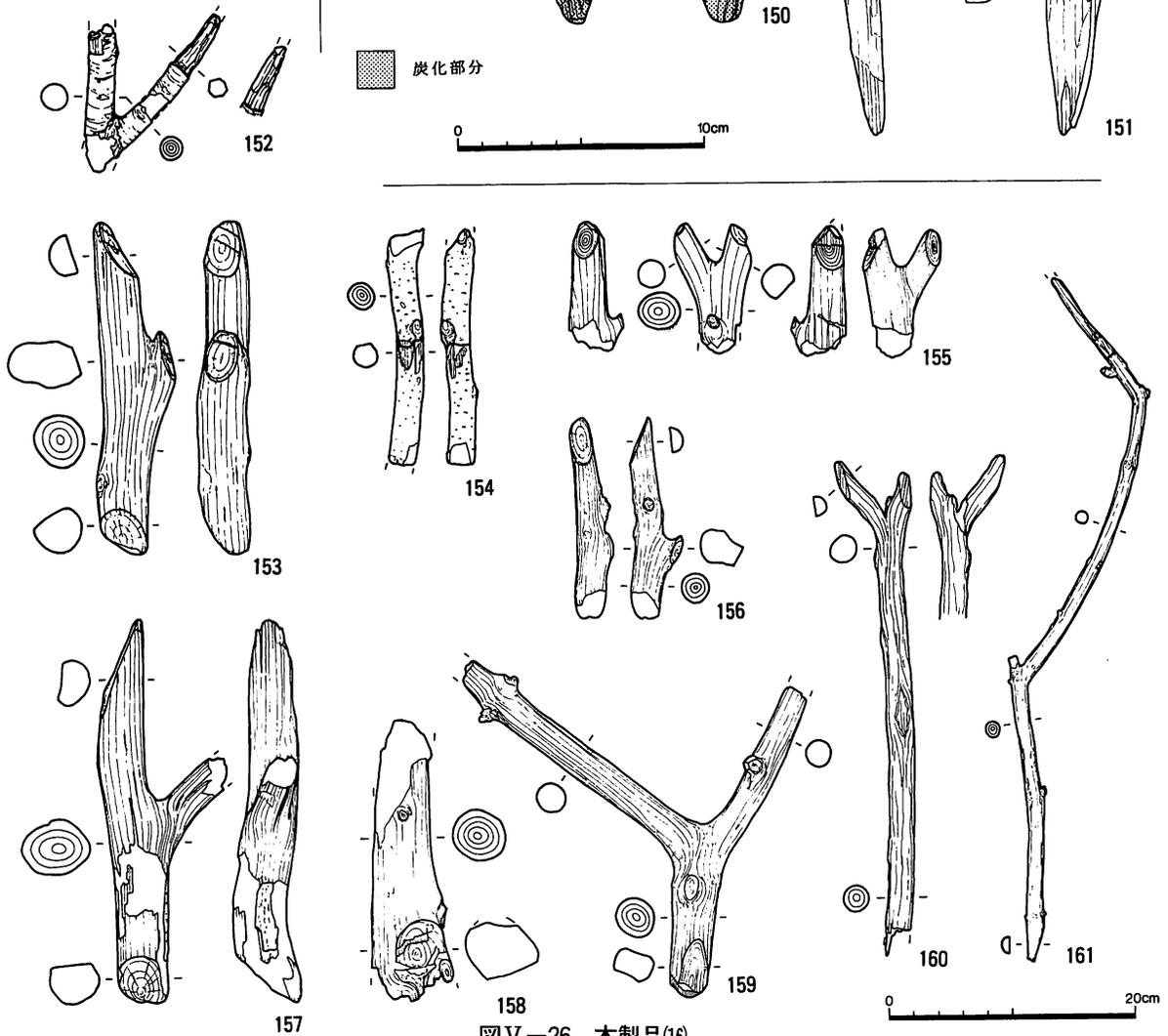
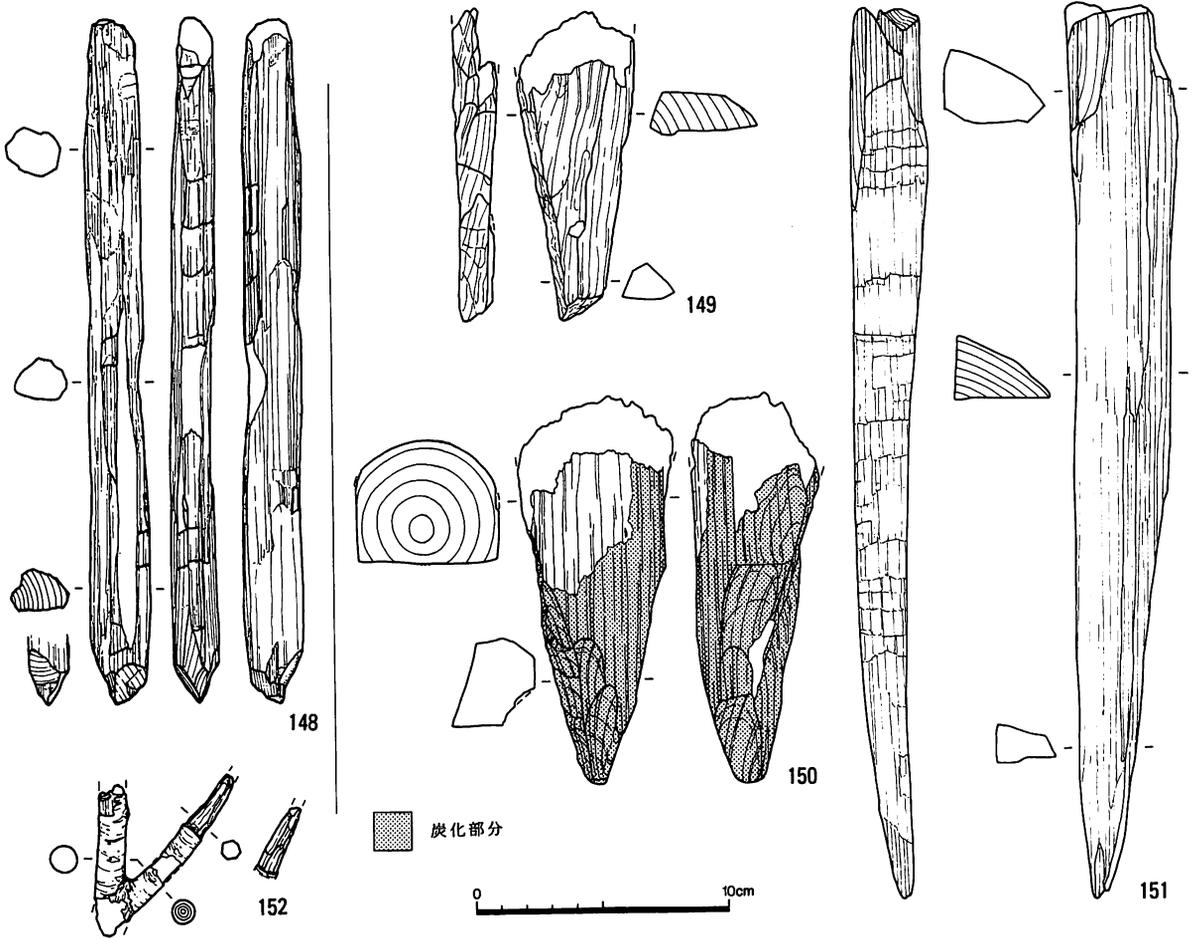
図V-23 木製品(13)



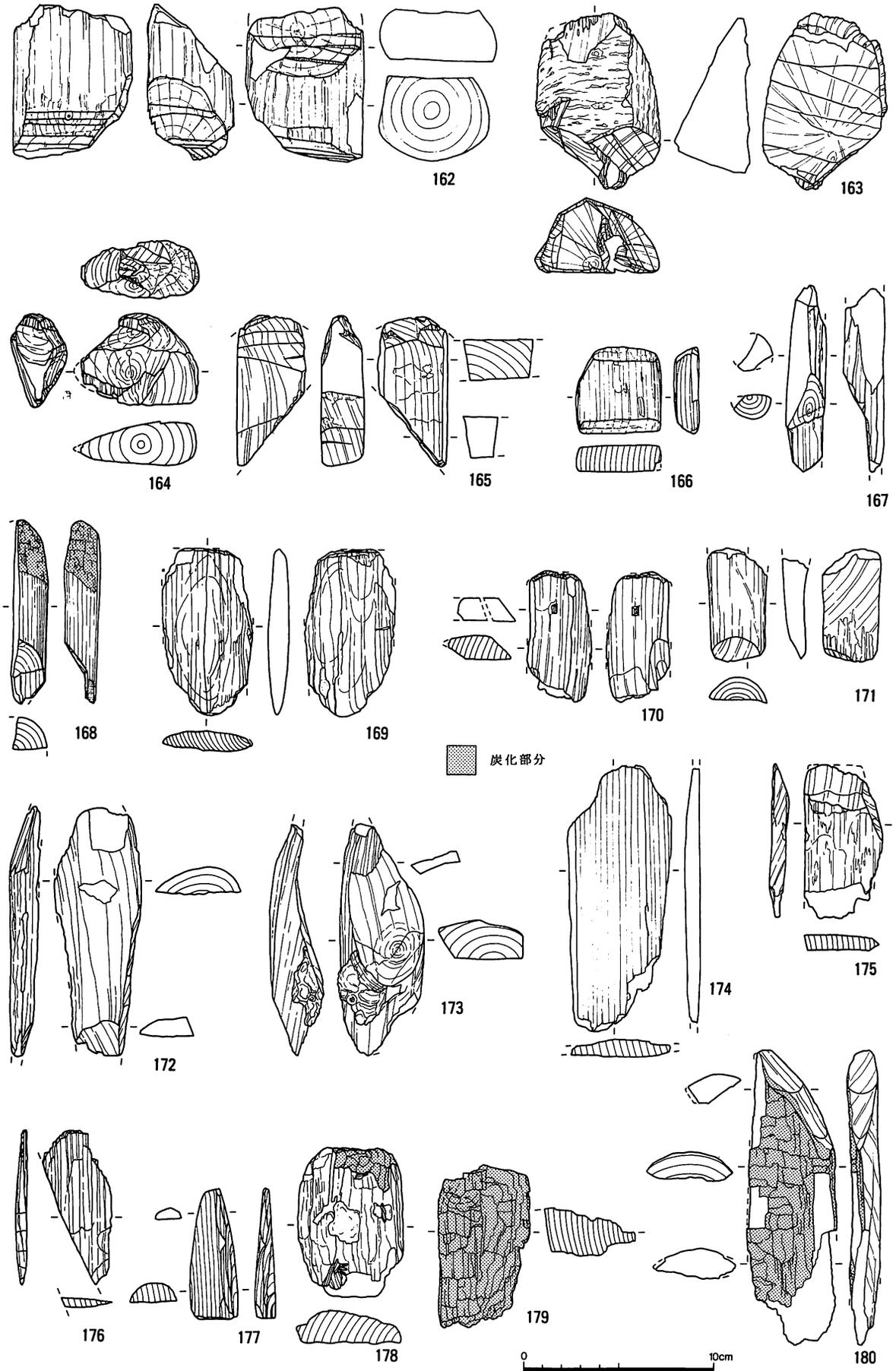
図V-24 木製品(14)



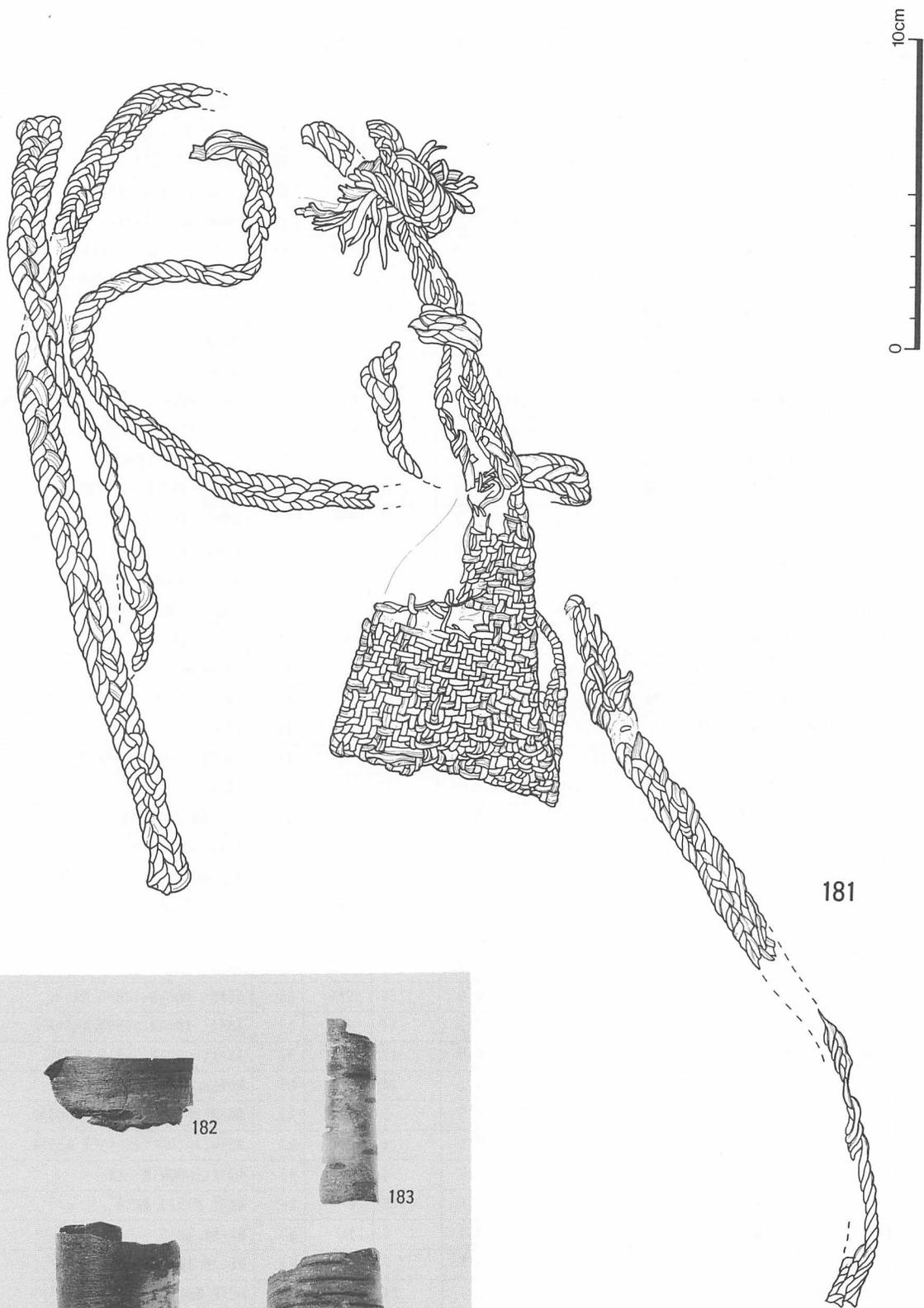
図V-25 木製品(15)



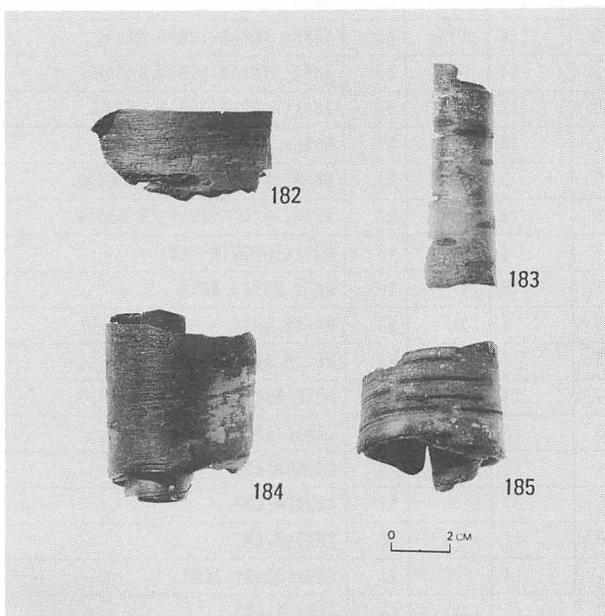
図V-26 木製品(16)



図V-27 木製品(17)



181



182

183

184

185

図V-28 繊維製品・樹皮

表V-5 掲載木製品一覧(1)

図版番号	遺物番号	TP番号	名 称	長さ×幅×厚さ(m) ( )付は欠損部数値	湿重量(g)	樹種(属名)	木取り	備 考
1	17	TP-10	アイヌ文様彫刻	( 3.8)×( 4.8)× 1.0	7	カエデ	板目	クレソ・モレウ透彫り、下部、左右欠損。
2	33	TP-26	有 孔 飾 板	10.0 × 4.9 × 0.8	38	スギ?	板目	左右対象の突起、角孔。
3	9	TP- 8	花 矢 状	( 9.8)× 1.3 × 1.2	8	サクラ?	丸木	シロシ刺まっている。装着痕がある。
4	2	TP- 4	中 柄 状	20.5 × 1.3 × 1.3	23	コナラ	板目	基部に隆帯めぐる。装着痕がある。
5	430	TP-26	ヤ ス 状	(17.1)× 1.9 × 1.6	32	アジサイ	板目	裏面溝状。基欠欠損。装着痕がある。
6	429	TP-26	ヤ ス 状	15.9 × 1.6 × 1.1	16	アジサイ	板目	裏面溝状。基欠欠損。装着痕がある。
7	7	TP- 8	襷 受 部 材	(62.6)× 5.5 × 2.8	472	ヤナギ?	板目	断面隅丸三角形。輪造込み式。片側表裏にシロシ刺まっている。
8	8	TP- 8	襷 受 部 材	74.7 × 5.6 × 5.2	1123	モミ	板目	断面隅丸三角形。枝を利用した軸直接作付式。シロシ刺まっている。
9	333b	TP-10	襷 受 部 材?	(12.1)×( 3.8)× 3.1	62	コナラ	板目	両端欠損。
10	333a	TP-10	襷 受 部 材?	(10.0)×( 4.8)× 2.8	100	コナラ	板目	両端欠損。
11	21	TP-13	有 孔 部 材	(12.1)× 8.5 × 3.2	146	サクラ	半截	孔2箇所。2点接合。
12	29	TP-26	縦 槌	11.0 ×( 5.9)× 5.6	218	クワ	丸木	頭部のみ。外樹皮残る。角孔に榫の刺さった所が残存。使用痕がある。
13	30	TP-26	縦 槌	(24.6)× 14.6 × 4.7	360	サクラ	丸木	未製品。外樹皮残る。榫を槌、枝を柄とする。
14	19	TP-10	横 槌	33.2 × 9.1 × 5.6	632	リンゴ?	丸木	榫を槌、枝を柄とする。使用痕がある。
15	438	TP-26	敲 打 棒	70.0 × 5.5 × 4.8	1040	トウヒ	丸木	わずかに反った棒状で非常に硬い。打撃痕がある。
16	12	TP-10	ペ ラ	(66.9)× 7.2 × 2.2	484	コナラ	板目	基部欠損。両側縁に刻目がある。
17	1002	TP-22	漆 塗 椀 片	2.0 × 2.8 × 0.6	2	?	横木	胴部破片。内面朱漆、外面黒漆地に朱漆。
18	1001	TP- 4	漆 塗 椀 片	1.9 × 1.4 × 0.5	1	?	横木	胴部破片。内面黒漆剥がれ、外面黒漆地に朱漆。
19	1000	TP- 4	漆 塗 椀 底	5.3 × 5.5 × 2.1	35	?	横木	底部破片。内面朱漆、外面黒漆地に朱漆。
20	13	TP-10	曲 物 把 手 部	(25.1)× 14.0 × 1.8	248	スギ	板目	袂入部の一端欠損。
21	433	TP-26	桶 側 板	(20.9)× 3.3 × 1.1	60	クワ	板目	角溝と角孔がある。2点接合。
22	3	TP- 4	桶 側 板	26.9 ×( 6.5)× 1.5	143	カエデ	板目	角溝と角孔あり。タガによるつぶれがある。7点接合。
23	24	TP-24	桶 底 板	8.0 × 8.0 × 1.0	46	スギ	板目	横断面台形
24	10	TP- 9	盆 状	(14.5)× 11.0 × 2.5	161	クルミ	横木	割物。側縁立ち上がる。角の垢剥きの可能性がある。
25	11	TP- 9	盆 状	(17.6)×(12.3)×( 3.0)	234	カツラ	横木	割物。側縁立ち上がる突状。
26	435	TP-26	木 箱	(15.9)×( 1.6)× 1.1	16	スギ	板目	箱などの底板。側面に釘穴がある。
27	127	TP- 6	箸 状	(22.9)× 0.9 × 0.7	9	スギ	板目	両端が細いA類。断面8角形。
28	25	TP-24	箸 状	23.4 × 0.9 × 0.8	10	アジサイ	板目	両端に尖端部があり、基部側が太いB1類。断面多角形。
29	198	TP- 8	箸 状	29.0 × 1.0 × 0.9	13	アジサイ	板目	断面多角形。基部が炭化している。
30	22	TP-13	箸 状	(33.1)× 12.2 × 0.8	22	スギ	板目	基部が太く、尖端のみ細くなるB2類。断面8角形。
31	196	TP- 8	箸 状	(34.3)× 1.0 × 0.9	18	アジサイ	板目	基部が太く、尖端のみ細くなるB2類。断面多角形。
32	18	TP-10	箸 状	38.3 × 1.2 × 0.9	24	アジサイ	板目	基部が太く、尖端のみ細くなるB3類。断面8角形。
33	14	TP-10	箸 状	28.0 × 1.0 × 0.9	14	アジサイ	板目	基部が太く、尖端のみ細くなるB3類。断面多角形。
34	217	TP- 8	箸 状	(25.4)× 1.3 × 0.6	12	ツグ?	板目	基部が太く、尖端のみ細くなるB3類。断面長方形。
35	431	TP-26	箸 状	(26.4)× 1.3 × 1.1	24	アジサイ	板目	断面長方形。基部欠損。
36	218	TP- 8	箸 状	21.0 × 0.5 × 0.5	5	アジサイ?	丸木	胴部が同じ太さで両端に尖端部をもつC類。断面多角形。
37	26	TP-24	箸 状	18.9 × 0.7 × 0.5	4	アジサイ	板目	胴部が同じ太さで両端に尖端部をもつC類。断面長方形。
38	38	TP-26	箸 状	17.3 × 0.7 × 0.6	4	アジサイ	板目	胴部が太くその両端細く削ったA類
39	34	TP-26	箸 状	(18.3)× 1.1 × 0.5	6	スギ?	板目	端部炭化。断面長方形。基部欠損。
40	37	TP-26	箸 状	(12.6)× 0.9 × 0.9	6	トウヒ	板目	断面多角形。基部欠損。
41	149	TP- 7	箸 状	( 6.8)× 0.7 × 6.2	2	スギ	板目	断面多角形。基部欠損。折れ口炭化。
42	423	TP-26	箸 状	(12.1)×( 1.4)× 1.4	14	イチイ	板目	両端欠損。断面正方形。基部欠損。
43	181	TP- 7	串 状	36.5 × 2.0 × 1.9	68	トネリコ	丸木	2面削りによる筒状部分と尖端部をもつ。
44	395	TP-21	串 状	(35.7)× 1.6 × 1.7	70	?	丸木	尖端部は片側1面削り。
45	178	TP- 7	串 状	(31.2)× 1.9 × 1.9	67	ウルシ	丸木	尖端部は片側1面削り。
46	40	TP-26	串 状	(17.8)× 1.0 × 1.0	11	?	丸木	尖端部は片側1面削り。
47	75	TP- 3	串 状	(21.1)× 1.1 × 1.1	14	?	丸木	尖端部は片側1面削り。2点接合。
48	205	TP- 8	串 状	(21.7)× 1.1 × 1.3	14	イヌエンジュ	丸木	尖端部は片側1面削り。

表V-6 掲載木製品一覧(2)

図版番号	遺物番号	TP番号	名称	長さ×幅×厚さ(mm) ( )付は欠損部数値	湿重量(g)	樹種(属名)	木取り	備考
49	35	TP-26	串状	(22.4)×1.2×1.3	22	アジサイ	板目	胴部から先端部にかけて炭化している
50	89	TP-4	串状	(7.0)×0.8×0.9	4	サクラ?	丸木	先端部は片側1面削り。
51	134	TP-6	串状	(8.7)×1.0×0.5	3	カツラ	板目	断面楕円形で薄い。
52	156	TP-7	串状	(6.0)×0.8×0.8	2	ブナ?	丸木	先端部は片側1面削り。
53	222	TP-8	串状	(4.3)×1.1×0.8	2	ガズミ?	半截	片側1面削りの先端部。
54	278	TP-9	串状	(13.1)×1.4×0.5	7	スギ	板目	断面幅広いの方形。
55	45	TP-A	串状	(13.4)×1.6×0.8	11	スギ	板目	断面幅広いの方形。先端は多面削りで細い。
56	28	TP-24	串状	12.9×1.4×1.2	11	アジサイ	丸木	端部炭化
57	154	TP-7	串状	11.5×1.3×0.6	6	ササ	1/4割	ササを分割し、先端部薄く加工。
58	153	TP-7	串状	(7.4)×1.3×0.5	2	ササ	1/4割	両端欠損。
59	215	TP-8	薄板目板材	(41.4)×5.0×0.6	76	スギ	板目	端部に加工痕跡。
60	374	TP-16	薄板目板材	(42.6)×(4.9)×0.4	48	スギ	板目	10点接合。
61	373	TP-16	薄板目板材	(51.1)×(4.7)×0.4	50	スギ	板目	13点接合。
62	427	TP-26	薄板目板材	(6.5)×2.0×0.5	5	トリビ?	板目	両端部欠損。
63	66	TP-3	薄板目板材	(8.5)×(1.8)×0.4	5	スギ?	板目	上部に向かって薄くなる。
64	90	TP-4	薄板目板材	(9.4)×(2.8)×0.5	8	モミ	板目	両端部欠損。
65	86	TP-4	薄板目板材	(19.4)×(3.5)×0.8	34	モミ	板目	2点接合。断面や凸レンズ状。
66	400	TP-24	薄板目板材	(17.2)×(3.1)×1.1	40	スギ	板目	断面凸レンズ状。
67	155	TP-7	薄板目板材	(10.6)×2.7×0.8	15	スギ	板目	断面凸レンズ状。
68	71	TP-3	薄板目板材	(8.2)×1.4×0.7	4	イヌエンジュ	板目	断面三角形。
69	5	TP-7	有孔板材	(9.1)×4.8×1.0	14	モクレン	板目	2つの穴部分から折れる。表面に付着物がある。
70	4	TP-7	有孔板材	(11.3)×(5.8)×1.9	69	カツラ	板目	小型の下駄状に孔がある。
71	405	TP-24	挟入板材	(9.1)×3.2×1.3	19	クリ	板目	片側側面に抉りがある。
72	354	TP-11	挟入板材	(13.8)×(3.9)×0.8	22	モクレン	板目	薄い板状で側面に幅広い抉りがある。
73	20	TP-10	挟入板材	(28.0)×19.1×1.9	614	ハリギリ	板目	片側側面にわずかに抉りがある。
74	41	TP-26	有孔板材	(44.1)×(12.5)×1.9	548	ハリギリ	板目	2点接合。2孔の部分から折れる。
75	43	TP-26	板材	(29.5)×(10.7)×1.6	354	ハリギリ	板目	5点接合。表面に溝状のくぼみがある。
76	441	TP-26	板材	(18.8)×14.0×1.9	328	ハリギリ	板目	側縁は角がとれ丸い。
77	58	TP-1	板材	(27.1)×(15.5)×3.2	554	ハンノキ	板目	2点接合。外周の曲面部残る。
78	57	TP-1	板材	(43.4)×(21.3)×7.7	3168	ハンノキ	板目	分割した板目材で外周の曲面部残る。
79	240	TP-8	板材	23.5×3.8×1.7	84	コナラ	板目	上部のすばまる短冊状。
80	286	TP-9	板材	(25.5)×(5.8)×2.0	51	ハンノキ	板目	下端部炭化。種などの側板か?
81	353	TP-11	板状	(26.9)×6.4×1.4	139	サクラ	板目	断面凸レンズ状で側縁は丸い。
82	146	TP-7	板材	(29.9)×(7.6)×1.6	195	ハリギリ	板目	下部のすばまる短冊状。
83	195	TP-8	板材	(35.5)×(7.7)×(3.3)	337	ニレ	板目	断面凸レンズ状。
84	15	TP-10	端部挟入付部材	(7.3)×1.4×1.0	7	ヤナギ	半截	コケン状の挟入部作出。裏面平坦。
85	213	TP-8	端部挟入付部材	36.5×1.4×1.4	41	ブナ	丸木	コケン状の挟入部作出。裏面平坦。先端部一面削り。
86	437	TP-26	端部挟入付部材	(33.7)×2.1×2.2	92	ヤナギ	丸木	4点接合。コケン状の挟入部作出。胴部は大き屈曲。
87	239	TP-8	端部挟入付部材	(18.0)×3.4×2.4	86	カツラ	1/4割	面取りされた角棒状の端部に挟入部作出。
88	6	TP-7	端部鉤付部材	(29.8)×(2.8)×2.7	118	リンゴ?	丸木	面取りされた角棒状の端部に挟入部作出。端部欠損。
89	16	TP-10	端部挟入付部材	(7.5)×1.8×1.6	14	ヤナギ	丸木	コケン状の挟入部作出。裏面平坦。
90	142	TP-6	挟入付棒	(19.5)×2.2×1.8	44	ナナカマド?	丸木	下部につぶれがある。
91	23	TP-22	端部挟入付部材	92.7×4.2×4.0	969	トネリコ	丸木	コケン状の挟入部作出。裏面平坦。3点接合。
92	356	TP-11	丸棒状	(12.0)×3.2×(2.6)	48	コナラ	半割	縛痕めぐる。
93	42	TP-26	ホゾ穴付部材	(43.4)×6.2×4.5	687	モクレン	板目	上部差し込み加工があり、四角いホゾ穴があく。建材と思われる。
94	330	TP-10	丸棒状	(27.5)×5.2×2.7	168	トネリコ	板目	断面楕円形の棒状。両端部欠損。
95	436	TP-26	丸棒状	28.0×4.7×4.5	282	リンゴ?	丸木	頭部のつぶれた短い板状。
96	275	TP-9	丸棒状	15.1×1.6×1.4	2	アジサイ	板目	端部太く丸い。差し込み用の軸?

表V-7 掲載木製品一覧(3)

図版番号	遺物番号	TP番号	名称	長さ×幅×厚さ(㎝) ( )付は欠損部数値	湿重量(g)	樹種(属名)	木取り	備考
97	82	TP-4	丸棒状	(17.2)×1.9×1.5	32	アジサイ	丸木	裏面側心が腐り、溝状。
98	83	TP-4	丸棒状	(16.8)×1.9×1.8	41	トネリコ?	丸木	端部丸く、表面に平坦な削りが認められる。
99	145	TP-6	丸棒状	(35.0)×3.7×3.2	32	サクラ	丸木	端部わずかに丸い。
100	95	TP-4	丸棒状	(18.4)×1.9×2.0	42	トネリコ	丸木	長い削りにより、尖端徐々に細くなる。炭の可能性ある。
101	94	TP-4	角材	12.3×(2.1)×1.3	17	トネリコ	半截	2点接合。表面は面取りされ、裏面は平坦である。
102	407	TP-24	角材	13.0×1.4×1.2	16	ハリギリ	径目	尖端片側一面削り。
103	328	TP-10	角材	16.2×1.7×1.2	26	モミ	径目	表面に削り痕多数ある。
104	237	TP-8	角材	(59.3)×2.1×2.3	190	スギ	径目	先端部に加工ある。
105	143	TP-6	角材	(25.3)×3.9×2.6	140	モクレン	径目	尖端徐々に細くなる角杖状。
106	331	TP-10	角材	14.9×2.7×2.1	66	モミ	径目	丹念に面取りされている。両端部丸い。
107	138	TP-6	角材	(16.9)×1.5×1.6	27	クワ?	径目	短部や中、先端に向かって細くなり断面円形となる。
108	221	TP-8	角材	12.1×3.1×2.4	?	ハリギリ	径目	丹念に面取りされている。
109	115	TP-6	角材	(17.2)×(2.2)×2.2	53	ハコヤナギ	径目	加工痕顯著に残る。側段の一部欠損。
110	216	TP-8	角材	(23.0)×(3.2)×2.1	124	カツラ	径目	丹念に面取りされている。端部の角が落されている。
111	434	TP-26	角材	(27.1)×2.0×3.7	137	カエデ	径目	3点接合。加工痕顯著である。
112	332	TP-10	角材	(29.8)×4.2×2.6	182	コナラ	径目	鉋などによる削り痕が顯著に残る
113	415	TP-24	杭状	(47.0)×2.0×2.8	109	コナラ	丸木	2点接合。尖端片側1面削り。
114	227	TP-8	杭状	36.5×3.5×3.5	293	カエデ	丸木	2点接合。尖端片側1面削り。端部にも加工痕ある。
115	98	TP-4	杭状	(33.1)×4.4×4.4	352	リンゴ?	丸木	尖端片側1面削り。
116	226	TP-8	杭状	(36.7)×3.3×3.2	240	カエデ	丸木	4点接合。尖端片側1面削り。端部にも加工痕ある。
117	379	TP-17	杭状	(39.2)×3.1×3.4	215	ニガキ?	丸木	尖端片側1面削り。
118	369	TP-13	杭状	(30.8)×2.2×2.0	88	ヤナギ	丸木	3点接合。尖端片側1面削り。
119	417	TP-24	杭状	(30.4)×5.0×3.9	206	カエデ	丸木	尖端片側1面削り。
120	344	TP-10	杭状	(35.1)×3.7×3.7	274	キハダ	丸木	尖端片側1面削り。端部炭化。
121	140	TP-6	杭状	(22.9)×3.5×4.3	157	リンゴ?	丸木	尖端部は片側一面削り。尖端部炭化。
122	54	TP-A	杭状	(21.1)×3.5×1.5	62	コナラ	半截	尖端部は両側段の2面削り。
123	336	TP-10	杭状	(41.7)×3.1×3.1	268	キハダ?	丸木	尖端部は2面切りあり削り。
124	365	TP-13	杭状	(41.8)×3.8×3.9	338	コナラ	丸木	尖端部は2面切りあり削り。削り面が長く薄い。
125	347	TP-10	杭状	(29.6)×3.9×3.6	192	カツラ	丸木	尖端部は2面切りあり削り。削り面が長く薄い。
126	387	TP-19	杭状	(30.1)×3.4×3.1	219	サクラ	丸木	尖端部は2面切りあり削り。端部腐食。
127	414	TP-24	杭状	(33.3)×7.1×5.9	705	トネリコ	丸木	尖端部は2面切りあり削り。
128	383	TP-18	杭状	(13.8)×3.1×3.0	79	サクラ	丸木	尖端部は2面切りあり削り。
129	96	TP-4	杭状	(39.6)×4.8×4.8	514	コナラ	丸木	2点接合。尖端部は2面切りあり削り。
130	59	TP-1	杭状	(56.5)×7.9×7.3	1748	コナラ	丸木	尖端部は2面切りあり削り。端部腐食。上部立ち腐れ状。
131	338	TP-10	杭状	(52.2)×5.6×5.6	1074	コナラ	丸木	尖端部は4面削り。端部炭化。
132	343	TP-10	杭状	(38.7)×4.5×4.7	396	コナラ	丸木	2点接合。尖端部は4面削り。端部腐食。
133	392	TP-20	杭状	36.5×2.7×2.3	143	モクレン	丸木	3点接合。尖端部は4面削り。端部腐食。
134	225	TP-8	杭状	(34.8)×4.8×5.4	42?	ヤナギ	丸木	尖端部は4面削り。
135	351	TP-10	杭状	(30.0)×3.1×2.9	188	ヤナギ	丸木	3点接合。尖端部は4面削り。
136	182	TP-7	杭状	(9.4)×2.7×2.3	32	ハコヤナギ	丸木	尖端部は2面切りあり削り。
137	188	TP-7	杭状	(33.1)×2.9×2.7	130	トネリコ	丸木	上部腐食尖端部は4面削り。端部腐食。
138	137	TP-6	杭状	49.3×5.1×5.1	872	キハダ?	丸木	両端部が4面削り。
139	340	TP-10	杭状	(44.7)×2.7×2.6	205	キハダ	丸木	尖端部は4面削り。
140	334	TP-10	杭状	(48.2)×3.1×3.2	244	トネリコ	丸木	3点接合(破損1点)。尖端部は4面削り。
141	352	TP-10	杭状	(39.2)×2.6×3.2	204	ハンノキ	丸木	2点接合。尖端部は4面削り。
142	342	TP-10	杭状	(38.0)×4.0×2.9	199	ニレ	丸木	尖端部5面削り。
143	179	TP-7	杭状	(23.4)×6.9×4.2	321	コナラ	丸木	尖端部5面削り。上部炭化。
144	97	TP-4	杭状	(62.8)×4.4×4.2	478	コナラ	丸木	尖端部は2面切りあり削り。端部腐食。

表V-8 掲載木製品・繊維製品・樹皮・自然遺物一覧

図版番号	遺物番号	TP番号	名 称	長さ×幅×厚さ(㎜) ( )付は欠損部数値	湿重量(g)	樹種(属名)	木取り	備 考
145	370	TP-13	杭 状	79.3 x( 5.1)x 3.9	916	コナラ	丸木	計2点 端部炭化
146	413	TP-24	杭 状	(79.7)x 6.4 x 6.9	1895	トネリコ	丸木	尖端部は2面切りあい削り。
147	442	TP-26	杭 状	(157.7)x 9.3 x 9.0	6565	コナラ	丸木	3点接合。尖端部は2面切りあい削り。
148	236	TP- 8	杭 状	(53.0)x 4.7 x 3.5	568	スギ	板目	角杭。尖端部4面削り。
149	52	TP- A	杭 状	(12.0)x 4.5 x 1.6	34	コナラ	板目	板杭の尖端部。
150	432	TP-26	杭 状	(15.1)x( 6.1)x( 5.0)	182	キハダ	丸木	尖端部は4面削り。尖端部炭化。
151	362	TP-13	杭 状	(34.7)x 4.1 x 3.0	172	スギ	板目	板状杭。先端に向かって徐々に細くなる。
152	44	TP-26	枝 切 痕	(16.3)x( 9.2)x 2.7	66	サクラ	股木	樹状枝材。尖端部面取り加工により細い。
153	187	TP- 7	枝 切 痕	26.4 x 6.9 x 4.2	321	ハンノキ	股木	枝部分一面きり落し。
154	293	TP- 9	枝 切 痕	(18.9)x 2.8 x 2.4	67	カバノキ	丸木	2点接合。胴部に中途の切痕ある。切痕部分から折れる。
155	230	TP- 8	枝 切 痕	(10.3)x 3.4 x 3.0	76	?	股木	枝部分一面きり落し。
156	229	TP- 8	枝 切 痕	(15.9)x 3.6 x 2.9	58	ハンノキ	丸木	枝部分一面きり落し。
157	411	TP-24	枝 切 痕	30.7 x 5.5 x 4.5	377	コナラ	股木	枝部分一面きり落し。
158	366	TP-13	枝 切 痕	(22.6)x( 6.0)x( 4.9)	302	ヤナギ	丸木	木根の切り落し。
159	381	TP-17	枝 切 痕	(27.2)x 3.6 x 4.1	288	ニガキ?	股木	大きく開く股木。幹先端部2面削り。
160	348	TP-10	枝 切 痕	(39.7)x 6.0 x 2.1	129	ニレ?	股木	枝部分一面きり落し。股部分から裂けている。
161	376	TP-16	枝 切 痕	(54.5)x 1.4 x 1.6	70	アジサイ	丸木	幹先端部側一面削り。
162	148	TP- 7	木 端	( 7.8)x 6.0 x 4.5	110	ハンノキ	丸木	丸木材の端面残る。
163	212	TP- 8	木 端	9.0 x 6.4 x 3.8	78	ハンノキ	丸木	丸木材の端面残る。
164	162	TP- 7	木 端	( 4.7)x 6.0 x 3.0	32	コナラ	板目	
165	169	TP- 7	木 端	( 7.7)x( 3.4)x 2.1	35	ハリギリ	板目	板端は角材片。
166	72	TP- 3	木 端	4.5 x 4.3 x 1.4	21	スギ	板目	板片。
167	399	TP-24	木 端	( 9.4)x( 2.0)x( 2.1)	13	ニシキギ	丸木	丸木の切断片。
168	242	TP- 8	木 端	( 9.3)x( 1.8)x( 1.9)	16	ヤナギ	1/4割	端部炭化。
169	1	TP- 4	切 片	( 8.6)x( 4.7)x 1.1	22	モミ	板目	丸木の端面残る。
170	160	TP- 7	切 片	( 6.7)x( 3.3)x 1.3	17	ハリギリ	板目	丸木の端面残る。貫通孔ある。
171	117	TP- 6	切 片	( 5.8)x 3.0 x 1.3	12	モクレン	半截	丸木の端面残る。切断面平滑ない。
172	161	TP- 7	切 片	(12.8)x 4.5 x 1.5	36	カエデ	板目	丸木の端面残る。縦長削り切片。
173	163	TP- 7	切 片	(11.9)x 4.4 x 2.6	53	ハンノキ	丸木	丸木の端面残る。
174	48	TP- A	切 片	(13.6)x( 5.4)x 0.8	38	ハリギリ	板目	縦長削り切片。
175	173	TP- 7	切 片	( 7.9)x 4.0 x 0.8	14	カエデ	板目	切断面平滑ない。
176	118	TP- 6	切 片	( 8.0)x( 3.5)x( 0.6)	5	スギ	板目	薄板目板の切片。
177	150	TP- 7	切 片	6.7 x 2.5 x 1.0	9	スギ	板目	枝などの加工時の切片。
178	61	TP- 2	切 片	( 7.7)x 5.4 x 1.8	42	度	板目	上打炭化。
179	256	TP- 8	切 片	( 8.4)x( 4.7)x( 2.3)	40	コナラ	板目	全面炭化。
180	168	TP- 7	切 片	(15.2)x( 4.6)x 1.5	51	ハンノキ	板目	内面炭化。切断面平滑ない。
181	1003	TP-22	背 負 紐	タリベの幅7.5cm。紐中幅1.2cm				羽状にあみ込まれ、部分的に黒色化してみえる。
182	685	TP-13	樹 皮 板 状	6.8 x 3.3 x 0.4	2.1	シラカバ		切痕が顕著。短部炭化。
183	685	TP-13	樹 皮 巻	3.4 x 2.3 x 1.8	3.4	シラカバ	巻	切痕がある。
184	685	TP-13	樹 皮 巻	6.7 x 5.2 x 4.1	17.5	シラカバ	巻	切痕が顕著。短部炭化。
185	685	TP-13	樹 皮 巻	4.9 x 4.1 x 3.3	9.0	シラカバ	巻	切痕が顕著。短部炭化。

図版番号	名 称	TP番号	図版番号	名 称	TP番号	図版番号	名 称	TP番号	図版番号	名 称	TP番号
4-1-1	スモモ?	TP-24	4-1-4	オニグルミ	TP- 7	4-1-7	サルノコシカケ科	TP- 8	4-1-10	カワシンジュガイ	TP- 3
4-1-2	スモモ?	TP-24	4-1-5	オニグルミ	TP- 6	4-1-8	タニシ?の蓋	TP- 3	4-1-11	昆虫の肢・鞘翅等	TP- 3
4-1-3	スモモ?	TP-24	4-1-6	オニグルミ	TP- 3	4-1-9	カワシンジュガイ	TP- 7			

### (6) 木製遺物の樹種同定

平成元年度美々8遺跡試掘調査出土の加工木444点、加工部欠損材及び自然木458点について樹種同定を行った。木製品については平川泰彦氏が、加工部欠損材及び自然木については平川氏の直接指導のもとで調査スタッフが同定を行った。

樹種同定は、平成元年度試掘調査の試料をもとに、今後多量に出土する木製遺物の本格調査に向けての参考資料作成と遺跡内の大まかな傾向をつかむことを目的としている。今後さらに同定試料数を増加させ、製品ごとの樹種選択、移入品状況、自然環境の復元など期待する部分は大きい。

ここでは、同定方法と概要のみ述べ、同定根拠の記載など詳細は本調査報告と合わせて報告することとする。同定結果は、樹種一覧(表V-8~11)、顕微鏡写真(写真図版V-21~32)、掲載遺物一覧(表V-5~7)を御参照いただきたい。

同定の方法は、サクシュコトニ川遺跡(1986)と同様に光学顕微鏡を用い、水に浸漬した検体から、約5×5mmの木口、板目、柾目の極薄切片を3枚以上片刃(両刃)カミソリで切り取り、無染色のまま検鏡し、鑑定を行った。製品については実測図作成と写真撮影の終了したものから随時同定した。加工部欠損材及び自然木については、時間の制約から全TP出土品の同定は不可能と判断されたので、製品・自然木とも試料数の豊富なTP-3、6、7、8、10、12、17、26を選定した。また、顕微鏡写真撮影用と参考試料保存のため、各樹種につき木口、板目、柾目を1セットとして、3枚の永久プレパラートを作成した。永久プレパラートの作成法は以下の通りである。

約5×5×5mmの試料ブロックを1検体につき、木口、板目、柾目の3個を片刃(両刃)カミソリで切り取り、アセトンシリーズ50%、70%、80%、90%、100%で各2時間ずつ脱水し、エポキシ樹脂(Quetol 812、DDSA、MNS)と100%アセトンの1:1混合液に約1晩浸漬置換させ、その後100%エポキシ樹脂と2日~3日間置換させ、40~60℃で硬化させた。エポキシ樹脂の硬度は、できる限り軟調となるようにメーカー指定の方法に準じ調整した。その後包埋後の試料から滑走式マイクロームを用いて5~20μm厚の切片を切りだし、スライドガラス上で、1%の塩基性フクシンまたは2%サフラニン水溶液で染色、水洗しホットプレート上で乾燥させた後、オイキット封入し、永久プレパラートとした。なお、同定した製品についてはP.E.G法を用いて保存処理を行っている。同定した加工部欠損材及び自然木は、今後の比較試料としてポリシーラで脱気パックし保管している。

加工木では、光学顕微鏡レベルではほぼ問題ないと考えられるものが針葉樹3科4属、広葉樹17科21属あり、確定できないがかなり可能性が高いと推定されるものが広葉樹で他に4科6属あった。加工部欠損材及び自然木では、針葉樹3科4属、広葉樹17科19属、確定できないがかなり可能性が高いと推定されるものが広葉樹で他に2科6属あった。大部分の樹種は、遺跡周辺で一般的に認められるものであるが、北海道では自生しないスギ属と黒松内以北では自生しないブナ属が認められる点が注目される。これらの樹種については、本州方面からの搬入品の可能性が大きく、これらの樹種の木端・切片も認められることから、この遺跡内で搬入品の再加工が行われていたと考えられる。また、単遺跡でこれほど多くの樹種が確認された例はほとんどなく、本州材が含まれることから予想以上に複雑な様相を示している。また、製品の樹種選択(図V-29)については、試料数が少ないものの大まかな傾向が認められる。箸はアジサイ属やスギ属、薄い柾目板はスギ属、モミ属というような樹種選択が認められ、杭や板材などは特定の樹種選択が認められない。今回は予報に止めるが、樹種の選択については、製品の用途を含めて、今後さらに試料数を増やし検討する必要がある。

最後に、ご多忙の折り貴重なお時間を裂いて私どもに付ききりで同定し、ご指導いただいた平川泰彦氏に厚くお礼を申し上げる。

表V-9 加工木TP別樹種一覧(試掘調査出土)

テラビット 稱 樹種名(属)	A	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	15	16	17	18	19	20	21	22	24	25	26	計	%	
イチイ																									2	2	0.5	
モミ					7				3	3	4												1		2	20	4.5	
トウヒ																									2	2	0.5	
スギ	2			5			8	9	8	6	5			4		2							9		4	62	13.9	
ホヤナギ							1	1																			2	0.5
ヤナギ				1	1		2		7	5	4			2			1	3	1				1		1	29	6.5	
クミ										1																	1	0.2
カバネ				1						2										1							4	0.9
ハンノキ		2		3		3	2	7	5	4	1		1	1	1	1						2	1		1	35	7.9	
コナラ	6	1	4	2	9			9	5	11	9	3	1	2			1	1	1				4	1	3	73	16.1	
クリ																							1				1	0.2
ナナ									1																		1	0.2
ニレ									3	2	1																6	1.4
クワ																									2	2	0.5	
カツラ					2	1	3	5	4	3																	18	4.1
モクレン						3	2	1	1			2									1					1	11	2.5
アジサイ	1			3	1	1	1	3	1	3					1								3		8	26	5.9	
サクラ						1		1				1	2					1	1							2	9	2.0
イヌエンジュ			1					3																			4	0.9
キハダ											2																2	0.5
ウルシ								1	1																		2	0.5
ニシキギ																							1				1	0.2
カエデ	1			1		3	6	3	2	1										1			1		1	20	4.5	
ハリギリ	1					1	5	7		3		1											1		3	22	5.0	
トネリコ				2			4	1	3	3										1			1	4	1	20	4.5	
トウヒ?																									1	1	0.2	
スギ?				3																					2	5	1.1	
ヤナギ?				1					1	1																	3	0.7
ハンノキ?				2																							2	0.5
アサギ?										1																	1	0.2
クリ?						1																					1	0.2
ナナ?								2							1												3	0.7
ニレ?											1																1	0.2
アジサイ?									1																		1	0.2
コナラ?					1																						1	0.2
サクラ?				1																							1	0.2
リンゴ?				2		1	1		1	1															1	7	1.6	
ナカマド?	1					2			1																		4	0.9
イヌエンジュ?								2																			2	0.5
キハダ?						1					4														1	6	1.4	
ニシキギ?																2											2	0.5
ツバ?									1									2									1	0.2
カエデ?						1																					1	0.2
トネリコ?				1					1																		2	0.5
ガマズミ?									1																		1	0.2
ササ								2																			2	0.5
榎			1																								1	0.2
不明						2		12	1								1					2			2	20	4.5	
合計	12	3	5	17	29	7	31	53	76	50	45	6	3	11	2	4	5	5	5	2	2	3	27	2	39	444	100.0	

表V-10 加工部欠損材及び自然木樹種一覧(試掘調査出土)

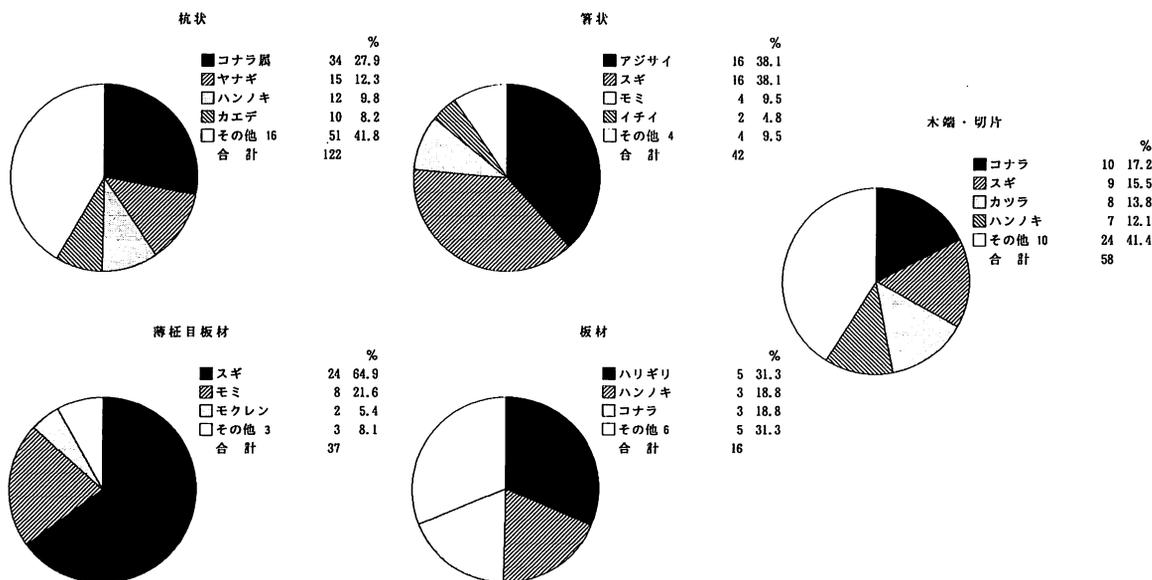
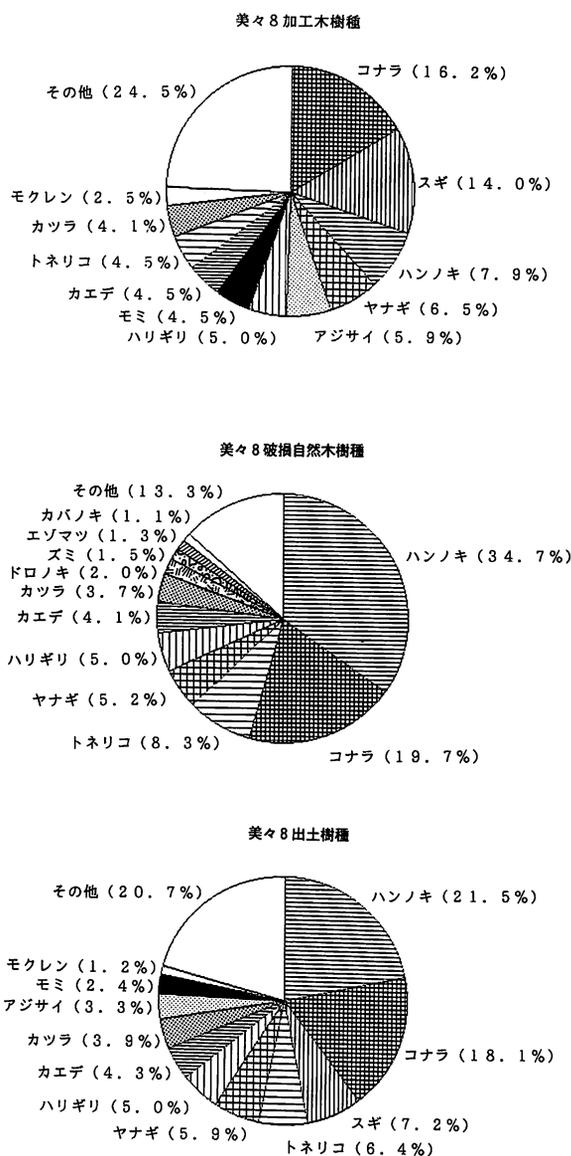
テストピット 樹種名(真)	3	6	7	8	10	12	17	26	計	%
イチイ				1				1	2	0.4
モミ								2	2	0.4
トウヒ		1						5	6	1.3
スギ				1				2	3	0.7
ハコヤナギ				1	1			7	9	2.0
ヤナギ		4	6		5		2	7	24	5.2
ハシバミ	1			1					2	0.4
クマシデ							1	1	2	0.2
シラカンバ			2	1				2	5	1.1
ハンノキ	26	32	11	7	27	11	14	31	159	35.2
コナラ	1	12	11	1	18	11	11	25	90	19.9
ニレ		1			2			1	4	0.9
カツラ	1		2					14	17	3.3
アジサイ					1		1	2	4	0.9
サクラ	1		1					1	3	0.7
ナナカマド						1		1	2	0.4
クララ								1	1	0.2
イヌエンジュ								1	1	0.2
キハダ								1	1	0.2
ウルシ							6	1	7	1.3
カエデ	1		2		1		4	11	19	4.1
トチノキ		1							1	0.2
ハリギリ					2	14	6	1	23	5.0
トネリコ		3	1	1	4		3	26	38	8.3
ガマズミ					1			6	7	1.5
ヤナギ?		6							6	1.3
ハシバミ?				1					1	0.2
クマシデ?		1							1	0.2
シラカンバ?		2		1					3	0.7
コナラ?								1	1	0.2
ウツギ?								1	1	0.2
ニガキ?								1	1	0.2
カエデ?		1		2					3	0.7
クラノキ?		1							1	0.2
ハノキ?								1	1	0.2
ツル類			1						1	0.2
広葉樹		7							7	1.5
合計	31	72	37	18	62	37	47	154	458	100.0

表V-11 同定樹種一覧(試掘調査出土)

樹種名(属)	点数	%
イチイ	4	0.44
モミ	22	2.44
トウヒ	8	0.89
スギ	65	7.22
ハコヤナギ	11	1.22
ヤナギ	53	5.88
クルミ	1	0.11
ハシバミ	2	0.22
シラカンバ	9	1.00
ハンノキ	194	21.51
コナラ	163	18.07
クリ	1	0.11
ブナ	1	0.11
ニレ	10	1.12
クワ	2	0.22
カツラ	35	3.88
モクレン	11	1.22
アジサイ	30	3.32
サクラ	12	1.33
ナナカマド	2	0.22
エンジュ	2	0.22
イヌエンジュ	4	0.44
キハダ	3	0.33
ウルシ	9	1.00
ニシキギ	1	0.11
カエデ	39	4.32
トチノキ	1	0.11
ハリギリ	45	4.99
トネリコ	58	6.43
ガマズミ	7	0.78
小計	836	92.70
トウヒ?	1	0.11
スギ?	5	0.56
ヤナギ?	9	1.00
ハシバミ?	1	0.11
クマシデ?	2	0.22
アサダ?	1	0.11
シラカンバ?	3	0.33
ハンノキ?	2	0.22
コナラ?	2	0.22
クリ?	1	0.11
ブナ?	3	0.33
ニレ?	1	0.11
アジサイ?	1	0.11
ウツギ?	1	0.11
サクラ?	1	0.11
リンゴ?	7	0.78
ナナカマド?	4	0.44
イヌエンジュ?	2	0.22
キハダ?	6	0.67
ニガキ?	3	0.33
ツゲ?	1	0.11
カエデ?	4	0.44
タラノキ?	1	0.11
サワフタギ?	1	0.11
トネリコ?	2	0.22
ガマズミ?	1	0.11
ツル性植物	1	0.11
ササ	2	0.22
樹皮	1	0.11
広葉樹	7	0.78
不明	20	2.22
合計	902	100.00

表V-12 同定樹種名一覧（試掘調査出土）

科名	属名	代表的樹種名	
イチイ	イチイ	Taxus	イチイ
マツ	モミ	Abies	トドマツ
	トウヒ	Picea	エゾマツ・アカエゾマツ
スギ	スギ	Cryptomeria	スギ
ヤナギ	ヤナギ	Salix	エゾノカワヤナギ・ネコヤナギ
	ハコヤナギ	Populus	ドロノキ・ヤマナラシ
ほ	クルミ	Juglans	オニグルミ
	カバノキ	Corylus	ツノハシバミ
	クマシデ	Carpinus	サワシバ
	アサダ	Ostrya	アサダ
ぼ	シラカンバ	Betula	シラカンバ・ウダイカンバ
	ハンノキ	Alnus	ハンノキ・ミヤマハンノキ
ブナ	ブナ	Fagus	ブナ
	コナラ	Quercus	ミズナラ・カシワ
門	クリ	Castanea	クリ
ニレ	ニレ	Ulmus	ハルニレ・オヒョウ
クワ	クワ	Morus	ヤマグワ
カツラ	カツラ	Cercidiphyllum	カツラ
モクレン	モクレン	Magnolia	ホオノキ・キタコブシ
ユキノシタ	アジサイ	Hydrangea	ノリウツギ
バラ	サクラ	Prunus	エゾヤマザクラ・シウリザクラ
マメ	イヌエンジュ	Maackia	イヌエンジュ
ミカン	キハダ	Phellodendron	キハダ・ヒロハノキハダ
ウルシ	ウルシ	Rhus	ヤマウルシ
ニシキギ	ニシキギ	Euonymus	マユミ・ツリバナ
カエデ	カエデ	Acer	イタヤカエデ・ヤマモミジ
ウコギ	ハリギリ	Kalopanax	ハリギリ
モクセイ	トネリコ	Fraxinus	ヤチダモ・アオダモ
バラ	リンゴ	Malus	ズミ・エゾノコリンゴ
	ナナカマド	Sorbus	アズキナシ・ナナカマド
カバノキ	アサダ	Ostrya	アサダ
ニガキ	ニガキ	Picrasma	ニガキ
モクセイ	ハシドイ	Syringa	ハシドイ
スイカズラ	ガマズミ	Viburnum	ガマズミ・オオカメノキ
マツ	カラマツ	Larix	カラマツ
ヒノキ	クロベ	Thuja	ネズコ
ツゲ	ツゲ	Buxus	ツゲ
ツル性植物	Vitis	Vitis	ヤマブドウ等
イネ	ササ	Sasa	クマイザサ等



図V-29 木製品の樹種

### (7) 遺物の保存処理

低湿地などから出土した遺物については、現場での検出段階からすでに保存処理がはじまっていると考えるべきである。現場段階の前処理の状況が後の薬品や機器を使用した処理に大きく影響する。金属製品および有機質遺物等の保存処理については現在作業継続中であり、現在この遺跡におけるデータを収集しながら有効な方法について検討している段階である。有機質遺物の細かな処理方法等については本報告時に記載する。ここでは各遺物の状況と取上げ・整地についての概要と有効と思われる方法について述べる。

#### 土器・石器

ヘドロから手さぐりで採取するという困難な状況を除けば、台地状の調査と大きな差はない。取上げや水洗段階に補修孔の糸や紐、装着における付着物、塗彩、食品加工などに関わる付着物などに十分に注意をはらう必要がある。

付着している泥などはぬるま湯の中で絵筆などで落すか、それが無理な場合はそのまま強化する。自然科学的分析予定があるものは手を触れずにガラスシャーレ或いはアルミ箔に包んで冷蔵庫に保管する。脆くなっている場合は、風通しのよい日陰で乾燥させたのち、軟らかいブラシなどで付着している泥を落した。風化・劣化の状況が著しいものや塗彩のあるものについては、湿性状況の場合プライマルバインダー18、乾性状況の場合パラロイド B72 を使用し強化した。

#### 金属製品

埋蔵状態はけっして良い状況とはいえなかった。鉄鍋などのような鋳造品は非常に脆く、結晶状に崩れやすい。指先で押すとわずかな弾力があり、薄く板状にしまった土や黒化した薄い板状木製品と区別が付かない場合がある。重量も金属とは思えないほど軽く、手や移植鏝で簡単に崩壊する。また、還元して灰色あるいは青灰色となるものがあるので注意が必要である。褐鉄鋼を吸着したような土塊は金属製品の可能性もあるので必ず取り上げることが必要である。現場では急激な乾燥や温度変化を避け、アルコールで脱水・洗浄し、泥や錆を大まかにクリーニングしたあとシリカゲルを入れたシール容器で保管した。土ごとに取り上げた場合には、出来るかぎり早い段階で、土と離脱し、十分に乾燥させることである。

#### 金属製品の保存処理

湿地部試掘調査出土の金属製品について保存処理を行った。昨年度の報告（1990 北埋調報62）同様に基本的な処理工程はユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡（1986 北埋調報26）の方法を用いた。今回は脱塩処理の工程を省いた。平成2年度出土遺物については現在作業中である。

保存処理した遺物は、調書を作成した後、クリーニング（ニッパ、タガネ、アルコール洗浄）を行った。クリーニングは遺物の状態に応じて随時、繰返し行った。実測図作成、写真撮影についてはクリーニング後に十分乾燥させてから行った。強化は金属の種類、木質等の残存状況により適宜処理方法（バインダー#17・パラロイド B72 等の含浸、塗布）を検討した。鉄製品の強化はアクリル樹脂エマルジョン（プライマル MV-1）を簡易な減圧含浸装置で含浸した。薬莢等は防錆剤であるベンゾトリアゾール入りのアクリル樹脂（インクラック）を塗布した。復元・補修についてはエポキシ樹脂（セメグインハイスーパー）とフェノール樹脂マイクロバルーンを混合したペーストを使用した補修・復元後の余分な樹脂はナイフや電動彫刻機で削り整形した。保存処理・復元の終了した遺物は、十分乾燥させた後、ラベルを付けた密閉容器にシリカゲルを入れ保管している。また、試験的に特殊フィルムに遺物・シリカゲル・カードを入れ、ポリシーラーで脱気パックし保管したものもある。

今後は、遺物の構造調査・材質調査を行いたいと考えている。また、試験的に脱塩処理の後処理が

簡易な水酸化リチウムおよびセスキ炭酸ナトリウム使用してみる予定である。強化には溶剤系のパロロイド NAD-10 を使用してみたい。しかし、当センターの場合、保存処理室の排気環境などが問題となるであろう。また、現状では木製品と同室で作業を行っているので、湿気を嫌う金属製品には劣悪な環境である。来年度以降は、多量の金属製品の出土が予想されるため、機器の補充・整備とともに金属製品の保存処理室の設置、遺物の保管場所を早急に検討せねばならない。

### 有機質遺物

調査の方法の中で記載したとおりである。バケツで土壌ブロックとして取上げる際に、粉碎されたものや流れおちる水とともに取り逃がしてしまったものが多い。また遺物採取段階で土よりも軟らかいため、気がつかず押しつぶしてしまったものや取扱いに慣れないために取上げ時に粉々に破損してしまったもの、加工面をナデで擦り消してしまったものなど不備な点が多々ある。一部の TP については加工痕の顕著な木製品のほか、折れ口のあたらしい加工木と同径同質材と想像されるものについてわずかながら採集した。多くは遺物採取の段階で安易に自然木と判断し、その場で廃棄した。しかし、整理していく過程で加工木と自然木とが接合する場面が多々あり、現場で自然木として廃棄したものの中には、加工木と同一個体であったものが含まれていたと考えられる。幹や枝は杭、構造物や構造物材として使用されたが先端や接合部にしか加工が無く、加工部を欠損している場合は自然木との区別は難しい。丹念なクリーニングと遺物観察及び接合作業なしでの遺物選別は非常に危険である。現場での遺物採取段階では、コンテナに水を入れ、取り上げた有機質遺物はすべて水漬し、木製品などは時間の許す範囲内で、割口の新鮮なうちに接合を試みるのがあとの作業を容易にさせる。重要遺物や劣化の著しいものの取上げは、不織布で包み、補強材で当木するとともに他の遺物と区別してシール容器や内面にビニールを張った木箱を作成し別梱包した。繊維製品や脆い遺物は発砲ウレタンなどで包み土壌ごと取りあげ強化することも考えなくてはならない。遺物番号などはマジックインキ等でビニール袋に記載すると消えることがあるので、チャックの付いたビニール袋にカードを入れ、それに両端をとめるだけで完全にロックできる商品の値札取付け用アンピタッチ（ナイロンタグファスナー）を通して遺物を傷つけないように伸縮のあるストックキングで結つけた。運搬中に破損することもあるので破片数や遺物の現況スケッチをユポ紙やセレクトトレースターなどに濃い鉛筆で記載して同様に添付したものがあつた。整理作業では、保存処理台帳と観察カードを作成し、分類後に小カード（ラベル）に必要な事項を記載し、フィルムでラミネートしたものを同様に付けて付けた。接合資料などは写真或いは縮小した実測図を同様にラミネートし、添え付けておくと判り易い。取上げた遺物は、沈着物の溶脱と腐敗を避けるため、その状況により随時水交換を行った。一度に多量の遺物をコンテナに収納すると腐敗の進行が速く、水交換を頻繁にしなくてはならない。分類・選別後に分類・大きさ・樹種・劣化の状況ごとに遺物を分別収納した。この段階で現場でひとコンテナに多量に詰め込んでいた遺物が分散されるため、より広い収納スペースが必要となる。しかし遺物の保管環境が良くなり劣化や腐敗の進行を押さえることができ、遺物の抽出も容易となる。ここまでの作業を現場段階で、行えれば保管や保存処理をスムーズに行うことができる。いずれにしても、土器や石器のように机の上に並べて、選別できる資料ではないので、数回の段階を経て遺物を選別し、絞り込むことになる。現場では湧水や川の水を水洗・保管に使用した。予想よりも沈着物の溶脱や水の腐敗が遅く、余程の温度差が無いかぎり極端に変化することは無かつた。湧水の水温は 8℃ である。平成 2 年度の調査では井戸を掘りポンプアップした水を水洗や保管に使用した。札幌に戻り水を水道水に切り替えた段階で沈着物の溶脱や水の腐敗及び表面の劣化が著しく進んだように感じられた。塩素などの影響による急激な環境変化が影響したと考えられる。遺物の保管には蓋付コンテナやシール容器が

効果を発揮した。水の蒸発や温湿度の急激な変化及び微生物や細菌の侵入を最小限に防ぎ、腐敗を遅延する効果が大きかった。また、腐敗臭を外に逃がさないため作業環境への影響も最小限に止めることができた。木製品のコンテナは軽量棚一段にひとコンテナずつ並べ常に状態をチェックできるように積重ねないようにしている。冬季間は凍結防止のため棚全体をビニールシートで覆い、中にパネルヒーターを置いて5℃以上の温度を保つようにしている。

### 木製品の保存処理

木製品の保存処理は忍路土場遺跡（1989 北埋調報53）同様にポリエチレングリコール法を採用した。PEG4000の濃度10%～20%～40%溶液までを各コンテナ内で浸漬し、40%以上はPEG含浸槽（TNK4150熱風循環式）に浸漬して40%～60%～80%～100%と徐々に濃度を上昇させて行う予定であった。コンテナ内での濃度調整は、蓋の開け閉めで水分を徐々に蒸発させる方法をとった。しかし、1週間ごとの濃度測定の結果、本遺跡の木製遺物の場合は熱をかけないコンテナ内での含浸は25%までが限界であることが判明した。各木製品の日本工業規格JISA1002にしたがった樹種別含水率は、コナラ属（388.4%）、ハンノキ属（489.3%）、ヤナギ属（1060.1%）、ハリギリ属（383.6%）、ナナカマド属（407.0%）、カバノキ属（792.2%）である。コナラ属・ハンノキ属は木製品の主体をなす樹種であり、この数値からもヤナギ属を除いては樹芯部までをPEG4000が達しない可能性がある。したがって、乾燥後は芯部からの水分移動で収縮、割れ、ねじれが発生するか可能性が高い。前処理として分子量の低いPEG200の10%～20%溶液からに浸漬を行ったのち、PEG4000の20%溶液移行したほうがよいと考えられる。その後はPEG4000の20%～40%～80%～100%の含浸槽内溶液に浸漬し、できるだけ低濃度段階に時間をかけて処理するべきと考えられる。

樹皮などは、乾燥によるカールが予想されるがPEG4000の20%～60%に浸漬後、徐々に乾燥させることで問題ないものと思われる。

なお、保存処理などを行わないものや樹種サンプル等はラミネートしたカードを添えてポリシーラーで脱気パックし保管している。平成元年度に仮保管施設として当センター屋外水槽（内寸長さ600cm、幅200cm深さ160cm）を試験的に使用してみた。しかし、水深が深いため遺物の出入れが困難であり、蓋が鋼鉄板ということもあり男性4人で移動するのがやっとであった。また、半月～1ヶ月おきに水交換を行っているが床面中央が高いため排水、清掃に時間がかかる。夏季には水交換をしてもイトミミズ、ボウフラが発生し周辺に腐敗臭が漂う。冬期には遺物凍結の心配がある。保管施設として使用するには、床面を50cmほど埋戻し排水溝側に傾斜を付け、雨水・雪融け水の浸入を防ぎ、断熱・保温を考えねばならない。

種子や堅果類、貝殻皮、茸などは徐々に自然乾燥することで充分であったが、特に脆弱なものや獣骨片などはアルコール、アセトンで脱水後パラロイドB72で強化した。

平成2年度以降の木製品については芯持ち材と考えられる大型遺物も多く、保存処理に多くの時間がかかるとと思われる。また、塗彩のある遺物や文字の描かれた遺物も予想されるので赤外線による事前調査も必要となるであろう。今後大量に出土する木製遺物の整理・保存処理・保管・収蔵のための施設を早急に、確保し、PEG含浸槽を数台設置するなどの機器整備が必要である。

## 4 まとめ

美々8遺跡低湿地部について、これまでの調査結果から次のようなことが推定できる。

### (1) 低湿地部の地形

低湿地部（現状）から出土した多数の遺物、立杭や集石などの遺構は、美々8遺跡台地上や斜面から検出された掘立柱遺構、竪穴状遺構、道跡、杭跡群と深い関係があるものである。

褐色腐植土層（以下0黒層と仮称する）は、平成元年度美々8遺跡斜面の建物跡のセクション、道跡、杭跡群の調査において、包含層或いは生活面としてその存在が確認された以外は、台地上ではTa-a層とTa-b層が接した状況にあるため顕著な堆積を示さず分層が不可能な層とされてきた。平成2年度の低地部の手掘り調査によって美々8遺跡斜面から美沢3遺跡側に向かって次第に層厚を増し、数十cmの安定した層を形成していることがほぼ明確となった。しかも、低湿地部から出土した木製遺物の多くが0黒層のものであり、上下のTa-a層とTa-b層の安定した堆積状況、立杭や集石等の遺構の検出から二次堆積土壌とともに混入した遺物とは考えにくい。0黒層は噴出年代の明確な火山灰に挟まれ、出土した木製遺物や金属製品、陶磁器、石製品については、1739年（Ta-a）から1667年（Ta-b）の時間幅を与えることができる。当時の0黒層は明らかに生活面であり、美沢川に向かって広がる標高3～5mの微高地であったと考えられる。当遺跡内の堆積土は水の営利を受けやすい火山灰主体の土壌であり、その火山灰上に腐植土が堆積しているという状況である。気候の変化によって、美沢川は増水または離水し土壌の堆積と流失を繰り返しながら、大きく流路を変えていたのであろう。低地部の0黒層先端部分ではその影響を最も受けやすく、増水時には流失及び冠水し、幾度にもわたって土砂の堆積、浸食が繰り返されていたと推定できる。また、地形図や掘削時の状況から美々8遺跡斜面のd-66区に、美沢川に向かって小沢が存在したと考えられ、低地部分が離水し乾地化すると、その低い沢地形部分には、独木舟や板綴舟などの停泊しやすい入江状の沼が現れたのであろう。以上から遺跡内には部分的に小流路に切られたり、傾斜面からの雨水などとともに流出した土壌の堆積地となる箇所も予想されるが、手掘り調査によって0黒層が調査予定区全面に広がるほぼ良好な包含層として認定できたことは調査における重要な成果の一つである。仮りに、0黒層が確認できなかったり、Ta-b層が部分的に存在しない箇所が確認されたとすれば、流路などと安易に判断する前に遺構と考えて調査した方が良好であろう。当時の人々は、環境の変化に臨機応変に対応しながら低地部（当時）での生活を営んでいた。今後の低湿地部の調査では0黒層の堆積がどこまで続くのか見極め、当時の低地部の旧地形を復元することに努めるべきである。さらに、台地上ではできるかぎりI黒層と0黒層を分離して調査し、遺構や遺物の検出に努力する必要がある。そのような調査を行ってはいじめて低地部と台地上の遺構、遺物との関係を検討することが可能となり、当時のこの地域がどのような空間であったのかを知る手がかりとなる。

I黒層については、これまでの調査から縄文時代晩期から江戸時代初期の時代幅が与えられている。調査で出土した遺物の多くはその中位から上層にかけてのもので、擦文時代から江戸時代初期の頃の可能性が強い。試掘調査時に数カ所のTPからUs-b（1663年降灰）やTMと考えられる火山灰が検出されている。試掘調査時のデータを裏づけるように平成2年度の手掘り調査でTM火山灰の広がりが確認できた。この火山灰がプライマリーな状態で、広範囲に存在することが確認できれば、I黒層も数層に分層することができ、より細かな時間幅を与えることが可能となる。これまで、美々8遺跡の台地上では擦文時代の多量の土器・石器・集石等が検出されているにも関わらず、柱穴群や焼土が認められたものの、掘り込みの顕著な堅穴住居は検出されていない。昭和62年度調査時に唯一Us-b火山灰の極薄い堆積の下から浅い方形の火災住居が確認されたのみである。明確な住居跡が

無いことがこの遺跡の特徴であり、疑問点でもある。昭和56年度調査時の自動車学校跡地のⅠ黒層削平部分に存在したか、柱穴様のピットが確認されていることから或いは掘立柱建物であったのかもしれないとの意見もある。千歳市周辺の遺跡ではUs - bやTM火山灰は、擦文期の堅穴住居跡などの凹地に堆積が確認される場合が多い。平成2年度の低湿地部分の手掘り調査で擦文土器がTM火山灰を挟んで上下から多量に検出されたことから、今後の発掘調査において低湿地部分からの堅穴住居或いは構築物等の検出が期待される。低湿地という状況から堅穴住居等とともに上屋構造や構築材が検出される可能性も強く、食物や木製容器、工具、編布、敷物などの検出も期待できる。TPや手掘り調査結果からTa - b火山灰降下以前のⅠ黒層中位から上層にかけては、0黒層以上に美沢川に沿って広がるなだらかな岸辺であったと推定できる。ここに、当時の集落とともに生活の主体が存在したと考えておきたい。

以上、平成元年・2年の調査から、現低湿地部はTa - a・b両火山灰の降灰及び2次堆積により美沢川の川底がしだいに埋め立てられ水位が徐々に上昇し形成されたものと考えられる。したがって調査区内には、0・Ⅰ黒層が良好な包含層として存在する。平成元年度の「ビビ小休所」の調査においても、当時の表土上面に二次堆積のTa - a火山灰が厚く堆積していた。低地部周辺が現状のような湿地になったのは文献などからは1850年頃と考えられ、上流や斜面からのTa - a火山灰の二次堆積が繰り返されることによって、松浦武四郎『西蝦夷日誌』（1857年）、玉虫左太夫『入北記』（1856年）の記録の示すとおり美々船着場は、川底が浅くなり、舟の航行にも支障をきたしたため、舟着場が下流のピボエカリ（美沢川と美々川の合流点付近）に移ったと考えられている。

## (2) 江戸時代における美々8遺跡の性格

最近の調査成果とこれまであげられている文献上から遺跡の性格を検討する。

この付近は、18世紀後半から「シコツ越」、「ユウフツ越」として、水上交通と陸上交通の中継点であったとされる地点である。年々それを証明する新知見が発掘調査でえられている。平成元年度の調査においては、これより下流から松浦武四郎の『再航蝦夷日誌』（1846）に描かれたミミ（美々）憩所船乗場の図を裏づけるかたちで3間×4間の建物跡が確認されている。さらに北埋調報第7集（1981）に記録された斜面を下る道跡の続きも確認され、その周囲から台地平坦面と同様に焼土群、建物跡、杭跡群、多数の金属製品、陶磁器類、動物遺体などの遺構・遺物が検出された。これまでに出土した遺構・遺物の上からはアイヌと和人の両要素がうかがわれる。平成2年度の調査では、土砂の崩落や地盤沈下により斜面の道跡の続きは確認できなかったが、新たに板綴舟側板、櫂（アッサブ）、櫂などの握り部、櫂受部が出土し、その周辺から多数の立杭が確認されたことから、舟着場などに関係する施設や構築物の存在が予想される。これらの状況から北埋調報第7集で推測していた「シコツ越」や「ユウフツ越」の前身の形態を持つ地区である可能性がさらに強くなったといえる。Ta - bが降下した1667年から2年後の1669年のいわゆるシャクシャインの乱について記した『寛文拾年狄蜂起集書』と『津軽一統志』に本川筋を利用した舟による往来のことが簡単に記されていること。また、寛文7年とされる『蝦夷図』にシコツ（千歳）を挟んでの交通路が線で示されていること。地点は離れるが勇払川の岸辺から、Ta - b層降下により沈没した5艘の丸木舟（板綴舟）が出土している等をあげ、Ta - b層以降降下以前から斜面の道跡を下った美沢川の淵に、舟着場つくられていたのではないかと推測している。また、これまで出土した遺物から珠洲系片口鉢や金属製品はすべて渡来品であり、マレブのみ地元で手をくわえたものであり数多く出土するカスガイや釘は遺跡周辺で建物を構築した可能性を示すものと述べ、出土した和産物は交易により流入したものだけではなく、和人が渡来した可能性を示すものであるとまとめている。これらのことは、平成元年度の斜面から出土した火

打ち金、煙管、カスガイ、クギ、鋤先、古銭などの金属製品、硯片、陶磁器片等からも裏づけられる。低湿地部から出土した、スギ材を主とする本州材で製作された曲げもの、漆器、多量に出土する箸、桶、折敷或いは屋根を葺いた考えられる薄い桁目材等の木製品にもあてはまる。調査区を台地上平坦部から斜面、低湿地部と拡げるにつれ次第に当時の美々8遺跡の姿が見えてきたと言える。また、『再航蝦夷日誌』の文中には「此所小憩所有。うらに夷人小屋式軒有。此山中二而焼たる炭を皆此所へ出す」と記されている。夷人小屋式軒をアイヌのチセ2軒と訳せる。低湿地部のⅠ黒層上面及びⅡ黒層から出土したアイヌ文様の彫刻、シロシのある花矢、シロシのある樫受部材、荷役のための背負い縄、マレプ台、アツシを織るためのペラ、板綴舟、樫などのアイヌの民具から、この地にTa-b火山灰降下以前からアイヌが居住していたと容易に理解できる。アイヌの人々は少なくとも1667年(Ta-b火山灰降下)から1739年(Ta-a火山灰降下)の72年間、それからさらに『再航蝦夷日誌』の1846年(弘化3年)に記されるまでの107年間の合計約180年間にわたって連綿とこの地で生活を営んできたことになる。また、台地上のⅠ黒層上面から珠洲系片口鉢や金属製品が出土すること、低湿地部のⅠ黒層からも同様にスギ材を主体とする本州材の木製品、桶、漆器が出土することから和人の往来も同時に連綿と続いていたことが考えられる。美々8遺跡から出土した鋤先、鋤先などの農具、多種多様な木製のアイヌ民具、繊維加工に関わる横槌、アツシ製作に関わるペラの出土は定住生活を示すものである。日常用の内で最も重要な食に関係する箸、串の多量の出土は、多数の人々の存在を示すものである。板綴舟、樫、建材、柱の出土に伴って、木端、切片が異常に多いことは舟や構築物の製作などに関わる大がかりな木材加工作業が行われていたことを推測させる。以上からここにアイヌ等の集落などが存在したと推定しておきたい。ここに住むアイヌが往来する和人に舟を詠えたり、行程の道案内や荷役を一手に行っていたのであろう。アイヌの民具とともに和産物が多量に出土するのは、ここを訪れた和人とアイヌとの交易品であったからであり、あるいは既にアイヌ自身の所有物であったのかもしれない。また、アイヌの人々の物送り場の空間であった可能性も否定できない。遺跡の本格的調査がなされていない状況で、かつ全調査予定面積のほんの一部にも満たない低湿地部の調査データからこのような大胆な想像をするのは時期尚早ではあるが、今後の調査における一仮説として提起しておきたい。今後の台地上の表土層、Ⅱ黒層、Ⅰ黒層の調査と低湿地部の層位的調査による各層の細分により、さらにこの遺跡の様相が明らかにされるであろう。

なお、現在、多数のアイヌ資料が大学、博物館、資料館、個人コレクションとして、日本はもとより海外でも展示、収蔵、保管されているが、江戸時代後期以前の地域や時代幅の限定されたアイヌ民具は皆無といって良い状況にある。当遺跡から出土した数々の遺物はすべて、江戸時代初期か、それ以前のものである。これまで、千歳市内では祝梅堅穴遺跡(1979)、三角山D遺跡(1978)、千歳神社境内堅穴遺跡(1979)、末広遺跡(1985)などが調査され「送り場」跡が確認されている。いずれも、Ta-a火山灰からTa-b火山灰の間の層から得られたものである。したがって、今後行われる美々8遺跡の調査は、千歳市におけるアイヌの生活復元はもとより、当時の北海道アイヌの研究に欠かすことできない第一級の資料となることは確実である。また、この遺跡は「ユウフツ越」から「室蘭街道」、そして世界へ飛躍する「新千歳空港」として発展してきた地でもあり、北海道における交通史研究においても非常に重要な遺跡であることは間違いない。(田口)

## 引用・参考文献

- アイヌ文化保存対策協議会編（1969）『アイヌ民族誌上・下』第一法規
- 宇田川 洋（1989）『イオマンテの考古学』東京大学出版会
- 萱野 茂（1978）『アイヌの民具』すずさわ書店
- 申原 正峯（1792）『夷諺俗語』
- 古照遺跡調査本部、松山市教育委員会（1974）『古照遺跡』
- 佐藤 一夫（1975）『苫小牧市美々「開拓使美々鹿肉缶詰製造所」址発掘調査報告書』  
／（1966）『苫小牧市沼の端丸木舟発掘調査概要報告』
- 佐藤玄六郎（1786）『蝦夷拾遺』
- 財北海道埋蔵文化財センター（1981）『美沢川流域の遺跡群』Ⅴ  
／（1982）『美沢川流域の遺跡群』Ⅵ  
／（1986）『美沢川流域の遺跡群』Ⅸ  
／（1988）『美沢川流域の遺跡群』Ⅺ  
／（1990）『美沢川流域の遺跡群』Ⅻ  
／（1985）『ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡』
- 高倉新一郎著（1969）『日本庶民生活史集成』4
- 玉虫左太夫（1856）『入北誌』
- 千歳市教育委員会（1976）『美沢川流域の遺跡群』  
／（1978）『祝梅三角山D遺跡における考古学的調査』  
／（1979）『祝梅竪穴遺跡』『続千歳遺跡』  
／（1979）『千歳神社境内竪穴遺跡』『／』  
／（1979）『ママチ川丸木舟遺跡発掘調査概要報告』『／』  
／（1981）『末広遺跡における考古学的調査』『／』  
／（1984）『千歳市美笛における埋蔵文化財分布調査』  
／（1985）『末広遺跡における考古学的調査(続)』
- 千歳市史編纂委員会（1983）『増補 千歳市史』
- 千葉県土木部河川課、財千葉県文化財センター、文化庁（1989）『遺跡保存方法の検討』—沖積低地の遺跡—
- 千葉市教育委員会（1988）『千葉市浜野川遺跡群（低湿地における遺跡確認調査書）』
- 苫小牧市（1975）『苫小牧市史』上
- 中山利國編（1944）『西蝦夷地日誌』石原求龍堂
- 成田寿一郎（1990）『日本木工技術史の研究』法政大学出版局
- 北海道教育委員会（1977）『美沢川流域の遺跡群』Ⅰ  
／（1979）『美沢川流域の遺跡群』Ⅲ
- 北海道大学（1986）『サクシュコトニ川遺跡』1、2
- 松浦武四郎著、高倉新一郎校訂、秋葉実解読（1985）『戊午 東西蝦夷山川地理取調日誌』中
- 松下正司編（1984）『草戸千軒町遺跡』『日本の美術 4 No. 215』至文堂
- 武藤 勘蔵（1798）『蝦夷日記』
- 山田秀三監修、佐々木利和編（1988）『アイヌ語地名資料集成』
- 吉田 武三（1971）『三航蝦夷日誌』（下）吉川弘文堂  
『津軽一統史』（1731）  
『寛文拾年狄蜂起集書』（1670）

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告第69集

**美沢川流域の遺跡群 XIV**

—新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

---

平成<sup>3</sup>27年3月27日 発行

編集 財団法人北海道埋蔵文化財センター

064 札幌市中央区南26条西11丁目

Tel (011)561-3131

印刷 富士プリント株式会社

064 札幌市中央区南16条西9丁目

Tel (011)531-4711

これは、北海道開発局札幌開発建設部の承認を得て増刷したものである。